THE CENTRAL REVIEW

中央公論

定期増刊

勞働問題號

第三十四年第八號　第三百七十二號

大正八年七月十五日發行（毎月一回一日發行）

汽車の窓から

新形三六判函入
紙數六百五十頁
橋本邦助畫伯裝幀
口繪寫眞版及
木版圖版數十個
壹圓五拾錢
郵稅八錢

內務大臣兼鐵道院總裁床次竹二郎閣下題字

鐵道院運輸局長中川正左閣下序文

谷口梨花先生著

▼東北部

常磐線、東北線、信越線、總武線、磐越線、奧羽線、陸羽線、北海道各線

稀有の歡迎を受けて僅かの間に十三版に進んだ「汽車の窓から」の東北部が新たに出來ました。內容は前者とほゞ同調ですが、其觀察はより以上に銳く、趣味いよ〳〵多くなりました。すべて汽車の窓から注視される範圍の山川湖沼、古跡名勝、歷史も地理も、風俗も產業も、一々指摘して說明してあります。のみならず凡そ旅行者が必要な事柄は、何んでもかんでも洩さないで、一般旅行者の爲に親切な案內をも兼ねた所が、本書の新體型であつて、聊か誇りとする所であります。旅行者ばかりの讀物ではない、綠陰に机上に一冊を備へて頂きたいと思ひます。

第拾七版

汽車の窓から（西南部）

壹圓五拾錢
郵稅八錢

東京市　株式會社博文館　本石町



中央公論第卅四年臨時增刊「勞働問題」號目次

▼公論



▼說苑

（創　作）

世界短篇傑作叢書

米國トーマス・セルチェル編　衞藤利夫氏譯

露國十六文豪集

第一編

プーシキン　ゴーゴリ　ツルゲエネフ　ドストエフスキイ　トルストイ　サルチーコフ　コロレンコー　ガルシン
チエホフ　ソログーブ　ポタペンコー　セミヨーノフ　ゴーリキイ　アンドレーフ　アルチバーセフ　クープリン

- 上掲十六文豪の代表的短篇を集む
- 一册にて露文學の全面容を知る可く
- 露西亞文學發達の實際的鳥瞰圖也
- 卷頭編者の露文學に關する大論文を掲ぐ
- 編者は米國に於ける露文學研究の權威也
- 極めて便利なる近代露文學總覽也

中版四百九十頁
定價壹圓參拾錢
（郵送料拾錢）

勞働者セヰリオフ

アルチバァセフ作
中嶋　清氏譯

（七月二十日刊）
定價壹圓貳拾錢
郵送料拾錢

一九〇五年の露國革命の心理を取扱へるもの。セヰリオフは熾烈なる情熱を以て其男性的意氣地を鍛へ、崇高なる理想を以て其獻身的精神を打成せる、一革命主義也。彼が如何に思考し如何に行動し如何に其悲劇的最後を遂げたるかを看よ。附錄として、一九一六年の露國大革命を題材とせるもの數篇を添ふ。何れも血湧き肉躍るの感ある可き快篇。現下の讀物として感興殊に深からむ

東京牛込矢來町中の丸
振替東京一七二四二番
新潮社
電話番町（長）八〇九番・八九九番


暑中御伺
店内には凉しい設備がして御座います
是非御來店の程を
白木屋呉服店
東京日本橋

勞働問題の要諦（勞資協調主義を嗤ふ）

七月三日政友會政務調査總會といふ御歴々の會合に於て、岡警視總監は、社會主義者が勞働者を煽動するの近狀を慨し、次いで床次内相は（一）歐米に於ける勞働問題は常に資本勞働の對抗によりて進展し來れるに反し我國は斯かる狀勢に在らざる事、（二）故に我國の勞働問題は歐米の勞資對抗主義の輸入によりて解決す可らざる事、（三）我國に於ける同問題解決の最良策は「相倚り相助け和衷協同の精神により協調主義を徹底せしむ」るに在る事、（四）此方針の下に輿論を作興する爲め政府當局者にも非ず勞働者資本家にも非る中立的立場の人士を促して一宣傳機關を作るの急務なる事を說いたといふ事である。

之を尤もと感服したのか如何かは知らないが、嚮に溫情主義を說いた實業家にして、俄に勞資協調主義てふ看版を持ち廻る者の殖へたことは、最近の新聞を讀む者の必ずや注意した所であらう。

勞働問題は畢竟、如何にせば賃銀勞働者に「人」としての生活を保障し得るかの問題である。「人としての生活の保障」は有ゆる意味に於て勞働者の權利であり、又社會の責務である。而かも從來之が殆んど全く無視されて居たが故に勞働問題は起つた。而して這の八釜しい問題の起るに就ては、有ゆる意味に於て資本家階級に責任の存する事も亦爭ふ可らざる事實である。

經濟の發達の著しく遲れて居る我國に於て、勞資對抗の悲しむべき事實の未だ現れざるは、怪むに足らない。貪欲飽くなきこと歐米のそれ以上なる我國の資本家を抑へずして、彼我國情の根本的相違に藉口し、勞働問題の進展恐らく歐米の如くならざるべしと安心するのは、是れ噴火吹上に座して一日の安逸を貪るの類である。

政友會の御歴々が眼前當面の形勢に餘りに盲目なるの醜態を暴露しつゝある間に、一部の矯激なる運動家（デマゴーク）は、勞働者を煽動して、今日の政治、又其の支持せんとする今日の社會的秩序、はては各種の社會的權威に對してまで、不信侮蔑の念を抱かしめんと努めて居る。是れ一時の反動として已むを得ずとするも、畢竟角を矯めんとして牛を殺す者、斷じて健全なる現象ではない。

中立的立場の人を促して宣傳機關を作るも無駄では無からうが、夫れよりも、誰か勞働運動に其止る所を敎ふると同時に、政友會の御連中の暗愚を啓いてやらうといふ中立的立場の篤志家は居ないか。

中央公論



第卅四年第八號
勞働問題號
第三百七拾貳號

勞働問題の愛護

中澤臨川

新しい世界が我等の眞近き前途に開けかけてゐる。個々人の生活、國際的生活、宗教、哲學、教育、男女間の關係、そのほか凡ての問題が一切に新しい氣運に、華々しい希望に生れ變るべく、萠芽が既に種子の中で膨らみきつてゐる。萬事は暗闇の中で用意されてゐる。我等に殘された一努力は社會的因習といふ腐れかけた種子の外殼を破るだけで充分だ。然らば今日かやうな實行上の力を我等に與へるものは何かといふに、それは「勞働」である。勞働は我等の前に横はる諸問題を解決する鍵を握つてゐる現代政治上の決定的因子である。あらゆる他の問題は勞働問題の解決とともに、

或は勞働問題の解決に從屬して解決されると思はれる。從てこの問題の解決の良否又は完全不完全は未來の文明を支配する重要な第一歩である。經濟上から見た勞働問題それ自らだけにはさしたる文化的意義はないが、之が隨伴するもろ〳〵の意義――正義、自由、個性の尊重、社會的共同責務など――と、及び之が解決を俟つて後始めて解決さるべき幾多の重要な問題とのために、勞働問題は非常に深遠な相を呈してゐるのである。未來に起るべき新しい宗教でもが、新しい文學でもが、今日は勞働問題の堤の爲めに堰かれてゐる形である。勞働問題は未來の新世界といふ寶庫を開くべき唯一の鍵となつてゐる。然し我等の終局目的はその鍵ではなくて、庫の中にある寶物である。

繰返して言ふ、勞働問題はそれが隨伴するより重要な諸問題の爲めにこそ重要である。勞働問題は未來への第一歩である。從てその足の踏み方によつて、我等の新しい文明が右にそれるか左にそれるか、生々と生ひ立つか羸弱く廻りくねるかに分れる。それであるから、我等が勞働問題を思考し且つ取扱ふ態度は、例へば幼兒に對するそれの如くありたい。新鮮な空氣の通ふ日當りのよい部屋で、新しい乳を與へながら、慈悲に親切にすぐ〳〵と育て上げねばならぬ。勞働問題をいぢらすな、頑な性質を附けるな。第一に先づ尊敬を拂はねばならぬ。この問題の齎す感激の泉を缺かさない爲めには、注意してそれに精神的意義を附する必要がある。それが必然に伴ふ長い鬪爭の爲めに殘忍な性を帶びることから避けるには、努めてそれを快豁にし、human にし、それから智慧と希望とをたやさぬやうにせねばならぬ。

いつも快豁で、human で、正直で、勇敢で、智慧の泉を汲み、刻々の感激に充ちに鬪士――「勞働」よ！ わたくしはお前にそれを望む。

近世の産業革命から、大規模の工場組織が産れ、それに關聯して資本家と勞働者といふ顯著な對立をなした二階級が

出現し、從て貧富の懸隔を年とともに加速度的に助成し始めたそもそもから、勞働問題が頭を擡げ出した。今日まで六七十年間に亘りこの運動の爲めに費された天才と思想と勞力と犠牲との歴史は、世界文明史に特筆すべき大きな出來事であつて、單に經濟史の末葉を充たすだけですまさるべきものでない。いつも阿諛者と型のきまつた歴史家が軍國主義と資本家とを謳歌してゐた間に、這回の歐洲戰爭の結果が齎した勞働不安(レボア、ディスコンテント)は、恰も忽焉たる顯象であるかの如くに澎湃たる波をなして世界の隅々まで推し寄せて來たが、然しそれは當然來るべくして來た歴史上の必然である。近世の物質文明が生み落した二つの罪惡は侵略主義と資本主義とであつて、その結果は一方には國と國との間の爭となり、他方には階級と階級との間の爭となつて現はれた。前者の横の爭が先に起つた爲め、暫く後者の縱の爭を堰き止めて居たが、一つが濟んだあと、他の一つが之に次ぐのは已むをえないことである。

勞働問題の解決策として、社會主義的又は共産主義的の思想を第一に提唱したのはカール・マルクスである。然し彼の思想の哲學的方面は、偶ま當時の流行であつた實證主義(ポジチビズム)に感染されて、唯物史觀の形をとり、勞働運動の抑もの大事な出發點を狹隘にそしてドライにしたのは、かへすがへすも惜しいことであつた。その後他の方面の思想界は早くも實證主義を拋棄してゐるのに、社會主義ばかりが久しく祖先の唯物史觀にのみへばり附いてゐたといふことも一奇である。その爲めにこの運動が多少とも世間の同情から離れ、自らを狹くしたことは事實であらう。無政府主義やサンヂカリズムやは方法の上ばかりで社會主義と違つてゐると思ふのは皮相の見である。クロポトキンでも、ソレルでも在來の社會主義に飽き足らずして立つた第一の原因は、その餘りに唯物的でそして inhuman な點にあつた。ジョオレスの人道主義的社會主義も矢張り同じ反抗から起つた。在來の社會主義者が固陋でそして爭ひ好きであり、黨中黨を立てるやうな嫉ひ

のあつたのも、恐らく主義その物の背景が餘りにドライであつたせいであらう。

社會主義が唯物的世界觀の上に立てられてゐるところから來る最重要な缺點は、比較的に個性の無視に陷る點である。社會主義又は共衆主義（コレクチビズム）が個人主義の正反對の思想としてとられるといふことは實にこの主義の爲めに最大危險である。それは個人の自由と正義とを樹立するといふ第一の立脚地から知らず〳〵離れることに成り了るのである。

今一つ現代の社會主義の缺點を言ふならば、ベルトランド・ラッセルがその著書の中で最も明確に指摘してゐるやうに、それが權力に迎合し、そして自ら得た權力に馴れ、知らず〳〵の間にその敵（富と權力）の罪惡に感染し、自らの運動に生きた主義と感激とを失くするといふことである。これは何んな運動にも附き纏ひ、改革者又は先覺者を誘惑する最も恐ろしい敵であるが、とりわけ勞働運動者には一番に危ない陷穽（おとしあな）である。なぜなら彼れ等の敵は金と力とを持つた俗物（フイリスチン）であり、そして彼等の味方は比較的智力の乏しい第四階級であるから。ベルグソンが言つた次の言葉は、恰も今日の國家社會主義者に當てつけたやうに思はれる。曰く、「我等の自由の確立する瞬間に、もう因習が頭を擡げ出す。で、不斷の努力によつて自ら新たにして行かない限り、その自由は窒息するであらう。…………我等の最も熾んだ情熱でさへ、それが外面に現はれるが早いか、自然に利益と野心の冷たい勘定に氷結する。前者はそれほど容易に後者の形を採り易いために、我等は兩方を混同し、そして自分の誠實を疑ひ、善と愛とを否定することがある――死者も暫くは生者の面影を保つといふことに氣附かない所から」と。

マルクス及マルクスの徒の社會主義が或る意味から消極的で且悲觀的であるといふこともこの運動に充分の活氣と希望とを添へえない理由である。彼等は今日の生産狀態が次第々々に勞働者を貧困にし、墮落させ、それがせつぱつまつたどん底で社會制度の革命が起ると見做してゐる。一面にはそれは眞理である。然しまた一面から言へば勞働者の生活

はより向上されてゐて、數に於て、智識に於て、自覺に於て、團結力に於て益々優勢になり、かうした進歩から社會改革も促進されつゝあることを否むわけにいかない。そのどちらもの見方もが一面的であるならば、なるべく進歩的樂觀的積極的な方をとつて、勞働問題を明るくするといふ方針に進みたいのである。

要するに、勞働問題は今までも又今後も永い困難な問題である。我等の肩がそれに堪え、我等の心が之を歡び迎へるためには、それをより精神的にし、より樂觀的にし、善と愛とを採り入れ、不斷に新しい希望と感激とに花咲かせ、智慧の庫であり、歡喜の泉であり、ユーモアの步行であるやうに、刻々に改め、漸次に弘め且つ深めて行く必要があるといふのが私の主張である。それに因習と權力とはこの運動の爲めに一番危險な誘惑物であり、妥協が當の資本家よりも憎い敵であることを忘れてはならぬ。

勞働問題解決法としての在來の社會主義を批評した序でに、この問題に關する手段に就て少し論じて見よう。私は社會主義の缺點を擧げたが、然し主義そのものが惡いと言つたのではない。勞働問題の永久的解決はどうしても廣い意味での社會主義が依て立つところの共産的社會の組織に俟つほかには道がない。正義がそれを命ずる、そして現代人の良心と理性とがそれを肯定する。(社會の便益の爲めに一部的の私有財産を許すといふこともよからうが、それは末の問題だ)。されば苟くも勞働問題の解決策として有力な諸說は、社會主義のほかに、無政府主義でも、サンディカリズムでも、勞働組合法(トレード、ユニオン)でも、共産的理想を目指してゐないものはない。

然しいかにしてその目的を達するか、目的を達したあとの社會はどんな組織をとるべきかといふことに就ては、どの說の主張も明確でない。そしてどの說の主張も缺點だらけである。社會問題の研究者が第一に失望させられるのはこの

點である。學者の迷つてゐるのもこの點である。然し幾千萬の人間の意志が集つて出來てゐる有機的でそして複雜な社會の進歩を因果律の定木で規定し、經濟の法則で繩張し、一つの箱を造つてその中へ推し込めようといふのは、餘りに無暴な企である。我等の望ましき社會も亦た左樣に窮屈でそして固定的なユートピアであつてはならない。歴史は一のベルグソン的「持續」であり、進歩は不可解な impetus である。我等は一の善き傾向を要し、その傾向の方への指導を要するが、然し決まつた方法や型に囚はれてはならぬ。民主的、共産的の道へ！。我等の目標はそれで充分である。若し何等かの方法を立てるとしたら、それは現在に限られたもの、未來への善き指導となるべきものの意味に於てだけが許される。

いかにして目的を達するかの方法に就てもさうである。マルクスの徒の革命主義か、ジョーレスやファビアン・ソサイチーの漸進主義か、國家社會主義者の政治的改革主義か、サンヂカリズムの全世界同盟罷工主義か、ボルシエヴイズムの過激主義か——その何れがよいか何れが惡いかといふことは斷定の限りでない。斷定するだけが無駄である。わたくしとしては（せめて我國に於てだけでも）溫和な改革が望ましい。然し何れへ行くにしても、それは爭ひ手同士の意志の問題である。現に最專制の露國に最過激の革命が起きたではないか。また現に今日までの資本家の態度は社會的革命を勞働者に挑んでゐる形ではないか。（我國でも成金の人もなげな豪奢振りや、富豪の脫稅などいふ現象はどうだ）。成らうことなら革命よりも改革（レフォーム）が望ましい。然し改革にも缺點がある。因習がすぐにそれに巣を喰つて、運動の本來の精神を腐らすことがそれである。やがては改革者自身が權勢の囚（とりこ）となるか、それでなければ彼自らが「自分の誠實を疑ひ、善と愛とを否定し」、根本的改革の不可能を自識するやうな羽目に陷り易いのである。であるから、茲でも私は勞働問題が、斷えず生々とした精神的の糧を採り入れて、日に日に新しい感激に再生するやうに努力せねばならぬこ

とを繰返して切言するのである。或る經濟學者がトルストイの人道主義を嘲笑(あざわら)つたりする短見には私は苦笑を禁じえない。

もつと廣く、もつと深く勞働問題を取扱はう、獨占顔をしてゐる經濟學者や唯物論者の手からこの問題を取り上げよう。そして生命や宗教の膝下で我等の新文明の先驅者なる「勞働」を育て上げよう。わたくしはこの事を繰返す。

根本の問題に這入らう。

所謂勞働問題はなぜ起つたのかといふに、それは明白でそして切實な事情のもとからである。玆に資本家と勞働者といふ二階級がある。近世の大規模な機械工業組織のもとでは、この二階級の差別は段々顯著となり對立的となつた。一方は資本と土地とを私有し、産業に必要な凡ての機械や原料を獨占して、他の階級の者を使役しつゝ生産を行つてゐる。然るに一方の使役さるゝ第四階級(プロレタリアート)の者は、數に於ては多數ではあるが、己れの生産に必要な機械も原料も土地も資本も持たない爲めに、空手では何物をも造り出しえない。彼等が生産に與りうる唯一の能力は勞働である。然るに奇怪な事には、生産に必要資料を獨占してゐる資本家側は「勞働」を壓迫して、僅かな賃銀を勞働者に與へるほかには、凡ての生産品を掠奪(?)して了ふ。そして金利とか、資本の配當とか、地代とか、積立金とか、手數料とか、いろ〳〵の名目を附して生産品の價格を充分吊り上げた上で之を市場へ出す。そこで勞働者は自分たちの造つた製品を自分で使用しようとする場合には、意外に高い代價を拂はねばならぬ。剩さへ資本主義の隆盛と專横とにつれて、勞働は單なる物質と見做され、勞働者は全くその日暮しの機械的奴隷と化し(古代の奴隷よりもわるい)、彼等の生命の生殺與奪の權さへが資本家の手に握られた哀れな境遇を惹起するに至つたのである。彼等は不健康な家屋と貧しい食物及衣物を與へられ、

自分の家族を樂ませたり、自分の子供を滿足に敎育するだけの自由をさへ惠まれてゐない。之が正しいことであらうか。之が正しい人道であらうか。何人でも正直に思考する力の麻痺してゐない人間ならば、それに對して直ちに「否」と答へるに躊躇しないであらうほど、それは間違つた組織であり、人道の蹂躪である。この事は古くから社會主義者やその他の思想家が經濟上からも倫理上からも證明し盡した問題であるが、それよりも第一に我等の正義の觀念が承知することのできない罪惡であるといふところに、一番强い判斷が働く。生きとし生ける者は尠くとも最低程度の生活の自由を要求する權利があるといふことは、理屈でも何でもない。それは萬人の良心の肯定であるのだ。

勞働問題はかやうなア・プリオリの正義から出立する。然るに我等の經濟學者は一方からは、資本私有の制度が歷史上掠奪の遺產であつて、決して一部の論者の稱へるやうに人間社會固有の「神聖」な權利ではないことを、赤裸々に我等に敎えてくれる。また他の方面から見るに、私有財產制が今後の社會の進步に百害あつて一利のないことも明らかである。或る短見な論者は、資本の魔力といふ事と人間の競爭的本能といふこととを楯にとつて、その魔力と競爭心とがあればこそ、社會の生產能力は發達するのであつて、これなければ人は徒に安泰をむさぼり、社會は退化するよりほかに道がないやうに論じてゐるが、これほど間違つた考はない。自由な勞働欲は人間の本能である限り、人は必ずしも物質的解放を與へられたとて怠惰にばかり流れると思ふのは誤である。且つ財產私有制以外にももつと人の競爭心を良き方面に向けさせうる制度がないわけはない。且つ今日のやうな機械的盲目的の强ひられた勞働よりも、自發的で獨創の許された勞働の方が、生產といふ點から見ても、どれだけ能率的であるかわからない。

かやうにして、正義と理性との兩方面から今日の資本主義が反對される。然し何よりもそれが近代人の最も切迫した要求――個性の獨立と尊重の要求に矛盾してゐるところから之に對する深い不安が生れ出る。近代人の情緒の奧を占める

一番深い要求は個性の完全な自由といふことである。それは我等のもろ〳〵の文化運動を彩色し、我等の哲學や藝術にも新しい色を帶ばしめてゐる特質である。内省力のない人間か曲學に中毒した學者のほかは何人がこの嚴然たる事實を拒むことができよう。されば現代の勞働不安は、個性表現の爲めの一開展であるといつてよい。割合に個性といふものに重きを置かない在來の社會主義が、智識階級の間に同情の薄い理由の一つはこゝにある。

我等の正義の觀念はあらゆる人間、あらゆる個人に humanity が平等に分たれることを要求し、我等の自由の觀念は個々人の意志の正當にして自由な發展を要求する。之が凡ての文化運動の基調であり、殊に勞働問題の動かすべからざる礎である。

かやうに見て來るときに、勞働問題の十全な發達は、何よりも先づ勞働者自身の開發、その個性の確立といふことにあらねばならぬ。たゞ物を奪はんが爲めにする暴戾な運動から「勞働」を救ふ爲には教育が最初の急務である。然しそれはたゞ理想上の順序であつて、現代の事情はさやうに悠長な道を採らせるには餘りに切迫してゐる。なぜなら資本家があまりに擅橫に流れ、相手に對して厭やおうなしに挑戰しかけてゐる形であるから。今日の有様では勞働者が自ら努めて個性を磨くといふやうな機會は殆んど與へられてゐない。却て今の資本主義は第四階級者の生活は愚か、彼等の道德上の良心までを挽め過ぎるので、その影響は一生癒すことのできない内的危害を彼等に與へ、彼等を驅つて暴民化する傾向さへある。人生に於て凡ての價値ある物を失つた――寧ろ失はせられた――徒輩の懐く鋭い嫉妬心ほど危險で恐ろしいものはない。彼等は本能的に他を傷ける衝動の持主である。勞働問題の最危機は懸つてこの點にある。

それを救ふにはどうすればよいか。それにはたつた一つの方法が存在する。第一には資本家の人道的自覺と、第二に

は勞働者の正しい個性への眼ざめとが相俟つて、相互間に新しい義務の觀念を助長するよりほかはない。(迂遠であらうとも今日の場合、それよりほかに道はない)。佛蘭西で最近に發達した「ソリダリテ」の思想は、かやうな必要からも促進されたやうに思はれる。それによれば共同責務は生命の特色であつて、同時に正義の要求である。それは必然でありまた義務である。この思想は個人と團體との關係に新たな意義を添加し、權利や義務の古い單純な考へ方を變へようとしてゐる。然したゞそれだけではどうも物足りない。切實に必要なこの問題を更に色濃くする爲めには、ラッセルの提唱しつつある尊敬(レヴェレンス)の法則を宗教的にまで高調することのほかはなからう。彼は人の性の中に尊敬の衝動を認める。自己の個性の發達するにつれて、その人達は他人の個性にも深い尊敬を拂ふやうになる。かやうな人達は他人の自由に對して充分の價値を認めるであらう。彼等は裁くことは遲疑するが同情するのは早からう。彼等は親切を以て一人々々の人間に對するであらう。なぜなら、その人の中にある自由と善根とは、自分のそれの如く限りなく尊いものであり、且つ脆いものであることを知つてゐるから。彼等は自分達と違つた人達だとて決して責めぬであらう。彼等は個性のあるところに差異があり、均一は死を意味してゐるといふことを感じてゐるであらう。彼等は各個の人間が能ふ限り生きたものであり、できるだけ少なく機械的産物であることを望むであらう。約言すれば、他人に對する彼等の凡ての態度は深い尊敬の衝動に貫かれてゐるであらうと。

要するに、ソリダリテ又は尊敬の觀念は個性の自由といふ觀念と相伴つて、現代及今後の社會を救ふ二つの主力であらねばならぬ。

勞働問題を經濟上の點からのみ觀察するならば、必ずしも現今の社會組織を以て間に合はないことはない。所謂溫情

主義でも事足りる。然かし個性の自由尊重といふ根深い要求から出發するときに、財産私有制とは根本に相容れない。主從の關係を持續し與奪の權を一方が握つてゐる制度のもとに何處に眞の自由がありえようか。

勞働問題の最も恐ろしい敵は誘惑であり、妥協である。餓えたる者に惠まれる一片の肉がその人を悦服させ誘惑するに充分であるほど人間の身體は脆く築かれてゐる。

翻つて社會の一員としての我等の立場を考へよう。我等が直接運動の渦卷の中へ飛び込むと否とに拘らず、かやうな過渡時代に處するには、明確な信念と根強い希望と困苦を物ともしない沈着な勇氣とが何よりも必要だ。我等がかやうな時代に立つて、自己の性向を完全に保つて行くためには、内的に敗者であるといふ傷けられた觀念を持つてはならない。寧ろ内外ともにいかなる障害に逢はうとも、自己の内にある最善の物に出て生きて行かうといふ自尊と意志とを振ひ起さねばならぬ。妥協を許さない尊い自然的矜持があつて始めて、我等の生活は一個の人間自らの力の及ぶ範圍に於て其の最善の可能性を發揮しうるであらう。我等は未來の新文明の初幕としての勞働問題の根本的解決を望むものである。然しその道は猶ほ遠からう。で、恐れるのはその困難な道に進む者の疲勞と之に伴ふ内的敗北である。妥協を餘儀なくされる意志ほどみじめなものはない。一たん何等かの形で妥協するが早いか、その人の内よりは尊い或る物が消滅するであらう。彼は最早完全自由な人格者ではなくなるであらう。そして彼の主義は變形惡化した死んだ殻に過ぎないであらう。ホイツトマンが我等に警告する――

To The States, or any one of them, or any city of
The States, *Resist much, obey little,*
Once unquestioning obedience, once fully enslaved,

Once fully enslaved, no nation, state, city, of this
Earth, ever afterward resumes its liberty.

妥協と誘惑に對して我等は反抗の德を稱へるのである。

勞働問題に於ける第二の危險は、わたくしが繰返し／＼先に述べた如く、それが餘りに固陋になり、inhuman に陷る結果、生氣と感激とを失つて、殘忍の相を帶ぶるやうになることである。

餘程以前に私は或る動機からミルとラザールとマルクスの傳記を併せ讀んだことがある。そして之等の先覺者の生活がどんなに緊張し且感激に充ちたものであり、峻嚴な鬪爭者としての威容がどんなに貴いものだかといふことに打たれたものである。殊に私を驚かしたのは、彼等が親切で human な性格の持主であつたことである。マルクスに就て言ふならば、彼が巴里に放浪の折ハイネと知合となつて、この老詩人を何れだけ親切にいたはり慰めたかといふ一事を見てもわかる。わたくしは言ふ、かういふ情け深い、そして緊張した生活の所有者から生れ出る主義が、よしんば唯物論的の型はとつてゐても、それが深い精神力を持たずに措くものでないと。

事實に於て初期社會主義者の運動には熾烈な熱があつた。然るに歲月のたつにつれて、その主義の精神にいろ／＼の變化が起つた。或者は爭つて別れた。或る者は妥協の道を採つた。佛蘭西でも獨逸でも、彼等はその強硬な主義の一部を曲げて政府の或る承認と引替へをなし、國會に席次を增すことを唯一の道のやうに心得た。少くとも戰前の社會主義は、彼等の鼻頭を靈感せしめた純な精神からは遠程く離れてゐたことは事實である。幸ひにも戰爭の影響によつて再び新しく燃え始めた勞働問題から生氣と感激とを斷やさない爲めには、わたくしの說くやうに、その運動を精神的に培ひ、より human な情緖をそれに吹き込むことが最も必要であらう。我等の用意は正にここにあらねばならぬ。

資本主義的社會から共産的傾向の社會へ進んだ場合を考へるに、その野での我等の獲物は、殆んど數へ盡せないほど豐富であらねばならぬ。然し今にして之を推想することは時期がまだ早く、徒らにユートピアを談るの愚に陷り易い。たゞこゝに明白に告げらる一事は、第一に來るべきものが、當然生活哲學の改變であるといふことである。

社會の經濟的制度は人間の性格を改鑄する上に最も深い影響を有してゐる。されば、今日の資本主義的社會に於て、一般に奉じられてゐる實生活の哲學は人間の幸福に一番必要な物は金であるといふ信條である。然るにこの信條は精神の法則とは相容れざるものであつて、何人も自己の良心を欺くことなしには、素直に之を採入れることのできないものである。然し大多數の者にとつてはこの信條は生存の必要條件として外部から強いられてゐる。そこで彼等の意志は已むなく之に屈服する。換言すれば、現代人を支配する處世哲學は彼等の內的敗北といふ尊い犧牲を拂つて得られたものである。從て彼等の幸福は消極的である。かやうな不自然の哲學がどうして生命の成長を助成することができよう。この點から言つても、人が餘りに物質の制肘を受けない共産的社會を造り出し、その新しい經濟制度のもとに、人類がもつと自由で、もつと優雅で、もつと創造的で、もつと積極的幸福な生活哲學に生きるといふことが望ましいものである。

より良き經濟組織からより良き生活哲學へ、より良き生活哲學から「歡喜」の新宗教へ！。我等が勞働問題を愛護して已まない眞の理由はかやうな前途を目標としてである。或人は私の餘りに樂天的なのを笑ふかも知れない。然し近き未來に於ける共産的社會が最早一つのユートピアでない限り、私は私の理想の實現を信ずる。

最後に、も一つ附け加へて置くべきことがある。殆んど凡ての論者が等閑に附してゐることで、その實今後の社會問

題に重大な關係を有する顯象は、最近に於ける自然科學の異常な發達である。蒸汽機關の發明が近代の產業革命の動機となり、それから今日の經濟組織が生れ出たことは、マルクスが特に力說したところであり、もつと廣い意味でのその精神的影響に就いても、ベルグソンが之に妥當な承認を與へてゐる。機械の發明が經濟的革命を惹き起し、それが政治的革命に進展するといふことは、マルクスの歷史觀の基調であつた。晩年彼は汽力よりも遙かに偉大な革命者たる電力の出現に逢遇してから叫んだ。「今、既に問題は解決せられた、其結果は恐らく計り知れぬほどのものである」と。然るに最近二三十年間に成就された自然科學の進步は、マルクスの全く夢想だにせなんだ新しい物質界の寶庫を我等の前に開展した。電子及放射能元素の發明があり、之に次ぎて我等は原子の內部構造に關するかなり明白な知識をうるやうになり、更に諸元素の人爲的變質(トランスミューテーション)または原子の破壞といふことも必ずしも不可能でなからうといふ信念が得られた。而して原子がその內部に包藏するエネルギイの、どれだけ大きなものであるかといふことは、一瓦のラヂウムの有するエネルギイが石炭の約四分の一噸に相當するといふ例から見てもわかる。で、今日まで全く我等に知られなんだ斯樣に豐富なエネルギイの新財源が發見され、それが近き未來に人類の自由使用に供せられる時代が來ることを思ふときに、その社會に齎す革命は蒸汽力のそれどころでないのは明らかな事實であらう。

我等の行手には光明がある。而して我等の目指す道は遠いやうで近い。

這回の歐洲戰爭は一つの大きな地震であつた。人類社會といふ街のあらゆる建物がその影響を蒙つた。高樓になればなるほどその動搖と不安とが劇しかつた。どの建築家も數學者も、その設計に當つて、かやうな大地震に對する安全率を豫測して置かなんだ。此方(こつち)では大きな塀が玩具の家のやうに倒れた。彼方(あつち)では不動の傳統柱で築き上げた天を摩する

やうな高塔が脆くも崩壞した。荒廢した墓場の地が裂けて、忘れられてゐた幽靈が現はれた。古い太陽にはところ〳〵汚點が出來た。異樣な然し眩しい光の星が之に代らうとしてゐる。見えざるモーゼが山から下りて、我等に新しい智慧の貯へを與へようとしてゐる。彼は既に彼のまはりを幾人かの勇敢な舞踏者で取り卷かれてゐる。その中でも一番の兄弟子は逞しい筋肉をもつた「勞働」である。

一切は、勞働問題の根本的解決を俟つて、初めて我等の新時代が開ける。藝術家も、思想家も、科學者も、農夫も、婦人も、あらゆる人間が之に手傳ふ責務を有してゐる。今日は何人にとつても self-denial week である

勞働問題講話

法學博士　堀江歸一

本論文の趣意

精神たると肉體たるとを問はず、報酬を獲得するの目的を以て、兩者の一を役するの人は即ち廣義に於ける勞働者なり。近來我國に於て洋服勞働者又は洋服貧民の語の行はるゝが如き、勞働者を最も廣義に解釋したるものなれども、勞働問題の中心たる勞働者は斯る廣義のものに非ず、實に肉體を役して勞働する者に限られ、又工業勞働者に限らるゝを常とす、又一般に勞働問題と云ふときは、勞働者に關する一切の問題を包含するが如くなれども、今日の所謂勞働問題は斯る廣汎なる領域に及ばず。勞働者の就業、仕事、生活等に關する狀態を改良し、彼等をして文明國の一員として生存するに値せしめ、文明の恩澤を彼等に及ぼさんとする運動に關する研究は即ち勞働問題の本體にして、文明諸國に於て工業發達し、富の蓄積亦盛なるに及んで、此問題の喧傳せらるゝもの亦敢て異とするに足らざるなり。

思ふに一國に勞働問題の起るに當り、之に應じて勞働者の勞働狀態を改良するに就ては、種々の異なれる主義又は政策の存するあり。第一傭者の勞働者に對する處遇の公正を望むもの、第二職工組合主義の下に、勞働の自治に重きを置くもの、第三社會政策の下に、國家の立法を必要とするものゝ如き是なり。是等の諸政策中、其孰れのものを必要とするや、又孰れかの一を重しとす可きやは國の狀況に依て自ら異ならざるを得ずと雖も、一方に今日の社會に於ては、年來經濟組織の發展しつゝある間に於て、勞働者の作業勞働等に直接至重の關係を有する社會的制度發達し、今や其根柢の牢として動かす可からざるものあり。賃銀制度の如き、資本的生產組織の如き、將た又資本家と勞働者との階級的差別の如き、即ち勞働者の生活に影響を及ぼし、又生活の形態を律する社會的制度に外ならず。或は是等既存の社會的制度を根本的に破壞し、今日と全然異なれる主義原則を基礎として、一の新社會を組織せんとするは、社會主義者の主張する所にして、又勞働問題解決の一法たるを失はざる

可しと雖も、余は本論に於て斯る主張の當否に論及せず、單に勞働者の生活に關係ある社會的制度が如何に不利なる影響を勞働者階級に及ぼすやを考量し、國家の政策若しくは勞働者の自治に依て、如何に斯る不利なる影響に當る可きやを説明するに止めんとす。

勞働者と社會の諸制度

勞働者の生活に關係ある社會的制度の一として、第一に擧ぐ可きものは、賃銀制度なり。奴隷勞働の時代に於ては、奴隷は主人の命を奉じて一定の勞働に當り、此勞働に對して、主人より衣食住に必要なる物資を最小限度に於て、給與せられたり。奴隷の生活の人に滿足を與ふるものに非ざるや、論を俟たずと雖も、奴隷にして一意主人の意に從つて奉仕せんか、最低限度の生活は之を維持するを得るの保證を有したり。然るに今日の勞働者に至つては、奴隷に比較して大に趣の異なるものあり。今日勞働者が所謂自由勞働者として、職業の種類、職業を行ふ場所、又之を行ふ時期を選擇するの自由を有し、勞働に對しては貨幣の形態に於て、報酬を收め、而して之を消費するに全然自己の裁量を以てするの自由を有するは、奴隷時代の勞働者に見る能はざりし所にして、今日の勞働者が社會的地位に於て、大なる進歩を致したる所以なりとするを得べしと雖も、一方に勞働者は自ら仕事を求め、之に對して得たる報酬を以て、自己幷に家族の生活を支持するの責任を負はざる可からず。然も勞働者の提供する勞働力に對して、勞働者の滿足する報酬を支拂ひ、又は勞働者と其家族との生活を支持するに足るの報酬を支拂ひて、勞働力を需要する資本家の存するものありや否や。換言すれば勞働力の供給ありて、之に對する需要あり、需要供給の調節を得て、誤まる所なからんか、勞働者は公正なる賃銀を獲得するを得べしと雖も、需要供給の調節は常に之を期する能はず。勞働の供給過剩にして、一部の勞働者は失業の狀態に陷り、全然賃銀を喪失することある可く、又他の勞働者は職業に就けりとするも、勞働供給の過剩なる勢に壓迫せられて、自己の欲する賃銀を獲得するに難く、二者何れの場合に於ても、勞働者は自己幷に家族の生活に於ける安全を脅かされざるを得ず。是れ今日の賃銀制度に於て、勞働者が最も不利益の地位に居る所以なり。而して勞働者が勞働力を賣るや、其對手とする所の者は資本家なり。勞働者と資本家と互に親和して、意思能く疏通し、又各自の職分を尊敬し、同情の念を以て、相接せんか、兩者の關係甚だ圓滑なるを得べしと雖も、生存競爭の劇烈なる今日に於ては、資本家先づ冷酷なる利己心を以て、勞働者に臨み、勞働者亦自己に優良なる條件を許容する資本家の下に

於て、勞働せんとし、一日に一二回、一週間に數回自己の勞働する場所を更ゆるが如き、意に介する所に非ずとすれば、資本家の如き、勞働者に對して何等情誼を感ぜざると共に、勞働者亦資本家に對して、恩愛の念を懷かざるや、知る可きのみ。斯る關係に於て、資本家と勞働者と相對して、勞働條件を決定し、賃銀の高低を左右せんとする場合に、資本を有する資本家が資本を有せざる勞働者を壓迫するに至るは、勢の免かれ難き所にして、賃銀制度の下に、勞働者が自己の勞働に對して、公正なる賃銀を收め、賃銀の形態に於ける所得を確實にし、失業の爲めに、濫に之を喪失することなからしめんとするには、賃銀制度の運用を限定し、補助する等幾多施設する所なかる可からざるなり。

賃銀制度と共に、勞働者の生活に重要の關係を有する社會的制度は所謂資本的生産の制度是れなり。蓋し今日賃銀制度の下に、生産の行はるゝや、必ず資本家と稱する一の階級あり。資本家が自ら企業家を兼ぬる場合と企業家を雇入るゝ場合との別あれども、此區別の如何を問はず、資本家は現に生産しつゝある貨物の賣却せらるゝ以前に、勞働者の爲に、自己の所有する流動資本の一部を割いて賃銀を支拂ひ、貨物の生産の完了したる曉に、之を市場に賣却するの任に當らざる可からず。玆に於てか、經濟社會に資本家と稱し、又勞働者と呼ばるゝ二個の階級の對立するは、必然の結果にして、資本家は資本を所有し、又之を運用して、事業經營の衝に當り、如何なる品質の貨物を如何なる數量に於て産出し、幾何の生産費に對して、幾何の代價を以て、之を市場に賣却し、以て幾何の利潤を收む可きや、自己の責任を以て、之を決定するに反して、勞働者は單に一定の勞働力に對して、定額の賃銀を受取り、然も自己の仕事の完了せざる間に、賃銀を受取るを得べし。即ち資本家は仕事の完了に先だちて、賃銀を支拂ひ、更に原料品を買入れ、機械其他の固定資本を準備す可く、一方に生産物を賣却して、利潤を回收するに就ても、市場の變動、販路の盛衰に伴ふ危險を負擔す可し。要するに生産に從事したる時より貨物賣却代金回收の時に至るまで、若干の間隔を存し、生産の規模の大なるに隨ひ、此間隔の大なるものある以上は、生産業は徒手空拳を以て、之を行ふ可からず、必ず其經營に資本を必要とす可く、産業の資本化せらるゝ一事は今日の産業社會に於ける一の特色とするを得べし。固より現代の産業が大規模に經營せらるゝは富の生産に資する所以にして、斯く增殖せられたる富は自然生産に對して、直接に將た又間接に干與する各階級の人民に分配せられて、其生活を豐富にし、又生活の程度を向上するに至るの道理なり。現

に今日の勞働者と數十年前の勞働者とを生活殊に有形的幸福の點に於て比較せんか、前者の後者に對して、勝る所大なるは、明白の事實にして、此事たる、生産の發達、富の增殖が社會に齎したる効果の最も大なるものなりと雖も、一方に此富は社會の各方面に向つて、最も公正に分配せられつゝありや否や。富の公正なる分配と稱するは、生産に干與したる當事者が生産の目的を以て寄與したる所と之に對して得たる富と均衡を保ちたる場合に、之を期するを得べく、此事たる、適確なる標準に依て、測定するに困難なれども、之を實際の事實に徵せんか、今日の社會に於て、人が孜々として勞働に從ひながら、尙ほ自己の生活を全うする能はず、單に目前の生活に支障を訴ふるは勿論壯年時の收入に依て、老後所得の減少したる時に處するの餘裕を得る能はず、自己の子弟を教養して、之を次代に於ける有用の國民たらしむるを得ざるが如き、富の分配の公平公正を得ず、資本家が其資本家たるの勢力に依て、富の分配に就て自己の得べき所に値するより以上を奪取するの結果にして、富の分配の公正に關する問題と相關聯して、勞働問題の發生するは、勢の免かれ難き所に屬すとす可きなり。

資本家と勞働者と經濟社會に對立し、相互に同情理解を持して、圓滿に生産の一途に向はんか、勞働問題として、議す可きものゝ簡單と爲る可きや論を俟たず。若しも勞働者にして多年勤勉努力したる曉に、勞働者たるの境涯を脱して、資本家の班に列し、資本家亦永く同一の境遇に居るに飽きて、時に勞働に從事するが如きことあらんか、勞働者は必ずしも資本家に對して反感を懷かざると共に、勞働者の境涯を經て、資本家と爲れる者は勞働者として辛酸を嘗め、勞働者に對する同情に富む可く、兩者の關係圓滑なるを得べし。然るに今日の狀態は斯の如く爲らず。資本家として事業經營の衝に當るには、今日の生産組合に於て、巨額の資本を必要とするが故に、勞働者が賃銀の一部を蓄積したる位にては、苦辛こそ大なれ、終生を費すも、尙ほ資本家たるの地位に進む能はず、殊に企業者たる能力を備ふるが如き至難の業とせざる可からざる一方に、資本家に對しては財産保護に關する種々の法制あるに加ふるに、財産相續法は財産所有者の地位を世襲的たらしむる　得べし。故に一旦父祖に勞働者を有したる者は子々孫々勞働者たるの地位に安んぜざる可からざると共に、資本家の子孫たる者は永久を通じて此地位を保持するを得べく、兩者の間に斯く踰越す可からざる障壁の存する一事は兩者互に階級の差別を以て對立す可く、兩者の利害は容易に疏通せず、兩者の感情も亦融和するに難く、資本家と勞働者との爭議に階級的鬪爭の色彩を生ぜしめざれば、已

まざるに至るなり。

勞働問題に内外の別なし

我國一部の人士口を開けば、我國の勞働問題が外國の同一問題と全然其趣を異にし、外國に行はるゝ解決法の我國に適用せられざることを唱道して已ます。然れども吾輩は斯る所説に對して、到底賛成を表する能はず。蓋し人情の古今東西を通じて、同一なるは先哲の常に吾人に教ゆる所なり。我國には既に賃銀制度あり、機械工業旺盛の結果として、資本的生產組織亦到る所に其効果を擧げつゝあり。明治初年以來社會の秩序未だ確立せざりし時代には、資本家と勞働者との間に階級上の障壁を存せず、恰も封建制度の瓦解と共に、薩長土肥諸藩の輕輩が一躍高位大官に上れるに對して、舊大藩の家老が零落したるが如く、越後の魚賣りや、横濱の石炭擔ぎが富豪と爲り、資本家と爲り、苟も人にして實力ある以上は、門地閥歴の如きは殆ど之を問はず、必ず社會に於て實力に相當する地位を占むるを得たり。然らば今日に於て果して自由競爭行はれ、人をして充分に實力を發揮せしむるを得るやと云ふに、大に然らざるものあり。職業に依て、人に貴賤の別なく、一方に如何なる職業に對しても、人の之に就く自由の開かるゝ點に於ては、今日は封建時代に比較して、大に趣を異にすると雖も、尚ほ種々の關係に依つて、我國に社會階級の差別を構成せんとする事實の厳然たるものあり。彼の華族制度の如き、現今の高等教育制度の如き、之に當るものと見る可し。華族制度の下に於て、華族の家に生れたる者は如何なる低能者と雖も、世襲財產法に依て、生活上の安全を保證せられ、其當主は或は世襲的に、或は同族者間の互選に依て、容易に貴族院に一席を占むるを得るのみならず、華族の榮稱あるが故に、社會的に地歩を收むるに易く、世襲的に斯る便宜を占むるに對し、華族ならざる者が毫も同一の便宜に浴する能はざるが如き、社會階級の別を大ならしむるものとす可し。

第二に教育は四民平等に之を受くるの自由あるが如しと雖も我國現時の高等教育は勿論中等教育の如きも、之を受くるに費用を要すること頗る多く、中流以下の社會に居る者にして、子弟に斯る高等又は中等程度の教育を受けしめんとするも、其費用の負擔に堪へず、一方に社會に於ける各種の職業に於ては或は法令の明文を以て、或は不文律を以て教育の有無又は程度を標準として、人の職業に就くの適否を決するが故に、有產者階級に居りて、高等教育を受けたる者と無產者階級に在りて、初等教育に安んじたる者との間には、就く可きの職業、受く可きの報酬に就て、優劣高低の別あるを免かれず。教育は大に之

を普及して、村に不學の家なく、家に無學の兒なしと云ふは、文明國の一要義たるを失はずと雖も、其教育と云ふは國民教育にして、其以上の教育は多く有産者階級に獨占せられ、而して此教育を受けたる者は益々社會に有利なる地位を占めて、之を受けざる者を凌駕するに於ては、教育は我國に於ては社會階級間の差別を甚だしからしむるの具たるやも、未だ知る可からざるなり。

第三に我國に於て社會階級の差別を生ずるものは、近時盛に行はるゝ富豪の財産保護法なり。蓋し華族社會には世襲財産の制度ありて、華族の財産を保全するの用を爲すと雖も、華族以外の社會に至つては、何等特殊の保護法の存するものなし。如何なる富豪も一朝其經營する事業に蹉跌するか、又は當主に浪費者の輩出するときには、忽にして財産を蕩盡せざるを得ず。斯くて一方に在來の貧民が時運を得て、暴富者と爲り、更に暴富を巧に處置して、正眞正銘の富豪と爲らんか、其間に新陳代謝の作用を現出するの妙ありと雖も、斯の如き變動は一旦富豪と爲れる者の能く堪ゆる所に非ず、飽くまでも富豪たるの地位を後世に傳ふるの希望熾烈なる爲め、近年我國の富豪は一方に家憲を制定して、富豪の當主の財産を處分するの自由を制限し以て他日低能者の當主と爲れる場合に生ずる危險に備へ、他の一方には自家の經營する事業を擧げて、株式會社の組織とし、事業に失敗するも、之に對する責任を有限とし、以て富豪として有する財産に大なる缺損を蒙ることを防がんとしたり。固より現行所得税法の不備なる、資産家事業家が個人として事業を經營し、所得を收むるときには、之を第三種所得とし、其金額三千圓以上五千圓以下のものには税率を千分の七十とし、所得の増加するに隨て、税率を千分の三百までに累進せしむるに反し、法人殊に株式會社に於ては、所得の多寡如何に拘はらず、税率を千分の六十二、半に止むるが故に、資産家事業家にして、三千圓以上の所得を收むるときには、事業の組織を株式會社に改むるを以て、所得税の負擔を輕減するを得るの道なりとす可く、此一事は個人事業の株式會社に改造せらるゝ一の原因なりと認むるを得べしと雖も、同時に家運存續の目的を存することを忘却する能はざるなり。維新以來我國に多數の富豪の新に起れるに拘はらず、明治以降不換紙幣の濫發、其回收、輸出入貿易の變動、西南戰爭以下諸地方に於ける反亂等に依て經濟社會の動揺するに隨ひ、有名無名の富豪にして事業に失敗し、續いて破産の已むを得ざるに至り、今日まで家名を傳ふるを得ざるもの少なからざるは、何故なりやと云へば、一方に彼等の財産保全に對する用意周到ならず、國家の法制亦完備せず、斯く

て上記の二點に就て、彼等の施設の及ばざりしことに歸す可く、斯る前車の覆轍は今や後車を戒めて、近時の富豪が財產保護法に意を致すこと、以上の如くなりとすれば、富豪は永く存續し、又其存續する間益々富を大にして、階級の動かす可からざるものを成すに至る可し。

階級的差別を生ずる我國特殊の原因のみを數ふるも、以上の如し。更に西洋諸國と共通の原因を數へんか、大工業の組織の下に、資本家が益々其大を致すが如き、勞働者は如何に努力するも、資本家の列に入ることの困難なるが如き、資本家と勞働者と相識の關係なく、其間に何等情誼の發生する餘地の存せざるが如き、株式會社の組織せられて以來、企業者たる會社の重役は資本家たる株主に對して多くの配當金を領與し、自己亦賞與金の分配に與らんとし、營業費を節約するに急にして、勞勞働者を壓迫するに至るが如き、之に當るものにして、我國が機械工業の大規模經營を産業上の組織に採用し、此點に於て西洋諸國と同列に立ちながら、獨り勞働問題の解決に就て、諸國に對して孤立せんとするが如き、自ら省みざるの甚だしきものとす可し。

我國勞働者社會の特色と稱せらるゝ點

我國一部の論者殊に内務省の官僚が我國勞働者社會の特色とし、又我國勞働問題解決の一助に充てんとするは、資本家と勞働者との間に主從の情誼の存するものありとするの一事是れなり。即ち資本家は勞働者に臨むに、主人の情を以てすれば、勞働者亦之に報ゆるに奴僕の誼を以てし、斯くて兩者の關係圓滿なるは我國特有の美風にして、今此美風あるに拘はらず、西洋流の權利義務の觀念、自由契約の思想を以て、雇傭關係を律するは、國情に背反するものなりとするの所說は吾儕の從來常に耳にしたる所なり。天下に愚說多しと雖も、主從關係論の如き、眞に愚說中の愚說を以て之を目せざるを得ず。假に資本家を主人とし、勞働者を從者として、主人たる資本家は從者たる勞働者に對して恩愛を施すこと、能く封建時代の君主の臣下に對するが如きものありやと云ふに、決して然らず。封建時代に於ては、君主は其臣下に秩祿を與へて、其生活を保障するは勿論子々孫々の末に至るまで、君主に依て扶持せられたればこそ、臣下も亦君主に酬ゆる爲めに一朝事あれば、自家の生命を一擲することとすら、之を辭せざりしものなり。今日演劇に於て、封建時代の武士が君主の爲めに、自己の命を棄て、或は妻子を犧牲に供する等の悲劇を見物するときは、其餘りに奴隷道徳に支配せられたるの跡多きに就て、不快の念を催ほさゞるを得ず。寧ろ今日吾人の斯る境遇を脱したるに對して、感謝するものゝたる

が、一部の人士が勞働者に向つて、資本家に臣從せよと云ふは、即ち此奴隷道德を鼓吹するものに外ならず。而して今日の資本家は勞働者に對して如何なる情誼を有するやと云へば、生存競爭の劇烈なる現代に於ては、資本家は多くの場合に勞働者を一個の「手」として遇するのみ。「手」に相當の力ありて、生產上に利用し得る場合には、或る高の賃銀を給與して之を雇傭すると雖も、「手」の力衰耗して、生產上に用を爲さゞるや、解雇免職其躊躇する所に非ずとすれば、勞働者は何を以て資本家に對するに臣下の誼を持するを得んや。若しも資本家にして一旦勞働者を雇入れたる以上は、終生之を扶持するの義務を負ひ、其子弟亦之を自家の雇人として相當の待遇を與ふるの方法に出でんか、勞働者亦其情誼の厚きに感奮し、玆に主從の關係を生ずることある可しと雖も、然らざる限り、此關係を今日の資本家と勞働者との間に求めんとするが如き、徒に奇を好むの類に過ぎざるなり。

以上の愚說に比較して、殆ど甲乙なき謬論は資本家の溫情に依賴して、勞働問題を解決せんとするものなり。資本家をして勞働者に對して公正なる處置に出でしめ、勞働者亦自己の實力を以て、公正なる待遇を資本家に求むるは可なりと雖も、斯る對等の關係以外に逸出し、資本家をして溫情を以て、勞働者を待遇せしめ、勞働者亦資本家に之を望む可しと云ふが如き、一方は他方に憐愍を施し、他方は之を甘受するものにして、大正の今日に、奴隷道德を現出せんとするの愚に外ならず。論者は溫情主義の存するを以て、我國資本家の特色なりと云へり。然らば今日如何なる方面に溫情主義の行はるゝ事實ありや。某々富豪の主人が每年元旦に使用人を引見して、年賀の式辭を受け之に對して酒盃を與ふるは溫情なるか、主人の定紋を染出したる羽織を授くるは、溫情なるか、將た又資本家が自己の庭園に園遊會を開くに當り使用人勞働者の群を其片隅に侍せしむるは溫情なるか、紡績其他の工場に於て規定の時間勞働して、心身疲憊し、睡眠休憩を要することの切なる女工を驅つて、茶道や行儀作法を習得せしむることが溫情なるか、數へ來れば世間の所謂溫情なるものゝ勞働者を愚にする所業たるに過ぎざるや、論を俟たざるなり。資本家にして勞働者に溫情を施すの誠意あらんか、先づ其勞働條件を優良にし、殊に賃銀を豐富にす可し。勞働者は自己の裁量に依て、斯る豐富と爲れる所得を自由に處分して、滿足する所を得べく、其勞働者たるが故に、只管資本家の溫情に依賴し、自己の快樂とするものゝ種類分量に至るまで資本家の決定に仰がしめんとするが如き、人格を尊重する今日に於て、許す可からざる議論なりとす可し。世間の資本家が

其使傭する從業員勞働者等に對して、人格を尊重せよと云ひ、又人格を向上せよと云ふは、要するに斯く完成せられたる人格に信用を置きて、事業の經營を全うせんとするの趣意に外ならざる可し。然るに他の一方に於て、主從關係や溫情主義を標榜聲明して、却て勞働者の人格を無視し、彼等を一個の手とし、奴隸として、自己の頤使に甘んぜしめんとするは、矛盾の沙汰と評せざるを得ず。

從來我國に於て斯る偏論僻說を唱ふる者は資本家の階級に之を見たると共に、內務省の官僚中に同意見の存するもの亦少なからざりき。彼等官僚にして眞實我國の社會に於て資本家勞働者間に主從關係の存することを認め、又溫情主義を以て將來の勞働問題を解決するの確信を有するものならんか、何故に彼の巴里講和會議に於て、國際間に於ける勞働保護立法統一の議せらるゝに當り、我國の立脚地若しくは勞働問題解決法の諸外國と異なることを聲明して、之に加入せざることゝせざりしか。彼等が或る留保は爲したりとするも、勞働改善の原則を承認したるは卽ち彼等自ら溫情主義や主從關係を以て、當今の勞働問題の解決せられざる所以を自白したるものとす可し。然も我國內務省の屬僚其他の間に於て、依然我國勞働問題の解決に特色ありとするの僻を絕たざるは何故なりや、吾輩の怪訝に堪へさる所なり。

勞働者の團體運動

吾輩が我國に於て勞働問題を解決する重要なる方法として、從來世間に主張したるものは、勞働者の間に團體運動を起して、以て資本家に當らしめ、資本家なる團體と勞働者なる團體と相對して、勞働條件を決定し、此條件の下に勞働者をして其業に就かしむるの一事に外ならざりき。職工組合主義と稱するもの卽ち是れにして、啻に從來之を主張したるのみならず、近き將來に於て、我國の勞働問題解決に最も能く適應したる主義なることを信ずるものなり。卽ち全國に於て同一の職業に從事する者の間に其住居地又は就業地の別に依て、團體を組織し、更に各地方の團體を統一する聯合會を設立し、組合は組合に屬する勞働者の爲めに、勞働條件卽ち賃銀勞働時間、規定以上の超過時間勞働、之に對する報酬等凡そ一國法律の規定に依て、保護せられず、然も勞働者の生活に重要の關係ある事項を決定し、勞働者の如何なる條件の下に、勞働す可きものなるやを明にし、一個の勞働者として、之を資本家に要求せず、團體の力に依て之を資本家に要請し、一個の勞働者として要求する場合に、其効力の微弱なるを補ひ、斯くて資本家と勞働者とを對等の關係に置かんとするもの、卽ち職工組合主義の眼目とする所なりとす。

職工組合は二種類の職務を有す。一は共濟的職分にして、他の一は鬪爭的職分と稱す。蓋し職工組合の組織せらるゝや、組合は組合員より若干の醵金を毎週毎月時を定めて徴收し、一方に入會金をも徴收するが故に、世間篤志者の寄附金と相俟つて、組合の基金なり、經常收入なり、相當の財源を有するに至る可し。組合にして所定の規約に從ひ、例へば組合員が疾病に罹り、負傷し、死亡し、火難風水難等にて仕事に必要なる被服道具を失ひ、又は經濟社會の變動に基き、一身の行狀に何等の缺點なきに拘らず、失業する等幾多の災厄に陷りたる場合に、定額の惠與金を交付し、以て組合員の生活を扶助するが如きは、職工組合の共濟的職分を致しつゝあるものとす可く、此種共濟組合式の勞働者團體は我國にても官私設大工場を通じて、現に設立せられつゝあるが如しと雖も、職工組合の生命とする所は斯る共濟組合式の職分を盡すに止まるものに非ず、此以外に鬪爭的職分を致すに在ることを知らざる可からず。

職工組合の鬪爭的職分と云はんか、其名稱のみを以てして、聊か世人に之を物騷視するの感を與ふるが如しと雖も、此職分なくんば、勞働者團體たる眞の精神の伴はざるを如何せん。蓋し勞働者が組合を組織するや、其目的とする所は團體の力に依て、勞働條件を優良にし、以て文明國の國民たるに値するの生活を爲さんとするに在り。故に職工組合は一方に組合加入の資格を限定し、相當の勞働能力を有する者のみ、組合員として組合に加入するを許すと共に、組合員の爲めに標準賃銀を決定し、苟も事業主にして組合員を雇入るゝ場合には必ず此標準賃銀を支拂はしめ、以て勞働條件の維持を謀り、國民生活の程度自ら上進し、勞働者の生活をして之に伴はしむるを必要とするや、更に標準賃銀其ものを増加するの手段に出づ。故に職工組合をして充分に其威力を勞働市場に發揮し、市場を左右して、以て資本家に當るに至らしめんとするには、相當の能力ある勞働者を組合に收容し盡し、事業主が勞働者を求むるときには必ず組合に其供給を仰ぎ、斯くて標準賃銀の支拂に異議なからしむるを必要とす。玆に於てか職工組合は一方に相當の能力ある勞働者を組合に網羅するに勉むると共に、組合所屬勞働者の組合所屬外の勞働者と同一の場所に於て、勞働することを禁止し、自然事業主をして組合に就てのみ勞働者の供給を求めざる可からざらしむるの狀勢を釀成するに勉む。標準賃銀と共に、勞働者の生活に取つて重要の關係あるは標準勞働時間其他の問題なれども、其多くは工場法に規定あり、又同法に於て被保護勞働者に就て規定せらるゝ所が壯年勞働者に間接の保護を加ふる爲めに、直接に職工組合の要求たらざる場合ありとす。

要するに職工組合は以上の如き制限的條項を標榜し、又之を實行して以て勞働條件の維持と向上とを期圖するものなり。故に若しも事業主にして或は職工組合の標準賃銀を打破し、理不盡にも從來支拂ひたる賃銀を組合の承諾を經ずして、標準以下に低減し、或は職工組合が標準賃銀上進の要求を爲したるに對して之を拒絕し、或は職工組合に屬せざる勞働者を雇入れて組合所屬の勞働者と共に、仕事に就かしめ、其他勞働條件の維持向上に不利なる所業を試み、當然勞働契約に違背するの行爲に出でたりとせんか、職工組合の業務執行委員會は一應の抗議を傭者に試み、其承認せられざる場合には、號令一下組合に屬する勞働者は同盟して罷業し、斯くて傭者の反省を求むる一方に、組合は斯く組合の決議を奉じて、罷業を決行したる罷業者の爲めに、所謂紛議惠與金なるものを給與して、以て罷業中の生活を扶助し、罷業に對して彼等の堪へ得る實力を豐富にし、最後の勝利を博せしむるに勉むるを常とす。

茲に於てか、論者或は如上の事實を捉へ、職工組合を以て、一圖に同盟罷業を誘發するの具なりとして之に反對するものゝ如し。現に我國に於て職工組合の組織に反對あるは此點に關聯する物ゝ少なからざるや論を俟たずと雖も、斯る所說の如き要するに一を知つて、二を知らざる者の言に過ざるなり。蓋し職工組合所屬の勞働者が同盟罷業を企つるや、事情を具して組合の業務執行委員會に報告し、其認可を經て然る後に之を決行するものなり。隨て業務執行委員會が同盟罷業の申請に認可を與へんとするや、先づ勞働者の陳情、傭者の態度、勞働市場に於ける四圍の狀況を酌量して、以て意見を決定せんとす。卽ち勞働者の要求に道理あり。同盟罷業を賭して、傭者に其實行を迫らんか、傭者に於て之を承認する狀況の略ぼ明なる場合に於て之を許可し、然らざる場合には、之を許可せず。組合の業務執行委員が斯く同盟罷業の許否に對して愼重なる態度を持する所以のものたる、一旦同盟罷業を認可したる曉には、罷業中罷業者に對して、規定の紛議惠與金を給與するの責任あり、而して此惠與金支出の財源たる組合の基金は組合員より每週零碎の醵金を徵收して、累積したるものに係り、組合員の膏血にも比す可く、成否の不確實なる罷業に費消するを許さゞるの事情あるを以てなり。果して然らば職工組合の起れる故を以て、直に同盟罷業の流行を見る可しとするが如き、極めて輕卒の判斷なりとす可く、寧ろ或る場合には罷業の起ることを掣肘するの事情ある可きなり。

職工組合あるが故に、同盟罷業の頻發を見るとするは事實に於て誤まれり。而して組合の組織なきも、同盟罷業の起るもの

多きは、我國の事實に徴して、疑を容れず。唯職工組合の下に同盟罷業の行はるゝ場合と斯る組織なきときに、同盟罷業の行はるゝ場合とを比較するに、其間に重大なる相違あり。前者に於ては、同盟罷業は業務執行委員に統率せられ、或る規律の下に行はれて、罷業の目的を達するに必要なる手段以外に常軌を逸することなきに反し、後者に於ては同盟罷業を指導し、指揮する何等の勢力を存せず、罷業は烏合の衆に依て行はれ、勢の激する所、或は資本家の生命財産に危害を加へ、或は罷業中罷業者の生活を扶助する何等の施設なき爲めに、罷業者は早く事端を收むるの必要ありとし如何なる過激の行動も之を爲すを辭せず、往年足尾銅山に起れる坑夫の大罷業の如き、九州各地方の炭坑に起れる罷業の如き、將た又昨年の米價騰貴に際して、各地方を襲ひたる騷動の如き、規律なき勞働運動の如何に恐る可きものなるやを證明するの資料とす可きなり。

治安警察法第十七條

故に吾輩は以上の見地に基き、從來我國に職工組合の組織せらるゝを以て、勞働問題解決の最良手段なることを信じて、之を江湖に推稱し、一方に職工組合の發生する以上は、組合が鬪爭的職分を盡し、勞働條件を維持向上する爲に、時に同盟罷業を試みるの然る可きことを確信して已まざるものなり。然るに我國現行の法制に於ては、職工組合の組織を困難にし、又其組織後に於ける運動を不可能ならしむる規定の儼乎たるものあり。治安警察法第十七條の規定は卽ち是れにして、今其全文を引抄すれば左の如し。

左ノ各號ノ目的ヲ以テ他人ニ對シテ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀シ又ハ第二號ノ目的ヲ以テ他人ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ス

一 勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ協同ノ行動ヲ爲スヘキ團結ニ加入セシメ又ハ其加入ヲ妨クルコト

二 同盟解雇若ハ同盟罷業ヲ遂行スルカ爲メ使用者ヲシテ勞務者ヲ解雇セシメ若ハ勞務ニ從事スルノ申込ヲ拒絕セシメ又ハ勞務者ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ若ハ勞務者トシテ雇傭スルノ申込ヲ拒絕セシムルコト

三 勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ相手方ノ承諾ヲ强ユルコト

更に同法の第三十條は第十七條の規定に違背したる者に加ふ可き制裁に就て左の如く規定したり

第十七條ニ違背シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓ノ罰金ヲ附加ス使用者ノ同盟解雇又ハ勞務者ノ同盟罷業ニ加盟セサル者ニ對シテ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀スル者亦同シ

卒然として前二條の規定を讀過せんか、特に異とす可きものなく、世間の資本家の如き、是等の規定あるが故に、自家の事業の經營は安全にして資本の運用も確實なるものと考ふ可しと雖も、吾輩を以て見れば如上の規定は我國に於て勞働運動の誠實に行はるゝ機運を阻害するの甚だしきを認めざるを得ず。蓋し勞働者が同盟して罷業するや、之に成功して、勞働條件改善の目的を到達するに最も必要なる條件は一工場又は一事業主の下に勞働する勞働者の全部が固く團結して、整然たる行動に出づるの一事にして、若しも勞働者にして當初より同盟に加入せざる者あり、又加盟するも後に離反して復業する者あらんか、事業主は斯る缺陷に乘じて、罷業計畫を覆すの策を講じ、罷業をして水泡に歸せしめ、單に若干名の犧牲を生ずるに終らしめざるを得ず。職工組合の統率に依て、同盟罷業の行はるゝや、組合所屬の勞働者は平常より訓練あり、規律ある行動に服し、且つ組合の決議に違背して、組合を除名せられんか、組合の基金に對する自己の權利を喪失するの損害あるを以て、組合の意思は彼等の意思と爲り、罷業を決行するに當り、一の勞働者が他の勞働者に暴行脅迫を加へて、後者の意思を左右せんとするが如き、非行の行はるゝを見ず。然るに職工組合の存せざるか、又之を存するも、其勢力の微弱なる場合に、勞働者が同盟罷業を行ひ、同一場所に勞働する者の大多數を糾合して、傭者に對する一勢力を築き、以て主張を貫徹せんとするも、事固より容易ならず。之を成就するに就ては種々の手段を取る可く、而して其手段として他の勞働者に對して暴行脅迫を試み又は公然誹毀し、或は事業主の承諾を強要する爲に、同樣の所業に出づることある可し。社會の秩序を尊重する以上は、國家は法律を以て、勞働者の斯る所業に出づることを禁止せざる可からず。蓋し暴行脅迫に依て、同盟罷業に加盟するを欲せざる者を之に加盟せしむるが如き、人の自由を傷くるの甚だしきものなるを以てなり。英國現行の徒黨並に財產保護法が暴行脅迫其他勞働運動に於て、他人の自由を侵害するの恐ある行爲を禁止する事に依て、勞働するの自由を保護するの効果を收めつゝあるの一事は我國民の參考とす可き所なり。

然るに現行治安警察法が更に一歩を進め、同盟罷業を行ふ場合に、勞働者が他の勞働者を誘惑煽動することを禁止し、違反者に臨むに、刑罰を以てするが如き、酷法の甚だしきものとせざる可からず。蓋し多數の勞働者が事業主の課する勞働條件に滿足する能はず、之を改善するの點に就ては、盡く意嚮相一致し、又改善條件の採用せられざる場合には、同盟罷業を以て、之に當るの意見を各自の腹中に藏すると雖も、多人數の集會する席

上に於て、能く衆議を統一して、各自の嚮背を決するには、出席者中、相當の知識あり、又辯才ある者が衆人の間に斡旋し、或る者を說得し又或る者を激勵するは、此種の運動を起すに當つて當然の行爲とす可く、而して斯る行動の目的は勞働條件の改善に存し、勞働條件の改善は勞働者をして自家の勞働力に相當する報酬を獲得せしむる所以なりとすれば、治安警察法が如上の罰則を以て、如上の所業を爲したる者を威迫するは勞働者に取つて最も不公正なる處置なりとせざる可からず。即ち我國に於ては若干名の繩付きの輩出することを覺悟せざれば、同盟罷業を行ふ能はず、同盟罷業には必ず犯罪者の伴ふに至るが如き、畢竟上記酷法の然らしむる所にして、勞働運動の必要なる以上は、治安警察法第十七條の改正は遂に已を得ざる所に屬すとす可く、而して暴行脅迫に對しては、刑法の正條を以て、處罰するを得る以上は、治安警察法第十七條は全然之を削除するの正當なるを認む可きなり。

余が治安警察法第十七條の規定の我國勞働運動を妨害することの甚だしきを認め、其撤廢を主張したるは、實に明治四十四五年の頃なりき。（當時博文館の發行したる雜誌地球に掲載し、後に「經濟財政橫議」と題する論文集を發刊するや、其内に編纂したり）即ち我國の治安警察法と英國往年の結社禁止法とを比較し、前者の不條理の後者に讓らざることを論斷したるが、深く世人の注意を惹かずして已めり、偶々十年後の今日に至り、第十七條廢止論が殆ど民間の輿論たるの趣を示し、政府の頑冥なる思想と闘ひつゝあるは、余の欣懷とする所なり。

同盟罷業は罪惡なりや

同盟罷業を罪惡視するは、從來我國に於て最も廣く國民間に行はれたる一の思想なりき。人は一日の勞働に依て、其日の生活に必要なる糧を求む可く、一日の勞働を休止して、尙ほ其日の糧を欲するときは、結局他人の寄與に待たざる可からず。此事たる、嚴格なる道德を以て律するときは、一個の罪惡たらざるを得ざるが如しと雖も、今日の如く勞働者が職工組合を組織し、罷業中組合より惠與金を領收して衣食する場合には、自ら此種の非難は之を避くるを得べし。蓋し組合が惠與金支辨の財源とする基金は平生勞働者自ら應分の醵金を爲して、蓄積したるものなるが故に、之に依賴して生活するは、恰も自己の過去に於ける勞働に依て現在の生活を營むと同じく、何等道德上に於て、責む可きの理由なければなり。

元來人が勞働するや、勞働せざるやは、其人の自由意思に依て、之を決定す可く、勞働するの自由と勞働せざるの自由とは共に人に屬す可きものなり。勞働せざるの自由ありて、人は始

めて休憩修養娯樂に時間を供して、身心の愉快を覺ゆるを得べし。旣に一人に此自由ありとすれば、他の數十人數百人數千人にも亦同樣の自由ある可く、同盟罷業なるものは要するに一人の有する勞働せざる自由を他の數十、數百、數千人が同時に發揮したるものに外ならず。一人が爲して何等罪惡たらざる事が數十、數百、數千人と共に爲したる場合に、何故に罪惡と爲るものなるや、此理由の說明せられざる限り、同盟罷業其ものを以て、直に罪惡視するは、當れりとする能はざるなり。同盟罷業が一種の罪惡と爲り、國法上の取締を必要とするは　罷業其ものを罪惡とするが故に非ず、罷業者が罷業の行はるゝことを容易ならしむる爲めに、罷業の意思なき勞働者に罷業加盟を强要し、之に强行脅迫を加へて、其自由を傷け、或は事業主の有する財產に危害を加へて、其屈從を促す等社會の秩序安寧と兩立せざる行爲に出づるが故なり。職工組合に統率せられて、勞働者が同盟罷業を試み、規律に服し、節制を守りて、行動するに於ては、何等之を罪する理由あるを知らず。社會的生活の複雜なる今日、斯る罷業が頻發して、國民に意外の迷惑を及ぼすの恐ある場合には、同盟罷業其ものを法律の威力又は官憲の抑壓を以て根絕せず、一方に勞働者の要求の正當なるものを容るゝと共に、他の一方には資本家の利害をも傷けざる制度を定めて、以て同盟罷業を未然に防止す可きのみ。其方法の何ものたるやに就ては、後段に論述する所ある可し。

同盟罷業に關聯して、研究を要するは、所謂同情的同盟罷業の問題是れなり。例へば英國に於て數年前より炭坑夫、運搬業の現業員並に鐵道業の現業員等の組織せる各職工組合の間に一の契約締結せられ、是等三組合中の一組合所屬勞働者が同盟罷業を行ひたるときは、他の二組合所屬の勞働者も亦同時に罷業を行ふ可きこととしたり。蓋し後者は勞働條件に就て、傭者に對して何等の不平を懷くに非ず、又何等の不滿をも感ずるに非ず、唯前者の同盟罷業に於て、充分に勞働者の威力を發揮して、其勝利に歸せしむるの趣意を以て斯る行動に出づるものなり。假に今日の國民生活に於て、石炭の發掘中止せられて、供給高減少し、鐵道は其運輸を停止して、全然用を爲さず、運搬夫は市中に如何なる貨物の堆積するも、之を運送せずとすれば、國民が生活上に大なる不安を感じ著しき困難を覺ゆるは勿論にして、自然罷業の解決を速ならしむることに努力するに至る可く、少なくとも傭者を脅迫して罷業者の要求を貫徹せしむることゝ爲る可し。即ち同情的同盟罷業なるものは、一の場所に於て、又一の事業に於て起れる同盟罷業を援助するの目的を以て、他の場所並に他の事業に於て行はるゝものにして、斯る形式の罷

にして盛に行はれんか、恰も「サンヂカリズム」の主張に係る總同盟罷業の實現すると擇ぶ所あるを知らず。世人が同情的同盟罷業に對して安んずる能はざるもの亦偶然に非ざるなり。

吾輩は固より同情的同盟罷業に對して贊意を表するものに非ず、斯る運動の風潮の勞働者階級に起らんとするに先だちて、之を緩和し、又之を回避する政策を講ずるの必要を信ずるものなれども、同情的同盟罷業の行はるゝに就ては、道理の認む可きものなしとせず。例へば或る一事業に於て、勞働者が同盟罷業を起して、勞働條件の改善を傭者に求めたる場合に、罷業者の勝利に歸したりとせんか、一の事業に於て勞働條件の改善せられたることは他の諸事業殊に右の一事業と密接の關係を有する諸事業に於ける勞働條件に影響を及ぼし、結局之を罷業の結果として改善せられたる條件に接近せしむることゝ爲る可し。果して然らば是等の事業に於ける勞働者は、一の事業に於ける勞働者が大なる危險を賭して行ひたる同盟罷業の利益に浴し、而して之に對して自ら何等の犧牲を荷はざるものと云ふ可し。斯の如きは勞働者なる同一階級に屬し、同一の利害關係に支配せらるゝ者の間に於て、互に情誼を盡したるものとす可からず。情誼の關係は姑く措き、純然たる利害の點より考ふるに、一の事業に起れる同盟罷業を成功せしめて、勞働條件の改善を促すときは、他の事業に於ける勞働者は自ら之を標準として、條件の改善を傭者に求む可く、傭者亦他の事業との關係上、之を容るゝに吝なる能はざるなり。即ち一の事業に同盟罷業の起るは、他の數多の事業に同一の爭議の起るを豫防するの効果ある可く、斯く罷業に依て、他に利益を收むる者ある以上は、是等が同情的同盟罷業の態度を持して、一の罷業をして成効するに至らしむる手段を施すも亦徒に好事者の社會を攪亂する行爲なりとする能はざるなり。

仲裁制度

吾輩は一部の論者と立脚地を異にし、同盟罷業を蛇蝎視するものに非ず、或る場合には同盟罷業の行はるゝことに依て、當該事業に於ては勿論他の諸事業に於ける勞働條件を公正にし、勞働者をして之に滿足して、勞働せしむるに至るの効果を認むるものなれども、一方より之を考ふるに、斯る同盟罷業と云ふが如き勞働爭議に接せずして尙ほ能く勞働條件を改善するを得るの手段なきか。若しも斯る手段ありとすれば、勞働爭議を未然に防ぎつゝ、尙ほ資本家勞働者の兩者を滿足せしむるを得る勞働條件の下に、彼等をして産業に從はしむるを得るの道理なり。此目的を以て歐米諸國加奈陀濠洲等の殖民地が案出して、現に實行しつゝあるは、和解並に仲裁制度是れなり、和解制度

と稱するは、國家監督の下に、和解機關を設立し、勞働契約の實行に就て、傭者勞働者の一方又は双方に異議の起れる場合に、當事者の一方又は双方は事情を具して、和解機關の決定を仰ぐ可く、和解機關に事件を申請したる以上は、傭者は勞働者に對して、同盟解雇を爲す可からざると共に、勞働者亦傭者に對して同盟罷業を爲す可からず、斯くて勞働上の爭議を同盟罷業若しくは解雇に伴はしめずして、解決せんとするもの、和解制度の主眼とする所なり。

然れども一個の和解制度たるに止まる以上は、和解機關の下したる決定に對して、當事者が服從するや、又は拒絶するやは其自由に屬す可く、之を拒絶したる場合には、和解機關の爲したる所は徒勞に屬せざるを得ず。玆に於てか和解制度をして有効のものたらしめんとするには、和解制度の背後に仲裁々判制度ありて、和解機關の決定に承服せざる當事者をして直に仲裁裁判の決定を仰ぐの方法に出でしめざる可からず。固より仲裁裁判所は和解機關を經由せずして、直に同裁判所に申請し來る事件に對しても之を受理す可く、孰れの場合に於ても、(一)仲裁裁判所の下したる決定は一定の期間効力を有し、(二)當事者が此決定に違背したるときには、相當の刑罰を課し、(三)當事者の一方又は双方は總て勞働條件に關する爭議に就て、其決定を仲裁々判所に申請するを得べく、而してこそを申請したる以上は同盟解雇若しくは同盟罷業の如き手段に出づ可からずとするの諸點は實に仲裁制度の骨子を以て見る可きものとす。而して當事者をして必ず爭議事件の決定を仲裁々判所に仰がしむるは強制仲裁にして、之を仰ぐことを當事者の任意とするは任意仲裁の制度なり。強制仲裁制度は千八百九十四年新西蘭に端を發して、他の濠洲殖民地に及び、加奈陀も亦千九百七年工業爭議審査法を以て、類似の制度を採用し、英國亦千九百十五年六月歐洲戰時に際し、軍需品製造の急を要し、隨て軍需品製造工場に勞働爭議の發生することを防止する爲めに、軍需品法と稱する法律を制定し、其第一編第一條乃至第三條に於て、強制仲裁の制度を實行する爲め、(一)傭者と勞働者との間に、或は勞働者の階級間に、或る爭議起り、而して此爭議が關係當事者又は其代表者に依て、現に存する協定の下に解決せられざるときは、當事者の一方は直に事件を商務院に報告す可く、商務院の下したる決定は兩當事者を拘束し、且つ其の效力を既往に遡及せしむるを得べく、決定に違背したる者は之れを有罪とし、(二)以上の爭議が商務院に報告せられ、報告後二十一日を經過して、尙ほ商務院が解決を下さゞる場合の外、傭者は同盟解雇を、勞働者は同盟罷業を行ふ可からず、之れを犯したる者は有罪とするの

規定を設けて、以て同盟罷業を未然に防止するの政策を講じたり。

故に仲裁制度殊に強制仲裁制度にして、運用宜しきを得るときは、同盟罷業の發生を豫防するを得べく、新西蘭が一時同盟罷業なき國土と稱せられたるもの亦偶然に非ず。故に於てか我國一部の論者は我國にも此制度を誘導して、以て將來に殺到せんとする勞働爭議に備ふるの意見を公にしつゝあれども、余は直に此說に贊成する能はず。仲裁制度を必要とし、又其價値の大なるを信ずるの點に於て、余は敢て人後に居らざるものなれども、我國今日の狀況を以て考ふるときは、仲裁制度は、我國に於て完全なる運用を爲す能はず。之を爲さしめんとするには、仲裁機關の設立前に爲す可きものあることを知らざる可からず。蓋し仲裁機關をして完全なる運用を致さしむるには、仲裁々判の下したる決定に對して、資本家勞働者双方が本心より之を尊重して、其遵奉に誠意を表す可きは勿論直接に仲裁々判に決定を仰がざる事業に於ても、一の事業に下されたる決定の精神を體得して、以て勞働條件を改善するの方針に出づるを必要とす。仲裁々判の決定をして斯る權威あり、又斯く一般の信賴を博するに値するものたらしむるには、其決定に干與する審判者が國家資本家勞働者の三方面より選出せられ、公平對等に各自の利害を代表し、又之を擁護するものなるを必要とするや論を俟たず。假に審判員が政府の官吏並に資本家代表者を以て、任選せられたりとせんか、彼等が如何に公平無私全局の利害に着眼して、決定を下すとするも、勞働者が多少の猜疑心を以て、之に臨むは免かれ難き所なり。況や政府並に資本家の間に金權を尊重する思想の存する場合に於てをや。新西蘭の仲裁々判所が高等法院判事の資格を有する者を裁判長とし、二名の審判員は傭者並に勞働者の組合員より各一名を選擧し、總督の任命を經て就職することゝしたるが如き、又加奈陀の工業爭議調査局が三名の委員に依て組織せられ、其一名は爭議に關係ある傭者の推薦に依り、一名は被傭者の推薦に依り、勞働事務局長官之を任命し、他の一名は上記二名の委員の推薦に依り、長官之を任命するの規定なるが如き、要するに各方面の當事者の利害を代表するに遺漏なからしめ、勞働者をして仲裁々判の決定に服從するに誠心を以てせしむるの趣意に基くことを認めざる可からず。斯の如くにして仲裁々判の制度は其眼目とする所に適ひたりとす可きなり。

然らば今假に我國が仲裁制度を組織するものとして、其要項の一たる勞働者代表の審判員は如何なる方法に依り、又如何なる方面に之を求む可きやと云へば、勞働者團體の存在せざる我

國に於ては、殆ど其方法に窮せざるを得ず。而して世人も亦仲裁制度と云へば、單に官吏と資本家と相集まりて、彼等の認めて勞働者に有利なる可しと假想する條件を決定し、一種の威力を藉りて、之を勞働者に强制するの外に、大なる意義なしとするもの丶如し。斯る仲裁々判制度ならんか、其名あつて、寔も其實を有せざるものにして、徒に官僚資本家を驅つて、勞働問題に干與せしめ、其解決を紛糾せしむるに終るや、知る可きのみ。斯る制度ならんか、余は寧ろ其存在せざる今日を以て勝れりとせざる能はず。即ち勞働者の利害を代表す可き審判員を選出する勞働者團體を有せざる我國に於て、仲裁制度を設けんか、如上の缺點を暴露するに至るは、當然の數にして、資本家專制の時代より職工組合の組織に移り、資本家と勞働者との對立する時代を經て、更に資本家と勞働者と相協定する時代に進む可き順序段階を蹂躪し、第一の段階より一躍第三の段階に進まんとするものに外ならず。保守的論者の間に斯る急進突飛の議論を爲す者あるは、要するに彼等の無識之を然らしむるものに外ならざるなり。

英國の勞働取引所即ち職業紹介所は千九百十年以來倫敦市以下各地に開設せられたり。當時余は偶々倫敦市に客寓し、親しく紹介所を視察したり。其際取引所は何れも假建築にして、建物什器共に粗末なるに拘らず、必ず會議室の備あり、時に會議の開かる丶狀を目擊したるが、商務院官吏、紹介所主事の外に、紹介所々在地方の傭者並に勞働者の代表者之に參加し、婦人勞働者の多數を占むる地方に於ては其代表者亦之に加はり、紹介所の事務執行に就て、萬般の協議を致すの仕組なり。余は之に對して斯くありてこそ、英國の產業的民主政治の面目發揮せらる丶ものなりとしたり。我國に於て今後勞働問題の解決を進むるに當り、能く勞働者に斯る地位を與ふるを得るや否や、一個の問題なりとす。

近頃官僚と資本家と相謀りて、信愛協會なるものを組織し、資本勞働の調和を求むる諸方策を行ひ、其一端として協會自ら勞働爭議に對する仲裁を掌らんとするの計畫あり。然も協會は其評議員として少數の勞働者を擧ぐるの外に、何等勞働者と關係するものなしと云ふ。斯の如くして協會が能く爭議を根本的に解決し、又勞働者の滿足を博するに足る決定を爲すを得るは困難にして、稀に之を爲すことありとするも、多くは勞働者に依て、一種の色眼鏡を透して、眺めらる丶に終らんのみ。斯る眞似事の如き勞働問題の解決法は春日無事の日に於てこそ、之を弄ぶの餘裕あれ、其急を要する今日に於て、適切なりと云ふ可からざるなり。

最低賃銀公定制度

巴里講和會議に於て議決せられたる國際間の勞働改善原則に據れば、第三項に於て「勞務者に對し、其時及び國に於て適當なりと諒解せらるゝ生活の標準程度を維持するに足る可き賃銀を支拂ふ可きこと」を規定したり。我國にして既に此改善原則を承認したる以上は、如何なる形態に於て、之を實行せんとするや。從來我國に於て、勞働者の賃銀の決定せらるゝや、一に需要供給の關係に依り、商工業の好景氣にして、勞働者の供給不足するときは、賃銀亦法外に上進すれども、不景氣の場合には、低落して殆ど際限なきのみならず、下等の職業、熟練を要せざる職業、婦人の賃仕事の如きに至つては、彼等の生活程度の低きに伴つて、賃銀は極めて低廉なる點まで低落す可く、賃銀の低廉なることは益々彼等を驅つて、劣等なる生活を營ましむるの因果關係を生ず可し。職工組合は前論の如く、組合自ら標準賃銀の制度を定め、組合員をして必ず此賃銀を收めしめ、又傭者をして之を支拂はしむることを強要するが故に、組合の勢力發達するに隨ひ、組合員の生活程度を上進するに至らしむるの効果ありと雖も、元來組合は組合員の加入に就て、嚴重なる制限を施し、標準賃銀を要求するに値する能力を有する勞働者に非ざれば、之に加入せしめざるが故に、組合の標準賃銀が如何なる程度まで、高きに至れりとするも、當初より組合に加入するを得ざる者は其恩惠に浴する能はず。斯くて組合に屬する勞働者は一國勞働者の階級に於て、獨り貴族的地位を占め、所屬外の勞働者は之に比較して、劣等の地位に安んぜざるを得ず。職工組合の種類を多様にし、所謂一般勞働者の爲めにも組合を組織するの計畫行はれつゝありと雖、一般勞働者殊に不熟練勞働者、婦人勞働者、內職就業者の如きは、組合の下に他の勞働者と相會合して、自家の利益を保護する協議を爲すの時間知識を有せず、又組合の維持に必要なる醵金を負擔するに就ても、大なる苦痛を感ずるを以て、結局彼等は職工組合の利益に均霑する能はず、又新に組合を組織して自家の地歩を築く能はず、自由競爭の下に、事業主の苛酷なる取扱に甘んぜざるを得ざるなり。

英米諸國に「スエッチング」又は「スエッテッド・インダストリース」なる語あり。勞働者が事業主に壓迫せられ、低廉なる賃銀の下に、非衛生の場所に於て、長時間勞働するは、卽ち此スエッチングに相當するものにして、殊に內職就業者に此種の弊害を生ずること多し。國家にして斯る弊害を看過せんか、國民の一部に劣等の生活を營む者あるの結果として、一般賃銀率の上進せんとする勢を妨げ、社會一般の生活狀態を不良にし、種々の立法行政に依り、將た又職工組合の自治的努力に依て、勞

家狀態を改善せんとする效果を沒却するに至らざるを得ず。卽ち自治的能力あり、又團結の便宜ある勞働者卽ち職工組合を組織し、又之に加入するを得る勞働者に對しては、專ら其自治の力に依て、勞働條件を改善せしむるの方針に出づると雖も、此能力を有せざる勞働者に對しては、國家自ら賃銀公定の手段を施し、以て彼等の勞働條件を確保せざる可からず。但し事業に種々の別あると共に、事業の行はるゝ時期に就ても、景氣の良否あるを以て、一の事業に對して、一律に賃銀を定め、之を其最低限度に充つるときは、實際の事情に照して、調和の宜しきを得ざる嫌あり。隨て法律を以て賃銀率の不當に低くして、弊害の著しきを認むる事業を指定し、斯く指定せられたる事業に於ては、傭者並に勞働者より同數の代表者を選出し、之に政府の任命したる委員を加へて、最低賃銀裁定局を組織し、同局に於て其事業に適用せらる可き賃銀率を公定し、傭者にして公定率以下の賃銀を勞働者に支拂ひたるときには之に罰金を課することゝすれば、時の事情に適應したる賃銀の公定を期するを得べし。此制度は千八百九十六年始めてヴヰクトリヤ州に於て行はれて、漸次他の州に及び、千九百九年英國も亦殖民地の制度を參酌し、本國に於て勞働條件の極めて不良なる四種の事業を選んで賃銀公定の制度を實行し、北米合衆國に於ても、マッサチュセッツ州は千九百十二年を以て、加利福尼、コロラド、ミンネソタ、ネブラスカ、オレゴン、ウータ、華聖頓、ウヰスコンシンの八州は千九百十三年を以て、アーカンサス、カンサスの二州は千九百十五年を以て、最低賃銀公定制度を採用したり。

最低賃銀の公定と稱するは、大凡そ右の如くにして、諸外國に於て今や社會に於ける重要の一制度として、國民生活をして或る程度以下に墜落することなからしむるの保障たる用を致しつゝあり。文明諸國に於ては斯る立法は何等新規のものを以て目す可からず。此巴里講和會議に於ける勞働改善原則の一項に擧げられたるもの、固より異とするに足らずと雖も、我國の如き從來全く最低賃銀制度に關する觀念を缺き、賃銀は自由競爭の下に、其決定せらるゝ儘に委し、寧ろ賃銀の低廉なるは生產費を節約する所以なりとして、其低からんことを望み、又之を低くすることを求めたる國に於て、卒然文明諸國と共に、最低賃銀公定制度を實施するは、其如何なる形態を以てするを問はず、極めて困難なりと云ふ可く、余は此點に就き深き興味を以て、我國に於て將來如何なる發展を爲す可きやを觀察せんとするものなり。

失業問題

失業と稱するは、人が勞働する意思を有するに拘はらず、此

勞働力を用ゆるに足る仕事を得ざる狀態なり。天が人に手足を授くるや、其裝飾物たらしむるが爲めに非ず、之を自由に活用して、社會に有用なる勤勞に當らしめんが爲めなり。人にして勞働の意思なく、隨て何等の職業にも就かざるものとすれば、是れ失業者に非ずして、一個の懶惰者なり。懶惰者を矯正するは經濟上の問題たる領域を逸し、寧ろ倫理道德の問題に關係するを以て、本論に於て之に觸接せざる可し。唯勞働の意思ありて職業を得ざる者は失業者として、經濟上の見地より、其取扱を研究するを得べし。

今や失業は歐洲諸國並に合衆國に於て、當面の一問題たらんとす。蓋し是等の諸國に於ては戰時多數の兵員を勞働市場より徵募して、之を戰場に送致し、一方に斯る兵員の徵募と軍需品製造業の規模擴張とに依て生じたる勞働者の不足は專ら婦人小兒の勞働力を以て、之を補充したり。然るに休戰條約既に成立し、講和條約も亦近く締結せられんとす。講和成立の後に於て出征兵卒が內地に歸還して、職業を求むる一方に、軍需品製造業は製品に對する需要を失ひて、規模を減縮し、自ら從業者を解雇し、其多數も亦勞働市場に於て、職業に就かんとすれば、玆に多數の失業者の輩出するを免かれず。獨露兩國の人民が過激思想に左右せられて、社會的生活に崩壞を來したる今日、英佛米の諸國亦失業者の同一思想に感染する爲めに、社會上に混亂を生ずることなきを得るや、如何なる方策に依て、斯る兆候の現出したる場合に、之を刈除す可きやは當今諸國の識者の憂慮措く能はざる問題なり。

我國現下の狀勢に就て判斷せんか、假令ひ西比利亞出征の兵卒が如何に露國民又は兵卒を通じて、過激思想を傳へらるゝも、又內國に於て米價が如何に騰貴して、國民の生活を脅威し、中流以下の國民をして富豪資本家を憎惡するの念を懷くに至らしむるも、國民の多數が過激思想に感染して、社會の秩序を紊亂するの恐なきは、余の大に慶幸とする所なれども、失業問題に至つては、歐米諸國に於けると同じく、我國に襲來し、世人をして其解決難を嘆ぜざるを得ざらしむるものある可し。固より我國は今回の戰爭に依て、休戰又は講和成立後特に內地に歸還する兵卒なきを以て、除隊兵の處置に就て、意を勞するを要せずと雖も、一方に戰時繁昌したる經濟社會に不景氣風の吹き來ることあらんか、實に繁昌を極めたる諸種の事業中、或は其規模を縮小するものある可く、或は全然事業を休止し、續いて倒壞の運命を免かれざるものある可し。現に休戰以來染料、藥品、鐵の價格低落し、傭船料亦下落したる結果、各種の事業が反動的趨勢に支配せられつゝあるは、爭ふ可からざる事實なり。唯

今日は諸物價倚ほ高く、一方に外國より物資の輸入せらるゝ望少なきを以て、企業家中新に事業を計畫し、又は舊來の規模を擴張する者あり、一方の事業に於て解雇せられたる勞働者は他方の事業に職業を得て、彼此相償ひ、或る程度まで失業の狀態を緩和しつゝありと雖も、反動的趨勢にして今後漸く濃密と爲らんか、斯る緩漫なる狀態は之を期する能はず、到る所に失業者の簇生することを覺悟せざる可からず。然らば社會生活狀態の平靜を求むる爲め、失業が著しき程度に起れる場合には、國家に於て之に處するの覺悟を要するや論を俟たざるなり。

失業者にして社會に發生するときは、社會生活上に將た又經濟上に生ずる損害の大なるものあり。第一勞働者が自家の勞働力を應用する場所を得ざるは、一國の生產力を減損する所以なりとす可く、第二失業の期間永きに及ぶときは、如何なる勞働者も多年の修練に依て、修得したる勞働上の技藝を忘却し、他日復業の際に、以前と同一程度の能率を發揮するを得ざるに至る可く、第三失業者が失業の苦痛に堪へずして、如何に低廉なる賃銀にも滿足して、勞働せんとするに至るや、傭者は斯る賃銀を以て、勞働を欲する者あることを理由として、一般勞働者の賃銀を低減せんとす可く、斯く勞働者をして一般勞働條件の標準を維持するに大なる困難を感ぜざるを得ざらしむ可し。

勞働者の團結鞏固にして、職工組合の組織亦發達したる國に於ては、失業問題も或る程度まで勞働者の自治に依て、之を解決するを得べし。卽ち組合員中に失業したる者あり、而して其失業が本人の酔酊其他の非行過失に基かざる以上は、組合は一方に失業者に對して失業惠與金を交付して、其生活を扶助すると共に、組合の本支部は協力して、失業者の爲めに適當なる職業を捜索して、之に就かしむることに努力す可し。蓋し永く組合員が失業の狀態に居り、組合より失業惠與金を交付するは、組合の會計に取つて、大なる負擔たらざるを得ざるのみならず、失業者の存在が勞働條件の維持を困難ならしむること前記の如く、失業者に職業を與へて之を助くるは、職工組合自ら助くるの道なればなり。若し夫れ失業者の簇生する勢甚だ盛にして、職工組合の基金のみを以て、之に當るに困難なる事情あり、而して失業者を救濟することが社會の公益を維持するに必要なりとせんか、政府は宜しく職工組合に補助金を給與し、其失業惠與金として支辨するを得る資金を豐富にし、此惠與金支辨の爲めに、組合をして破產の狀態に陷らしめざるの用意を講ずれば可なりとす。歐洲開戰當時英國に於て勞働市場の混亂したる場合に、政府は勞働者救濟の目的を以て、種々の應急的施設を爲したるが、其中に一國民保險法第百六條の規定を修正し、從來

職工組合が組合員に交付したる失業惠與金は六分の一を超へさる範圍内に於て、政府より賠還したるが、今後組合が就業中の組合員より毎週二片の割合を以て醵金を增徴するときは、右賠還率を惠與金支拂高の三分の一に引上ぐること」とするの一項あるが如き、職工組合を通じて最も簡單に失業問題を解決する方法なりとす可し。

然も職工組合の現存せざる我國に於ては、斯る簡單なる方法を以て失業問題に臨む能はず、勞他に解決の方便を求めざる可からず。其政策として重要なるものゝみを數ふるも左の數項を列擧するを得べし。

第一、官設工場に於ては、事業進行の程度を急速にし、又政府が請負業者に命じて、着手せしめつゝある工事は或る程度まで其竣成期間を短縮すること。

第二、政府自ら國費を以て、大規模の職業紹介所を設立し、本部を東京に、支部を工業の隆盛なる諸地方に置き、本支部の間に、將た又官立紹介所と公私立紹介所との間に聯絡を通じて、廣く全國に於ける勞働の移動を計畫すること。

第三、職業紹介所の紹介に依り、勞働者が就職の目的を以て一の地方より他の地方に移住する場合には、官設鐵道並に國家保護の下に居る汽船會社は其運賃を減免す可く、時に失業者の現に住居する地方の紹介所は他地方に移住せんとする失業者に旅費を貸與し、就業地の紹介所をして漸次之を徴收せしむるの便法を講ずること。

第四、事業主が失業者救濟の目的を以て、或る施設を爲したるとき、例へば操業を短縮して、多數の從業者に仕事を與へ、失業者に手當金を給與し、相當の豫告を與へて、解雇したる等の場合には、爲めに生じたる費用の一部を國家に於て給與すること。

以上の諸策は我國に於て殊に職工組合の存立せざる今日の狀態に於て、失業問題解決法として、最も急施を要するものなり。然も政府は如何なる程度まで是等諸策を實行せんとするものなりや、抑も亦失業問題に對して如何なる意見を持しつゝありや、官僚傳來の僻見に拘泥して、此の問題の解決を誤まらざるを得るや否や、覺束なき次第なりとす可し。

前論の如く英國には國營の職業紹介所發達し、何人も無手數料にて職業の紹介を依賴するを得べく、紹介所が硝子窓に揭ぐる揭示に依り、某工場に何々の仕事あることを知り、自己の之をれに適することを信ずるや、直ちに紹介所に就て、紹介を求むるを得るの便宜あるに拘はらず、尙ほ國內に浮浪の徒あり、終日公園の芝生に横臥しつゝ、ときに行人に憐みを乞ひ、又た時に

氣の向くに乘じて、雜役に服し、頗る不規律の生活を送るを常とす。斯る浮浪者に對しては其精神肉體を改善し、勞働を樂ましむるに至らしめざる可からず。浮浪者の横行は往々にして失業者を驅つて、此列に投ぜしむる弊害の大なるものあるを免れざるなり。

工場法と國民的最小限度の政策

余は最後の機會まで、工場法に關する議論を留保したるが、工場法は實に今日の勞働者保護法制に於て、其樞軸たり、又其中堅たるの地位を占むるものなり。蓋し英國に於て千八百二年始めて制定せられたる「徒弟の健康道德に關する法律」こそ、工場法の端を發したるものなるが故に、今日の工場法亦少年並に婦人勞働者を被保護人とし、彼等の勞働時間並に勞働狀態に制限を加へ、間接に保護を成年勞働者に及ぼすの方針に出づ。而して工場法に於て、或は勞働時間を限定し、或は夜業を制限し、或は休日休憩の時間並に時日を指定し、或は工場に於て從業者の健康を維持するに足るの設備を必要とするは何故なりやと云へば、要するに國民的最小限度の政策に基くものに外ならざるなり。

國民的最小限度の政策と稱するは、法律を以て、今日の國民が文明國の一員として生存するに値する享樂の最小分量を保證することを期するの趣意なり。工場法に於て勞働者の勞働時間を制限するは、制限以外の時間は之を勞働者の自由意思に依て、享樂修養休憩に利用するに任せ、以て國民的休憩の最小限度を保證せんとするものなり。更に工場法に於て、工場の衞生的設備若しくは危險防護の設備に就て規定するは勞働者をして國民的保健の最小限度を享有せしめ、勞働に就て何等の危害を蒙らしめず、又其健康の維持に障害なからしめんとするものに外ならず。若し夫れ婦人小兒の如き被保護人に對する保護に至つては、國民的營養の最小限度を彼等に保證し、本來脆弱なる彼等の肉體若しくは其發育をして社會の要求する最小限度に達せしめんとするが故なりとす。是等の諸點より觀察する時は、我國現行工場法の如き、不備なるものは世界に其匹を求むるに難く、殆ど工場法の名ありて、其實を備へざるの譏なき能はず。卽ち工場法が其第二條に於て「工業主は十二歲未滿の者をして工場に於て就業せしむることを得ず」と規定したるは、幼年者の工場に使役せらるゝ流弊を杜絶し、一方に彼等に義務敎育を課する趣意を貫徹する所以なるに拘はらず、其但書に於て「本法施行の際十歲以上の者を引續き就業せしむる場合は此限りに非ず」とし、更に行政官廳は輕易なる業務に付き就業に關する條件を付して、十歲以上の者の就業を許可するを得ることゝしたるが故に、工

場法の施行せられたる今日に於ても、尙ほ心身の發育の不充分なる幼年男女の工場に使役せらるゝを見るが如き、工場法が事業主の利益を尊重するに失したる一例とす可し。

工場法第三條に於て「工業主は十五歳未滿の者及び女子をして一日に付き十二時間を超へて、就業せしむることを得ず」と規定したるは、所謂被保護人の勞働時間を制限し、進んで成年男工の勞働時間にも制限を加へ、以て國民的休憩の最小限度を確立するの理由を存するものと認めざる可からず。巴里講和會議の決議したる國際間の勞働改善原則に於ては、一日八時間又は一週四十八時間制度を標準として、其未だ之を實行せざる諸國に及ぼさんとする一方に、英佛米の諸國に於ては、早くも或る種の事業に於て、七時間勞働の制度すら、行はれつゝあるの際に、我國が漸く十二時間を制限とするが如き、如何に彼我の社會狀態に懸隔の存することの大なるやを語るものとす可し。此十二時間制度も直に實行せられ、次第に時間を短縮するの方嚮に向はんか、尙ほ可なりと雖も、第三條第二項に於ては「主務大臣は業務の種類に依り、本法施行後十五年間を限り、前項の就業時間を二時間以內延長することを得」としたるが故に、事實我國に於ける勞働時間は十四時間の永きに及ばざるを得ざるなり。夜業に就ても亦然り。工場法第四條は「工業主は十五歳未滿の者及び女子をして午後十時より午前四時に至る間に於て就業せしむることを得ず」と規定したるに拘はらず、第五條に於て前條の規定を適用せざる三種の場合を擧げて、事實夜業禁止の效力を抹消し、且つ十四歳未滿の者及二十歳未滿の女子を除き、他の勞働者をして工場法施行後十五年間各種の夜業に從事して、勞働せしむるを得るととしたり。其他休日休憩の規定に不備の嫌あるが如き、職工の業務上に於ける負傷疾病幷に死亡に對する扶助法の不完全なるが如き、吾輩の世人と共に、指摘するに難しとせざる所にして、要するに我國の工場法たる、虎を畫いて、猫を得たるの感なき能はず。斯の如きは要するに工場法の制定に際して、資本家が勞働時間の短縮、夜業の制限、幼年職工の使傭に對する制限の爲めに、生產費の加重することを恐れて、百方政府に運動を試み、政府亦金權政治に支配せられ、相率ひて工場法の規定を空漠たるものたらしめ、更に施行命令に依て、一層之を緩和するに至れるの結果に外ならず。工場法は勞働者保護の法典を以て目す可きものなり。此法典の下に、勞働者は如何なる程度幷に種類の保護を國家幷に資本家より受く可きものなるか、國家は自ら勞働者を保護するに、如何なる手段を以てし、又資本家をして如何なる方法を盡さしむ可きやを明にし、彼等の權利と義務とを確定せざる可からず。然るに我

國工場法に於ては、重要なる事項にして、其詳細の規定を勅令又は命令に讓れるもの少なからず。斯の如くして工場法が勞働者保護法の基本たるを得るが如きは至難なりとす。蓋し工場法に附帶する勅令の規定若しくは主務大臣の命令は工場法の適用を左右するを得るは勿論工場法其もの丶効力を抹消し去るを得べく、一方に勅令省令の如きは當局者の意嚮に依て、如何樣にも改廢せられ當業者の運動請託亦時に當局者の意思を左右することある可ければなり。

我國の工業殊に紡績業、織物業、燐寸業等に於て、幼少年幷に婦人勞働者を使傭するもの甚だ多く、斯業の發達が彼等の努力に依ることの少なからざる事實は余の認むる所なり。現行の工場法が前記の如く種々の除外例を設け、又施行猶豫の規定を置き、主要の規定の實行せらる丶時期を十五年の後に延長すると共に、其規定の効力を命令に依て、或る程度まで脫せしむるを得ること丶したるは、畢竟工場法の規定の工業經營の現狀に影響を及ぼすを掛念したるが故なる可しと雖も、近年工場に於ける女子の勞働が其心身を毀傷することの大なるは、明白の事實にして、彼等は何れも健全なる身體を提げて、地方を辭し都會の工場に入りて就業するの常なるに、數年の後には結核其他不治の疾病に罹りて、殘生を犧牲に供する事實の歴然たるものあり。少年の勞働に就て見るも亦然り。少年時に於ける過度の勞働が少年の發育を妨げ身體の一部に畸形的發達を致し、爲めに大都會に於ける壯丁の體格檢査に於て、多數の兵役不合格者を生じて已まざるが如き、動かす可からざる事實なりとす。我國は今日一方に國民教育の制度を布き、全國の國民に普通教育を受くることを强要しながら、工場法に於て、十歲以下の幼年者の就業を認め、法律施行後十五年間十五歲未滿の少年の勞働時間をして十二時間以上に上らしむることを許可し、又一方に徵兵制度の下に於て、體力强健なる壯丁の兵役に就くことを要望しながら、工場法施行後十五年間十四歲以上の少年並に二十歲以上の女子の夜業に就くことを許可したるが如き、立法上の精神に重大なる混亂矛盾の存することを示すものにして、政府は單に工場法の外廓を築きて、其內容を充す可き或るものを有せざりしの觀なしとせず、否工場法の起草立案に干與したる官僚輩は工場立法の精神の何ものるたやを知らずして、斯る喪心的立法を制定したるか、之を知るも資本家輩の俗論若しくは私慾的念慮に制せられたるか、其孰れか一を以て、斯る精神の脫出したる法律の制定せられたる理由なりとせざる可からず。彼の某々資本家の輩が勞働條件の改善に依て、勞働能率の上進を促し、却て生產物の增加に依て、容易に高率の賃銀を支拂うを得るに至る所以

を理解する能はず、我國工業の存立する所以を以て、一に低廉なる賃銀を支拂ひて、勞働者を虐遇するに在りとするに至つては、眞に濟度す可からざる痴者とせざる可からず。一方に此資本家あり、而して他の一方に漫に官權を弄び、溫情主義、上下信賴主義又は主從親和主義を以て、勞働問題を解決せんとする官僚あるが如き、沒分曉漢の双幅とせざる能はず。我國勞働問題解決の前には、山あり、河ありて、吾人の進路を遮らんとす。吾人は如何に之を跋涉して彼岸に到着せんとするか。

結論

然るに勞働問題の解決に就て、官僚並に資本家を苦しむるものは國內に起らずして、却て外國より來れり。卽ち巴里講和會議に於て勞働改善原則議決せられ、我國亦此決議に贊同したる以上は、假令ひ其決議を實行するに多少の遲速ありとするも、尙ほ勞働者には結社の權利を承認し、又彼等に相當の生活を維持する標準を以て、賃銀を支拂ひ、一日の勞働時間は之を八時間に制限し、每週一日の休暇を與へ、幼年勞働を廢止すると共に、少年勞働を制限し、男女間に於ける賃銀の差別を撤廢する等從來彼等が我國に實行せらるゝを夢想だもせざりし方面に勞働立法の方針を進めざる可からず。恰も我國が往年諸外國に對する通商條約を改正するの急に迫られて急遽法典を編纂し、監獄制度を改良し、內外國民間の社交を盛にしたると同じく、勞働立法の改善も亦外國の督促刺戟に依て漸次完成するに至らんとす。我國をして斯る創始力なく新機軸なく、一に外國の爲す所に促さるゝの狀を呈せしむるもの、之を何人の罪に歸す可きか、余は之に對する判斷を下さず、一に讀者の想像に任さんとす。

勞働問題に就て蒙昧なる知識を有し、偏狹なる意見を公にしたる我國官僚の眼を以てすれば、巴里に於て勞働改善原則に關する議決に贊成したる我國の全權委員は官僚の委託に背くこと大なりしものとす可し。然も右の議決に贊成したる全權委員は衷心我國勞働立法の將來の此議決に合致せざる可からざることを確信して此擧に出でたるものとす可きか。余が巴里より得たる報道に據れば、我國の委員は右原則の議事に上れる日、我國には主從關係の如き、資本家の溫情主義の如き、勞働問題解決に關する特殊の方策あるを理由として、原則適用の範例外に立たんとし、演說の草稿を用意して、議場に入りたるが、其前に外國の委員は種々の方面より改善原則確立の必要を痛說して、他國委員の贊同を求めて已まず、我國の委員亦自己の演述せんとして用意したる所說の外國委員間に行はるゝ思想に比較して、懸隔の著しきに一驚を喫し、初志を翻して、演說を中止したるものなりと云ふ。我國官僚の勞働問題に對する知識に蒙昧なる、全權委

目に時代後れの智慧を吹き込みて危くも巴里に我國辱を吹聽せんとするに至れり。恐る可きに非ずや。

今や歐洲諸國に於ける勞働問題の解決は次第に發展して、勞働者に產業管理權を與ふるの問題すら、世間に發生しつゝあり。即ち從來の如く資本家と勞働者と相對立し、資本家は企業者として、產業經營の全權を掌握する一方に、勞働者は單に賃銀に對して、勞働力を賣却するに止まり、產業經營の方法が如何に自家の運命に重大なる關係を有するも、之に對して殁交涉なるが如き、社會組織に於て、完全なりとす可からず、宜しく勞働者の團體をして資本家と共に、產業經營の衝に當らしめ、如何なる分量に於て、物資を製造す可きや、如何なる代價を以て、之を市場に賣却す可きや、將た又如何なる程度まで機械力を使用す可きやと云ふが如き問題は勞働者團體の意見に依て之を決定す可く、事實に於て資本家と勞働者との階級的差別を撤廢するの主張極めて盛なるものあり。歐洲戰爭の後を承けて、政治上に經濟上に勞働者の勢力の伸張したる今日、如何なる形態に於て斯る主張が實現せらるゝやは、歐洲諸國に於て一個の問題とす可く、之に對して現に我國に行はれつゝある勞働問題に臨まんか、時代後れの觀なきに非ず。況や時代後れの思想を以て、之を解決せんとする風潮の盛なるに於てをや。

勞働問題に就ては、尙ほ論述す可きもの多々あり。養老年金制度の如き、社會保險制度の如き、貧民救濟問題の如き、極めて重要なる問題なり。殊に貧民救濟問題に至つては、余は千九百十年より同十一年に至る間英國に滯在して、親しく各地方の救貧院に出入し、救貧事業の實際に就て、見聞し、考量したるもの少なしとせず。本論執筆の當初に於ては、此問題にも論及して讀者の留意を求むるの腹案なりしが、今や紙數は豫定以上の量に達し、總て是等の問題に觸るゝの機會を得ずして、擱筆せざる可からざるに至れり。本論に省略したる部分に就ては、姑く之を他日に期せんのみ。

福田博士とベルトランド・ラッセル

『解放の社會政策』と『眞正のデモクラシー』

室伏高信

（一）

英國の思想界の異彩としてのベルトランド・ラッセルの名は、既に日本においても幾多の學者または批評家によつて紹介せられてゐる。けれどもそれはたゞラッセルの紹介であるに過ぎなかつた。その單なるラッセル紹介者の地位から一歩を進めて、自ら『日本のベルトランド・ラッセル』であると名乘り出したものとしては法學博士福田德三氏があみるのである。ベルトランド・ラッセルは英國の思想界における異彩である。福田博士は日本の評論壇における異彩である。この點において福田博士が自ら日本のベルトランド・ラッセルをもつて任んずることには少しの誇張もないであらう。偶々ベルトランド・ラッセルの一著 Principles of Social Reconstruction を手にすることのできた福田博士の幸福であつたがごとく、極東の日本において、有力なる一人の信者をえることのできたベルトランド・ラッセルもまた幸福であるといはなくてはならぬ。

（二）

福田博士の諸論文のうちで、最近に最も多く世間の注意を惹いたものとしては『解放の社會政策』（『解放』創刊號掲載）を擧ぐべきである。それは常々四十頁に亘る長大篇である。その全篇を通じてベルトランド・ラッセルの影響をうけてゐるものであることは福田博士自身が附記しゐられるとほりである。その論文はラッセルの論文そのまゝではないかと思はれるほどにラッセルの口調そのまゝが現れてゐる部分もある。福田博士は先づ爭鬪の原理から說いてゐる。爭鬪の原理を說くに當つて、福田博士はマルクスの唯物史觀に反對し、さうしてその唯物史觀の『熱心なる信者』としての河上肇博士を揶揄されてゐる。福田博士は何故に唯物史觀に反對されてゐるか。博士は『解放の社會政策』の長大篇の冒頭においてその理由を明らかにしてゐる。博士はこう述べてゐる。

『具體的にいへば利害の衝突、心理的にいへば憎惡の念、此

二つのものが人と人、國と國、民族と民族とをして絶えざる戰爭を繼續せしめるものである。前者を經濟的原因と名づくべくんば、後者は心理的原因と名づくべきものである。……單に經濟的原因のみを以つて人と人、國と國との間の衝突を說明し去ることは不可能である。マルクス流の所謂唯物史觀が……之を時代後れの謬說と斥くるのを斷じて當を得たる所以である。』

唯物史觀の反對者であることの點においては、福田博士とベルトランド・ラッセルとは幸に一致することができる。ラッセルはその著『政治理想』(Political Ideals, P. 81-85)のうちにおいて既にこの點を明らかにしてゐる。また彼れの最新著『自由への諸道』(Proposed Roads to Freedom: Socialism, Anarchism, and Syndicalism.) の第一章においても同じく唯物史觀に反對の主張を述べてゐる。だから唯物史觀の反對者としての英國のベルトランド・ラッセルは唯物史觀の反對者としての日本のベルトランド・ラッセル――福田博士と全然その立場を同じくしてゐるのである。然らばこの二人の異彩ある批評家は、唯物史觀の解釋についても全然同一の立場を持してゐるのであらうか。福田博士に從へば、『マルクス流の唯物史觀』は、『單に經濟的原因のみを以て人と人、國と國との間の衝突を說明し去る』ものであるがゆゑに、それは『時代後れの謬說と斥くるの斷じて當を得たる所以である。』即ち福田博士に從へばマルクス流の唯物史觀は、單なる經濟的原因のみをもつて人間生活の過程を決定するものであるとなすがゆへに時代後の謬說である。こういつてゐるのである。もしもマルクスの唯物史觀なるものが福田博士の述べられてゐる通り單に經濟的原因のみをもつて人間生活の一切の過程を決定するものであるとなしてゐるならば、一部の社會主義者またはその他の唯物論者等を除き、福田博士の說に異議を挾むものはないであらう。けれどもマルクスは決して斯くのごとき誇張されたる意味においての唯物史觀なるものを主張してゐるものとは思はれない。この點は福田博士のごとき經濟學の大家が夙に承知しておるべき筈である。エンゲルスはこの種の解釋に對して全然反對の意見を發表して居ります。即ち經濟的原因が人間生活の歷史的進化を決定すべき唯一の要素Sole factorであるとなされてゐることは斷じてマルクス及びエンゲルスの唯物史觀の範圍でないと申してゐるのである。(Seligman. The Economic Interpretation of History, P. 143)またこの種の誇張されたる唯物史觀についてはマルクスも彼れ(エンゲルス)もともに何等の斷言をもなしてはゐないといふことを述べてゐます。(同上) この點は獨りエンゲルスの述べてゐ

るところであるばかりではなく、またその他の學者によつて(例へばスパルゴウのごとき)指摘されてゐるばかりではなく福田博士が『大哲』であるとして崇拜措く能はざるベルトランド・ラッセルもまたその新著のうちにおいてエンゲルスと同一のことを主張してゐます。ラッセルは次のやうに述べてゐる。『マルクスをもつて單に經濟的動機が唯一の重要なものであるとするの主張を支持してゐるとなすことは不公平(アンフェーア)である』と。(B. Russell, Proposed Roads to Freedom, P. 7)

(三)

福田博士はマルクスの唯物史觀を攻擊するために更に國と國との戰爭の原因に突入してその原因は單に經濟的のものであるばかりではなく人種的關係がそれと並んで戰爭の重要なる原因の一つであることを述べてゐます。議論そのものについては私には何の異論もない。たゞこゝに疑問としなければならないことは次の二點である。即ち福田博士は戰爭の原因として人種的關係に重きをおきながら何故に民族的關係または宗教的關係に重きをおかないかといふ點がその一つである。その二はこの人種的原因を指摘することによつて何故にそれとマルクス主義とを對立させるかといふの點である。先ずその第一の點から考へてみるのに、人種的の關係は屢々戰爭の原因となりうるものである。人種的僻見の存在するかぎり、人種と人種との爭鬪を避けることはできない。けれども今日までの戰爭の歷史において人種的僻見が戰爭の原因となつたものはわれ等の不幸にしてこれを知るとの乏しきところである。戰爭の歷史の教へてゐるところによれば戰爭の大原因をなしてゐるものは經濟的、民族的並に宗教的の關係である。宗教上の關係から起された戰爭即ち宗教戰爭なるものはわれ等の歷史において屢々見るところである。次には民族戰爭である。歷史を異にし宗教を異にし、各種の社會狀態においても一致せざる、從つて別箇の民族的信念をもつてゐる若——ナショナリティを異にしてゐるものの間に衝突の行はれてゐることは、少くとも十三世紀以來歷史に絕ゆることがないといふことができます。その意味からいつて教授へーエスが近代歐洲史の大部分をもつて、民主主義と民族主義の歷史として說明してゐることは極めて當をえてゐることであると思はれる。ベルトランド・ラッセルもまた民族主義 nationalism が押ゆべからざ力であつたことを指摘してそれによつて人間の歷史の一半を說明しようと企てゝゐます。(Proposed Roads to Freedom, P.25)。それにもかゝわらず、日本のベルトランド・ラッセルたる福田博士がこの民族の關係について注意を拂ふことなく、人種の關係に重きを置いて、それが戰爭の原因

の重要な一半をなしてゐるもののごとくに述べられてゐることは、明らかに今日までの戰爭の歴史を無視してゐるものではないであらうか。今回の戰爭——世界大戰についても、福田博士は博士の二大原因、即ち經濟的理由と人種的理由とによつて說明しようと企てゝゐるのであるが、人種の關係は極めて複雜である。今日においては、一つの民族 nation が一つの人種 Race から成立してゐるものは殆んどその例を見ることができない。北米合衆國のごときは各種の人種を包容融合する點において Melting-pot であると稱せられてゐる。この點は獨り新開國としての北米合衆國だけではない。ヨオロッパの諸國みなさうであるとも申すことができる。人種の關係からいへば白耳義には獨逸種 Germanstock が多い。またフランス民族であるとせらるゝアルザス、ロオレンにしても人種の關係からいへば九十パアセント以上獨逸人である。民族線（ナショナル・ライン）と人種線（レーシアル・ライン）とは別物である。人種と民族とはこれを混同してはならない。二種以上の人種のうへに一箇の民族が成立しうる。一種の人種のうへに二箇以上の民族が成立しうる。この關係を混同して人種と民族とを一致せしめようと企てたところに汎獨逸主義があり、汎スラヴ主義がある。今回の世界大戰は、その原因の一つを經濟的の理由に發してゐることは明白である。けれどもその他の一半の原因に至つては斷じて人種的の關係ではなくして民族的の關係である。民族主義がこの戰爭の重大なる原因の一半であつたことは、この戰爭を機會として民族主義の思想が各方面に勃興し、また到るところに民族復興の行はれたことによつても證據立てられてゐるとほりである。だからこの世界大戰の原因を說明するに當つて民族的關係を無視することは、福田博士の口調を借りていへば『之を時代後れの謬說と斥くるの斷じて當を得たる所以である。』それのみではない。福田博士がこゝに人種的關係をもつて戰爭の原因の一半であると說明されてゐることは、一つの目的、即ち『マルクス流の唯物史觀』を排斥するための必要からきてゐるものである。博士は實にマルクスの唯物史觀を排斥するための理由としてこゝに人種問題に論及されてゐるのである。けれどもマルクスまたはエンゲルスは、その唯物史觀を說明するに當つて、決して人種の關係を全然無視してゐるものでないことは經濟學の專門家としての福田博士の夙に承知せられておるべき筈である。即ち彼等は人種を無視してゐるのではない。また地理的關係をも無視してゐるのでもない。たゞ地理的關係が經濟的關係のうちに包含されてゐると主張してゐるのである。エンゲルスの手簡 (letter in Der Sozialistische Akademiker)によれば、『人種それ自身が一つの經濟的要素であ

る』と主張してゐるのである。(Seligman, The Economic Interpretation of History, pp. 64-65) それゆゑに人種的關係を理由としてマルクス及びエンゲルスの唯物史觀を粉碎しようとするならば、單に人種的關係が爭鬪の一原因であることを指摘するだけであつては無意味である。單にそれだけのことであれば既に當のエンゲルズがこれを指摘してゐるではないか。だから人種論を楯としてマルクス及びエンゲルスの唯物史觀を『時代後れの謬説』であるとするためには、更に一歩を進めて、人種それ自身が經濟的要素でないことを證明しなくてはならない筈である。然り、地下にあるマルクス及びエンゲルスは、その唯物史觀を時代後れのものとして罵倒される前に、福田博士から人種それ自身が經濟的原因でないことについての論證を要求する權利がなくてはならないと思ひます。

(四)

戰爭の原因は理性と自覺だけではない。戰爭の原因の最も深い根底をなすものは衝動――『所有の衝動』である。ベルトランド・ラッセルはこう申してゐます。私はラッセルの一書『社會改造の原理』を讀んで(一昨年)その説に服してゐた。福田博士がその長大篇『解放の社會政策』においてラッセルの説を繰返して力説されるのを讀んで益々その確信を強くしたものである。この説明はベルトランド・ラッセル及び日本のベルトランド・ラッセルをもつて任じてゐられる福田博士の適用してゐるごとくそのまゝ今次の世界大戰にも適用しえられることは勿論である。けれどもそれは凡ての戰爭の根底をなすところの説明とはなるものであるにしても、今次の戰爭の直接の原因としてそのまゝに之を適用することのできないことは勿論である。否、凡ての戰爭は、みなその直接の原因を異にするものである。純然たる侵略の戰爭もある。例へば英國の南阿戰爭のごときものはこれである。これに反して一切侵略的の分子を包含しない戰爭といふことも想像しえられる。例へばカール・マルクスが『ロシア問題の解決』を主張したごときものはこれである。マルクスは戰爭によつて『ロシア問題の解決』を主張したのである。然らば今次の戰爭の直接の原因はどこにあるか。われ等の問はんとするところは戰爭の直接の原因である。その戰爭の直接の原因をもつて、福田博士が主としてこれを英米の責任であるとなしてゐることは、福田博士の今日までの諸論文のうちに溢れてゐる精神でもあり、事實でもある。英米、就中、英國がこの戰爭の責任の一半を負ふべきものであることはわれ等には少しの異議もない。この戰爭の直接の原因は資本主義的世界組織そのものである。さうしてこの世界組織の一方の代表者とし

て英國が立つてゐる以上、英國は決して戰爭の責任を免れることはできない。それにもかゝわらずロイド・ヂョーヂのごとき英國的資本主義のスポークスマンがこの戰爭の全責任をカイゼルに負はせんとしてゐることは實に世界の表面において自ら欺くものでなくてはならない。けれどもそれとともにこの戰爭の直接の原因のうちの一半——特にその重要なる一半を獨逸の負はなければならないとすることもまた公平なる批評家の一致するところではなくてはならない。ベルトランド・ラッセルは福田博士の指摘されてゐるとほり、英國人にして英國の攻擊者である。否、英國の支配階級に對する攻擊者である。けれども英國の支配階級の攻擊者としてのベルトランド・ラッセルはまた同時に獨逸の支配階級——革命前——の攻擊者であることを忘れてはならない。ラッセルは一方に戰爭の重要なる原因の一つが衝動であることを主張してゐるとともに、また『熟慮されたる力』が戰爭の他の原因であることをも閑却してはゐない。さうして彼れはこの戰爭の原因を論ずるに當つて獨逸の政策がその責任から免れるものでないことを論じてゐる。『……最も明白なる實例を示すならば、戰前における獨逸の政策は戰爭を避けんとするものではなかつた。……獨逸の支配者がわれ等(英國)を嫉んだものは、主として權力と富である。……この狀態を變化するものは大戰爭のほかはない(獨逸の支配者はさう考へた)』ラッセルはこう申してゐます。(Principles of Social Reconstruction, P. 80-82) さうして彼れは更に一步を進めて獨逸の參戰の心は憎むべきもの Abominable なものであると斷言してゐます。(ibid. P. 85) それゆえにラッセルをもつて單に英國の攻擊者であるとなすがごときことはラッセルの甚だ迷惑とするところでなくてはならない。たゞ冷靜にして公平なる立場に居ることの用意を忘れることなきベルトランド・ラッセルは、一方に獨逸の參戰氣分を abominable であるとなしてゐるとともに、彼れ自身の國家——英國に對しても、同じくこれをabominableのものであるとなすとの用意と勇氣と學者的良心との所有者である。ラッセルに對するわれ等の畏敬の理由の最も大なるものの一つは惜にこの用意と勇氣と學者的良心の豐かであるの點に存する。彼れはその學者的良心の旺盛なるがために英國政府のために牢獄に投ぜられたのである。この點においても英米攻擊一點張りの福田博士とベルトランド・ラッセルの態度との間には『千萬里の距離がある。

（五）

ありていにいへば、福田博士は經濟學の大家として、日本が世界に誇りうべき學者である。この點において福田博士を有す

る日本は滿洲を有し、朝鮮を有する日本よりも幸である（この處福田博士の口調を借用す）けれども經濟學の大家として世界に誇りうる福田博士も、その獨逸贔負の强烈なる點において、その世界的關係、特に國と國との關係を論ずるに當つては、支離滅裂であると申すのほかはない。甞つて獨逸が西部戰場において優勢であつた時に、福田博士は非併合非賠償論を罵倒して弱者（聯合側）の泣言である、戰勝者が領土を併合することは當然である、それは生存權の要求である。かように論じたことがある。（『太陽』大正七年一月號、『戰爭の目的』）若しそれが英米攻擊のための攻擊論でなく、また獨逸贔負のための僻論でないとするならば、今日のごとく聯合側が戰勝をえたとするならば、聯合側で獨逸の領土を併合することは當然である。戰勝者の權利である。シヤイデマン一派の非調印論のごときものは弱者の泣言である。福田博士は當にこう論じなくてはならない筈である。それにもかかわらず福田博士が最近になつてから聯合國の侵略的態度を攻擊せらるゝがごときは、前後矛盾、徒に獨逸贔負の弱點を暴露してゐるものでなくてはならない。

（六）

それ等の點よりも福田博士をしてベルトランド・ラッセルから最も多く遠ざからせてゐるものの一つは、福田博士の日本に對する態度である。日本人としての福田博士が日本を愛するの至情は素より掬すべき人情の美點であるにしても、眞正なる愛國心 Patriotism と偏愛國論 Chauvinism とを明白に區別すべきものであるとすれば、日本人であるにしても、日本の誤つた政策、誤つた行動に對しては嚴正なる批判を與へなくてはならぬ。ベルトランド・ラッセルが偉大なる所以の一つは、彼れが英國人であり、而かも英國の名門の生れでありながら、英國そのものの行動と雖も、若し非議すべきものがあると見れば、躊躇するところなく、斷々乎としてそれを排斥するの點である。日本のベルトランド・ラッセルをもつて任じておられる福田博士の態度は、不幸にしてラッセルのそれとは正反對であるように思はれる。福田博士が大聲疾呼してゐるところによれば、英國の誇りとするところは領土の宏大なることである。日本人の誇りとするところはその非侵略的の點である。さうして次のように述べる。

『英人の所謂我領土には日の沒することなし、又は「ブリタニア、ルールス、ゼ、ウエーヴ」と云ふ誇りである。我日本國民は「千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔の蒸すまで」てふ皇室の繁榮を誇りとしてゐるが故に、英國人とはその誇りの種類を全く異にするものである。英人のは

權力、領土慾滿足の誇りである。日本人のは政治若くは國體上の誇りである。前者は人間の最も惡しき方面を言表はしたものである。後者は公民として感じ得る誇りの內共最も健全なるものを代表してゐる。我々は大詩人、大發明家大學者を世界に誇ることは出來ぬかも知れぬが、少くともその國體の整備を誇りとし得る、否誇りとしつゝあるものであつて、この二つの誇りは右云ふ如く全く同一種類に屬するのである。權力、領土の誇りは我輩これを Possessive Pride(所有の誇)就中 Predatory Pride (掠奪的誇)と名けんとする。偉人を產したる誇、社會政治組織整備の誇はこれをCreative Pride (創造的誇)就中 Pride of organization (組織の誇) と名けんと欲する。』(「解放」創刊號六頁)

われ等は自ら欺く事なくしてこういふことを公言しえられるであらうか。皇室のことについてはわれ等は福田博士の說に必ずしも異議はない。けれども日本が非侵略的、非掠奪的であつてこの點において英國と正反對である、またこの點がわれ等の日本が『世界に高聲をもつて誇りうるところである』(「解放」創刊號十一頁)となすの點においては、われ等はその言葉を聞くだけにても何となく良心の苛責を禁ずることができない。日本、特に日本の支配階級が、著しく軍國主義的であつたことは、世界に隱れなき事實ではないか。日清戰爭に勝ち、日露戰爭に勝ちたる日本が、滿々たる膨脹慾をもつて、その外交政策の根底となしてきたことは、世界に隱れなき事實であるのではないか。何人がこれを拒みうる。何人かこの事實を隱蔽しうる。大隈內閣の對支二十一ケ條、寺內內閣の對支諸政策、『大日本』的精神の勃興『大日本主義』のプロパガンダ、一々これを計へ立てるまでもない。何人か日本の滿々たる膨脹慾を否認しさることができるか。日本の支配階級はみなこの點をもつて日本の特權であり、日本の東洋に有する使命であるとなしてゐるではないか。私はこゝに日本の外交政策を是非する必要はない。けれども日本の外交政策が、善きにせよ惡しきにせよ、日本の、特に日本の支配階級の滿々たる膨脹慾を中心として決定せられつゝあることの明々白々の事實を何人か否定しさることができるか。日本の四隣、然り、小弱なる日本の四隣が、日本を恐れ、日本を憚つてゐることの事實は何のところから來るか。それはたゞ彼等の杞憂であるに過ぎないであらうか。ヴエルサイユにあつて日本を代表する人も、巴里から歸り來つて日本の講和使節を攻擊する人も、その根本の精神はみな一つである。即ち日本の膨脹、それが日本の外交の目標であり、また日本の外交の樞軸であるとされてゐるではないか。それを英國に比べ、獨逸に比べて、何

の異るところがあるか。『我々日本人は朝鮮を併せ臺灣を領し滿洲を治むることを誇りとするよりも所謂萬世一系の國體を誇りとするものである。』福田博士は日本についてこう述べてゐます。然らば日本がその朝鮮を併せ臺灣を領し滿洲を治めることは英國が印度を治めることと何の點において相違してゐるか。印度を治める英國が侵略的であり、朝鮮を治める日本が Non-predatory であると主張するためには、福田博士は更に他の理由を附加しなくてはならない。その說明が缺けてゐる。その說明を福田博士から聞きたい。その說明のできない限り、福田博士の說はたゞ Chauvinist の說として價値をもつてゐるに過ぎない。ベルトランド・ラッセルは決してそんなショウビニストではない。ベルトランド・ラッセルの畏敬すべき點は、彼れが英國の攻擊者であるが ためではなくして 彼れがショウ ビニストでないの點である。それのみではなく、英國の攻擊者であるベルトランド・ラッセルはまた獨逸——革命前の——の攻擊者であり、あらゆる資本主義の 攻擊者である。 彼れは獨り英米の資本主義のみを攻擊して得々たるごとき偏頗な學者ではない。資本主義は今や決して 英米の特有する ところではない。 エンゲルスの時代においてさへ、 彼れは資本主義が獨逸にフランスに波蘭に侵潤したことを嘆じてゐたではないか。カール・リープクネヒトは獨逸の軍國主義をもつて資本主義的軍國主義であると評して猛烈に之れを攻擊したために一九〇七年獨逸政府のために牢獄に投ぜられた。リープクネヒトを牢獄に投じた政府は——その資本主義的軍國主義の獨逸政府はリープクネヒトが第何回目かの入牢中に獨逸國民に適せざるものとして仆れた。われ等はさういふ教訓を見ながら日本の支配階級の態度に戰慄せざるをえない。國家的利己心に向つて突進しつゝある日本の諸政策をもつて、それが一切非侵略的のものとして『高聲に世界に誇りうる』點であると論ずることのできる福田博士——然り高聲に論ずることのできる福田博士は實に羨ましきほどに幸福な地位にある。けれども英國のベルトランド・ラッセルは決してそのような幸福な地位にあるのではない。ラッセルは大學教授の地位を追はれ、さうして牢獄に投ぜられた。福田博士は牢獄にも投ぜられず、却て高商教授として厚く迎へられることとなつた。英國が不自由な國家であるのか。日本が自由な國家であるのか。

『英國の官憲は今やラッセルを收監しつゝあるに、日本の官憲は未だ一指だも予の身上に加へず、英國の自由國にして日本の不自由國たりと云ふ人之を何と評する。』(「解放」創刊號三十九頁)

福田博士はかう述べてゐます。日本の官憲が福田博士の身上に一指だも加へないことが、ベルトランド・ラッセルの身上に一指をも加へないことの理由となるものであるとすれば、福田博士の讃美せられてゐるとほり、『日本に生れたることを誇りとし喜びとするの情更らに深からざるを得ざるものである。』けれども獨逸に生れて獨逸を攻撃し、既に『獨佛年鑑』時代に『最も下等な和蘭人でさへ最も偉大な獨逸よりも賢明なる市民である』と論じたカール・マルクスはたゞロンドンにのみ止まることが許された。英國に生れて英國を攻撃したベルトランド・ラッセルは大學教授を追はれて牢獄に投ぜられた。(ラッセルは昨年四月入獄し今年一月にはもう出獄してゐるから福田博士が今年四月廿三日の論文でラッセルを入獄中であるとなしてゐるのは誤りである)けれども福田博士は幸にして日本に生れた。幸にして英國に生れなかつた。日本にあつて英國を攻撃し、さうして日本に居て日本を讃美しうる學者または批評家は實に幸ひである。福田博士はその幸ひを專らにすることのできる羨むべき地位に立つておられる。然り、日本に生れた福田博士は幸ひであり、英國に生れたラッセルは不幸である。けれどもそのラッセルが英國に生まれずして日本に生まれたならばラッセルは更らに一層不幸であつたであらう。何故に。ラッセルの立場は、英國に生まれて英國を攻撃するとともに、日本に生れてもまた日本を攻撃せずにはゐられない不幸な立場であるからである。否、福田博士が日本に生れたることを誇りとし喜びとするといふその Non-Predatory の日本に對してもラッセルは既に攻撃の矢を放つてゐるではないか。『社會改造の原理』を一讀された福田博士はこの點を知らない筈はない。ラッセルはその『社會改造の原理』の第五十二頁において、一つの國家が他の弱國を侵略し限りなく外國人を死に致すようなことが、多くの小國、さうして凡ての大國によつて行はれたことが過去二十年來の事實であることを指摘し、その實例として英國の南阿に對する行動、フランスのモロッコに對する行動、及び日本の滿洲に對する行動等を列擧してゐるのである。この點においてベルトランド・ラッセルの立場は福田博士とは正反對である。福田博士はたゞラッセルの一面だけを見た。ラッセルの英國攻撃だけに興味を感じた。けれどもそのラッセルが日本を攻撃してゐることを忘れてしまつてゐるのである。然り、福田博士が非侵略的であるとなされてゐる『自由にして誇りある日本』に對して無遠慮なるラッセルはこれを侵略的であるとして攻撃してゐるのである。且つラッセルはその近著のうちにおいてさへ、平和なる滿洲にとつて日本が脅威であることをさへ繰返して指摘してゐるのであ

る。(Russell, Proposed Roads to Freedom, P. 151-2) だからラッセルが日本に生れなかつたことは幸ひである。何となれば、彼れは日本に生れたならば、日本の政府は彼れの日本攻擊を憤つて、それが資本主義的秩序または日本の國是と兩立しないものとして牢獄に投ずるであらうからである。

(七)

『衝動の解放!』これが福田博士の謂ふところの『解放の社會政策』である。さうしてそれが戰爭の防衛策であり、『將に來らんとする新世界の曉を告ぐる警鐘』であり、また『黎明運動の標語』である。『衝動から起りパッションから起る戰爭や鬪爭を理性と自覺とによつて防止しうべしとするは愚である。』福田博士はこういつてゐる。(「解放」創刊號十九頁)それゆえに衝動を解放せよ!とこういはれるのである。衝動の解放!われ等はそれが如何なるものであるかを考へるためにはベルトランド・ラッセルの衝動についての説明を聞かなくてはならぬ。ラッセルは人間の衝動を二つに分けてゐる。『所有の衝動』Possessive impulse と『創造の衝動』Creative impulse の二つがこれである。人間の行動はこの二つから生れる。ラッセルのいつてゐるところはこうである。それゆえに『衝動の解放』とは創造の衝動の解放と所有の衝動の解放の二つを包含すべきものであることは勿論である。この二つの衝動が解放せられる時に來たるものは何んである。いふまでもなく二つの衝動の爭鬪である。相反したる二つの衝動は、それが解放されたる狀態においては、ともに相爭鬪するものでなくてはならない。所有の衝動が勝つか。創造の衝動が勝つか。今日までの歷史において證明されたるところによれば、所有の衝動は人間の社會を支配してきた。曰く戰爭、曰く財產、曰く國家、これ等のものは、ベルトランド・ラッセルが所有の衝動として列擧してゐるものである。(Russell, Principles of Social Reconstruction, P. 6)その所有の衝動としての戰爭、國家、財產の榮えてきた今日までの人間の歷史によつて證據立てられてゐるところによれば、福田博士の解放の社會政策——『衝動の解放』によつてえられるところはこの所有の衝動の繁榮においての社會であらねばならぬ。從つてそは所有階級のために道を開くものではないか。また戰爭の原因に向つて培ふこととなるものではないか。だから福田博士は『衝動の解放!』によつて戰爭を防止し、『來らんとする新世界の曉の鐘』たらしめんとしてゐるに反して、ラッセルはそれとは全然反對の立場をとつてゐる。即ちラッセルに從へば戰爭を防止するためには衝動を解放することではなくして戰爭の根底をなすべき衝動——所有衝動を防壓することである。『平和主義

者にとつて根本的の問題は常に全社會を支配してゐる（Seize）戰爭への衝動を妨げることである』（Principles of Social Reconstruction, P.91—3）ラッセルはかう申してゐます。ラッセルの立場は明白である。ラッセルの論理は明快である。福田博士の論理はその正反對である。

（八）

ラッセルは決して『衝動の解放！』——『解放の社會政策』の主張者ではない。彼れの主張するところは所有の衝動を押へて創造の衝動を保護し、培養し、それに機會を與へよといふことである。彼れは決して衝動の絶滅を信じてゐるものではない。けれども一つの衝動を培養することによつて他の衝動を押へうるものである——理性の働きを信じてゐる。所有の衝動が最小限に働きて創造の衝動が最大限に働く社會を想像してゐる。さうしてそれが最も善良なる社會であると論じてゐる。（Principles of Social Reconstruction, P. 6） 否なこの點が彼れの社會改造の主義であり理想である。彼れの名著『社會改造の原理』一巻は英國を攻撃するために書かれたのではなくして實にこの社會改造の主義——所有の衝動を押えて創造の衝動に最大の機會を與へんとするために書かれたものであることは彼れがその書物の冒頭において述べてゐるとほりであります。獨りこの『社會改造の原理』だけがさうではない。『政治的理想』にしても、『自由への諸道』にしてもみな同一の精神をもつて書かれてゐるものである。彼れが英國を攻撃するは獨逸を愛するがためではなくして自由を愛するがためである。自由を愛するがために所有の衝動を押えて創造の衝動の最大限に働きうる社會を求めんとしてゐるのである。こゝにおいてか彼れの要求するところの一つは教育であり、他の一つは社會組織の改造である。

（九）

如何に社會組織を改造するか。福田博士の説明は紆餘曲折である。資本主義を攻撃する福田博士はまた同時に社會民主主義の攻撃者である。自ら稱して資本主義と社會民主主義との中間に立つといはれる。それが福田博士の所謂『眞正のデモクラシー』である。政治的民主主義も『虚僞のデモクラシー』である社會的民主主義も『虚僞のデモクラシー』である。『虚僞のデモクラシーから眞正のデモクラシーへ』！福田博士が今年の一月以來幾度か繰返してきたところは卽ちこの點である。その福田博士——マロックが社會主義の殺戮者として著名であるごとく英米の攻撃者として、また社會民主主義の攻撃者として内外の注目を一身に集めてゐるほどの勢ひである福田博士は、その『解放の社會政策』のうちにおいては、産業民主主義 Industrial

democracy をもつて『解放の社會政策』に合するものであるとせられてゐる。（『解放』創刊號二十八頁）然り、社會民主主義は『虚僞のデモクラシー』である。産業民主主義は『眞正のデモクラシー』である。『虚僞のデモクラシーより眞正のデモクラシーへ』從つて『社會民主主義より産業民主主義へ！』福田博士の眞正のデモクラシーとは卽ちこれである。またその『解放の社會政策』の正體はこれである。『社會民主主義は全人民のクラシーでない。勞働者のクラシーである。産業民主主義は勞働者のクラシーではない。全人民のクラシーである。』福田博士の『眞正のデモクラシー』もこゝに至つて危い哉。

（十）

けれども福田博士の『眞正のデモクラシー』をもつて直ちにベルトランド・ラッセルの立場であるとなすことは素より大なる誤りである。ラッセルは決して紆餘曲折を極めたる『眞正のデモクラシー』の主張者ではない。彼れの立場は簡單明白である。彼れは資本主義の反對者、賃銀制度の反對者、社會主義の主張者である。彼れは正統社會主義 Orthodox Socialism の主張者ではない。サンヂカリズムの主張者でもない。無政府主義を理想としつゝギルド・ソーシャリズムを主張してゐるのである。（『Proposed Roads to Freedom, P. XI）卽ち英國の支配階級の攻撃者であるベルトランド・ラッセルは獨逸的文化 Deutsch Kultur の謳歌者ではなくして、英國特有の社會的及び産業的生活の産物たるギルド・ソーシャリズムの主張者であります。彼れはこの點において『新時代（ニューエージ）』のオレージとその立場を同じくし、フェービアン協會のコールとその立場を同じくし、またホブソンとその立場を同じくしてゐるのであります。こゝに一々ベルトランド・ラッセルの社會改造の主義について説明を與へてゐることはできない。けれどもこのベルトランド・ラッセルが如何に急進的の社會改造論者であり、また如何に日本のベルトランド・ラッセルをもつて任じてゐる福田博士との間に莫大な距離のあるものであるかを示すためにラッセルの近著からその社會改造意見の一二を紹介すれば、彼れは先づ敎育の必要であることを述べてゐる。敎育は滿十六歳までの凡ての男女に强制されべきものである。その義務敎育の終つた後には滿二十一歳まではその本人の希望に從つて自由に敎育を與へなくてはならぬ。その敎育の終つた後においても人々は仕事を强制されてはならない。それは絕對に人々の自由にまかせなくてはならない。be left completely free. ベルトランド・ラッセルはこう述べてゐます。彼れはまた更に一歩を進めて一日の勞働時間は四時間が最も適當であると論じてゐるのであります（Russell, Proposed Roads to Freedom, P.192-3）　（七月二日）

列國の勞働問題差別觀

文學博士　三宅雪嶺

(一)

近世に於ける急劇の進步、一世紀は一世紀より加速度の進步は、諸要素の悉く與る所であるけれど、商工業の發展が最も著るしく、中世及び其以前に全く考へ及ばぬ所に懸かる。古代にも或る地方で商工業の發展したのがあつたが、規模が小さく、後と比較にならぬ。商工業が急劇の進步を遂げるに伴ひ、勞働問題が年々注意を惹き、最も重要なる問題の形を呈する。種子は古代に存して居つても、農業が主になつて居る間、農業者が租稅に就いて苦情を申出し、或は武器を以て紛擾を起し、其れも農夫自ら不滿を愬へるよりも、地主が負擔に堪へぬとして之に紛擾を起させるのが多い。日本では百姓一揆といふのが時々起り、維新後にも其騷ぎがあつた。明治九年「竹槍でちよいと衝き出す二分五厘」といふ川柳があつて、竹槍の騷ぎで二分五厘減じた事がある。

農と工商との衝突は早くからの事で、支那の周代に米が廉ければ農が苦しみ、米が高ければ商工が苦しむ事が記載されて居る。日本の舊藩時代、士が祿を食み農と利害を同じくし、米の高い方が可く、工商の米價下落を望むのと違つて居つた。工商の勢が漸次高められ、諸藩で借金の無い士族が少い程になつたが、尚ほ農の方が大體上に勢を占め、工商が辛じて之と對立する有樣である。明治年間議會が開けても、農業關係者の議員と成るのが多く、唯年々他との比例の減ずるを見る。

(二)

東洋に先じて商工業の發展を遂げ、眼醒しい勢である歐米では、政治革命に次いで經濟革命の必要を認め、勞働問題の起るを免かれぬ。十八世紀に政治革命が起り、十九世紀に漸く落着するかせぬに、經濟革命を企つる者が各地に起り、寸退尺進の勢で進み來つた。十九世紀の初め、社會主義はユートピアと考へられたが、數十年ならずして實際問題たるを打消す事が出來ず、廿世紀に至りいよ〳〵問題の解決を迫り、世界戰役後國際的に

之を決定しようとも試る。若し列國が今少しく國情を同じくせば、問題の解決は餘り難しくなく、幾回かの會議を以て目鼻の着くやうになる。何分にも列國互に國情を異にし、比較的簡單なる國際聯盟でも隨分面倒があり、勞働問題を以て何程一致するか、大體上に一致しても或る點で分離し、其或る點が最も力あるやうな事があらう。國毎に特別の事情あり、問題に對する態度も違ふが、今の所表面の何狀であるにせよ、歐大陸と英米と分れやうとして居る。

(三)

大陸に英米流があり、英米に大陸流があるけれど、何と云ふても實際運動の上に差別がある。民族の差異から來て居る所もある。アングロ・サクソンは純粹でなく、殊に米國は混交狀態であるが、其中で所謂アングロ・サクソンの特質を認める事が出來る。大陸に比べて實際に着眼し、一足飛びに理想に奔らうとせぬ。然しそれよりも領土の廣いことが影響を及ぼして居る。英は本國こそ小さけれ、植民地は人口に比して頗る廣く、領土内で何とでも生活の向上を圖り得られる。米は之れ程の植民地無くても、本國のみで廣く、本國内で將來の安心を求めるに傾く。勞働者は資本家に對し成る可く賃銀を增さうとし、之を增さすに就て種々様々の運動を爲し、大袈裟な同盟罷業を敢てする。如何にすれば最も多く賃銀を得らるるか、識者は双方の關係を考へ、十分に事情を調査し、双方に有利なやうにしようとする。現在の制度を破壞しようとする者は數に於て尠く、之を破壞しなくても賃銀增加の希望あり、勞働時間を制限し、賃銀を多くし得れば生活を安樂にし得らるると思ふ。既に賃銀が高まり、相應の生活を送るのが種々あつて、資本家撲滅と云ふ事を考へるに距離がある。

(四)

歐大陸は一様に云へぬけれども、植民地が廣くなく、佛國の如き相應に廣いにせよ、本國人が安んじて移住し得るやうな地に乏しい。サハラ附近は何とも仕様が無い。獨逸は一時植民地を得るに熱中し、悪辣手段を以て之を得ようとしたが、それでも思ふやうに行かぬ。ヰルヘルム二世が、朕が將來は海洋に在ると唱へたのは、海軍を以て英に拮抗せぬ限り領土を擴大し得ぬを察しての事である。世界戰役を捲き起したのも新に領土を獲るの念から來て居る。遲れ走せに發展した國として、兵力の外に領土の廣めようがない。佛人なり獨人なり英米の領土に移住せぬでなければど、我が領土に努力し、我が發展と共に國家及び民族の發展を遂げるやうに考へ難い。別けて英米よりも想像に耻けるとあつては、國内で何か愉快な事を覓めようとする。

考へて觀れば商工業の興隆と共に資本家の得る所が多く、勞働者の得る所が鮮く、其利害が反比例する嫌があり、資本家を如何に處置せば勞働者が更に幸福になるかと考へる。或は國家に於て資本家の爲す所を爲せば一般民衆が利益を得やうとし、或は政府を破滅し資本家の存在せぬやうにせば、勞働者が壓迫より免れ得やうとし、其他種々に考へる。實際資本家は勞働者に比べ、勞力の割合に得る所が多く、中に甚だしく多いのがある。單に所有者の名義あるだけで、日々遊び暮らして勞働者の所得に千倍萬倍するのがある。順序の宜しきを得ぬやうに考へらるる處に、資本家に不利なる案は幾條も作る事が出來る。若し國內で政府と資本家と共同し、勞働者に於て之に敵する事が出來ねば他國の勞働者と提携し、政府を改造し若くは廢滅して妨げないとする。然し猶太人の如く全く國境を構はぬ者は兎も角、幾代の歷史に養成され、愛國心の存續する者は全く國境を捨てるやうに考へ難い。時として主義の爲めに世界を念とし國境を構はぬとしても、對外戰爭の迫るや、國境の維持を專らとし或は之を擴張しようとする。爲めに自らの理想と實際と矛盾する事が稀でない。獨逸でもマルクスとラッサールと此邊で明かに衝突する。マルクスは獨逸に對して愛國心無く、寧ろ敵意を挾み、國境の破滅を當然とする。ラッサールは愛國心熱烈、如何にしても獨逸の爲めに圖らずに居れぬ。時として二者相妥協したけれども、衷心の眞情に於て相一致する事が出來ぬ。此國家的と非國家的との關係は何國でも社會主義者間に溝渠を作り、勞働者の國際的運動を妨げる。佛國では意見に於て獨逸より猛烈なのがあり、公然無政府主義を以て運動したりする。相應に賛成者を得、或は輿論の迎へる所でないかと疑はしめる。けれども獨逸と開戰になれば、一切を抛つて戰はうとする者が多くなり、實に愛國心の旺なる事驚くべき程である。社會主義の下、勞働問題の下、佛獨人が何處まで共同運動を敢てし得るかが疑問に屬する。

（五）

同じく歐大陸でも露國は西歐と民族も違ひ、地形も違ひ、延ひて特殊の狀態を以て社會運動を演ずる。現代文明を十分に應用せば、歐亞に跨れる廣大なる領土は、幾億の民衆を安かに生活し得させる餘地がある。而も之を應用するに多大の費用を要し、到底從來の狀態で堪ふる所でない。出來る丈け負債して尙彼の如きであり、其以上に文明を普及するのが難かしく、之を普及せねば生活に苦しまずに居れぬ。商工業が發展せず、農業國として普通の勞働者に乏しいけれども、いよ〳〵生活に苦めば竹槍席旗の騷ぎに與するやうになる。農夫が何とかして生

活を善くしようと勉める程の氣力もなく、寧つて食ふ事を餘儀なくされる。有力者が運動方法を授けて之を指揮せば、何事も敢てし憚る所が無い。本來何處に國境があるかを知らぬ程であつて、世界的の智識なく自づと世界的の心地となる。積極的に世界を考へず、消極的に國家を知らず、世界的と區別が無いやうになる。運動者としての猶太人は固より國境を構はぬのであり、多數の準農奴も國境を構はず、地主に反抗して可いとならば反抗するのが結構、資本家に反抗して可いとならば反抗するのも可いとなる。露の勞兵派は露の國境に就いて考へず、世界と共に安全幸福を得ようとする。農夫は職工と區別がありながら、要するに程度であり、他から見て職工とする所で、勞兵と共にするのがある。獨逸では幾許か露と國情を同じうする所があり、スパルタガス團のやうなものが出來た。洪牙利はいよ／＼似た所があり、同樣の運動に着手し、少からぬ勢力を得つゝある。何處でも幾分かボルシエヰキ主義のものが居り、之に贊同を表するが、さらば多數が之と共にするかと云へばさうは行かぬ。露國と事情を異にする丈け之に對する態度を異にする。獨逸の多數は之に應ぜず、佛の多數はいよ／＼應ぜぬ。然し獨佛は英米に比べて理想に走るにしても、露に比べて國家に重を置き、單に國家を念とする所英米に優るとも劣らぬ。

（六）

英米は愛國心の有るか無いかの疑はしい者が尠くなく、天涯地角夫婦の居る所我がホームとするのがある。けれども自らの利權を守り、他の來り犯す事を許さぬ意地が頗る强い。英の領土及米の領土に於て、勞働を以て己れと競爭する者の來るを許さぬ。歐大陸より移住し來るを許したけれども、廉い賃銀で働かうとするものを排斥する。亞細亞人の來住するのを絕對に禁止しようとする。英米共に勞働者は自己本位にして、我が賃銀を高め得さへすればよく、世界の勞働者が何の狀態であるかを問ふの遑無いとする有樣である。今の所白人は賃銀が廉くなく、來住を許しても、賃銀を廉くして入込む者があれば百方之を防がうとする。英米の勞働者は自國內で賃銀增加運動を專一にして滿足し得らるる。此邊は歐大陸と違ふ。けれども英米は世界に力を伸ばさうと期する。其力を伸ばすの重なる手段は、世界に良い物品を廉い價で供給するにあり、之を遂げるには職工の廉い賃銀を要する。所で戰時に賃銀が高まり、戰後に之を引下げやうとしても職工が承知せず、減ずるどころか增さうとする。增さねば同盟罷業を敢てする。資本家側では廉い賃銀の職工を他から得るのを望み、最も廉い亞細亞人を得たく思ふが、多數勞働者の反對するのを憂ひ躊躇して居る。

（七）

今は勞働問題が世界を通じて喧しく、筆のみでなく實行に努めて居るが、列國各に事情を異にし、一致共同して大に力を伸ばすに至らぬ。歐大陸では亞細亞人の來住する者尠なく、之を問題とせず、或は世界共通にすべきを考へるが、英米では亞細亞人を排斥し、人道の立脚地に於て議論が薄弱になる。議論に耳を藉さず、實際によければよいとするので、國內の人口がいよいよ多くなるまで其儘に續かう。けれども歐大陸の如く英米の領土は人口稠密になつて、勞働者が尙他國人の來住を拒まうとするか。來住者が少いので之を拒むの必要を感ぜぬやうになり、從て國境に重きを置かぬやうになるか。

勞働問題は理論が一定せず、マルクスが比較的重きを爲しながら、其追隨者の間に異論あり、派別あり、マルクスと全く異なる立場に立つ者もいろ〳〵ある。英米人の如く議論は何でも實際の利害を先きにするのがある。英米では資本家の方で亞細亞人を迎へ、勞働者の方で之を拒み、現代に入りて勞働問題の國際的にならうとするのを勞働者自ら妨げて居る。かゝる狀態では世界的とするの點に於て、歐大陸の思想及運動が東洋に波及し、英米と對立するやうになるかも知れぬ。日本から觀れば露の過激派は秩序を亂すものであつても、人種を一樣に視る所で都合が好い。英米は現に最も力あり、秩序の確實なるものでありながら、亞細亞人を排斥し、世界人類の多數を別物扱ひにしようとする。其相一致する點を見出すまで世界に於ける趨勢を決定する事が出來ない。日本國內で資本家と勞働者との關係を好くし、世界の勞働者に反省せしむるやうにすべきである。日本では普通の勞働者と違ひ小學校敎員や、巡査、智識ある貧民が問題となり、他國に於て特別の注意を拂はねばならぬやうにならう。

文化運動と勞働運動

加藤一夫

序言

大戰この方、特に露國革命や獨逸革命の行はれてから此の方、今迄ひそかにその勢潛力を養つて居たプロレタリアート階級の自覺がその爛熟の時機に達した樣に見える。そしてその大勢は此の極東の一孤島にも押し寄せて來たらしく、今や日本の言論界はデモクラシイや勞働問題に關する記事をもつて充され、何何學會、何々協會と云つた樣な團體が彼方にも此方にも雨後の筍の如うに簇生し、勞働者自身も亦、賃銀値上げの要求をなし、若しきかれない場合にはストライキの手段に出づるもの又少くない有樣となつた。

しかしこれ等は未だ、嚴密な意味に於ての勞働運動ではない。勞働運動を醸生する酵母である事は出來ても、勞働運動そのものではない。從つて、日本にはまだ、眞の意味の勞働運動がないと云つてもよい。成る程、友愛會と云ふ大きな勞働者團體は以前から存在しては居る。しかし、たとひ此の團體の會員は勞働者をもつて成つて居るとしても、その創設者は勞働者でなく、且つ會員の大多數は勞働者でない創設者の意向によつてのみ動くものであり、そしてその創設者の目的とするところは、資本家と勞働者との調和を計る事であり、勞働者の向上を計る事である。と云ふに於ては、その團體の如何なる種類のものであるかゞ容易に看取されると思ふ。たゞ關西に於ける友愛會は賀川豐彦指導の下に、友愛會本部とは殆んど獨立に、着々と實際問題に突進して行きつゝあるのは注目に値ひするが、自分の觀察するところでは、若し此の團體が何時までも友愛會支部として存するに於ては十分にその駿足をのばし得ないかも知れない。先達て東京に、純粹に勞働者のみをもつて成立した勞働者同盟會と云ふのが發會式を擧げて、稀に見る生氣の潑溂たるものを示しはしたが、それも内部に於ける溫・激兩思想の扞格のために何等の見るべきものを爲さない中に瓦解してしまつた樣である。

こんな風で、日本にはまだ、直接資本家階級を脅かす樣な大きな勞働運動なるものは存して居ない。あるものは只だ、知識階級の社會問題研究及び文化運動である。蓋しこれは現代に於て最も多く生活上の威嚇を蒙つて居るのは此の階級であり、且つ彼等はその威嚇に對して敏感であると共に、それに對抗する智能をもつて居るからであるかも知れない。兎に角、何れにしても、今日の社會問題を論じて居るものゝ大多數が知識階級であるのは云ふまでもない。(尤も、彼の温情主義を標榜したり、勞働者慰安を口にする、官僚と資本家との合同による資本制度擁護に努力する一派があるが、それは寧ろ問題外である)

今日の知識階級の最も多く興味を惹いて居るものはデモクラシイ論である、普通選擧論である。一言にして云へば社會問題の政治的方面である。も少し進んだものになると、一般人民の啓蒙をその目的とする文化運動である。彼等の多くは、露國や獨逸に起つた樣な社會的大變動を好まない。ポリシエイズム支配の下に行はれて居る(と云はれて居る)が如き社會的混亂を憎む。そこで、必要な事は何よりも先づ、一般人民に正當なる理解と思想とを持たせる事であるとする。茲に於て黎明會だとか文化學會だとか云つた樣な文化運動が起つて來た。

吾々は先づ、その文化運動、若しくは、文化運動を理由づける基本概念であるところの文化主義なるものゝ精神の那邊に存するかを窮めたいと思ふ。

文化主義

自分の知つて居る範圍では、文化主義を提唱した人に左右田博士と桑木博士とがある。左右田博士の文化主義に就いては、五月の中央公論に野村隈畔氏の哲學的批評があつたから、讀者は既にその大體の意のあるところを悟られて居る事と思ふが、今、此の兩博士の意志を自分の言葉で解り易く云つて見ると大體かうである。

世の中には互に相排斥する色々な主義がある。が、今、その中の或る主義を排して或る主義を採用せんとするには、單に或る主義が他の主義に反すからと言ふわけには行かない。それでは撰擇でなくて只だ厭惡である。撰擇をするには何うしても、Aの主義でもなくBの主義でもない第三者の立場に立つて居なければならぬ。而もその立場は、A及びBの主義に超越して居ながら、同時に又、A及びBの何れの主義にも共通に內在する或るものをもつて居なければならない。即ち、左右田博士の謂ゆる「これ等の主義に內在的にして而も此等の主義を超越する立場」でなければならない。これ即ち論理上のア・プリオリであつて、これによつて諸主義を批判し取捨するのである。然らばそ

の標準となるべき文化價値は何であるかと云へば、「內容を純化する過程に於て其の一方的高昇の極限概念として見らるべき『イデー』である。」桑木博士に從へば、刻々に變化して行く相對的なる文化價値に何等かの批判を加へようとするには、そこに、これ等を批判し得る絕對價値がなければならぬ。而も眞の意味の「絕對」は到底人智の範圍外であるから、相對的の意味に於ける絕對價値を想定しなければならぬ。卽ち、最高の文化價値なるものは要するに形式上の概念に過ぎないのである。

斯くの如くにして文化價値なるものが立てられる。ところが、この文化價値なるものの實現は人格を通じてのみ表はされる、人格は又、文化の生產や創造に携はることによつてのみ其れ自らの重要と價値とを發揚し、そして其れ自身に固有の意義を獲得する事が出來る。だから、人格は文化價値に關係する事によつて始めて意義をもち、文化價値はそれ自らに自らの論理をもつては居ても、それに意味を持ち得るのはたゞ人格を通じてである。こんな風に、文化價値と人格とは離るべからざる關係に在るものである。そこで、文化主義の何であるかゞわかつて來る、文化主義が何を目指すものであるかゞわかつて來る。卽ち、文化主義とは要するに、人格をして文化價値を實現せしむるの主義である。凡ての人格をして洩れなく此の自己に固有な文化價値を實現せしむるの謂である。「……一切の人格が、文化價値實現の過程に於て假令その中の一個でも其過程の表面以下に埋沒さるゝ事なく、悉く皆その表面に於て其自身固有の位置を占め、一義的、且一律的に、一列に配置せられ、而して其の窮極に於て、儼として目標たり規範たる文化價値が立ち、而も其の有する論理的普遍的妥當性が、此等一切の人格に依て事實上にも內容的にも實現さるゝものである。

左右田博士が立論した文化價値の何であるかと云ふ事の不明瞭は野村氏によつても指摘されて居る樣に、「一方的高昇の極限概念として見らるべきイデーでありゾルレンでありノルムである」と云つただけでは、世の中には完全なものがあると云つた丈けでその完全な物を直に承認さゝうとするのと大差がないのではなからうか、それが人格と相卽不離の關係に在ると云つても、やはり同樣に其の眞の內容の何であるかを知る事は難い。しかし桑木博士が、形式上の絕對價値を立てられたところには、此の左右田博士の立論の不備な點を補つて稍々具體的な說明として聽く事が出來る。最も不完全なる圓から次第に完全に近い圓を多數に集めて置いて人間の想像し得る最後の圓をもつて絕對的完全圓だときめる、と云つた風であるからその筋道がよくわかつて來る。そして博士は更に、「絕對價値は是に於て人々の自

我をして自我たらしむるもの、即ち自我の基礎は先驗的自我と結合するものとなる」と云ひ、「人の自由は事實でないが要求である」と云つて、文化主義とは謂ゆる自我の自由の要求であることを暗示して居る。

自分はしかし玆に細かい哲學上の批評を此の兩博士の主張に加へようとするのではない。たゞ、兩博士の文化主義が導いた結論――デモクラシイや勞働問題に對する態度――に就いて卑見を述べたいと思ふのである。

博士等の立論が、動ともすれば輕薄に流れ易く、雷同性を帶びたデモクラシイ論や勞働問題に對して深い哲學的根柢を與へた事の功績は十分にこれを認めねばならぬ。(たとひその根柢が果して正當であるか否かはまだ〱容易に決定する事が出來ないとしても)多くの學者たちが共の自己に與へられたる教育的特權を利用して、世の中がどんなに騷いで居よ〻が、庶民がどんなに苦しんで居ようが、そんな事には一向頓着なしに、一般人民には何等の關係のない、たゞ資本家や富豪や權力者にのみ利があつて、人民には却つてその抑壓の機關とさへなる樣な研究をつゞけて平氣で居る時に、かうして生きた問題の解決に努力される事の精神を多としなければならない。

しかしながら、博士等の結論を果して、一般人民、ことにプロレタリアート階級の是認し得るところであらうか何うか。

文化主義の主張とその結論

文化主義は一切の個人をして各々自己特有の文化價値を實現せしむるものであると云ふ主張には恐らく何人も異議を挾まないであらう。又、各個人は各個人なりに、自ら享けた才能や素質に從つた文化價値を實現する事に於て、たとひその質なり分量なりが各々異つて居ようとも、各々みなそれ〲に同等の價値をもつて居るものである。だからその意味に於て一切の人はみな平等である。と云ふ事にも何等の異論を挾むべき必要を見ないであらう。更にまた、それ故に、一切の人をして最も劣惡なる人間の水平線にまで引下げる事をもつて平等だとする「惡平等」に墮してはならぬと云ふ主張にも何等の反對を唱ふべき謂はれがない。否、かくする事によつて、世の中の多くの誤れる民主主義等を警戒する事の大なるを喜ばねばならない。

しかしながら、「人は社會上差異ある職業を有すると共に其より受くる報酬に於ても差別ある事は當然である」と云ひ、「若し人々が同じく耕し同じく紡がざるべからずとせば是れ再び蠻野の狀に復するものである」と云ひ、「若しデモクラシイが社會上の平等を期して事實上多數を占める劣惡者の水平線に人を引下ぐるならば、是れ到底世界の改造とか文化とか云ふ問題に入る

事は出來ない」と斷言するに於ては恐らく異論なきを得ないであらう。

茲に桑木博士の謂ゆる「社會上の平等」と云ふ意味は稍々不明である。しかし自分の解するところによれば、「社會上の平等」とは、凡ての人がその生活上に於て平等の機會を得ると云ふ事である。資本もなく器械もなく土地もなく金もないが爲めに、それを有する特權者に奴隷的に使用されると云つた樣な事のない、即ち何人にも特權が與へられず、何人も平等な機會に於て生活する事を意味するものである。そして、それを期する事が何うして、博士の謂ゆる「事實上多數を占める劣惡者の水平線に人を引き下げる事になるのであらうか。吾々の期するところを、それとは反對に、斯くの如く社會上の平等を立つる事によつて、謂ゆる劣惡者を高い水平線に引き上げる事であり、又、事實上、引き上げ得ると信ずるのである。一體、何故に博士は、「事實上多數を占むる劣惡者」などと今日の一般の民衆を輕蔑するのであらうか。今日の社會に於て、一方には、博士の樣な立派な學者が出來、一方には、博士なんかから見てまるで人種でも違ふ樣に思はれるところの「劣惡者」が生ずる所以は必ずしも博士及び「劣惡者」の頭腦及び才能の差違からばかり來て居るとは云はれないのである。かゝる實況の差を生ぜしむる主たる理由が、今日の社會制度の罪でなくて何であらう。自分は自分の尊敬する博士の口よりして斯る無自覺な語をきくを悲しむものである。この事は尙後でも云ひたいと思ふが、兎に角、吾々が「社會上の平等」を要求する事は決して博士の謂ゆる人格主義もしくは文化主義と牴觸するものではないのである、否、人間の「自我をして自我たらしむる」ためには、決して今日の制度をそのまゝにして置いてはならないのである。社會上の平等を要求しなければならないのである。萬人をして同等の機會に住ましめよ。その時始めて、博士の謂ゆる「惡平等」でない眞の平等と差別とが生ずるであらう。

左右田博士は「……十八世紀末以降、貴族、僧侶に對する第三階級革命の成就に對して、十九世紀後半二十世紀初頭に於ける第四階級反抗の一面である、確かに文化史上有意義なる運動たるを失はない」と云つて、プロレタリアート階級の特權階級反抗を是認しながら、特權階級を認めずして私有財產制度を認むるは矛盾なるが故に、私有財產制度を認めんとするならば（認めざらんとせば誤植なりと信ず）論理上平等主義の上に立たねばならぬ。而して平等主義を認るものは……事實上には各人平等に非らざるが故に、遂に結果としての平等主義に到らざるを得ないで、その極知識上に於てすら之を認めざるべからざ

るやうになり、畢竟余の所謂惡平等主義を主張するものとなつてしまはねばならぬ。そして之が爲めに一切の藝術、一切の學問を驅つて民衆口腹の欲望の犧牲に供せられ終らねばならぬ。プラトーン、ゴエーテ、カント、ニユートン、レンブラント、ベートオブエン、芭蕉、紫式部を包含せざる第四階級の社會民主主義によつて、結局パンの問題のために此等一切の文化が其の足下に蹂躙せらるゝを見るは、吾等の忍ぶところに非ず」と結論して居る。

吾々は勿論、博士が如何に思想や藝術を尊重して居るかをこの一節によつて知る事が出來る。そしてその誠意に向つて感謝しなければならぬ。しかしながら、プラトーンやゴエーテを包含せざる第四階級の社會民主主義の行はれる世界に於て、結局、パンの問題のために此等一切の文化が其足下に蹂躙されてしまつて、世界が再び野蠻の狀態に歸るであらうと云ふ結論は、果して如何なる理由の下に引き出されるのであらうか。第四階級民は果して口腹のパン問題より外に何事をも考へ得ない人民であらうか。彼等には藝術的欲求も、思索的欲求も、研究的欲求もさうした一切の欲求がないのであらうか、即ち人間性の一切の現はれが、彼等にはその痕跡を絕つて居るのであらうか。成る程、彼等は今、さうであるかも知れない。しかし彼等をして終日終夜、如何にして食つて行かうかと云ふ事を考へさゞる生活さらしめた所以のものを考へて見るがよい。彼等から純眞なる人間性を閉息せしめた根本理由が何處に在るかを考へて見るがよい。それは即ち、彼等が今置かれて居る境遇即ち特權階級によつてその必至の生活資料を壟斷された慘めなる狀態の爲めでなくて何であらう。ところが、今、玆に何等かの社會的變革があつて、彼等にも亦一般人民と同じく、パン問題以上に出る事の出來る時間及び精力の餘裕が與へられたとしたら何うであらう。その時でも尙彼等はパンの事をばかり考へて居るであらうか。いや、その時に於てパンの事ばかりを考へて居ると云ふ事は寧ろ不可能である。彼等のうちに生みつけられて居る人間性は默つては居ない。彼等のうちに生きて居る、而も彼等を超越した大きな生命が爆發する。

のみならず、「特權階級を認めずして私有財產制度を認むるは矛盾」であるか何うかは論じないとしても（自分には經濟上の知識が甚だ薄いから此の事はもつと研究した上でなければ何とも云へぬ）「私有財產制度を認めざらんとするならば論理上平等主義の上に立たねばならぬ」と云ふ理由は何處に在るのであらう。（玆に云ふ平等主義とは無差別平等であることは博士の次の句「事實上には各人平等に非ざるが故に……その知識上に於

てすら之を認めざるやうになり」によつても明である）吾々が特權階級の存在を認めないのは（若しくは私有財産を認めないのは）植木屋が植木の葉を揃へる樣に萬人を一樣にならさうとするのではない。萬人の個性をも特長をも十分に認めながらも、而も萬人をして平等の地位に置いて、各自の個性なり特長なりを十分にのばさうとするに外ならない。人間の價値は私有財産の量をもつてのみ計らるべきでないのを吾々は知つて居るのである。吾々に取つては財産はたゞ、吾々の素質や才能を發展せしむるの手段に過ぎないのである。而して或者は此の手段を持ち、或者は此の手段を持たざるところに不公平と不平等の存する事を知り、萬人にこの手段を平等に與ふるに於て初めて各個人がその自巳特有の個性を發展させ得るのを知つて居るのである。即ち、博士は平等と云ふものに對する見解を誤つたのである。手段の平等をもつて直ちに結果の平等と混同してしまつたのである。

文化主義より勞働運動へ

茲に於てこれを見れば、博士等の文化主義もなほ未だ甚だ徹底せざるもの丶樣である。折角、社會問題や勞働問題を各個人の自我實現と云ふ人生觀上の最高の概念にまで導いて來ながら、博士等は共に、その、個人の自我實現に便する事を欲せずして、却つて敎育的特權を享有する知識階級の發達に最大の力調を置いて居る樣に見える。蓋し知識上及び學問上、自己の優秀を感じて居る博士達にとつては、その謂ゆる「劣惡者たちと同等に見らるゝ事は耐え得るところではなからう、しかし、何が博士達をして博士たらしめ、何が劣惡者をして劣惡者たらしめたかを思ふ時、博士達は玆に大に自らを謙り、「劣惡者」のために博士達と同等の幸福を享樂せしめ得る樣な手段を講ずべきではなからうか。眞正の文化主義は決して桑木博士や左右田博士の謂ふが如きものでないのを自分は信ずものである。

のみならず、この文化主義に根を置いて行はれて居る現今の文化運動なるものゝ多くも、自分をもつて見ればやはりブルジヨア階級の運動であるより以上には出ない。何となれば、諸君が行つて居る講演會も雜誌刊行も書籍出版も、それ等はみな（然り殆んど皆）たゞ知識階級もしくは有產階級の啓蒙より以上には出ないからである。今のところ、第四階級に屬する勞働者には、そんな講演を聽いたり、書籍を讀んだりする餘裕もなければ、第一さうしようとする意志すらもない。又、よしその意志と餘裕とがあつたにしろ、諸君の論議を諒解するに足る丈けの素養をも根氣をも持つて居ない。

勿論自分とても、それ等の啓蒙運動が遂に第四階級にとつて

何等の利得を有せぬものだとは思つて居ない。それ等の啓蒙運動が知識階級や有產階級に道德的自省を與へた時には、そこから何等かの運動が生れ得る事は自分もそれを信ずる。しかし、人間性の如何に醜惡なるかを知る事の出來た自分には、ブルジョア階級自身からの社會革命を待ちながら死んで行く程呑氣にはなれ得ない。

何時かは今日の資本制度の倒れる時が來るとする。しかしその間を何うしようとするのであるか。今日の特權階級の利益壟斷のために滅され行く一人の人の運命を（大多數とは云はない。たつた一人でよい。）自分の身に引き寄せて考へて見るがよい。その時何うして其麼いつ來るとも知れぬ未來に願をかける事だけで滿足する事が出來よう。

それ故に文化運動は更に一歩を進めねばならぬ。文化主義が堀り出したところの確固不動の眞理、萬人はその自己特有の個性を開發伸展せねばならぬ、と云ふ原理を現實せんがために、その自己表現の機會を萬人に平等に與へん事を要求すべきである。蓋し萬人が公平にその機會を得る事に於いてのみ此の根本義が實現されるからである。

今日は最早、賃銀の增給を要求する事のみをもつて滿足すべきでない。今日の制度の存續する限り、勞働者は如何にその賃銀を高昇せしめ得ても、資本家はそれに順じてその製品を高價に賣る事によつてそれを償はふとするに相違ない。故に、結局自らもその物價騰貴のために惱まされないでは居られないだらう。さうすれば賃銀値上げの成功も結局は大した利益を齎らさないものと思はねばならない。今日の勞働者や無產者の苦惱の眞因は、生產の手段を自らに持つ事の出來ないところに在る。資本や器械や土地やを、ある特殊な階級に專有されて居ると云ふところに在る。

然らば現代に於いて最も重要なる事は、萬人をして均しく生產の手段を使用し得る社會を實現せしむる事である。即ち何よりも先きに、生產方法の革命を目的とする勞働運動を實行する事である。

何をもつて自分はこれを云ふか。

蓋し、生產方法の如何は直ちにもつて社會の經濟的構造を決定し、その經濟的關係は人間の社會的及び精神的生活を決定するものだからである。そして社會は此の生產力の發展によつて當然に變革されるものだからである。

とは云へ、自分は決して極端なる唯物史觀說を奉ずるものではない。人間の意識の全部が全然これ等の外的關係によつてのみ構成されるものであつて、人間はそれ自身に於て何等の決定

力を有しない器械かなんかの様に云ふ極端なる唯物論者に同ずるものでない。たゞ人間の精神生活なるものも、否、人間そのもの丶成生發達も、舊式なる唯心論者の考へた樣に、外界からの刺戟には何等の關するところなく全然內部的に決定されるものではなくて、外界の事情の變化が甚大なる關係を有するものであると云ふ事實を信ずるからである。

玆に於て自分は、今日の社會問題の解決は單なる內的運動ばかりでもつては到底その眞の效果を擧げ得ない事を信ずるのである。內的運動は勿論大切である。自分は今日の多くの社會主義者の樣に、精神的方面を全然無視して、偏に物質的改善にのみ依らうとする事の餘りに偏頗なる事を思ふものであるが、それと同時に又物質的方面を全然閑却して偏に精神運動や文化運動にのみ賴らうとする事の更に〱偏頗なるを思ふのである。

精神運動は常に〱存在すべきである。しかも、それは常に外界の事情によつて條件づけられる事を思はねばならぬ。

中世紀に於て藝術が飛びきりの進歩と發達とをなしたのは、中世紀のギルト制度の下に、萬民が皆生活を享樂する餘裕をもつたからである事はクロポトキンの研究によつて明である。人間がパンにばかり追はれて居る時には、藝術や學問の方にその精力を展ばす事は出來ない。

然らば、吾々にして若し文化の興隆や人格の發展を望むならば、何よりも先づ、それをして可能ならしむる社會的條件を獲得すべきである。これ即ち文化運動が更に一歩を進めて勞働運動にまで進まねばならぬ理由である。

とは云へ、自分は決して極端なる唯物史觀說を奉ずるものではない。乞ふ、自分をして更に唯物史觀說に對する私見を述べしめよ。

唯物史觀

「物質的生活の生產方法は一般に、社會的、政治的、及び精神的の生活過程を條件づける。人類の意識が共存在を決定するに非らずして、寧ろ之に反し、彼等の社會的存在が共意識を決するものである」(河上博士譯による)とマルクスは云つて居る。これは恐らくマルクスの唯物史觀の根柢をなす概念であらう。そして、多くの社會主義者はこれによつて、人類の意識は全然その社會的事情によつて決定されるものであつて、人間自身の內部にその意識を決定する何等の力のないもの丶樣に思つて居るらしく見える。

然しながらそれは果して眞であらうか。

「人類の意識が共存在を決定するものでなくて、反つて共の社會的存在事情が人類の意識を決定するものである」と云ふこと

は自分もこれを信ずる。しかし茲に問題となるべきものは「意識」と云ふ事である。意識とは一體何を意味するものであらうか。思ふに、それは單なる精神活動と云ふわけには行くまい。何となれば吾々の精神は盛んに活動して居ても、吾々は一向にそれを意識して居ない場合があるからである。卽ち、吾々が意識と呼んで居る場合には、少くともそれは、吾々の人格のうちに何等かの手答へのあるものでなければならぬ筈である。若し吾々にして何等の抵抗を感ずる事なくして、眞空の中の彈丸のやうにフラ／＼と歩るいて居るものならば、恐らく吾々はその、自分の歩るいて居ると云ふ事を感じないであらう。吾々が自分の步るいて居る事を意識するのには、何等かの抵抗を感じなければならぬ筈である。卽ち、意識は、內部の或る力と外部の或る力との接觸によつて生れ來る精神上の或る感じでなければならぬ筈である。カアペンタアは、客觀が外部から戶を叩く、すると、內心はうちから之れに答へる。と云つた意味のことを云つたが、その意は蓋しこれであらう。內部の衝動ばかりで意識の起らう筈はなく、又、外部の客觀的存在ばかりで意識の起らう筈がないのである。

それ故に、人間の悟性は白紙同樣なもので、たゞ、經驗によつてその白紙が色づけられ、線を引かれ、そしてそれによつて共れを纒めた思想や感情が生れると云ふ唯物論をその意に於いてだけ正しいとしても、その經驗と云ふものが、內外兩面の力の接觸によらねば生じ得ないと云ふ事を忘れてはならない。

然らば、人間の生活に於て外部からやつて來る客觀が、生產力の變化と共に變化する社會事情であるとしても、それを受けて內部から人間の意識を決定するものは何であるか。

經驗論者が譬喩に用ゆる「白紙」と云ふ概念では生きた力がない。「鏡」と云ふ概念でも矢張り同樣である。而も吾々の直感的意識はその內部力の實に潑溂たる生命に充ちたものであるのを知るのである。そしてこれを、ショーペンハウエルは「生きんとする意志」と云つた。ベルグソンは「生の衝動」と云つた。自分はこれを「人間の本然力」と云はふとする。何れにしてもそれは、何物の障碍をも突破しようとする或る力である。白紙や鏡のやうな死物ではない。而も白紙や鏡のやうに、それ自らとしては決定された何等の色をも形をも有つて居ないものである。たゞ、それは一つの傾向力である。或る社會的事情に遭遇すれば、それに照應する或る定まりたる意識狀態を決定する或傾向力である。それ自身としては何等の固定的なる內容をもつては居ない。しかもそれで居て、さながらそれ自身を圓滿自足の絕對者とでも感じて居る樣に、自分自身を自由に生き自由に

展びようとする或る不可抗の力である。

桑木博士の「形式上の絶對や左右田博士のア・プリオリも、要するにかうした內部力を指して居るのであらう。自分はこれに、野村氏のやうに、何等かの內容を與へる必要がないものと思つて居る。否、內容なんか與へようとすると動々もすれば野村氏自身が非難した樣な力のない形式的概念に墮してしまふ恐れがあると思ふのである。

が、それは兎も角、吾々は何うしても此の內部力を認めないわけには行かない。そして玆に、この內部力を認めないところに、唯物史觀の缺點がある。

しかし、同時にまた、この內部力が生產力の變化によつて惹起される社會的事情に對應するためにそれ自らの態度、行動、思想、感情、を決定しなければならぬのは事實である。もしこれ等の客觀的社會事情が存在しなかつたならば、この內部力がそれ自身として獨立に、それ自らの意識を決定してゆくと云ふ事はないであらう。それ故に「人類の意識が其の存在を決定するのでなくて、反つて社會的存在事情が人類の意識を決定する」と云ふマルクスの公式は眞理だと云はねばならない。そして斯くの如く人間の精神活動と社會事情とが相卽不離の關係に在るものとするならば、社會問題解決上、單なる精神運動ばかりでは駄目なことも認めねばならない。そして、更に進んで、社會事情を決定する勞働問題にまで進まねばならぬ事を諒解すべきである。

時機は切迫して居る

とは云へ、社會事情の決定は決して人爲的に行はるべきものでない。假にそれが行はれたとしても、まだ本當にその時機に達して居なかつたならば、恰度月たらず子供の樣に、その健全なる發達をなす事は六ケ敷いだらう。

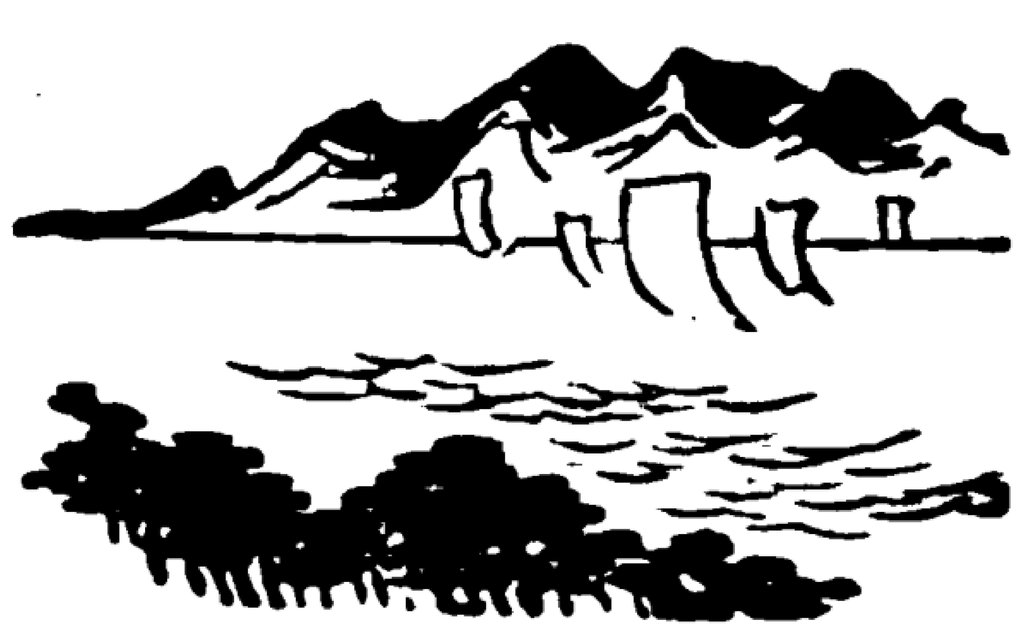
だが、今やその時機は切迫して居る。今日の社會關係では、そのお蔭を蒙つて居るのはたゞ少數の特權階級ばかりである。大多數の特權階級の窮迫は益々その度を高め、從つて、今まではこれが正當な社會關係だとばかり思つて居た者も、今は段々とその不合理不公平を自覺し始めた。そしてその自覺は更に、個性の自由なる開發を望む人間の根本要求と結び付いて益々その深刻の度を加へて來た。人々は今や、稼いでも稼いでも貧乏に追はれどほしで居る自己の哀れなる地位を悟り初めた。而も彼等はたゞ食つてさへ行けばいゝ、と云つた樣な呑氣な考へだけでは滿足しきれずして、更に、自己のうちに勃勃として動いて居る生の力の抑ふべからざる焦燥を感じつゝある。この力は決してこれを抑壓し了うする事は出來ない。何處までもそれを

抑へようとすれば、結局何時かは爆發しないわけには行かない。

その生の力は叫ぶ。先づ生活の安定を得よと。吾々にして若し、今日の社會關係上、かゝる安定を得る事は到底成就し難い事だと辯明するならば、彼は更に理知の力を借り來つて、そんな道理のない事を説明する。それでも尙吾々は、理屈は理屈でも事實そんな事は不可能だと云ひ張るならば、彼は更に意志と感情とをつれて來る。そして云ふ。

「然らば、汝の奪はれたる生産の手段を取り戾せ、そして一切の人に平等にその手段を所有せしめよ。その時始めて余は滿足するであらう。余が余の自由を得た時に、余の成就し得る文化價値が如何に低劣なものである事を悟つたとしても、余は喜んでそれを樂しまう。それが余に賦與された凡てゞあるから。しかし又、たとひ余が、今日の不自由なる世界に於て、その自由なる世界に於けるよりも三層倍も高い文化價値を實現し得たとしても、若し余に賦與されたる天賦が更にそれより大であつたとするならば、余は決してそれに滿足する事を得ないであらう。要はたゞ自己を自由に生きられさへすればいゝのである。而して今日の社會は余にそれを許さない」と。

かうした自覺と要求とは、今や全世界の人類の意識中に蠢動として生動して居るのである。



—六・二五—

苦役と貧窮

木村久一

(一)

今日の社會に於ける生活は、大多數の人に取つては艱難の生活である。今日の社會に於いては、大多數の人は毎日生活の爲に、時間の大部分を勞働に捧げて、而も生涯貧窮を脫し得ない。畢竟艱難は我等の運命であつて、我等はこれから逃れることが出來ないものであらうか。

今日の勞働の苦しいのは、主として時間が長い爲である。故に勞働の苦痛を輕減する方法は、勞働時間を短縮することである。併しながら大多數の人に取つては、勞働時間を短縮することは中々の難事である。勞働時間を短縮する最も簡單な方法は收入の減少を甘んじて、これを短縮することであるが、最も簡單な方法は必ずしも最も良い方法ではない。今日の社會に於いては、この方法を實行し得る境遇にある人は極めて少ない。大多數の人は、毎日の大部分生活の爲に働いて、而も漸く生きて居るだけに過ぎないのであるから、この方法は大多數の人には云ふべくして實行することが不可能である。故に大多數の人の勞働の苦しみを減ずる方法は、收入を減じないで勞働時間を短縮することでなければならぬ。而してこれはこれまで、絕えず要求されて來た事であり、この爲に我等の生活は、僅かながら段々向上して來たのである。

併しながら此處に疑問が起る。それは我等の勞働時間を、今日よりも短縮すれば、生活物資の生產が減少して、我等の生活が全體として、脅かされはしないかと云ふ疑問である。若しさう云ふ恐れがあるなら、我等の勞働時間を短縮することは、望ましい事ではあるが、許されない事である。この點は果してどうであらうか。

百餘年前マルサスは論じて云つた。人口の增加は原則としては、幾何級數的に進むものである。即ちこれを妨ぐる要因がなければ、人口は二十五年毎に二倍になるものである。併しながら食物には限りがある。人智を應用してその生產を增加しても、

その增加は精々算術級數的にきり進まない。即ち人口の增加率は、食物の增加率よりも遙かに高いのである。併しながら人口增加の可能性が如何に強くとも、食物がなければ生存が出來ないから、結局人口は、大抵食物の許す限り、ギリ〲一杯の極度に達して居るものである。故に大多數の人は、漸く生きて居るだけの狀態以上に上ることが出來ないものである。時に新しき發見發明等に由つて、食物の生產が增加すれば、一時この生活の窮迫に、多少の緩みが生ずるけれども、人口增加の可能性は今述べたやうに强いものであるから、直ちにこの緩みに乘じて增加する。故に食物の生產に於ける新しき發見發明等に由つて生ずる生活の緩みは、ホンの一時であつて、間もなく舊の窮迫に復するものであると。然らば大多數の人に取つては、苦役は免るゝことの出來ない運命であらうか。

マルサスに由れば、大多數の人は、漸く生きて居るだけの狀態以上に上ることが出來ないものだと云ふが、その後の有樣を見れば、人々の生活は概して段々向上して來た。この點に於いては、マークスの豫言も當らなかつた。謂はゆる賃銀の鐵則には掛値がある。今日の勞働者は、マルサスの時代やマークスの時代の勞働者に比ぶれば、概して云へば、これでも餘程高い生活をして居る。而して若し資本主義に伴なふ分配の不公平がなかつたなら、彼等の生活はまだ〲向上したであらう。マルサスの時代に續く一世紀は、歐米に於いて、歷史上最も迅速に人口の增加した時期である。然るにも拘はらず、この間に人々の生活は一般に向上した。此處に問題解決の手がゝりがあるのである。人口が迅速に增加したにも拘はらず、人々の生活が一般に向上したと云へば、この間に產業の生產力が、非常に高まつたことが想像される。これを以て見れば、マルサスの說には缺陷があることが分る。人智の進步に由る食物の增加率は、マルサスが考へた程低いものではない。

マルサスの時代以後、科學は非常に進步し、產業の生產力は驚くべく高まつた。それは遙かにマルサスの想像以上である。而してこの傾向は、勿論今日も續いて居る。近頃歐米には、勞働能率の實驗的研究から、勞働時間を六時間にしても、優に八時間の場合と同じ勞働能率を得ることが出來る。勞働時間が長ければ、それだけ勞働能率が多いだらうと考へるのは迷信に過ぎない。八時間勞働でも、六時間勞働でも同じ勞働能率を得ることが出來る以上、勞働者の自由と幸福の爲に、須らく六時間勞働にすべきであると論ずる人が少なくない。故に今日の社會に於いても、勞働時間を短縮することは決して不可能ではないのである。

今日の社會に於いても、勞働時間を短縮することは、決して不可能ではないけれども、これを實行するには困難がある。即ち資本家がこれを好まない。勞働時間を短かくすれば、それだけ勞働者に餘暇が出來る。勞働者に餘暇が出來れば、彼等に修養の機會が出來る。その結果は彼等の覺醒である。資本家はこれを恐れる。勞働者が覺醒すれば、資本家が彼等を掠奪することが六かしくなる。故に今日の勞働時間は、短縮の餘地があるけれども、資本家がこれを好まない。彼等は種々の方策を廻らして、これを短縮しまいとする。

今日の生産法は、方針として資本家の利益が眼中にあるだけで、勞働者の自由や幸福はどうでも可いのである。今日の生産法は、資本家の利益を主眼として考案したもので、勞働者の自由や幸福を主眼として考案したものではない。故に若し今日の生産法を、資本家の利益を主眼とせず、勞働者の自由と幸福を主眼として改造すれば、生産力を減ずることなく、今日の勞働時間を夥しく短縮することが出來るのである。併しながらかくの如き改造は、資本家が喜ぶ筈がないから、これを實行することは矢張難事である。

要するに今日の勞働時間は、短縮の餘地があることは確かだけれども、此處に人口の問題が再び擡頭して來る。成程今日のところは、勞働時間の短縮は可能だとしても、遠い將來はどうであるか。人口增加の可能性は無限である。併しながら人智の進歩に由る食物の增加には限りがあらう。然らば矢張我等は、結局長時間の勞働に苦しまなければならぬものではなからうかと。この點に關しては、後に論ずる機會があるから、その時詳しく論ずることゝして、此處には省略して置く。

（二）

勞働時間が短かくなれば、我等の苦痛は夥しく減少するが、併しながら苦役を脱しただけでは、我等の艱難はまだ半分きり取り除かれたものではない。我等は更に、貧窮から救はれなければならぬ。今日の社會に於いて、大多數の人が貧困なのは、分配が不公平だからである。而して今日の資本主義が存する限り分配の公平は不可能であらう。今日の社會に於いては、有產者は勞せずして莫大な利益を收め、無產者は生涯毎日の大部分苦役して、而も極めて低い生活きり營まれない。今日は以前に比ぶれば、人々の生活は概して向上したけれども、まだ漸く生きて居るだけの狀態にある者が甚が多い。

分配をより公平にせんが爲の運動は、勞働時間を短縮せんが爲の運動と共に、これまで絶えず試みられて來た。我等の生活

が僅かながら段々向上して來たのはこの爲である。而してこの運動は、何時まで續くであらうか。何處まで行けば無產者は、これで分配が公平になつたと云ふであらうか。云ふまでもなく彼等は、彼等の分前が非常に增大し、有產者の分前が非常に減少して、有產者の有產者たる利益が消滅した時、初めてこれで分配が公平になつたと云ふであらう。而してその時まで、分配をより公平にせんが爲めの要求は、繼續されるであらう。故に資本主義は、早晚必ず崩壞すべき運命にあると云ふことが出來る。併しながら資本主義の崩壞は、マークスが考へたやうに、自然に獨りでは來ないであらう。それは無產者の意志に由つて來るものであつて、無產者の意志が働かなければ、自然に獨りで來ることはないであらう。

資本主義の社會に於いては、公平な分配は不可能と考へられるから、此處に新しい社會が理想される。而して理想される新しい社會は種々あるが、共に非資本主義の社會なることは同じである。さて然らば非資本主義の社會に於いては、如何なる分配が公平な分配とされるか。これには二つの主張がある。一は無條件に、生活の須要品は凡ての人に必要なだけ消費せしめ、量に限りのある物品は、欲する者に平等に分配すべしと云ふ主張である。これは無政府主義の主張である。他は分配を無條件とせず、勞働を條件として報酬を與ふべしと云ふ主張である。但しこの主張に於いても、幼年者、老年者、及び不具疾病等の爲に勞働不能な者は勿論例外とする。これは社會主義の主張である。新露西亞は社會主義の國なる爲に、その憲法には、『働かざる者は食ふべがらず』と云ふ言葉を標語とすると云ふ一條がある。社會主義の主張は更に二つに分れる。一は如何なる勞働に對しても、分配を平等にすべしと云ふ主張であつて、他は熟練を要する勞働、効用多き勞働等に對しては報酬を多くし、然らざる勞働に對しては少なくすべしと云ふ主張である。前者は徹底せる社會主義の主張であり、後者は穩和なる社會主義の主張である。

併しながら、かくの如き新しき社會を理想しても、かくの如き新しき社會は、果して實現が可能なりやと云ふ疑問が起る。これらの中、最も實現困難に見えるのは、云ふまでもなく無政府主義の社會である。故に先づ無政府主義の主張から檢査して見やう。無政府主義が實現可能なら、社會主義が更に實現可能な筈である。

無政府主義の主張は、無條件に凡ての人に、生活の須要品は必要なだけ消費せしむべしと云ふのであるが、これは果して可能であらうか。無政府主義を說く者は、可能だと云ふ。而して

無政府主義が、主義として兎に角立つて居るのは、この可能を略證明して居るところにある。無政府主義の社會に限らず、凡て非資本主義の社會に於いては、今日の社會に於けるよりも、遙かに人智が進歩するだらうとは、容易に想像し得る事である。今日の社會に於いては、凡ての人が欲するだけ敎育を受けて、禀けて生れた才能を、十分に發揮することは不可能である。今日の高等敎育は、裕福な家庭に生れた、極めて少數の者きり受けられない。而も才能の分布は、裕福階級に豊かに、窮乏階級に少ないと信ずべき理由がない。故に今日の社會に於いては、窮乏階級に生れた者は、豊富な才能を禀けて生れても、これを發揮する機會が非常に少ない。卽ち闇から闇に葬られる才能が非常に多く、非常な才能の浪費が行はれて居る。然るに非資本主義の社會に於いては、かくの如き才能の浪費は行はれないから、人智が非常に進歩し、働力を節約する。而も生産力の高い機械が澤山發明される。その結果勞働時間を夥しく短縮し得るのみならず、勞働を非常に樂なものとすることが出來、而も十分の生産が出來る。今日の人智の程度を以てしても、資本家の利益を主眼とせず、働力の節約を主眼として、生産法を考案すれば、働力の節約はまだ〳〵出來るのである。

かくの如き社會に於いては、生活の須要品を、凡ての人に必要なだけ消費せしむることが出來ると云ふことは、あながち空想ではない。昔は橋を渡るにも、道を通るにも、税を取られたものである。然るに今日は、これらの税はなくなつた。今日に於いても、かくの如き無料制を、水道電車汽車等に及ぼすことは、實行の意志さへあれば極めて容易である。目下我國に於いては、米價騰貴の爲に、怨嗟の聲が朝野に喧しいが、如何に米が高くとも食はないで居る譯には行かないから、高い〳〵と云ひつゝ、どうにかかうにかして、兎に角大多數の人は、米を食つて居るのである。卽ち知る、如何に高くとも、我國には目下國民が食ふだけの米は先づあるのである。只今日の資本主義の社會に於いては大多數の人がこれを自分の口に入れることが困難なだけである。目下我國には、國民が食ふだけの米がないのではない。その分配が旨く行つて居ないだけの事である。故に若し今日の社會と違つて、非資本主義の社會であつたなら、今日の米の量を以てしても、凡ての人に、必要なだけ米を消費せしむることが出來る筈である。『金持矢張飯三杯』と云ふ諺がある通り、米の如き生活の須要品は、何人と雖も、或る量以上に消費することが出來ないものである。それを慾張つて、出來るだけ自分の所に集めやうとするのは、資本主義の社會の心理である。故に生活の須要品を、凡ての人に必要なだけ消費せしむ

ると云ふことは、この方面の事を餘り考へて見たことのない人が、卒然考へる程難事ではないのである。況んや非資本主義の社會に於いては、既に述べた如く、人智が非常に進歩して、生産力が非常に高まるから、供給に不足するやうな事はないであらう。只かくの如き社會に於いては、自然物資の浪費が行はれるだらうと考へられるが、かくの如き社會に於いては、人々が好く敎育されて公徳が進んで居るから、濫りに物資を浪費するやうな事はないであらう。今日に於いても、水道の水は必要なだけ、自由に使はせて置くけれども、水道の栓を開け放しにして置く人はないではないか。

（三）

併しながらかくの如き社會に於いては、人口がどし／＼增加するから、如何に人智の進歩に由つて生産力が高まつても、結局生活物資の不足に到達するであらう。今日人口が餘り增加しないのは、生活難の爲である。一旦人々の生活が安全になつたなら、人々は生殖に制限を加へず、どし／＼人口が增加するであらう、と云ふ異論があるかも知れない。これは一見非資本主義の社會に對する、ゆゝしき障礙のやうに見える。併しながら實は、これは大した障礙ではない。歐米諸國に於いては、近年人口の增加率が、段々減じて來た。人口の增加率は、文明の程度が高まるにつれて、段々低くなるものである。これには二つの原因がある。一は生理的であつて、他は人工的である。高等敎育を受けて文明の生活をすれば、生理的に自然に産兒が少なくなる。我國には『貧乏子澤山』と云ふ言葉があるが、無産者を意味するプロレタリーの字義は、矢張子澤山であることは面白いではないか。西洋でも貧乏人は子澤山なものと見える。これに反して歐米の統計を見ると、大學卒業者等の産兒數は非常に少なくなつて居る。かくの如き傾向は、人類に取つてゆゝしき大事ではないか、これを見ても文明の生活は、自然に反した生活なることが分る、と論ずる人があるかも知れない。併しながら動物界の有様を見れば、我等は高等な動物程、繁殖率が低いことを見るのである。故にこの議論の根據は、甚だ怪しいと云はなければならぬ。

文明の程度の高い社會に於いて、人口の增加率が低い第二の原因は人工的である。好く敎育されて思慮ある人は、無分別に多くの兒を産むことは、自分に取つても子供に取つても幸福ではないと考へる。その結果産兒制限が行はれる。成程今日に於いては、産兒制限は生活難の爲に行はれることが多い。併しながら産兒制限の動機は、生活難ばかりではないことは、子供の養育などに少しも困らない筈の階級に於いても、生活難に苦し

む階級に劣らず行はれるのを見ても分る。一體濫りに産兒制限を非難するのは、軍國主義の思想である。少なくとも資本主義の思想である。今日の世界を見るに、人口の増加率は、文明の程度の高い國程低い。只獨逸だけは、文明の程度が英米佛に劣らないにも拘はらず、人口の増加率が割合に高かつた。それでも最近は、ずつと低くなつた。これは何故かと云へば、獨逸は軍國主義の國だからである。軍國主義の國に於いては、戰爭の爲に人口の多からんことを望む。故に歐米諸國中、獨逸位八釜しく産兒制限を取締つた國がない。而も獨逸の當局者の、今度の戰爭を辯護する口實には、獨逸は年々増加する人口の吐き出し所なる、殖民地がなければならぬと云ふのがあつた。勿論得手勝手な辯護である。

併しながら産兒制限を八釜しく云ふのは、軍國主義の國の當局者ばかりではない。マケーブは或る本の中に、避姙防止運動に就いて、面白い事實を指摘して居る。それに由れば、英國の避姙防止會の會員は、平均一人半の子供きり有つて居ないと云ふ。かくの如き會の會員は、勿論主として有産者である。彼等の心を暴露すれば、我等有産者は都合上避姙する、併しながら汝等無産者は、避姙してはいけないと云ふのである。無産者が中々貧窮を脱し得ない原因の一つは、子澤山な事である。而して無産者を掠奪して徒食して居る有産者に取つては、この狀態が却て都合が好いのである。要するに非資本主義の社會に於いては、生活難がない爲に、人口がどし／＼増加するだらうとは考へられない。

非資本主義の社會に於いても、人口はマルサスなどが考へた程、迅速に増加するものではないとしても、地球の大きさは有限なるに反して、人類の生命は先づ無限と見なければならぬ。故に人口は、如何に徐ろに増加しても、遂には非常な數に達するであらう。然らば人智の進歩に由つて、如何に生産力が高まつても、結局生活物資の増加は、人口の増加に追ひ附かれるではあるまいか、と云ふ疑問が起る。これは人智の進歩に由る、生活物資の増加を危ぶんだ疑問である。併しながらこれも、決して大した疑問ではない。例のクロポトキンは、人智の應用に由つて土地の生産力を、如何に驚くべく高め得るかを、事實に基づいて詳しく説いて居る。併しながら今日に於いては、態々クロポトキンの説などを持ち出す必要がない。先頃『戰爭の生理』と云ふ一書を公けにして有名になつた、獨逸の生理學者ニコライの説に由れば、人類が戰爭を斷念し、徒食階級の贅澤を廢止し、協同して産に努むれば、今日の人智を以てしても、地球をして今日の人口の二百倍、即ち三千億位の人口を養ふだ

けの生活物資を、優に生ぜしむることが出來ると云ふ。我國の三宅（驥一）博士も、矢張生物學の研究から、略同様の結論に達して居る。況んや人智は、今後何處まで進歩するか分からない。故に生活物資の増加も、殆ど無限と見ることが出來るのである。

（四）

これまで述べた事に由つて、非資本主義の社會に於いては、勞働時間を夥しく短縮し得ることが分つた。而してそれは、必ずしも一時だけではないことも分つた。併しながら既に述べた如く、無政府主義の主張は、生活の須要品は無條件に、凡ての人に必要なだけ消費せしむべしと云ふのである。此處に無條件にとは、社會主義の主張のやうに、勞働を條件としないでと云ふ事である。勞働をするしないに拘はらず、生活の須要品は、凡ての人に必要なだけ消費せしむべしと云ふのである。蓋し無政府主義は、別言すれば絶對無強制主義である。強制と云ふ事を飽くまで排斥するのが無政府主義の精神である。併しながら無政府主義の社會に於いては、勞働を強制することなく、果して生產に差支が起らず、供給に困ることがないであらうか。

無政府主義の社會に限らず、凡て非資本主義の社會に於いては、勞働時間を夥しく短縮することが出來るのみならず、勞働を非常に樂なものとすることが出來る。予は前に、今日の社會に於いては、非常な才能の浪費が行はれて居ると云つたが、資本主義の社會に於いては、精神的にのみならず、物質的にも非常な浪費が行はれて居る。先づ今日の社會に於いては、戰爭と云ふ無用有害の長物がある。物質的には、これは浪費の尤なるものである。如何なる浪費と雖も、他にこれ程の浪費はない。若し戰爭に費す勞力と財力を、生產に費したならどうであらう。戰爭の絶えない今日の社會に於いては、平時に於いても非常な浪費が行はれて居る。軍備がそれである。軍隊は莫大な人を生產から遠ざけて居る。併しながら生產に從事しないで居るのは軍人だけではない。軍器や軍需品の製造に從事して居る者も、生產から離れて居るのである。彼等は製造に從事して居るけれども、彼等が製造して居るものは、ラスキンの謂はゆるwealthではなくして illth である。故に生產ではない。更に今日の社會に於ける產業は、資本主義の當然の弊害として、非常に浪費が多い。馬鹿らしい競爭、馬鹿らしい廣告等の爲の、勞力と財力の浪費は大したものである。この外に今日の社會に於いては資本主義の經濟組織に伴なふ物々しい道具立の爲に、直接生產に關係のない仕事に、從事して居る者が非常に多い。數へ來れば資本主義の社會の浪費は實に多い。裕福階級の徒食などは數

ふるまでもない。

然るに非資本主義の社會に於いては、これらの浪費は凡てなくなるから、これだけでも人々の勞力が夥しく節約される。それに今日の生産の如く、資本家の利益を主眼とせず、勞力の節約を主眼として、生産法を考案することが出來るから、この方面からも少なからず、勞働を樂なものとすることが出來る。これに加へて非資本主義の社會に於いては、既に述べた如く人智が非常に進歩するから、この方面からも夥しく勞働を樂なものとすることが出來る。要するに非資本主義の社會に於ける勞働は時間が短かいのみならず、非常に樂な勞働である。

非資本主義の社會に於ける勞働は、かくの如く樂なものであるが、此處に都合の好い事には、我等人間は生理的に、或る程度の筋肉活動が必要なものである。成程今日の社會に於ける勞働は、一般に苦役である爲に、我々は一般に勞働に對して、嫌惡の情が習慣になつて居る。併しながら人間は本來、過重でない限りは勞働を嫌ふものではない。適度の勞働は實に我等の生理的必要であつて、無爲無活動は却て苦痛なものである。否、苦痛なばかりではない。健康に害がある。故に毎日三四時間位の樂な勞働は、何人もこれを嫌はないであらう。故に強制がなくとも、他人の批評に對する顧慮等より、大多數の人は進んで勞働に從事するであらう、とは無政府主義を説く者の主張であるが、果してさうであらうか。この點は餘程疑はしいと思ふ。

併しながらこの點は先づ可いとしても、無政府主義の社會は他の點から實現が不可能である。これは到底辯護の餘地のない無政府主義の缺陷である。既に述べた如く、無政府主義は絶對無強制主義であつて、飽くまで強制を排斥する。故に政府と云ふ強制機關を否定する。故に無政府主義の社會に於いては、野心家が起つて、或る人々を配下とし、武器を造り兵を練り、他の人々を征服して、暴虐を逞しふするやうな事があつても、強制力を有する政府がないから、これを如何ともするとが出來ない。故に無政府主義の社會は、たとひ實現しても、直ぐ瓦壞してしまふであらう。否、初めより實現しないであらう。結局無政府主義の社會は空想に過ぎない。……

（五）

次ぎに然らば社會主義の社會はどうであるか。社會主義の社會に於いては、無政府主義の社會と違つて、勞働を強制する。社會主義の社會に於いては、勞働しない者には生活物資を分配しない。『働かざる者は食ふべからず。』とは社會主義の標語である。のみならず社會主義の社會には、無政府主義の社會と違つて政府がある。故に社會主義の社會の實現は、確實と思はれる。

併しながら社會主義の社會は、その行はるゝ制度の如何に由つては、ゆゝしき弊害がある。此處にはかくの如き弊害を、一々列擧する餘裕がないが、只一例として、言論に關する一點だけを述べて置く。

社會主義の社會に於いては、その本來の性質上、政府の權力が强大になり勝ちである。社會主義は生活に對しては良き保障であるが、自由に對しては餘り良い保障ではない。無政府主義は自由主義に由つてインスパイアされたものであつて、更に別言すれば徹底自由主義である。併しながら社會主義は、これと趣きが違ふ。無政府主義の動機は主として精神的なるに反し、社會主義の動機は主として經濟的だと云ふことが出來る。

社會主義の社會に於いては、勿論民間に出版者がない。出版の如き事業は凡て國家に由つて經營され、圖書を出版し得る者は國家だけである。故に此處に不便が起つて來る。卽ち出版すべき原稿の選擇はどうするか。凡ての原稿を出版することは勿論不可能であるから、當然原稿の選擇が行はれる。而して原稿選擇の任に當る者は、形式上はどうでも詰るところ當局者である。併しながらこれが問題なのである。卽ち文學の方面なら、當局者の趣味嗜好に合はない原稿は、凡てはねられるであらう。こんな社會は今日の社會よりも惡いと云はなければならぬ。今日の社會に於いては、本屋さへ承諾すれば、大抵な原稿は出版が出來る。故にかくの如き社會に於いては文學の進歩は望まれない。蓋し當局者が、文學の鑑定に於いて萬能なることは到底望まれないからである。これは文展の審査に對する、不平と非難が絕えないのを見ても想像することが出來る。又政論の方面なら、當局者の喜ばない原稿は、凡て斥けられるであらう。特に當局者の施政や、現制度を忌憚なく批評した議論などは、必ず排けられるであらう。蓋し現制度を忌憚なく批評することは、如何なる社會に於いても、罪惡視されるからである。併しながらかくては、社會に進歩がなくなつてしまふ。又文明の發達が止まつてしまふ。蓋し社會の進歩と文明の發達は、言論の自由があつて初めて可能だからである。

以上は社會主義の社會の弊害の一例として、言論に關する一點を述べたのであるが、兎に角社會主義の社會には、色々な弊害がある。而してそれは主として自由の制限である。併しながら進歩は只自由のある處にのみ可能なことを忘れてはならぬ。但し此處に述べたやうな社會主義は、社會主義の中でも、國家社會主義と稱する極端な一種に過ぎない。社會主義には外に色色な種類がある。

無政府主義の社會は實現不可能だけれども、その自由には價

値がある。これに反して社會主義の社會は、實現可能だけれども、自由が制限され勝ちである。故に眞に善い社會は、絶對の自由は勿論望まれないが、出來るだけ多くの自由が許されるやうに考案した、一種の社會主義の社會でなければならぬ。卽ち社會主義の長所に、無政府主義の長所を加味した社會である。それは具體的に云へばどんな社會かを述ぶれば、餘り本文の題と緣が遠くなるから、此處には省略する。

附言

終りに本文の出來た次第を附言して置く。『中央公論』が『勞働問題號』を發行するに就いて、予は例のラッセルの思想の、勞働に關する部分を紹介せよと云ふ注文を受けたのであるが、予は初め例の有名な、創造衝動と所有衝動の說を紹介するつもりで居つた。而して最初は何人もする如く、これを徹底的に紹介しやうと云ふ大きい希望を抱いて居つた。併しながら俗事に追はれて、手もつけない中に數日が立つてしまつた。そこで數へて見ると與へられた日數も少なくなつたから、今度は讓歩をして、『自由を得るの道』の中に、『仕事と報酬』と云ふ一章があるのを幸に、これを紹介しやうと考ふるに至つた。而して創造衝動と所有衝動の說は、近頃福田博士や室伏君も紹介して居るし、予自身も嘗て一文の中に、これを紹介したことがあるからと云ふ考へも起つて來た。ところが兎角して居る中に、又手がつかないで三四日が經つてしまつた。而して與へられた日數は餘すところもう幾日もなくなつてしまつた。かうなつてはもう『仕事と報酬』の一章の紹介も六かしい。杜撰な紹介をされては原著者が迷惑であらう。他人の思想の紹介と云ふものは、忠實にしやうと思へば中々六かしいものである。かう考へると進退谷まつてしまつた。そこで思案の末、遂に一案を思ひ附き、見る如き題を附して、ラッセル思想の紹介の代りに、本文を草したのである。かくの如く本文は、ラッセルの思想の紹介の代りに書いたのであるから、大體ラッセルの思想を以て書いたものである。併しながらラッセルの本と首引きしながら書いたものではないから、ラッセルの思想の紹介と云つては、原著者が迷惑するであらう。畢竟本文は予とラッセルの合ひの子と云ふべきものであらう。かくの如き性質の文章であるから、ラッセルの原著を讀んだ人から見れば、本文は隨分馬鹿らしいものであらう。予はこれを思ふと慚愧に堪へない。

生を賭して

最新版

富本憲吉裝幀

□定價金九十錢□

□送料一六錢□

版元 和田弘榮堂 警醒社書店

著者が過去の半生を圍繞せる、幾多の恐ろしい恐ろしい事件の記錄は、遂に此一書となつて公表せられた。狂人、犯罪者、死刑囚、無期懲役囚、變態心理の所有者、血腥き短刀、嫉妬、猜疑、美しき信仰、哀れな死、讀む者をして魔街を彷徨ふの感あらしめ、謎の涙堂を訪ふの思あらしむ。

沖野岩三郎著作集（1）

□有島武郎 森本厚吉 共著

リビングストン傳

四版

熱實なる基督の傳道者にして、亞非利加の大探檢家なるリビングストンの傳なり。重版に際し、著者兩人は各自の信仰に對する率直なる告白を長序として附錄せり。

富本憲吉裝幀 定價九十五錢 送料金六錢

□今井三郎著

社會運動と民主思想

新刊

本書は曩に著はして好評三版を重ねたる「宗教と民主思想」の姉妹篇なり。

四六判二百卅頁 定價九十錢 送料金六錢

□大橋房子著

イスラエル物語

新刊

著者は未だ妙齡の才媛、イスラエル建國四千年の歷史を藉りて玆に一大長篇を描く。今や文壇驚異の的

喜多村進裝幀 定價貳圓 送料金六錢

□富永德磨著

基督再臨說を排す

近刊

幾多の駁論中にありて最も異彩を放ち、斬然一頭地を拔ける再臨說反對論なり。蓋し兩派の人士が必讀の好文字。

菊判六十五頁 定價四十五錢 送料金二錢

版元 東京京橋尾張町 振替東京五五参 警醒社書店

婦人勞働問題の一面

山川菊榮

■

婦人勞働問題は、資本勞働の對抗に基くその本來の性質に於て何等男子勞働問題と異なる所をもたない。而して究極の解決が自覺せる勞働者の一致的行動に俟つの外ない點も同一である。只だこの問題が男子のそれと異る點は、婦人の生活が男子の生活よりも遙かに遲れて居る結果、その間に容易に團結の機運を促し難い一事である。

有史以來、婦人は常に家庭奴隷として無給の勞働に甘んじて來た。彼等は家族の衣食住に關する一切の仕事を引受けて、無限に煩瑣な、不規則な、休息もなければ就業時間の制限もない、最も原始的な勞働狀態に慣れて來た。されば彼等は只で働くことや、無暗矢鱈に使はれることには全く無感覺になり切つて居る。彼等に在ては、無給の勞働は何の問題ともなり得ないほど當然至極な、普通の狀態なのである。それ故偶々家族以外の者の爲めに多少の勞力を寄與した時、それに對して幾何かの報酬が與へられゝば、その働いた時間や勞力との比例や、その仕上げた仕事の經濟的價値如何などは問はず、たゞ報酬を得たことそれ自身に滿足する傾が少くない。謂はゞ、家庭奴隷たる婦人に在ては、不拂勞働が普通の、當然の狀態なので、偶々その仕事の一部に對して仕拂を受けることは、寧ろ破格の恩典たり意外の儲け物たる感無きにしも非ざる有樣である。

然らば、婦人は何故に不拂勞働に甘んずるか、何故に激しく働きつゝ無收入の境界に甘んじて居るかと云ふに、これを說明するものは婦人の經濟的依賴主義を措いて外には無い。即ち婦人は男子に扶養せらるゝのが原則となつて居るの一方で只奉公をしても食べるに困る恐の無いのが、その原因である。これは男子側の扶養の義務と、婦人側の奉仕の義務とに依て成立し維持せられて居る今日の家庭制度——封建時代の主從關係を其儘の——が存續する限り、已むを得ない狀態である。今日の家庭は、家婦——即ち家庭奴隷——あつて始めて存立し得る制度で

ある。そして婦人側から見れば、その時間と精力とを無制限に誅求して、然も何等の報酬をも齎らさぬ家庭制度のある限り、その解放、その經濟的獨立は到底不可能であり、隨つて男子の扶養も必要なら、その結果としての貞順——乃至奴隷的服從——も餘儀ない譯になつて來るのである。故に婦人の原始的勞働を必要條件とする今日の家庭制度は、必然に女子の心身を拘束して、之を男子の保護と權力との下に置かなければ已まない制度と云ふことが出來る。

一方に家庭に於ける婦人の無給勞働てふ普遍的事實がある以上、婦人勞働の一般市價が極度に低廉なのも又已むを得ない。實際、家庭に在て年百年中、明けても暮てもあらゆる種類の雜用を無給で仕慣れて居る婦人に在ては、家庭以外の勞働は、いかに割に合はなくても、兎に角幾何かの報酬を齎らすだけマシであるし、一方自己の生活は男子の扶養に依賴する氣持があるので、自ら進んで正當なる賃銀を要求するに至らないのである。

■

家庭制度が婦人勞働問題の上に加へて居る今一つの困難は、家內工業の件である。產業革命は、手工業を機械工業に轉移し、家事を簡易ならしめて、婦人が家庭に留まる事の必要と利益とを遙かに減少した。然しながら家事の改善は畢竟部分的のものに留まつて、婦人の心身を全く家庭から解放するには、猶ほ前途遼遠である。衣食住の雜務が、精力と時間と物資の經濟とをまるで省みずに、最も原始的な方法で各家族に依て孤立的に營まれることを前提として成立して居る家庭制度は、程度の差こそあれ、婦人の家居を是非とも必要とする點に於て、封建時代と幾何も距つて居るものでは無い。特に日本の如く、家庭生活の幼稚な國に於ては、婦人の家居の必要は一層痛切なものがあり、隨つて人手の少い中流以下に在ては、家婦の外出は一方ならぬ困難に遭遇するのである。

そこで職業婦人にして同時に家婦たる者は、賃銀奴隷と家庭奴隷とを兼擔する形となり、この二重負擔の下に、自分は元より、子供らの幸福まで犧牲にさせられることが少くない。又一方には、家事と金錢の爲めの勞働とを兼擔する必要上、家內工業を希望する者が多いのである。

家內工業の弊害は、工場勞働のそれを遙かに凌駕して居るのが常であるに拘はらず、法規を以て之に取締を加へることは到底不可能である。現に日本の工場法なども、使用人十五名以上の工場に適用せらるゝのみであつて、それ以下の使用人又は家族の勞力搾取に對しては、何等の取締法規も設けられて居ない。實際、勞働狀態の最も劣惡な、隨つて最も弊害の甚しい家內工

業に取締を加へる爲めには、個人の家庭に一々干渉しなければならず、斯の如きことは、法律の能くする所でも無ければ、社會として亦た許すべき行爲ではない。

家內工業に從事する者の大多數は婦人及小兒である。婦人は元々不規則無際限無報酬の家庭勞働に慣れ來つた者である。隨つて彼等は、家內工業に附隨する劣惡なる勞働狀態を些かも意に介せぬのみか、それに依て得る僅かの收益の爲めには、如何なる酷使をも敢て忍ばうとする。

殊に困難なのは、工場工業と異つて、家內工業の場合には、各勞働者が各々その家庭に孤立して居り、その勞働狀態も收益も千差萬別なので、共同利害に即する一致的行動に出で難い點である。この故に家內工業に於ては特に、資本家の威力はその極まる所を知らず、勞働者の屈從も亦た底止する所を知らざる有樣である。そして斯の如く、互の間に何等の組織も聯絡も無い、極度の虐使に甘んじて居る勞働者の存在が、一般の工場勞働者の勞銀の上にいかに惡影響を與へ、いかにその統一を攪亂しつゝあるかは云ふまでもあるまい。

獨逸の社會主義者で久しく婦人勞働者の組織に盡瘁したブラウン夫人は、その勞働組合論の中に斯う述べて居る。「男子の結束を成就せしめた力は大工業の發達である。然し工業に於ける婦人は、約一世紀程男子に遲れて居る。婦人の組織を成功させるには、先づあらゆる形に於ける家內工業を撲滅してしまはなければならぬ、そして婦人の仕事は、今日までに成就されたよりも遙かに完全に、工場工業の方に發展しなければならぬ。家內工業は、家事を司る妻又は娘に副業を斡旋することを得しめ、依て婦人の依賴主義を永續させる、故にこれは害惡である。」

家庭勞働が次第に分化されて工場勞働に轉移して行くのは、社會の趨勢である。そしてこれは明かに婦人の未來の爲めに祝福すべき現象に相異ない。現に米國の如きも裁縫機の發明に依て、被服の製造が家庭より工場に移されたことが、婦人の智識發達の上に非常な效果を奏して居ると云はれて居る。私はエレン・ケイの主張するが如く、家庭勞働に保護を加へて是を永續させるよりも、これを工場勞働へ進化させることを以て、一層自然で有利な成行だと考へる者である。

一方に、私有財產制度に由來する生活の壓迫あり、他方に家庭の拘束あつて外勤を不可能ならしめれば、勢ひ家居して收入を得る唯一の方法として世の婦人が家內工業に奔るのは已むを得ない。故にかの反動論者の所說の如く、婦人を工場勞働より驅逐し、又は其就業範圍に嚴重なる制限を加へたりしたならば、その結果は徒らに、工場工業よりも遙かに勞働狀態の劣惡な

利益な家內工業に彼等を追ひ遣り、其方面に於ける競爭を激甚にして、婦人勞働者をして益々悲境に沈淪せしむるの外無いのである。

故に婦人勞働者の解放の爲めには、共同育兒・共同炊事、共同洗濯等の設備の發展に依て家事の負擔を輕減し、依てその就職を容易ならしめ、職業條件改善の機會をより多く得しめるのが第一である。斯くして婦人が家庭に留まる必要が減ずれば減ずる程、家內工業の必要も減じ、隨つてその衰微を招くことは必定である。

日本の家內工業は、年額四百萬圓の輸出品を生產して居ると云ふ。所がこの四百萬圓を生むべく、いかに多くの婦人小兒の家庭に於ける苦汗制度（スウエーチングシステム）に服して居るかは、戰慄に價する者がある。在來日本の勞働運動が振はなかつたのは、勿論當局の迫害に依ること萬々乍ら、其他にも工場職工の過半數が自覺に乏しい少女であることや、家內工業の盛大なことなども、重大な原因を成して居ようと思はれる。今後勞働運動の勃興に伴ひ、この二つの問題は運動當事者を惱ますこと益々切なるものがあらう。將來、勞働婦人の團結の爲めに、全勞働階級の統一の爲めには、現存するが如き家庭內職奬勵會の代りに、その反對の內職撲滅期成會組織の必要が起つて來よう。同時に育兒及家庭勞働の社會化が行はれねばならぬことは勿論である。斯樣な見地から私は單に工場勞働者のみならず、女敎員、女事務員、其他一般の中流職業婦人の爲めにも、托兒所の設備の普及と完備を切望するものである。

私は日本に於ける家內工業の一班を窺ふ參考として、近頃知り得た岡山縣地方に盛んな麥稈眞田製出の實況を次に紹介したいと思ふ。

◎

廣島を中心として岡山並に其附近一帶に行はれて居る麥稈眞田の內職は、約廿年前から始まつて逐年盛大に赴き、今日では年額百萬圓位づゝ輸出して居るとのことである。が、元々麥稈は大麥の穗を取つた跡の廢物に過ぎないので、漂白する手間の外、原料が無償である上に殆ど無限に豐富なので、自然生產過剩に陷り易く、隨つて價額が馬鹿々々しいほど低廉である。而してこの生產過剩や價額の低廉なことなどは、殆ど信じ難い程の勞働者虐使に起因して居ることは事實である。故に少年少女の働力搾取を止め、勞働及び生活狀態を改善して生產過剩を防ぐと共に、價格の引上げを行ふことは、地方民一帶にとつて緊要事であるとは、その地方在住者の談であつた。（但し玆に紹介するのは、岡山縣淺口郡黑崎砂美の二村、特に砂美村の實況が

主である。)

砂美村の如きは、麥稈眞田の始まる以前は、疲弊し切つた一漁村であつたが、これが盛になつて以來、一軒としてこれをせぬ家は無く、日收二三圓が普通で、一圓以下の家は絕無と云つて好い有樣となつた。本年四十才位の人の少年時代には、村民は麥の皮をさへ食料に供した程であつたが、近年は百姓さへ魚を買て食べるようになり、一般に生活程度は高くなつた。

麥稈眞田は編み方に依て價格に高下あり、精巧なものになれば一反（三十三尋）一圓十四五錢もすることがあるが、簡單なのは普通三十錢飛切りの高値が卅五錢であるが、價格の變動は常に激しいとのことである。

この地方では、大人と云はず、子供と云はず、全家族を擧げてこの內職に從事し、景氣の好い時は一切を擲つてこれに懸り切る有樣である。其頃には、裁縫に通ふ娘達の姿まで、ピツタり見えなくなつてしまふ。

小兒が四五才になれば、其各々に對して一日何尋と父兄が內職の日課を定め、菓子其他の懸賞を以て、子供同士出來高を競爭させたりする。物產共進會には、四才の幼兒の製品が出品された位である。

時間は、夏ならば朝の五時から夜の十二時迄は必ず遣る。尋常二年の生徒が每夜十一時まで編むで居る實例さへある。眞田は指先の仕事であるから、大人よりも指先のしなやかな子供の方が一層迅速に仕事の運ぶ傾があるので、猶更子供を使ふことになる。それでも中流以上の家の子は、學校を主として內職を從として居るが、中流以下はこの內職の所得が主たる收入で、其れに依て生活して居るので、勢ひ學校よりも仕事の方が主になつて居る。以前、麥稈眞田がそれほど景氣づかなかつた時分、日曜日に其邊をブラついて居る子供を收容する爲めに日曜學校を開いた人が、今では僅かに一時間の事乍ら、出席者が極めて少いと云つて居る。子供達は每日の日課を定められて居る上に日曜は在宅の時間が多いだけ、仕事の割合が殖えて居るので、外に遊びに出ることさへ出來ないのである。そして子供の多い家はそれ丈け勞働者が多い譯なので、自然收入も殖え、貯金も增す有樣である。勿論家々に依て、子供の稼ぎ高を當人の名で貯蓄するもあれば、一家の生活費に加へてしまふのもあり、樣樣である。

子供等は四五歲以來、座つた切りで手先の仕事に掛るので碌に背丈が延びない。彼等は頻繁に厠に立ち度がる。これは朝から晩まで座つた切りで居る苦しさの餘り、厠にかこつけて僅かに膝を延ばし多少の休息をする爲めである。所が親に依ては、小

さな勞働者のこの哀れな奸計を見破つて、厠に立つ時間や度數を制限し、規定の時以外には、決して子供を立たせぬことにして居るのさへある。普通四五歳の子供は三日に一反、十五六歳になつて熟練した者ならば、日に四五反は編める。が、子供の中にも普通の三倍も編めるのがあるが、そういふ子の所へは、他家から子供を見習に遣り、その傍に居て自然仕事を激勵されるように仕向ける。誰は七歳で日に幾尋編むとか、彼は五歳で何尋編むとかいふ話に依て子供らは絶えず競つて居る。刺戟され鞭撻されて常に工程を競ふのである。

■

この地方には家族のみでして居るのも多いが、女工を傭つて居る家も少くない。然し大抵は二三人乃至十人位の所で、工場法の適用を受けて居るのは、僅かに一村に五六軒に過ぎない。

女工は主に讃岐の者で、通例七八歳からら十五六歳位で、精々二十歳止まりである。彼等は最初は衣食の支給を受ける外は全く無給であるが、熟練を積むに隨つて年給が増し、普通一年二十圓、三十圓、四十圓位、稀には百圓位取るのもある。又例外としては親方の下に在りながら、仕事の請負をして三百圓位稼ぐ者も無いではない。

食事は親方持であるが、品質の粗惡は話にならない。常食は大麥で、一日一回位は芋などで濟まされる、『全く豚の食物です』とは地方人の語る所である。

舊盆の外は年中無休で、起床は四時五時、就寢は十二時である。各女工の能力に隨つて一日の分量が定められて居るので、早く仕上がつた時にはそれだけ早く寢られるが、遲くなれば、それ丈け睡眠時間を殺がれる譯である。以前には、仕事が遲れゝば、何時までゝも食事を與へなかつたり、一時二時までも寢せなかつたものであるが、此頃はそういふ風は已むだらしい。

傭主は、或は一時間毎に女工一人一人の出來高を貼出したり或は一定の時限を限つて一等、二等の懸賞を附し、饅頭、豆などを賞品として競爭心を煽る。そういふ事より外に樂しみの無い女工達故、その爲めに工程を競ふ樣は、只だ淺間しいとより外云ひようが無い。

又傭主達は、女工の注意を集中する爲めに、仕事場を終日密閉して一切の外部の刺戟から隔離する。夏でさへも簾などで圍つて何も見えぬようにして置く。換氣法などは全く問題でない。又女工等は一所に集つて居れば自然に口を利く、利けば隨つて工程に影響するのであるが、これ許りはいかに禁じても到底無效であることが分つたので、傭主側は遂に一策を案じて、談話を不可能ならしむると同時に、競爭心を煽つて能率を増進させ

るといふ妙案を念出した。と云ふのは、眞田を編みながら、その編み上げて行く數を一本二本三本四本と絶えず影のように聲に出して算へさせるのである。斯すれば一方には口を利く遑がなく、一方には隣の者の編み上げる數に激勵されて、自然負けじ劣らじの一心で仕事を急ぐようになるのである。斯くて女工は一日中、同僚と口きく自由を巧みに奪はれてしまつた。

或傭主などは、女工の頭に毛虱が湧いて困るといふので、近所の藥種屋で水銀軟膏を求めて來た、が、よく聞て見るとそれは女工自身の爲めではなくて、虱が餘り酷くなると、痒さに堪へ兼ねて自然頭に手をやり、隨つて能率に影響するので、これが治療を思ひ立つたのだといふことである。

女工は、夏の夜などは、狹い家の中ではとても暑くて仕事が出來ないので、首に幾重にも眞田を捲き掛けたまゝ、三々五々群を成して、目にも留まらぬほど器用に迅速に指先を働かせ、影のように呪文のように編み數を數へながら田圃道を歩きまはつて居る。薄明りの間はそうして歩き〳〵仕事をして居るが、日が全く暮れてしまふと、彼等は人の家の軒燈の下に集まつてその灯を便りに編み續ける。彼等が各々その日の仕事を仕上げて傭主の家に歸るのは十二時過でゝもあらう。それより早く寢てしまつた灯の家の主人は、翌朝起き出して家の前一面に織屑の麥藁が落ちて居るのを見て、彼等の仕事の昨夜も長かつたことを知るのみだといふ。

然し是等は必ずしも女工に限ることではなく、傭主自身も同樣の生活に甘んじて居るのである。前にも述べたように、これで生計を立てゝ居る人々は、我子をさへ能ふ限り搾取するのが習である。そして全家族も女工と同じく勞働に服し、仕事の準備などの爲めには、女工より一層早起遲寢の必要がある位であるから、女工の待遇を特に苛酷なものとは考へて居ず、勿論意識的に虐待して居るつもりなどはないのである。

女工の出身地は主として讃岐であるが、讃岐地方の生活程度の低いことはこの邊よりも、一層酷く、その爲めにこの地方では讃岐者と云へば下等視し居る。女工等の待遇は斯の如く劣惡であるとは云へ、彼等は自家に在ては一層劣等な生活に甘んぜねばならず、時には全く飢餓に迫られることさへあるのに、兎に角此方へ傭れて來て居る間は、『豚の食物』にもせよ、滿腹することが出來る丈けマシなので、隨つて女工募集に應ずるのである。然し近來は讃岐の方にも麥稈眞田が興り、自然その方に女工を奪はれるので、幾分待遇も改善されたとのことである。

猶寢室や寢具のことまでは遺憾乍ら聞き洩した。が工場法の適用を受けて居る信州の或大工場などでさへ、八疊の一室に夫

婦者八組を詰込んで居た事實があり、或工場主は、工場監督官に、女工の寢室が眞暗なことを指摘されたに對して、どうせ寢る所故、光線の必要はあるまいといふ奇答を以てしたといふ位である。之に依て見れば、工場法の適用を受けぬ僻村の狀態が、いかなるものかは、局外者の想像を絕して居ることと思はれる。

猶ほ日本全國に亘る各種家內工業の實況には、まだ〳〵どれ位悲慘な事實が潜んで居るか分らない、其等は年々一萬數千の肺病患者を出して居る婦人工場勞働者の問題と共に、將來本邦婦人の最も意を注がねばならぬ重大なる社會問題を形成して居るのである。(七、七)

勞働運動の改造期

早大教授　北澤新次郎

(一)序言

凡そ近代の資本主義的國家に於ては勞働運動の顯出は必然の現象である。尤も其の國情に依りて其の主潮政策は差異あるが、其の發現の過程は同一である。例へば戰前の獨逸の如き官僚的統治の下にあつた勞働運動は勢ひ政治的、社會主義的色彩が、濃厚であつた。又佛蘭西に於ては其の純理的徹底的な國民性は自然勞働運動にも反影してサンヂカリズムとなつて芽生ゑた。更に何事につけても漸進的妥協的な英國民の氣風は同國の勞働運動をして極めて着實なる進展をなさしめた。然に今や英國の勞働者の如きは等しく彼等の運動が全く行き詰つた事を深刻に感知し、何れかに新局面を展開せざるべからざるに至つた。之が結果は勞働不安の高調となり、種々なる勞働問題調査報告となり、ナショナル・ギルドの新勢力となり、一般社會生活の動搖となつてゐる。蓋し社會の改造は現下の一大問題である。而して勞働運動も亦目下一轉機を劃せんとしてゐる。以下主として英國を中心として勞働運動の改造問題を論究して見たいと思ふ。

(二)各國勞働運動の變遷

英國に於ける初期の勞働運動は極めて單純で、職業を同ふせ

る勞働者が自助的團結を設け雇傭條件の維持若くは改善を目的としたものである。即ち勞働者が職工組合なる團結的勢力を利用して彼等の社會的並に經濟的の地位境遇の向上伸暢を謀らんとするのである。從つて當時の職工組合の目的は之れに依つて勞働者の經濟的生活の改善をなさんとするにあつて現代の社會組織其ものを變更すると云ふが如き事は主旨でなかつた爲め、其手段方策の如きも、甚しく穩健着實で成る可く同盟罷業、ボイコットの如き爭鬪的手段を避け、資本家に對しては務めて協調的態度を採り、他方に於ては巨額の掛金を醵出して共濟互助の工夫に餘念なかつたのであつた。かの千八百五十年に成立した器械職工組合（Amalgamoted Society of Engineers）は其の最も代表的のものである。爾來三十年間英國の勞働者は資本勞働の調和、共濟互助の精神で其の經濟的地位の向上を務め、其の效果も決して尠くなかつたが、千八百八十年頃になると社會主義的思想が顯しく勞働者を刺激し爲に彼等は從來の如き微溫的方策では到底資本家に對抗する事が出來ないと感知するに至りて英國の勞働運動が甚しく階級鬪爭的となり其結果同盟罷業、ボイコットの如きものが續出するに及んだ。殊に千八百八十九年の波止場勞働者の同盟罷業の勝利は明白に從來熟練勞働者のみの獨專物の如く考へられたる職工組合運動が不熟練勞働者の間にも可能有效なる事を證據立てられた結果、勞働運動の範圍勢力は頓に擴大せられた。而して此等の不熟練勞働者は其賃銀極めて少額不定なるを以て熟練勞働者の組織せる職工組合の如く多額の掛金を以て共濟機關を設くる事能はざる爲め、自然其の主力を同盟罷業、ボイコット等の權力手段に訴へざるを得なかつた事や、或は熟練勞働者の職工組合が動もすると彼等を强壓する事もあつた事が彼等の反抗心を助長して益爭鬪的氣分を育成した。斯くの如く不熟練勞働者の奮起は在來の職工組合を驅つて甚しく社會主義化する一因となり、單に種々なる權力手段に依りて資本家階級に肉迫するに至つたのみならず、國家の法制を通じて勞働者に有利なる條件を獲得せしむるを必要と認め其結果勞働者は極力政治動運に努力するに及んだのである。

英國の勞働者が純然たる經濟的運動から離脫して政治運動に邁進するに至つたのは勞働運動が社會主義化せられた當然の結果であるが、之れを促進させたものはかの有名のタッフベール判決（Toff Vale decision）である。即ち該判決に依りて職工組合は其幹部の不法行爲に關して損害賠償の責任を負擔する事となり且つ同盟罷業に際しては罷業監視（Picketing）は不法であるとせられた。かくなるに於ては職工組合は到底有效に同盟罷業を行ふ事能はざるに至りたる爲め、如何にかして勞働者の代

表者を議會に送り、上述の判決の如き彼等の運動に不利なる法制を撤回し、更に有利なる法制を獲得せんと謀つた。其の熱烈なる努力の結晶は最も鮮かであつて、千九百六年の總選擧に於て勞働者の代表者は實に四十餘人の多數に達し之れが現在の勞働黨なるものを組織したのである。而して勞働黨は先其活動の一歩としてタッフベール判決の撤回運動を開始し遂に千九百〇六年職業爭議法（Trade Disputes Acts）なるものを設くる事に依りて其志を成就した。然るに其後の勞働黨の成績は英國の勞働者が初めに期待した如くでなく、極めて無爲無策であるが爲、英國の勞働者は頗る失望落膽し遂に彼等は其の政治運動のみに熱中するは其の目的を貫徹する所以にあらざる事を理解するに至り、全く政治運動を絕念するは不可なれども彼等の直接運動も等閑視すべきものにあらざる事を會得したのである。戰前數ケ年間に於ける英國勞働不安の高調は之れが結果であると云つても差支へあるまい。此點は政治的活動を主眼として又實際政治的に偉大の實力を有して居る獨逸の社會黨と甚しく異る處である。

獨逸に於ける勞働運動は英國の其れと甚しく其の趣を異にしてゐる。英國職工組合が其の發達の當初から純然たる經濟的運動たりしに反して獨逸の勞働運動は終始社會主義的の氣分に浸つて居り、且つ其主力を常に政治運動に注いだ結果は無産者階級の政治的勢力を甚しく增進させた。實に獨逸の社會黨の迅速なる發達は他に比類なく同國の政治舞臺の總べての方面に活躍し、種々の社會的立法、勞働者保護法を設定して勞働者階級の福祉の伸暢に貢した。然し乍ら社會黨は甚大なる勢力であるが、其黨內の分子は常に爭鬪が絕へなかつた。即ち黨の多數派、修正派、及び急進派間には種々なる根本的の意見の衝突があつたが遂に之れが戰爭に際會して爆發して、其結果リブクネヒト一派のものが社會民主黨と分離して獨立社會黨なるものを組織するに至りたるは吾人の記憶に新たなる處である。而して獨逸の社會主義者は世界大戰に際して舊來のカイザリズムを崩壞し、獨逸の政權を其手中に掌握するに及んだ。

トルストイは露國の國民性を代表する哲人である。由來露西亞國民は極めて平和的、人道的の氣分が多い。從つて同國の勞働運動の精神も矢張り此氣風が漲つてゐる。即ち露國の勞働者は單に彼等を資本家の壓迫より脫却せしめんとするのみならず、總べての人をして其の不合理的抑壓から解放せしめんとする人類的の熱烈なる希望がある。而してかゝる希望を貫徹せんとする意思の强烈なるにつれて動もすると其手段の如何なるものも頓着しないと云ふ傾向がある。尤もかゝる破壞的の手段と

出でさした一原因は同國の極端なる專制政治も與つて力がある事は論を俟たない。斯くの如き氣分が端なくも大戰亂に當りて極度に强調せられ、遂にロマノフ家の大崩壞となり、勞働者の天下を顯出したのである。

(三)世界大戰と勞働運動

過ぎし世界大戰は人類社會のあらゆるものゝ一大試煉であつた。而して歐米諸國に於ける勞働運動並に社會主義運動は世界大戰の開始と共に道德的並に政治的頓挫を來した事は世人周知の事實である。卽ち戰亂の勃發し社會の危機に際して勞働者及び社會主義者は彼等が平素仇敵として反抗しつゝある資本家階級の政策と異なれる政策の準備更になく、唯漫然と特權階級の方策に裏書したるは最も明白に彼等の不用意を暴露した。由來歐米諸國の勞働者の平素の信念に依れば戰爭なるものは貪慾極りなき資本家の野心に基くものであると考へてゐる。換言すれば今日の資本家は自己の生產したる貨物の新市場を發見しやうと思つて非常に躍起する結果戰爭を惹起する。從つて現今の戰爭は全く資本家の野心を充足せしむる手段であるから一般國民殊に勞働者は之れが爲めに非常な迷惑を受けると云ふのである。されば彼等は常に軍國主義に反對し、努めて平和主義を主張してゐる。然るに一度大戰亂の開始せられ自國が之れに參與するに至つた時、歐米諸國の勞働者及社會主義者の大多數は日頃の信條を弊履を棄つるが如く擲つて政府及統治階級に左袒して戰爭に從事した。唯に之のみではない。勞働者は彼等が永い間幾多の艱難と苦痛を排濟して獲得したる其の特權及主張をも撤回して戰爭に參加したのである。例へば之れを英國の勞働者に見るに千九百十四年セルビヤと墺地利間に戰爭が勃發した數日後未だ英國が參戰前に於ては同國の殆んど總べての勞働者團體及社會主義者の團體を包容する國際社會主義協會の英國支部は宣言書或は大會の方法に依りて戰爭の不可なるを論じ、あらゆる方法を以て之が防止を謀るべきを主張した。然るに一度英國が獨逸に向つて宣戰の布告を發するや、其の態度を一變し、祖國の危機擁護を標榜して戰爭の正當なるを主張し、更に其平素の主張の總べてを撤回して(戰後に於ける復歸の保證を得て)戰爭に參與した。(戰時に於ける英國勞働運動に關しては拙稿戰時及戰後の英國勞働者運動參照社會政策學會論叢第十一冊所載)

尙之れを獨逸に徵するも同樣で、獨逸が一度參戰するや同國に於ける社會黨の多數派はリプクネヒト一派の猛烈なる反對があつたにも拘はらず、其の從來の主張を裏切つて獨逸文化の防衛楯をに取つて政府を援助した事も世人の能く知る處である。更に米國に於ける三百萬の勞働者より成立する米國勞働聯合會も

ウイルソンがデモクラシー擁護を名目として參戰するや双手を擧げて之れに雷同し極力政府の施設に迎合せしはゴムパースの方策としては當然の事である。斯くして這回の大戰亂は歐米諸國に於ける勞働者の運動が極めて皮相的であつて、一度社會的大危機に遭遇するに及んでは其の確固たる思想も信念も對策も缺けてゐる事が赤裸々に證據立てられた。

（四）社會改造と勞働者

戰爭は終結を告げた。戰爭に慘敗した獨逸に於ける社會主義者は多年の宿望を成就して政權を掌握し、資本家階級の勢力を大々的に減殺した。又露西亞に於ても突如として蹶起した勞働階級の進擊には流石の專制政治が脆くも崩壞して此處にもプロレタリヤーが政治の樞機を處理してゐる。而して獨露兩國の無產者は今や全力を擧げて戰後の社會改造は努力しつゝあるはよしや其主張手段に關し誤謬があるとしても其人類の大企圖と熱心に對しては吾人は敬意を表する必要がある。特に露國の一大勢力たる社會民主勞働黨の主張方策に就ては精確なる報道の無きため公正なる判斷が出來ないが、今迄の傳へられたる事が頗る誤つて居るものが多い事は爭はれぬ事實である。幾度かリエーニンは紙上で殺され、何回となく其の政府は電報では倒れたが今日に於ても依然として其勢力は衰へない樣である。吾人は露西亞國民の向ふ見ず的の感傷的行動に對しては甚しく不滿に思ふが其終始一貫せる人類的情緒的希望の旺盛なる點は注意すべき處であつて實に現今世界の社會改造の渦卷中にボルシェブイズムが尠からざる反影を與へてゐる事は疑ひのない處ではあるまいか。

獨逸の最近の狀態に就ても未だ精細なる材料を得る能はざるが故に到底判斷する事が出來ないが兎に角多年の間獨逸の政權を掌握したるプルシャニズムを一擧して崩壞した社會主義者の今後の活動振りは頗る興味の多い事である。然し乍ら這回の革命に依りて資本家階級は全く其威力を失墜し、獨逸は恐く無產者階級の天下となつた樣であるが、事實は其程の樂觀を許し得るか否やは非常に疑問に屬する。露國に於ける資本家階級の實力は甚大なるものではなく且つ彼等は再起し得られざる程に打擊を受けたが、獨逸に於ける資本家階級は其の實力が今日に於ても如何程殺滅されたとしても未だ決して侮るべからざるものがある。從つて彼等は漸次其勢力を集中して再び頭を擡げる準備をなしつゝあるであらうから、現に政權を管掌しつゝある社會主義者も外部で想像するが如く容易に徹底的の改造をなす事は出來ないかも知れぬ。然し何れにしても獨逸に於ける社會主義的進展は未だ豫想する事を得されども、其れが社會主義の實

値に對する一大試煉である事は論を俟たない。

翻つて戰爭に大捷を博した英國に於ける勞働者の將來は如何。既に述べた如く英國の勞働者は戰爭が開始と共に全力を擧げて政府の方策に左袒し、のみならず戰爭を有利に歸結せしめんが爲に其の多年固執したりし職工組合の主張及信條を放擲して戰爭に參與した。而して政府及輿論は此の愛國的行爲を等しく賞嘆し戰後に於いては戰前に於ける職工組合の主張及信條の復舊を堅く誓約したのである。然し愈戰爭終熄し平和の回復せらるゝに當つては政府及輿論が復舊すべしと誓約した事は到底實行の不可能なる事が明白になつた。蓋し戰時中に於る英國產業界の革新の顯著なるは驚くべき程で戰前に於ては夢想だも及ばなかつた程でウエッブは第二の產業革命とさへ云つてゐる。從つて英國の勞働者は今に及んで戰前に於ける彼等の主張及信條其儘を復得して貰ふ事は唯に無理であるばかりでなく彼等に取りても何等意味のない事である。そこで彼等は何か之れに代はるべきものを獲得しなければならない。加ふるに戰前に於ても既に左樣であつたが戰時及今日に到つて彼等は其の勞働運動の無方針なる事を痛切に感知し、其の全く行詰れる方路に一新局面を展開せざるべからざるを深刻に理解してゐる。此の時に當りて勞働運動の理想に一道の光明を與へたものはかのナショナル・ギルドである。而してナショナル・ギルドの如何なるものであるかは此處で評論する必要はないが之が理論は的確に現今に於ける英國勞働運動の缺陷を指摘し、其の充足を提供してゐる事は事實で自分は之れが將來少くとも英國に於ては極めて迅速なる進展を見るであらうと信ずる者の一人である。

蓋しナショナル・ギルド主張者が從來英國に於ける勞働運動の目的が單に雇傭條件の維持及改善にありたる事の誤謬を指摘し今日の勞働運動は勞働者が其創造的衝動に基く自己表顯（セルフ、エキスプレシヨーン）を要求する解放的使命を有するものである事を明白にしてゐる。即ち勞働運動は唯に賃銀の增加、勞働時間の短縮等に依りて生ずる勞働者の物質的餘裕が其の終局の目指す處ではない。其の最後の目的は現在の如き賃銀奴隸の境遇から脫却して民主化せられたる產業的環境の下に社會的生產に資せんとするのである。故に此主義は從來勞働問題を以て分配問題なりとのみ思つた社會主義と甚しく異る點で、勞働問題は要するに勞働者が自由獨立の生產者たらんとする倫理的動機に基くものであるとしてゐる。從つて勞働運動の方針は今日の如き少數の資本家が壟斷的に生產を經營してゐる事を打破し、產業組織を根本的に改造して、生產の總べての管理を勞働者の團體即ちギルドに掌握せしめなければならないと主張する。斯くして勞働者は生產管理を

自治的に行ひ他方國家が消費者の代表機關としてギルドと協調して行こうと云ふのが主眼點である。而して之れを爲すためには從來の如き職業本位の職工組合では到底其任務を果せないから之れを産業本位のものとし、單に熟練勞働者のみならず總べての不熟練勞働者及あらゆる支配人以下の被傭者、無産智識階級の人々を包含する團體を以て其の使命を成就せねばならないと云ふのである。

思ふにナショナル・ギルドの理論は幾多の缺陷を包藏してゐるが、從來餘りに物質的、皮相的なりし英國の勞働運動の短所を指摘して之れに文化的、倫理的の理想を與へた事は非常なる貢獻である。然しながらナョナル・ギルドも亦能く英國民の妥協的、協調的の氣風が此處にも顯はれてゐるのは奇妙である。卽ちナショナル・ギルドは國家社會主義の如く總べての生産分配の生産管理を國家の手中に收める事には反抗してゐる。さりとてサンヂカリズムの如く總べての事を勞働者自ら行はんとも主張しない。唯生産の管理經營を勞働者の獨占となし、生産手段は國家の所有となし、其の生産物の分配及其他の事項に關しては消費者を代表すべき國家と對立、協調してなさんとするのである。此點は又國家の存在を否定する無政府主義とも著しく異る處である。蓋しナショナル・ギルドは今日に於ては未だ甚大なる勢力を有せざるも將來之れが英國勞働運動に及ぼす影響は尠からざるべく、まして、コール、リッケット、ホブソン、オレーヂ、ペンテー等の熱烈なる宣傳者があるし、加るに英國に於ける有能、鋭敏なる哲學者ラッセルの之れを裏書するに於て將來の進展は蓋し刮目して見るべきものがあるであらう。

更に海を越ゑて米國の勞働運動の今後を按ずるに玆にも尠からざる不安の雰圍氣に包まれてゐる。從來は資本主義的勢力の絕大なる米國に於て兎も角三百萬に近き勞働者を包有する米國勞働聯合會があつて單純なる舊式職工組合主義を奉戴してやつて來たのであるが、將來も同國の勞働者がそれで滿足するであらうかと云ふ質問に對しては吾人は之に肯定的の答へを爲す事を躊躇する。尤も米國の勞働者は其勞働運動の新使命を理解する點に於ては歐洲諸國の勞働者より餘程後れてゐる點が多い。現に米國勞働者聯合會の第三十八回の大會に於ても英國の勞働黨の勞働者の産業管理權の要求を包むプログラムを目して空論家の夢想として攻撃し、聯合會は何處迄も純然たる經濟的運動として行動すべき事を高調してゐる。これは蓋し米國勞働聯合會が未だ英國に於ける勞働運動の新思想を理解せざるに基く時代後れの考への致す所以である。然し乍ら最近に於ては同會の平勞働者中には露西亞の過激思想の甚しく浸潤するもあり、或は

從來の聯合會の方針に對して不滿不平を訴ふるものも出來、爲めに該會内に動からざる動搖を來しつゝめるは爭はれぬ事實で、爲めに聯合會の創設者であり且つ數十年繼續的に會長の重職にあるゴムパースに對する不信任の聲も聞え、一時會長は辭職の噂もありしが過般の大會に於て漸くにして會長に再選せられた樣の狀態である。況んや米國に於けるI・W・W、の活躍は甚だしきものがあるから米國の勞働運動は早晩何等かの新局面を劃する事件が起るかも知れない。何れにしても今日の儘では居らないと思はれる。

更に眼を轉じて我國に於ける勞働運動を考ふるに過去に於ては何等組織的の運動はなかつた。尤も屢社會主義者或は社會改良家に依つて組織せられたる勞働者の團體は數回あつたが、皆一時斷片的のものに過ぎなかつた。唯最近數年間に順調なる發達を就げた友愛會が目下我國に於ける唯一の勞働團體である。而して友愛會は嚴格なる意味の職工組合ではないが、現に角過去數ケ年間多數の勞働者を包容し、勞働階級の經濟的並に社會的の向上に努めた事は、よしや其主張が舊式であり、其方策が時に誤謬があつたとしても我國の勞働者に自動的訓練と修養とを育成したる效果は決して尠くない。殊に從來我國政府が勞働運動を目して暴徒一揆の行爲と見做してあらゆる抑壓迫害を加へたる時に於て幾多の難關を排斥して今日の盛大を來せる其の努力と其の熱誠は吾人の賞讚に値する。然れども今日の友愛會は矢張り其の主義に於ても、其の組織に於ても將た又總べての點に於て革新の必要に逢着してゐる。我國の勞働者覺醒の程度の偉大なるものあるに於て、或は今後勞働者が其の賃銀奴隸の境遇より解放する手段として基礎鞏固なる職工組合の必要あるに於て、若くは我國勞働者が世界の勞働者と提携して人類社會の改造に貢せんとするに於て現在の友愛會では到底我國勞働者の必要と希望を滿足する事は出來ない。從つて友愛會が今後我國勞働者の自治機關として活躍せんと欲せば須らく歐米諸國の勞働運動の經過を研究、調査し、其長を採り、其の短を捨て其れに先人未開の新理想を加へて確固たる方針と鞏固たる組織と不斷の努力をしなければならないと思ふ。

過去の勞働運動は幾多の進化變轉をした。然しながら人類社會の發達と共に勞働階級は着々と其地歩を進めて行く。ブルヂョワーを背景とし物質的偏重の文明は行く處迄行つて行き詰つた。今後の社會改造をなす中堅はプロレタリヤーであらねばならぬ。玆に於てプロレタリヤーの解放は新文明の根本的要素と云つても差支へはない。（八―七―六）

勞働問題の解決と責任觀念

法學博士　河津暹

一

勞働問題は我國現時の社會問題として最も注意しなければならぬものである。勞働問題が社會問題として重きをなす所以は社會の基礎其物に至大の關係があるからである。勞働問題の解決其の宜しきを得ざる時は社會の基礎は破壞せられ其の害の及ぶ所決して少くはないのである。社會の基礎の堅實であることは社會の存立發達の爲めには如何なる時代にも必要のことではあるが、特に我國の如き四方に競爭國を控えて猜忌嫉妬の的とならなければならぬ國にありては上下心を一にし力を同うしなければならないのであるから其の必要を感ずること更に切なるものがある。而のみならず、金城鐵壁と自ら誇つてゐた我國體其物も泰西諸國に俄かに勢力を得た過激思想が滔天の勢を以て我思想界を動搖せんとしつゝある結果、之が萬全を保せんとするには、從來よりも、更に一層社會の基礎を堅實にするの必要を感ぜざるを得ない。勞働問題の解決は我國現時の社會問題として世上の注意を惹起するは實に其の所である。

予輩はこゝに改めて聲明するまでもなく常に社會政策の實行を力說し社會主義其他の破壞思想の流行に反對するものである。今本誌の需に應じて勞働問題を論述するに當つても同じ精神趣旨を繰り返す外はないのであるから、暫く之を避けこゝには勞働問題解決の第一步としては責任觀念の普及が最も必要であることを少し許り論じて見よう。幸に讀者諸仁の一顧を得ば稿者の欣幸とする所である。

世に絕對の自由なるものはない。假りに絕對の自由がありとした所で其の社會に平和と幸福を齎すものではない。何となれば我等が社會生活を營む以上は社會の幸福、平和の爲に或程度までは意思行動の束縛を受けねばならない。意思行動の束縛を受けるといつては尙不十分で誤解を招く虞れがある。其れより稍正確にいふと、社會の平和、幸福を害する危險がある、氣儘氣

隨の行動を愼まねばならぬといふことである。其の心得がなかつたら其こそ禽獸と均しくならざるを得ない。かゝることは特に說明するまでもなく、我等が社會の一員として生活してゐる以上、他のものと共に或種の事業に關係してゐる以上當然のことである。自ら氣儘氣隨の行動を愼むといつた所で何人にも阿ねるのでもなければ道に背いたことをするのではない。即ち是れが社會生活をなすもの〻責任である、社會に對する義務である。

近頃聞いた話であるが東北の或地方で某知名の學者を聘してデモクラシーの講演をして貰つた所が、流石に知名の學者の演說丈あつて聽衆に多大の感動を與へたまでは善かつたが、其地方人の智識の程度が低かつた故か學者の說を誤解して、其れからといふものは郡役所の下僚のものは動もすれば郡長等に反抗し、學校の小使等は校長先生の上靴でも何んでも勝手に使用して始末に行けなくなつたといふことである。これは又聞であるから眞僞の程は保證することが出來ないが、若し事實であるとすれば、其れは非常の誤解であるといはなければならぬ。それでは社會の秩序も平和も、幸福も到底求むることが出來なくなる道理である。かくの如き絕對的自由の許すべからざることは予輩がこゝに論ずるまでもないことであらう。

この話の如きは極端であるかも知れぬが、我等社が會生活をなす以上、其の位置によつて自ら其責任がある譯であるから我等が自己の權利自由を要求するに當つては先づ自己が責任を盡してゐるかを三たび省みる必要がありと信ずる。自己の責任に對する觀念が明になれば社會問題の比較的大部分は自ら容易に解決することが出來ると信ずる。勞働問題も社會問題である限りは其の例に洩れないのである。其の點について稍詳に說明をして見よう。

二

資本家勞働者といつて決して性質上利害相反するものではない、相共に或生産なり、其他の事業を行ひつゝあるものである。一以て缺くことの出來ないものである。資本家計りあつて勞働者がゐなかつたら、其事業が出來るものでもなければ、其れかといつて勞働者計りあつて資本家がなかつたら其事業が出來るものではない。社會主義を奉ずるものは資本家階級は世に存在しなくても宜しい、國家社會が生産機關即ち資本を有するようにすれば宜しいと論じてゐるが、其れは今日我等が眼前に見るような資本家階級がゐなくても宜しいといふ意味なので、國家社會が一切の資本を其手に收める以上は矢張資本家なのである。資本家が不必要であるといふことではない。其れは兎角として勞働者と資本家とが相倚り相扶けて初て事業が出來るとす

れば兩者は性質上仇敵の如く利害相反するものではない。其れが勞働者資本家が利害相反するもの丶如く考へ所謂勞働問題を惹き起す所以のものは主として資本家が其の經濟上の位置が優勝であるに乘じて、其の責任を顧みず、出來得る限り利益を其手に收めようとし、其の結果一處に事業に從事する勞働者には僅に其の生活を支ふることが出來る位しか其の利益の分前に與らしめないから、勞働者の方ではモット多くの分前に與らしめよと請求するのである。資本家が其の要求に耳を藉したなら問題も起らないのであるが資本家階級は仲々其の要求に應じないからこゝに問題が起るのであつて、サンヂカリストの如きは資本家と勞働者とは利害一致すべき筈のものではない、資本家勝つか勞働者勝つか二者其一を出でないと極言するまでに至るのである。要するに資本家と勞働者とは共に事業經營に從事するものである以上は共に其事業の隆盛を希望するものであつて利害相反するものではない。唯其の利益の分配について利害が相反する如く見ゆるのである。其の利益の分配について利害相反するもの丶如く見えるのは資本家勞働者共に其の相互の關係について十分の了解を缺いてゐるが爲である。勞働者の如きは其の了解を缺いた所で尙之を恕せなければならないが資本家が其の了解を缺いてゐることは痛嘆せざるを得ぬ。

資本家が自分の力のみで事業を經營してゐると思ふからして間違ひである。事業の成績について直接に責任を負はなければならぬから、事業の經營其物からいつたら勞働者よりは一段優つた位置にあるものであるには相違ないが、其の事業の經營については勞働者も自分と同じ位置にあるものであると考えなければならぬ。若し資本家にしてこのことを了解することが出來たなら國際勞働規約にある勞働は商品に非ずといふ原則の意味は直ちに了解することが出來ねばならぬ。然るに資本家の從來なし來つた所を見ると勞働者の人格は殆んど之を認むることなく、恰も奴隷の如く取扱ひ來つたのであつた、勞働者も其位置について了解、自覺がなかつた間は、生活することが出來る以上は奴隷の如く扱はれても、牛馬の如く遇せられても別に苦情をいはなかつたものであつたが、一たび其の位置に關する自覺が起つた後は資本家階級に對し人間らしい待遇を要求するのは當然であり、資本家階級は其の要求に從ふのが責任でなければならぬ。資本家にして責任觀念が明である以上は勞働者の人格を尊重しなければならぬ道理である、この頃世の中で持囃されてゐる溫情主義が誤りであるといふのは資本家が勞働者を以て古昔の豪族と其の家子郎黨の如く儼として主從といふ別種の階級に屬するものと考へ、勞働者の生活狀態が憐むべきものがあ

るから之に恩惠を施すとなす點にある、これでは勞働者が滿足することが出來ないのは明白である。この點は暫く措くとした所で勞働者は終日汗みづくになりて勞働をしてゐるのに、如何に資本があるからといつて資本家は肉體的にも精神的にも其の事業の爲に盡してゐるのではなく、華奢なる生活、風流の境遇、花明柳暗の享樂これ等にのみ沒頭して、而かも其の事業が産み出す利益の比較的多くの部分を其手に收めて恥とせざる如きは責任觀念の明なるものゝなすことが出來る所であらうか、四割だ五割だといふが如き驚くべき配當をなすことが出來るのに勞働者をして物價騰貴の爲に生活の迫害を訴えしむるが如きは責任觀念のある貴紳のなすべきものであらうか。予輩はこれ等の資本家諸君に責任について三たび省みられんことを希望せざるを得ない。

獨り共に事を共にしてゐる勞働者に對して計りではない、資本家は社會に對しても亦重大なる責任あることを考えなければならぬ。資本家が或事業を經營して相當の成績を擧げ得るのは其の才幹の卓越せるが爲であることはいふまでもないことであるが、少くとも其の一部分は社會の力でなければならぬ。彼等はいふかも知れぬ、社會の趨勢を明察してよく之を致すと、然し更に考へれば社會が彼等を成功せしむるのであつて、其の社會にして秩序が亂れ、彼等をして安んじて其事業を營むことを許さなかつたならば如何、社會は彼等の供給するものを需要する丈の餘裕がなかつたなら如何、こう考へれは資本家が其の屬する社會に對しては決して我等が水星に起つた出來事のように考へることが出來ない。佛家は天地の恩といふが、我等は社會に對する責任といひ度い。苟くも社會に對する責任を感ずる以上は社會の利益を顧みないで、氣儘氣隨の行動をなすことは出來ない道理である。然るに我國實業家の中には動もすれば社會に對する責任を顧みないで、其の富を成す上にも、其富を用ふる上にも如何はしき行動をなすものが少くない。それを恥ともせずに勞働者に對して猫の如き柔順と犬の如き忠實を要求するが如きは蟲の良い話ではないか。故に予輩は資本家諸君にして其の位置に對する責任觀念を明かにせられんことを呉々も要求希望せざるを得ない。

三

予輩は我國資本家の間に責任觀念の普及せんことを希望すると同時に勞働者諸君にも亦責任觀念の普及せんことを希望せざるを得ない。我國勞働者階級に其の位置に對する責任を十分に了解してゐるものが如何程あらう。勞働者にして資本家の叱責監督がなかつたならば、所謂油を賣ることを恥とするものが如

何程あらう、資本家等から少し許りの金錢でも惠まれたなら牛馬の如き侮辱にも甘んぜんとせざるものがどれ丈あらう。若しこれ等の責任觀念が明でない限りは自ら求めて奴隷の境遇にゐることを辭せざるものである。資本家側から侮辱を受けても之に憤る丈の資格がないものといはなければならぬ。勞働者諸君にして其の人格を主張し、從つて人間らしき勞働條件を要求せんとせらるゝならば先づ其の位置に對する責任を明に了解することが第一歩でなければならぬ。この頃世上で問題になつてゐる能率增進も責任觀念の普及がなければ如何程の結果を擧げることが出來よう。故に予輩は平凡ながら勞働者諸君に責任觀念の普及を要望せんとするものである。この責任觀念の普及がなかつたならば勞働問題の解決は到底圓滿に行ひ得べきものでないと主張する。然るに世の勞働問題を論ずるものが、責任を教えずして自由を教え、義務を說かずして獨り權利のみを說くが爲に、勞働者は恰も檻を出でたる猛獸の如く氣儘氣隨の行動をなさんとするのである。かくの如きは資本家の暴に代ゆるに勞働者の暴を以てするのであるから、其の社會に及す影響が良からう道理はない。手短にいへば予輩の希望する所は勞働者諸君が八時間勞働を要求するに先ちては其の勞働時間內は側目も觸れずして其の從事する勞働に熱心であれといふのである。これは勞働時間について例を引いたに過ぎぬがこれ丈で予輩の希望してゐることは推察することが出來るであらう。

資本家も勞働者も共に其位置に關する責任が明になつたならばもと利益の分前に起因する勞働問題は少くとも或程度までは解決することが出來ようと信ずる、少くとも圓滿に同問題を解決するにはこのことを以て第一歩としなければならぬ。

予輩は我國の勞働問題に對してもかくの如くに觀察するものであるから、一派の論者と共に直ちに經濟社會の根底を覆ひ之を破壞しなくとも能く勞働問題を解決することが出來ると信ずるのである。

マアルクスとトルストイ

井箆節三

（一）

十九世紀の前半に於て、ヨオロッパの大陸は革命を以て終始した、革命の洗禮を受けた。此の革命時代に於て、ヨオロッパの諸國から多くの革命家が輩出した。その中でも往昔のフランス革命に結論を與へんとする、今日の革命運動に最も多くの交渉を持つのは、ドイツのカル・マアルクスとロシアのレオ・トルストイとである。

マアルクスは一八一八年、トルストイは一八二八年に生れた。此の二人は十九世紀の革命時代が生出した人類の二大教師であるが、十九世紀の後半に於ては、彼等の意圖は成就せず、彼等は革命兒であるよりは、寧ろ豫言者として殘つた。しかるに二十世紀に入つて、革命時代が再來した。

今や世界は革命の坩堝の中に置かれてあるが、現時の革命運動には、明かに二つの中心がある。マアルキシズムに正統派と修正派とが分立するのも、社會運動に勞働運動と精神運動とが派生するのも、そこに二つの中心があつて、双方から相働くからである。

此の二つの中心の各々を代表するものは、マアルクスとトルストイとである。マアルクスを中心とする圓形とトルストイを中心とする圓形と、この二つが交叉して、一つの楕圓を形成し、一つの中心にはマアルクスが立ち、一つの中心にはトルストイが立つ。

此の二つの中心を一つのものに統合して、楕圓を改めて正圓となし、二元的革命運動を一元的革命運動に統一するといふことは、理論上及び實際上、可能であるか、不可能であるか。

マアルクスに從へば、社會の階級闘爭は、古來の革命運動は、資本主義の倒滅によつて、最後の結論に到着し、物質主義と精神主義との反爭は全く截定せられる。果して然らば今後に於て、社會運動の進行に連れ、謂はゆる勞働運動と謂はゆる精神運動とが、二元から一元に統一せられるのは、寧ろ當然の運命であ

る。此の意味に於てマアルクスとトルストイとは那邊まで一致提携すべきであるか。

（二）

ロマン・ロランはマアルクスとトルストイとの關係を批評して、「社會主義は二つの虚妄を含むが故に、トルストイは之を悄むのである、革命の虚妄と科學の虚妄と」と言つたが此の批評は半分は正しく、また半分は誤つて居る。――革命に對する見解に於ては、マアルクスはトルストイよりも正しく、科學に對する見解に於ては、トルストイはマアルクスよりも正しい。

勿論、革命に對するトルストイの見解も、科學に對するマアルクスの見解も、その悉くが誤りではない。マアルクスがトルストイの革命に對する見解に傾聽すべき部分も多く、トルストイがマアルクスの科學に對する見解に傾聽すべき部分も多い。けれども、マアルクスの缺點が革命に對する見解よりは、科學に對する見解に多く、また、トルストイの缺點が科學に對する見解よりは、革命に對する見解に多く、兩者に長短相補ふの餘地あるは、吾々の最も注目すべきことである。

修正派及び新理想派のマアルクスに對する難點は、その階級闘爭說よりは、寧ろ唯物的史觀に向けられる。これマアルクスの科學に對する見解に重大な過誤があるからである。またトルストイに對する一般的批難が、その「理性と愛と」の說にあらずして、その無抵抗主義に在るのは、革命に對するトルストイの見解が徹底を缺くからである。

故に、マアルクスとトルストイとを一致提携せしめるには、マアルクスの科學觀とトルストイの革命觀とに根本的修正を加へ、トルストイの精神に據るマアルクスの運動を造ることが必要である。

（三）

マアルクスは外部生活、經濟生活の改革を過重した結果、遂に極端な唯物主義に走つた。彼は「資本論」(第一卷第一章)に於て、共產主義の理想社會では宗教は全く消滅するといひ、「共產黨宣言」に於ては、「共產主義は一切の宗教道德を破壞する」といつた。

トルストイは內部生活、精神生活の改革を過重した結果、また極端な唯心主義に陷つた。彼は晩年の戲曲「闇に輝く光」に於て、主人公ボリスをして言はしめた。即ちボリスは警察官に答へていふ、「吾々は虚僞を排し眞理を弘めることによつて、國家を破壞する。」

マアルクスは自然科學の價値を過信し、トルストイは心的革命の價値を過重した。社會の疾病を救治するのに、マアルクス

は科學的醫術に重きを置き、トルストイは精神的療法に重きを置いた。現代の社會の病弊を救治するには、しかし此の二つの救治が同等に必要である。

トルストイをして言はしむれば、マアルクスの唯物的史觀は、宗教上の宿命論に對する科學上の宿命論であつて、動もすれば却つて資本制度を辯護するところの結果を生ずる。またマアルクスをして言はしむれば、トルストイの無抵抗主義は、極端な諦め主義であつて、勞働者が資本家に反抗することを阻止し、勞働者の不幸な境遇を勞働者自身の罪に歸し、勞働運動の發達を妨害することによつて、資本制度を擁護する結果を生ずる。

(四)

從來マアルクスとトルストイとは、或る程度までは一致したが、或る程度からは反撥した。之を簡單に要約すれば、第一、科學を尊重すること、第二、革命を熱望すること、此の二點に於て、此の二人は全く一致するのであるが、科學と革命との本質に對する二人の見解は全く背馳する。

輕卒な論者はトルストイが、宗教を尊重して、科學を呪咀したため、トルストイを非科學主義者と速斷し、トルストイの思想を淺薄な空想と誤解するのであるが、近代の偉人でマアルクスとトルストイとの二人ほど、熱烈な科學主義者はない。十九世紀の人物の中で、二人が最も傑出するのは、最も科學を尊重し、最も多く人生に、(前者は歴史と經濟とに、後者は宗教と道德とに、)科學主義を應用したからである。

マアルクスが科學的社會主義者ならば、トルストイは科學的精神主義者である。トルストイの宗教又は道德に關する論文の一つでも讀んで見給へ。何處に一つでも人間の理性を排斥した言葉があるか。トルストイズムの神髓は、理性と愛情とに在るではないか。その以外には無いではないか。人間の粗野な感情は、神聖な理性の洗禮を受けて、至純な愛情に淨化せられなければならない。これがトルストイズムの全部である。トルストイは晩年に經營したヤスヤナポリヤナ學校の生徒のために、宗敎の讀本を書かずして、科學の讀本を書いたではないか。マアルクスとトルストイとは、やはり同じく十九世紀の科學時代の人物である。

(五)

しかしながら、マアルクスとトルストイとは、科學そのものの本質に就いては、大いに見解を異にした。マアルクスの謂ふ科學は、即ち自然科學であつて、而も舊式な科學である。マアルクスの有名な言葉に曰く、「人間が社會を組織して、生活に必要な品物を生産するとき、丁度その社會に於ける物質的生産力

に相應した、特殊の生産關係が必然に成立する。さうして此の生産關係は、社會の生産力に隨伴するものであつて、人間自身の意識とは、無關係なものである。」この生産關係の總和卽ち經濟關係が、社會の根本基礎となつて、法律や政治や宗敎や藝術や其他一般に精神關係を生出して、社會の仕上工事を成す。故に「人間の精神が人間の社會生活を決するのではなく、寧ろ逆に、人間の社會生活が人間の精神を決定するのである。」しかるに「社會の物質的生産力は、或る程度に發達すると、却つて現在の生産關係と矛盾し、現在の生産關係が却つて生産發達の障礙となる。そこで社會は革命の時代に入り、經濟的基礎工事の變化に隨伴して、精神的仕上工事も亦た徐々に、又は急激に變化する。此種の變化を批判するには、經濟的生産條件の變化と法律的、政治的、宗敎的、藝術的、哲學的、卽ち精神的思想形式の變化とを、徹底的に區別しなければならない。蓋し前者は之を自然科學的に的確に論證し得る現象であるが、後者は人間が前記の矛盾を意識して、之と決戰せんとする結果の現象たるに過ぎない。丁度箇人の意識を批判するにも、其人自身が思惟するだけでは、其事の眞相を的確に批判すること能はざる如く、此種の變化を批判するにも、時代の意識生活其者だけでは、其者の眞相を的確に批判することは出來ない。寧ろ物質生活の矛盾によつて、意識生活の變化を説明する、卽ち社會の生産能力と生産關係との矛盾によつて、始めて徹底的に説明することが出來る。

　これは謂はゆるマアルクスの唯物史觀又は經濟史觀を簡潔に道破したものであつて、マアルクスの意見では經濟現象は直接に科學的に説明することが出來るが、精神現象は直接に科學的に説明することが出來ないから、そこで先づ直接に經濟現象を科學的に説明し、之に依つて間接に精神現象を科學的に説明することが必要である。さうして此の場合にマアルクスの謂ふ「科學」が自然科學であつて、精神科學でないことは、マアルクスが不用意にも自ら告白した如くである。卽ち玆に引用したマアルクスの文句の中に、「自然科學的に的確に論證し得る」（naturwissenschaftlich treu zu konstatierenden）といふ一句は此の譯文に於けるが如くには、獨立の一句を成さずして、他の文字を形容する附屬語になつて居るために、論者は往々にして此の一句に重大な意味のあることを看過するが、これこそマアルクスの唯物史觀が、自然科學の一面に偏した、半面の眞理に過ぎないことを、マアルクス自身が告白したのである。さうして其の「自然科學」は、トルストイの謂ふ「にせ科學」である。

科學に對するトルストイの批評は、「藝術とは何か」の第十二章、エドワアド・カアペンタアの著書「文明の病弊及び救治」の一節「近世科學」のロシア譯の序文、其他多數の論文に現はれて居るが、要するに彼の意見では、現代科學の缺點は、下等なものを基本にして高等なものを批判するに在る。勿論これも研究の一法としては差間ないが、それを眞理の全部として、それのみで萬事を批判するのは、トルストイの反對するところである。

トルストイは其の「人生論」に於て誤れる科學者を批難して言つた。「見よ、今日では科學者と呼ばれる學者達は、こんなことを言つて居る。――吾々は意識の内部の生命を的確に定義することは出來ない。之を吾々の内部に發見しやうとすると、吾々は忽ち邪路に陷る。吾々の幸福に對する觀念とか、生命の本體に對する愉悦とか、之等は凡べて僞りの幻影に過ぎないものであつて、斯くの如きものを對象にしては、生命を理會することは出來ない。生命の眞相を理會するには、物質の運動としての生命の發現を研究するに如くはない。吾々は此種の觀察と、之によつて發見する法則とによつて、始めて生命の法則を的確に把握することが出來る。――(眞の科學は科學自體の地位と目的とを自覺して居るから、こんな僭越なことは言はない。)物理學は勢力(エネルギー)の法則を說明するのみで、勢力の本質を說明しない。化學は物質の關係を說明するのみで、物質の本性を說明しない。生物學は生命の形態を說明するのみで、生命の本體を說明しない。眞の科學は勢力や物質や生命の本體を研究の對象として居るのではなく、單に特殊の科學として勢力や物質や生命の關係を研究するに過ぎない、といふことを自覺して居るから、民衆に有害な感化を與へず、彼等を無智に導かないが、僞の科學は自分を忘れて、僭越にも科學は勢力と物質と生命との本體を說明するものと妄想する。僞の科學は人生の物質的半面を研究して、それを標準にして人生の精神的半面を推斷する。隨分複雜な方法で、多くの努力と時間とがそのために浪費せられる。さうして結局の結論として、本體の一部を持つて來て、これが本體の全部だといふ。」

（七）

トルストイが科學を咀ふのは、科學そのものを咀ふのではない、科學に對する人間の態度の誤謬を咀ふのである。故にトルストイは斯う言つた。「誤れる學者は斯ういふことを言ふ。――吾々は人間が過去に於て、如何に境遇によつて變化したか、之を研究しなければならぬ。吾々は過去の歴史的變遷によつて、人間の生活を指導する理法を發見することが出來る。――これが謂はゆる歴史的乃至政治的科學によつて、人生の眞相を發

しやうとする途中の言草であるが、若し人間が禽獸のやうに境遇に支配せられるだけで、境遇を支配するものでないなら、切角人生を指導する法則とやらを發見しても、それは無益な發見で、それを發見しても、しないでも、人生は其の法則に支配せられて、人間の意思では如何とも之を左右することが出來ない。」

これは必ずしもマアルクスの唯物史觀を對象にして、批難した言葉ではないのであるが、唯物史觀の批評としても、隨分痛切な言葉である。マアルクスの學說に對しては、トルストイは「社會主義論」や「社會改革者に與ふ」や「現代の奴隷制度」や「勞働者に與ふ」に於て、一流の批評を加へたが、トルストイの意見に從へば、人間は決してマアルクスの言ふが如き、賃銀遞減の鐵則や資本自滅の宿命に支配せらるべきものではない。

トルストイは「現代の奴隷制度」に於て、溫情主義と社會主義とを、同樣に批難した。即ち今日の貧民は全く富者の奴隷である。此の不正を辯護するのに從來は僞宗教家が、「上帝の意思」を云々して、これは神の思召であると曲解したものであつたが、近頃は奴隷が斯樣な虛僞を信用しなくなつたので、第二の曲解が必要になつた。經濟といふ科學がそれで、人間の經濟活動を支配する「絕對的法則」があるといふ。例へば鐵道の貨物人夫や生糸工場の糸取工女や、其外種々の奴隷があつて、禽獸以下の生活をして居る。一體人間を斯かる悲酸な境遇に陷れたのは何者であるか、彼等を地獄から救助するには、一體どうしたらば善いのであるか。僞科學者は答へて曰ふ「彼等が悲酸な境遇に在るのは、鐵道が會社の私有に屬し、工場が紳商の經營に屬し、資本家が支配するからである、故に勞働者は團結して、勞働組合を組織したり、同盟罷工を起したりして、勞働時間の短縮と勞働賃銀の增加とを謀り、最近には一切の生產機關を自己の掌中に獲得して、始めて境遇が改善せられ、各自が完全に解放せられる、それまでは萬事已むを得ない、如何ともすべからざる運命である」と。

（八）

つまりトルストイは經濟學者が客觀的法則を偏重して、主觀的精神を輕視することを批難したのである。さうして此の批難はマアルクスが當然甘受しなければならないものである。

マアルクスは一八四九年にロンドンに亡命して以後、經濟學の研究に沒頭した。その結果として一八五九年に「經濟學批評」を出版した。丁度之と同じ年にチヤルス・ダアキンの「種の起原」が出版せられた。この二つは人間社會及び生物社會の有機的發達を始めて科學的に說明したものである。此の點に於て、マアルクスの社會學上に於ける功績はダアキンの生物學上に於ける

功績と價値を同じうする。

しかしマアルクスの學說には、修正派の頭目と稱せられるエヅソアト・ベルンシュタインが指摘する如く、二元論的矛盾がある。またマアルクスの行動に於ても、科學者としてのマアルクスと革命家としてのマアルクスとは、多くの場合に衝突した。彼の大著資本論にも同じく「經濟學批評」といふ傍題が附してあるが、マアルクスは知らず識らず當時の學風に支配せられて、「批評」と「批難」とを混同した。

彼はヘエゲルの辯證法を取つて、之を唯理論から唯物論に逆用した。勿論逆用したのは惡くはない、寧ろそこに彼の功績がある。しかし之がために唯理論を一概に批難するに至つては、これ「批評」と「批難」とを混同した結果であつて、之がために彼の學說は半面の眞理に墮し、種々の破綻を生ぜざるを得ない。

社會を的確に研究するには、科學的でなくてはならない。科學的であるためには、先入見的觀念を捨てゝ、現實の社會を支配する理法を發見しなければならない。彼は斯う考へたにも拘はらず、彼にも先入見的觀念があつた。彼は論理的に正當な社會を觀念に描きつゝ、現實の社會を批評した。既に現實の社會と言へば、別に理想の社會があつて、之と對照してのことである。しかるに彼は極端に走つて、現實のみを尊重し、理想を擯斥せんとした。彼の勞働價値說も、理想論としては正當であるが、現實論としては不當である。

マアルクスは寧ろ理想論者であるのに、彼は科學の本質を誤解し、科學の價値を過重した當時の學風に感染して、却つて理想を批難した。此の十九世紀の學風に猛然として反抗し、極端にまで理想の價値を高唱したのがトルストイである。

（九）

科學の本質に對する十九世紀的誤解は、しかし今日でも消滅しない。本來科學は、殊に近世の科學は、人道主義（ヒウマニズム）の精神に胚胎したものであつて、十八世紀までの科學者は概ね人道主義者であつた。しかるに十九世紀に至つて、科學は人道と背馳した。科學が如何に惡用せられ、科學が如何に人間に殘虐を逞しうしたかの事實は、今度の戰爭で暴露せられた。

マアルクスは機械の發達が、如何に資本主義によつて惡用せられ、人間に暴虐を加へたかを精細に描寫したが、その機械の發達は科學の發達した結果であつて、謂はゆる機械の殘虐は卽ち科學の殘虐である。もし機械の殘虐を呪ひながら、科學の功績を讃美するならば、これ明かに矛盾である。機械の惡用が呪ふべくんば、科學の惡用も亦た呪ふべきである。

機械の惡用を呪咀することは、マアルクスもトルストイも同

一であるが、しかし機械を惡用するのは、果して資本家だけであるか、或は勞働者も同罪であるか。此の點に於てトルストイはマアルクスと見解を異にした。蓋しマアルクスは工業國であるところのイギリスの事情を見て思想を造り、トルストイは農業國であるところのロシアの事情を見て思想を造つた。

トルストイに從へば、現代の奴隷制度が發達するのは、三種の事實に原因する、即ち第一には貧者が土地を所有しないこと、第二には租稅が餘りに苛重であること、第三には貧者が富者と同じく贅澤であること。さうしてトルストイに從へば、マアルクスは唯だ第一と第二との原因を除かうとするが、第三の原因を除かうとしない。

即ちトルストイの言葉に、「カル・マアルクスは曰ふ、最初には地方の農民が土地を奪はれ、都會の工場に行つて職工になる。職工を悲酸な境遇から解放するには如何にすべきか。此の問題を解決するには農民が地方の土地を奪はれ、都會に流れ出す根本の禍因を除かなければならないと。しかるに彼等經濟學者は農民を田舍から驅立てる原因を幾分か理會して居るが、その禍根を如何にして除くべきかを考へない。唯だ現在の工場の狀態を少しでも改良しやうとする。あたかも工場勞働者の斯ういふ境遇は變更の出來ないもの丶如く信じ、既に工場に居る者には、成るべく工場に何時までも留まつて居ることを奬勵し、未だ鄕里を離れない者には、成るべく工場へ流れ込むことを奬勵するかのやうに。」

勿論トルストイの言葉にも、多少の偏見が加はつて居る。社會主義者をして言はしむれば、「如何にも勞働者を優待すると、彼等も多少の贅澤はする、しかし懐中に餘裕があると、唯だ勞働者ばかりではない。資本家もやはり贅澤をする。」それは如何にも事實である。しかし、とにかく斯ういふ事實が、トルストイの言ふ如く、地方の農民を誘惑して、工場に流れ込ませる原因である。また斯ういふ事實のために、中産階級や知識階級は、資本階級と勞働階級との、双方から壓迫せられつ丶ある。

「最も進歩した經濟學者でさへも、即ち生産機關を勞働者の掌中に移さうとする社會主義者でも、その要求するところのものは、現在工場で生産すると大體同じやうなものであり、即ち現在の社會に於ける工場制度の持續である。

（一〇）

トルストイに從へば、人間が贅澤をやめなくては一切の革命は無效である。故に「社會主義論」の冒頭に曰く、「贅澤をやめなくてはいけない。」前に引用したマアルクスの言葉によつて知られる如く、マアルクスに從へば、社會革命の根本要素は、經濟

生活にあるのであつて、精神生活にあるのではない。しかるにトルストイは主張する、「本當の革命は精神の革命、即ち改心である。」人間が眞の幸福は物質生活にあるのではなく、精神生活にあることを悟つて、富者も貧者も一齊に、奢侈贅澤をやめなくては、如何に社會を改革して、如何に生産を增加して、品物が世界に溢れても、欲望は決して滿足しない。人間が資本や權力の奴隸になるのは、奢侈に戀々たるからである。彼等が政府や軍隊を造つて、自縄自縛に陷るのは、みな贅澤のためである。

しかしトルストイの斯ういふ言葉は、釋迦も言ひ、キリストも言つたことであるが、それが社會の實際に行はれないのは何故であるか。虛僞を排し眞理を弘めることによつて、國家を破壞するといふとき、果して幾許の成算があつて、トルストイは之を言ふのであるか。資本制度の根本に一大斧鉞を加へることによつて、奢侈贅澤の根源を拔塞するにあらずして、そこに奢侈贅澤を防滅すべき如何なる良法が存在するか。

トルストイは明かに革命に對するマアルクスの精神を誤解した。マアルクスは決して精神の革命を無視したのではない。反つて之を成就せんとした。トルスイトは勞働者に向つて、奢侈贅澤を放棄すると同時に、資本家や政治家や國家や軍隊に關はるな、租稅を納めることも拒絕せよ、軍隊に入ることも拒絕せよといふ。これ明かにトルストイの無抵抗主義に於ける矛盾である。また吾々は租稅を納めないためには、一片のパンを手にすることも出來ない。

釋迦、キリストの言葉は眞理である。しかし眞理は往々にして、時間の經過するに連れて、唯だ形骸だけが殘つて、內容が枯涸するものである。故にキリストも言つたではないか。新しい酒は古い革袋に盛ることは出來ない。我の來たのは律法の一點一畫をも破壞せんがためではない、却つて成就せんがためである、と。マアルクスが經濟の革命によつて精神の革命を成就せんとするのは、即ち新しい酒のために新しい袋を繕ふのであり、釋迦、キリストの律法を有效に成就せんがためである。

(二)

一體、經濟生活と精神生活とを本質的に區別することは到底出來ないことである。何が本質的に經濟生活であつて、何が本質的に經濟生活でないか。何が本質的に精神生活であつて、何が本質的に精神生活でないか。生活のためにする生臭坊主の說敎と、信仰のためにした淸敎徒の農業とは、いづれが經濟生活であり、いづれが精神生活であるか。經濟生活といひ、精神生活といふも、それは本質的の區別ではなく、方面的の區別である。職業上の區別ではなく、態度上の區別である。吾々の生

活は唯一である。唯だ一つの生活が、吾々の生活する態度によつて、經濟生活にもなり、精神生活にもなる。マアルクスは經濟革命と精神革命とを嚴格に區別せよと言ひながら、經濟生活と精神生活とが相卽不離な密切な關係に立つことを立證した。

物體が運動する場合には、促進作用と牽制作用とが相待つて働くものであるが、吾々の意識や行爲にも、之と全然同一の作用が殘存するものである。卽ち多くの場合に於ては情意は促進的であり、理知は牽制的である。普通に吾々の意識作用は、知、情、意の三つに分類せられるが、此の三つは二つであつて、更に此の二つは一つである。卽ち吾々の生命は「生きんとする意思」にある。この唯一の意思の作用に、感情と理性との兩面がある。吾々が經濟生活と精神生活とを、區別するとき、それは大體に於て感情生活と理性生活との區別である。

トルストイは人間の感情は、粗野な動物的感情であるから、一旦理性の洗禮を受けて、至醇な愛情に淨化せられなければならないといつた。これは無論至言である。しかしトルストイは此の眞理を、個人の精神生活にのみ適用して、社會の經濟生活に適用しやうとしない。

（一二）

社會的缺陷の原因を、マアルクスは寧ろ社會の組織に歸し、トルストイは寧ろ個人の精神に置いたが、しかし吾々は個人と社會とを本質的に區別することは出來ない。吾々の自我は、外部に於ては「社會」に向つて擴大し、內部に於ては「精神」に向つて擴大する。自我は絕對有であつて、同時にまた絕對無である。吾々は吾々の外部生活と內部生活とを切離して考へることは出來ない。外部生活と內部生活とは、本質的には一つであつて、唯だ方面的に二つであるに過ぎない。

但し吾々は特に斯ういふことに注意しなければならない。卽ち吾々は眼を外に向けて社會を漫然と眺める場合に於てよりは、却つて寧ろ吾々の眼を自己の內部に向けて、反省的、內觀的に自我の本質を洞觀する場合に、個人と社會との一元的關係を明確に看取することが出來る。トルストイの言葉に、「社會が（經濟其他の方面から）最も適當に整頓したならば各人が全體の利益を重んじ、全體の幸福を計るがためには、自己を犧牲に供することを惜まない。全體が斯樣な心掛であるならば、各自も社會のために全力を盡すであらう」と。各人が斯ういふ心掛になるためには、外部生活よりも內部生活に重きを置くことが必要であつて、これが卽ちトルストイが經濟生活よりは精神生活に重きを置き、社會の改革よりは個人の改革に重きを置く所以である。

吾々はまた斯ういふことにも注意しなければならない。即ち吾々は唯だ社會の改革にのみ依頼して、自己の改革を忘却してはならない。吾々が自我を解放するには、外部生活を改造して物欲を充足することが必要であると同時に、內部生活を改造して物欲を解脫することも必要である。例へば炎熱から自己を解放するためには、衣を薄くし居を涼しくするのみではなく、心頭を滅却すれば火も亦た涼しといふやうな「悟り」が必要である。トルストイが「如何に生產を共營にして、分配を公平にしても、人間が物欲以上に幸福を追求することを知らなければ、たとひ品物が世界に溢れても、人間は尙ほ不平不滿を免かれないであらう」と言つた理由は玆に在る。

またトルストイは斯ういふことも言つた。「キリスト教社會主義者の誤謬は、彼等が聖書から物欲の充足に關する部分だけを抽出することである。如何にも人間が聖書の福音を信奉すれば、その結果として物欲が充足せられる。けれどもそれは結果であつて目的ではない。聖書は人間に道を敎へる、さうして人間が共の道を守れば、期せずして物欲が充たされる。それが充たされるには相違ないが、しかしそれが聖書の目的ではない。若し聖書の敎訓が物欲の充足を目的とするものであつたならば、人間は之に依つて物欲を充足することは出來ないであらう」と。

すべて之等の言葉は唯物論者の宜しく傾聽すべきものであるが、しかし吾々の外部生活と內部生活とを一元的に考へる場合には、物欲と物欲以上の幸福とを相反したものと考へることの必要はない。

（一三）

近頃日本にはイギリスの新實在論者の學說を輸入して、所有の衝動と創造の衝動とを云々する人々があるが、人間には所有の衝動の外に放棄の衝動もあり、創造の衝動の外に破壞の衝動もある。フランスの自由哲學者は自由膨脹と自己拋棄とを說く。實際吾々には物欲を充足せんとする志向と、物欲を解脫せんとする志向とがある。吾々は物欲を充足することによつて物欲を解脫することも出來れば、物欲を解脫することによつて物欲を充足することも出來る。

人間は、中世に於ては主として物欲を解脫することによつて物欲を充足するの主義を採つたが、近世に至つては之と反對に、物欲を充足することによつて物欲を解脫するの主義を採つた。かくて奢侈贅澤が普及した。人間が一般にエピキユリアンになつた。しかるに資本主義の經濟制度は、これまで科學と機械との恩惠の一部を勞働者にも分配したが、今や之を資本家にのみ獨占せしめんとするに至つた。曾て資本制度を讚美した一般民

衆は、今や却つて之を呪咀するやうになつた。

中世に於ては惡魔の哲學として呪咀せられた經濟學は、近世に至つては新しい倫理學としての地歩を開拓したが、しかし經濟學が「欲望」を以て研究の對象となし、欲望を物欲の充足に目的を置くものと解釋する間は、經濟學は未だ完全に新しい倫理學としての地歩を確立することが出來ない。經濟學者は煩悶した。或者は欲望の範圍を藝術乃至宗教の領域にまでも擴張せんと試み、或者は欲望の範圍を衝動にのみ制限せんと試みた。此間に在つて欲望の範圍を極端にまで擴張し、倫理學と經濟學との絕對的統一を試みた者はマアルクスである。マアルクスは明かに經濟生活と精神生活の一元的統一を企圖したのである。人間をして物欲を充足することによつて、物欲を解脫せしめんとした。物欲の充足に馴らされて來た近代人を、物欲の解脫に馴らされて居た中世人に改宗せしめることは、甚だ困難なことでなくてはならない。此を以て彼は經濟主義を取り、充足主義を取つた。しかし之が爲に彼が精神主義を捨て、解脫主義を捨てたと解釋することは出來ない。

但だ吾々は物欲を充足する場合には多く感情に訴へ、物欲を解脫する場合には多く理性に訴へる。しかるにマアルクスは科學主義を社會主義に適用することによつて、感情よりも理性を重んじた。科學的社會主義は唯物的社會主義でありよりは、寧ろ精神的社會主義でなくてはならない。

（一四）

マアルクスとトルストイとの共通の最大特色は、彼等が極端にまで理性を尊重したことである。即ち前に一言した如く、マアルクスは理性を經濟に、トルストイは理性を宗教に適用した。さうしてその結果として、マアルクスは唯物的史觀と階級闘爭說とを立て、トルストイは理性的愛說と無抵抗主義とを立てた。しかるにマアルクスの唯物的史觀には科學の本質に對する誤解があり、トルストイの無抵抗主義には革命の意義に對する誤解がある。マアルクスに採るべきものは、唯物的史觀ではなくして、階級闘爭說であり、トルストイに取るべきものは、無抵抗主義にあらずして、理性的愛說である。

トルストイの精神、マアルクスの運動。この二つが一つになつて、今後の世界を支配するであらう。

今やマアルクスの祖國ドイツと、トルストイの祖國ロシアとは、列國に卒先して革命を遂げた。由來ドイツ人はヘルレニズムの系統を引き、科學的な民族であつて、その社會主義は夙に新カント派によつて審判を受けつゝある。またロシア人はヘブライズムの系統を引き、內省的な民族であるから、そのボルセヰズムは必ずや早晚トルストイズムによつて洗禮を受けるであらう。

賃銀制度廢止論

賀川豊彦

一、勞働者は商品以下である。

ロジャースの賃銀史 (James E. Thorold Rogers: Six Centuries of Work and Wages) を讀んで見ても、ウエゲランドの『佛國勞働階級史』(Wergeland: History of the working classes in France) を讀んで見ても、感じることは一つである。生産者は、永き人間の歴史を通じて、決して正當な待遇を受けて居らないのみならず、人間らしい賃銀を受けたのは、十四世紀の一寸との間で、その他はいつも食ふや、食はずの生活に甘んぜねばなら無かつたと云ふことである。

世の中の人は色々云ふであらう、勞働者は、今日決して悪い待遇を受けては居ら無いと。ゾンボルトの如きは、その社會主義の批評に於いて、賃銀は決して前時代に比例して低下して居らぬことから、勞働者が、今日の時代を呪ふのは間違つて居ると云ふ樣なことを論じて居るが、今日の狀態が、假にゾンボルトの云ふ通りであるにしても、私は過去四十世紀間の、勞働階級の忍從と迫害は、ゾンボルトの説を萬倍にして辯護しても、到底除き去ることの出來ない事實であると信ずるのである。

勞働者の多くは數世紀前まで、全く奴隷で有つた。いや、今でも南洋と亞細亞の南部、アフリカの西岸に於ては勞働者はまだ純然たる奴隷である。

文化の曙が、勞働者を奴隷の狀態から解き放つたのは近頃であるが、昔から有つた自由勞働者と雖も、人間としての受く可き尊敬は受けて居りはしない。人間の迷妄が餘りに深かつた爲めか、人類の進化が岐路に這入つてゐた爲めか、人間は生産者を尊敬することを知ら無かつた。超自然と略奪者は何かそこに特別の關係があるかの樣に考へられて、經濟的勢力が社會の基底をなすと云ふことなどは考へもつか無かつた。それで、勢力の強いものはいつも略奪者である、神の味方を持つて居た。そして被征服者は、魂と自由さへ否定された物質生活の外何にもないものとして賤められた。

凡ての偶像は精神を持つて居た。木も、川も、山も、皆魂を持つて居た。然しアテンスの勞働者がユーリシアンの密儀(ミステリー)に參加させてくれと官憲に申込んだ時に、『勞働者には魂が無いから』と云つて斷られたでは無いか！過去四千年間、勞働者はいつも虐待せられ、輕蔑せられ、魂が無いかの樣に罵られて來た。十七世紀に英國のチヤルス二世は『勞働者は金を貯め得ざる者であるから最も非生産的の階級である』と考へたさうであるが、凡ての時代を通じて――それは今日に到るまで少しも變らず――何かの理屈がつけられて、商品以下に酷使せられて來た。それは殆ど感情の問題である。下水を掃除し、便所を淸潔にする樣なことは、天の使か、お母さんで無ければしないことを勞働者がするからと云ふて、その階級を穢多と云ひ、非人と云つて輕蔑して來た感情は、今日も猶多くの無智な中産者階級の持つて居る思想である。即ち人間に對しては何等趣味を持た無くてダイヤモンドと、茶器と、自動車に趣味を感じる、貴婦人は初めての掠奪者が持つた居た、迷信と少しも變ら無い、迷信を持つて居るので有つて、彼女は一個の結晶體に十萬圓を支拂つても、貧民窟の飢えつゝある勞働者に向つては何等趣味を感じ無い。即ち二十世紀に於ても、人間の生産者に屬する部類の人々はまだ、商品陳列場の或種の商品より以上の尊敬と注意とを、今日の中産者階級より受けて居らない。

第一の時代の迷信は超自然で有つた。そしてこの時代には、勞働者が超自然力を持つて居らぬといふ理由で排斥せられた。第二の時代の迷信は、商品で有つた。そしてこの時代には、勞働者が、商品の如く便利で無く、美しく無いと云ふので排斥せられて居る。どちらにしても、勞働者は人間以下である。

勞働者は、今日商品以下の待遇を受けて居る。商品は腐敗しない樣に、濡れ無い樣に、燒け無い樣に、乾き過ぎない樣に、盜れ無い樣に、大きな煉瓦造の倉庫に入られ、番人がつけられる。然し之を製造する人と、之を運ぶ人は、貧民窟の豚小屋にも劣る陋屋に横はり、濡れ、乾き、燒かれ、腐り、倒れて居る。

私は折々輸出向の商品の大事にせられて居ることを見て、せめては、輸出向きの商品だけ、勞働者の生活が守られ、注意され、保護せられるならば、どれだけ幸であらうかと思ふたが、私の住んで居る貧民窟では、豆が生える時に心配する程も人間の育つ事に心配され無い。

商品以下に人間が見積られて居る間、勞働階級の解放と云ふことは全く無用なことである。我等は勞働階級を解放する前に先づこの唯物主義の唯物崇拜を破壞してかゝらねばならぬ。

マルキシズムは勞働階級を解放することを約束した。そして、

その敎條の一つとして唯物史觀を與へてくれた。それは、また商品禮拜（フエチシユーズム）を破壞して、更に、『パン禮拜』に替へたものである。前者の場合に禮拜物は客體であるが、後者の場合には、禮拜物は口から胃へ通つて消化されるからして、余程主觀に近くはあるけれども、勞働者には矢張り『魂』を與へてくれ無いことは、第一の迷信の時代と少しも變りは無い。解放を要求してくれたマルキシズムも、遂に、勞働者の『我』を解放することを忘れて、勞働者を、商品禮拜より解放する爲めに、反つて、唯物主義に縛りつけてしまつた。そして、勞働者は遂に商品と同列の物質に化してしまつた。

明治四十三年の大逆事件に無期徒刑の宣告を受けた、唯物主義のS・Sは『唯物論の礎上に築き上げられたる主義は、人を禽獸に墮します』（沖野岩三郎著『生を賭して』一三九頁）と告白して居るが之を見ても解放の道は、商品より解放であることは勿論であるが、唯物主義よりも同時に解放せられねばならぬことは明かである。

二、何より勞働階級を解放すべきか

勞働者が、商品以下に取扱はれて居ることが歴史上の事實でもあり又現在の事實である以上、我等はどうしても之より勞働者階級を解放せねばならぬ。

然したゞ商品以下の待遇と云つても、その由つて來る原因を
よく研究して、それより解放せられ無ければ、その解放は、無
意味なことである。先に私は、唯物史觀が、眞に勞働階級の解放にならぬことを說いたが、今日の資本主義よりも解放が勞働者の解放になるか否かを研究する必要がある。

資本主義の最大の誤謬は、『儲ける爲めの經濟』と云ふことである。この儲けると云ふ簡單な心理の中には色々な要素が這入つて居るが、要するに、金が多く這入れば、それで善いのである。それが、人類の幸福にならうがなるまいが、國家の利器にならうがなるまいが、儲けさへすれば、それで善いのである。その爲めに、マルクスがよく『資本論』の中に說明して居る通りに、今日の資本主義の經濟學の中には、國家も社會も、工場も、勞働者も、人間も、親も子も、人情もなにも無い、そこには『金——商品——金』の外はなにも無いのである。で今日、資本家が、國益だなど口で大きなことを云ふて居るが、その工場に對する投資でも、鐵道、海運に對する投資にしても、皆、之は一種の金儲けの工夫で有つて、儲が無ければ、國益もなにも有つたものでないのである。即ち資本主義の立場から云へば商賣や株式が一番勝負が早いので、これが實際は面白いのだがこれだけでは儲けも少ないし、危險も多いからと云ふのが、資

本主義が、工場經營に手を出し始めた理由である。

こんな風であるから、資本主義の立場から云へば、それが、どんな立派な人格者の經營する工場で有つても、職工や、勞働者は結局は金儲けの道具で有つて、動力と少しも變りはないのである。でこの無慈悲な資本主義より無產者階級が解放を要求するのは當然でありまた正當なことである。

然し間違へてはならぬことは、金儲けと云ふことは、今日では、資本家が云ふ計りで無しに、勞働者も云ふて居ることである。資本家が、『金——品——金』を云ふと同じ樣に、今日の勞働者は、マルクスが資本論第二卷で指摘した『金——勞力——金』の資本主義の方程式を、そのまゝ自分の生活規程として居る。卽ち、今日の勞働者は、出來るだけ僅少の勞力を莫大な金と交換したいと考へて居るのである。それで勞働者には、最高賃銀はどれ位いかと云ふ標準は無い。彼等は、今日の『金儲け經濟學』の中毒にかゝつて矢張り、多く儲けたいと考へて居るのである。卽ち、出來るだけ僅少な勞力で、最多量の貨幣を摑み得ることが、彼等の理想となつて居るのである。それでもし今日の資本主義の『金儲け』經濟より解放せられると同時に、賃銀勞働者も『金儲け』主義からも、解放され無ければ、何にもならない。卽ち、根底に橫はる病根は、客觀主義のフェチシイズム（崇物症）である。卽ちこの崇物狂から、解放せられて、人間の最大理想は、人間の活動そのものにあると云ふこと卽ち主觀經濟に目醒めるまでは、百の解放も、千の階級爭鬪も戰亂も要するに無意味である。それで、今日の解放運動は、たゞ資本主義よりの解放と云ふ樣な簡單なるものですまぬ、資本主義が起つて居た、人間の心の奧深い所に橫はつて居る病根である崇物症から癒されることが、先づ第一の急務である。

然し勞働者がこの崇物症（フェチシズム）に陷つたのにも理由がある。それは今日の社會組織に於て、人間性の分化をつなぎ止めるたゞ一つの綱が利益と云ふことで有つたからである。卽ち、人間には全人、全靈、全性を發展せしめる前に、一種の功利的快樂主義感情が早く目醒めた爲めに、この感情が躍動するまゝに、凡ての經濟組織が變動することになつた。そして、この功利的快樂主義が、便利と必要の爲めに、貨幣を生んで、世界を貨幣で統一してしまつた。之は資本主義經濟に向つては、著大な勝利で有つたが、それと共に、人類の進化に向つては根底に於ての失敗で有つた。貨幣の出現と共に、勞力の資質が自由にはなつたが、物質では出來て居らない、人間性が、凡て物質で換算される樣になつたからである。かうして、人格と勞力體とが完全に分裂する樣になつたのは貨幣の出現してより以後のこと

である。

卽ち今日勞働者を解放すると云ふことは人格の分裂を餘儀なくせしめた貨幣制度そのものより解放せねばならぬと云ふことである。そして、分裂した自我を貨幣で、買ふて行く事を賃銀撤廢制度と云ふ。で、私は、勞働者の解放の第二の階段はこの賃銀制度でなければならぬと思ふ。（第一は崇物主義（フェチシズム）よりの解放）

賃銀制度が崇物主義から導かれた、功利的制度である爲めに、今日の勞働者の凡てがこの崇物症にかゝつて居ることは否定の出來ないことであるが、賃銀制度がこの功利的自我分裂に導くから之を否定せねばならないのみならず、賃銀制度は、自我分裂の作用の外に多くの社會的疾患を齎らした。それは、第一に賃銀制度によつて、勞働者が全く、資本家に對して、從屬的立場に立つ樣になつたと云ふことである。また第二には、賃銀の性質上不安的になり、第三にはこの不安定な生活からかられる心理的不信用又、社會的孤立と云ふことが導かれて來た。ゾンボルトは此點に注意して居るが、（鈴木譯ゾンボルト『勞働問題と勞働政策』一二一――三五頁參照）それが賃銀制度そのものから導かれたものであると云ふとは論じては居ら無い。然しこの從屬的、この不安定、この不信用、この孤立と云ふものは皆、賃銀制度から導かれた惡で有つて、人間を人間で取扱ふものがどうして、その友をこの樣な境遇に陷れることが出來やうぞ。

救貧問題は資本主義を解決すれば出來ると云ふけれども、賃銀生活から來る、その不安定と、その從屬的關係と、その孤立とその不信用が除き去られ無ければ、貧民は永遠に地上から無くなるものではない。

然し何をか、從屬的關係と云ふか、資本家の意のまゝに召集され、資本家の意のまゝに解職せられるのみならず、凡ての勞力生活に於て、いつでも、自我を主張し得ないことである。彼等は特殊な疾病が特殊な職業にあることを知つて居り乍ら、猶且、資本家との從屬的關係からその致命的職業に從事せねばならぬのである。

何をか、生活不安と云ふか、賃銀生活程生活の不安なものは無い。『土方殺すに、刀は入らぬ、雨の三日も降れば善い』と貧民窟では歌つて居るが、誠に賃銀生活程、不安定な、不確實な職業は無い。工場勞働者に於ては比較的安定はあるけれども、之とても、自己の筋肉が資本であるから、その筋肉に多少でも故障があるなら、それで凡ては終りである。彼等が貧民生活に落ち無いと云つてもそれは全く不可能なことである。

何をか不信用と云ふ。從屬的、不安定な生活を送つて居る爲めに、外部より全く助くるもの無く、何人も彼を信用し無い爲

めに、彼の延び上る道が無いのである。現代に於ては金が信用である爲めに、筋肉が資本である彼に信用の加はる筈が無いのである。何をか孤立と云ふか、分業に分業の度を重ねて、彼は職業的には、孤立し、社會的に孤立さゝれ、馬鹿な樣なものになつて、自己の創造に對しては何等の趣味も感じ得ないまでも墮落した心靈的孤立に陷ることがそれである。

そしてもし、勞働者側に於て、この孤立とこの不信用と、この不安定と、この從屬性が無いならば、資本家は勿論人間より勞力のみを除去（エキストラクト）することは出來ないであらうと私は思ふのである。そしてこの除去（エキストラクト）を可能ならしめたのは今日の貨幣制度と、その上に立てられた賃銀制度とである。

で、今日の資本主義と云ふものが呪ふ可きものだとしても、その呪ふ可きものを解剖すれば「金儲け」主義の外に、上に述べて來た樣な崇物主義、貨幣主義賃銀制度と折り重つた罪があるので有つて、たゞ金儲け主義を除き去るにしても、その金儲け主義の起原をなす、崇物主義、貨幣主義賃銀制度を一々撤廢せなければ何の役にも立た無いのである。それで、私はこれから賃銀制度の內容を調べる必要がある。

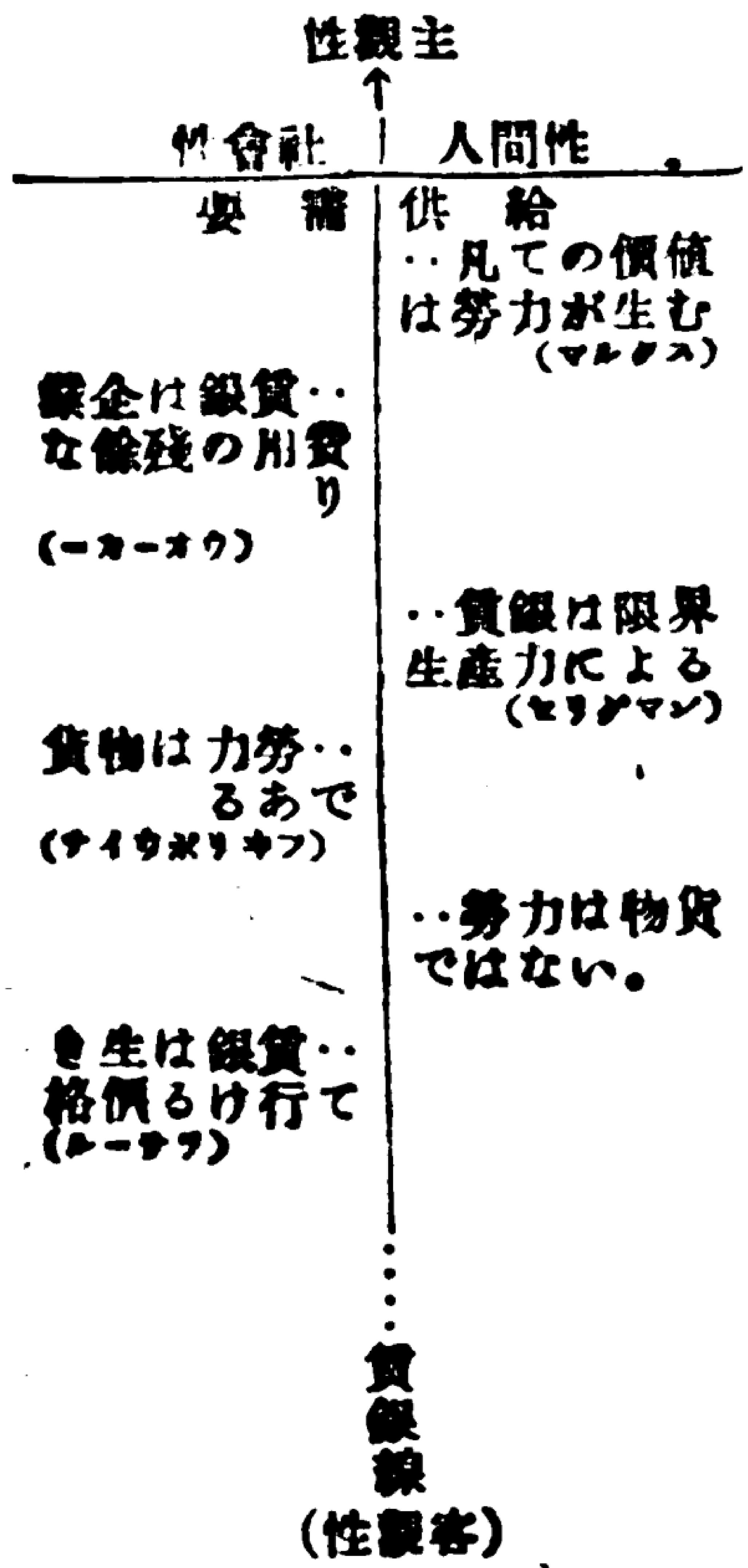
三、賃銀鐵則是非

賃銀制度を支配する法則に、賃銀基金說と云ひ、賃銀殘餘說と云ひ、限界利用說と云ひ、物價決定說と云ひ賃銀鐵則と云つた樣なものが色々ある。アダム・スミスが創說して、マルサス、リカード、マツカロツク、ミルトと經て大成せられた、一種の需要供給より割出した說を賃金基金說と云はれる。リカード說よりラサールによつて更に膨脹せられた、『賃銀は勞働者が生きて行けるだけ以上を支拂ふものにあらず』と云ふ勞力を化學方程式より割出さんとしたものを賃銀鐵則と云ふ。又ウオーカーは企業の總收入の中より、地代、利子、利潤その他一切の費用を控除して後に殘るものが賃銀だとの說を出したが之が、殘餘說である。その外、クラークや、マーシヤルやセリグマン等が主張する、賃銀は、勞働者の寄與する限界生產力に因ると云ふ、限界利用說と云ふものがある。

然し賃銀は要するに、勞力と云ふ一種の貨物だから、物價決定の法則によつて支配せられるものだと云ふブレンタノや、プイリツボウイチの說もあり、之とは、正反對に、マルクスの樣に、勞働價値說から、凡ての價値は勞力が生產したものであるから、勞力を物價法則で決定することは誤で有つて、物價の法則こそ反つて、勞力の量の如何（卽ち時間）によつて決定せらる可きもので、今日の賃銀は全く、餘剩價値の略奪で始まつて居ると考へる、一種の主觀論がある。

大抵凡てに少しづゝの眞理がある。私の立場としては、賃金基金說の如く、客觀的說明計りでも賛成が出來ない。またさうかと云つて、マルクスの樣に主觀論計りに花を持たすことは出來ない。（拙文『主觀經濟學體系』（大正八年四月日本及日本人參照）

然し今日の資本主義の經濟學に於ては勞力は決して、人間としての待遇を受けて居らぬことだけは事實である。然しまた之が基金說の如く、需要供給の法則によつて、賃銀が支配せられて居るにしても、勞力はどんなにしても、物貨にはなり得ないのだから、普通の物貨の供給とは違つて、人間性が目醒めてくると共に、或は最低賃銀制設定の要求となり、事業賃銀の要求となり、主觀的要素が一層強くなる事はマルクス說が出現する事を見ても明白である。之を圖解すれば次のやうなものである。



即ち賃銀が大抵に於て需要供給の法則によつて支配せられるものであるにしても、需要するものは、社會であり、供給するものは人間であるから、『我』の自覺が強くなればなる程、その賃銀法則は主觀的になるものである。即ち、賃銀鐵則は、需要者の權力のみが強い時にのみ、賃銀標準を定める基底となり、『食ふだけだよ』と雇はれるものに宣告し、雇はれるものも『食ふだけで、よろしう御座りますから』と云ふて雇はれて行く。然しさうかと云ふて、人間だから、カロリー量だけ與へるわけには行かず、相當の享樂も與へねばならぬ。又需要の方面からのみ見れば、勞力は物貨と同樣の支配を受けるものに違ひは無いけれども、その生產力を無視するわけにも行かぬものである。（供給の方から見れば）之と同樣に需要者から見れば、企業に際してその勢力は、地主と銀行の力の方が強いから、賃銀上の割當はつい〳〵後廻しにはなるが、今日の樣に、勞働組合の勢力なり、社會的覺醒の著しい時には、勞働者の要求を無視しては何にも仕事が出來なくなつた。即ち、賃銀を支配する法則は、賃銀鐵則を基底として、主觀性の目醒めと共に、沸騰して、賃銀制度を破壞するまでに昇りつめるものである。

それで、今日迄の經濟學者の樣に、紙の上で、賃銀法則を書き連ねることは、全く無用なことである。賃銀を支配する法則

は、賃銀史とするものである。即ち、賃銀史は、私が畫いた賃銀曲線の樣な形で發展して來て居るので有つて、賃銀制度なるものが、絕對的制度だと考へるものには、この曲線の進行性が充分理解出來ないであらうが、賃銀制度も要するに、人間の制度であるから、人間が、人間として變轉する以上、矢張り、一種の傾向と歷史の形で延び上るものである。そして人間の努力の第一は、『自我』の解放であるから、人間が、物貨の如く、賃銀によつて支配せられて居ることが、全くつまらぬものであると云ふことがわかつてくれば、賃銀制度は、その次の時間に消滅するのである。然し不幸にして、今日の資本主義國家は、主觀の殺戮時代である。それで、今日に於ても、まだ、需要者（即資本家）の勢力が絕大である所では、絕對的とはいかなくとも比較的に云つて、賃銀鐵則は或程度に於ての事實である。この爲めに、世界に渦卷く今日の生活不安と、社會革命が出現した。そして賃銀問題を中心として階級鬪爭の激烈な幕が開かれた。そして、勞力の供給者は、賃銀は鐵則によつて支配さる可らざるを宣言して居る。

賃銀法則は遂に賃銀史そのものである。そして、賃銀史は要するに人間史である。それで、私は賃銀史の解釋を先づ試みねばならぬ。

四、賃銀史の解釋

賃銀史の教へる所は古代に於ても、近代に於ても殆ど同じことである。即ち、特權階級の勢力が增加すると共に賃銀階級が段々貧困に陷ると云ふことである。エー・エッチ・セース博士の『バビロン人及アッシリア人』(A. H. Sayce: "Babylonians and Assyrians")を讀んで感じることは、世界で始めて、資本主義國家を建設した、バビロン人は、年を經ると共に、賃銀階級が生活難に苦しんだ樣に書いてあることである。

バビロンでは勞働者の賃金が一年四シケル（六圓位）で、この外に食はしてくれるのが普通であつた。然し勞働者階級の住宅は土で塗つた圓錐形の小屋で、窓は入口の外に無く、入口の戸を閉めると眞暗になる性質のもので有つた。而も、家賃は普通この種類の家で十シケル（一年十五圓位）であつたから勞働者はこの相場では、普通の家には住め無かつたのである。貧富の懸隔は年と共に甚しくなつて、バビロン帝國の初代には、借家人などの無かつたものが、段々增加して行つたのみならず、借金の爲めに、奴隷にまで、身を持ち崩さなければならぬものが澤山有つた樣である。一方ではエヂビ家と、ムラスの一族の樣に、銀行家として、王朝の變動にも搖されずして、帝國の財政を一手に引受けて居たものがあるかと思へば、他方に於ては

六回から四十回の借金の爲めに一生奴隷となつて苦しんだものが有つた。人間の運命と云ふものは、實に妙なものである。それでユダヤの預言者は、バビロンの商人は『人の魂まで賣買すると云ふたが、初めて貨幣文明を創設したバビロンは、その賃銀政策に於て見事失敗した。即ち賃銀制度は、バビロンに於て全く特權階級のマヽ事の爲めに設けられた樣たもので有つた。

古代羅馬に於て、賃銀勞働者が、その賃銀によつて到底生活出來なかつたことは、アウガスタス・シーザーの時に三十二萬の貧民が每月羅馬市だけで、施米に預つたことを見ても明白である。彼等は、モンゼンの云ふ所にすると、一日十四錢の賃銀で傭はれて、百匁四十錢の肉を買はされたのである。それで、その生活難は想像以上で有つたらうと考へられる。この爲めに賃銀階級は三度四度の社會革命を行ひ、その爲めに、國を危くする樣な破目に陷つた。で、羅馬の賃銀史は、全くラサールの賃銀鐵則以上の悲劇で有つた。

五、英國の賃銀史

賃銀史で面白いのは中世以後の歐洲の賃銀史で有つた。英佛獨各々その賃銀制度とその實價に於て多少違つた所があるけれども、大體に於て殆ど同一の方向を取つたものである。即ち賃銀制度は、資本主義政府の有力た武器で有つたと云ふことと、その指數は常に、政府の爲政によつて、切り崩されたこととは全く同じである。

それで、英國の賃銀史を研究したソロルド・ロヂャースの如きも『英國勞働者の貧困と墮落は全く議會の法令と政府の命に責任があるもので有つて、それは常に、賃銀を最低にまで引下げて勞働さゝんと試みたもので有つたが、またそれはいつも成功したものである。』(Rogers: Six Centuries of Work & Wages p. 9) と云ひ、又、

『一五六三年より、一八二四年まで、英國には法律によつて謀まれた一種の謀反が有り、その成功に興味を感じた黨派によつて、それが運用され英國の勞働者の賃銀を欺き、耕地に縛りつけ、絕望の淵に陷れ、再び救濟され得無い貧困狀態にまで陷れたもので……實に、二世紀半以上、英國の法律と法律の執行者は、英國の勞働者をすりへらして、どん底におとし入れ、組織的の不滿を少しでも表示した場合には之を蹂躪し、彼の權利を主張したものには凡て罰金を課したるものである。』(ロヂャース『英國勞働史』三九八頁參照)と云ふて居る。

不幸にして、ロヂャースの云ふとは英國に於ては事實で有つた。英國に於ては一三四八年八月一日ドルテストシャイヤーに發した黑死病の爲に人口は稀薄となり、勞銀は昇騰したが、之

が爲めに勞働者には反つて之が災となり、勞働者を縛る法律が出來た。そして一三四七年の賃銀より以上に要求するものは罰せられることとなつた。然し賃銀は一三五〇年代には從前の三倍となり、之が久しく續いて、一四九五年頃には、まだ勞働者が、十四週間位勞働すれば、一年間は充分食へる程で有つた。そして、一五三三年頃でも、まだ一年に十五週間勞働すればその年中生活するには充分で有つた。

然し官憲が働き出して、法律によつて賃銀を定める樣になつた一五九三年頃には、一年間四十週間も勞働しなければ食へ無い樣なこととなり、飢饉年などになると全く食へなくなつたのである。

處が、一六三四年には、四十三週間の勞働が必要となり一六五一年にはどうかすると一年五十二週間毎日勞働しても不足する樣になり一六八四年頃になると、賃銀に比例して物價の騰貴の爲めに、收入が五割不足になつた。然しもし之を不平でも云ふものなら、二十一日間の罰金を課せられるので有つた。

そしてエリサベス法の第十八條、第十九條、第二十條は、今日、日本の治安警察法第十七條と同じ意味で、全く勞働者の團結を防害する爲めに設けられたが、英國の資本主義文化が一層進展して居る時でも勞働階級は一層沈倫せねばならぬ樣な破目に陷つて行つた。それで、ロヂャースの考へでは、十七世紀の半頃には英國に約四百萬の貧民が有り、その中の半分以上は賃銀が不足である爲めに、困窮して居たものである。

然し十七世紀後半は、内亂の結果また賃銀が五割方昇騰したが、息をついたのは束の間で有つた。勞働者の自由を縛る法律はすぐ出た。そして英國には土地の無い農奴樣なものが澤山出來た。それで十八世紀の前半はまた英國勞働者に向つては若い時代で有つた。又一七六九年頃には前時代に比例して地價は二十倍麥價は六倍半の騰貴で有つたが賃銀だけは僅か三倍半しか上ら無かなかつた。之でどうして、人間として生きて行くことが出來るであらうか?

遂に佛國革命に懼を抱いた一七九五年の英國は、賃銀を引上げる代りに、溫情主義の情けにより、收入附加法（allowance act）と稱する世界に於ける最も珍な法律が發布されて、勞働者は一週間三シリングの附加を政府より受け、勞働者の家族は一人に付一シリング半だけを受くることになつた。そしてパン一片に就て價格が一ペンス上る毎に、三ペンスの收入附加と、家族のものには一人宛一ペンス半を受けることゝなつた。そしてこの收入附加法が、英國の勞働者をどれだけ墮落させたかは、マルサスが我等によく告げて居るから玆には省く。

十九世紀の初頭に於て英國の勞働者は實にみぢめなもので有つた。アーサー・ヤングは一八一三年頃の英國の農場勞働者は全く收支相償はぬことを報告して居る。

そして一八一四年英國勞働法の汚點で有つたエリサベスの徒弟法を撤廢し、物價の昇騰に賃銀が並行して行く樣に許した。十九世紀の初頭は英國に於ける產業革命が漸く暴威を逞しくせんとした時で有つたが、物價は實に、前二百八十年間平均の賃銀の十六倍半以上の騰貴を見たのであるが、賃銀は僅かに、十六世紀に比較して六倍の騰貴で有つた。

かうして遂に一八二四年勞働組合の出現となつたが、勞働組合が出現するに及んで、勞働賃銀は漸く物價と一致する樣になつたのである。それまでは、惡貨幣や紙幣が流通して物價が奔放的に騰貴しても、勞銀だけは法律によつて全く制限されて居つて決して昇騰せしむることを許され無かつたのである。（ロヂヤース『英國勞働史』參照）

かうして英國の六世紀間の賃銀史は全く特權階級の略奪史で有つたことが明白になつたことと思ふが、もし之を否定する人があるとするならそれは、彼が賃銀法則の歴史的解釋を根本的に試み無いからで有つた、何人でも、正直に賃銀史を讀むものは必ずや、賃銀史は資本主義罪惡史で有ると云ふことを感じさされ無いでは居られないのである。

六　佛國の賃銀史

中世以後の佛國の賃銀史に就て見るも殆ど英國と同樣のとが云へる。レヴアシユル氏は十一世紀の佛國に於て約四十の勞働者のコンミユーンが有つたことを告げて居るが、之等は全く階級爭鬪の犧牲となつて無くなつたことを記載して居る。十二世紀には徒弟制度が確立したが、英國のエリサベスの徒弟法などと違つて勞働者には比較的都合の善いもので有つた。十三世紀には勞働者の日給は一日一フランで有つたが、之で麥五升と肉四磅を買ひ得た物價は今日に比較して五六倍安かつた。十四世紀になつて、百年戰爭と、黑死病と、飢饉との爲めに、巴里には二萬四千軒の空家が出來たと云はるる程の人口減少を見たので有つたが、その爲めに勞力は非常に尊重され、そこに勢力の大なる勞働組合 Compagnonage が現はれて勞働者の地位を改善するに非常に務めたものである。教會は之に反對したが無效で有つた。その必要がより大で有つた。十五世紀になつて、パンは更に安くなつた。即ちパンのヘクトリツトル（五斗五升）が一三五一―七五年には九フランクしたものが、百年後には三、七五即ち約二倍半方安くなつたのであつた。

然し十六世紀になつて、勞働者の生活不安が來た。それは一

つは穀物の不足からでも有つたが、主として悪貨幣の流通の爲めにさうなつたので有つた。ド・アヴエネルの假説によると、一四九七年一ポンドの銀は二八・二六フランクの價値の有つたものが、一六〇二年には五・四五フランク卽ち五分の一の價値に下つたので有つた。それで勞働者の購買力は著しく下降したので有つた。

一五〇一—二五年に勞働者は、飯代の外に六十センチームを賃銀と受取つたので有つたが、一五七六——一六〇〇年には十八センチームだけ賃銀が騰貴はしたが、その購買力は三分の一方減じた。

それでド・アヴエネルはこんな勘定をして居る。十五世紀の末に於て日雇人夫の二百五十日分の賃銀は、七十九エーカーの生産額と同一で有つたものだが、十六世紀の初頭には之が四十六エーカーの價値に減じ、更に之が千六百年には二十三英加の主産物と等しくなるまで價値を減少して行つた。

そして十六世紀には賃銀は殆ど昇騰すること無くして、パンの價だけはどし／＼騰つて行つた。この時代よりストライキの聲が巴里で聞こえる樣になつた。特に皮肉なのは、パン屋の勞働者がパンが食へぬからと云つてストライキしたことで有つた。

一五八一年佛王は官營の勞働組合を設けて、從來のギルド自治を壓迫した。

一四五〇年代より一六〇〇年に至るまで佛國の勞働者の賃銀はその購買力指數に於て低下するばかりで有つたが、更に一六〇一年より、一七二五年に至る間の賃銀指數なるものも矢張り低下傾向を示して居るもので有つて、この最大理由としては、貨幣の價値が半減した爲めで有つた。地價は十七世紀の中頃著しく昇騰してその後下つたが、穀物は上る一方で有つた。それでレヴアシユル氏は、佛國文化の黃金時代と云はれた十七世紀が、勞働者に向つて反つて悲慘な時代で有つた報告して居る。

そして面白いことは、賃銀のこの後段々昇騰して行つた事である。それでレヴアシユル氏はナントの敕令とこの賃銀指數に關係が有つたのではなからうかと云ふて居る。

十八世紀になつて帝王の權力が強くなると共に各種の自治組織は全く帝王の權力の中に吸收されてしまつた。そして官營勞働組合の完全なものが出來て、賃銀勞働者はまた絕望の中に坐ら無くてはならぬことになつた。それでストライキと反亂が度度報ぜられた。彼等は雇主の云ふがまゝに絕對の服從を強いられた。それで民衆は全く少數者の犧牲となつた。かうして革命の種が段々蒔かれたのである。

一七四一—一七五〇年にはヘクトリットル（五斗五升）が一・六三フランクで有つたものが、その後不作で二十フランクに昇騰したが、肉も、バタも、卵も同樣に騰貴した。それでパンの價格は巴里市の公定價格によつて決定せられて居た。即ち革命の第一年の一七八九年には一六スース四デナリで有らねばならぬものが、一七九〇年には一〇デナリの公定價格で賣られたものである。

即ち勞働者の收入は十八世紀の下半分に於て二十パアセント昇騰したが、パンの價格は三十七パアセント昇つたから、實際の購買力は遙かに減つて居たのである。それで勞働者はたゞ不足勝で有つた。それで勞働者は折々乞食に出かけたので有つた。

そして之が一七八九年の立憲議會に三ケ條の請願として現はれたので有つた。即ち

一、以後勞働者の賃銀は少數者の贅澤と貧乏を充す爲めに冷刻に計算さる可らざること。

二、過激なる勞働に從事するものと能力ある人々を保存することは富豪の富を守るに劣らざる神聖なる義務たること。

三、過激なる勞働に從事するものと、能力ある人々が帝國の領土內に於て、如何にして生活すべきかを知らざるが如き狀態に捨て置かれざる可きこと。

等の三ケ條の請願となつて現はれたが、何と悲慘なことではないか、私は之を讀んで何だか今日の日本の豫言の樣に思はされて仕方が無いが、官營勞働組合の組織と、富豪保護の物價調節策のみしか講ずることを知らざる日本の官僚政治家はルイ王朝の夢を見て居るものではないか。

何にしても、佛國は遂に革命を見ねばならぬことになつた。然しこの佛國の賃銀史は何を吾人に敎へるか、それは、矢張り掠奪史であると云ふことを敎へる外に別に何にもない。政治は惡貨幣をのみ流通させておいて、物價が騰貴しても、勞働者の賃銀は上げさゝないと云ふのは、誠に掠奪では無いか。

七　賃銀生活の從屬性

賃銀律を自然律的に解釋せんとする空想家がある。彼等は人間を一種の機械と考へ偶然律の支配する道具だと考へて居る。それで收入の法則が數學的に割出せると考へて居る。實に大膽なやり方で有つて、收入と云ひ賃銀と云ふものも、全く人間の意志を中心にして、どうなりとも延び縮みするものであることを知ら無い。で、今日迄の賃銀法則は凡て客觀性に重きを置いて主觀性（社會性及人間性の歷史的發展）に重きを置か無い爲めに飛んだ誤謬を醸して居るのである。今日の賃銀制度なるものが資本主義經濟の便宜の爲めに出來たものである以上、ウオー

カーの殘餘說が眞理で無いにしても、資本家には、便宜的に出來たものであるには違いないのである。で、財の集中も、貧困の進化も全くこの社會の歷史的組成から解釋すべきものであつて之を無視しては到底解釋すべからざるものである。

獨逸の賃銀史に就ては、シユモラーが國民經濟原論に詳しく論じて居るが、その進路は殆ど、英佛と同一で有つた。然し十九世紀後半になつてから獨逸の勞働者狀態は著しくよくなつて居るのである。アシユリーはその名著「獨逸に於ける勞働者の狀態」に於て、獨逸勞働者の賃銀の昇騰の表を曲線を以つて表示して居る。即ち千九百年を百とすれば、千八百九十五年は八十五、一八八六年は八十一で有つた。即ち獨逸勞働者の賃銀は十四年間に二割三分方騰貴した。その間に物價は一般に下落の氣味であつた。如斯して、一八五一年には千人に付き二千八人の死亡率があつた獨逸國民は一九〇二年には二〇、六人となり七人四分の死亡率減少を示したのである。

之は獨逸のことであるが、他の列國を見ても大抵獨逸と同一である。勿論獨逸の樣に甘くは行つて居らぬが、今レートン氏の『物價騰貴論』に引用されて居るジ・エッチ・ウード氏の統計を揭げるとこんなものになる。之は歐米諸國の綜合的のものである。

年次	平均通貨勞働指數	小賣物價指數	失業分率(%)	賃銀效果指數(在職者)(%)	失業者の損害を除きし賃銀效果指數(%)
一八五〇年	一〇〇	一〇〇	四、〇	一〇〇	九六
一八五五年	一一六	一二六	五、四	九五	九〇
一八六〇年	一一四	一一一	一、九	一〇三	一〇一
一八六五年	一二六	一〇七	二、一	一一七	一一五
一八七〇年	一三三	一一三	三、九	一一八	一一三
一八七五年	一五二	一一〇	三、七	一三七	一三一
一八八〇年	一四七	一〇七	五、五	一三四	一二七
一八八五年	一四九	九六	九、三	一四八	一三四
一八九〇年	一六三	九一	二、一	一六六	一六二
一八九五年	一六二	八四	五、八	一七四	一六三
一九〇〇年	一七九	八九	二、五	一八三	一七九
一九〇五年	一七六	九二	三、六	一七四	一六八
一九一〇年	一七九、五	九八	四、七	一六九	一六一

即ち小賣物價に於ては六〇年間に、〇二方の下落であるが、賃銀に於ては七九、五方の騰貴である。然し之がほんとうであらう。日本の樣なのは全く噓である。

猶歐米の勞働賃銀問題に關してばジードが『社會經濟學』に些細に論じて居るが、(文明協會譯七〇一—七〇頁)十九世紀の此方面の運動は全く樂觀すべきものであつた。勿論彼の指數はウードのそれとは多少は違ふ。然し賃銀の實際效果の指數に於ては大抵同じとなるのである。然しジードには最近一八八〇—

一九〇〇年の賃銀增加率に就て多少悲觀して居らぬでもない。彼は此時代を十九世紀の前半より增加率が遲緩だとして居る。(「社會經濟學」七三頁)然し幸にも此時代は世界が嘗て經驗した事の無い物價の下落期であつたのである(但し日本を除き)だから實際はそう悲觀しなくても善いのである、

ゾンボルトも"Sozialismus und Soziale Bewegung"の中に、獨逸や英國の勞働者の收入がマルクスの考へに反して增加して來て居ることを報告して居る。殊に獨逸に於ける勞働者の狀態を大に樂觀して居る。

然し問題は決して之れですまないのである。賃銀主義經濟が資本家に向つて第一の便宜を與へて居る以上、勞働者が生產する富と勞働者が受くる分配とは決して並行して居るものではないのである。なる程シドニー・ウエヴが云ふ通り「英國に於ては一八三七年から、一八九七年に賃銀は二倍し、物價は反つて安くなつた爲めに、生活易が加つたであらう。」と云ふて居る。然し、之を富全體の增加から云へば實に不公平なもので有つて、一八六〇年には英國民全體の總收入に對する賃銀の比例は四七%で有つたものが、一八九一年には反つて、四三・五%に減退して居るのである。

英國に就て之を見るも、富の增加率と、賃銀昇騰の比例とを比較して見るとお話にならぬ程勞働者に取つては氣の毒なものである。

ゾンボルトは『十九世紀に於ける獨逸國民經濟』に於て一八四〇―一八九五年の間に獨逸の生產力は三倍したと計算したと云ふて居るが、獨逸の勞働者の收入が三倍になつて居らぬことは事實である。

又米國大藏省の統計によれば、一八五〇―一九〇四年の間にその富は十五倍して居るのである。然し、勞働者の收入が十五倍して居らぬことは事實である。彼等は漸くその收入の實際購買力に於て二倍にもなつて居れば善いのである。たとひ二倍になつたとしても、十五倍にまでは大分距離があるのである。今日米國各會社の總資本の收入は三十八億三千二百萬弗であるが年五百弗以下の收入で滿足して送る家族は千二百萬家族も有る。この凡ての總收入は僅か六十億弗で、約三十萬の會社の收入の半分にも充たないのである。

こんな風であるから、今日勞働組合運動の盛んな歐米各國の勞働賃銀が善くなつた、と云つてもそれは絶對的のものでは無くて、全く限界的なおなさけ的のものにしか過ぎ無いのである。賃銀生活者は要するに、資本主義文化に向つては全々從屬的の地位に置かれて居るのである。

即ちラサールの賃銀鐵則は、今日の賃銀生活から云へば、食ふや食はずのおなさけ賃銀と云ふもので無くして、賃銀は資本主義に向つては全く從屬的立場に置かれたものである、之は今日の社會制度に於て動かすべからざるものであると云ふ意味に取れば善いのである。

八　生産者自主の世界へ

それで今日勞働階級に取つての第一の急務はこの社會に於ける從屬的位地より、自主的地位に移ることとである。そしてこの從屬地位を打捨てゝ、自主的世界に移るには先づ賃銀生活そのものを否定するより外に道はないのである。

今日の勞働保險制度と云ひ、賠償法制度と云ふものの全くこの不安定な賃銀制度の結果であるから、我等が今日最も必要とする所は、勞働者が先づ、産業自治、社會連帶の世界に移ることである。

それでなければ、勞働者は、どれだけまで高く賃銀を要求して善いかわからず、ストライキは永遠に行はれ、社會に不安は絕え無いのである。

ではどうすれば、この賃銀制度を廢止することが出來るか？　それには三つの提案がある。その第一は今日の資本主義の經濟制度をそのまゝにして置いて、勞働者の日給制を廢止し、賃銀を月給或は年給にし、之に利益配分を附加することである。この案は今日不の安定な勞働者生活に勝ること實に多大である。その爲めに或種の救濟制度は生活が保證される爲めに不必要となる。然し、實を云へばこの制度は勞働者と資本家との關係を封建時代の昔に返すので有つて、今日でも信州の生絲工場の職工は一年分前借で雇れて來て居る。又今日日本の農場勞働者の給料は年給である。然しその生活が從屬的であることには少しも變りは無い。それで、今日の月給制度も、年給制度も全く理想的のものではないのである。

然らば、凡ての資本を國有にした、勞働者が、政府直屬の軍隊の様なものとなればどうであらうか？　そこには勞力の浪費も無く競爭も無く、完全な機械的調和が行はれて居るのである然らばそこに賃銀制度は全く無くなるかと云へば、そうではないのである。勞働者は國家の奴隷の如くなる爲めに、一種の屯兵の如く一種の賃銀を受けるのである。そしてこの思想を以て居るのが、英國の社會主義の中堅フアビアン・ソサイエチーの人々の如きがそれである。『フアビアン・ソサイエチーに關する報告』(Report on Fabian Society 1896)に於て、同協會は次の様なことを宣言して居る。

『賃銀制度の撤廢と云ふ様なことは、反つて社會主義に對して

誤解を招かすものである。社會主義は、賃銀の廢止を意味せず、反つてその勞力に對する標準賃銀の維持と設定を要求するものである……即ちファビアン・ソサイエチーは賃銀制度を廢止する所か、反つて、凡ての人々に之を保證するものである。』

即ち之を見ても、社會主義國家は、生産者と國家との從屬的關係を賃銀制度によつて繋がんとして居ることがわかると思ふ。もし凡ての人がこの軍隊的訓練を甘受し得るならば兎も角も、自我自主の解放を遂げんとして、反つて、官僚的執政官の意に從つて凡てのことを決行せねばならぬものであれば、實に厄介なものであると云はねばならぬ。

それで最後に殘つて居る解決は、中世に歐洲で行はれた、ギルドの形式をも一度新しい形で現代に復活させ進化させて、生産者の全人、全性、全靈の享樂を生産ギルドそのものの中に發見することである。ギエルケが云ふて居る通りに、『古代ゲルマンのギルドは全人の生活を包含して居た。そして凡ての人間の欲望を滿足さゝんとしたものである。それは今日の勞働組合の樣なもので有つたが、それと同時に、宗教的、道徳的、社會的、經濟的、政治的、目的に副ふたもの』であつた。

今日の複雜な社會組織にこの種の包含的なギルドは組織し得ないにしても、國家的な産業ギルドを勞働者が自主的に支配し得る位は決して困難などではないのである。そうして、工場經營が自主的となれば損失が無いとは限ら無いが、その變り資本家に對する從屬的關係は之で無くなる。それを資本家だけが一人損すればそれで善いと云ふ樣な我儘なことを云ふなれば、勞働者も賃銀で滿足して居れ、それで勞働者が困れば仕方が無いと云はれるのである。

勞働者が、工場と産業と自主的に經營する樣になれば、その生産の分配は誰れがするかと云へば、それは、消費組合を消費者議會ですれば善いのである。生産者議會と消費組合が、生産者の生活を保證する以上、それから先の、生産そのものに對する享樂はギルドの形式の外に取る道は無いのである。

即ち、賃銀の爲めに働くのでは無くして、働くことが悅びであると云ふことを、經濟に取り入れるには、ギルドの形體を以つて、勞働者を解放するより外道は無いのである。

勞働が賃銀の爲めで無く、崇物的精神から出たのでは無く、創造そのものにあると云ふことが、生産働くことが悅びてに自覺されてくる程、社會的に悅びは無いのである。そしてこの時に勞働者の解放は完いのである。(一九一九年七月)

勞働問題の核心

杉森孝次郎

すべての問題に於てさうである通りに、勞働問題の場合に於ても、その核心は道德的である。殊に問題の二字を點標したのは、數學や自然科學の問題から區別して、廣く社會上の問題を意味したのである。日本で勞働問題が遽かに興味の中心となるに至つた理由の中には、ロシヤの革命もあらう、國際勞働法規の襲來もあらう、また歐米の先進諸國が、同盟罷工に繼ぐに同盟罷工を以てし、勞働者の要求と位置とが、その頻繁なる同盟罷工ごとに向上し、四年半の國際戰にも劣るまじき難局を、資本家と中産階級と政府との目から視て、國内に成長しつゝある情勢は、形相に於て前二者ほどに明確ではないが、雰圍氣的に氣分を刺激する效果は前二者よりも强からう。しかしながら、上記の三因を擧げて、實は緣に過ぎない。泥棒を捕へて見れば我が子なり、日本人の一部を通はして、境遇に際會して、人間の本性が當然の開眼と、自覺とに着手したのが、我が邦に於ける最近の勞働問題の起原である。

コール氏が、貧乏は徵候である。奴隷が疾病であるんだと憤慨したのは正しい。世には勞働者に對する資本家の態度、或は被雇者に對する雇主の手段として、慈惠主義を說く者がある。これは到底辯護する餘地がない。人に重んずべき唯一事があるとしたら、それは正當な意味に於ける「誇り」であらう。道德的自尊心をいふのである。生存そのものが、誇りを條件として、始めて方針も立ち、意義も生ずる。曾てナザレスの天才は、人もし自己の生を失はば、全世界を得るとも何の益するところぞ、生と交換すべき物はなしと說いたさうであるが、私に言はせるなら、生の代はりに誇りを置く。道德學說史の上に於けるカントの功績は、人格價値を、比較的に組織あり、統一ある方法によつて確認した點にある。慈惠主義を甘受する輩は、さうすることによつて、世界の道德的中心を褻瀆する者である。世界には道德的中心は多數にある。各人は自己に對して最大の責任を有する。苟くも慈惠と自稱し公稱されるやうな行爲

を隨喜して成り立たせる第一條件と、身を以てなることは、宇宙の道徳質を墮とす直接犯罪であることをお互に平素銘記しなくてはならぬと思ふ。

西洋で言ふならば、慈恵主義は中世の發達に屬する。基督教の愛の哲學が、教會の階級主義專制主義と結合したところに生育した理想であり、實行であつた。階級主義專制主義は教會からのみではなく、ローマ帝國からも流れて來た。中世に於て人が慈恵と施捨に依頼した目的物を、權利とし、正義として獲得せんとしたのは佛蘭西革命に紀元を有する近代の運動である。近代の農夫は、中世の農奴に比して、衣食住の上だけから見れば不幸な場合もあらう。しかも、近代の農夫の方が中世の農奴よりも全體の幸福に於て勝つてをるわけは、道徳的自尊心を保護する條件が後者に乏しく前者に豐かな點にある。近代の地主は、小作人の勞作をば商品扱ひにするけれども、小作人を商品扱ひにすることは、中世の農奴の場合に較べてずつと輕減してをるからである。

社會主義者が理想とするやうに、資本家といふ階級を無くするがよいか、ロシヤ以外の各國が現に實行してをるやうに、それを維持するがよいかは別問題として、何人も産業が國家社會に有用必要なものであることに異論はない。そして資本家の有用必要を信ずる人の立ち場から言つても、資本家だけでは産業（インダストリ）の別名もしくは直接目的たる生産（プロダクション）が不可能なことは明白である。勞働者は、産業といふ目的に取つて、すくなくとも資本家に劣らぬ必要條件である。隨つて資本家と勞働者とは、協力の基礎の上に立つ分業的關係を有するほかに、君臣主從といつたやうな關係を必ず有する筈はない。勞働者は、それが紡績であれ製鐵であれ、正業に從事する者である。乞食や娼婦との共通點をば、紳士淑女が有するよりも餘計に有する必然性は毫もない。されば、資本家が勞働者を卑下することも不道徳であるが、勞働者自身が資本家の卑下的待遇を、良心の苛責もなしに受けることは、一層の不道徳である。それ、人みづから卑しめて然る後に他人彼れを卑しむ。産業には組織的行動が必要である。善い意味に於ける軍隊的方法が無しでは濟まぬ。統導する者と、從働する者とが缺くべからざる要素となる。ただその統導者が、カイゼルではなく、ワシントンであることを望ましい條件とするだけである。またその從働者が、自治と責任の主體であることを要するのである。

一國の産業がまだ幼稚であつて、概ね家族的基礎の上に營まれてゐる間は、雇者と被雇者との關係は、無理なしに人格的であり得る。人格的と言つては、意味が判明しないが、英語の謂は

ゆるパーソナルである。義理人情が、兩者を、わるくも縛り得るが、よくも縛り得る。産業は、家族の從位に立ち、部分を占むるに過ぎないからである。けれども、丁度十九世紀初頭の英國に於ける産業革命の歴史が示した通りに、産業の中心が家庭でなく工場となり、産業の方法が手でなく機械となるに從つて、雇者と被雇者との關係が、ます／＼非人格的（インパーソナル）になる。工場が家庭よりも、また機械が手よりも唯物的であるが如くに雇者と被雇者との間の關係が唯物的になる。地獄の沙汰も金次第の人の世である。人情關係が縮小して、物欲關係が増大した場合に、自然の進行に打ち委かせて置けば、資本家が、その金力に伴ふ種々の機會を利用して、勞働者をコケにするに不思議はない。プレトーでさへも、アリストートルでさへも、また早い頃の基督教者でさへも、奴隷制度を是認したり、默過したりしたでないか。聖賢でさへもあてにはならない。しかも聖賢といふほどに理性と情愛とが發達した人は、いづれの代にも甚だすくない。おまけに、資本家といふやうな人達は、小人にあらざれば英雄であるを通例とする。道の信者であるよりは力の信者である。欲望に驅られて前進し、恐怖に脅かされて退却する輩である。代議政體などゝ言つても油斷も隙もある。制度は畢竟するに死物である。活物は人である。政黨政治などと言ふけれども、その首領にしても、陣笠にしても、金には買はれる弱味あり。資本家が政黨の基金を供給し、大小政治家の金主となることは、政策が資本家を擁護するやうに立てられることを意味する。資本家は、例へば倫敦タイムスのやうな大新聞を所有することもできる。そして輿論を或程度まで資本家の勝手に左右する途が開けてゐる。去年の冬に、ロイド・ジョージ氏が、總選擧の間際になつて、從來獨立不羈であつた日刊クロニクルを、政府黨の夕刊ペル・メルの持ち主たるダルジール氏を介して、巨額の代價を拂つて買ひ取つたことは、資本黨の隨一の日刊の一たるメイルが嫉妬心を燃やして素破抜いた通りである。內閣組織後のロイド・ジョージ氏が、資本家の脚の上に立ちも動きもしてをることは言ふまでもない。そのメイルが、勞働黨には、機關としての日刊がない。親の讐よりも憎い勞働黨ではあるけれども、機會は均等でなくては、競爭が不公平になる。武士の勝負にならない。だから敢て一欄を純粹に勞働黨の選擧運動の舞臺とするために割愛するといふ名義で、半分はクロニクルといふ新情婦に、宰相によつて乘り變へられた悔やし紛れもまじつての、世を驚かした公平心を、ノースクリッフ卿が示したのも、何の彼のと、遠ほ目には隆運に見える最近時の英國の勞働黨も、言ふに足るほどの日刊一とつ持つてゐないといふ悲劇を談

る偶然の事件であつた。政黨も、政府も、議會も、新聞も、それから學者も、坊主も、先づ以て金力が誘ふ方へは、磁石が北を指したがるやうに向きたがる。金力が引力の府となる。今から三百年前に、英國の哲學者ベーコンは、知識は力であると豫言したが、その知識も、資本家の身邊には蝟集する。

顧つて勞働者の方を觀察すると、事情は正反對である。由來彼等には貯蓄するほどの收入がない。恐らくはまた貯蓄するほどに遠慮ある品性もない。その日暮らしである。雇主が無理非道であると知つてをる際にも、解雇を賭して爭ふわけに行かない。敢てそれを試みても、持久せずして再び資本家の軍門に哀を乞はねば身も家族も生存することができない。知識には無論缺けてゐる。必ずしも一騎打ちの、裸の知識比べに於て、當代の勞働者が、當代の資本家に、負けるとは限らない。英國などに於ては、これは屢々見る事實である。平家の公達が油斷してをる間に、關東の野武士が實力を鍛へつつあるのである。けれども、資本家の方には、知識の加勢者が幾らでもあるに反して、勞働者の方には、それが幾らもない。また大多數の勞働者は、大多數の國に於て、大多數の資本家よりも無智無策であらう。文化的知識は別として、産業市場の活勢、勞働の需要供給の實情、殊に實利主義の掛け引きに關する知識に於ては勞働者は甚だ屢々世間知らずの坊ちやんの如く、資本家は常に法網をくぐる詐僞師の如し。勞働者はその勞働を賣るに於て小賣商人式である。資本家は勞働を買ふに於て卸し商人式である。勞働者に取つては、是非とも自己の勞働を賣る必要がある。資本家に取つては、是非とも或一人の勞働を買ふ必要などはない。勞働者に取つて運命的一途に限られた活路が、資本家に取つては取捨選擇の自由を有する一部的問題である。勞働者の十分の十が資本家の千分の一であつたり、萬分の一であつたりする。單位が異なるのである。桁ちがひの競爭で、本當の競爭とはならない。また勞働者は、學者肌、藝術家肌の人々と似て、財産欲が薄い。宵越しの錢は腰にしない氣象である。世間なみの、そして貰ひ慣れた程度の賃銀が、滯りなく拂はれさへすれば、結構滿足してゐるのが通例である。資本家がこの處にも乘じて、不當に利益を獨占する傾向もある。英國で一九一〇年から一九一二年へかけて、トム・マン氏及びベン・テイレツト氏が統導者となつて、未曾有の程度方式に於ける同盟罷工が爆發した話は、吾人の耳に新鮮である。勞働者の不安が熟して行爲となつたのである。あの場合に於ても、原因の主もなのは、一九〇一年から一九一〇年へかけて、物價が非常に昂騰したに拘らず、勞銀がその割合に上ぼらなかつたことにあるといふ。物價が倍にな

り、三倍になつて、勞銀が元のまゝならば、それは意味に於ては勞銀が半減され、三分の一に引き下げられたことになる。購買力の制限が覿面に感ぜられる。生活が樂でなくなる。何とはなしに、壓迫に遇うて抵抗を思ふ、落ち着かない氣分になる。そこへ學者先生の中の、割合に世間のわかつた、頭の熱い連中が飛び込んで來て、漠然たる不安不滿の燃料に、ルーソー式の智的點火に及ぶ。衝動に目があいて、手が動く順序となる。

勞働者が、その品性に於て、能力に於て、及びその品性能力を活用したる結果としての作業に於て、資本家のそれらと比して遙かに低劣であるから、それに相當した待遇をするのであるといふならば、一應聽えた話であるが、事實はさう單純ではない。恰かも政治的に、西洋諸國に於て、封建時代の制度慣習及びそれの精神が生き殘つて、その整頓のために、佛蘭西革命を要したるが如く、或は今尚ほ改正の餘地を貴族院に於て特に存するが如く、ナポレオン戰爭の當時に、水蒸汽の力を工藝上に利用する途が開かれ、機械の發明が踵を接いで到り、大工場の建設となり、人口の都市集中となり、產業の勃興する勢ひ、雨後の筍の如し。資本家と勞働者といふ、從來にない現象が發達した徑路は、倫理的反省をする遑もなしに、騎虎の勢ひ一徹に驀進し來たれる自然主義的なものであつた。人間のやつた事ではあるが、第一、二世紀の基督教者の場合にも似て、ただ彼れが内にむかひ、未來にむかつた代はりに、此れは外にむかひ、現實にむかつて、自然的不可抗力を以て狂熱的に、天才的に、英雄的に、疾風枯野を燒き來たつた運動であつた。雜草と善草とを區別して取り扱ふといふやうな省察的餘裕などはなかつた。產業の確設、外界の改造といふ大標的を狙つて一氣に猛襲したのである。そしてそれは正しいことであつた。產業文明の創造、外界改造の着手、この二事は、多少の罪過を償つて餘りある人間發展史上の大功績である。けれども、熱情は、その原始的形式に於て永續することはできない。理性の批判が當然に頭を擡げて來る。產業運動の內部から自己批評の聲を放つたものが社會主義である。政治上に破壞された階級主義、死んだ封建制度の遺服が、經濟組織の上に於ては、沒批判的に濫用されたことに先づ氣付いた者が社會主義の先覺者である。或は國家社會主義（コレクティヴィズム）の方途に猪突して官僚主義の變形を現じ、或はサンディカリズムを追うて無政府主義に近づき、或は國民的ギルドを新唱して頭で捏ね上げた、しかも不徹底な折衷策を講ずるやうな幾多の悲喜劇は演じても、勞働問題或は勞働運動といふ系的現象が、混沌式に單純であつた產業運動そのものから剖判して來たことは進化である。資本家が、勞働者の無智と[illegible]

と貧窮とを利用して、產業といふ公器を私有してゐる。勞働者が生產能力のすべてである。勞働者が產業の全權を握らざるべからずと息卷き、(サンデイカリズム)或は、勞働者が生產の主體であるが如くに、國家は消費働を代表する。產業問題は、悉くこれを勞働者と國家との分擔解決に委すべしと論じ(ギルド)、或はまた、產業は、土地も資本も、經營も、分配も、すべてを一束して國家社會の直接責務となすを要すと說く(コレクテイヴィズム)。凡そ勞働自の位置を辯護する學說的主張を見渡して、資本家の存在理由を肯定するものは無い形勢である。けれども、變態の、或は一層適當には新實驗の犧牲者としてのロシアを除けば、列國の產業は、依然として資本家を中心として運轉しつゝある。ただ、勞働者の權利が、從來よりは次第に多く增大しつゝあるだけである。最小限を得るためにも、最高限を志す必要があるといふ說を信ずる人もあるやうだが、世の社會主義者が、そんな輕躁者でないことは明らかである。ただ、現實の資本主義の全盛と、理想の社會主義の確信との間に、聯絡が、普通の常識から判斷していかにも不完全であるところに、政治家と、經世家と、眞の思想家との潜思すべき大問題がすでに微表されてゐると思ふ。

資本家といふ階級を、勞働者以外、或は勞働者及び國家以外に、保存すべきか、掃蕩すべきかといふ問題は姑らくこれを措いて、もつと直接に實際的急務たる意義を有する解決問題がある。それは、勞働組合を許すことの可否である。

勞働組合は、一國の產業が或程度まで發達した以上には、外國の例の有無に拘らず、これを許すべき內的至當性をもつてゐると思ふ。勞働が、すくなくとも資本と等しく、產業の必要條件である限り、そして勞働者は、資本家と同樣に人である限り、相當の自衞策を講ずる自由が、勞働者に與へられてゐない制度は、到底永續する力がない。勞働者の組合を禁ずる理由は、同盟罷工を虞れるからである。すくなくとも、それの濫用を虞れるからである。及び同盟罷工以外の、破壞的團結行動を懼れるからである。これは決して杞憂ではない。資本家から言へば、論ずるまでもなく自然當然の疑惧であるが、國家から言つてもさうである。國家からといふのは、今日世界は、貿易の量が示す通り、經濟的に國際的になつて來た程度は著しいが、尙ほ且つ、產業運動の單位は、國際的ではなくして、各國內であることは、活きた歷史が證明してゐる。コール氏が、佛米の勞働運動を觀察評論した結末に、外國の勞働運働を聰明に研究することによつて吾人が利する最大點は、すくなくとも世界主義者(コスモポリタンス)とならぬ事にあると言つてゐるのは、勞動運動に忠實な人の言

であらう。現に今度の戰爭に於て、英獨その他の勞働黨が、平素の主張にそむかないためには、軍器彈藥製作に從事することを相呼應したるが如くに國際的に拒絶し、隨つて戰爭を不可能にする、單純にして確實なる非戰論を實行すべき筈であつたのだが、事實は到底その近處へも達しなかつたところに、比較的に國際的であることを以て誇つてをる勞働運動が、實はまだ各國的になつて居ることを炳證する。曾て白耳義の勞働者が普通選擧運動のために、總同盟罷工を企て、英國の勞動者にむかつて、白耳義へ輸送される筈の石炭を扱ふことを拒否することによつて、應援せんことを乞うた。英炭坑夫はその旨を輸送勞働者に通じた。けれども結局物にならなかつたといふ話がある。この種の例は有り餘る。國家解放の順序には、世界を通じて、生活の内容がなつてゐない。現存の諸國家が、當然の發達を全うすることによつて、次第に國際的組織としての大國家が、成長するか吾人が理想とすべき運命であらう。產業上に破壞的行動が續出することは、それだけの事情を加算するならば、國としてはその存在と發展とを妨げられることになる。現存の國家は、產業的には封建制そのまゝであつて、資本家がその原因であり、またその目的でもあるといふ社會主義者の批評に傾聽すべき要素は勿論ある。しかしながら、勞働組合を許すべきか、許すべからざるかといふ問題は、そんな根本假定の吟味を待つて後に解決せらるべき問題ではない。勞働者を目するに勞働の賣り手を以てし、資本家を目するに勞働の買ひ手を以てする現在の制度から言つて、兩者の自衞的機會を均等にすることは、差しあたつての倫理的必要であらう。同業相組み、平常に於て醵金して基本財產を準備し、標準以下の賃銀を受けるでなければ、失業しなくてはならない場合に、安んじて失業を選擇する保險を有すること、第一に勞働者の道德的自尊心を教育する境遇となる。組合を組織すれば、卸し買ひに對する卸し賣りを以てする機會均等も實現される。資本家が、個々の勞働者と取引せずに、組合と取引することになる。組合の役人との直接取引になる。孤立せる勞働者の窮乏に付け込んで安買ひすることは出來なくなる。標準價を守らされる。無理を言へば、一人の勞働者を失ふ代はりに、全體の勞働者を失ふ危險がある。組合には、專門家が役人として備へてある。これによつて勞働者の無智が救はれる。資本家は、產業界の事理と實情とに通曉した組合の役人と交渉することによつて、勞働者の無智に乘ずる機會を失ひ、また勞働者は、無けなしの頭と懷で、不安の念に驅られながら無智を自濟しなくとも、丁度仲買人が株の賣買者の間に立ち、財產を賣る人か法律家の助力を借りると同樣の效果

を役人から得る。要するに、賃銀、時間、衛生等に關して正當な標準率、標準條件を主張し得る便宜、團結力を以てする取引、專門的役人の利用といふが如き自衛策が、組合を組織することによつて可能にされる。

專制君主的傾向は、人間の通有性である。愛の教への創立者が、他を愛することによつてよりも、他に愛せられることによつて、餘計の滿足を感じたらしいといふ佛蘭西の有名なる歴史的思想家の判斷に、私は卽座に共鳴した一人である。無抵抗主義を唱ふるトルストイが、覇氣に缺乏した人であつたとは誰も主張すまい。ニーチエの貴族主義英雄主義的道德見には、深く人間の本性に根柢した永久的眞理が若干あることを否みがたい。産業が家族的基礎を離れて、或はそれを超越して、直ちに國家社會の一大機能としての面目を發揮し、資本家と勞働者とは、共にその隷屬的位置に下がつた時に、産業の內的關係と、外的關係とを、自然の、散漫無統一の狀態に放置することは、どの點から見ても損失である。産業の內的關係の統一は、勞働と資本との分類に始まる。勞働を組織すべし、同時にまた資本を組織すべし。そしてその組織せられたる兩者の上に立つて、兩者の協力を助成し、競爭を制御する役目を務むる組織あるべし。政府に産業省または勞働省を設くべきや否やは別問題として、兎に角、國家はた合法上の發言權を産業組織の上に有すべし。斯くして産業議會を組織すること、當面の要務であらう。

勞働者を組織することは、勞働者間の協力を助成し、競爭を制御する所以である。北米合衆國のやうに、移民勞働者が間斷なく去來する事情の下には、組織が容易でない。それでさへ「世界の産業的職人」組合（I.W.W）は、一九一二年に、ロウレンスの同盟罷工に於て、世界を驚かしたる組織力を示したではないか。勞働者間の競爭を制御することは、相競つて勞働の安賣りをし、標準價を不可能にするとを拘束することをいふのである。資本家を組織することは、よつて以て廣告費を省き、商業的旅行者が重複することを防ぎ、また、向ふ三軒兩隣り、我が家を併せて六戸の家庭へ、六人の牛乳配達夫が、おの／＼一輛の腕車を六個所から運んで來る代はりに、一區域は一人で濟ます經濟方を採用することを意味するのみではない。更にまた、粗製濫造を停止する手段として、店の看板を國際的に重んずる程度の會社、商店、工場を、成るべく増設して、家庭工業的の日傭仕事を、成るべく掃滅する運動を意味するのみでもない。一九〇九年の瑞典總同盟罷工に大敗北を與へたる主動力を、資本家としては善用することが自然當然だからである。

瑞典は四十萬の勞働者を有するに過ぎない。その組合はおよ

そ一八八〇年に始まる。最初の組合は、資本家の一時的團結によりて苦もなく倒潰された。一八八六年以來、徐々に成長の機運には向いたけれども、やゝもすれば雇主同盟の壓迫を蒙つた。組合が餘りに細かく專門別に從つて組織されてゐたために、同一雇主の下に異なる組合に屬する職人があることになつた。雇主と一組合との間に問題が興つても、他の組合はどうすることもできない。そこで組合總同盟を組織する必要を認め、一八九九年にそれが出來た。二萬七千の組合員を算した。一九〇〇年の末には四萬四千に達し、一九〇九年には、二十七の組合を包含して、十六萬二千人を算した。主としては工業及び陸上運搬に從事する者であつた。農業組合は七千人だけで、その大部分は林業であつた。この總同盟の外に、二萬五千の鐵道勞作者と六千の印刷職工とがあつたけれども、總同盟と步調を合せた。これらの組合は、皆政治的色彩を帶びてゐて、社會主義者黨に關屬してゐた。一八九八年に總同盟が出來た時には、雇主等は殆ど無組織であつた。その結果、一八九五年から一九〇二年の內に四九〇回の同盟罷工があつたけれども、二四〇回は勞働者の勝利に歸し雇者は六三回だけ勝つた。一八四回の妥協があつたが、勞働者の方に有利であつた。賃銀は騰り、時間は減じ、契約は雇主によつて固く守られるやうになり、組合員が非組合員に對する優先權が頻々として獲得された。一九〇二年に及んでは、社會主義者黨は、普通選擧運動のために總同盟罷工を企てた。

これが遂に雇主等をして、起つて自家同盟を組織せしめる機會となつた。先づ雇主等の專門別同盟が多數に形成され、然る後にそれらが聯結されて國民的組織が形成された。「瑞典雇主同盟」が出來て、大產業に屬する雇主等は殆ど例外なしに加名した。一九〇三年には二萬九千人を使用する百一の雇主が總算され、一九〇九年には十六萬人を使用する一四二三の雇主が總算された。その公表せる趣意に曰はく、雇主同志間の相互了解の途を開き、その專門的及び地方的同盟の基礎を奬勵し、同盟の內外の雇主等に、勞働問題の解決のための助力を與へ、同盟罷工及びロックアウトが招賚する損失にむかつて雇主等を賠償するにあると。この目的を持して、同盟は莫大の基金を積み立て、損害賠償を實行し、隆々として發達した。被雇者總同盟と相對峙して、それが被雇者保險會社の大成したものである如く、これは雇者保險會社の大成したやうなものとなつた。この他にも二つほど雇者同盟が出來たけれども、これが中心主要なものであつた。勞働組合の方は實質に於て地方的組織であるに反して、資本同盟の方は完全に國民的組織であつたために、部分的

同盟罷工に報ゆるに必ず總體的ロックアウトを以てし、最後に一九〇九年の薄弱なる總同盟罷工に對して、資本家同盟は全勝を博することになつた。勞働組合の方には、法規上の缺陷もあつたけれども、要するに、資本家が眞に相組めば、すくなくとも自衞が可能であることは瑞典の一例がすでに多少の光明をそれにむかつて投じてゐる。

しかしながら、資本を組織する目的は、勞働と對戰するためではない。それと協力するためである。組織せられたる勞働と、組織せられたる資本とが、始めて國家社會の土俵に立ちて、全能を發揮する角力を取ることもできるが、産業といふ綜合目的にむかつて、兩者の最善を盡すことができる。先づ國内に産業議會がなくてはならぬ。例へば一國の總勞働組合を代表して何名の委員、またその總資本組合を代表して何名の委員を選出し、常設會議を形成するといふ案である。産業の自治と責任とを尊敬しつつ、國家また若干の委員をその會議に選出するの特權を與へられてよからう。仲裁役を演ずることもできやう。機密を洩らすではないが、國家の立ち場から産業に關する要求、意見、報告等を表白する途も公開されやう。勞働と資本との協調によつて、産業の内的組織が全うされ、國家と産業との協調によつて産業の外的關係が組織される。然る後に談は産業の國際的組織、もしくは國際的産業議會に進む。國際勞働法規がその一徴候を呈してをるが如き傾向の研究となるのである。

けれども、先づ確保しなくてはならぬ最主要事は、自治と責任との精神を産業制度の上に徹底的に實現することである。勞働者は、高銀と少時とのみを欲するわけでは決してない。またそうであつてはならぬ。勞働者が最も欲するところのものは當然自治と責任とでなくてはならぬ。現在よりも餘計にそれの主體となることでなくてはならぬ。資本家によつて、單なる商品として扱はれることに當然不滿足である。勞働者は勞働を賣る。けれども奴隷でないから彼れ自身をば賣らない。嚴然として一個の人格たる條件を本具すること、資本家に劣らない。嚴密に言へば勞働は創作である。商品ではない。マーシャル氏が言つた通り、煉瓦を賣る人に取つては、その煉瓦が、宮殿の建築に使はれやうが、糞便流しの溝渠の建築に使はれやうが一向に問題にはならない。けれども勞働を賣る人に取つては大いに問題となるのである。國際勞働法規の第一條が勞働を單なる商品または貨物視することに反抗してをるのは正しい。

勞働者が資本家の機械となることに不平不滿を感ずるが如くに、資本家は國家の機械となることには當然傾かない。資本家も人だからである。自治と責任と創造とを生命としなくてはな

らぬからである。組織は特殊化を條件とする。個性の保護及び發展を完全にするための組織である。されば、産業の組織も、先づ各種産業の工場から着手せねばならぬ。然る後地方的組織、更に然る後國民的組織といふ段取りになる。英國のフイツトリ報告が指示する方針は正しい。工場が産業會議或は議場の出發點である。産業會議は、その國民的、地方的、及び工場的の各階級に於て、先づ次ぎの如き任務を有する。第一に、職工の實際的智識及び經驗を現在よりも利用する途を講ずべし。第二に、職工をして、作業の條件の決定と遵守とに對して、現在よりも大なる自動と責任とを得しむべし。第三に、雇用の條件を支配する一般的原則を確立すべし、賃銀に關する制定の如きはこの中に含まる。また産業の繁昌に應ずる利益分配を職工をして確實公平に得しめる途を講ずる如きもこれに屬する。第四に、雇主と職工との間に起る問題を平和的に解決する方法を常備すべし。爭ひを未發に防ぎ、及び既發の爭ひをば圓滿に處理することを目的としてである。第五に職工の所得と雇用とに最大限の確保を與ふる途を講ずべし。第六に、標準率に從ふ賃銀以外の支拂に關する制度を完全にすべし。第七に、專門の工藝技術上の教育と訓練とを完備すべし。第八に、産業上の研究調査を奬勵し、その結果を十分に利用すべし。第九に、職工の發明及び改良案を十分に認識し、評價し、利用する途を講ずべし。そして斯かる新案意匠者の權利を保護するの制を定むべし。第十に、職工の意見を十分に認識評價し、協力して産業の組織、經營上の改良を圖るべし。第十一に、産業に關する法規を研究し提案する設備あるべし。これを要するに勞働者を人として、品性能力として、自治、責任、及び創造の主體として待遇するのである。その品性に敬意を表し、その能力に伸暢の機會を供給するのである。職工をして、自治、責任及び創造の悦びに開眼して、工場生活の中に、機械的ならぬ道徳的及び藝術的價値を享樂せしめるのである。經營上には意見を徴し、技術上には創案を奬勵する。能力總動員の趣意にもかなふ。進歩主義を追求することによつて、保守主義が目的とする安定を最も有効に獲得する。發明と改良とに、その衝動に、自由飛躍の便宜を與ふることは、工場以外産業以外の生活に對する好刺激ともなる。デモクラシイの眞義は、一切の外的權威に代ふるに、聰明なる意思を以てするにある。職人を解放するためには、職人を教育することが必要條件であるが、自治と責任の境遇を準備することは、その事みづからが教育の効果を直接刺戟する方法である。教育そのものである。

勞働問題の核心は人である。人を制度の中に發見するにある

ある。人を制度慣習の灰の下から掻き起こすことにある。資本と勞働とに附帶してをる封建的階級主義の奥に、品性能力本位の人を探求する努力が勞働運動である。勞働者が機械に壓殺される數は小さくない。精神的に窒息する者に至つては、現在の制度が普及してをる範圍に擴充してゐる。資本家を全滅すべきや否やをば、その問題に興味を有するの徒をして徹底的に講究せしめよ。米がよいか、パンがよいかは、常食の問題としては、時あつてかこれを考慮せんかな。お釜の蓋が持ち上がつて、怪響を吹き鳴らしてをる瞬間である。駈け付けて、先づ息拔きをせねばならぬ。

　ロシヤは國民戰に敗れて階級戰の勝利となつた。ドイツもオストリヤも五十歩百歩の差はあるけれども同樣の運命になつた。翻つて戰勝國を點檢すれば、イギリスは、コレクテイヴイズムの信者と言はれるヴェブ氏と、國民的ギルド主義の飛車か王かを以て任じてをるコール氏とを圍繞して、幾多の理論家あるに拘らず、ポート、サンライトの石鹼王、チヨコレートのカツドベリ翁位の氣前を示せば、線光花火の爆發もなしで濟む實情也。フランスのサンデイカリズムも、クレマンソー氏の國防的決意の邪魔とはならず。アメリカでは、依然としてゴムパース黨の地盤は傾かず。現代の多數者は、その子孫の代となつて、現代の少數者を盲信せんがために、現代に於ては盲信するのであらうか。ラッセル氏とロイドジョージ氏との差は、偏へに聰明と良心の上に於ける優劣の差であらうか。理想を文字通りに實現したのは、古往今來レーニン氏だけであらうか。産業が生活に必要な一事である以上、そして勞働が産業に必要な、或人々の理想に從へば全事、現在の大勢に於ては一事である以上、そして勞働者は人である以上、勞働者でない人々が、勞働者の身になつて物を考へて見ることは、勞働問題を取扱ふ場合の基礎條件でなくてはならぬ。

勞働運動の人道主義的指導

法學博士　吉野作造

本誌前號に出た久米正雄君の「ある醫師の良心」は特別の意味で著しく僕の感興を唆つた。ふとした間違から叔父さんの大事な娘を妊娠せしめた一人の青年が、對手の少女を連れて來て、いろ〱譯を話して秘密に墮胎して與れとの切なる賴みを聽き、主人公の醫師は腹の中で二人を夫婦にしてやるのが正當だと決め、表向き願を聽き届けた事にして兩人を歸し、後から密かに娘の親を招んで事を別けて自分の意見を述べたのが悲劇の始まり、とう〱娘は身を投げて死んで了つた。「かう云ふ悲劇になるのだつたら、あの時彼等の願ひ通りに、所置してやるのが本當ではなかつたか。自分のやくざな常習的な良心が却つてより多くの人々に不幸を與へる原因となりはしなかつたか」と醫師の考はそろ〱動揺を始めて來る。それから約半年も經つた頃、貧乏な年寄夫婦の一人息子が不治の病に罹つて命旦夕に迫つて居るのに出會はした。老父は何うせ死ぬと決つて居るものなら早く樂に死なして與れ、當人が之を望み、親達も亦之を望んで、而かもそれが何方にも幸福であつたら惡い事ではあるまいと云つて、頻りに特別の投藥を迫つて止まない。而して初の事件で考の動揺して居つた醫師は遂に此願を聽いて、所謂樂に病人の往生を早めてやつた。そして其後時折り之を思ひ出すが「少しも醫師としての良心に疚しい所なく」死者の靈に對することが出來ると云つて居る。

主人公の醫師の良心が所謂常習的良心から段々功利的道德觀に覺醒して行く所に作者の同情があつたのであらうと思ふが、然し之が人間の良心の本當の覺醒であるか否かは問題である。流石に此醫師でも病人に最後の投藥をした五六分の間「何となく見て居るに堪えぬやうな氣が」したとある。それでも彼が患者の家を辭して「靜かな滿ち足りた思ひで歩みを移した」とあるから、餘程意思の強い性質の人と思はるゝが、併し「治癒の見込はないと知りつゝ、それ以來手を盡して熱心に其療養にかかつた」といふのが、啻に親子の情愛に根差す本能である許りで

なく、人命其物に對する人類の本能的執着の流露であるから、假令理屈ではどう云ふ結論に達しても、最後の投藥と共に永久に無限の煩悶を感ずるといふのが普通の人情でなければならない。僕は最初青年少女の賴みを聽かなかつた醫師に同情があつて、瀕死の患者に投藥した彼を怖ろしく思ふ。

僕は所謂常習的良心に拘泥するのを好いとは思はない。けれども淺薄なる功利的道德觀に動かされて人性の自然に根柢する美はし情味が段々荒んで行くのを限り無く殘念に思ふ。近代の教育が此方面の本能的情味を純化するに努めずして、寧ろ之に反感を持たしむるやうにしたと云ふ事は、之れ亦我々の甚だ殘念とする所である。

先達、或人の依賴でリデル孃の癩病療養院の寄附を貰ひに某富豪を訪ねた。何うせ助けた所で社會に何の役にも立たない癩病患者の爲に金を投ずるよりも、もつと〳〵力を入るべき仕事は幾許もある。唯外に傳染しては困るから、消極的に社會の迷惑を防禦すると云ふ意味で少し計り寄附しやうと云ふ事であつた。理屈としても爭つて爭へぬ事が無いが、人命に對する本能的溫情が今日の識者の間に斯うも荒んで居るかと云ふ事を考へて、僕は云ひ難き淋しさを感じたのであつた。

僕は斯う人生の段々荒んで行く傾向に反抗して、何處までも自分自ら人性の自然に根柢する本能的溫情を楯にとつて行きたいと思ふ。之にいろ〳〵理屈の說明を附て僕は人道主義と云つて見たこともある。併し僕に取つて之は推理的結論ではなくして、謂はば殆んど自分の性格である。今までども僕は此立場から凡ての問題を觀て來たと思ふのであるが、昨今勞働問題が段々矢釜しくなるに連れて、更に一層此同じ立場を堅く守つて、自分の態度を明白にする必要を感じつゝある。

自分の立場を便宜上暫く人道主義と云つて置く。そこで僕は勞働問題は其總ての點に於て人道主義に立脚して居なければならないと主張する。從來斯う云ふ事を言ふと世人は直ぐに、「勞働者の境遇は實に悲慘ではないか。之に無限の同情を寄せるのは當然ではないか。」と云ふ立場から勞働運動を持ち廻るもの、即ち斯くして勞働問題に對する理解と同情とを資本家に求めんとするものと解して來た。成程勞働問題に對する一つの使命は資本家の覺醒を促すにあることは言ふを俟たない。所謂人道主義の勞働問題に對する從來の貢獻が主として此方面に限られて居つたことも事實である。けれども熟く考へて見れば、何も之は資本家に哀れを乞ふと云つた方面にのみ活動を制限さるべき筈のものではない。勞働者階級に對しても人道主義は亦大いに活

勤すべき餘地はある。何となれば今日の勞働運動に於て、勞働者階級の言動には僕の觀る所に據ると人道主義的の分子が頗る缺如して居るを見るからである。早い話が、近き將來に於て資本家階級が一朝地を代へて勞働階級の壓迫を蒙る弱者の境遇に陷つたと假定せんに、今現に勞働者が資本家に對して有つて居るやうな態度其儘を資本家に對して繼續しても、我々は安んじで之を傍觀することが出事るだらうか。今は資本家が强者だから其强を挫く爲めに勞動者はいろ〳〵の武器を執る。其同じ武器を勞働者が强者になつた時にも振り廻はすと云ふ事では、第三者の眼から見れば一方の横暴に代ふるに他方の横暴を以てするに過ぎない。玆に僕は今日の勞働問題に對して人道主義の入つて行くべき餘地があることを思ふ。强弱其地位を換へたからとて俄かに又態度を改むるの必要の無いやうな、其同じ氣持ちを我々は常に持つてゐたい。

僕は所謂勞働者では無い。又勞働問題に直接關係して居るものでもない。實際問題としての勞働問題に就いては謂はゞ全く門外漢であるが、併し國民の一人としては常に之を念頭に置いて居る。而して之が根本的解決の歸着點として所謂社會主義の說に多大の共鳴を感ずるものであるが、唯實際界に於て此問題の適當なる解決を得しむる爲めには、兎も角も先づ勞働者階級をして凡ゆる意味に於て、資本家と對等獨立の地位に居らしむることが必要だと考へて居る。勞働問題解決の案として僕は必ずしも溫情主義や勞資協調主義を排斥するものではない。資本家の態度としては溫情主義頗る可なりで、資本勞働の衝突が双方の協調によつて圓滿なる解決を見んことは、如何なる場合に於ても好ましい事である。併しながら此等の事が本當に理想的に行はるゝが爲めには、先決問題として凡ゆる意味に於ける奴隷的境遇から勞働者を解放して置かなければならない。結局に於て法廷で黑白を爭ふと云ふ權利を國家の制度が認めて居ればこそ、双方共に滿足な示談和解と云ふ事も出來る。昔の武士と町人との間のやうでは所謂示談は常に屈從に了り、所謂和解は其實壓迫に畢らざるを得ない。今日の法律は親子の間でも權利の問題に就いては裁判所に訴へ出づることを認めて居るではないか。法律の前に平等なりとする制度上の原則は、必ずしも常に爭は法律を以て決せよと云ふ事でなく、從つて亦決して親子の間の圓滿なる關係を阻礙するものではない。否、却つて斯う迄强く權利義務の關係を立てゝ居ればこそ時に橫暴頑迷な親爺があつても話は圓滿に定まるのである。勞働者に完全なる團結權を認め又同盟罷業權を認むると云ふ事は、必ずしも勞働問題の解

決に當り、勞働者をして常に喧嘩腰の態度に出でしむると云ふ趣意のものではない。兎に角先決問題として勞働者に自由對等の地位を明白に保障しなければ、溫情主義も協調主義も活動する餘地が無いのである。此點に於て我々は今日勞働運動に熱中して居る人々と全然其觀る所を同じうするものである。

　更に進んで僕は勞働運動に關係する人々と共に、今日の資本家階級が案外に頑迷橫暴にして勞働者の言ひ分に理解無きは勿論、斯くして來るべき社會の悲むべき影響に對して亦著しく不關心無責任であることに驚かざるを得ない。一々勞働者の言ふ事を聞いて居つては、自分としても又國家としても之れ〳〵の不利益があると云ふ說明には、多少の理由あるを認めないではない。而して社會國家の大局より觀て又國民の永久なる生命より觀て、彼等の泣言の殆んど取るに足らざるは今日まで已に十分說き盡された點である。それにも拘らず同じ事を繰り返して依然として其橫暴を改めざる以上は、遂に玆に階級鬪爭と云ふ現象を喚び來る事になるのも已むを得ないと思ふ。之は資本家の態度如何に依つて免れ得ることゝは思ふけれども、資本家階級の態度今日の如くなる以上、社會の幸福と其健全なる進步との爲めには已むなく其必要を認めざるを得ない。我々は門外漢であるとは云へ、此鬪爭に於て勞働者側に味方するものであることは言ふを俟たない。

　只玆に我々の特に一言したいのは階級鬪爭其物に對する我々獨特の立場である。我々は資本家の橫暴を憎む。併しながら絕對に度すべからざるものとして、彼等を永久和すべからざる敵と見る氣にはなれない。玆にも我々の人道主義の立場は、如何なる場合に於ても不倶戴天の敵なるものの絕對に存在せざることを忘れざらしむる。從つて階級鬪爭は大いに遣るが、然し之は對手方の反省を求むる爲めの手段であつて、決して鬪爭其事が目的ではない。鬪爭其事を目的として對手方を撲滅するにあらずんば、自分の爲めに途が開かれないとする考は、人道主義と兩立し得ない。尤も表面に顯はれた所から云へば、どの途階級鬪爭を遣るのだから同じ事になるやうだけれども、根本的態度の差は又いろ〳〵の點に於て重大な差を生ずるものたる事を看逃してはならない。然るに不幸にして今日勞働問題に熱中して居る人の多數は、何うも此點に於いて我々と色合が違ふやうに感ぜらるる。或人は曰ふ、お前のやうな其麼なまぬるい事では迚も資本家との鬪に勝つことは出來ない。畢竟さう云ふ考の起るのも、勞働者が如何に資本家の橫暴の爲めに苦んで居るかの實況を知らないからであると。然り、それもあらう。熟く知つたら資本家に對する敵愾心も起つて一層勞働問題に熱

を有つやうになるかも知れぬが、併しそれかと云つて度を超えて極端に奔るといふのは、事情之を恕すべしとするも断じて健全な遣り方ではあるまい。又或人は曰ふ、そんな微温い事を云つては闘爭に熱が起らない。而して勞働者を此上何時までもあのやうな境遇に止らしめて置く事は、勞働者自身の爲めにも亦社會の爲めにも忍び得ないと。之も其通りである。一日も早く改善の實を擧ぐることは必要であるけれども、不自然な急速な轉換は決して健全な發達と云ふことは出來ない。何處までも自然な順序を追うてコツコツ努力する所に本當の進歩の礎が築かるるのである。

其處で僕は勞働運動の緊急の必要事なるを認め、場合によつては身を挺して一半の力を之に傾倒しても可いと思ふ事もあるが、唯行るならば自分と同じやうな人生觀を有つ人と提携したいと考へて居る。說の如何は必ずしも問はない。唯人生に對する其人の本能的情味が何う動くかの見當が着きさへすれば、自分は悦んで此等の人と提携したいと考へて居る。若し此處に斯う云ふ同じ傾向の人が相當に集つて團結を組むなら、自然其風潮に動かされて全體としての勞働運動も頗る健全なものと成り得ると信ずる。勞働運動と云ふと兎角世人は革命的行動を聯想する。少くとも資本家に對する荒々しい喧嘩を聯想する。當節矜りに勞働問題を叫んで居る人々の言說から推しても、此想像は尤もと思ふが、併し勞働運動は何時でも斯う云ふ風なものと限つたものではない。

是に於て僕は一九一三年白耳義に起つた大勞働運動を憶ひ起さざるを得ない。其原因等に就ては玆に詳々しく云はないが、兎に角同國の勞働黨は前年の六月末日大同盟罷業の決意を爲し、用意周到なる準備を調へ、翌年の二月央に至つて愈々實行期日を定め、而して四月十四日正午を期して約四十萬の勞働者をして罷業を斷行せしめた。其時の態度の堂々たる而かも常に中正穩健を失はざるは實に世界の敬嘆せる所であつて、之れ畢竟同國勞働運動の中心人物が一面に於て熱心なる人道主義者であつた結果であるとは疑を容れない。彼等は一面に於て最も有效に同盟罷業の效果を收めんと欲して、前年の六月から綿密なる準備に力を盡した。所謂實行準備委員は一方には檄文小冊子等を頒布し、又は演說會を開いて勞働者の昂奮を促すと同時に、他方には過激粗暴の事無きやういろ／＼注意する所を怠らなかつた。其爲めに日曜大祭日等を選んで所謂試驗的動員を郊外でやつた事も尠くなかつた。會計委員は資財の豫算を圖る爲めに最も苦心した。消費組合の賣品を一割方高くし、買主たる勞働

者をして同盟罷業實行の爲め一割宛の貯蓄を爲さしめた。勞働者救護委員は又各々分擔して其所管內の勞働者の狀態を精査し、他日其救護に遺漏なからん事を期した。兒女保護委員は罷業參加者より罷業期間中兒女を引取り、之に厚き保護を加へて後顧の憂なからしめんとした。之を以て觀ても如何に周到細密の用意を以て事に當つたかを知ることが出來る。それにも拘らず彼等は何處までも總同盟罷業の決行は最後の手段であるといふ立場を離れず、出來得べくんば相互の推讓によつて平穩の解決に達したいと云ふ態度を明白にして居つた。故に愈々妥協の途盡きて二月央罷業實行の期間を定めた時でも、愈々實行までに二ケ月の長き期間を設けたのは、畢竟其間に妥協交讓を容るるの餘地あらしめんとの用意に出でたものである。現に彼等は其機關新聞をして決行前に調停を試むものあらば何時でも之に應ずべきを公表せしめて居る。無智無産の勞働者を擁して事を起すには、出來る丈け疾風迅雷の勢を以てするを得策とすべきに、此麼な風では却つて氣勢を挫くの憂があらうと思ふのに、幹部は其後七市長の調停に應ずるとか、又其交涉に於ても對手方にも增して穩和な態度を執るとか、其態度や傍から見て寧ろ齒痒い程であつた。彼麼な風では本當にストライキをやる意思が無いのではあるまいかと思はれる程であつたのに、愈々罷業の斷行を見るや、四十萬の勞働者は幹部の指圖に手足の如く動いて、少しも弛頹の色が無かつた。而かも幹部は出來る丈け社會の蒙る直接の損害を少からしめんと欲し、鐵道、電車、瓦斯、電燈、水道等の從業員には成る丈け罷業に參加せしめないやうにした。それでも社會の蒙る損害の頗る著大なるは蔽ふ事が出來なかつた。何れにしても參加人數の夥しきに拘らず、其訓練自制の行き屆き、極めて安穩靜平の裡に運動を終始せしことは世界の人の敬嘆して措く能はざりし所であつた。而して僕の觀る所に據れば、畢竟斯くの如くなるを得たりし所以のものは、人道主義が實に同國の勞働運動を指導して居つた結果に外ならないと思ふ。

理屈から云つても勞働運動に對する本當の熱は、人道主義の信念から起るものだと僕は考へて居る。蓋し勞働運動の根本の動機は、虐げられて居る勞働者階級に人らしい生活を保障して遣りたいと云ふ考にある。苟しくも人間として生れた以上は、人らしい生活をすると言ふ事は當然の要求であつて、虐げられて居ると云ふ眼前の事實に立脚する利己的主張ではなくして、狹くしては社會國家に對し、廣くしては宇宙人生に對する我々本來の任務を全うする爲めの必要缺くべからざる要求である。

尤も人らしい生活をすると云ふ事は、特に不當に虐げられて居るもの丶立場から言へば、自分自身の權利を主張するのだと云ふ利己的方面も無いではない。而して一般卑近の低級な考へ方から言へば、自己の權利の主張なるが故に熱を有つとも言へる。少くとも其利己的方面を高調して勞働者の熱情を此の運動に昂奮せしめんとする所謂運動家も少くない。併し凡そ人は直接自分の利害に關する問題に就いてのみ熱するものだと云ふ考の絕對的眞理ならざる以上、之に依て全體としての國民的運動を起す事は出來ない。現に他の一方にはトルストイ一流の無抵抗主義のやうに、右の頰を批つものあらば更に左の頰を批たしめよと主張するものすらある。自分の直接の利害問題には出來る丈け淡泊なれと云ふのは、せち辛い今日の世の中でも尙有力なる個人道德の一大敎訓たるを失はない。斯う云ふ敎訓が勢力を有つやうでは勞働運動の鋒先を鈍らすと云ふのであらう。從來の運動家は兎角トルストイ一流の人道主義者を罵倒し、果ては宗敎を罵倒し、道德を罵倒し、出來る丈け此等に對する不信侮蔑の念を無理に造らして、以て勞働運動の勃興を助成せんとした傾きがある。尤も彼等が所謂宗敎道德を罵倒し排斥するに就いては、從來の宗敎道德が動もすれば資本家側の利用する所となり、專ら勞働者の鋒先を鈍らす爲めにのみ役立つて居つたと云ふ事實にも起因する。併しながら之は利用するもの、並びに利用さる丶もの丶罪であつて、宗敎道德が本質上資本家の友にして勞働者の敵なりと云ふ譯はない。過去の歷史に拘泥して勞働運動が强ひて人道主義に遠ざからんとするのは、國民的社會的の全體の問題たるべきものをして、强ひて勞働者と云ふ特殊階級の狹い問題たらしむるものである。

且つ又勞働問題を勞働階級の利己的主張とする立場を取ればこそ、トルストイ一流の人道主義を排斥する必要があるが、若し勞働運動の主張が社會の爲め、人道の爲めだと云ふ立場に立てば、人道主義に依つて何等煩ひさる丶氣遣ひはない。否、トルストイ一流の人道主義により利己的階級的主張としての勞働運動の成り立ち得ざることに覺醒して、初めて勞働運動は本當の間違ひのない立場を見出し得るのではあるまいか。僕の考ではトルストイの無抵抗主義に特別な共鳴を感じ得る人が本當の熱を勞働運動に有ち得るのであると思ふ。換言すれば勞働運動が本當のものとなるには一度トルストイズムの洗禮を受けて利己的立場を葬つて來ることが必要であると考へる。

匆卒の際に筆を執つたので僕の考を適當に表し得たか何うかは疑ひあるが、併し僕の意の在る所は大抵明かにし得たと思

ふ。而して今日我國の所謂勞働運動家の多數が此僕の立場を何う觀るかは知らないが、僕自身彼等に對して有つて居る感じを卒直に述べることを許すならば、今日の所僕は容易に彼等と此運動の爲に提携する氣にはなれない。勿論此運動に關係して居る人の中には、多數の友人あり又間接にいろ／＼同じ志で事を共にして居る人もあるから一概には云へないが、唯何となく彼等の多數が果して僕の所謂人道主義に徹底して居るか何うかと疑はるゝのである。勞働運動に携はる爲めの必要な資格として、博愛を罵倒し、人道を斥け、殊に宗教道德を迷信呼はりするを必要と見る論者は云はずもがな、然らざるも勞働運動を熱心に主張すると云ふ事の以外に於いては、更に社會國家に熱し又宇宙人生に對する自己の道德的責任を痛感しない人が多いからである。鹿を追ふものは山を見ずと云ふ事がある。勞働問題に熱中するは可いが、山を見落しては不可ない。醫者は人の病を治し、社會から疾病と云ふ禍を出來る丈け取除くが爲めにある。けれども狹い了簡の醫者は一人でも病人の多からんことを希望する。平賀源內は物を洗ふ水を容るゝ水甕にも水の垢が附くと云つたが、常に人道主義に徹底して居ないと、水の垢を洗ひ落すことを忘れる。勞働問題に熱中する人も動もすと此弊に陷るの嫌がないか。現に最も此方面に活動して居る我々の周圍の人の中にも、惡く云へば勞働運動を賣物にして隨分我儘を働いて居る者もある。斯う云ふ人が一朝地を代へて强者の地位に立つたら、飲んだり食つたりで社會の富を蕩盡して了ふやうなことが無いかと危ぶまるゝ。此種の連中は殊更に人道主義を罵倒する人に多い。大酒を飲まうが放蕩をしやうが構ふものかと云ふ勢で、故らに宗教道德に反抗的態度を採るのが若し彼等の本音であるならば、彼等が如何に勞働運動の進步に熱心貢獻する所あつても、他の一面に於いて人としての本分を全うして居るとは云へない。勞働運動に浮身を窶すと云ふことが同一でも、我等は東京から大阪に行くに偶々同じ汽車に乘り合はしたと云ふこと以上に、此等の人と事を共にする氣にはなれない。氣の弱い人は本來勞働運動に相當に熱を有つても此等の人と同し途を行くのが困ると云ふので、暫らく手控へすると云ふやうな事がないとも限らない。斯くして若し勞働運動が此等の好ましからざる人々の一部分の運動として畢るならば、之れ實に勞働問題の爲めに遺憾此上もない。

戰後重大問題の羅針盤、一日も不可缺大新聞

正大切實の識見、的確精緻の報道は日本の代表的新聞として夙に内外に至大の信用を博し且つ近時の紙面は更に益々活躍せり

日本一の時事新報を讀め!!

時事新報は曩に代價を引上げたるに拘らず其發行部數益々增加せるは私に誇りとする所、今や世間は實價ある新聞を要求せり

夕刊四頁、朝刊八頁、何人にも興味多き大新聞

東京 時事新報社 發行・取次所全國各地に在り

社會主義の活殺權を有する怪猫の怪辯

賣文社理事 遠藤無水著 ■高畠素之序■忽ち再版■

定價壹圓七拾錢 送料八錢

社會主義者になつた漱石の猫

若宮卯之助氏曰く『社會主義の通俗的説明と日本社會主義者の近狀描寫とをチャンポンにした非常に面白い本である』

東京日日新聞曰く『苦沙彌先生の猫が蘇生して社會主義を論じ、皮肉と諷刺と氣焰とチャンポンに出る處、蓋し天下の珍書！』

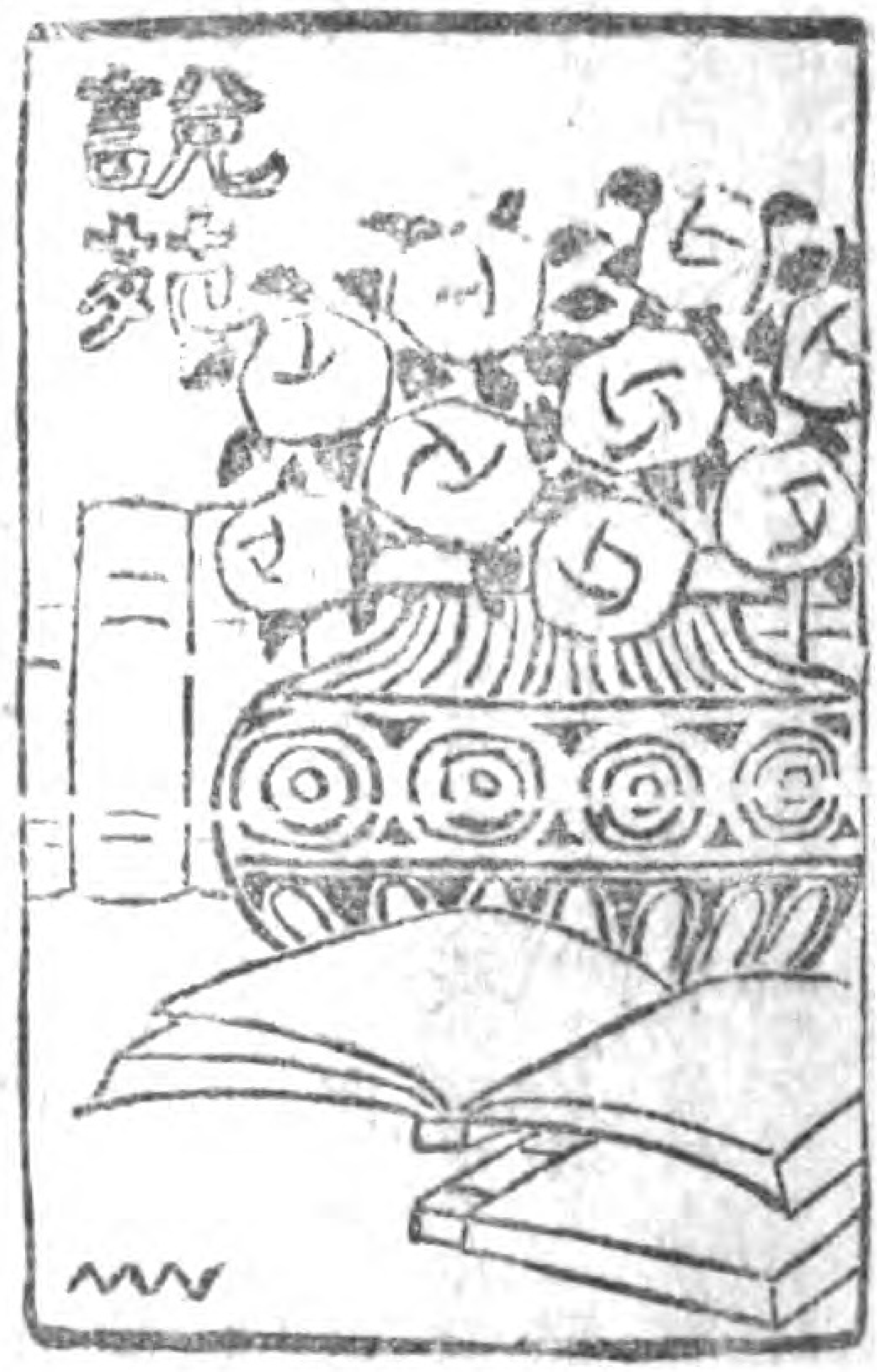
山崎今朝彌氏曰く『一氣呵成に讀了、社會主義者に一人殘らず咬付いた樣でもあるが、併し人間ナンゾ怪猫の心を知らんやだ』

吉野作造博士曰く『痛快殆んど卷を措く能はずして讀了、大體に於て共鳴敬服するも、追つて『我等』にて愚見を述べん』

■岡本綺堂作 うす雪

中版箱入上製 定價壹圓拾錢 送料八錢

東京牛込神樂町二の一一 振替東京四四六八七 發兌 文泉堂



日本社會運動史論

白柳秀湖

一　模倣文明の經濟的意義

社會運動は階級運動である。大多數の被支配者が、少數の支配者に對して其生活の改善を要求する階級運動である。故に社會運動の歴史は取りも直さず、民衆個性の歴史である。其國に社會運動の歴史なく、治者の年代記と、同一支配階級の間に於ける新舊勢力の盛衰記とを存するに過ぎざるは、其國の民衆に人格なく、個性なきを意味する。我國には幸か、不幸か、社會運動といふものがなかつた。大多數被支配者の階級に其生活を改善しようといふ欲求がなかつた。社會運動らしく、民衆運動らしく見えたものはあつたが、それは要するに同一階級間の新舊勢力が相爭ふ中に、一敗地に塗れて民間に淪落した舊勢力の現世を支配しつゝある新勢力に對する反抗であつて、眞の社會運動、民衆運動ではなかつた。

大多數の民衆が其生活を改善しようとする欲求は政治の上に現はれて社會運動となり、階級的鬪爭となり、學問の上に現はれて自然界の研究となり、實生活の上に現はれて生產機關の發明となり、衣食住の改善となる。日本に社會運動、民衆運動がなかつたといふことを最も分り易く說明するには、日本の民衆が開闢以來、生產に要する器械、衣食住ともに太古のそれと殆ど大差なきものを用ひ、何等の新發明をも加へずして明治の世に及んだといふことを以てするを便宜とする。資本主義の爲に辯する學者は、勞働者は勞力を提供し、資本家は智惠を提供し、

種々の工夫と計畫とを以て勞働者の勞力に酬ゆるなど尤もらしく說き立てるが、彼等にして若し日本歷史に精通したならば、新しき生產機械の發明、衣食住の改善といふことは、一として怠惰なる少數支配者の手によつて成されるものでない。大多數民衆に其生活を改善しようといふ欲求のない國には、千年經つても、二千年經つても、新機械の發明は行はれぬ。換言すれば生產過程に於いて、新機械を發明し、種々の工夫と計畫とを提供するものは、ヤハリ勞力を提供する大多數の民衆であるといふ事實を明々地に看取することが出來るであらう。蘇我氏の如き、藤原氏の如き、源平二氏の如き、盛に支那、朝鮮の文化を輸入して衣食の制を改め、大土木、大建築を起して中央の文飾を盛にしたけれども、其領土に固著せる大多數の民衆に對しては毫も其生活の改善を許さず、彼等をして餓死せざる程度の貧困に甘んぜしむるを以て、天下泰平の基とした。怠惰なる支配階級は我が肉體上の慾望を滿すべき衣食住の制度は之を朝鮮に學び、支那に學び、服制の如き時に全然支那の制度を摸倣して、彼と識別せらるる所なきを得意としたが、之を以て一般國民に及ぼした譯ではない。農業の器械も、漁獵の器械も殆ど之を太古の儘に放任して顧ない。耕作撈獲の方法に至つても別に新しき工夫を勸說推奬した譯でなく、其收入に不足を感ずるに及んで種種の法令を發し、百姓の荒怠と、地方官の不正とを戒めることはあつたけれども、それ以上に百姓の慾望を善導して、國富の增進を計るといふやうなことはなかつた。之はもとより其筈である。支配者としては入るだけの費用があればそれでよい。其費用は百姓が新しき機械の力によつて安々と產出するものであらうと、又、牛馬の如く膏汗を絞つて產出するものであらうとそんなことは別に詮義立てをするに及ばぬ。唯、自ら足ればよいといふのが昔の支配階級の立場であつた。然り、鎖國的經濟組織の下に於ける支配者の立場であつた。

二　機械を發明せざる國

此關係は働く方の側から云つても同じことである。働けば働き甲斐があり、一步又一步自分の生活狀態を改善し、衣、食、住の慾望を滿足させて行くことが出來てこそ機械も發明しなければならぬ、生產方法も工夫しなければならぬといふことになるのであるが、支配階級の利益に偏した法律、制度、習慣が生活の改善に對する一切の自由を嚴禁し、宗教と藝術とが、右と左とから犇々と取つめて現世に對する慾望の芽生えを防ぐとあつては、民衆たるもの、何處に器械の改良を工夫し、衣食住の發展向上を欲する餘裕があらう。百姓は汗水垂らして働いて御領主樣に年貢を納めるもの、百姓はまづいものを食つて穢い家に棲み、

年中貧乏をして暮すべきもの、百姓は財産を拵へてはならぬ。百姓は學問をしてはならぬ。恁ういふ運命が歴史以前から祖先の血統に流れて居る所に、何の必要があつて、生産機械の發明など行はれよう。幾ら働いても、幾ら稼いでも自分の運命は決つて居る。何の途餓死せぬ程度のものを食ひ、凍え死なぬ程度のものを著て生きて行かなければならぬとあつては唯、牛馬の如く運命に驅使されて、其日其日を働いて行けばそれでよいのである。

地方を旅行して、邊鄙の農家に腰を下す人は今日でもなほ太古の生活に、何程の進歩、改善を加へたとも思はれぬ衣食住の有様を見る。慣れた眼に唯、漫然として之を見れば何の不思議もないのであるが、少しく離れて之を觀察すれば、如何にも不思議である。先づ土間に築かれた竈を見よ、此竈は土を捏ねて半圓形の壁を作り其上に、鍋なり、釜なりを置くやうに出來て居るだけである。此原始的の竈は、太古に於いて吾々の祖先が使用した竈と何程の相異があるか。何程の進歩、改善を加へられたものであるか。而も此竈は一年に一度とか、一生に一度とか、土藏の中から出して來て使ふ道具ではない。人間の生命の續く限り、太古から今日に至るまで、一日として使用せぬ日のなかつた、最も必要な大切な道具の一である。傳說に從へば、日本は二千六百年を經過して居る。二千六百年といへば、決して短い歲月でない。二千六百年の歲月を經る間に誰か此竈に今少しの工夫を加へる人は居なかつたか。火や焰の廻り工合を考へるには複雜な知識を要するとしても、せめては燻る煙を屋外に導くだけの工夫はあつてもよさそうなものである。煙突の中に豚の股肉を吊して貫く程の工夫はなくとも、せめては居間や臺所道具の眞黑に煤けぬだけの工夫はあつてもよさそうなものである。考へて見れば法隆寺を築き、奈良を營み、京都を造り、高野山を開き、日光を打建てた日本人としては實に不思議な現象である。解し難き謎である。而もこれらの百姓は決して最下等の賤民といふでない。今日でもその生活狀態は、殆ど昔の儘、政府の認めて以て中堅と稱するものの家庭に殘つて居る。是までの歴史家は、紫式部や清少納言や、最澄や空海や、雪舟や元信や、運慶や快慶や、近松や西鶴やをあげて、之が日本の國民性を代表する文化であると云つて居る。無論此文學、藝術に於いては外國に比較して必ずしも遜色のないものを有する日本が、生産機械の發明、産業方法の改善といふことに於いては二千六百年の歴史を通じて殆ど記すべきものがない。大多數の民衆は大體に於いて二千年以前と同じ衣服を纏ひ、同じ家屋に住み、同じ器械を用ひ、同じ産業方法を營んで德川氏の末に及んだ。此奇異なる現象は何を以て解釋すべきであるか。此點に對しては嘗て

疑ひをさへ挿んだ人がない。日本には世界に誇るべき文學、美術があるといふのでサッサと片付けて了つて居る。外國の文明は文學美術の發達と、産業方法の進歩とが必ず相伴つて居る。何故日本だけが文學、美術の發達に産業方法の進歩が伴はぬか。

此疑問は社會組織、經濟制度の研究によつてのみ解釋せられる。日本には大多數の民衆に其生活を改善し、向上しようとする欲求がなかつた。隨つて政治の上には、社會的、階級的軋轢の跡がなく、學問の上には自然界に對する研究の結果がなく、産業の上には生産方法を改善すべき機械の發明がなかつた。日本の支配階級は其生活に要する物資は之を自國の民衆から徴收したけれども、其生活を豐富にし、其生活を潤色すべき一切の材料は之を外國に仰ぎ、中には之を得んが爲に、國家の體面を顧慮しなかつたものさへある。初めは支那、朝鮮から文物を輸入し、戰國以後は盛んに西洋の文物を輸入したけれども、其目的は要するに支配階級が生活を豐富にし、其生活を潤色せんとする以上に出でなかつた。百姓は之等の模倣文明とは全く無關係にして存在した。鐵砲の如き、羅針盤の如き、活字印刷術の如き、西洋に於いても、日本に於いても封建制度の基礎に大龜裂を生ぜしめたことは同じであるが、民衆の實生活に裨益された所は殆どないと云つてよい位のものである。徳川氏は一般に外國貿易を禁止したけれども、自己階級の生活を豐富にするに必要なだけの物資は、絶えず之を和蘭と支那とから輸入して居た。極度の無知と貧困とを以て勞働階級、庶民階級を律せんとする國にありては、一切の文物制度を外國から輸入するの外はない。何となれば、他の勞働に寄食する遊食階級に發明はない。研究はない。工夫はない。之が私の考へる模倣文明の經濟的意義である。

三　日本の奴隷

然らば日本の民衆には何が故に生活改善の欲求がなかつたか。之は國家成立の事情に大關係がある。

大陸にありては、或る民種が、他の民種を加へずして單獨に國家を組織するといふことは殆ど全く有り得べからざることである。處が島國に於いては往々にしてそれが有り得る。日本の如きは其一例である。尤も日本とて絶對に他の民種を加へずして國をなした譯ではない。日本民種は此聯島に徙遷する初め、既に奴隷を率ゐて居た。又、聯島に徙遷して後も土蜘蛛族を始めとして、諸所に先住した梟帥どもを征服して之を奴隷としたけれども之等の奴隷が日本民種に征服せられた事情は、支那や西洋の古代史に見る國家統一の事情とは大に其趣きを異にし、殆ど存立競爭といふものはなくしてしまつた。九州の南部に占

撲した熊襲は多少手應へがあつたのであるが、それでも文化の程度は餘程距つて居たものと見え、神功皇后は、『熊襲は脊の空國なり。伐つに足らず』と云つて居る。土蜘蛛に至つては、其名の示す如く尚ほ野蠻の域を脱せざる穴居民種であつて、日本民種から之を見れば殆ど野獣に近きものであつた。されば之が勦滅に際しても、殆ど統制ある軍隊の力を要せず、彼等が穴を出でゝ山野をあさり歩く隙を伺ひ、其窟の内に茨棘を係け、騎兵を縦ちて之を窘迫し、若しくは其土窟の口に草木を積み、火を放ちて燻殺するなど殆ど戰爭らしい戰爭はせずして之を掃蕩して居る。『細戈千足國』といふ稱呼も恐らくは、土器、石器の野蠻種族に對する、鐵器種族の誇りであつたらう。斯樣な次第であつたから、日本は奴隷の外、國家の編制上に何等かの資格を有する異民種を加へることなしに國を肇めた。即ち日本は日本民種と其率ゆる奴隷とが主從水入らずの關係で打建てた國家である。此奴隷の事に關して山路愛山先生は一つの大きい謬見を抱いて居られた。

日本に賤民即ち奴隷の起つたのは何時頃の事でありましやうか。私は未だ十分調べて見ませんから何とも申上兼ますが、今日までの私の研究では、日本の賤民は人種の相違から起つたものでなく、先天的に良賤の區別があるといふ印度のケーストの樣な思想から起つたのでもなく、唯社會の或事情から起つたものであるやうに思はれます。即ち自分で身を賣つたものとか、父母の爲に賣られたものであるとか、借金を返す爲に其代價になつたものであるとか、罪ある爲に官奴にせられたものであるとかいふ原因から奴隷になつたもので、申さば後天的のもので云々。（社會主義管見）

愛山先生は人間最初の私有財産が家畜と奴隷とであり、其奴隷はいづれも戰爭によつて征服された劣等民種であつたといふことに就いては未だ御研究がなかつたやうである。日本民種は高天原時代既に奴隷を私有し、此國島に徙遷して後も、先住民種との戰爭によりて新しき奴隷を加へ、三韓征伐によりて更に新しき奴隷を加へた。此奴隷は世界の各民族、各民種に共通の奴隷であつて、決して愛山先生の想像された如き日本獨特のものでない。人間の私有財産は此奴隷と家畜とに始まつて、土地となり、資本となつて現代に及んだものである。

私共が常に民衆とか、庶民とか云つて居るものの大部分は此奴隷の子孫か、然らざれば、此奴隷と並んで大小の氏族に配屬した部曲と稱するものの子孫である。奴隷を賤民とすれば部曲は即ち良民である。此部曲がそれぞれ大小の氏族に配屬した關係は奴隷と同じであるが、其從屬の由來は自ら別で、而も氏族との間には截然たる血統上の區別があつた。其處で單一の民種が、血統の高下を社會の秩序として國を建てた日本に於いては、

此部曲(良民)家部(賤民の古稱)ともに、國家編制の一要素たる資格を許されず、二千六百年の歴史を通じ、支配階級の文化とは殆ど沒交渉の姿で孜々營々と働いて來た。此奴隷は大化新制の後、歴代の天皇から大小の豪族に對して數々其解放を御奬めになり、皇室の有り難き思召によつて漸次良民の列に加へられることとなつた。之と同時に大小の豪族も戰爭の場合、此奴隷に生命を捨てて忠勤を挺んでさせる必要上、軍功によつて其血統を無視し、郎等の列から家の子にも加へることとなつたので奴隷と良民との境界線は何時とはなしに消滅して了つたけれども、それは唯單に兩者の差別が撤廢されたといふだけで、此兩者を打つて一丸とした庶民階級に、生活の改善を要求する自由が許されたといふ譯ではない。國家編制上の一要素としての資格が許されたといふ譯ではない。

上古の部曲、家部、中古の郎等、土民、近世の土百姓、素町人(郷士及び門閥富豪を除く)現代の庶民階級は實に右の如き事情の下に二千六百年の歴史を通じて全く其社會的支配者たる豪族階級の文化の外に忘れられて來た。さうして政治の上に一度も其頭を擡げず、殆ど太古そのまゝの生活を續けて現代に及んだ。

四　異種族征服の二形式

次に順序として、日本歴史の上に現はれた民衆運動らしきもの社會運動らしきものをあげ、それが眞の民衆運動でなく、社會運動でないことを説明して行くのであるが、それに先つて、日本と其成立を異にする外國の社會組織に就いて述べて置く必要がある。私は常に優勢なる一民種が劣勢なる他の民種を征服する形式を左の二つに分けて考へて居る。

(イ)文化の程度が略相匹敵する二つ以上の民種が激烈なる存立競爭の後互に其長所と實力とを知り戰爭の害毒(更に優勢にして血統の遠き他の民種より脅かさるる場合は共倒となること)を覺つて合同する場合。其比較的優勢なる民種は政治上社會上の特權を占め、最後に屈服したる劣勢民種は一歩を讓つて其支配に甘んずるのであるけれども、かゝる場合に於いては優勝者と雖、他を奴隷として取扱ふことは出來ない。國家編制の一要素として相當の資格を與へ、支配者としての德を以て彼等に臨まなければならぬ。其合同の形が征服に近ければ君主政體となり、妥協に近ければ共和政體となる。

(ロ)文化の程度が甚しく相隔絶する二つの民種が相衝突する場合。其文明民種は精鋭なる武器の力と、秩序ある軍隊の力とによりて野蠻民種を征服し、其捕虜を奴隷として使役す。大陸においては、大抵の民種が右二つの場合を併せて經過す

るのであるが、島國にありては稀に（ロ）の場合を經過したのみで（イ）の場合を經過することなしに國を建てるものがある。日本民族が卽ちそれである。此場合には國家の秩序が治者の『德』若しくは『力』によりて保持せられず、『血統の尊卑』によりて定まることゝなる。

羅馬の歷史は卽ち（イ）の代表的なるものである。伊太利の北部から、水草を追つて南方に移住した民族は、同種異族であつて幾分言語風俗を異にし、且つ其祭神を異にして所謂羅馬の七丘に割據した。七丘の異族は初め互に相侵略して戰爭を事としたが、後には協同して外敵に當るの必要を感じ、パレチン丘上ラムニ族の酋長、ロミユラスを推して王となし、各族の代表者を以て立法議會を組織したのが羅馬の起りである。卽ち形は王政であつたが、其實は共和政治であつた。羅馬は此王政の時代を經て間もなく眞の共和政治に入るのであるが、此關係は支那としても同樣である。支那の國語は今日でも多種多樣であつて統一する所がない。之は支那が多くの同種異族から成立つて居る何よりの證據である。支那の古代史に現はれる提挺氏とか、有巢氏とか燧人氏とか、庖犧氏とか、神農氏とかを個人の姓と見たら大きな間違ひである。之はちやうど羅馬七丘の異族の如く部落の名稱である。之等多くの同種異族は崑崙山の方面から、黄河、揚子江の流れに沿ふて漸次中原に移住して來たもので、初めは互に相攻略して、激烈なる存立競爭をやつて居たのであるが、後には黄帝の如き、堯舜の如き、或は禹の如き有力な酋長に統一せられて所謂漢族の大帝國となつた。けれども此場合堯舜にしても、禹にしても諸族をトコトンまで抑へ付けたといふ譯ではない。荒こなしをして、アトは妥協で行つたに相違ない。堯、舜、禹ともに天子とはいふものゝ一種の大統領であつた。堯舜の禪位などはその事實の最も著しきものである。かゝる國情の下に於いては、多くの場合階級が直に民種の相異を意味するので、治者若しくは支配階級に無理があれば、民衆は決して默止しなかつた。天子が天子たるの德に背き、支配階級が、其特權を許された約束に背けば民衆は必ず起つて改革を要求する。後世の統一とて同樣である。『法三章を約す』といふは法三章で足りたのでなく、大綱を三章に要約して、細則は各族の法律、制度、習慣に任せたものであらう。茲にも共和政治の運用を見る

近年支那が共和政體を採用したのを見て柄にないと云ひ、支那は共和で行ける國でないと侮る所謂支那通もあるが、支那は昔から共和政體である。良賤の民を合せて一とし、主從水入らずで平和な國を建てた日本人が、支那を正當に理解することは餘程困難である。支那人が西洋を理解し、西洋人が支那を理解す

るよりも、支那人と日本人との理解し合ふことの困難な理由は此點にあると私は信ずる。

五　中産階級の生起

上古の日本に就いて社會的階級を擧ぐれば大小の氏族（豪族）とそれに統屬する良賤の民とがあり、良民は多く技藝勞働に從事し、賤民は多く力役に服し、戰場に驅使せられた。中頃、良賤の區別が撤廢せられて後の社會的階級は、土地人民を私有する大小の豪族と、其土地に固着して領主の爲に働く農民との二階級に別れた。農民は平時に於いてこそ農民であるが、イザ戰爭となれば、郎等として戰場に驅立てられ、矢石を犯して領主の爲に働かなければならなかつた。

此關係は鎌倉時代から室町幕府の末に及んだのであるが、室町幕府の末に至り、地頭（大名小名）と領民（郎等）との外に二つの新しい階級が現はれた。此二つの階級はもと同じものであるから、結局一つといふを安當とするが說明の便宜上姑く二つといふことにして置く。二つの新しい階級とは何ぞ、即ち一つは、町人であり、他の一つは豪農である。地頭と領民との外に町人といひ、豪農といふ階級の現はれたのは、取りも直さず封建制度の土臺に大きい皸の入つたことを意味する。然らば何が町人階級、豪農階級を生んだか、何が封建制度の根柢に大龜裂を生ぜしめたかといふことは『英雄戰より民衆戰へ』と題して本誌の十月號に十分說明を加へて置いたから茲には絕對に重複を避けて唯、町人も豪農も、要するに大小豪族の形を變へて現はれたものであつて、上古の所謂部曲、家部の階級から起つたものでないといふことを證明するに止める。さうして其目的は之によりて日本歷史の上に現はれて居る社會運動らしい事實、階級爭鬪らしい事實が決して眞の社會運動でなく、又眞の階級爭鬪でないといふことを確めると同時に今日の所謂政黨政治なるものも、矢張り一種の豪族政治であるといふことを明かにすることにある。先づ順序として豪農階級の由來から考へて見ることにしよう。

日本歷史の上で社會運動らしい事實といへば何人でも先づ佐倉宗五郎を想起する。佐倉宗五郎は鬼の如き役人共の苛斂誅求に泣く三百八十九ケ村の農民を代表して、領主の憐憫を乞はんとし、專ら其門に哀訴したが、更に聽かれないので、斷然死を決して將軍に直訴し、一身一家を犧牲にして佐倉領幾萬の人命を救つたといふので、之は一寸見ると立派な民衆運動のやうであるが、實は百姓が自覺しての運動ではなく、鄉士豪農の階級が、新領主によりて褫奪されんとする自己の地位と特權とを擁護し、古き制度と習慣とを保持せんとするの運動に外ならなか

つた。

少數の兵を率ゐて險阻に據り、優勢なる敵に對抗することの出來た時代、大國と大國との間に介在して小國の存立が可能であつた時代には、或る豪族が他の或る豪族の爲に打破られて城を屠られ、國を奪はれても、打破られた豪族は山野に奔り、遠國に逃れ、流離漂泊の間によく打もらされた家人、郎等を集め新しい根據地を作つて再擧を企てたものである。さうして此再擧が往々にして目覺しい成功を穫ち得たのは主として室町以前のことである。室町以前の戰記物語には、所謂七顚八起の目覺しい旗擧げの事蹟が應接に遑なき程であるが、戰國以後には餘り成功したのがない。一度國を奪はれては金槌の河流れで再び浮ぶ瀬はない。之は西洋文明の影響による兵制、經濟の變革が主要なる原因であつて戰國以後は打亡ぼされた豪族の土著して農業に從事するものが甚だ多かつた。之が即ち大名小名と其土着の領民との間に、鄕士豪農と稱する一階級の現はれた起りである。

資本制度の特徴は身分の高き者も、身分の低き者も、生存競爭の落伍者に對しては些の容赦を加へぬ。同じく貧乏といふ大鎔爐の中に抛込んで、何もかも一處に煮くだいて了ふのであるが、封建制度は流石に其處にユトリがあつた。落ぶれて木こり山かつを業としても、元は由緒正しき武士といへば、自然に人も尊敬し、其血筋は容易に土民の血筋と交らなかつた。殊に武家の再擧が困難となつてからは、征服者も鎌倉時代ほどに落人を追窮せず、中には新領内の山林寺院などに隱れてほとぼりの冷めるのを待つ者もあつた。

殊に德川家康の政策として、沒收した土地には成るべく舊制舊法を其儘に襲用し、舊領主の一族重臣にして土著するものがあれば、害のない限り大眼に見て、それに百姓の取締りをさせるを便利とした。名主とか、百姓總代とかいふものの多數が、舊領主の一族若しくは其重臣の土著したものであることは讀者がそれ〴〵其故鄕の事情、古老の話に照して思ひ當る所があらう。義民と稱せられるものは、佐倉宗五郎の外にもいろ〳〵あるが、多くは武士の土著したものである。

六　佐倉宗五郎何ものぞ

佐倉宗五郎は千葉氏の家臣、木内源左衛門といふものの後である。千葉氏が小田原の北條氏と共に亡んで後、源左衛門は曾て其篤山城の城代であつた關係から下總國公津村に土著して世を忍んだ。關八州が家康の領有に歸した初めは、ひとり木内氏のみでなく、總房の野は到る處千葉の一族重臣を以て滿たされ、新領主の威令は容易に行はれなかつた。天正十八年の小田

原落城から寛永十二年堀田正盛の入城に至るまで佐倉は其領主を代へること左の多きに及んだ。以て其統治の困難なりし事情を察すべきである。

天正十八年より同十九年迄	久野三郎右衛門
天正十九年	直轄
文祿元年より慶長五年迄	武田信吉
慶長五年より同六年迄	松平忠輝
慶長七年より同十四年迄	直轄
慶長十五年より寛永十年迄	土井利勝
寛永十年より寛永十二年迄	松平家信
寛永十二年より	堀田正盛

佐倉領には實に前後四十六年の間、新領主の法令が行はれず、千葉氏の舊制、舊法が其儘に行はれて居たのである。之は全く千葉黨の勢力の侮るべからざるものがあつたからである。尤も關東は中央の文明と隔絶して人情風俗を異にし、之を關西と同一の法律制度を以て律することは困難であり、昔から一種の總督政治が行はれた所であるから、徳川氏も關八州の統治には餘程苦心をした。『八州』は卽ち徳川氏の特別警察で、歴史上今日の警視廳と深き因緣がある。（大東京市論續稿腹案の一部）

之れを要するに徳川氏は常に戒嚴令を以つて八州に臨んだ。

かやうな次第で、初めは租税の徵收法なども、全然舊領主の制法に從ひ、只管人心を鎭撫することに努めたのであるが、關ケ原戰爭の後は、漸次其の制法を統一しようとして、慶長八年先づ關東の税法を定めたが、家康の用心深き尙ほ強てそれを實施しようとはせず、各領主に意を含めて、成るべく寛大な取扱ひをさせた。就中、武田信吉の如きは餘りに千葉の殘黨を懷柔し過ぎるといふので、幕府から睨まれた程であつた。木内氏を擧げて印東三十六ケ村の割元名主とし、之れに三人扶持を給したのは此の武田氏であつた。土井利勝は二十四年間佐倉を領し、其の間には關八州の新税法も定まり、大阪も落城して天下は全く徳川氏に歸したのであるが、尙ほ千葉氏の舊法を襲用して、新法を實施しようとはしなかつた。其處へ堀田正盛といふ俄大名が乘込んで、千葉黨の思惑などは一切顧慮せず、ドシ〳〵舊制舊法を破壞して行つたので、農民も不平であつたが、農民よりも不平であつたのは所在の千葉黨である。佐倉領では木内氏が千葉黨中の家柄であつたから、勢ひ總代として働かねばならぬ地位にあつた。此の郷士、豪農といふものは純粹の百姓でなく、又領主の家人でなく、其中間に生れた全く新しい階級であつた。

七　犬養毅、牛場卓藏、美澤進

福澤諭吉翁は新日本の水先案内として口に平民主義を唱へ、封建の舊風陋習を笑殺罵倒しては、拜金宗徒と目されるまでに強く突込んで國民を教化されたが其精神は全く武士道で固まつて居た。當時はちやうど遺傳に關する學說が新しく輸入された際とて、翁は殊に強く武士の血を重んじ、新日本を背負つて立つべき商工業者は、矢張り武士の血をうけたものでなければならぬ。土百姓、素町人の子は所詮教ふるに足らぬといふ考へを持つて居た。之に就いて面白い話がある。それは當時慶應義塾の生徒の中に、犬養毅、牛場卓藏の二人があつて、之が常に翁の遺傳說に對する信念を裏切つて居た。犬養、牛場は其身分を調べて見ると平民である。處が、彼等の塾に於ける言動を觀察すると何うも平民の子とは思はれない。土百姓か素町人か知らぬが、平民の子に何うしてアンナ鋭いものが出來たであらうかと、段々深く其身元調べをして見ると果然、果然、犬養は鄕士の子であり、牛場は領主から苗字帶刀を許されて、武士と同樣に遇した大庄屋の子であるといふことが判明した。同じ頃の事翁は澁澤逆が酒屋の子であるといふことをきいて、酒屋の子倅など學問をしても役には立たぬ。國に歸つて濁酒(どぶろく)でも造れと一喝を喰はしたといふことである。此罵倒は福澤翁が歷史の經濟的解釋を知られたかつたからで、昔の酒屋といふものは翁の考へたやうに單純な素町人ではなかつた。之は私の歷史上の獨創であるが、昔の酒屋は、私の右に擧げた鄕士、豪農と、町人との中間に位するもので、門閥富豪は必ず、鄕士、豪農から此酒屋を經て、純粹の町人に化したのである。酒屋は鄕士、豪農と町人との合の子であつて、歷史上、社會上、最も研究すべき職業の一である。

酒屋の事は後に詳しく述べるとして、此鄕士、豪農、勢力に氣付かず、明治政府にありて佐倉の城主、堀田正盛の覆轍を履んだものは陸奧宗光と、大隈重信とである。專制武斷の德川幕府でさへ、千葉氏の舊法を改めるには殆ど半世紀の年月を費して居る。之は強ち百姓の不平が恐ろしかつたからではない。百姓の上に居る千葉氏の遺黨が、百姓の不安と動搖とに乘ずることを恐れたからである。處が萬事書生流儀の明治政府は何事も改革々々でそんなことは一切眼中にない。一日も早く地租を改正して全國劃一の制を布き、新政府の財政を固めなければならぬといふので、陸奧宗光は明治五年一月、其抱懷せる地租改正の建白書を政府に提出して大藏卿大隈重信の容るゝ所となり、明治六年七月二十八日、自ら租稅頭として地租改正法を發布した。此地租改正法は中央政府の財政を固めるに於いて、德川幕府の稅法に倣つたものであることはいふまでもないが、

其課稅の對象として定められた地價（土地臺帳）は專門家の間に隨分異論の多いものであり、又、實際に於いて公平を缺く所が少くなかつた。けれども地價制定の不公平よりも更に、更に驚くべきは、斯くの如き制度の大改革を理論一遍で、少しも民情に顧慮する所なく、ドシ／＼行つて憚れなかつた明治政府の大膽である。當時新政府の顧問であつた佛人ボアソナードは後に人に語つて、國民の實生活を脅すこと彼の如く甚しき制度上の大改革が、農民のさしたる反抗もなしに行はれたのは、殆ど思料すべからざることであると云つたさうである。ボアソナードにして若し地下に私の說明を聽いたならば、必ずや膝をうつて首肯する所があらう。それは別問題として、右の如き急激突飛の大改革に對しても部曲、家部の子孫たる大多數の農民は唯々諾々として之に從ひ、殆ど何等の不平をも色に現はさなかつたのであるが、前に擧げた鄕士、豪農の階級は默して之に從ふことが出來なかつた。明治の佐倉宗五郎は所在に蹶起して、農民の苦痛を新政府に訴へた。それに連れてさしも從順なる農民も津々浦々に蜂起して竹槍席旗の騷動を始めた。明治六年の地租改正から西南戰爭まで間歇的に起つた百姓一揆が卽ちそれである。

八　自由黨から政友會へ

明治の佐倉宗五郎とは誰ぞ、曰く杉田定一、曰く河野廣中、曰く栗原亮一、曰く竹內正志、曰く永田一二、之を要するに板垣伯の幕下にあつて愛國社再興の運動に參加した所謂『地方の有志』は何れも或る意味に於ける佐倉宗五郎である。少くとも私の解する佐倉宗五郎である。明治の木內氏は明治六年から明治十年にかけてなほ此外にも澤山世に現はれたのであるが、彼等は不幸にして人に知られず、世に傳へられずして鬼の如き邏卒の手に虐まれ鎭臺兵の銃先に煙となつて消え失せた。

杉田定一は越前國波寄村の人、杉田仙十郎といふものゝ伜である。氏の家は慶長三年豐太閤檢地の砌、奉行伊藤丹後守によつて千百五十七石一斗三合、之を反別として八十二町八反八畝一步と、外に山林幾百萬町步を其臺帳に記入された越前第一の豪農である。百姓といへば身分は卑しいものであるが、其實力は常に百姓の味方として福井侯の代官を凌ぎ、其惡政を彈劾するに十分であつた。明治六年の地租改正法による檢地の結果に對しては農民の不平甚しく、アハヤ竹槍席旗の大騷動となつて血の雨を降らさうとしたのを、杉田父子が飛出して縣廳との間に斡旋し、明治十二年、檢地の仕直をさせて足羽、吉田外七郡を通じ每年三萬八千九百六十四圓六十一錢の地租を輕減せしむることに成功した。杉田翁は成功した佐倉宗五郎である。

商賈の一部に蟠踞して此形勢を見極め、全國の郷士、豪農を打つて一團とした政治的結社を以て、薩長藩閥の把握した門閥富豪の力に對抗せんことを叫び立つたものは板垣退助である。自由黨は卽ち全國各地に蟠屈した郷士、豪農の階級を中心として起り、後には之に第二流の資本家を加へて政友會となり、伊藤博文に統率せられて、三菱の大資本を後援とする改進黨乃至その後身たる進步黨に拮抗し、更に中上川彥次郎の改革以來、三井家と閥族との手が切れかゝつたのに乘じて巧に之を自家の藥籠中に收め、三井を中心として之と利害相一致する中小資本家の勢力を統一し、別に自由黨以來の大地主を加へて議會に絶對多數を制する大政黨と成り濟ました。日露戰爭の後、桂太郎は閥族の依囑を一身に引請けて政界に立ち、三井と三菱との反目に乘じて巧に兩者を操縦し、陰に政友會を恫喝し、陽に之と妥協苟合して政權を把握し、閥族の爲に其外壘を固くして來たのであるが、大正の政變に際し、誤つて政友會と絶ち、騎虎の勢三菱に偏して同志會を組織するの止むを得ざるに至つた爲に三井を中心とする中小資本家及び大地主の聯合軍に挑撃せられて、また起つ能はざるの致命傷を受けた。桂の親元たる閥族は其愛兒の慘敗を見て大に憂懼し、多年の反感を捨てゝ大隈重信を起たしめ、一擧にして政友會の地盤を覆へし、寺內正毅をして其後を襲はしめんとしたが、事徒に齟齬し結果漸く意の如くならず、今や『平民』內閣の保護色を以て其豪族階級の色彩を糊塗し、政黨內閣の美名の下に資本家政府の本領を蹈襲しつゝある政友會の跋扈を如何ともなし能はざる窘窮の狀にある。之を要するに自由黨を前身とする政友會は、歷史的にも、實質的にも純然たる豪族階級、特權階級、支配階級の代表者であつて、私のいふ庶民階級とは全く沒交涉のものである。

九　酒屋及酒屋會議

更に溯つて郷士、豪農から發展した門閥富豪のことを考へるそれには前に述べた酒屋のことに就いて今少し具體的の研究をして見る必要がある。郷士、豪農が漸次其勢力を增大して、倉庫に貯藏米が堆積するやうになつた時、彼等は必ずや之を賣つて相當の利益を得、それを以て更に他の必需品を求めることを欲するに相違ない。處が封建時代に於いて領主にあらざる者が米を他國に輸出するといふことは容易ならざることである。其處で彼等は殆ど型の如く酒屋を始める。酒を造つて賣れば國內に十分の需要はあり事亦穩かである。戰國の末から近代にかけて酒屋は大概郷士、豪農の仕事であり、彼等は酒屋を手ほどきとして商業の味を覺え、天下泰平の後は呉服屋となり、兩替屋となり、果ては諸國諸大名の物產方とまでなつて巨萬の富を當

積した。今左る武士の土著して郷士、豪農となり、酒屋となり更に進んで立派な大商人となつたもの丶例をあげて讀者の參考に供する。

(一)三井家　三井家の祖先は近江源氏の佐々木六郎高久といふものである。六角滿角の次男で、享祿の頃は近江の鯰江に一城を築いて之に占據したが、間もなく鯰江城を捨て丶伊勢に入り、松坂に土著して郷士の生活を送つて居た。今の三井家が四ツ目の紋を用ふるのは此高久以來のことである。高久に二男二女があつて長男を高俊と云つた。高俊は元和年間伊勢の松坂に於いて酒屋を始め、土地の人から『越後殿の酒屋』と呼ばれた。三井家が商業生活に入つたのは、實に此高俊の酒屋が手ほどきであつた。江戸に出て日本橋駿河町に吳服店を開いたのは高俊の四男高利である。

(二)鴻池家　鴻池は尼子氏の臣、山中鹿之助幸盛の後である。幸盛の二男善右衛門幸元主家滅亡の後、攝津國伊丹に近き鴻池村に居をトして酒屋を創め、鴻池を以て其姓としたのが鴻池家の起りである。傳説によると幸元は日本に於ける清酒釀造法の發明者といふことになつて居る。

馬琴の『艶容女舞衣』義太夫で人の知つて居る『酒屋』の筋を見ると、三勝半七心中の事實に、何うやら武士の商賣としての酒屋の解釋が施されて居るやうである。時代が室町幕府の末に取つてあるのも面白い。半七の父はもと由緒正しき武士であつたが、落ぶれて木こりと成下り、樟の神木を伐つた功によつて室町將軍に召抱へられたが、木魂(こだま)の祟りで再び浪人をする。浪人をすると今度は酒屋を始める。之が小説の發端となつて居る。身分のある武士が民間に下ると大柢酒屋をしたといふことが、此條理によつても考へられる。諸樂屋の馬琴のことであるから此邊に何か出所があるのではないか。それは何うでもよいとして、自由黨の酒屋會議に至つては、酒屋が大部分鄕士もしくは豪農であり、閑却し難き地方の一勢力であるといふことを最も雄辯に說明して居る。

明治政府は初から酒屋に對して微税の仕方がきびしかつた。殊に明治十一年、西南戰爭後の增税として、清酒一石に對する造石税を一圓に引上げ、未だ二ケ年に滿たざるに明治十三年には早くも之を二圓に引上げようとしたのに對しては、元老院の中にすら其不當を鳴すものがあつた。けれども此增税案は人多數を以て元老院を通過し、愈々法律として施行せらるること丶なつたので、全國酒造業者の恐慌は甚しく、明治十四年には先づ高知の酒造業者約三百名が結束して政府に其減税を迫るあり、立志社の植木枝盛と兒島稔とは共總代の任を帶びて上京し、十

一月自由黨の創立大會に列席して七十八名の地方有志を取調べて見ると、其中に左の如き酒造業者を發見した。

福井縣南條郡武生有明町酒造業安達又三郎及び同縣足羽郡福井船寄下町酒造業市橋保身代理　松村才吉
島根縣安濃郡波根本村酒造業　小原鐵臣
茨城縣行方郡潮來村酒造業　磯山尚太郎

其處で植木、兒島の二人は早速之等の數人を結束して委員とし、檄文を發布して明治十五年五月を期し、大阪に酒屋會議を開催すべしと宣言した。政府は之を見て大に驚き發起人を捕へて禁獄に處し、翌年五月には大阪府知事に命じて絶對に集會を禁止し全國各府縣に訓示して嚴重に酒屋の動靜に注意せしむるなど迫害の手段を盡して之を禁壓せんとしたが、全國の酒造業者は頑として初志を飜さず、種々の方法を以て警察の眼をくぐり、集金期日までに大阪に會することを得たものが四十餘人の多きに上つた。

藩閥の財力に對抗する爲に、全國各地の鄕士、豪農を結束して起つた自由黨が、酒屋の勢力に著目し、其實際問題を提げて彼等の感情を激揚したことは餘程注意すべきの事實である。

十　ブルジョアジーの發展

酒屋において商賣の味を占めた鄕士、豪農は愈々都會に出で

て呉服屋藥種屋、油屋、兩替屋、思ひ〳〵に旗擧げをする。大阪の大商人なれば、諸大名の藏屋敷に出入して其物産方となり、銀行となつて大仕掛けの金儲けをする。江戸の大商人なれば各藩の留守居役と結託し、幕府の御用を請負ひ、株を買つて藏前の札差ともなる。町人の實力が一般武士の生活を支配し、諸國諸大名の咽喉を扼することとなつては、その事實が直に封建制度の潰裂を意味する。西洋の封建制度も都市の發達、町人階級の擡頭によつて崩壞を始め、佛蘭西革命に至つて商工業者の爲に最後の止めを刺された。日本の明治維新もヤハリそれと同じである。薩長は早くから外國貿易の影響を受け、農業國としてよりは寧ろ商業國として開けて居た。商業國たる薩長二藩は、金のことにかけて兎角分りが早く、夙に大阪、京都の大富豪を其掌中に丸め込み、金力と兵力とを併せ用ひて、幕府をひた押しに押つけた事情は西洋のブールジョアジーが佛蘭西革命を成し遂げたのと少しも變らない。薩長は佛蘭西のヂロンド黨であり、大阪は佛蘭西のマルセイユである。唯、西洋のブールジョアジーと我が町人階級との異る點は、西洋の社會的階級は多くの場合民種の相違から生じ、ブールジョアジー必ずしも舊勢力の淪落して形を變へたものとは見られぬ。然るに日本の町人階級は封建諸侯と其祖先を同じくし、血脈相通ずるものであ

つて、此點は前に述べた郷士、豪農の階級とても同樣である。此點からいふと佛蘭西革命は社會的階級の爭ひであつたが日本の明治維新は同一血族の間に於ける新舊勢力の爭ひであつた。之が西洋と日本と根本的に國情を異にする所である。

明治政府の手に、若し三井家を中心とする京阪富豪の財力がなかつたならば、錦旗は東京に進まなかつたのである。明治政府の最初の財務官たる由利公正の手に保管された國庫金は大部分大阪、京都、近江の商人が醵出したものであつた。之を要するに京阪の財力は薩長の兵力を動かし、薩長の兵力は京阪の財力を解放した。薩長と門閥富豪との斯くの如き親密の關係を保持すべく、藩閥の側に於いては井上馨が其役に備はり、富豪の側に於いては三野村利左衛門が此役に備はつた。

薩長藩閥と三井家とが同心一體となつて商工資本主義の新日本を建設にかゝつた時、燃ゆるが如き嫉妬の眼を以て之を睨んで居たものは土藩と肥藩とである。板垣退助が南海に雌臥して徐に天下の形勢を察し、忘れられたる郷士、豪農の勢力に着目して、胸中に畫策する所ありし時、大隈重信は明治政府にありて時に或は文治派に味方するが如く、時に或は武斷派に贊成するが如く、巧に其立場を韜晦して只管自家の勢力を扶植することに努め、三菱會社の岩崎彌太郎と聲息を通じて、藩閥の内訌に疲るゝの日を待つた。人は三井と三菱との爭ひを最近の出來事のやうにいふけれども、三井と三菱との鬪爭は明治の初年に於いて既に其火蓋を切つて居る。藩閥が三菱會社を壓倒する爲に設けた郵便蒸汽船會社の前身たる廻漕取扱所は實に三井八郎右衛門の手代、吹島四郎兵衛といふ人の創設したものであつた。吹島四郎兵衛は明治政府にありて三井家を代表する番頭の一人で、通商司權正の任にあつた。明治三年正月、廻漕取扱所が設置せられたのは、此人の建議に基くものである。然るに廻漕取扱所は其後組織を改めて郵便蒸汽船會社となり、三菱會社を壓倒すべき任務を帶びて起つたのであるから、三井對三菱の爭ひは、既に此時から始まつたと見てよい。而も此戰爭の發頭人は何と云つても肥藩の大隈重信である。大隈が其政府に於ける地位と職權とを利用して三菱會社を援護し、之に驚くべき特權を與へて暴富を致さしめた後、其財力を後援として藩閥を倒さんと企てたのは、取りも直さず、三菱の財力を以て、三井の財力に突撃せんとしたものであつて、明治大正のの政界を一貫する三井對三菱の爭ひは此時から始まつて居る。

十一　三井對三菱の白熱戰

明治十四年、板垣の自由黨と大隈の改進黨とは相前後して藩閥攻撃の陣容を整へたが、未だ其當面の敵に對して砲火を交へ

ざるに先づ同志打ちを始めた。當年自由黨が、大隈と三菱とを攻撃し、僞黨撲滅、海坊主退治の絶叫に津々浦々を震撼せしめたのは自由黨の後身たる政友會が大正の政變に三井の尻押しで三菱の勢力を中心とする桂及同志會を攻撃して完膚なからしめた事と相對比して、考ふべきの事實である。

自由黨が全力をあげて三菱を攻撃する時、三井はなほ閥族と維新以來の提携を續けて明治二十四年に至つたが、此時閥族との腐れ縁による財政の紊亂は殆ど其極に達し、井上馨は一代の俊傑中上川彦次郎を推擧して之が整理に當らしめたが、中上川は單に其財政を整理するのみに止まらず、三井家の爲に進んで閥族との惡因縁を絶つことに努め、其推薦者たる井上が喫驚狼狽する間に、疾風迅雷の勢を以て二三長州の有力者に赤耻をかゝせた。井上も中上川にはホト／＼手を燒いたものと見え、其後は中上川を三井から追出さうとして氣を揉んだが、之はまた却々思ふやうに行かなかつた。中上川は思ひの儘に三井を改革して明治三十四年十月腎臟炎で死んだが、中上川から手嚴しくいため付けられた閥族の恨みは三井家の上にかゝり、明治三十三年四月には秋山定輔の『二六新報』が突如として三井攻撃の火蓋を切り、伊藤と井上とがとぼけた顏をして其仲裁役に立つて居る。之で以て見ても三井家と閥族との縁の薄くなつた事情は分る。

三菱の方は彌太郎の死後、彌之助が謹愼して政治には一切關はらぬやうな顏をして居たが、此人實は決して政治が嫌ひでなかつた。(故鶴原定吉氏直話)何うかして大隈、伊藤の二雄を聯立させて見度いといふ理想を持つて居た。といふのは、彌太郎は藩閥攻撃の資金を出したり、馬場辰猪の一行を全國に遊説させたりして、藩閥と仇敵の關係を作つて居たけれども、明治十八年以後、彌之助は伊藤博文に接近して、一切の蟠りを去り他の閥族とも漸次親善な關係に進んで居たので、何うか一度大隈と伊藤とを聯立させて日本の國政を料理して見度いといふ理想を持つて居た。伊藤と親善な關係にあつた三菱が伊藤の率ゆる政友會に接近して歩を運ぶことの出來たのは當然である。卽ち自由黨の歴史から云へば相容れざる三菱と政友會とは、伊藤を中心として相接近し、第一次西園寺内閣の時には三菱の女婿たる加藤高明が外務大臣として入閣し得るほど緩和された狀態にあつた。處が西園寺内閣が三菱の利害を顧慮せずして施行した鐵道國有政策は、明治十八年以來、猫の如く溫順を裝ふて來た三菱をして、俄然彌太郎時代の野性に立歸らしめた。加藤高明の辭職豐川良平を黑幕とする戊申俱樂部(三菱系統の實業家代議士四十名を集めた政社)の活躍、仙石貢、片岡直溫等の運動

を始めとして所謂三菱派の暗中飛躍は刻々猛烈となり、第一次西園寺内閣は明治四十一年七月遂に無限の恨みを呑んで閥族の毒殺する所となつた。政友會と三菱とが鐵道國有問題で睽離した時は、三井が中上川の改革以來、官僚と兎角面白からぬ時であつた。三井と政友會との提携は自然の勢であつた。三井が政友會に一歩接近する時は、三菱が官僚に一歩接近する時でなければならぬ。社會主義者不取締の理由を以て西園寺内閣を毒殺した桂内閣は明治四十一年から四年の命脈を保つたけれども、有史以來の大不祥事件に遭遇して人心を失ひ、明治四十四年八月申譯的に内閣を政友會に讓渡したが、大正元年、再び之を毒殺して、政權を壟斷せんと企つるに及び、隱忍に隱忍を重ねた政友會は憤然として蹶起した。情意投合の絆は切つて放たれた。憲政擁護閥族打破の絶叫は交詢社から起つて全國に響應し、右に金權政治を提げ左に探偵政治を驅して權勢一代を風靡した巨頭政治家も、一敗地に塗れてまた起つ能はず、群衆熱罵の裡に悶死したが、三井黨たる政友會と、三菱黨たる憲政會との爭ひは其後一政變を經る毎に白熱し來り、今日では其色彩の明瞭にして、標榜の露骨なる、殆ど何等の說明を加ふるを要せず、宛として蘇我氏對物部氏、源氏對平氏、本補地頭對新補地頭の爭ひを眼前に見る心地がする。

十二　社會主義及勞働運動

日本に純粹の民衆運動なく、社會運動なく偶々民衆運動らしく社會運動らしく、見ゆるものも仔細に之を觀察する時は同一血族の間に於ける新舊勢力の爭ひに過ぎざることはこれ以上に說明を要せぬ。外國に於いては多く社會の階級的利害に立脚する政黨政派の爭ひも、日本に於いてはヤハリ、同一血族の間に於ける新舊勢力の確執であつて、庶民階級若しくは勞働階級の之に與らざる依然として豪族私鬪の昔と異りぬ。

かゝる國情の下に於いて、部曲、家部の子孫である大多數の庶民階級に、政治的自覺を與へ、日本に眞の社會運動を呼び起さうとして居るものは社會主義者である。何故に曾て覺めたことのない、部曲、家部の子孫を呼び覺さなければならぬか。果してその必要があるか何うかの問題は別として、(解放七月號)先づ、二千六百年の從屬生活に於いて、曾て一度びも覺めたことのない賤民の子孫が、果して覺め得るか、否かといふことに就いて考へて見る必要がある。此疑問に對して私は原則として覺め得るといふことを明言する。西洋に於いても婦人が其從屬關係から覺めつゝあることを思へば、賤民の子孫とて覺め得ない道理はない。必ず覺める。唯、それに多くの困難を感ずるといふまでである。

但し玆に一つ勞働者の自覺を速かならしむべき有力な事情がある。それは資本主義が、身分、職業、學問、見識と云ふやうなものに顧慮せず、苟も經濟上の戰爭に於いて一敗地に塗れた落伍者は、何でもかでも片端から貧乏といふ鎔爐に入れて煮碎いて了ふ。封建時代には、身分のある者は百姓に落ぶれても、町人に成下つても、又木こり山かつの生活をしても、周圍がチヤンと區別して呉れる。處が資本主義の現代にありては學者であらうが、文章家であらうが、血統の高い人であらうが、地位の重い人であらうがそんなことは一向に構はない。苟も貧乏をしたが最後、勞働者の群に伍して其口を糊せねばならぬ。即ち學問あり、見識あるものの落ぶれが精神上、若しくは血統上の一切の誇りを捨て赤裸々の勞働者として立つことになる。其結果として知らず識らずの間に宣傳が行はれ、水呑百姓としては、何うしても覺醒しなかつた賤民の子孫も、勞働階級庶民階級としては案外に早く覺醒するであらうと思ふ。

日本の社會主義者を日清戰爭以前と、日清戰爭以後とに分けて考へるに、日清戰爭以前の社會主義者若しくは社會主義の研究者には名士が多く、日清戰爭以後の社會主義者若しくは社會主義の研究者には書生が多い。名士の社會主義は即ち士族の社會主義である。豪族の社會主義である。豪族の社會主義である佛蘭西の民權思想や、英吉利の憲法思想と同じ意味に於いて社會主義が唱道され、研究された。日清戰爭以後の社會主義者とは、其素性を洗へば根からの平民ではない。其多くは士族であり、士族の子であらう。幸德秋水など殊に士族の臭味が多かつた。堺利彦も武士の子であるけれども日清戰爭以後の社會主義者は名士としての高い立場から之を唱道せず、吾等も亦勞働者なり、吾等の生活は勞働者と利害相通ずといふ自覺の上に立つて之を唱道した。此點に於いて書生の社會主義には重大な意義がある。

今は社會主義の運動も、勞働者の團結も公然許されて居ないから、警察の嚴しい取締りをくゞつて社會に現はれる種々の運動が、比較的大きいものに見え、勞働者も急轉直下の勢ひで自覺して居るやうに思はれるが、さて社會主義の運動が實際に認められ、勞働者の團結が公に許されることとなつたら、先へ走るものはヤハリ昔の特權階級の血をうけたものか、然らざれば特權階級の教育を受けたもので、根からの勞働者、根からの庶民階級は容易に其後について走れぬといふことになりはせぬか。それを思へば今の社會主義取締りは、社會主義を下層へ下層へと宣傳させる一つの有力な働きとなつて居るとも見られる。

（大正八、七、一）

社會運動に携はつた人々の追想記

田中貢太郎

序言

年少十三、『自由は勝利よ、官權亡滅』と云ふ事を口にして、明治二十五年の選擧大干渉の日、鋤の柄の棍棒を手にして、村の自由黨員の許を見廻はつた私は、青年結社の夜學會では、服部某譯のルーソーの民約論や、ミルの代議政體論、自由の理、ギゾーの文明史、佛蘭西革命史などの話を聞かされて、自由主義の空氣の中に浸つてゐたと云ふ所から、政治運動に興味を持つて居り、上京してからも、同郷の先輩として、奥宮健之、田岡嶺雲の諸氏に接近したものゝ、閑雲野鶴、和平を愛する性情の爲めに、社會主義の何物たるかを知らないで過したにも係らず當時の印象を基礎とし、獨立評論などを參考して、社會運動にたづさはつた人々の話を書かうとするのだから、その正鵠を得ないのは、もとよりである。――

樽井藤吉

板垣によつて提唱せられた自由主義が、日本國民を政治的に覺醒して、全國に政治運動の勃興した際、九州の一角、肥前の島原に『東洋社會黨』と云ふのが組織せられた。それは明治十五年五月二十九日、第一回の會合を同地の江東寺と云ふのに催したが、來り會する者數百人であつた。その綱領と云ふ物を見ると。

第一條　我黨は道徳を以て實行の規準とす

第二條　我黨は平等を主義とす

第三條　我黨は社會公衆の最大福利を以て目的とす

と云つてゐる。當時はアレキサレダー第二世を斃した兇暴な虚無黨の噂が耳に新なる時で、その虚無黨は社會黨の一流派であるとしてゐる政府では、直にそれを禁止した爲めに、その活動を見るに及ばなかつたが、史家は之を日本に於ける社會運動の先驅としてゐる。

同黨は樽井藤吉の思想から萌芽したものであつた。それに社

會黨と云ふ名目を用ゐたのは、樽井が長崎で洋行帰りの客から、貴下の思想は、歐洲の社會主義と云ふ物に暗合してゐると云はれたから、はじめてその名を冠したと云はれてゐる。樽井は大和の人で、當時三十三四歳であつた。もと材木商として身を起した者であつたが、ある動機から社會問題を考へるやうになつた。山路愛山はそれを説明して、「氏は一家を經營するは天下を經營するに如かず、一身を以て善を爲すは國家をして善を爲さしむるに如かず、個人を中心として別々に貨財を運用するは國家をして貨財を集中し運用せしむるに如かずとし、所謂社會政策の如きものを案出し」と云ひ、又、樽井の思想は、一國を擧げて家人父子の如くならしめんとすると云ふ漢學思想から案出するは容易であるが、「而も樽井氏の思想は全く獨創にして書齋の臭味なきに似たり。されば是を日本に於ける自發の社會主義或は社會政策と云ふも亦可なり」と云つてゐるが、獨創自發と云ふ事は、どうであらう。マルクス、エンゲルスが共産黨の宣言を合作して、所謂ゆる科學的社會主義の主張を公にしたのは、弘化四年である。維新の前後、各地に設立した英語學校の教科書にと船載した物の中に、それに類似の書籍の交つてゐなかつたと云ふ事を、何人か斷言する事が出來やう。

創造模倣の考證は別として、とにかく、彼は一種の天才であつた。彼は岩倉公に面會して己の抱いてゐる新説を進めた事もある。又、その理想を實現せんが爲めに、植民に適する無人島を尋ねて、朝鮮の多島海を彷徨した事もある。そして最後に世間から注目せられた事は、明治二十五年の選擧干渉に際して大和の土豪土倉庄三郎の地盤から代議士に當選した事である。その時彼は雑誌太陽に『國有鐵道論』と云ふのを掲げて、鐵道は國家の事業でなければならぬと云ふ事を論じたが、何人も彼の説に耳を傾ける者がなく、一生涯に贏ち得たのは僅に理想家と云ふ名に過ぎなかつた。

奥宮健之

明治四十二三年頃、奥宮は小石川水道端町の小さな家に住んでゐた。其所には離れになつた小さな書齋があつて、縁先に五六羽の金絲雀を飼つた籠が据ゑてあつた。奥宮はその書齋で萬國社會黨運動史を譯してゐる時があつた。安政三年十一月生れの、その時五十二三歳になる肥滿つて背の高い體をゆつたりと構へて座つてゐたが、額の寛い、頬の肉付の豐な顔には、心持ち眦のさがつた茶色の眼が、やはらかな光を放つてゐた。右か左かの頸元に瘰癧の痕らしい物もあつた。奥宮は後に澁谷の方へ引越して晩年を其所で送つた。

奥宮は高知縣土佐郡布師田村の人で、その父造齋は佐藤一齋の高弟で土佐第一流の陽明學者であつた。土佐の立志社では、尾崎行雄、犬養毅、大石正巳、元田肇、栗原亮一等と机を並べてゐた。明治十四年には、加藤高明、小川鉀吉、江南哲夫の三人と三菱會社へ入社したが、その年の九月、開拓使官有物拂下事件が起り、國會開設の詔勅が出て、それに續いて自由黨が組織せられたので、三菱を退いてそれに加盟した。

奥宮は學問識見が群を拔いてゐた。彼は自由黨中の少壯論客として重ぜられた。十五年には馬場辰猪、大石正巳、西村玄道、佐伯剛平等と東京府下に『國友會』と云ふのを組織して、盛んに民權思想の鼓吹に力めた。政府では民權運動の日に熾烈に赴くのを恐れて、集會條例を設けて志士を壓迫した。演説の禁止、禁足、拘引、禁錮、退去の災厄に罹る者が陸續として相踵いだ。奥宮も淺草井生村樓の演説で府下に於ける演説權を奪はれ、講談師になつて講談に托して政府攻撃をやつた爲めに、一箇月半の輕禁錮に處せられた。奥宮の讀書が社會主義の書籍にまで及んでゐたかゐないかは分らないが、當時の思想は社會主義に傾いてゐたと思はれる事がある。

その時、東京市内に馬車鐵道が敷設になつて、それが爲めに業を失つた車夫の一團が會社を怨望してゐた。奥宮は駿河臺紅梅町にゐた『チビ熊』本名を三浦龜吉と云ふ車夫の取締と相談して、車夫を神田の明神山へ集めた。車夫の數は三百餘名あつた。奥宮は腹掛の上に紋付羽織を着、松樹の上にあがつて、鐵道馬車廢止運動に關する演説をやり、その命名を『車界黨』と云ふ事にして、いよいよ運動に取りかゝらうにしてゐる内に、政府の組織する所となつて、四箇月餘を石川島の監獄に送る事となり、車界黨の運動もその儘になつてしまつた。

奥宮は後名古屋に行つて、政府顛覆の戯曲を描いた爲めに、十八年一月に捕縛せられ、名古屋監獄から小菅集治監、宮城監獄、最後に北海道の樺戸監獄に服役してゐる内に、二十九年七月になつて特赦せられたが、十年の監獄生活中に、世間は一變してゐた。錚々たる當年の民權家も手の出しやうがなく、僅に明治三十九年の電車値上問題の際、東京府下で勞働黨をつくりかけてゐたが、これも何時の間にか立ち消えて、越へて四十五年一月二十四日、落寞たるその一生を終つた。

德富蘇峰

德富蘇峰を社會運動者の中に入れる事は、今日から見れば異様にも思はれるが、併し、明治二十年二月を以て第一號を發刊した『國民の友』は、當時に於ける唯一の社會主義的思想の宣

傳者であつた。伊藤博文が獨逸から歸つて政府に入ると、極端た歐風模倣を採用して、從來の平民的簡易主義に對する貴族的繁縟主義を、民主的自治思想に對する君主的干渉主義を斷した爲めに、二個の反動が起つた。一つは純然たる保守的反動で、これは二十一年四月になつて『日本人』を發刊した政教社一派の唱へた國粹主義で、他の一つの反對が、即ち德富の率ゐた民友社一派の唱へる精神的基督教主義であつた。

德富蘇峯は、文久三年肥後國葦北郡水俣村に生れた。楠井小楠の高弟德富洪水の嫡男である。彼は後に平民主義を捨てゝ帝國主義の宣傳に遷り、一たびは文部省勅任參事官に任ぜられ、四十四年には貴族院議員の勅選の榮を贏ち得たものゝ、前後二回民衆の怒を買つて、自己所有の國民新聞社を襲撃せられたのは氣の毒の感もする。當年の彼は雜誌に據つて社會主義を傳播するばかりでなく、カーペンターの『文明の弊及び救治策』や『現時之社會主義』などを發行した。西川光二郎は『現時之社會主義』に據つて、はじめて社會主義の何物たるかを知つたと云はれてゐる。

民友社一派の者で、社會運動に從事した者は、山路愛山と國木田獨歩であつた。山路は明治三十九年の電車値上問題の時、國家社會黨と云ふ者を組織して、値上反對を叫んでゐたが、何時の間にか屛息し、國木田は矢野文雄の股肱となつて、矢野が『新社會』を刊行して社會問題講究會を起すと、その幹事になつたが、その會もさしたる光を見せずに終つてしまつた。

中江兆民

中江兆民は自由主義者で社會主義者ではなかつた。山路愛山の云ふ所に據ると、彼は人に向つても『余は自由主義の日本に行はれんが爲めに些か微力を盡しつゝあり。社會主義の如きは自由主義の後に來るべき問題なり。余は此故に未だ社會主義に就て學ぶ所なし』と云つてゐたらしいが、その周圍には共產主義の雰圍氣があつた。

中江は高知市新町の人で、弘化四年の生れであつた。十九歲の時藩の留學生となつて長崎で佛蘭西語を學び、明治四年二十五歲で佛蘭西に行つた。佛蘭西ではナポレオン三世の失敗した際で、ガムベッタ、チエールなど云ふ共和黨の名士が、鼎沸した政界に立つてゐた。西園寺公望、光妙寺三郎などと彼の地で交を訂した。そして、明治七年になつて歸朝して元老院書記官となつたが、幹事陸奥宗光と合はないので、直ぐ辭職して在野の人となり、番町に佛學塾を起して、政治法律歷史哲學を教へ、『政理叢談』を發行し、ルーソーの民約論などを飜譯した。自

由主義の思想の量は、この佛蘭西學者に負ふ所がすくなくなかつた。

その中に西園寺公望の『東洋自由新聞』が起り、自由黨が起り、板垣の『自由新聞』が起つた。中江は皆これに與つて、熾んに自由平等の說を唱へ、時の專擅政府を攻擊した。そして、明治二十年、井上馨が條約改正に失敗して、全國の志士が名を三大事件の建白に托し、爆彈を抱いて東京に集まつて來たので、政府では狼狽して、保安條例を發布して、志士を東京以外三里の地に逐ふた。中江も逐客の一人であつた。其所で彼は大阪に行つて、栗原亮一等と東雲新聞を起して、自らそれに主筆となつてゐたが、二十二年の春、憲法發布があつて、保安條例の退去命令が解除せられ、政治運動の中心が又東京に移り、後藤象二郎がその機に乘じて大同團結を唱へ、雜誌『政論』を發行する事になると、中江も呼ばれて上京したが、後藤が大同團結を踏臺にして入閣した爲めに、大同團結は解體し、在野黨は潰裂した。彼は自由黨の再興を策して、自由新聞、立憲自由新聞に主筆となつてゐた。

やがて國會が開設せられた。彼は大阪の第四區から選擧せられて代議士となつたが、在野各派の間を往來して民黨の陣容を整へ、政府に肉薄して、政府提出の豫算案から八百萬圓を削減しようとする瀨戸際になつて、自由黨中の土佐派が裏切した爲めに、民黨は潰走した。中江は『アルコール中毒の爲め、評決の數に加はり兼ね候に付辭職仕候』と云ふ辭表を呈出して、議員を罷め、『經綸雜誌』を起し、『民權新聞』を發行して、政府及び吏黨を攻擊すると共に、犬猿の間にあつた自由黨と改進黨との間を緩和さしたので、政府では大に恐れをなした。その結果大隈の樞密官辭任となり、第二議會の解散となり、明治二十五年の選擧大干涉となつた。

選擧大干涉の年には、北門新報に聘せられて小樽に行つてゐたが、遂に筆を投じて實業界の人となり、札幌に紙店を開き、それから毛武鐵道、河越鐵道、常野鐵道、京都パノラマ、中央清潔會社と云ふやうに經營したが、皆失敗に終つた。

明治三十一年に松隈內閣が倒れて、伊藤內閣が成立すると、自由黨と憲政黨とは、多年の主義主張を一擲して、多年の政敵たる伊藤公を總裁に仰いで政友會を組織した。常野鐵道經營中の中江は赫怒した。彼は政界を掃淸する爲めに、同志を糾合して『國民黨』と云ふのを組織して、機關雜誌『百零一』を發行した。三十三年には每夕新聞の主筆となり、國民同盟會が起るとそれが爲めに奔走して、醜怪なる政友會から破壞し、順を追ふて政界を革新しようとしたが、その內に病氣となつた。

病氣は食道癌であつた。有名な『一年有半』はその病間になつた物である。死亡したのは翌三十四年十二月十三日、年は五十五歳であつた。この畏敬すべき思想家の門下から、小島龍太郎、酒井雄三郎、幸徳秋水の社會主義者が出た。

幸徳秋水の事は編輯者の注意によつて全部削除することにしたが、小島は佛國學者で西園寺侯の友人であつた。西園寺が佛蘭西から歸朝した際、彼の地から持つて來た社會主義及び社會問題の書を、小島に與へたので、小島はこれによつて社會主義に關する智識を得たと云ふ者がある。もと農商務省の書記官をやり、轉じて衆議院の書記官となつた事もあるが、後には赤坂に『花月』と云ふ待合を出した。

酒井は佛蘭西に遊學してゐた者で、歐洲社會黨の運動を折々『國民之友』に通信した。この酒井と小島とは、明治三十年に起つた『社會問題研究會』の有志として、酒井はサン・シモンをはじめ、佛國社會主義者の名を口にし、小島はラザールの社會主義とマルクスの社會主義との相違などを話して聞かした。

大井憲太郎

大井憲太郎に私がはじめて逢つたのは、奥宮健之の水道端の家であつた。下顎の短い、蛙のやうな口元をした老人で、鋭く光る眼に人を威壓する所があつた。なんでも梅雨の季節で、暑いむせむせする日であつたに係はらず、大井は白い毛絲の股引を履いてゐたのが私の印象に殘つてゐる。煙草を黃金の煙管で喫んでゐた。

大井は大阪事件で世間的に名がある。それは明治十八年、大井憲太郎、磯山清兵衞、小林樟雄などが主動者となつて、朝鮮政府を顚覆し、金玉均、朴泳孝等の獨立黨に政權を與へて、朝鮮から清國の勢力を一掃すると共に、一方日清間の葛藤を生起して、政府をして國民輿論の渦卷に投じて自滅せしめ、一擧にして自由主義を行はふと云ふのにあつたが、事破れて多數の同志と共に下つた事件であつた。

大井は豐前國宇佐郡馬城山下に住む豪家に生れた者で、本姓は高並であつたが、大阪に出て大井卜新と義兄弟となつた爲めに、大井姓に更めたのであつた。少年の時長崎で蘭學を修めた。幕府の大砲隊に加はり、大阪舍密局の助手となり、又陸軍造兵司の譯官ともなつたが、皆直ぐ罷めた。板垣後藤等が民選議院設立の運動をはじめると、それに聲援した。加藤弘之が議院尚早說を發表すると、馬城臺二郎の名で之を反駁したが、義理極めて明快であつた爲めに世間から注目せられた。明治八年になつて、元老院の少書記に任ぜられたが、間もなく辭任して代言

人となり、傍ら自由主義の鼓吹に勤め、隱然關左自由黨の首領を以て目せられてゐた。所で大阪事件などがあつた爲めに、從來の同志との間に思想感情の疎隔を來たし、從つて明治二十四年に起つた自由黨に飽き足らないので、別に『東洋自由黨』を組織したが、それは勞働者保護を標榜した物であつた。そしてその實行機關として、『日本勞働協會』『普通選擧期成同盟會』が創立せられた。この運動は根柢のある社會主義の原理に立脚した運動ではなかつたが、勞働問題を標榜して立つた政黨の嚆矢であらう。

大井は急進的革命家の色彩を帶びた煽動政治家であつた。政府では大井を一敵國として、あらゆる迫害を加へた。それが爲めに大井は數回代議士の候補に立つたが、一回も當選する事が出來なかつた。爾後大井は蹉跌に蹉跌を重ねて、植民事業などに手を出したが、皆失敗に終つた。そして、明治三十二年六月になつて、大阪で『大日本勞働協會』と云ふのを起して、勞働問題を提げて立ち、『大阪週報』と云ふ機關雜誌も發行して、次第に成績も好くなつたので、東京方面にもその手を延ばす事にして、三十四年上京したが、その思想に於て東京方面の勞働運動に非常に後れてゐた。萬朝報の記者久津見蕨村が參謀の一人となつて、大に奔走したにも係はらず、幸徳秋水などから、働本家の爲めに調停の下地を作るものであるなどと嘲けられ、その運動も挫折してしまつた。

『社會主義研究會』の人々

思想の遊戲に過ぎなかつた社會主義運動は、日清戰爭後、血の滲み出た生きた社會主義運動となつた。明治三十年になつて『社會問題研究會』と云ふのが起つた。會員名簿には二百名の紳士の名があつて、月一回新橋新肴町の開化亭に集會を開いたが、毎會の出席者は三十名ばかりであつた。品川彌次郎、田口卯吉、和田垣謙三、松村介石、陸實、三宅雄次郎などは、出席はしなかつたが、名簿の中にその名があつた。安岡雄吉、元田作之進、尺秀三郎、根本正、人見一太郎、田島錦治、佐治實然石川安次郎、中井喜太郎、岩本善治、長田偶得、高橋五郎、宮崎八百吉なども出席した。幹事は中村太八郎、樽井藤吉、西村玄道の三人であつた。幸徳秋水は石川安次郎の紹介で入會した者であつた。會員中で社會主義に就いて相應な智識を持つてゐた者は、城泉太郎、吉川義靜、小島龍太郎、酒井雄三郎、佐久間貞一、片山潛の數人であつた。

その中で、城泉太郎は、中村敬宇の同人社に教師をしてゐた事もあり、地租輕減論の起つた頃には、土地國有論を唱へたと

云ふ歴史を持つてゐた。彼は中江兆民の友人で、築地在住の宣教師ガルスト等とも親交があつた。

吉田義静は熊本の人であつた。島田重禮の塾長を勤めてゐた事もある。藩主細川護久に從うて佛蘭西に行き、八年間彼の地にあつて社會主義の書なども可成り讀んでゐた。歸朝後は外國語學校及び高等學校に佛語を敎へてゐた。

佐久間貞一は、秀英舍の舍主であつた。幕臣の家に生れて俠氣に富んでゐた。肺病で死期がはかられないのにも係はらず、職工の狀態改良に意を注いで奔走してゐた。明治二十四年、陸奧宗光が職工條例制定の可否を全國の商業會議所に諮ふた時、商業會議所では何人も眞面目にその問題を考へる者はなかつたが、彼一人は熱心にその必要を論じたと云はれてゐる。

社會問題研究會は、單に研究的の會合で、巷へ出るには至らなかつたが、一世の人心を刺激した。『協同親和會』『勞働者組合期成同盟』『普通選擧期成同盟』など云ふ諸會がその雰圍氣の中に生れた。協同親和會は、山口彈正、一木齋太郎が指揮し、樽井藤吉、稻垣示が背後に控へてゐた。その會員には壯士が多かつた。これは足尾の鑛毒問題で風雲を卷き起したが、會員中に古河の賄賂を受けたと云ふ忌はしき疑惑を生じて、それが爲めに事業も中途で破れた。

勞働者組合期成同盟會は、高野房太郎と片山潜の經營する所で、佐久間貞一の援助の下に成立したものである。高野は高等工業學校の前身の職業學校の役員であつた。高野の奔走で造幣局と鐵道局との勞働者で鐵工組合が成立した。高野はその上に勞働者の爲めに共同販賣店を設け、又勞働者救濟の爲めに共同の基金を作る必要から、職工義友會を組織したが、不節制な勞働者の態度は、高野の豫期に反するばかりで、遂に失敗に終つてしまつた。

普通選擧期成同盟會は、河野廣中、樽井藤吉、稻垣示、新井章吾、中村太八郎、會澤與堅、石川安次郎などが主なる會員であつた。

片山潜

マスターオヴアーツの學位を有する片山潜は、今、亞米利加で廚夫を職業にして勞働をやる傍ら主義の雜誌を出してゐる。生れは美作で、もと矢張り亞米利加で苦學をした者である。從つて思想は堅實で忍耐力に富んでゐる。社會問題研究會成立の前年あたり歸朝して、都市改良問題を唱へ、その一方で勞働問題に携はつてゐた。彼はその主義傾向から、はじめは政治的の運動を避けてゐたが、何時の間にか普通選擧同盟會にも加はる

うになつた。

片山はその頃から週刊平民新聞の起る頃まで、安部磯雄と肩を並べて、日本社會主義者の巨頭とせられてゐた。社會問題研究會は、一年餘で幹事の中村太八郎が郷里の選擧に關して獄に下り、西村玄道が病死し、樽井藤吉が歸國した爲めに、自づから消滅の姿となつてゐたのを、三十二年の春になつてそれを換骨脫胎して、『社會主義研究會』と云ふのにした。會員は三十人ばかり、芝三田四國町のユニテリアン教會堂を借りて、其所を集會所に當てた。片山はじめ、佐治實然、中村太八郎、幸德秋水などは、舊會員の踏み止まつた者で、新に加はつた者では、安部磯雄、村井知至、豊崎善之助、杉村廣太郎、川上淸、木下尙江などがあつた。安部村井の二人は、當時ユニテリアンの說教者と云ふ緣故から加入した者である。

其所で社會主義研究會は、安部を會長、川上を幹事、村井を書記と云ふ事にして、集會を續けてゐたが、一年の後には、事務所を片山の家へ移して、會長は安部をその儘にし、幹事には片山が代つて、世に出る用意をはじめた。

社會問題研究會の起つた頃から、社會問題は實際的になつて、其所此所で勞働者の小同盟罷工が起つてゐたが、その年、即ち三十三年の春になつて、二六新報社の主催で向島で催ふした勞働者懇親會で、群衆と警官との間に紛擾が生じ、木の端のやうに思はてゐた勞働者の力と云ふ物が認られやうになつた。これは普通選擧期成同盟會の書記で二六新聞の記者になつてゐる小野瀨不二夫と、片山とがやつた仕事であつた。西川光二郎はその當時片山の周圍に集まつて來た書生の一人であつた。

三十四年の五月、社會主義研究會は勢に乘じて『社會民主黨組織』の屆出をした。署名者は、安部磯雄、片山潛、木下尙江、川上淸、幸德秋水、西川光二郎の六人であつたが、それは組織發表と共に禁止せられた。

社會主義研究會は『社會主義協會』と名を更へて、屈せずに主義の傳道に力めた。矢張り片山の家が事務所であつた。安部は他に業務を持つてゐるから、實際の會務は殆んど片山が背負つてゐた。片山の傍で援ける者は、西川で、幸德、川上、木下などは、外から之を援けた。堺利彥と斯波貞吉とが、その時前後して入會した。

堺も斯波も萬朝報の記者であつた。其所で幸德、川上の二人を合はすと萬朝報の記者が四人となつた。萬朝報が社會主義の鼓吹に全力をあげるの觀のあつたのも不思議でなかつた。萬朝報の他に社會問題勞働問題を絕叫したのは例の二六新聞であつた。社會主義の光焰は天に冲した。大井憲太郎の『日本勞働

會』板垣退助の『社會改良會』、矢野文雄の『社會問題講究會』などがそれに連れて起つた。

やがて明治三十六年が來た。大阪で內國勸業博覽會が開設せられた。社會主義協會では大阪に大會を開く事にして、安部、片山、木下の三人が出席した。その前後、片山、西川、松崎源吉の三人で九州の遊說をやつた事があつたが、收入が旅費に足りなかつた。西川と松崎とは、その損失を片山に負擔させやうとしたが、片山はそれを承知せずに三人で等分に分擔する事にした。これが爲めに、西川は片山から離れて二六新聞へ入社した。片山の失脚する日がやがて來た。

安部磯雄

朝に合して夕に離れ、離合集散常ならざるは黨人の常態だ。安部磯雄もその例に漏れなかつた。安部が社會主義協會の會長となつた時は、村井知至と共に洋行歸りの新智識として持ちあげられ、堺の如きも、『將來社會黨が有力な政黨となるの日には、その首領となる者は必らず安部氏だ』と人にも話してゐた。

實際安部は、頭腦が透明で、聽者を醉はしめる辯舌と、人を動かす文章があり、それに物を包容する襟度もあつた。彼が人望の中心になるのは當然の事であつたが、その態度が學究的であり、又基督教の教育を受けた紳士であるが爲めに、實行の勇氣に缺ける所があつて、血氣に燃える靑年に飽き足らなく思はれて來た。そうして、平民社內で、堺と延岡女史、西川と松岡未亡人、この二組の者が自由婚姻した時、『社會黨の首領が私通をしてはいかん』などと批評したが爲めに、遂に同主義者から雜誌『火鞭』の誌上で人身攻擊をせられるやうになつて、すつかりその人望も無くなつた。安部は福岡の產である。

堺利彦

嘗て同志と共に、片山潛を社會主義協會より追ふた堺利彦は、今度『賣文社』から部下の爲めに追はれた。已に出てた者は已に歸るとでも云はふか。私が堺を知つたのは、數年前馬場孤蝶が代議士の候補者になつた時、社會黨で推薦廣告を出したから、一杯機嫌でねぢこみに行つてからだ。包容力あり機略あつて、人に長たる資質を供へてゐる。豐前小倉の人で、第一高等學校の出身である。少年の日、白河鯉洋等と小倉三才子と云はれた一人である。大阪で小學校の教師をした事がある。野口男三郎がその時の生徒の一人であるらしい。新聞記者として、はじめに『福岡日々』に入社し、それから萬朝報に入社したものだ。

赤旗事件後は、賣文社を經營して、その傍ら雜誌『へちまの花』を出してゐたが、それを『新社會』と改題して、次第に社會主義の色彩を強めた。そして最近では、山川均と雜誌『社會主義研究』を出し、主義に關する著書を出し、貝塚澁六の名で各雜誌に隨筆を書いてゐる。

堺は將來の社會黨の首領であらう。

西川光二郎

西川光二郎は、社會主義を斷念したのか、それとも韜晦して機を見てゐるのか分らないが、今は健康法だとか斷食法だとか云ふやうな著書をやつて、社會主義に對しては狐の落ちたやうな風があるが、當年の同志の中でも、西川程激烈な男はなかつた。

淡路の人で、早稻田専門學校を出てゐる。もと内村鑑三の『東京獨立雜誌』の編輯に從事してゐたが、その雜誌が廢刊になると、國光社の編輯員櫻井一義の助手となり、それから、普通選擧期成同盟會に入り、片山を知るに及んで社會主義研究會員の人となつた。不撓不屈の精神に富んだ男で、頭腦は粗大であつたが、能辯で煽動家たるに適してゐた。

彼は片山と離れて二六新聞に入社する間もなく、『平民新聞』が發刊になつたので、社會主義協會の幹部を代表して編輯局員の人となつたが、同社は滿二年で潰滅し、思想感情に溝渠の出來合つた同志は、思ひ思ひの旗幟を立てて分裂した。彼は山口孤劍等と雜誌『光』を出して、マルクス派の社會主義・運動を續けやうとした。

明治三十九年二月、西川、幸德、片山の他に加藤時次郎、田添鐵次等が『日本社會黨』を組織した。當時『東京市街鐵道會社』『東京鐵道會社』『東京電氣鐵道會社』の三會社が合併して、三錢均一の電車賃を四錢均一にしやうとした。西川は田川大吉郎、木下尚江、山口孤劍、石川三四郎をはじめ、國家社會黨の山路愛山等と合同して、値上反對の市民大會を開き、二回目の大會の時、市會に押しかけて騷擾したり、電車に投石した爲めに兇徒嘯集罪で拘引せられた。

四十年二月、平民社が再興になつて『日刊平民新聞』が發刊せられた。その月、足尾銅山に暴動が起つて、南助松などの同志が捕縛せられた時、西川も同地へ應援に行つてゐて未決へ送られてゐたが、歸京してみると新聞社はもう沒落してゐた。その時、外遊してゐた片山潜が歸り合せてゐたので、二人で舊情を温めて、『社會新聞』と云ふのを出してゐたが、間もなく兇徒嘯集罪の裁判が確定して入獄した。

木下尚江

木下尚江は、今、市外瀧ノ川に道場を新築して、靜座法を教授してゐる。その筋ではあゝして軍用金をこしらへて、又社會運動をはじめるではないか、と注意してゐるとも聞いた。

その前には三河島村に行ひますして、三河島の聖者と云はれてゐた。彼は信州の人で、早稲田專門學校の出身である。安部と共にトルストイ流の基督教徒で、唯物論は彼の厭ふ所であつた。それは彼の宗教的創作が雄辯に語つてゐる。

松本道別

松本道別は社會主義者ではないが、その行動の跡を見ると、純然たる社會革命家の趣を備へてゐるから、この中に加へる事にした。

明治三十九年三月十八日、社會黨の主催した電車値上反對の第三回目の市民大會が上野で開かれる事になつてゐて、その間際になつて禁止せられた。第二回の騷擾に西川光二郎、山口孤劍などの拘引者を出した社會黨では、押して開會をしようとする者はなかつた。中にも電車が値上になれば線路の上に座つて動かないなどと大言してゐた國家社會黨の徒は、一番に屏息したものだ。

その日は日曜の上に、風が凪であつたから、大會は禁止になつても、散歩かたがた集まつた群衆が、正午過になると上野の山を埋むる程に見えた。警察では騎馬巡査まじりに五百名の正服巡査を出して、その群衆を解散させやうとした。

その時白絨(しろらしや)のトルコ帽を冠り、弓の折れに纏はした朱塗の藤の杖を持つた小柄な男が、五六人の壯士を伴れて、動物園脇の坂を登つて來て、上野署長の乘馬が暴れ出した時、商品陳列館の前の旗竿に一旒の旗をあげて示威運動の宣言をした。「皇室中心社會主義大日本青年義團」の文字がその旗にあつた。その男が松本道別であつた。

松本はその群衆を率ゐて屏風坂をおり、下谷警察の前を通り過ぎて、元佐久間町一番地先にかゝつた所で、待ち構へて警官の一隊が現れて、松本はじめ數十名の者を檢束して示威運動を靜めたが、それが爲めに内務省を反省さした。その上、各區の區會議員も大反對をしたので、内務省では之を却下した。之を聞いて市民が安心してゐると、東京市街鐵道會社、東京電氣鐵道會社、東京鐵道會社の三會社では、又内務省に運動して、何時の間にか認可を得、九月十一日には三會社が總會を開いて合併すると共に、四錢均一を實施すると云ふ事が分つて來た。

これは八月一日であつた。松本は撒かれたのを怒つて、反對運動に着手した。そして、九月五日には日比谷公園で市民大會を催し、その群衆を率ゐて銀座から須田町へと行つた。群衆は刻一刻に増して、形勢が不穩になつて來た。松本は群衆を上野へ連れて行つて解散しようとしたが、群衆は彼を強擁して小川町の方へ曲り、それから内務省の前へと行つた。小川町から電車への燒行がはじまつた。内務省へ亂入しようとした者は、憲兵司令部から憲兵が來て追ひ拂はれた。

松本はやつとその群衆を纏め、三菱ケ原へ引き揚げて解散したが、群衆は去らなかつた。そして夜になるのを待つて、電車の襲撃をはじめた。その暴行は三晩に跨つた。松本はそれが爲めに兇徒嘯集罪に問はれて、二年六ケ月を小菅の獄に送られ、四十三年十月になつて出獄した。

その松本は、今、小石川林町に神人生活をしてゐる。彼の體は火も燒く事が出來なければ、白刄も斬る事が出來ない。病人を見ると、この白い大きな手を觸れて、やッと云ふ氣合をかける。と、病人はけろりとなる。私はこんな事は信じない男だが、家内や子供の體に生理的の變化を起させる奇怪な術を眼の前に見て考へさせられる事がある。

山口孤劍

平民社時代に社會主義に投じた書生の中で、山口孤劍、白柳秀湖、松岡荒村の三人は、頭角を拔いてゐた。

山口は馬關の人である。十五六歲の時大町桂月の玄關に置いて貰ふ積りで、出京したと云ふ逸話を持つてゐる。神田錦町にあつた松本君平の『東京政治學校』で學んだもので、石川安次郎の半山が、その時、その學校の幹事をしてゐたと云ふ事だ。

電車事件の際には、京都の河上肇から「これからは社會主義が國家主義に代る。足下は宜しく社會主義の吉田松陰を以て任ずべし」と云ふやうな煽動的な手紙を貰つた。河上がさうした手紙を山口に送つたのも、彼が年少者で、いつぽん氣な所を見てからの事であらう。彼はその時二十四歲であつた。

山口は兇徒嘯集罪の裁判中、新聞條令違反などが出て來て、四十年七月になつて、やつと保釋を許された。同志の者は、その歡迎演說會を神田の錦輝館で開いた。その當時反對の立場にゐた幸德秋水一派の者が、十人位一團となつて赤旗を持つて會場へやつて來たが、その歸りに神田警察の前まで行くと、警官が出て來て、その赤旗を奪はうとした。一同はそれを奪はれま

いと警官と爭つた爲めに、皆拘引せられた。赤旗の通つた跡を歩いて錦輝館から歸つてゐた堺利彦も、同じやうに捕へられて獄裏の人となつた。

それが爲めに山口の保釋は、忽ち取り消されてしまつて未決へ送り返され、裁判確定後は、一年有半を千葉の監獄で送つた

勞働問題百面相

若月保治

獨逸のシャイデマンは嘗て云つたことがある。此までの人間は手足を働かすものと働かさないものとの二つに分たれたが、今後に於ては此定義は少しく變化されなければならぬ。そして吾等は働いて食を得るものと働かないで食を得るものとの二つの區劃が益甚しくなるを見るであらうと。此言は或意味に於ては、今後の世界は、廣義に於ける勞働者資本家の二つから成るに至る、云ひかへれば、多數の金のないものは、皆少數の金をもつたもの丶手足となつて働かねば食へなくなるに至るといふ意味にも解することが出來る。誠に英國の婦人について見ても此は事實に證明されてゐるやうである。

□職業婦人の增加

歐洲戰爭の第一年には英國の人口は四千四百萬人で、其內千八百萬人は男子の有職者であつたが、やがてその有職者中六百二十五萬人は色々の軍務につき、四百萬人は軍需品製造其他戰爭に關する仕事につく事となつた、かうして男子の職業をもつたものが、七百七十五萬人となつて、戰爭前に比べると千五十萬人といふ不足を來した、之を補ふ爲に使用されたのが婦人勞働者である、さうして開戰の初年位に二十萬人しかなかつた英國の婦人勞働者は、昨年五百萬を超え、それが千七百一種の職業に從事することゝなつた。其中主なるものを擧げて見ると、軍需品製造從業者が百萬人、工業及化學業に從ふものが五十萬人、農業從事者が三十萬人、陸海軍從事者が三十萬人、政府の官廳事務に從ふものが五十萬人であつた。

此は職業が人を求めたといふことゝ同時に、生活が婦人を働かせたといふことにも解しなければならぬ。

□英國唯一の新勞働新聞

此種の傾向は交戰各國に見られた一般の狀況で、今日平和になつても彼等は昔の無職狀態に歸るといふことなく、大部分は依然として各種の職業に從事せんことを希望しつゝあるといはれてゐる。かうなつて來ると、勞働界に於ては、自然の勢として色々な問題が起つて來なければならぬ。果して昨年休戰條約締結以來、世界の各國は爭うて此問題に對して最も熱心な注目を向けることゝなつた。英國に於ても卽ち此三月三十一日から、唯一の勞働新聞が刊行されることゝなつた。其名はデーリー、ヘラルドと云ひ、一枚一ペニーの日刊新聞である。發刊に際して此新聞は述べていふ。勞働運動は今や歐米の全般に渡つてゐる。然も普通の日刊新聞には其が詳に擧げられて居ない、英國五百萬の男女は勞働運動に、同盟組合に、それ〴〵同意してゐる、彼等は悉く讀むことが出來、讀まんことを欲し、日刊の勞働新聞を求めて居る、本紙は卽ち此運動の有ゆるニウスを傳へると同時に、世界の凡ての新事作を傳へるのであると。けれども私はまだ此新聞を見るの機に接しない。

□五時間が最適の勞働

有ゆる勞働問題の中で、今尙八ケ間敷いのは勞働時間問題である。日本のやうなまだ低級な頭しかもつてゐない勞働者などは、金さへすこし澤山やれば幾らでも働くといふ傾向があるが、標準時間が八時間と定められた英國あたりでも、戰爭中は職工が足らぬ、製產力が不充分だといふので、盛んに此標準時間なるものは破壞された。それは更に倫敦經濟學校ホツブロウス敎授の說によると、普通の勞働者に對する標準勞働時間は八時間が適切であるにしても、頭腦の明敏な働きを要したり、手や眼の精細な働きを要するやうな仕事に對しては、その勞働時間は八時間以下であるべく、最も適切な功果をあげ得るのは五時間であるさうである。

□勞働と休息時間の經驗

勞働時間問題と直接の關係をもつてゐるものは、休息時間問題である。或は規則正しい定期的の短時休息を否定し、或は不規則な休息よりはその方がいゝと是認するなど、猶其所說が一定しないが、最近米國工業會議の發表に見ると、取調べた三百八十八の傭主中、休息制を採つてゐるもの二百四十四について見れば、主として單調な職業が、甚しく精神集中を要する場合か、姿勢の上に變化の乏しい勞働か、空氣の流通の惡い仕事などに對しては、規則正しい短時間の休息は必要であり、又重い仕事とか、立づめの仕事とか、座りづめの仕事には最も大切にて、場合によりては出

求る限り不規則なる休息をすることを止めて、成るべく規則正しい習慣をつける必要がある、電話電信事務家、會計方、校正係などは、嚴しい絶えざる注意を要する仕事で、此等に對しては午前及午後の各中間に、五分乃至十五分の休息、又は、勤勉を要する仕事に對しては、時に一二分の短時間休息が勸められて居る、休息によりて生産結果が減じなかつたといふことは一般の一致する所で、却つて之によりて椿事の減少されたといふ明確な證據があげられてゐる。

□男女同職業の結婚が増加　それでなくてさへ問題が問題だけに、やゝもすると話しが少しく固くなり過ぎる傾向があるから、此邊で少しく横道へはいつて、艶をつけたい。これまでは歐米諸國に於ても、男子は外へ出て働く、婦人は家に居て整理に當るといふのが一般の傾向であつたが爲に、同じ男女が職業を求めるにしても、其間には異つた職業を求めて何とも思はぬといふ風であつた、所が戰爭の影響を受けて、男子の勞働者が缺乏する一方に物價が騰貴したといふことから、婦人であつて外に職業を求めるものが次第に増加し、而も男子と同一の方面に働くものが多くなつた結果として、同じ職業をもつたものが相求めて結婚するといふことが著しく増加して來た。例へば米國に於ける一雜誌は、最近の結婚婦人千人について調べて見ると、五百四十一人は所謂職業婦人で、其内半數以上の二百七十五人は同一職業の男子と結婚してゐることが統計されたといつてゐる。

□女房が亭主に賃金を要求　これも勞働問題の餘波と見られぬこともないが、近頃英國の婦人は其亭主に向つて家庭勞働の賃金要求の聲をあげてゐる。そして之に對する各新聞の態度は決して嘲笑的でない所に面白味がある。デーリーメール紙は云ふ、政府が婦人勞働者に支拂ふ賃金は一週間三十圓である、今其婦人が職業を止めて家に歸り、收入が十圓しか無くなつたとすると、そして其女が家庭にあつて家の仕事をし、亭主を助けたとすれば、後の二十圓は亭主が支拂ふべきものであると或婦人が云つてゐるが、亭主が此要求を容れぬとすれば悲慘なストライキが起るだらうと。又或雜誌はいふ、男子が女子の此要求を入れなければ、女子は當然外へ出て働くであらう、さすれば其結果が子供に如何なる結果を及ぼすかゞ分る。之まで家庭は志願勞働者に委せられた悪い事務所であつた、だから男子は此要求に應ずることゝなるだらう、そして男子が妻の勤勞に對して、自ら賃金を支拂ひつゝあることを知れば、自ら自尊心を増すことゝともなり、從つて夫婦の間の關係も改善されない理由はないと、これで見ると英人などにとつては、家庭は

犧牲的共同生活の中心ではなくて、何だか一個の木賃宿でもありさうな氣がする。物質主義の文明はかうして人間の生活の根柢まで喰ひ荒さなければ止まぬのだらうか。

□倫敦婦人巡査は依然存置

戰時婦人勞働同盟によりて設けられた婦人巡査は、街路の不良人物を驅逐し、危險に陷らんとする少女に親切な警戒を與へる等の方面に使用されたが、其成績の良好であつたが爲に、此制度を繼續することとなり、此程新に婦人巡査隊が編制された、婦人の職業は此うした方面にまで展びて來たのである。

□軍人寡婦の教育

戰爭が終結を告げた今日、軍人軍屬の寡婦を放棄して置くのは宜しくないとあつて、英國政府は熱心に此方面に注意し始め、何等かの職業を與へんとして、各種の裁縫、産婆看護婦、遊泳及體操、衞生監督、兒童救護事業、小學校教師等の方面に向つて訓練を行ひ出した、産婆の如き特種のもの丶外は、其訓練期間は三月と規定され、其間は扶助料及兒童給與金を合して毎週六圓五十錢以下が給せられてゐる。

□英國に於ける勞働者住宅問題

今日の勞働問題は、色々の形式に於て現はれつ丶あるが、社會改造の一面からいふと勞働者の住宅問題は徒らに看過すべからざる大問題の一つである、されば先頃の英國議員總選擧に於ては、何れの黨派も皆此問題を綱領の一つに加へて逐鹿界に立つたのであるが、さて英國に於て勞働者の爲に五十萬戶からの勞働者家屋を建てるとすれば、如何なる設備をなすべきかについて色々の說が立てられてゐる。之について英國の一雜誌はいふ、此問題は用意では容易に解決されることで、勞働者は毎週三十志(シリング)以上の賃金を得てゐるから、五志(シリング)の借家料を出すことはさほど苦しくない。さすれば地主は小屋を建てることも嫌がるまい。さて小屋を建てると、それに多少の空地を附屬して、野菜などが作れるやうにし、小屋は居間と臺所と三個の寢室を備へ、飲料水の供給と下水の排泄が完全でなければならぬ。之に反して都會は地代が高いから、どうしても長屋建にする外なく、倫敦市會が設計したのは、空地を中にした數個の長屋から成り、各戶に階段が備へられ、入口から共同の大階段を經て、各自の家に入るべく、臺所は階下に、竈一個と、二つ以上の寢室を設け、階段の上の空所は浴室洗濯場等に宛てようとするのである。既にダブリン市に於ける設計は着々と進捗し、四千三百萬弗の費用にて、一戶に二千弗づ丶をかけ、一萬六千百戶の勞働者住宅を建築する外、久しく居住者のなかつた三千六百戶の古家屋を買收し、一千二十萬弗を投じて之が改造に着手することゝなつたと傳へられてゐる。

□戰後婦人失職者少き理由　各交戰國何れも戰時中盛に婦人勞働者を使用した、戰爭が終結すると共に、之が處分を如何にせんとするかゞまた一個の勞働問題であるとして心配されて居たが、事實は此心配を裏切つて、最近の調査によると、米國紐育州丈けについて見ても、百七ケ所の婦人勞働者一萬三千六百四十三人中、休戰條約締結後に解雇された者は、僅に其半數以下の六千七百七十一人に過ぎない、米國產業委員會の唯一の婦人委員であるパーキンス孃は、之が理由を婦人勞働者の賃金が男子に比して低きにあるが爲だといつて述べていふ。除隊兵の就職難を解決する唯一の手段は、男女勞働者の賃金を平等にすることにある、婦人勞働者中男子と同等の賃金を得てゐるものは僅に全體の九プロセント丈けである。大體に於て婦人勞働者の賃金は男子の六十五プロ乃至七十五プロセントにて働き、而も其能率を比較すると、或工場などは、婦人の方が男子に比して二十プロも能率の多いことを明確に認めて居り、それでゐて、男子には一週間二十一弗六十仙を給し、婦人には七弗十仙しか給與して居ない。つまり割合に低い賃金で好く働くのが婦人勞働者の歡迎される理由である。前の六千七百七十一人の失職者にしても、其內二千二百二十五人は自らの過失から解雇されたもので、眞に除隊兵に地位を譲る爲に職を去つた者は僅に二ケ所の工場で十三人あつた丈けであると。

□安全第一運動の結果　米國に於ける過去十年に亘る安全第一運動は、三萬五千人の年々の死亡數を二萬二千人に減じ、之と共に不具廢疾者の數をも非常に減少した。換言すれば、此運動は米國人の生命一萬三千人――歐洲戰爭で失はれた米兵に六分の一――を每年節約することになつたので、此割合は漸次增加して、遂には問題にならぬまで少數になるだらといはれてゐる。

□勞働者の嬰兒死亡率　米國の勞働局小兒課では貧乏なる勞働者と嬰兒の死亡率とを調べる爲に、工場地で貧民の多い同國マンチエスター市の小兒死亡率について見ると、生後一年內に死亡したものは千人中百九十三人であつた。けれども米國の他の都市にては死亡者百名以上の所はなく、十六年前には紐育市には百八十一名あつたのが、漸次に減少して、四年前には五十五名となり、今日は最も減少してゐるといはれてゐる。

□戰爭不具者の就職問題　戰爭で負傷したものに對して相當の待遇を與へるには、普通の狀況では之に相當した職業を與へるといふことが最も適切であるが、戰爭中は多少の同情や勞力の不足といふことから、それは容易に解決されし問題であつたとしても、愈平和になつて悉く復員の行はれた後に

は其處にも侮るべからざる一個の勞働問題や社會問題が起るのが免れないことであらう。英國などにても之に關して色々の說が立てられ、彼等を相當の職業に向つて訓練する前に、先づ充分に手を盡して治療の方法を講ずべく、さなくて急いで彼等に職業を與へんとすることは、結局彼等の前途を誤らしむるものであるといふのが有力な說であるが　それにしても戰後の有ゆる事業界には、此迄よりも劇烈な競爭が起るべきは疑を入れぬ所であるから、此間に在りて不具者が相當の職業を見出さんことは愈困難であるといはなければならぬ、此に於てロバートスン氏などは、二三年前から、一個の妙案を提出して、傭主の國民名簿を作つて、出來る限り戰爭の不具者を使用し、之を助力せしむる保證を得ようとさへしてゐるのであるが、今日此方面の問題は未だ充分の解決を告ぐるには至らないやうである。

□戰時中の少年勞働問題　今日になつては既に多少の變遷が見られたことは勿論であらうが、戰時中に於ては、勞力の不足といふことから、各交戰國が盛んに少年勞働者を使用した事實歴然たり、米國の如きも、少年勞働者の率は非常に増加して、從つて小學校出席者の率は著しく減少し、昨年に於ける學校退學者の數も平年の四倍乃至五倍に及んでゐる。米國にては此種の弊害を恐れ、十四歳以下の少年の勞働使用を絕對に禁止し、十四以上十六歳以下の少年は、如何なる場合でも八時間以上又は一週六日間以上、勞働させてはならぬこと丶したのであるが、之が充分に守られなかつた爲に、一九一六年に至りて、議會は少年勞働を以て國民的罪惡と認め、少年勞働條例を可決したのであつたが、或一事件の勃發から、議會の此態度は憲法違反であるといふことを高等法院が宣言するなどのことあり、少年勞働問題は、米國にては紛糾を極め、各州意見を異にして大分八ケ間敷かつたやうである。

□英國に於ける改革と勞働問題　英國に於ける戰後の諸改革は其他の諸國に於けるよりも一層急劇的なるべく期せられてゐるが、其態度はどこまでも規律的にまた平和的ならんことが要められ、政治は勿論工業方面の首腦者も大に此點に注意し、關稅改革、土地國有、鑛山公有及鑛物輸送改革、國民家屋の建造、教育改善、男女均等機會、酒精問題等が着々考究されつゝあるのであるが、勞働方面に於ける要求中、短時間勞働、賃金値上及び、工業の實際的支配權を勞働組合によりて行はんとする點などは、最も直截的なものである。現に本年一月に於て、八十萬人から成る坑夫組合は、六時間勞働と、戰時賃金以上に三割の値上を要求したのであるが、一方に於て石炭の値下けが甚しく必要とせられつゝある今日、此要求の全部に承

認を得るに困難なるべく豫想されてゐる。此種の要求は坑夫方面に於てのみならず、四十萬人から成る英國鐵道從業者組合に於ても現はれ、彼等は一週四十八時間勞働を要求し、二十五萬人から成る輸送業組合員も亦、一週四十四時間勞働と賃金二割の增額を要請し、其他の多くの組合は、八時間勞働問題から進んで、今日では一日七時間勞働制を要め、造船職工や大工業者や、政府の使用人や郵便從業者まで此中に加はり、勞働者の社會的生活改善を絕叫してゐたのである。

□米國に於ける短時間要求　英國に於ても短時間勞働が要求されたと同時に、紐育織物及裁縫工業從業者等は一週間の中五日間は八時、土曜日は四時間の勞働時間制を要求して罷業を行ひ、之が要求を入れられて平穩に歸することゝなつたのは、本年初頭の事であつた。數年前此等の從業者は實に十六時間も從業しつゝあつたのであるが、其後彼等の境遇は非常に改善せられ、採光通風等に於ても耐火の點に於ても完成した工場に働き、今また四十四時間勞働を許さるゝに至つたのは全く米國文明の勝利の象徵であると考へられてゐるのであるが彼等の多くは近頃米國に移住し來りたるものなれば、彼等を更に米國化し良好なる市民たらしむべく、英語を十分に話し書き且つ讀み得るやうにもして、相當の教育が施されねばならぬことが主張されてゐるのである。丁度此項を書いてゐる時中六月末の電報は、英國ランカシヤ地方に於ける三十萬人の紡績職工は傭主側の妥協案たる四十八時間勞働及賃金二割五分增加の申込を拒み、同盟罷業をなすことを議決し、賃金三割を增加し、又は勞働時間を四十六時間半に減じ賃金を二割五分增すか何れかを容れんことを要求し勞働大臣ホーンが仲裁を申出でたことを報じて居る。

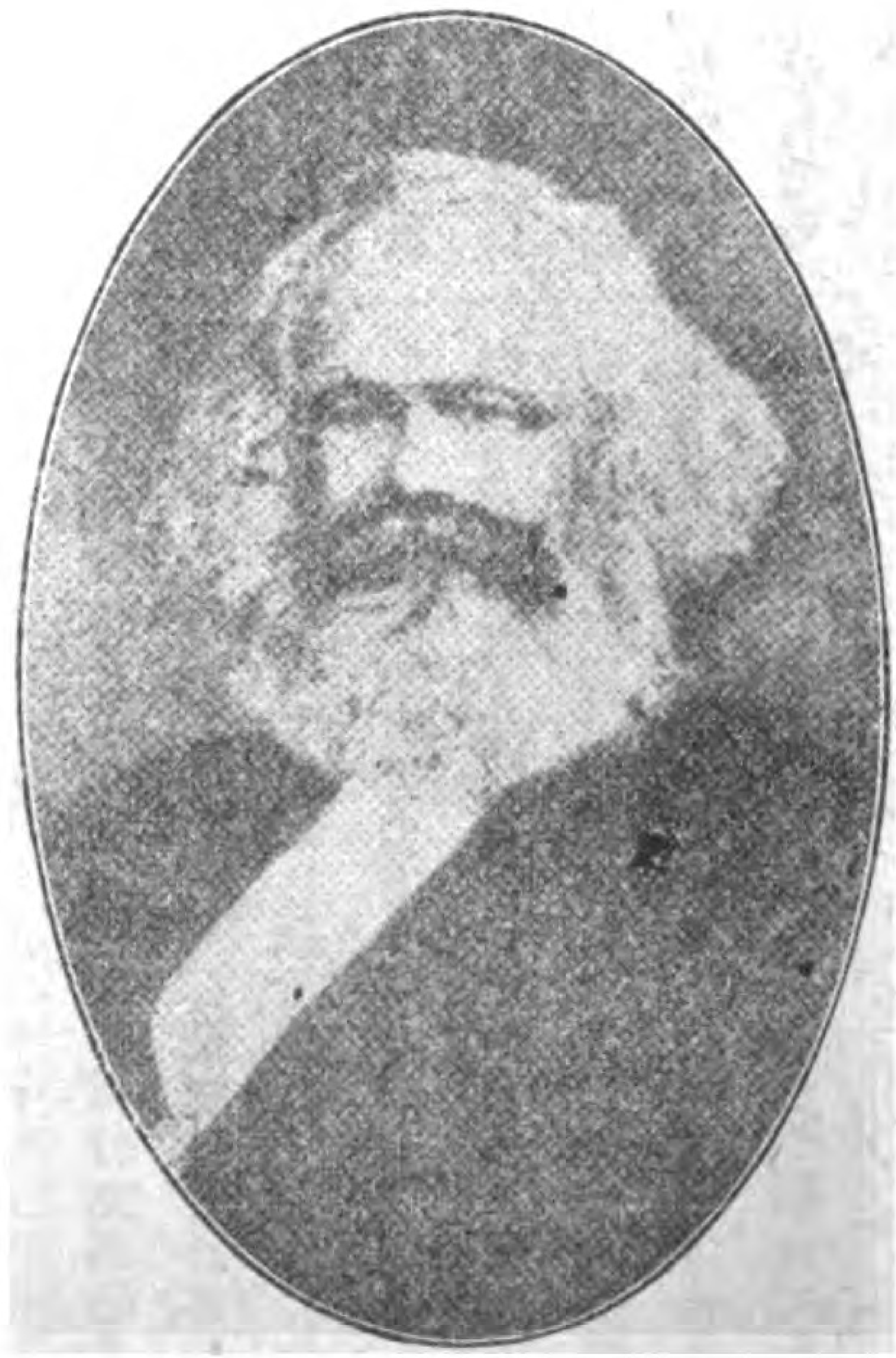
□巴里勞働問題會議　英國に於ける勞働者側の要求は次第に資本家側の讓歩によりて片附かんとしつゝある一方に於て、三月には巴里に於て萬國勞働會議が開催された、其際の議長は米國勞働組合長サミユエル・ゴムパース氏にて、此會の議決した事項は、一日八時間勞働の實行、婦人にも男子同等賃金の支拂、少年勞働の禁止、人間品位の保護等であつた。此等の原則は、數年前に於ては其實現甚だ不可能の感があつたが、今日に於てはそれが着々として實行せらるゝといふ奇現象が、而も最も平和に到る處に見られつゝあるのである。

□萬國勞働運動　最近に佛人マクス、チユルマン氏は「萬國勞働法の起源と進步」と題する書を公にした、之によつて見ると、國際勞働法の起源はまだ五十年を出るか出ない以前からのことである。

□被傭者に對する變つた報酬 問題が問題丈けに話はいつかまた無味乾燥な知的方面に向つて居たのであるが、いよ／＼硬い方面には眼を閉ぢることにし、勞働に關した輕い話を一つ二つ掲げて、さつさと稿を終ることにしよう、さて米國の或商業會社にては、其店員が何か有益なる工夫を凝すか暗示を提供すると、之に對して其報酬として、會社の株を與へることにしてゐるが、數年前或る品物の排列法を暗示したタイピストは當時三百五十圓宛の價ある株券五十株を與へられ、此婦人は近頃結婚生活に入ることゝなつて此株を十三萬二千五百圓で賣つたさうである。此會社はまたの其使用人に對して二週間毎に支拂はるゝ現金賞與金の方法をも設けてゐるさうである。

□貴族の職業 日本には昔から士族の商賣とかいふ諺があつて、其はどうせ甘く行きつこはないといふ意味に用ひられて居たやうだが、佛國には其反對に、貴族であつて立派に商賣をやつて、而もなか／＼繁昌して居り、若しくは色々な職業についゐるものが少くないといはれてゐる。就中トルセー・デタロンド侯爵夫人といふのは、旅館を出して甚だ繁昌し、ド・フオリニエー侯爵夫人といふのは乘合馬車の事業をやつて氣人を集めて居り、マルシユ伯爵はペンキ屋を業とし、ド・ロスヂランド男爵といふのは製粉所で勞働し、ソアニー男爵はまた郵便屋さんをやり、サン・ポール伯爵は商店の事務員をやつて居るさうである。それかと思ふと、有名な僧正の家族であるジヤン・ド・レッツ氏といふのは墓堀を業とし、ドートロシユ伯爵といふのは憲兵さんを職とし、バルトタウシユ子爵といふのは一日三フラン宛を貰つて現に田舍の或村でランプの掃除をしてゐるさうである。

カール・マルクス論



▽マルクス論

文學博士　三宅雪嶺

（一）

世界戰役は種々の影響を我國に及ぼし、負債國が債權國となり、成金輩出し、物價騰貴するなど樣々である內、社會主義の研究が自由となつた事も其の一に居る。而してカール・マルクスの名が一時に持囃される。若し戰役終結が一年早かつたならば、昨年の五月五日マルク

ス誕生百年紀念祭が行はれ、更に一層世間の呼び物になつたらう。日本で紀念祭をした者があつても、僅に眞似事位に過ぎぬ。一年の違ひで大いな差異を生じた。けれどもマルクスの名は、近來次から次へ評判となつた人々の上に嶄然頭角を露し來つたのは確かである。人名に流行があり、流行の時節に之を口にせねば氣が濟まず、何處からか偶像を取出して棚に飾つたりするが、マルクスは夙に注意を萃むべきものであつて萃めず、實は萃める事を妨げられて居つた。獨墺側が戰捷を得れば勿論、五分五分に引分けても、マルクスは今ほど日本で注意を惹くまい。獨逸帝國が破滅し、墺露二帝國が破滅し、變動が餘りに大きく、社會主義の研究が何の影響を及ぼすかと心配するのを無益とするやうになつた。日本の官僚は獨逸の官僚に則り、社會政策學會を興し、社會主義を未然に防がうとしたのも之に由る。社會主義と云へば國家社會主義と稱し、左なくば主義と云はず社會政策といふのも之に由つて居る。獨逸が破れなんだならシュモーラー、ワグナー等がマルクスより多く引用せらるる所である。官僚が豫期したと違ひ、獨逸官僚が全滅し、少くとも當分一先づ全滅の姿となり、今更らマルクス研究を妨ぐる事餘りに滑稽に似て、此の研究を許した。是まで抑へられて居つただけ研究が盛んになり、マルクスならでは立行かぬやうになるべき勘定である。

（二）

マルクスは人物も技倆も、近來時々噂に上つた人に優り、其の「資本論」の如き一時の場當りと違ひ、社會主義の權威たるを値するのみでなく、實に十九世紀を通じての傑作である。之を研究するのみで一の專門とするに足る。マルクスは社會運動に熱中しながら、學者たるの質を具へ、苦痛裡に閉籠つて尙ほ一代の人物たるに足りる。その獨逸より追はれ、佛蘭西より追はれ、倫敦に在りて貧乏の中に著作を事とし、妻と美しき家庭を作り、妻が歿し娘が歿し、悲嘆に暮れて自ら歿した所に、永く餘音嫋々たるを覺えしむる。

其著作は天才と勞力との賜であり、明かに群を拔いて居るが、マルクス其人が世界に知れ、日本に持囃されるのは、悉く其力に依るとせぬ。才能に於て他の社會主義者中必ずしも同等以上の者無いと限らぬ。總じて獨逸人よりも佛英人が創見に富むが如く、社會主義に於ても佛人が先驅けて居り、又實行に勇氣を示して居る。サン・シモンを始めプルードンたり、ルイ・ブランなり、近くはソーレルなり、皆力量の豐富なるを證明する。之に比べればマルクスの事業は他の獨逸人と同じく、天才よりも勞力に出でゝ居る。天才は特別の才でなく、「一事を目的とし

で勞力を積む」との語は此種の人に當箝まる。遲鈍根が天才を作る事がある。社會主義者中マルクスの言ふ所に考へ及んだ者は數人のみで無からう。然し彼の如く久しく同一事に勞力を積む事が出來なんだらう。歿した後にエンゲルスの手で二卷三卷が出るといふ程で大なる力ある事が分る。目前の功名を念とする者の企て及ぶ所でない。「資本論」は大きいだけ批評の餘地があり、明かに事實と違ふのがあり、其系統に屬するベルンスタインが種々指摘して居るが、それでも大體に於て儼然大著の地位を失はぬ。其權威と見らるるのもその故である。大いなる勞力の結晶、何と批評しても其價値を減ずる事が出來ぬ。一時の思ひ付きに成つたものは一時人の好奇心を挑發するが、或る點の過れる事の知れ、それで消滅する。過まらなくても好奇心の去ると共に忘れられる。社會主義又は勞力問題に關し、幾多著作ある中でマルクスの「資本論」が中堅を形造るのは、他人の及ばぬ程勞力を集中したからである。

而してその人に優るの力あるに拘らず、功名を貪らず、能く功を他に讓る事も事業を大にするに與つて居る。エンゲルスが自らの功をマルクスに讓り、美はしい情を示して居るのは、マルクスがエンゲルス及び其他に對して能く讓る所あつたからであらう。マルクスが中心たる時でも決して中心顏をせず、低い役目を忠實に勤めたりした。能く讓る所で集めて大成するの觀を呈して居る。

（三）

マルクスの力で社會主義關係運動の第一人たるを得るが、第一人と認められるに就いて種々の事情が加つて居る。其敵視する獨逸帝國の强大なる事も與らぬとせぬ。獨逸の社會黨運動が旺んになつて、其の黨員が議會に何事するかゞ注意を促した。帝國が世界の强國として列國を脅すの勢あつた事も携つて居る。同じく倫敦に逃げても、獨逸よりすると、佛國よりすると人の注意が違つた。獨佛戰役前まで佛が多く注意を惹いたが、其後獨が多く注意を惹く。學術の研究に於て獨逸が本場であると知れ、同じ事でも佛の方が夫れ程に重んぜられぬ。佛の故パスツウルと故コッホと何れが醫界に功あるか。佛では自國の人を推し、獨でも自國の人を推す。世間の識者は强いて二人を甲乙せぬ。何れかと云へば實際の效果に於てパスツウルを擧げるらしい。けれども一般世間では細菌學及び關係治療に於てコッホに限るやうに考へる。日本ではコッホの名を知る者甚だ多く、パスツウルの名を知る者甚だ少い。社會主義者として、或は無政府主義者として、佛國に有力なる人物が居る。其運動も隨分旺んであつた。ベーベル、リーブクネヒトよりも烈しい。

而して夫れ程に知られず、誰が何を爲て居るか注意せられぬ。然し之は佛國が獨逸より勢の劣つたが爲めであつて、之に優ると知れれば獨逸の評判する所を取つて代るのである。今は佛國が約半世紀を經て再び頭を擡げ來り、一般に注意を惹くと共に從來社會主義の爲めに努勞したものが明白になつて來るであらう。英國では以前から自國同樣に注意したが、日本では獨逸の學問を重んずるだけ佛國を輕んずる傾向があつた。マルクスを中心人物とするのは理由ある事にせよ、獨逸の勢力が背景を形造らぬとせぬ。一猶太人で普國嫌ひなるマルクスが獨逸帝國を背景にするとは當人の意外とする所、又不本意とする所であらうが、其邊の事情を全く取除いて考へるのは、判斷を誤るの虞れがある。

如何なる偶像も種々の事情で有難味が着いて居る。確かな偶像は割引しても價がある。マルクスは十分に試驗を受けるの資格がある。

▽マルクスとマルクス主義

山川　均

カール・マルクスの名が、今日ほど日本で持て囃やされたことはない。マルクスと云へば思想界の機多村の問題として、昨日までは世間から見向きもしられなかつたものが、何ういふ風の吹廻しやら、俺こそは十數年前からのマルクス研究者であつた、我輩こそは何年前にマルクスの學說を紹介批評して居るといふ、學界の殊勳者、マルクスの宿緣者が續々として現はれて來た。之は固より、時代が出來て急に親類緣友の現はれて來た類ではなく、日本の學界の爲にも、マルクス其人の爲にも、賴母しいことゝ云つてよからう。

マルクスは其價値說の爲には數千頁の大册を著はしたが、唯物史觀說の爲には一小冊子すらも書かなかつた。マルクス批評が先づ其價値學說に集まるのは、怪むに足りないことである。小泉敎授は本誌の六月號で「マルクスの弟子はボエームバエルクに對して答辯を爲すべき借りがある事は否む譯に行かぬ。而してこの借りをマルキシストは未だに綺麗に返しては居ないやうに思はれる」と云　れて居るが、之に反してラブリオラにマルクス論のうちに、「ボエームバエルクの觀察は、紳士閥（ブルジョア）經濟學はマルクスを理解せんが爲に、曾て何等の重大な努力をもして居ない、そしてマルクスに關して斷えず議論の起るのは、彼等がマ

ルクスを理解して居ないことに起因するといふ、予の前述の見解を立證する絶好の例證である』と云つて居る。予は此の所にマルクス說の清算人として、小泉教授とラブリオラ教授との孰づれが適任であるかを定めようとするものではない。けれども、若しマルクスに借りがあるとしたならば、マルクスの借りは、マルクス說に對する紳士閥經濟學の借り程に多額なものでないことを確信する。たゞ借財は貸主の帳消しによつて消えるものとしたならば、此双方からの借錢は、恐らく永久に綺麗に返濟されるの期はあるまいと思ふ。何故ならば、小泉教授が、マルクスに對する紳士閥經濟學の借りを支拂つて尙ほ貸越しになつたと認められて居るボエームバヱルクの光つた金貨も、マルクスの弟子等の多くはラブリオラと同じく、柴の葉か不渡手形、と見做して居るほどに、兩かく双方の貨幣本位が違つて居るからである。

この派手な剩餘價値說に較べて、マルクスの地味な唯物史觀說は、決して重要に於いて劣るものではない。マルクスは唯物史觀說の爲に一小冊子をも書かなかつた代りに、全てのマルクスの著述は、何づれも皆、唯物史觀說の前提から踏み出して居るものと云つてもよい。ところが北澤教授は『之が誤謬なることは多くの學者に依りて指摘せられ、其結果、今日に於ては、社會主義者は純然たる唯物史觀を固執するものなし』と云はれて居るが、之に反して河上教授は『明治三十八年にセーリグマン教授の唯物史觀論を譯出してより今日に至る迄で、猶之を抛棄し得ざる』ことに誇りを感ぜられて居る。マルクスの經濟論は、資本制度の其後の發展によつて現はれた新事實によつて修理することが出來、また修理することが必要であるが、唯物史觀說の倒壞に至つては、マルクス說の大伽藍を根底から震撼するものである。マルクス研究に忠實なる兩教授の間には、尙進んで此問題に關する有益な研究と討論との交換せられることゝ思ふ。

二

そこでマルクスの學理上の方面に就ては、何づれ諸大家の御批評のあることゝ思ふから、玆にはマルクス主義の、實際運動に關係を持つた一二の點を掲げて見たいと思ふ。尙ほマルクスの生涯や人物や事業に就いては、堺君と予の共編『マルクス傳』の參照を乞ふ。

マルクス批評家の觀過すべからさることは、マルクスの學說と實際運動との關係である。共產黨宣言以來、マルクスは常に學者として、革命運動者として、常に此二重の資格を以て文書のうちに現はれて居る。ソレルは共產黨宣言の二元的性質を

指摘したが、此二元の對立は、畢竟、共産黨宣言に現はれたる、學者としてのマルクスと、實際運動者としてのマルクスとの對立とも見做される。そして此對立は後のマルクス主義、即ち社會民主黨の運動に於いて益々顯著となつて居る。

マルクスによれば、新たなる社會組織は、舊るき社會組織に固有内在する諸勢力の發展の結果として、必然に生まれるものである。現在の資本主義的生産組織が、社會主義的生産組織に所を讓るものとしたならば、其れはマルクスに從へば、或る先覺者の頭の中に社會主義的生産組織の立案が出來上つたからではなくて、資本制度そのものゝ必然の發展として生ずる事柄である。資本制度は『發達の一定段階に達すれば、其れは自體の解體を來すべき物質上の作因を發生する』。『資本制度は『自ら其墓を掘りつゝある』ものである。マルクスに從へば、或る社會形式――即ち生産組織――は、其内に存する生産力を充分に利用し發達せしめ得るの間は決して倒れない。けれども此の社會形式――即ち生産組織――そのものゝ發展の結果として、そのうちに生じた新たなる生産力の利用と發達とが、此社會形式の存續と兩立し得なくなる時機が來る。そしてマルクスは、資本制度の發達が此段階に達するの日は、案外遠からずと考へて居た。『資本の獨占は、其れと相伴ふて其下に發生し成長した生産方法を束縛するの桎梏となる。斯くて生産機關の集中と勞働の社會化とは、遂に資本主義の外殼と兩立し得ざるが如き程度に達する。斯くて此の外殼は微塵に破裂する。斯くて資本主義的私有制度の弔鐘は響き、斯くて收奪者は收奪する所となる』。そしてこの『收奪(エキスプロプリエーション)』はマルクスに從へば、『資本主義的生産に内在する法則の作用』によつて成就せられるものである。

然らばこの『法則の作用』は何であるか。マルクスは『資本主義的生産に内在する法則の作用。即ち資本の集中によつて成就せられる』と云つて居る。『一個の資本家は常に多數の資本家を殺す』。『今や收奪(エキスプロプリエート)せらる可きものは、最早や自己の爲に勞作する勞働者ではなくて、多くの勞働を利用(エキスプロイト)しつゝある資本家である』。

資本制度の終末は、資本制度そのものに内在する法則の作用によつて來るものであり、そして此法則の作用は資本の集中であるとしたならば、資本主義的生産組織から社會主義的生産組織への推移は、全く人間の精神的要素と意識的の行動とを離れて行はれる必然の過程であつて、マルクスの唯物史觀說は、ラプリオラの云つた如く、寧ろ機械的史觀說とも云ふべきものであり、純粹の宿命論であると謂はなければならぬ。熱柿は必然に落ちるとすれば、竹竿を振廻はすことは明らかに餘計のお

節介である。そこで此熟柿主義の宿命論とマルクスの革命主義とは如何にして調和せられるかといふ問題が起つて來る。

三

カウツキーは此問題に答へて、資本の集中によつて、資本制度が自然の分解を初める以前に、勞働者の階級鬪爭は、資本主義的生產方法の倒壞を招致し得るであらうと云つて居る。

けれども此答は、少くともそれだけの意味に解したなら、社會進化の二樣の法則を認めることゝなる。卽ち（一）階級鬪爭、更に詳しく云へば革命的階級の存在といふことから離れても、資本制度から他の社會組織への推移の行はれ得ると云ふこと。之と反對に、（二）資本制度に內在する作因の働きを待たずして、他の勢力（卽ち階級鬪爭）によつても同一の結果に達し得られるといふこと。更に（三）には、マルクスの謂ゆる『資本制度に內在する法則の作用』とは、單に資本集中の過程をのみ意味したものであつたと云ふことを承認することゝなる。

然しながら、マルクスは資本の集中を說くと同時に、革命的階級の勃興を說くことをも忘れなかつた。『……此變遷（資本の集中）より生ずる一切の利益を橫領し獨斷する大資本家の數が斷えず減少しゆくにつれて、困窮、壓迫、隷屬、墮落、搾取の量は增大する。けれども其れと共に勞働階級――常に其數を增加し、資本主義的生產過程の機制そのものによつて團結し組織せられたる勞働階級――の反抗も亦た增大する。』

然るにマルクスの「資本制度に內在する法則の作用」から、革命的勞働階級の形成と共行動と云ふ要素を除外することは、マルクスの階級鬪爭說を裏切り、マルクスの唯物史觀說そのものを裏切ることゝなる。何故ならば、マルクスの唯物史觀說は、精神作用を有しない『唯物人』の假定の上に立つものではない。從つて社會的進化が無意識的にのみ行はれることを必要しないからである。否なマルクスは、歷史的の必然を意識することを以つて、現代勞働階級の特徵と見做して居るのである。斯ようにマルクスの唯物史觀說は、人間の精神的要素を除外しては却つて成立ち得ないものである。

マルクスの唯物史觀說は、一切の心理現象が、『最後の分析』に於いて物質的條件に歸納し得ることを主張する。けれども一度び一定の物質的條件によつて、一定の心理を生じたなら、此心理が人間の行動となつて物質的條件の上に反動作用を起すことは自明である。マルクスは社會的進化の要素から、人間の精神と意識的の行動とを放逐しようとするものではなくて、人間の精神現象をも他の自然現象と平等な、一個の自然現象として待遇することを要求するものである。人間の精神が物質でない

といふ理由で、社會的進化の要素から除外する唯物論は、精神現象を他の自然現象から峻別する點に於ては、其反對に立つところの唯心論と同一の誤謬に陷つたものである。

そこでマルクスの唯物史觀說が、或る一定の物質的條件は必然に或る社會現象を生ずると云ふ時には、必然に其中間に、或る一定の心理と、此心理から生ずる一定の意識的行動との介在することを豫想するものである。たゞ此心理と此意識とが必ずしも其結果と一致して居るか否かは問ふ所でない。

從つてマルクスが、資本主義的生產組織は、之に內在する法則の作用によつて、必然に他の生產組織に推移すると云ふ時には其法則の作用のうちには、資本主義的生產組織の過程によつて必然に形成せられる特殊な階級と共に、特殊な心理と此心理から生ずる特殊な行動とを計算に入れて居るものであつて、若し資本主義的生產組織が、マルクスの豫想するが如き一定の階級心理と行動とを生じなかつたとしたならば、資本主義的生產組織の歸趨は、勢ひマルクスの豫期した社會主義的生產組織とは異りたる生產組織であつたに相違ない。資本の集中が、若しマルクスの豫想通りに進行し成熟したと假定しても、マルクスの謂ゆる革命的階級と其心理とを生じなかつたなら、資本集中の結果はマルクスの豫想した社會主義の實現ではなくて、反つてヒレイル・ベロックの豫期するが如き奴隷制度の出現であつたかも知れぬ。

四

資本集中の事實に就いては、必ずしも議論の餘地が無いではない。會社組織の如きは、一方から見れば小資本家の存在を許す一方法とも見られるが、同時に亦た、益々大なる財政上の實際支配權を少數者の手に集中するの手段ともなつて居る。けれども、少くとも、資本集中の過程と其結果とが、必ずしもマルクスの豫想通りでなかつたことは否みがたき事實である。資本制度が今日の如き變形を受けて今日迄で存續したことは、或はマルクスの意表に出づることであつたかも知らぬ。少くとも社會組織の急激なる革命に導くものとして、資本集中の過程に重きを置いたことは、マルクスの誤りであつたとしても、其れはマルクスの方式の誤りではなくて、其適用上の誤りである。マルクスの要求は『資本論』の無誤謬ではなくて、却つてマルクスの先見しなかつた其後の經濟上の發展と事實とによつて、マルクス說の確められることである。『資本論』の無誤謬を信ずることとは、個々社會主義の經濟學說を化石せしめる所以であつて、マルクスの弟子等の爲すべきことゝは、マルクスから讓られた一切の遺產を後生大事に棺の下に埋めて置くことではなく、絕え

ず新たなる事實によつて改修して行くことである。

マルクスの資本集中論を過大視することは、やがてマルクス説の宿命論的方面を過重視することである。そして其結果がマルクス主義の實際運動の上に大なる幻滅を來したことは止むを得ぬ。マルクスが社會進化の諸勢力の中で、最も有力なる勢力であると見做した革命的階級の機能を忘却して、資本集中の過程のみが、急激なる社會組織の革命を來し、『收奪者の收奪』を成就すると信じたマルクス主義者は、マルクス以後に於ける資本制度の發展と新事實とを見た時に、勢ひ大なる失望に打たれざるを得なかつた。マルクスの資本集中論が夢である如く、其革命論も夢である。吾々を新しき社會に導くものは、急激な革命ではなくて不斷の進化である。吾々は唯だ、現在の住家を絶えず修繕することによつてのみ、住み心地のよき住宅をもつことができる。マルクス説は修正しなければならぬ！

マルクス主義の修正の必要はベルンシタイン等の主張したところであつて、修正派は獨逸社會民主黨からはマルクス主義の異端と見做され、社會民主黨中の少數者たるに過ぎなかつたが、事實に於ては、尨大なる獨逸の社會民主黨そのものが、畢竟修正派に過ぎないことは爭ふことができぬ。獨逸の社會民主黨は正統マルクス主義に固執しつゝ、事實上の社會改良黨となつた。彼等はマルクス主義を棄てる代りに、マルクス主義を一個の改良主義に化し了したのである。

五、

獨逸の社會民主黨がマルクス主義の革命論に固執しつゝ、事實上の改良黨となつたことは、必ずしも前例のないことではない。共産黨宣言はマルクスの社會進化説と其革命觀とを、最も簡明に且つ雄勁に表はしたものであつた。然るに其豫備的綱領は革命の綱領はでなくて、改良の綱領である。そして此二元の矛盾は、マルクス主義の實際運動に於ける二重の目的に由來するものである。此二重の目的を説明して、ラブリオラは次の如く云つて居る。

マルクス主義から見れば、勞働階級の實際上の行動は二重であつて、一面には現在の社會組織そのものゝ、將來の變形に最も有利なる不斷の改良を目的とすると同時に、他方に於ては、現在の社會組織の撤廢を目的とするものである。或る社會のうちに起る一切の問題は、必ずしも悉く階級的の問題ではない。詳言すれば、之が解決の爲めには、必ずしも支配階級の撤廢を必要とするものではない。是等の問題のうちには、支配階級の存在と完全に兩立するものが少くない。從つて此領域にあつては、勞働階級は紳士閥と手を携へて進むことができる。マルク

ス主義は階級闘争の見地に立つと同時に、右の事實をも否むものではない。唯だマルクス主義は、是等の社會問題が發展するにつれて、遂には階級的問題に到達することを豫想するものである。

そこで若し勞働階級は、革命行動以外に、現在の社會組織の存在と兩立し得るが如き行動を取るの必要があるとしたならば、其れは勢ひ、各階級間の共通の問題、從つて均しく各階級の滿足を得るが如き解決の可能な問題の討議せられる領域に於いて行動しなければならぬ。そして此領域は政治であつて、政治的行動の領域は國家である。斯くて勞働階級は、國家の機關を通じて、改良主義の行動を發達せしめる。

然るに階級の團結組織は、意識せられるとせられて居ないとに拘らず、最終の到達點から見て革命的であり創造的である。階級の組織が飽和に達した時は、即ち新しき社會組織への推移である。そこでマルクス主義に於ては、政黨と階級との關係は、改良主義的の行動と階級的行動との關係であり、各階級共通の問題と階級的問題との關係である。斯くの如く政黨は階級の政治的行動に適合した機關であるが、階級は國家の機關の使用によつて達せられる目的以外の目的、從つて階級間の現存關係の埒内に於ける變化以上の變化を目指して居るものである。

ラブリオラの見解によれば、マルクス主義は政治運動の領域に踏み込む瞬間に、革命主義から一轉して、改良主義の運動となるべき約束を以て居つたと謂はなければならぬ。

六、

資本主義の生産組織が、何等かの新しき生産組織に推移するとしたならば、其れは漸次の變化によつて行はれるであらうか、又は急激の變革によつて實現せられるであらうか。假りにマルクスの豫想した如く、資本主義的生産組織の終末は、それに内在する法則の作用によつて生ずる急激な大破綻であると假定したならば、其直接の作因となるものは何であらうか。資本集中の過程に此力なく、マルクス主義の政黨に此力がないとしたならば、此力は何處に求む可きであらうか。マルクスは此の社會的進化の最も有力なる要素を、近世勞働階級の形成に見たのである。

マルクスに從へば、一つの生産組織――從つて社會組織――から他の生産組織への推移は、舊るき生産組織の胎内に、一切の新たなる生産條件が充分に發達した時に初て行はれる。そしてマルクスによれば、近世の團結し組織せられた勞働階級は新たなる生産條件のうちの、最も有力なる條件である。勞働者の階級的團體は單に其れが存在するといふ事實が、既に其社會の

經濟關係を變化せしめるものであつて、やがて新たる社會關係と、從つて新たなる社會組織を意味して居る。そして其うちから新たなる感情と、道德と、行動とが發達する。マルクスに從へば、近世の勞働階級は、資本主義的生產組織の發展そのものが、自己の懷の中に成長せしめた新たなる生產力であり、而かも最も有力なる生產力である。そして資本主義的生產組織に內在する法則の作用は、此新たなる生產力をして、最早や其外殼のうちには其れ以上の發展を續け能はざる迄に發達せしめて來た。

マルクス主義の政黨と勞働者の階級的團體である勞働組合とに對するマルクス自身の見解は、次の拔萃のうちに明らかに現はれて居る。

『勞働組合にして、若し其本來の目的を達せんとせば、決して政治的團體に從屬すべきものではない。勞働組合にして其獨立を失はんか、之れ勞働組合の死亡である。勞働組合は社會主義の學校であつて、彼所に勞働者は資本と鬪爭し、其結果社會主義に來る。一切の政黨は其傾向の如何に拘らず、唯だ一時の間勞働階級の熱狂を喚起するに過ぎないが、勞働組合は勞働階級の間に有力にして永久の結束を造る。斯くて勞働組合のみ、よく眞の勞働階級の黨派を形造り、勞働者の力をしてよく資本の力に對抗せしめるものである』

一八六九年、獨逸金屬工組合のハマンとの會見談のうちに、マルクスは實に斯う云つて居る。吾々は後年のマルクス主義者とマルクスとの間に、勞働者の階級的團體と社會民主黨との歷史的使命に關する大なる意見の差異のあることに驚かざるを得ない。マルクスが後年のマルクス主義——社會民主主義——を何の程度まで是認して居つたかは疑問である。マルクスが『俺か、俺はマルクス主義者ぢやない』と云つたのは、果して一片の諧謔と見做すべきであらうか。

七

マルクスによれば、硬き外殼の腐れて脫落した時に、新しき植物が其うちに芽ざして居なければならぬ如く、新たなる社會は、舊るき社會組織のうちに成長して居なければならぬ。そしてマルクスは新しき生產組織の胚種を近世勞働者の階級的團體のうちに認めたのであつた。

然しながらマルクスが其學說を築き上げた時に、マルクスが其『資本論』を書いた時に、マルクスは果して斯くの如き意味に於ける階級的の組織を、事實の上に見ることが出來たのであらうか。マルクスは之を推理の必然のうちに見た。科學者としてのマルクスは明らかに之を見た。けれど實際運動者としての

マルクスは、何づれの國の勞働界を顧みても、事實の上に斯くの如き革命的若くは創造的の階級を見ることはできなかつた。萬國の勞働者團結せよといふ標語の下に集つた、勞働階級の最初の國際的運動と云はれて居る當年の『インタナショナル』が、如何に内容の雜駁を極めたものであつたかと云ふ事實を見ても、當時に於ける各國勞働者の、階級的形成の程度を想像することができる。當時佛國には勞働組合は僅かに發達し、マルクスの本國に於ては、漸く其萌芽を見るに過ぎなかつた。英國の勞働者は『インタナショナル』の中堅を成したものであつて、組合運動は大に發達して居つたが、其勞働組合は、マルクスが大なる歴史的使命を認めた革命的の階級組織――舊るき生産組織を分解する力であると同時に、新たなる生産組織の核子となるべき階級的の組織――を距ること尚ほ甚だ遠いものであつた。マルクスは革命の力を勞働階級に認めたが、勞働階級の組織と心理とは、寧ろ却つて保守的のものであつた。此事實は其後の數十年間、マルクス主義の政黨と政治運動とが革命的と見做され、勞働者の階級運動――組合運動――が反つて保守的と見做されて居り、事實に於いても、そうであつたことによつても窺ふことができる。

斯ようにマルクス主義は學理として已に完成せられた學説であつたが、事實としては尚ほ形成中に屬して居た。マルクス主義の學説は、此の形成中の事實を豫見したものであつた。そして此預見は、實際運動家としてのマルクスに取つて餘りに早過ぎて居た。事實を反映したマルクス説には、尚ほ事實によつて滿たされて居ない部分があり、唯だ將來の事實の發展によつて滿さるべき餘白があつた。其後のマルクス主義の實際運動に於ける多くの矛盾は、此の事實に由來するものである。

八

一面に於ては舊き生産組織を分解するの力となり、其れと同時に一面に於いては、其れ自身が新たなる生産組織そのものであるといふ、二つの要件を具へた勞働階級の存在はマルクス説の成立の爲めに缺く可らざるものであつた。そしてマルクスは、現在の生産組織の發展そのものが、必然に斯くの如き階級組織と之に應ずる階級心理とを發達せしめることを豫想した。そしてマルクス説が此豫想の上に立つて居る間は――此の歴史的階級がマルクスの推理の上にのみ存在して居つた間は、マルクス主義の實際的方面は勢い政治運動政黨運動となつて現はれるの外なかつた。社會民主黨の政治運動を以て、マルクス主義の正統の運動と見做し、動々もすれば運動者の階級的運動を政治運動に從屬せしめようとした年來の傾向は、尚ほ形成の過

程中にあつた勞働階級の發達の程度を反映したものであつて、此の明白なるマルクスからの脇道は、必ずしもマルクス主義者の罪ばかりではない。

然るに此のマルクス說の餘白を滿たしたものは、實に其後に於ける勞働階級の發達であつた。マルクス說の堅實は、少くとも此一事——マルクスの豫想した如き勞働階級の出現——によつて立證せられたと云ふことが出來る今や各國に於ける進步した勞働者の組合運動は、明白に現在の生產組織に對する鬪爭の機關たる意識を有して居る。勞働組合は職業の組合から階級の組合となり、勞働運動は同業者の運動から階級の運動となつた。更に進步した組合運動は、勞働者の階級的團體たる勞働組合の組織を以て、直ちに新たなる生產組織そのものであると云ふ自覺に達して居る。五十年前に、マルクスが推理のうちにのみ見て居つたものは、今や活きたる事實によつて照燃せられて居る。斯くてマルクス說の餘白は滿たされた。或人は、社會主義はカントに歸れと云ふ。吾々は萬國の勞働者の間から、マルクスに歸ると云ふ聲を聞く。ベルンシタインによつて修正せられたマルクス主義は、も一度マルクスによつて修正せられなければならぬ。(七、四)

▽マルクス概觀

室伏高信

（一）

マルクスとラサーレとは屢々並び稱せられる。けれども若くして死せるラサーレの生涯が華々しきものであつたのに對して六十六才で逝けるマルクスの生涯は困苦と迫害との一生であつた。猶太人の兒として生れたカール・マルクスは、迫害と困苦のうちにその一生を終るべく運命づけられてゐたのである。ヴヰルヘルム・リープクネヒトのマルクス傳の冒頭に書かれてゐる有名なる一句を引用すると次のやうである『一八一八年五月五日、ローマ文明の紀念と、さうしてライン諸州から中世の屑(ラヒアン)を掃蕩しさつたフランス革命の新らしい遺跡、とのうちに立つトレエフエス——最も古るい獨逸の町——で、ある猶太人の家族に一人の兒、カール・マルクスが生れた。ライン地方がプロシアに領有されてからたつた四年を經たのみである。さうしてその新らしい主人等は異端フランス的に代ゆるに基督教的獨逸精神をもつてするための『神聖同盟』の事業に忙がしい時であつた。……『神聖同盟』の基督教的獨逸精神は異端フランス的平等

精神を輕蔑して、古るき呪ひの回縛を要求したのである。その兒の生れてから間もなく、凡ての猶太人に基督教の洗禮をうけるかそれでなければ凡ての公職と公務とから辭するか、二者その一つを撰むのほかなからしむる布告が發せられた。……………マルクスの父はこの避くべからざることに服從を強ゐられて、彼れの家族とともに基督教に改宗することとなつた。「かうした運命のうちに包まれて生れてきたマルクスは、六十六歲の全生涯を閉づるまで同じような運命の弄ぶところとなつてゐたのである。彼れはコローンを追はれた。巴里にも止まることはできなかつた。ブリユツセルにさへ止まることは許されてゐなかつた。たゞ國事犯人の避難所としてのロンドンにおいてのみ彼れの貧しき生涯を續けることが許された。迫害の歴史はまた同時に反抗の歴史でなくてはならない。彼れは既にその二十歲の時に、猶太人問題についての小冊子のうちで『神聖同盟』に反抗して立つた。彼れはプロシア主義に對する熱烈なる反對者であつた。彼れはギゾウとも鬪つた。資本主義とは一生涯の戰ひをつゞけた。さうしてまたバクーニンの無政府主義プルードンの『貧困の哲學』とも鬪つたのである。さういふわけであるから、マルクスを論ずるためには、この困苦と迫害と、さうしてこの困苦と迫害とから自然に促される反抗の精神とに無關係であることはできない。ヴヰルヘルム・リープクネヒトはマルクスの生涯を批評して、暴力に對する答(レツフアイ)の生涯、復讐の生涯であるとさへ申してゐます。この困苦と迫害とさうして復讐の生涯とから殘されたものが謂ふところの科學的社會主義である。

（二）

實際運動家としてのマルクスは到るところにその卓越したる才能を現はした。彼れが『ライン新聞』Rheinische Zeitungを起したのは僅に二十五才の時であつた。この二十五才の青年は新聞記者としての驚くべき才能を發揮した。ライン新聞が禁止されてから後のマルクスはアーノルド・ルージユとともに『獨佛年報』Deutsch Französische Jahrbücher を發行した。マルクスはこの獨佛年報のうちでヘーゲルの法律哲學並に猶太人問題についての長篇の論文を書いた。彼れはヘーゲルの法律哲學についての論文のうちで次のように述べてゐる。『新革命は哲學によつて導かれるであらう。獨逸の革命的傳統は理論的である。宗教改革は僧侶の事業であつた。けれども革命は哲學者の事業である』と。マルクスは、獨逸に對する實際的の唯一の解放は、人間が人間に對して最高の存在であることを説明する理論の立場からくる解放でなければならないと主張する。』……そ

れゆえに獨逸の解放は人間の解放でなくてはならぬ。この解放の首腦は哲學である。それの核心は無產階級である。』マルクスはこう述べてゐます。彼れの思想は、この時において、既に空想社會主義に何の同情をもつてゐないことを證據立てゝゐた。さうしてヘーゲルの歷史的進化に深い信仰をもつてゐることを證據立てゝゐた。『獨佛年鑑』の廢刊後彼れの主宰したものが『フオルヴエルツ』Vorwarts である。『フォルヴエルツ』は巴里において發行された。彼れはそのうちにおいてプロシアの政治に對して痛切なる攻擊を加へたために、ギゾウによつて巴里――フランス全土から立去るべきことの命令をうけた。一八四七年には、プルードンの『貧困の哲學』Philosopie de la Misère に對して『哲學の貧困』Misère de la Philosopie が現はれた。一八四八年には有名なる『共產黨宣言』Das Communistische manifest が發表された。その年の六月に『新ライン新聞』が現はれた。一八五九年には彼れの『經濟學批判』Kritik der Politischen Oekonomie が發表された。一八六四年には歷史上の一大事件が彼れによつて企てられた。『國際勞働者協會』The International Workingmen's Association の創立がこれである。それから一八六七年になつて有名なる『資本論』Das Kapital の第一卷が出版された。これ等の事業はマルクスが實際家としてもまた學者としても、卓越したる才能の人であることを證據立てゝあまりある。さうしてその事業と生活との結晶として殘されたものが實にマルクスの科學的社會主義そのものである科學的社會主義は彼れの生活の一切であると申すことができます。

(三)

科學的社會主義とは空想的社會主義に對してのものである。オウエンやフーリエーの空想的社會主義に對してマルクスの科學的社會主義が存在するのである。マルクスはヘーゲルやフオイエルバツハからの影響をうけてゐるごとくにオウエンやフーリエーからも影響をうけてゐる。フオイエルバツハから唯物的思想を學んでゐるマルクスは、ヘーゲルから歷史哲學を學んでゐる。リカードやトムソンの經濟學からの影響をうけてゐるとも勿論である。更にオウエンやフーリエーからも社會改革者としての刺激をうけてゐる。けれどもマルクスの社會主義がオウエンやフーリエーの社會主義に對して何等の同情をももつてゐなかつたといふことは、前にも指摘したとほり、『獨佛年報』に發表された論文によつても知られてゐるとほりである。スパルゴウの言葉に從へば、マルクスによつて社會主義そのものが革命せられるに至つたのである。フーリエーやオウエンにおいて

は、社會主義はたゞ社會的幻想であるに過ぎなかつた。これに對しマルクスの社會主義は社會主義は避くべからざるもの、即ち進化の必至 evolutionary Necessity として主張せられることとなつたのである。彼れの社會主義が單なる空想 Utopie でなくして科學的 Wissenschaftlich であると稱せられることはそれが單なる社會的幻想から離れて進化の必然性のうへにその社會主義の基礎が發見せられるに至つたがためである。

（四）

マルクスの科學的社會主義の最も重要なる原則はこれを五つに分けることができる。その一つは唯物史觀である。その二は資本集中說である。その三は資本主義の壞滅說である。その四は餘剩價値說である。その五は階級鬪爭說である。この分類はカウツキーの試みてゐるところである。そのうち彼れの學說の最も重要なる根底をなしてゐるものの一つはいふまでもなく唯物史觀である。またマルクス批評家によつて最も多く攻擊されてゐる部分もこの點であるといふことができる。彼れがその唯物史觀說を最も明白にしてゐるものは『經濟學批判』の序である。その序文のうちで彼れは次のやうに述べてゐる。『物質生活における生產方法は社會的、政治的及び精神的生活過程を決定する。彼等の存在を決定するものが人々の意識であるのではなくして、却つてこれとは反對に、彼等の社會的存在がそれの意識を決定するのである。』即ち人間の生活――政治的、社會的、精神的生活は、物質生活における生產方法によつて變化するものであるとなしてゐるのである。それゆえにマルクスの唯物史觀なるものは、たゞ歷史的進化の法則である。歷史的進化の法則を決定する最も重要なるものが生產方法――經濟的原因であることを指摘してゐる。エンゲルスは更に一步を進めて、この人間生活における歷史的進化を決定する唯一の原因が經濟的要素であるのではないことを述べてゐます。たゞそれが重要なる一原因であるとなしてゐるのである。それゆえにマルクスの唯物史觀をもつて哲學的唯物論と同一視することは誤りである。『唯物哲學は宇宙の起原の說明である。マルクスの歷史的唯物主義にはさういふ企は一切含まれてゐない。それは社會發展の理論より以外でもなく以內でもない。』スパルゴウはかう申してゐます。(Spargo, Social Democracy Explained, P.129) 繰返していへばマルクスの唯物史觀なる者は哲學的唯物主義でないのみならず、また物質生活における生產方法が人生の凡てを決定すべき唯一の要素であるとなしてゐるのでもない。それゆえにセリグマンが唯物史觀といふ名を不適當であるとして排斥して、之に經濟史觀といふ名稱を與へてゐることは正當なことである。

(Seligman, The Economic Interpretation of History, P. 4)エンゲルスはその晩年に書いた手簡のうちでマルクス及びエンゲルスの唯物史觀なるものがその門徒等によつて誇張されてゐることの事實を訴へてゐます。(Der Sozialistische Akademiker, Oct.1895) またマルクス自身も凡ての過去の傳統が人間の頭腦を支配する大なる力であることを認めてゐます。(Marx, The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte, P. 5) さういふわけであるからマルクスの唯物史觀なるものをもつて、生産上の手段が一切の人間生活を規律する唯一の原因であると解釋し、または哲學上の唯物論と混同するものは、それがマルクスの盲目的の信者であらうと、またその反對者であらうと、何れにしても正しくマルクスの謂ふところの唯物史觀を理解してゐるものとは思はれない。私はこう解釋してゐる。こう解釋することによつて彼れの唯物史觀なるものに多くの眞理を見出してゐるのである。就中、それが資本主義勃興時代の産物であることにおいて特に深い興味を感ずるものである。ヴヰルヘルム・リーブクネヒトはマルクスの『資本論』を批評して『資本論(ダス、カピタル)は倫敦においてのみ生れることができた』と申してゐます。リーブクネヒトの言葉は至言であると思ひます。それは『資本論』の引用書四百冊のうち三百冊までが英國の出版にかゝるものであるといふの意味においてでもない。また倫敦が國事犯人の避難所であつたがためでもない。英國において資本主義が勃興してゐたからである。實にこのマルクスの唯物史觀なるものはこの資本主義勃興時代の産物――時代精神の反映であり、その時代に對する深刻なる批評である。この點においての彼れの唯物史觀なるものの價値は無限であるといふことができる。けれどもそれが科學的體系としてどれだけの價値をもつてゐるかの問題と時代批評としての價値の問題とは自ら別問題でなくてはならない。マルクスに從へば『手臼の生産方法が封建諸侯の社會を産み、蒸氣臼(スティームミル)の生産方法が産業的資本家の社會を産出したものである。(この論文はハインリヒ・クノーが蒐集して一九一一年『新時代(ノイエツァイト)』に掲載したものである)この點も封建制度から資本家制度への推移を説明するものとしては間然するところのないものである。けれども蒸氣臼 Steam-mill は獨り資本家は社會を造つてゐるばかりではなく、その蒸氣臼の時代において、ロシアにはボルシエヴヰキ・レヂームが生れてゐる。獨逸にはソーシヤル・デモクラシーの社會制度が生れつゝある。勿論マルクスは資本主義の爛熟する時は社會革命を齎らすものであることを認めてゐるのであるが、そのこと自身が生産方法と社會的政治的又は精神的生活過程と物質生活における生産方法とが必

然的の關係をもつてゐるものでないことの反證ではないか。これを要するにマルクスの唯物史觀なるものは封建制度から資本家制度、手工業時代から機械工業時代への推移を物語るものとしては深刻且つ凱切な批評であるが、これを科學的體系として見る時は多くの缺點をもつてゐる。唯物史觀なるものはマルクスの科學的社會主義の重要な一根底であるにもかゝわらず、今日においては最早やこれを維持することはできない。

（五）

私は更に進んでマルクス主義の他の要素についても述べなくてはならないが、こゝにはその一切を略するのほかはない。たゞこゝに一言する必要のあることは、既に唯物史觀について述べてきたように、マルクス主義の諸說のうちには多くの缺點が含まれてゐる。エンゲルス自身もその晩年（一八九五年）において彼れ及びマルクスの學說の間違つてゐたことを回顧して次のように述べてゐます『歷史はわれ等（マルクスとエンゲルス）の誤りであつたことを證據立てた。歷史は大陸における經濟的發達の狀態が、資本主義的生産方法の廢止のために少しも熟してゐなかつたことを明白にした。』と。（Karl Marx, Die Klassenkämpfe in Frankreich, P. 8）社會主義の內部からマルクス主義の反對者としての『修正派』の起つてゐることはこゝにいふまでもないことである。修正主義の指導者としてのベルンシュタインは既に一九一五年三月にその修正主義を抛つたと報ぜられてゐるが（Hyndman, The Future of Democracy, P.1[illegible]）ベルンシュタインの態度の如何にかゝわらず、マルクス主義に對する彼れの批評の價値と、並に修正主義が現代社會主義に與へたる影響とはこれを拭ひさることはできない。それのみならずフランスのサンデカリズムにしても、英國のギルド・ソーシャリズムにしても、みな正統マルクス主義でないことは勿論である。それゆえに今日においてはマルクス主義をもつて直に社會主義であるといふことはできない。シムコヴヰッチ教授が一九一三年に一書を著して『マルクス主義と社會主義』とを對立させてゐることは決して不當な企てゞはない。

（六）

マルクス主義は多くの缺點を暴露してきた。けれどもそれ等のことはマルクスの偉大なる功績――近世社會主義の基礎を築いた――を沒却するものではない。この意味において次に引用するスパルゴウの言葉に興味を感じます。『社會主義は避くべからさるものであるとするの觀念は、それが眞理であつてもまた眞理的でなくても、偉大なる靈感であつた。』（六月二十一日）

▽三十歳のマルクス

堺　利　彦

新ライン新聞時代のマルクスの事を少し書いて見る。

一八四八年、マルクスは獨逸のコローンで發行される新ライン新聞の主筆として、例の大膽勇邁な筆鋒を揮て、猛烈に獨逸政府を攻擊した。殊に巴里の六月一揆が起つた時、最も大膽に勞働者の肩を持つて紳士閥を痛罵した。

マルクスの此の態度は、獨逸政府のみならず、株主中の或者及び民主黨中の或者からも批難され嫌忌されたが、それでもマルクスは猶ほ其の剛愎を續けてゐた。

秋になつてコローン市に戒嚴令が布かれ、新ライン新聞は發行を停止されたが、其の停止命令に反抗して市民の大集會が催され、市中にバリケードが築かれるほどの騷ぎを起した。

此年の夏、民主黨の大會がコローンに開かれた。此の大會に於けるマルクスの態度を、カルル・シユルツといふ一青年が憤慨して書いた文章がある。

『マルクスは當時三十歳を幾許も越えてゐなかつたが、既に社會主義的急進派の首領として承認されてゐた。其の頗る頑丈な體格と、廣い額と、黑い髮と髭と輝く眼とが、直ぐに一般の注目を引いた。彼は大學者といふ評判が高かつたので、私は此の名士の口から出る言葉を熱心に聞いてゐた。所が、其の期待は全く外れた。彼れの言葉は如何にも意味深く、論理的で且つ明晰であつたが、然し私は彼ほど傲岸な頑冥な人物を見た事がない。彼は自分の說と違つた發言には一顧だも與へなかつた。苟くも彼に反對する者は悉く輕蔑擯斥を蒙り、苟くも彼れの好まざる議論は全然無智無學として嘲弄され、又その提出の動機を口ぎたなく罵詈された。私は、彼が「紳士閥的」といふ語を發した、其の皮肉な、輕蔑した調子を最も明瞭に記憶する。彼は彼に反對する總てのものを、悉く「紳士閥的」として、即ち最大なる精神的及び道德的の墮落として排斥した。で、云ふまでもなく、何人も彼れの行動に反感を抱き、彼れの主張する所には何事でも反對しようとしたので、彼れの提案は總て否決された。彼は此の大會に於いて味方を得なかつたばかりでなく、却つて多くの人を反撥した事は明瞭である。』

然るにアメリカのフーリエー派の名士アルバート・ブリスベーンは、同じく此の大會に於けるマルクスに就いて、全く反對な事を語つてゐる。彼れ曰く、

『私はそこで民主運動の首領たるマルクスを見た。彼は今正に

名聲を揚げつゝある所で、年は三十ばかり、頑丈で脊は低く立派な顔と濃い黒い毛とを持つてゐた。一見した所、精力過絕な人物で、其の落ちついた態度の底に、斷乎たる決意の情熱を藏してゐた。彼れの第一の感情は、資本の力と、其の掠奪と其の私慾と、其の勞働階級の壓伏とに對する憎惡であつた。

『此の青年が當時の經濟組織に對する反抗の第一聲を擧げた時、それが他日、此の永續せる現制度顚覆の重要なるテコとならうとは、殆んど誰も想像しなかつたであらう。ボーロの同時代の人が、彼が世界の將來に及ぼした大影響を想像し得なかつたと同じわけである。マルクスは實に近代に於いてボーロと同じ重要さを有する人物である。』

然しマルクスが其の口元に皮肉と嘲笑とを漂はせて、酷烈に論敵を攻擊したのは、確かに一部の人の反感を買ふに足るものがあつたらしい。彼は人を愛する事も深かつた代りに、人を憎む事も甚だしかつた。彼れの著書にも隨分皮肉な猛烈な者が多いが、彼れの論辯には一層それが甚だしかつたものと見える。それは此の時代は、彼が新意見と新學說とを以て、民主黨中に新思潮を作りあげようと努力したのだから、其の破邪摧伏の態度が殊に猛烈であつたに相違ない。それに又、彼の青年シユルツはキンケル博士の崇拜者で、キンケルが此の大會でマルクスと衝突し、頗る面目を損じたらしいので、シユルツが一層憤慨したものらしく見える。

× × × × × ×

然しマルクスの傲岸な、時として意地の惡い態度は、其の追隨者が樣々に辯護するに係はらず、遂に掩ひきれぬ所がある。彼とバクニンとの關係が善くそれを示してゐる。

其年の夏の初、マルクスとエンゲルスとがコローンに於いて間もなく、ミハエル・バクニンが巴里からやつて來た。マルクスとバクニンとは例の如く論爭した。其の論爭の主題は、前年に於けるヘルヱヒの獨逸侵入一揆の企に對し、マルクスとエンゲルスとがそれを無謀の輕擧だとして反對した一件で、從つてヘルヱヒの行動に對する彼等の賛否は非常に猛烈な論難に終つた。そして結局、バクニンは再びマルクスとは口をきかぬと宣言して、大立腹で、コローンを立つた。マルクスも固より同じ樣に立腹してゐた。

バクニンが立腹したのは、一つはヘルヱヒに對する友情からでもあつた。マルクスとエンゲルスとがヘルヱヒの其の事件を猛烈に攻擊すると、バクニンはそれを以て直ちにヘルヱヒに對する人身攻擊だと痛感した。バクニンは主義と人格とを區別して考へる事が出來なかつたのだと評する者もある。然しマルクス

も主義を攻撃すると同時に、其の人物の感情的な所を嘲罵したに相違ない。尤もバクニンはそれから數年後に、あの問題は、今から考へると、マルクスとエンゲルスの說が正しかつたのだと率直に自己の非を認めてゐる。

所が、一八四八年六月六日の新ライン新聞に、バクニンの終生忘れる事の出來なかつた記事が載つた。それは、バクニンが巴里駐在露國大使に使はれてゐる探偵で、其の證據書類が有名な女小說家ジョージ・サンドの手に在ると云ふのであつた。無論バクニンは大いに怒つた。そしてジョージ・サンドに手紙を送つて、其の無實の證明を求めた。サンドは早速、新ライン新聞に手紙を送り、彼の記事は全然虛構で、自分はバクニンに關する書類など一つも持つて居らぬと明言した。

マルクスはサンドの手紙を紙上に載せて、次の如き斷り書を添へた。『彼の記事は巴里の通信員からよこしたもので、自分等は公人の行爲を監督する新聞の職責上、當然の事としてそれを載せた。而も彼の記事は、久しく巴里人の或る一部に行はれてゐる嫌疑を一掃するの機會をバクニンに與へたものである。』

それから數日の後、マルクスとバクニンとの間には、友人等の仲裁で形式上の仲直りが出來たが、バクニンの心は遂に充分解けなかつた。バクニンに對する此の嫌疑の無根であつた事は云ふまでもない。

然るに一度立てられた噂は中々消えず、バクニンは殆んど終生之が爲に惱まされた。現に一八六九年の萬國勞働者大會で、リープクネヒトが又その問題を持ちだし、バクニンの請求で調查委員が設けられ、其の結果、無實が證明されてリープクネヒトが謝罪的の取消をした事もある。然るにマルクスは其後にも猶ほ幾分バクニンを傷けんが爲、態と此の風說を利用したらしく見える事實がある。

それから數日後、バクニンが『スラヴ人に訴ふ』と題する文章を發表した時、マルクスが又猛烈にそれを攻擊した。「バクニンは我々の友である。然しそれが爲に彼れのパンフレットの攻擊を止めるわけに行かぬ」とマルクスは書いた。此の攻擊が又バクニンの崇拜者であつたヘルツエンの怨を買つた。ヘルツエンは後にマルクス派の主義態度を取るに至つた人であるが、後にバクニンがマルクスの『資本論』を反譯しかけた時には、大いに其の態度を訝かつて『僕がマルクス派を敵視して來たのは、バクニンの爲であつたに』とさへ云つてゐる。

バクニンも隨分癇癖の強い熱狂家であつたらしいが、然し非常に正直な所のあつた人と見える。彼が曾てヘルツエンに送つた書中に、マルクスの事を大人物と書いたのを見て、ヘルツエ

ンが其の說明を求めた時、彼は次の如き返事を送つた。『公平に考へて、彼れの偉大を拒む事は不可能である。彼が廿五年間、最も有力に、有効に、社會主義の爲に盡した大功績は何人も之を否認するわけに行かぬ。共點に於いて彼は疑ひもなく我々に優つてゐる。彼は萬國勞働者同盟の創立者の一人である。其の大功績は、彼れの我々に對する態度に係はらず、予の常に承認する所である。』

× × × × ×

それから民主々義運動がいよ／＼盛んになつて、民主黨員ブルム射殺事件、十一月のクーデターなどがあり、新ライン新聞は日々市民に訴へて、市民に宜しく自ら武裝して納稅を拒絶すべしと論ずるに至つた。

此の事件に依り、新ライン新聞の主筆マルクス、副主筆エゲルス、庶務長ゴルプの三人はコローンで、又ラサールはヂュッセルドルフで捕縛された。

翌年春（一八四九年）、此の事件の裁判が開かれた。其時マルクスが法廷でやつた辯論は有名なもので、簡單で、明晰で、論理が精密で、法理上、決して反逆罪の成立すべからざる事を力說し、冷靜沈痛に政界の現狀を批評し、平民階級の立場を擁護したのであつた。それで彼は遂に無罪を申渡され、陪審者の一人は特に使を彼に送つて、其の有益な辯論に感謝した程であつた。

それから三ケ月の後、ラサールの裁判が開かれた。其時のラサールの辯論が又有名なものであるが、然し其の主意に於いては殆んどマルクスの辯論をソツクリ其まゝ流用したのであつた。尤もラサールはマルクスと反對の派手好みで、花の如き修辭と火の如き熱情とを以て其文を飾つたので、そこに又彼れの新氣があり、別樣の力も生じたのであつたが、兎にかく彼は殆んどマルクスを師としてゐたのである。

斯くてプロシヤ政府は、裁判でマルクスを壓伏する事が出來ないので、更に他の方法を以て此の有力の敵を仆さうと試みた。其時恰かもドレスデンでバクニンが一揆を起し、又ライン諸州で處々に擾亂が起つた。マルクスは固よりそれ等に聲援を與へた。其の結果、マルクスは遂に追放を命ぜられ、新ライン新聞は禁止された。それで新ライン新聞の終刊號は五月十九日血色の赤インキを以て刷りだされ、有名なフライリヒラートの告別の詩が載せられた。"Farewell, but not forever farewell! They can not kill the spirit, my brother."『さらばよ、されど永久のさらばには非ず。彼等は精神を殺すこと能はず』といふのが其の最初の二句である。

× × × × ×

マルクスは此の時代にも隨分貧乏な生活をした。彼は妻と三人の子供との一家族で、時としては本當に食ふ物の無かつた事すらあつた。新聞の經濟は固より困難で、社員の俸給すら十分拂へぬ場合が多く、そんな場合にはいつもマルクスとエンゲルスとは少しも俸給を取らなかつた。

法律上から云へば、マルクスは新聞社の負債に對して責任はない。殊に追放を命ぜられて見れば、債權者もそれをどうする譯に行かぬ。然しマルクスは、立つ鳥も跡を濁さぬといふ意味で、總ての諸拂ひ、賃銀や俸給の拂ひ殘りまで、スッカリ片をつけて了つた。それが爲には、家財一切の外、妻エニイが里方のエストファーレン家から讓られた大切な品々まで、大抵賣拂はれて了つた。

斯くてマルクスは、辛うじて旅費だけを殘し得て、一家を携へて巴里に行つた。『マルクスのキチョウメン』は後にまで同志の間に有名であつた。

▽マルクスの識見は偉大なり

北澤新次郎

○千八百八十三年三月十四日稀世の大革命者カール・マルクスは眠るが如くにして死去した。ハイゲート墓地に於て彼れの盟友フリドレッヒ・エンゲルスは涙に咽び乍ら叫んだ『マルクスが社會學に貢献した事はダルウインが生物學に於けるが如し、而して兩者の姓名は永遠に連想せらるべし』と。今やマルクス逝つて三十有餘年彼れの名聲は年を逐ふて高まり現今に於てはダルウインの名を聞かざるものあるもマルクスを知らざるものは殆んどない。實に今日の社會に於てはマルクシズムスは人類改造の中樞的勢力を形成してゐると云ふも敢へて過言ではない。

（一）吾人の考察に依ればマルクスの社會主義は餘りに物質的見地のみを重要視し、精神的心理的方面を等閑に附した傾向がありはしまいかと思はれる。彼れの主張した唯物史觀論は餘りに經濟的環境に過大の價値を與へては居らぬかと疑ふものである。成程マルクスの云ふが如く社會的生活は人間の意識を決定する事は事實であるが、其れと同時に人間の意識も亦其社會的生活狀態を決定するものではあるまいかと思ふのである。然し乍ら現今の如き資本主義的社會に於ける生産關係が遂に行き詰つて崩壞せざるを得ない樣になるとのマルクスの豫言は實に卓見である。唯其時に直ちに彼れの豫想した如く社會主義の社會が其儘現出するか否かは解らない。兎に角マルクスの唯物史觀論は

餘りに經濟的要因のみを重要視した樣であるが、彼れが他の精神的要素を全く考慮しなかつたのであるかと云ふ點になると吾人は迷はざるを得ない。蓋し彼れはリカードやミルの如き純然たる經濟學者ではない。ボーン大學やベルリン大學では其の專攻は自己の意思に反した法律であつたが、彼れが最も興味を持つて研究したのは哲學や歷史であつた。其の卒業論文も亦哲學の問題である。更に彼れの家庭に於ける生活を見ても、其の親友に對する態度を撿しても、彼れが普通所謂物質的巧利的な唯物論者であつたとは推察が出來ない。然し乍ら彼れの著書に顯はれた所論から推すと他の方面を省みなかつたとしか思はれない。

○其他マルクスの價値論にしても其餘の論究事項にしても、矢張り其當時の經濟學的理論の缺點を包藏してゐる結果幾多の缺陷のある事は免れない。然し乍らマルクスの眼識が其の當時の經濟學者、哲學者より遙か優秀なりし點は夙に資本主義的社會の弊害を洞察し、其れを遺憾なく指摘し、之れに對するオルタネテイブを提供して近代社會主義の基礎を建設したる事である。實に這回の世界大戰の原因及其の結果を考ふるにつけてもマルクスの識見の偉大なるを想はざるを得ない。

▽マルクスの坊主と袈裟

高畠素之

（一）

坊主が憎くけりや袈裟までの逆を行つて、人物を愛慕すると其人物に附屬する一切に惚れ込むと云ふ、謂ゆる人物崇拜、盲目的の沒我道樂は、僕の頗る滑稽視する所である。僕は人物に惚れ込むことはあつても、其人物の有する主義・主張・學說・思想の內容に對しては、常に冷靜の批判的態度を守るつもりである。又、主義・主張・學說・思想の範圍內に於ても、其一部を受入れるが故に、他の部分までを受入れねばならぬとは信じて居らぬ。善い所は取るし、惡い所は捨てる。彼方からも此方からも、善い所だけを（或は善いと信ずる所だけを）掻き集めて來て、それを自說の爲に利用し吸收し總合し組織する。何もかも自分の爲であつて、相手の人物の爲ではない。僕は常に斯う云ふ態度で、總ての人物に對してゐる。

（二）

僕はマルクスと云ふ人物が大好きである。あの猛烈な氣性と、總てを支配せねばやまぬと云つたやうな熱火の如き橫暴恣

と、そしてそれを指導し調味する鐵の如き意力と、縱橫無碍の奇略と、鋭利なる頭腦と、該博なる智識と、辛辣なる掛引と、小兒の如き無邪氣さと、春風の如き溫情とは、眞に人間臭き人間の王なる哉と叫ばしめる。僕は世界史上、未だ曾てマルクスほど偉大なる人物を發見したことが無い。

然し此偉大なるマルクスの學說になると、必ずしも總てが偉大と云ふ譯ではない。或部分は既に陳腐化し、我部分は今尙ほ新鮮である。新鮮なる部分と雖も、必ずしも總てが全完と云ふ譯ではない。

（三）

マルクス說は、便宜上これを哲學的、社會學的、及び經濟學的の三方面に區分して考へることが出來る。哲學的方面に於ては、彼れは徹頭徹尾**唯物的一元論**者であつた。唯物的一元論は總ての既成形而上學說（或は實在論（オントロギー））のうち、此較的最も眞理に近くものと、僕は信じてゐる。只、それは總ての實在論の豫備條件たるべき、認識作用の考察を缺いてゐる。宇宙萬有は唯物的に一元だと云つても、人は元來宇宙萬有と云ふ絕對的實在を認識する能力を具備してゐるか何うか。それを先づ定めなくつては論にならぬ。

僕の見る所に依れば、我々の認識機關は只時空に制限された感覺經驗のみを許るす。我々に認識せらるゝ世界は、悉く時空の有限界に限られてゐる。我々は到底、此時空有限界以上の世界を知ることは出來ぬ。我々は只、感官の色眼鏡を通しての世界を知り得るのみである。此の眼鏡を離れての、卽ちカントの謂ゆる『物それ自體』の世界は、我々の認識の外にある。そして我々の認識に屬する世界、卽ち我々の感覺經驗の範圍內に於ては、總てが唯物論者の主張する通りに動いてゐる。其所には一點の『自由』がなく、只『必然』があるのみである。

故に若し、唯物論が單なる諸科學の科學として、我々の經驗界のみを其研究對象とするならば、僕は一點も唯物論に反對する理由を見出さぬ。然るに唯物論者は、其自ら意識すると否と、公言すると否とに拘らず、事實上、形而上學（或は實在論）の繩張りに踏入つてゐる。なぜならば彼等は、我々の經驗界が卽ち實在界であつて、我々の經驗の外に實在は無いと主張するからである。

此點になると、唯物論は却つて唯心論に對して一籌を輸する嫌ひがある。なぜならば、或々の經驗の外に實在は無いと云ふことは、我々の主觀の世界が卽ち實在だと云ふことになつて、こ結局バークレイ流の極端な觀念論に降參することになるからである。此弱味があるので、同じマルクス正統派の中でも、ボー

ル・ラファルグの如きは、我々の五感に映じた世界ほどアテにならぬものはない、我々は自己の五感でなく、物質の感覺に依つて眞理を認識するなどと云ふ、意味ありさうなナンセスを持出すことになつたのである。

兎にかくマルクスの唯物的一元論は、他の總ての既成唯物論と同じく論理の不徹底であつて、マルクスの辿つた論理の脈絡を今一歩押し進めたならば、結局僕の謂ゆる懷疑的唯物論に到達しなければ止まなかつたであらう。

(四)

次ぎにマルクス說の社會學的方面は、即ち『唯物史觀』或は『經濟史觀』として知られてゐる。所が此說にも亦、唯物的一元論と同じ程度の論理の不徹底がある。

マルクスに從へば、『人の衣食住を生產する方法』が、即ち其社會上及び智識上の一般生活を決定する。『然るに『人の衣食住を生產する方法』或は簡單に『出產方法（プロデウクチオンスワイゼ）』なるものは、人間對自然の直接關係としての生產方面即ち生產技術（テクニーク）ではなく、人間對人間の關係、即ち社會關係を通じての、人間對自然の關係である。然るに社會關係と云ふ以上は、必ず其れに照應した一定の、法律上（並びに德德上）及び政治上の關係がなければならぬ。我々は經濟上の關係を外にして社會關係を考へることが出來ぬのと同じく、又法律上及び政治上の關係を外にして社會關係を考へることは出來ぬ。經濟關係は社會關係の實質を示し、法律上及び政治上の關係は即ち其形式を示してゐる。同じ社會關係を、其實質的方面から觀察すれば經濟關係となり、其形式的方面から觀察すれば政治法律關係となる。經濟と法律及び政治とは、互ひに因果的關係に立つものでなくて、同位同格（コオルヂナート）のものでなければならぬ。

故にマルクスが、生產方法を以て法律上・政治上其他の生活を決定するものとなしたのは誤りである。生產方法その者が、既に一定の法律政治關係を前提してゐる。それは決して、マルクスの謂ゆる『物質的』關係にのみ極限されるものではない。生產方法はマルクスの主張する如く、法律的及び政治的『上部建築（ユーベルバウ）』の依つて以て組立てらるべき『社會の眞實の基礎』ではなくて、法律上及び政治上の諸關係に締め括られた、社會生活上の實質的內容である。

尤もマルクスは他の一方に於て、此生產方法その者が又更に『物質的生產力』に依つて決定されることを認めてゐる。彼れは言ふ『人類は社會的に其衣食住を生產する爲に、自己の意志からは獨立の、必然的の或種の關係を造る。其關係は即ち其社會に於ける物質的生產力の發達程度に相應する生產關係である。

此關係の總和が社會の經濟的構造、即ち眞實の基礎を成すもので、此基礎の上に法律的及び政治的の上部建築が組立てられ、又之れに相應して或種の社會的自覺が生ずる事になる。』(『經濟學批評』序文)。即ち『社會の眞實の基礎』たる『生産關係』は、『物質的生産力の發達程度』に適應するものでなくてはならぬ。換言すれば『社會の眞實の基礎』の眞實の基礎は、物質的生産力だと云ふことになる。

然るに此物質的生産力なるものは、其れ自體として生ずるものでなく、更に又他の種々なる條件に決定される。マルクスは其れらの決定條件の主なるものとして、『勞働の熟練の平均程度、科學並びに其工藝的應用の發達程度、生産行程の社會的結合、生産機關の範圍及び能率、及び諸種の自然關係』を擧げてゐる。(『資本論』第一卷第六版六頁)即ち其中には、科學の如き智識上の條件があるし又生産行程の社會的結合の如き純社會的條件(既に法律上及び政治上の諸關係を前提とする所の)もあつて、社會の眞實の基礎が却つて或範圍まで、其「上部建築」に決定されることを許るすことになる。

要するに、社會的諸關係の間に、交互因果的の連絡を求めやうとする態度が間違つてゐるので、社會的諸關係は總て同位同列のものである。いづれが原因、いづれが結果と稱すべきものでなくて、總て同時に並存するものである。只、同じ社會生活を其内容的方面から見れば經濟生活となり、其形式的方面から見れば法律政治生活となると云ふ差異が存するのみである。

(五)

最後にマルクス説の經濟學的方面を考へて見る。マルクスの經濟學説は『資本論』前後三卷に網羅されてゐる。勞働價値説、剩餘價値説及び生産價格説の三の主要方面を含んでゐる。そして此三者の間には、首尾一貫した論理の脈絡がある。剩餘價値説は勞働價値説の必然の歸結であり、生産價格説は又勞働價値説及び剩餘價値説の論理的歸結である。マルクス批評家の間には、マルクスの生産價格説は其勞働價値説及び剩餘價値説を裏切つたものである、生産價格説は眞理であるが、他の二説は虚妄であると主張する者が多いが、僕は左様に信じない。勞働價値説及び剩餘價値説の根底に立脚しないで、生産價値は何うしても之れを充分に説明することは出來ぬ。(尚、此問題に就ては『國家社會主義』六月號拙文『資本論第三卷まで』及び拙譯『マルクス資本論解説』原著者序文並びに同書第二篇第四章「剩餘價値と利潤」參照)

然し僕は、マルクスの經濟學説が其唯物史観説の歸結若しくは應用であると云ふ、マルクス自身及び一般マルクス信徒の説

に左程重きを置くことは出來ぬ。マルクスの經濟論は其唯物史觀說から引離しても、結構存在の意義を保ち得る。歷史哲學に於て唯物史觀を排斥し、經濟論に於て勞働價値說その他を受入れることは少しも論理の矛盾でない。マルクス自身の主觀に於て、其經濟論が唯物史觀の應用であつたからと云ふて、我々も亦左樣に信ぜねばならぬ理由はない。『資本論』前後三卷の本文數千頁を通じて、唯物史觀を積極的に說いた所は一箇所もない。偶々それに言及した箇所はあつても、それはホンノ暗示に過ぎず、分量から云つても僅々十數頁に過ぎぬ。其十數頁を全部削除しても、『資本論』の論理的連絡はそれが爲に何等の支障中斷を受けぬ。

（六）

マルクスの經濟論、殊に其根底たる勞働價値及び剩餘價値說に對しては、批評家側からいろ／＼の反對論が提出されてゐるが、殆ど一つとして取るに足るものがない。但し茲で一々それを數へ立てる餘裕がないので、就中目星しいもの三四を槍玉にあげて筆を擱く事にする。

第一、マルクスは價値の要件として、物の效用性即ち使用價値を無視したと云ふ說。マルクスは勞働が價値の唯一の源泉であることを主張すると同時に、使用價値が價値の前提條件であることを主張した。使用價値の差異がなければ交換は行はれぬ。交換が行はれなければ商品はない。商品のない所に、價値の考察は無意義である。只、種々なる使用價値としての商品が互ひに交換されるには、其夫々に共通の第三者が含まれて居らねばならぬ。それが即ち勞働である。そして夫々の商品の交換比例は、其體現する勞働の分量に依つて定まると云ふのが、マルクスの眞主張である。マルクスは決して價値の豫備條件としての使用價値を無視せざりしのみか、却つて其れを自說の出發點と成してゐる。

第二、勞働の分量が價値の大小を決定するとするならば、生產者は怠惰であり不熟練であるに從つて、益々多大の價値を產出すべき筈であると云ふ說。マルクスは價値の大小を決定するものが個人的勞働の多寡でなくて、社會的に必要なる人間勞働の分量であることを主張する。隨つに、社會的標準以上に怠惰不熟練なる者は、たとひ人一倍長時間働いても、其割りに多大の價値を造ることは出來ぬ。

第三、價値が勞働に依つて決定されるものならば、何ゆゑ勞働を加へざる土地に價値があるか。曰く、土地には價値なし。地價は地代を資本に評價したものに外ならず。地代は剩餘價値の一形態である。剩餘價値は勞働價値說に依らなければ、充分

に之れを說明することは出來ぬ。

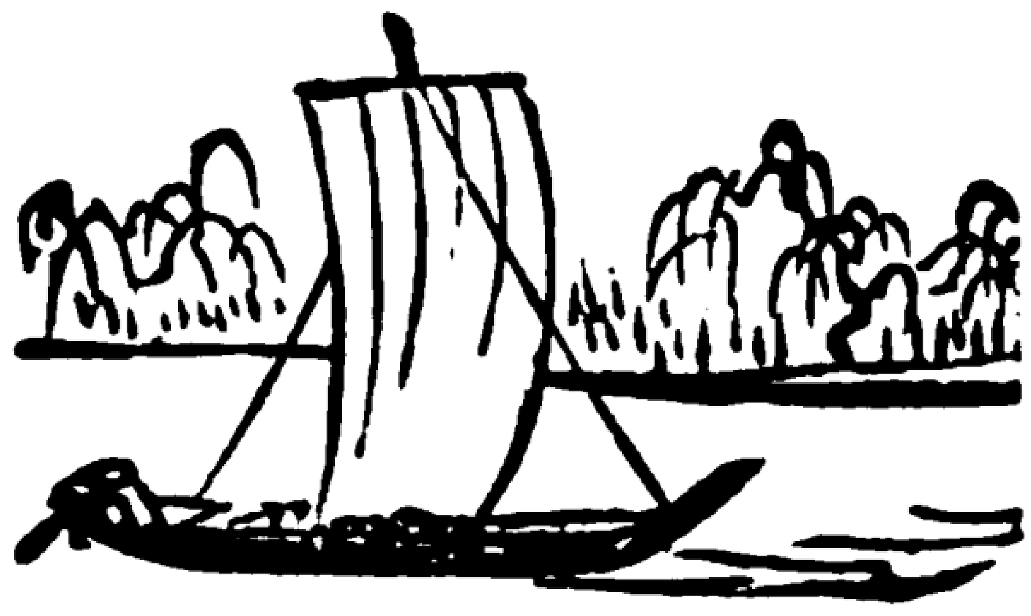
第四、偉大なる藝術品の價値も亦、勞働の分量に依つて決定されるか。曰く、藝術上の特殊品は社會的に再生（レプロヅウチーレン）產され能はざるものである。隨つて社會的に必要なる人間勞働の分量と云ふ尺度を應用することが出來ぬ。或は藝術上の特殊勞作は、一種の獨占的性質を帶ぶるものと見ても善い。マルクスの勞働價値說は、自由競爭に依る商品交換にのみ當嵌るもので、獨占の範圍內又は之れを應用することが出來ぬ。

第五、マルクスの剩餘價値說は勞働時間の短縮のみを眼目に置き、其短縮に逆比例する勞働能率の增減を無視したと云ふ說。之れは福田博士が熱心に唱へて居られる。此說は確かに一理あるものと僕は考へてゐるが、然しさう云ふ缺點はあつたとしても、それは結局剩餘價値率の計算に影響するだけのことで、剩餘價値その者の根本理論を動かすに足りない。

以上の外に尙いろ〱の反對論が提出されてゐるが、大抵モウ說き古したものであるから、茲に冗々しく反覆することを止める。拙譯『マルクス資本論解說』にも其一二を紹介批評してゐる。尙、マルクス經濟論の正體に就ては、來る九月中に發行される僕の資本論全譯を熟讀せられたし。

要するに、僕はマルクスの人物を愛慕し、其哲學・社會學說

を棄て、其經濟論を全部受け入れると云ふ、一種の自由批判的態度を以てマルクスを利用してゐる。



見よ讀め

（年中無休刊）

東京日日新聞

■どの記事を見ても力がある。眞實であるから。而も光つてゐる、報道が正確で迅速であるから。

■どこを見ても温か味がある。よい家庭に迎へらるゝから而かも面白い、小說でも讀物でも皆和樂といふ事が主になつてゐるから。

■また數へらるゝ處が多い。科學、文藝、常に新らしく社會萬般の事、すべて紙上に縮圖されて撓まず時流に一步を先んじてゐる。

■要するに我紙は時代の理解者である。時代の指導者である、そして或意味では時代の創始者でもある。

三ヶ月分前金郵稅共金貳圓

東京日日新聞社

東京市丸の內（振替口座二八〇〇〇番）

東京朝日新聞

◈信用ある大新聞◈

◇内外電報の豊富は天下一品
◇報道敏速にして記事が正確
◇凡て厳正公平なる批判者也

◇文藝の趣味も豊かに溢れて
◇全體の記事に品位が備はる
◇信用ある新聞は只本紙のみ

◈年中無休毎號八頁◈

本紙定價

一ケ月	金六十錢
三ケ月	金一圓七十五錢
六ケ月	金三圓四十五錢

地方郵送定價(郵税共)

一ケ月	金七十錢
三ケ月	金二圓〇五錢
六ケ月	金四圓〇五錢

海外郵送定價(郵税共)

一ケ月	金一圓二十錢
三ケ月	金三圓五十五錢
六ケ月	金七圓〇五錢

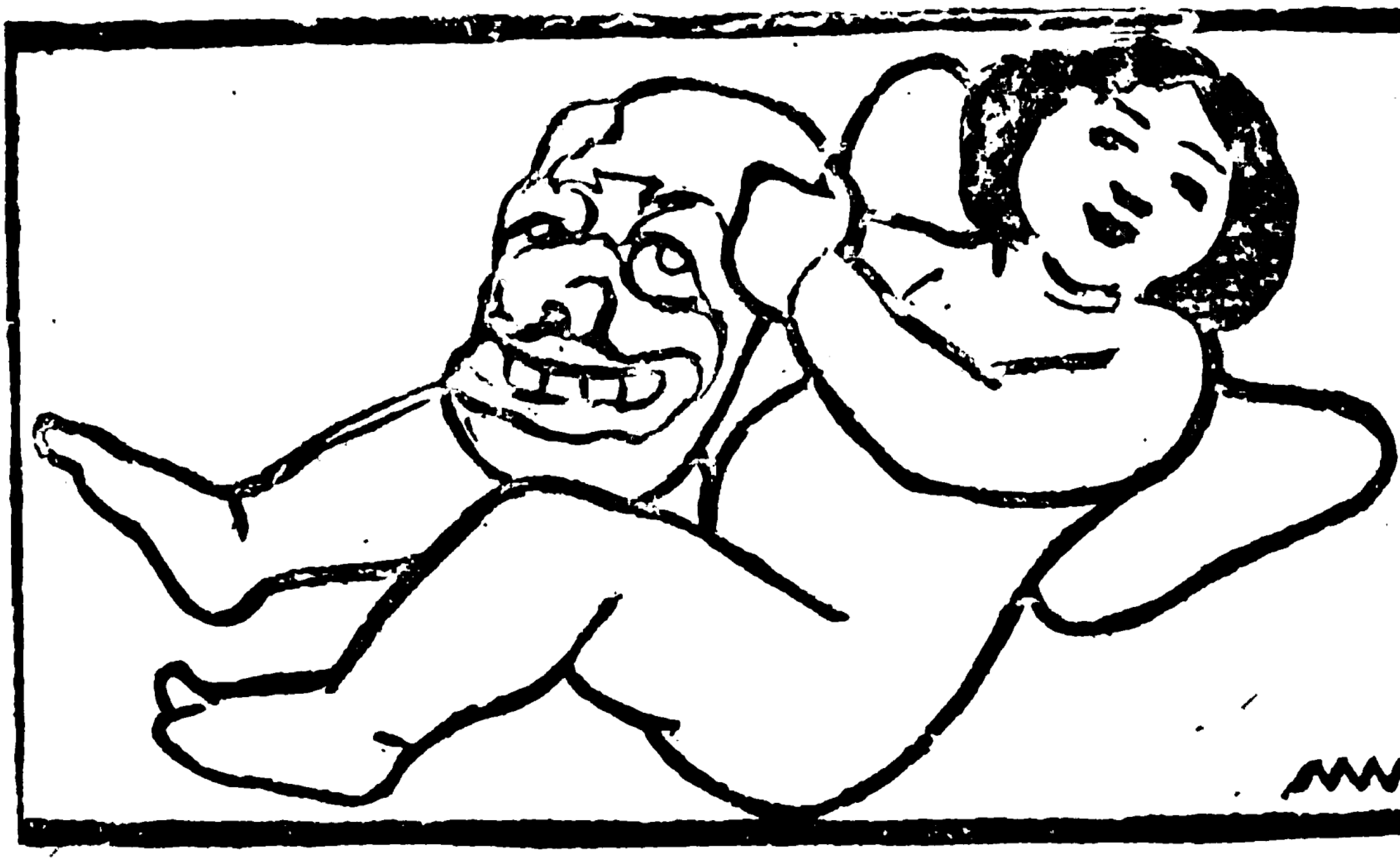
廣告料

五號活字十五字詰(一回)
一行金七十五錢

發行所 東京京橋區瀧山町四番地
(振替口座東京一七三〇番)

◆廣告の効果は新聞の威力信用と正比例す◆

中央公論臨時增刊勞働問題號創作



煙の動かない午後

小川未明

曾て叔母から從弟のことについて頼まれたことが、ふと頭に浮んだ。同時に頼りない叔母の樣子が眼に見えたのだけれど、良吉は其のことについて思ふまいとした。

「また、そのうちに叔母から何か言つて來るだらう。東京へ行くなんて億劫なことだ。もう、二度とは出まいと思つたのだ。かれこれ六年になる。大分東京も變つたことだらう」

良吉は、臥轉びながら空想に耽つた。

この窓際に立つと、畦に植つてゐる並木が夏のきら〳〵とした眩しい日光に照らされて、白い雲影の浮んだ靜かな空の下につゞいてゐるのが見える。

すべての希望を擲つて、この田舍に歸つた良吉は、既に兩親がなかつた。しかも獨身の覺悟で、別に何をするといふこともなく物憂い日を送つてゐた。

彼の性質は、何とか言つて近寄つて來る村人を斥けることが出來なかつた。村の表向きの相談や、會議などには出席しなかつたばかりでなく、其時の決議に對しては、反對したことがなかつた。

たとへ胸に燃えるやうな不平や、反抗があつても、自から先頭に立つとい

ふ決心が付かなかつたから、無理に心を押へて、たゞ消極的に自分は、其の渦中に立入らないまでゞある。

しかし文學を好み、音樂を聞くことを喜び、人生に對して無關心でゐることが出來なかつた彼は、隱遁的な生活を送つてからも讀書や時事を知ることを怠らなかつた。

「こんな田舍にゐて、自分は、大西洋の香を嗅ぐ」と、彼がある時言つたやうに、タイムスを取寄せてゐる者は、他にはこの附近に一人もなかつた。

實際この村民の生活とは直接何の關係もない、外國の新聞などは讀んでも、讀まなくてもいゝのである。けれど彼には、隣の爺が時々訪ねて來て村の中に起つた新舊の事件を聞かせてくれることより、遙々船と汽車によつて送られて來たこの一枚の新聞紙を手に取り上げる時の氣持がどんなに樂しいか知れなかつた。

昨日、ちやうど其れがとゞいた。最近の發刊であつたけれど、二十日ばかり經つてゐるので、其後の緊要な事件は、外國電報によつて、既に東京の新聞に載つてゐる。時事問題の如き、舊聞ばかりのやうな氣がしないでもないが、彼は、一々隅から隅まで見落しなく讀み耽つた。

今しも、机の傍に臥轉びながら、眼を紙面の細かな文字の上に晒してゐた。墺地利、匈牙利が漸次ボルシエヴヰズムに化せられて行くといふことは、彼の心を刺激せずには置かなかつた。彼は思はず起き上つた。

「其れは當然なことだ。英吉利や、亞米利加の得意と、富裕と、權力とを、墺地利や、匈牙利の憐れな現狀に較べて見れば分ることだ、其れが對照にならうか？やがては獨逸もさうなるであらう。かういふ現象は、人間に於ても、また國家に於ても見らるべきことだ」と、彼は考へた。

ある社會學者が、「自然の與へる不安は迷信を產み、階級より生ずる不安は革命を起す」と言つたのは、爭ふべからざる眞理を含むやうに思はれた。

誰が未來を知らう。すべてが必然的に趣くべき處へ達するばかりだと、彼は思つた。淋しい笑がちやうど朝顏の花のやうに顏に現はれると、直に消えてしまつた。

彼は、またもとのやうに横になつて、默り込んで、新聞の他の面に眼を移したのである。

「死」といふ欄を見ると、一度も顔を知らない人々が、いろ〱の街や、病院で死んだことが書いてあつた。かうして一日に幾何この地上で産れたり、死んだりすることだらう。

たとへ其の時代を同うしても、永久に互に同じく生存をしてゐたといふことを知らずにしまふのを不思議に思つた。

誰にせよ、自分を愛する程、他人の生活を愛するといふのは僞りである。すべての生活問題も、社會問題も畢竟、自分の生活が根底である。言ひ換へれば自分及び自分と同じ境遇にゐる人々のための叫びである。

かう思ふと、彼は、心の何處かに言ひ知れぬ淋しさを感じた。其れは、友達もなく、隱遁的な生活を送つてゐる、自分のやうな人間の淋しさと頼りなさに他ならなかつた。

彼は尚ほ讀みつゞけると、自殺した人々の欄があつた。其の中に――アボット、年二十八、生物學專攻家、病身にして厭世の結果自殺す。眞に一人の親戚もなき孤獨なり――と、書いてあつた。

これを見て、彼は、電氣に觸れたやうに衝動を覺えた。

「不思議だ、やはり俺と同じやうな境遇な人間があるのだ」

良吉は、默つて其の一處を見詰たまゝ思ひ込んでゐた。

この何でもない事實を報道した一枚の新聞紙が彼には人の知らざるなつかしみを感じさせた。

彼は、其の男が考へに沈みながら歩いたであらう街の往來や、立止つて、其の途の上から眺めたであらう陰鬱な姿の常盤木の頂きや、尖つた高い建物や、いつも見るたびに黑い煙の流れてゐる煙突や、雜多の光景の點在する巷の四角から渦卷いて起り彼の心を脅かした生活のどよめきを想像するばかりでなく、ちやうど自分の經驗の如く其の男の物憂い心持が察せられたのである。

自殺者は、生物學者だけに靈魂の不滅といふことも恐らく考へてゐなかつたであらう。而して、最後の手段を取つた刹那にも、ロンドンの街々から煙は上つてゐた。家々の窓は開け放たれて、青い、悠久に澄んだ空の色を迎へてゐた。ま

た煙草を燻らしながら路を歩いてゐる男もあれば、急ぎ足で人混みの中を燕の翔けるやうに歩いてゐた若い女もあつたであらう。

良吉は、境遇の同じものだけが、斯くお互の感情や、心持を理解することが出來るのだと思つた。アボットといふ男の心持は、たゞこゝに書かれた僅かに二三行だけで、よく自分に理解される。

だから、最近、無産階級の運動が世界中に相呼應して一つの大きな波を上げやうとするのも、畢竟二三行づゝの外國電報が覺醒させるに足りるのである。俺なども、生なか食つて行けるだけの遺産がなかつたら、この病弱の體をこの故鄕には運ばなかつたらう。而して、今でも、空氣の惡い都會で、やはり彼等と共に活動してゐるにちがひない。

午後になつて、日が少し蔭つたら、外に出て花の咲いた黄瓜に水をやらうと思ひながら、良吉は臥返りを打つた。

窓の外では、桐の木に蟬が止つて鳴いてゐた。

其の鳴聲に心を止めてゐると、少年の時分の夏の日が、まだ昨日のやうに蘇返つて來る。けれど、もう祖母はゐない。また、母も生きてゐなかつた。

「若旦那さん、天氣が、よくつゞきやす」と、作爺が、外から聲をかけながら入つて來た。

もう三十にもなつて、若旦那と呼ばれる年でもないのだが、隣の爺は、まだ昔のやうに良吉を子供と思つてゐる。而して、なぜ嫁を取らないのだとか、いつもそんなに獨り家にゐては淋しからうに、外に出て交際をすれば、學問があるのだから、人望が付いていつか村長になれないこともなからうとか、いろ〳〵に思つて言つたのである。

「作爺さんか、まあ上つたらいゝ」と、良吉は立つて入り口へ行つた。

「好いお天氣でございます。これで一雨夕立でも來てくれると作には申分ないんですが、少し濕り氣が足りません。二三日の内に雨が來るでごわせう」と、作爺は眼をしよぼ〳〵さして言つた。今迄、野良に出て働いてゐたと見えて、日に燒けた、苦勞と戰つて其の跡をとゞめた額際に汗が滴るやうに結んでゐた。而して、頂きの大きく禿げた廻りに僅かばかりの白い頭髮が殘つてゐた。

「足が汚れてゐますから、お庭の緣側へ廻ります」と、深い廂の下に入りかけたのを、腰に差してゐる煙草入を拔いて、其れを手に持ちながら爺は裏手へ壁板について廻つた。

良吉は、臺所に行つた。彼は、煙草盆と冷たくなつた番茶の土瓶や、茶碗などを緣側に持運んだ。青苔が生へてゐる木の茂つた庭の片隅には紫色の桔梗の花が幽暗な空に閃く星のやうに咲いてゐた。

「私共の地主さんのやうに分らない人も世間には少ないものです」と、言つて作爺は伸びた爪の間に土の溜つた、太い指で茶碗を握つて番茶を啜つた。

良吉は、日頃からこの村の大地主の一人である加藤のことをたび〳〵聞かされてゐた。强欲で冷酷なばかりでなく、また一面近代的とも思はれるやうな處があつて、神主や、坊主の顏は見たくもないといつて寄せ付けず、村長や、郡會議員などゝいふ面倒臭い名譽職などは貰つても眞平だといつて、智識のある人々と交際をするでもなし、會議や、寄合などに顏を出したことがない。

ある點はよく良吉と似てゐるのであつた。しかし、この地主は村社の鳥居を建てる時にすら寄附をしなかつた。また寺の山門が壞れて普請をする時にも一錢の寄進をしなかつたが、自身の贅澤には隨分馬鹿氣きつたことをしてゐた。

あの時は高價で馬を購つて其れに乘つて歩いて村人を驚かしたり、ある時は東京から庭造りを呼んで二月もかゝつて石の配置や、松の手入をしたり、幾度となく庭園の模樣を換へるために大金を費し、また倉を建て換へたり、家を増築したり、新たに池を堀つたりしたけれど、他人のためには一錢も惜しむといふ程の利己主義であつた。

其の男の顏を思ひ出すと、良吉は憎いと思ふ心以外に何といふことなしに一種のをかしみに微笑まれずにはゐられなかつた。

「何うしたといふんだ」と、彼は穩かに言つて、人の好い作爺の顏を見た。

「若旦那さんも知つてゐなさるでせうが、一昨年の秋、伜と二人で一月もかゝつて木の根を起して、向ふ山の麓を開墾して蕎麥を蒔きやしたのでございます。其れも、彼處だけは誰も手を付けなかつた木の根ばかしの荒地でして、どうに

もたらなかつたんです。地主さんが、いつか爺や、お前其處へ圃を造らないか、骨を折つて圃にさへすれば五年や、十年の年貢はたゞで借してやるからとおつしやつたので、そんならといふ氣になりやした、悴と一生懸命に一昨年開墾したんです。其れがまだ二年と經たないうちに先達のことですが、加藤の手代めがやつて來やして、今年から豆三斗取り上げるから、他人なら四斗取り上げるのだが、お前達が骨を折つて圃にしたのだから三斗にして置くといひやがるんです。先づ、何處へ行つたつてあんな地主さんは他にありません」と、爺は外を見ながら語つた。

良吉の眼には、一昨年の秋がつひこの間だつたやうな氣がする。散歩に山の方へ出かけると、火か見えて、其れに近づくと萱藪を燒き拂つてゐる作爺の姿が煙の中に、動くのが見えた。

「大變に遲くまで勢が出るな」と、聲をかけると、彼方から作爺の聲で、

「今晩は、日が短いのではかゞいきません」と、答へた。

靑い煙は、底冷えのする日暮方の空に上つて、黑く見える山の方へとなびいてゐた。

其の時のことが思ひ出されたので、

「其れぢや約束とは違ふぢやないか。いくらなんでも勝手に口約束にしろ破るといふことは不都合な話だ。地主に遇つてよく話をしたら何うだね」

「行きましたつて、手代が出て來て地主さんに遇はしやしません。手代が惡い野郎でして、いつもさうなんです」

「それでは、いくら地主でも濟まないだらう」と、良吉は横暴な地主の行爲が、普通人情のある者の行爲であらうかと疑はれた。

「あんな地主さんの田や、圃を作つてゐる私達が不運なんでござんす。さうゐきらめるより仕方がありません」と、作爺は、さう思ひ込んでゐた。

「ほんたうに弱い者いぢめだなあ」

「ポンプのことで、役場の衆と靑年會と揉めてゐやすが、どちらが勝つもんですか私等には分りません。助役始め書記

なんかの手合は加藤さんにあやまらんければならんといひますし、靑年會はあやまる必要がないといつてゐやす」

「ポンプのことつて、どんなことがあつたんだね」と、良吉は分らぬので聞いた。

「まだお聞きなさいませんかね。若旦那は何處へもお出かけなさらんから、無理もありませんが、村に學問のあつて口の聞ける者がないんでございます」と、作爺は人の好い笑ひをして、眼をしよぼ〳〵させて次第を語つた。

村端に脊の低い博勞が住んでゐた。顏に痘痕のある醜男だつたけれど、よく女を騙す術を心得てゐた。先妻に子供まであるのを無理に離別して、情婦を家に引入れて其の後釜に据えた。

先妻は其れを深く遺恨に思つた。雪が消えて、田圃に春が來た。ある穩かな日の午後であつた。博勞の留守に妻の物置から出火して忽ち火は四方に燃え擴つて母家に移つた。村の人々はこの不意の出來事に驚いて、田や、圃から飛んで歸つた。而して、大騷ぎをした。つひにこの一軒は丸燒になつて漸く鎭火したのである。其のことはやがて先妻が嫉妬から放火したのだと分つた。

事件は其の日のことである。村には、別に消防夫と名の付くものがなかつた。靑年團が活動をして消防に盡力した。けれどまた村には供用のポンプがなかつた。

「加藤さんへ行けばポンプがある。地主さんへ行け」と、其時、一人が叫んだ。

「さうだ地主さんへ行け。ポンプがあるから」と、若者等は口々に言つた。

多勢が地主の家の門から駈け込んだ。

ちやうど、地主は其日の其時刻は街に行つて遊興に耽つてゐたのである。彼は花街に、東京生れの女で贔負にするまだ年の若い藝妓があつた。よく彼は二日も三日も其家に居續けをして茫然とした顏付で村に歸つて來ることがある。

其の日は、また手代も留守であつた。後には、靑い顏をした病身の女房と下女がゐるばかりだつた。

若者等は、地主の女房にポンプを借してくれるやうにと頼んだ。女房は主人が留守だから分らないと言つたが、また

火事なら使つてもいゝだらうといふやうな曖昧な挨拶をした。

　このポンプは夏の暑い時分に、地主の家で廣い庭へ水を撒くために東京からわざ〳〵取り寄せたものであつた。若者等は早速、小舍の中からポンプを引出して、皆なの勢で火事場の方へ引いて行つた。彼等はまだポンプの使ひ方に不慣、れであつた。しかし、何うにか、かうにか其れを役立はしたが、餘り皆なが大力を出して小さなポンプを苛めたので機械を壞してしまつた。

　地主は家に歸ると子分を呼び付けて怒つた。

「俺が金を出して、買つたポンプだ。村のために買つたのでない。しかも留守中に引出して壞したのだ。俺がゐれや決して借せやしない。これまでだつて、これからだつて俺は村の者の世話にならうとは思はない。勝手にポンプを使つて壞したなら、辨償するのがあたりまへだ」と、言つた。

　子分の者は、大抵役場組であつた。其時は、たゞ頭を下げて、一々尤もなことだと聞きながら默つてゐた。

　彼等は、其れを靑年會の皆なにはかつたのである、すると中には顏を赤くして激昂した靑年もあつた。

「なんで俺達は、平常あんな分らずやの弱い者いぢめを旦那樣なんといつて敬つてゐるんだ。こんな時にポンプ位貸すのを村のためだといふことを知らないのか。自分の家がどんなことで燒けないとは限つてゐない。その時は誰が助けると思つてゐるんだ」と、息卷いた。

「理窟は何うでも、他から借りた物を壞したなら、辨償するがあたりまへでねえか」と、子分と見做されてゐる助役が言つた。

「加藤さんは、俺達の地主樣だがな、金持で旦那樣なんだ。ポンプの一つ位壞したつて何んでもねえだ。この村に住んでゐらしやるすかいなあ、村のためにしたことが、なんで惡い、あやまるちゆう理窟はねえだよ」と、一人の百姓が言つた。

「あんまり强いことは言ふなよ。田地を取り上げられねえものでもねえからな、直に內通する奴等がゐやがるすかい」

「誰が内通するといふのだ」と、役場の書記が腕を捲つた。
「誰だか、俺あ知らねえがな」と、前の男は人の脊後に隠れるやうにして言つた。
「喧嘩をすんない」と、一人の若者が怒鳴つた。
其時の相談は、こんなことで遂に意見が纏らずにしまつた。
後で良吉はこの光景を作爺から聞いた。
「成程この春、火事があつたが、ポンプの話といふのはそんなことか。加藤さんは金持なんだから、お蔭で自分の家が焼けなかつたと思つて、やかましく言はなくていゝになあ」と、良吉は始めて聞いた話について考へを洩らした。
「この間、學校の先生が、若い者が夜五六人遊びに行つた時に言ひなさるには、お前達は地主などをそんなに怖がらんでもいゝぢやないか。無理なことを言つたら、皆なが加藤さんの田を作らなければや、加藤さんだつて困つて、しまひには頭を下げて來るから、皆なが申し合せて誰も田を作らなければいゝ。また其れで食はれなかつたら、まだ世界には、人間が少なくて金儲の出來るところがあるからつて、…………」
「カモ……なんとか、聞きやしたが、忘れました。其處へ行けば北で寒いけれど、土地の廣い割にまだ開けてゐないから、働けば樂に暮らされるつて言はしたさうです」
「カムチヤツカだらう」と、良吉は言つた。
「たしかそんな處です。前の先生さんは、酒飲みで醉ふと戯談(あくたれ)付いて女(あま)つ子を追ひかけやしたが、今度の先生は無口で酒を飲まれません。年始に加藤さんの處へは顔を出さつしやらなかつたといふので、生意氣だなんて言ふ者もありますが、子供には　切でいゝ先生だいふこんです」
「どんな風の先生だね。話を聞くと面白さうな人だが、まだ一度も見たことがない」と、良吉は言つた。
おはぐろ蜻蛉が飛んで來て、桔梗の咲いてゐる下の苔のついた地面に止つて、羽ねを擴げたり、つぼめたりしてゐた。
「まだ二十五六の若い先生さんです。西郡の人だとかいひます。また、役場の衆の耳に入つたら、長くはこの學校につ

とまらねえと思つてゐやす」と、作爺は煙草入を腰にさしながら語つた。

日の光りは幾分か衰へて、微風が出て來て木の葉の動くのが、明るい空に、笑ふやうに揺れて見えた。[illegible]の下から覗くと、空はだん〳〵北の方になるにつれて青くなつて、白い雲が其の方に飛んでゐた。

「どう、もう一度働いて來やす。ご免なさへまし」と、作爺は頭を下げて、日の光りの下に眩しさうに顔を顰めながら、足音を立てずに出て行つた。

良吉はやがて仕度をして、土が乾いた圃に涸れて水を欲しがつてゐる野菜に水をかけてやるべく、つゞいて外へ出て行つた。

ある日、彼は町に住む叔母を訪れるために、松並木のつゞく街道を下を向きながら歩いてゐた。まだ凉しい朝のうちで、車や、人影が彼の前後になつて行くのが見られた。

亡なつた良吉の母と、其の母の姉に當る叔母とは性質が全く異つてゐた。子供に向つてすら強いことを言へなかつた母は、悲しい時は直に涙ぐんで默つてゐるのが常であつたが、其れには境遇の違ひもあらうが、叔母は、生活が困難な時分にも妹の助けを飽迄受けなかつたばかりか、決して何事に對しても人の下手に出るやうなことがなく、勝氣を示してゐた。

叔父の死後、叔母の一家は悲境に陷つた。而して、叔母は少しばかりの地所も、公債も賣り拂はなければならなかつた。叔母は内職をして母子二人の生活を營んでゐた。其頃、從弟の憲一は小學校に通つてゐた。叔母は内職をした賃金で子供の鉛筆を買ひ、紙を買ひ帳面などを買つて與へた。良吉は中學校に行つてゐて、折々叔母の家を訪れると、叔母は仕事の手を止めて、かき餅を燒いてくれたり、豆を焙つてくれたりした。

叔母は、其頃は内職に提燈を張つてゐたのである。仕事をしてゐる傍の柱には、小さな六角時計がかゝつてゐて、ゼンマイを卷く爲形の鍵が、柔色の紐に結び付けられて、時計からだらりと垂下つてゐたのを記憶する。而して、もう一

つ憶へてゐるのは、叔母が仕事の合間に眼鏡をかけて、「慶安太平記」や、「曾我物語」や、「里見八犬傳」などの稗史を讀んだのが置いてあつて、良吉は従弟と共に其の本を繙いて繪を見たり、また叔母からいろ〳〵其の本の中に書いてある話を聞いたのであつた。曾我兄弟の物語や、由井正雪の話などは感憤して聞いたのを覚えてゐる。

思ふに、あの頃は、まだ世の中が今日のやうにせち辛くなかつたので、叔母の家の暮し向きにも貧しいとは言ひながら、本を讀むだけの餘裕はあつたのであらう。叔母は、まだ其時はそんなに年を老つてゐなかつた。けれど、眼は早くから霞んで、眼鏡なしには細かな字を讀むことが出來なかつた。

あれから幾年經つたらう。叔母は、もはや六十に近い筈である。尙ほ其の年になつて内職をして日を送らなければならぬ叔母の身の上を悲慘に感じた。

町に入ると、學校へ通つた時分の自分の姿が浮んだ。兩側を見廻すと、其頃からの店が其儘になつてゐるのもある。荒物屋の軒下に吊された草履や、杓やたわしなどには、昔からの埃が白くなつてかゝつてゐるやうに思はれた。

しかもかく世間は、變らないやうで、幾何人々の生活が變つてゐるか知れなかつた。

叔母は、良吉の姿を見ると、自分の子供が入つて來たやうに喜んで迎へた。而して、何うもてなしていゝか分らないといふやうにうろ〳〵した。この邊は、舊の士族屋敷で家の前には少しばかりの圃があつて、野菜が茂つて靜かであつた。

何處かで蠶の糸をとつてゐると見えて、糸車の音が聞えた。

「暫く見えないから、病氣をしないかと心配してゐたんだが、何とも變りはなかつたかい。先達の町の祝ひになんで出て來なかつた」と、叔母は、良吉が暑からうと察して、團扇で風を送りながら言つた。

「御無沙汰いたしました。叔母さんも變りはありませんでしたか、田舍へ引込んでしまふと、町へ出るのすら何だか億劫になりました。憲一から便りがありますか」と、良吉は襟から染み出る汗を拭きながら言つた。

「お前、羽織でも脱つて、冷たな水で顔を洗つたら何うだい、家の水は冷たくて氷水のやうだが」と、叔母は、井戸示

の内職をしながら自から水を汲まうとして立ちかけた。

「かまはんで下さい」と、彼は答へた。

「惣一のことについて、是非お前に相談しやうと思つたのだよ。他に誰といつて、親身になつて話をする者はなし、私も、もうこの年になつて、ほんたうに心細い……」と、早くも叔母は愚痴を言つたのであつた。

良吉は、下を向いて聞いてゐた。すると、叔母は其のことは、後でゆつくりしやうと、氣を換へて、

「お祭りには出て來るだらうと待つてゐたのだよ」と、話かけた。

「平和、戰捷祝賀會の時ですか。なかなか賑かだつたといふことですね」と、良吉は、素氣なく言つた。

「賑かだつたにも、三日三晩といふものは、お前つゞけさまに煙花が上るし、山車が出るし、町の藝者が總出で手踊りがあるし、どんなに賑かだつたか知れないよ」と、叔母は絢爛たる其夜の光彩を、尚ほ眼前に見るやうに物語つた。

良吉は、其れを淋しい顔付をしながら聞いてゐた。やがて頭を上ると、靜かに叔母を見て、しんみりとした言葉付で、

「だつて叔母さん考へてご覽なさい。戰爭に勝つたのも、重にかうして騷いでゐる人達の力ではありません。戰場に出て、死んだ、澤山な人々の力だと思ひます。其の死んだ人は、もう決して歸つて來ません。まだこの世の中の、愉快なことも、賑かなことも、見たり、聞いたりすることはないのです。其等の死んだ人々のことや、遺族の身の上を思つたら、お祝い騷ぎどころぢやないでありませんか」と、彼は言つたのであつた。

良吉の言ふことを聞いてゐた、根は哀れみの深い叔母は、成程といふやうに頷いたのである。

「良ちやん、其れはほんたうだ。お前の言ひなさる通りなんだ。お祭り騷ぎどころぢやないのだよ」と、叔母は心から同意したのであつた。

彼方で聞える糸車の音は、誰が廻してゐるのか、ちよつと杜絶れたが、またつゞきはぢめる。

「東京から、たよりがありましたか」と、良吉は聞いた。

「どうしたんだか、この頃何とも言つて來ないのだよ。私は、あの子のためにどれだけ心配するか知れない。父親が死

んでから、私の手一つで育てゝ來た苦勞を、其れは良さんだつて知つてゐなさるだらうが、女の手で內職をして、少しばかりあつた地所や公債まで賣つて、あの子にかけ中學にまで入れたのだ。其れが校長を排斥して停學される。もうこんな學校にゐるのは何うしても厭だといつて、言ふことを聞かずに東京へ出る。私もさう〳〵は學費を送ることが出來ないので、慾一は苦學をしても勉强をするからと言つて歸らなかつた。其れから慾一もいろ〳〵のことをしたらしい。今では工場につとめてゐるが、なんで勉强などが出來るものか。自分一人が食つて行くのがやつとだと思ふ。私だつてこの年になるまで賴るものはなし、息子があんなもので、この頃はほんたうに心細く思ふのだよ」と叔母は淚を前掛で拭きながら言つた。

「しかし叔母さん、これからは生なか役人なんかになるよりは、勞働者の方が割がいゝんですよ。今迄と違つて、勞働者がはゞをきかす時代になつたのです」と、良吉は、勝氣な叔母が自分の子供だけは、女の手でも立派な人間にして見せると心がけてゐたのに對して慰めたのである。

「世が變つて、さうなるんだつて先達も人樣が言つて下さるけれど、かう遠く離れてゐるのでは、何にしてもつまらない。子供を持つてゐても持たないも同じことだ。始めから子供がないのなら、其の覺悟はあるけれど、あつて當にならない程賴りないことはない。私もいつまでかうして働けるものでなし、この年まで何を賴りにして生きてゐるものか」

と、叔母は泣いた。

良吉は、顧みると、其處には貼りかけた狀袋が、澤山机の傍に積み重ねられてあつた。いつか聞いた時に千枚張つて十五錢とか十八錢とかいふことであつた。

日の短かい時は朝から仕事にかゝつても、夜までに其れだけを張り盡すことは困難であると言つたのを覺えてゐる。

「叔母さん、この頃でもやはり千枚はお張になりますか」と、良吉は聞いた。

「なんでそんなに張れるものかな、眼が澁んで根が盡きて、いつまで前のやうに仕事が出來るものか。仕方なしにしてゐるけれど、悴があつて少しの助けにならないのだから」と、叔母は、直に愚痴に返つた。

良吉は、しばらく默然として叔母の身の上になつて考へた。而して、子供を怨み、生活の不安を訴ふるのを尤なことだと思つた。また親を顧みず、自から苦しんで生活のために勞働をしてゐる從弟の身の上を想像すると、やはり憎む譯には行かなかつた。

「叔母さん」と、やさしな女の聲がして、此時勝手許へ忍びやかに寄つて來て、戸口から覗いたものがある。良吉は振向くと、愛らしい十八九の娘が顔を赧めて、戸の蔭に隱れた。

「おとしさんかい」と、叔母は言つて、立上ると勝手許へ出て行つた。娘は何か小さな聲で言つてゐた。やがて叔母は、お鉢の蓋を開けて、娘が持て來た皿に飯を入れて渡したやうであつた。

「左樣なら」と、娘は言つて、靜かに歸りかけた。

「お父さんは、どんなだい」と、叔母は聞いた。歸りかけた娘は、立止つて、

「有がたうご座います、やはりおんなじことです」と、答へた。

「其れはお困りだねえ、私もちよつと上らなければならないのだが、よろしく言つておくれ、またお遊におゐで」と、叔母は言つてゐた。

娘の足音が聞えなくなると、叔母はまた座に戻つたのである。

「あの娘も、もうぢきにお嫁に行く年頃で、あんな、いゝ子はない。其れが朝から晩まで母親と狀袋を貼つてゐるのだよ。父親が腎臟病で、この頃は床に就いたぎりなのだ。其れにまだ他に二人子供がある。役に立つのは、あの娘一人でどうしてやつてゐなさるか、ほんたうにお氣の毒なのだよ」と、叔母は人事とも思はれないやうに、しみ〴〵と同情して云つた。

「醫者にかゝつてゐるんですか」と、良吉は、聞いた。

彼は、直に藥價を拂つたり、看病に手のかゝる其の貧しい家庭を眼に描いたからだ。

「この頃は、何から何まで、もとの三倍も四倍もするぢやないか。何うしてやつて行きなさるか、醫者の車がこの頃は、毎日午後から止つてゐるやうだ」

「やはり近所の醫者ですか。遠くなかつたら、車になど乘らなくたつてよさゝうなものですね。家によつては車代を拂ふのに困るでせう」と、良吉は金を取る以外に思ひやりのないこの頃の醫者を憎く思ひながら言つた。

「歩いたつて橋を一つ渡れば來られるんだけど、皆な體裁を造るのさ、ほんたうに貧乏人は病氣になつても、めつたに醫者にさへかゝれない」と、叔母は答へながら、良吉の前にあつた茶碗に茶を注いだ。

良吉は、子供の時分叔母が張つた提燈を三十も五十も大きな紺の風呂敷に包んで、其れを負つて、町の紙問屋へ持つて行つたことがある。憲一は留守をして、後から叔母が、自分に從つて來たのであつた。

「出世前のお前に、こんな提燈などを負しては濟まないから」と、叔母は言つて、自から其の風呂敷包を負つて出て行かうとしたのを、良吉が無理に負つて行つたのである。世間は世間に對して見つともないと、つまらぬ心配をした叔母は大抵、日が暮れてから持つて行くのであつた。而して、其だけの賃金を受取り、歸りには子供のものや、日常の入用なものを買つて來た。

良吉は、行つた時に見た紙問屋の主人の顏付や、多くの内職者に對する傲慢な言葉付や、提燈の張方が粗末だといつて叱り付けてゐる有樣を知つてゐる。

大抵は生活に虐げられてゐる人々で、この主人の苛酷な態度に對してもひたすら頭を下げてゐるばかりで物も言へない程の、意氣地のない青い顏の男や、寡婦や、まだ年をとらぬうちに世帶染みた娘等であつた。

其樣な人間が、この店にはたへず二人や、三人見られないことはなかつた。

「今、娘が來たぢやないか。あゝして毎日のやうにご飯をもらひに來るのだよ。あの家では外國米を食べてゐるので、外國米ではねばり氣がなくて糊に出來ない。其れで糊にするだけ、いつも御飯をもらひに來なさるから上げるのだ。私の家は一人だし、別々にご飯を焚いては却つて不經濟だから、高くても、日本米を食べてゐるけれど、多勢ならなかく

さうはいかない」と、叔母は言つた。

「皆な、あの紙屋の仕事なんですか」

「あゝ、こゝらは大抵あの紙屋の仕事をしてゐる。去年まではパチンが流行つたが、戰爭が終へると、外國へあまり行かなくなつたと見えて、ずつと賃金が下つたし、麻つなぎがいゝなどゝいふ人もあるけれど、この近所ではどこでも狀袋を貼つてゐる」と、叔母は答へた。

彼は、過る日町へ出て、紙問屋の店頭を通つた時に、覗くともなく見ると惠比壽顏の肥つた主人が、金齒を露出して何事か客と話しながら笑つてゐるのであつた。誰でも年だけは平等に取るものだと思はれたのであるが、あの時はまだ若かつた主人もいゝ年をとつて爺さんになつてゐた。良吉は、其れを思ひ出して、叔母に話をすると、

「あゝ、あの家も、もとは小さな店だつたが今では大した身代となつたらしい。かみさんもこの頃は絹物ぐるみで、店へはめつたに顏を見せない。家も金をかけて立派にしたし、財產を息子に讓つて、自分達は樂隱居をした。先達は、京、大阪から奈良の方を二人で旅をして來た。あゝいふのが何不足ない身の上だ。息子の嫁は近在の豪家からもらつたといふが、器量も惡くない」

「問屋はそんなに金が儲かるのに、其家の仕事をしてゐる者はいつまでたつてもよくなりつこはない。つまらんものですね」と、良吉は、資本家と、勞働者が同じ働きをしながら、否、勞働者の方がずつと多く働きながら利益は全部資本家が占有する不自然を思はずにはゐられなかつた。

「彼方には金があるんだし、此方は其家の仕事をさしてもらつてゐるのだから仕方がないけれど、なんだかたゞでも、金をくれるやうに大きな顏をして、店に仕事を持つて行く者に小言をいつたり、鼻先きであしらつたりしてゐる。其れが癪に障るのさ。いくらか苦勞をしたゞけ主人はまだ物が分つてゐるが、悴となつたら、其れは薄情者でいやならよせ、他にいくらも仕事をするものがあるといはぬばかりにつんつんしてゐる」と、叔母は不平を洩した。

「息子つて、どんな奴ですか」

「まだ嫁をもらつたばかりの年ぢやないか。小造りなにやけた男だがな」

中庭に面した緣側に出て見ると、柿の木に澤山實が付いて其の青い實が無數に乾いた地面に落ちてゐた。蛾が白い土の上を彼方へ行つたり、此方に來たりして動いてゐた。

「これが澁柿でなかつたらなあ」と、從弟と見上げて語り合つた少年時代が二たび思ひ出される。またこの木と櫻の木とに細引を結び付けて、鞦韆を造つて二人で乘つて樂んだことがあつた。

良吉は、木の葉蔭や、梢の間を透して、輝かしい風のある夏の空を眺めながら思ひ出に耽つてゐると、叔母が後方に來て、「良さん、東京へ行つて下さるかね」と、先刻、彼が憲一の樣子を見に行つて來やうかと言ひ出して、さう相談がきまつたのを、もう一度、叔母は念を押すのであつた。

「久しぶりで、また自分の用事のないこともありませんから、近いうちに行つて來ます」と、彼は、都會にゐる時分毎日のやうに散歩したK街やS街の光景などを思はず眼に浮べてゐた。

東京行の列車の中に、良吉はあつた。

彼は、退屈を感じて、新聞を見たり、外を眺めたり、いろ／＼のことを考へてゐた。

雜誌を見ても、新聞を見ても、新刊書籍の廣告を見ても、實にマルクス全盛時代であることが分る。しかも其のマルクス自身は貧乏をして死んだのであつた。後になつて多くのマルキシストが、彼の思想の宣傳に從事したゝめに、いろ／＼な意味で思ひがけない德を得るといふことは不思議なやうな事實である。アルツイバシエフの小說の中に、驕傲なピラトがシモンに向つて――あのユデヤの乞食坊主は愉快といふものを知らない。實に不思議な男だつた。而して、あの男の言ふことは何んだか意味ありげだ。けれど、あの男でないお前達はいつたい何者だ――と、言ふところがある。そんなことが、同時に彼の頭に浮んだのであつた。

トルストイは、ほんたうに人間を愛さうとした。而して苦しみぬいて死んだ。其の一生は心の善と惡の戰で終つた。

彼の知れるトルストイアンには何でもなく誰でも愛し得る。流行の洋服を着たペテン師が多い。一人でも、二人でもさういふものが主義者の中にあることは慨はしいことだ。而して、彼等とトルストイとは何の關係がないのだと良吉は、思つた。

「幾百年の昔から、人道主義者の群があつた。基督教徒の宣傳があつた。けれど、彼等の多くは空理空談の徒に過ぎなかつた。彼等の社會主義的運動が幾分なりと、この人生を幸福に、より善く導いたと信ずることが出來るであらうか。長い間、皆なは正義の勝利を待つてゐた。然り、永遠に、正義の勝利を待たなければならないかも知れない。けれど從來の道徳や、教育は何をなし得たか。而して、現在世界の有樣はどんなであるか、吾々、多數の無産勞働階級の生活はどんな有樣であるか。餓死を忍んでも、尚ほ、人道主義に頼れといふのか」

彼は、斯く言ふ急進黨（ラヂカリスト）の叫びを聞いた。

「たゞに金の爲めに叫ぶにあらず、人間平等の權利を主張するためなり」と、根本的に眼醒んとしつゝある、無産勞働者の社會主義的運動開始を、而して、其のさまざまな實行方法を最近の英米に於て見るのである。

良吉は、しばらく眼を閉ぢた。頭の中にはさまざまな幻影が浮んで、彼の心を落付けなかつた。

二たび眼を開けた時に、彼の頭は、また、もとの無感激な冷靜に返つてゐた。

「トルストイズムや、基督教的社會主義が、たとへ、人生を救ふことが出來なくとも、人生は絶滅によつて、この矛盾と苦痛から脱れることが出來る」と、彼は、考へた。

彼は、露西亞の作品の中にかゝる同一の思想と人間とを見出した。其時は、全くの個人主義者に似合はない懐かしさを感ずるのであるが、恐らく、其の人に對してといふよりは、寧ろ主義に對して感じたのであらう。

進化論に於て、生物學に於て、將來に於ける人間生活に希望を認めるものは一つもない。化學は熱の研究によつて百二十萬年後には人類の絶滅を證明する。吾人は不幸にしてこの自然科學の結論を覆すべき何ものゝ事實を持たない。而して、すべての社會現象が絶滅に達するまでの過程であると見做され得る。

彼の恐怖は、この刹那の生を最も強く、また最も深く愛するからだ。生を愛しないものになんで生の不安があり、懐疑があらう。たとへ生を熱愛する者が、同時に自殺を考へたからとて、其れは決して矛盾でない。

彼は、物質よりも、精神作用の不思議と、自由とを考へずにゐられなかつた。

——自分は子供の時分に、學校の往來に藥屋の前を通つて、棚の中に劇藥の壜が並べられてあるのを見た。其の硝子戸には赤い紙が貼つてあつた。私は、この劇藥の壜の入つてゐる棚を見るのが何より怖しい中に好きであつた。毎日、其れを見るたびに無限の興味を感じた。

——ある男が、生活に疲れた結果、神經衰弱に罹つてゐたが、其男はダイナマイトといふ言葉を聞くと、飛び上るやうに活々とした事實がある。彼は、其の刹那だけ、顏の色が變り、感興を覺えて、はしやぎ出したといふのだ。

今、自分は、何に對しても感興を持たないやうな Nihilistic な氣持でゐる。たゞ、自殺といふことを考へる時にだけ、感興が湧いて來る。すべての人間が、自殺倶樂部の會員になつた時を想像すると非常に愉快だ。たゞ考へるだけで愉快だ。

——思ふに、皆なが變つた生活を望んでゐるのだ。貧乏人は社會革命を望み、少し金のある者は精神革命を望んでゐる。而して、其れを主義として宣傳したら、よりいゝ生活がなされると考へてゐるのだ。

これは物質的な運動と解するより、人間に共通した、一種神秘的な心の運動である。

良吉は自分の何ものにも怯えない、無感激な心を淺間しく思つた。其れを自然主義の惡感化であると信じてゐる。しかし、今は容易にこの重い、暗い心持を打碎くことが出來ない。何等か異常な事件が頭上に落ちかゝらなかつたら、遲鈍な、鉛のやうな、無感激な心の外皮を打壞くことが出來ない。惱める彼は其れを望んでゐる。

「あゝ、自分は、まだ年が若いのだ」と、彼は、考へた。

汽車は、トンネルを過ぎて明るい平野を走つてゐた。

二人の紳士が話をし始めた。互に知り合つてゐる間柄らしい。

良吉の注意は其の方に向いた。

「いゝえ、社用です。二三日で歸るつもりです」と、一人が答へた。

「この秋、內閣は變りませうか」

「さあ、どうなりますか分りません。兎に角、朝鮮問題やら米價騰貴やら困難な立場にゐるやうです」

「此間、S町で十六になる女の子が製麵機に卷き込まれて重傷をしたと新聞にありましたが、あれは死にましたか」と眼鏡をかけた夏インバネスを着た紳士が言つた。

「さうです。私は、見たのでありませんが、右の指を三本とか切斷して、頭髮が殆んど全部皮膚と共に肉から剝げ落ちたさうです。而して、頭の骨が割れたといふのですから、悲慘な話です。病院へ行つてから、約一日生きてゐたといふのが不思議な位です」と、脊の高いやはり鼠色のインバネスを被た痩せた男が答へた。

「新聞で見ますと、少し動かしても出血が夥しくて、手が付けられないと言ひながら、新聞記者や、警察官などが行つたものと見えて、母親が枕許で昏睡狀態になつてゐる娘を呼び起したので、死にかゝつてゐる娘が苦しい、苦しいと訴へたと書いてありましたが、いくら無智とはいひながらよく起したものだと思ひましたよ」と、肥つた男が眼鏡越に脊の高い男を睨むやうな眼付をしながら言つた。

「洋服を着た人間や、劍を下げた警官などを見ると、田舍出の者は大へんに偉い人だと思つてどぎまぎするのです。默つて見てゐる人間も惡いのですが」と、脊の高いのが笑つて答へた。

「いかさまさうでせうな。實に、あの記事を讀みました時に驚きました」と、肥つたのが、やがて、話を他に轉じた。

良吉は、この話を傍で默つて聞いて思つたのである。

この一日に、この世界に於ける大工場や、小工場で機械のために、不注意や其他のいろ／＼な原因から死亡したり、負傷したりするものが幾何あるか知れない。また、常に暗黑な日の光りを見ない坑內で働きつゝある鑛山の坑夫等がある。中には多くの少年勞働者を使用してゐる處もある。よく少年が見張番をしてゐるうちに疲勞のために居眠りをして

レールの上にのめつてゐると、急にトロツコが狹つて來て、轢殺されるものがあるといふ話だ。

また、澤山の勞働者を使用する炭坑などでは、一人の死といふものを、習慣的にあまり驚かない。注意が行屆いてゐたなら、其等の多くの災禍は被らずに濟むのだとさへ言はれてゐる。其れ程、仕事に氣を取られて人間の命といふものが輕ぜられてゐる。

實際、機械の方が人間のする仕事の幾倍かをするのである。たゞ、同盟罷工をした時にすべての機械の運轉は止つてしまふ。而して、其時、機械を支配するものは人間であつて、機械が人間を支配するのでない。生産力の源は勞働者自身にあるといふことが分る。このことは其時、心の麻痺した資本主に始めて感じられるのである。

やがて、汽車が東京へ着く時分であつた。良吉は頭を汽車の窓から出して、彼方の空を望むと、一抹の黒雲が棚引くやうに、低く煤煙が空を濁してゐた。

時計を見ると、もう後十分ばかりで、あの賑かな人間の雜踏した巷が自分の眼前に現はれるのだと思つた。

宿屋に着くと、其夜はぐつすりと眠つてしまつた。明る日、彼は、街を歩いた。場處によつては、大分變つたところもあつたけれど、大通りなどは概して變つたとは思はれなかつた。幾多の新しい洋食店や、雜貨店などの間に心の眼に殘るやうな老舗は、やはり其儘になつて商を營んでゐた。

彼は、五六年前、かうしてこの銀座の街を歩いたのを、つい昨日のやうに感じたのである。

あるレストラントの窓の下で、テーブルに對つて腰をかけ、流るゝやうに涼しい服裝の人々を乘せて幾たびか摺れ違つて過ぎる電車の影を眺めながら、彼は麥藁の管から舌先に甘く染みる酒を吸つてゐた。考へるともなく、學友の身の上などが思ひ出された。ある者は夭折し、ある者は消息が絶えてゐる。此時、階下で奏でてゐるピアノの音が、悲しみを誘ひ、刹那の現在を喜ばせる。

電車を降りてから、しばらく場末の町を歩いた。從弟の憲一は、既に良吉の行くのを知つてゐる筈であつた。

從弟はブリキ屋の二階に住んでゐた。狹いギシギシと鳴る梯子段を上つて、破れた襖を開けると四疊半の疊の汚れた室がある。灰色の壁は陰氣臭くて、光線の射工合がよくない。其の間が憲一の借りてゐる室であつた。被換への着物などが釘にかけてあつて、下には自炊道具が置いてあつた。机が一つと、其の上に書物が二三冊載せてあつた。他に飾りといふものがない。窓際に赤い花の咲いてゐる土鉢があつたが、水が切れて其の花は凋れてゐた。

窓から見下すと、小さなマッチ箱を並べたやうな貧民長屋の勝手許や、居間の中の有樣が手に取るやうに見られて、下水が不完全なために、幾日天氣がつゞいても低地に溜つてゐる水の乾くことがない。其の水溜りの周圍に細い棒を立て、繩を張つて、其れに白や赤の洗濯した襤褸布を隙間なく吊してある。

良吉は、なるべく其等の醜惡な光景が眼に付かないやうに脊を向けて、久しぶりで逢つた從弟に對してゐた。たとへ、心で貧民の生活に同情はしても、目の當り其れを見る時は不快の感を押へることが出來なかつた。

すべて美しいものには、其れ自から高く、貴いところがある。現在の社會では階級の生じた爭ひはあるが、美しい建築や、寶石や、綺羅に對する反感がない。良吉は、他人の生活に立入つて、責任をもつて、其れを何うすることも出來ないのを知つてゐた。自身の生活すら持てあましてゐるのであるから。今、從弟に向つて意見をするのは、何といふ矛盾であるかと心で自分を冷笑したのである。

たゞ決して立入つたことを言はずに、自分の意見だけを話すつもりで、靜かに從弟の顏を見た。

生活が、いつしか從弟の容貌までも變へてしまつた。おつとりとして、夢見るやうな面持が何處にも見られなかつた。青黒い顏、其れは炎天に野で働く百姓の日に燒けた顏色とは異つて、一種陰慘の影をとゞめてゐる。頭髮は延びてゐて、鼻先が尖つて、眼が深く落窪んで、鋭く光つてゐた。

憲一は、正しく兩方の膝頭を揃へて、姿全體の感じが何處か隼といふやうに、神經質に口を噤んで、良吉の言ふことに耳を傾けてゐた。

「お母さんは、決して樂に生活をしてゐなさらない。東京で働いても、特に割合がよくないやうなら、田舍に歸つて母

親を安心させるだけでも、よくないかと思つて、實はお前の心持を聞きに來たのだ。私も、東京を去つて、もう長いことだから、實際について勞働者の現狀を知つてゐない。自分で歸れとも、歸るなとも、言へないが」と、良吉は言つた。

「兄さんのおつしやるだけのことはよく分りました。私も前には大きな工場にゐましたが、少し事情があつて、其處をやめて今は小さな工場の鍍部に働いてゐます。其間に病氣をしたりして、つい母のことが氣にかゝりながら、しばらく少しの助けにもならずにしまひました」と、憲一は、時々淋しく笑ひを浮べながら語つた。

「一先、田舍へ歸らないか」

「田舍へ歸つて、私にも、妥協的な生活をせいと兄さんはおつしやるんですか」

「東京にゐれば生活は、妥協的でないといふのかね」と、良吉は從弟の顏を冷かに見た。

「いや、ないとは言ひませんが、都會の勞働者は、眼醒かけてゐます。生活の氣分が、田舍とは相違してゐます」

憲一は反身になつて、眼を光らした。

「其れは、すべて未來を考へての生活だ。現在母を救ふといふ考へはないか」

「兄さんは、やはり、私にも母といつしよになつて同樣な生活を送れとおつしやるのですか。なんで、母の生活を私は知らないことがありませう。私は、母の苦しんでゐる有樣を思ひ、母と同じやうに虐げられてゐる、貧しい人々の身の上を思ふと、血が燃え上ります。ほんたうに眠としてゐられない思ひがします。而して、資本家と勞働者の關係を根本的に改革しなければならないと考へます。其の叫びを上げのは第一に都會からです」と、憲一の言葉は熱して來た。

「憲一、資本家は都會にあつても、田舍にあつても同じ者だよ。而して、貧乏人の受ける苦痛も同じい。貧乏人は相扶け合はなければならないから、親子、兄弟の仲は大抵いゝが、金持は骨肉同志で利益のために爭つてゐる。世間を憚らないだけ田舍の金持が一層醜いかも知れない」と、良吉は飽迄、冷靜であつた。

「兄さんは、なぜ社會のために、あなたは戰はれないのです、と、憲一は、狂熱的に底に憎しみと感情の燃える瞳を良吉に向けた。

「俺は病人だ、肉體の上ばかりでない、精神上から言つてもだ、何に對しても進んでやる氣が起らない。お前のやうに熱烈な要求がない。あるものは自己否定のみだ。この世紀は、俺みたいな病人を他にも澤山産んでゐる筈だ」と、良吉は、口では輕く言つたが、顏には重苦しい影がかゝつた。

「叫びを上げるには、田舍では、やはり駄目です」

「苦しんでゐる者は、皆な同じい。早く理解がある。實感が共鳴させるのだ。私は、お前が駄目だといふ理由が分らない」

「智識に缺けてゐるのです。語る同志がないのです。新社會はやはり大都會から創ります。森の中や、田園からではありません」

「さう、田舍からではない。たゞ、私は、お前に主義を捨ててもらひたい、而して、孤獨な、お前を頼りとするより他に此世に何の望みを持たない、母親を慰めてもらひたいのだ」と、良吉は、言つた。

遠くやつて來たのはたゞこれだけを言ふためであつた。而して、彼は、口を噤んでしまつた。

下を見詰て、深く思ひ込んでゐた憲一は、溜息を洩した。やがて、青白い顏を上げて、

「分りました。歸ります」と、彼はきつぱり答へた。

良吉は、默つて、憲一の顏をぢつと眺めてゐた。

「兄さんは、いつお立になります」

「俺は、もう別に用がない。明日の午後、立つ考へでゐる」

「ぢや、ごいつしよに歸ります。いづれ、停車場でおあひします。兄さん、私には約束をした女があるのです。毎日工場へ通つてゐる、貧乏人の娘です。今夜、女に逢つて、約束を取消して來ます」と、憲一は告げた。

良吉は、これを聞いて、いさゝか驚いた。

「何も、其の女との約束を取消すやうな必要がないぢやないか」と、彼は言つた。

「いゝえ、遠く別れば互の境遇が自然に違つてしまひます。而して、約束たことが苦痛になる時が來ます。この先何うなるか分らないことですから、約束は取消した方がいゝのです」と、憲一は答へた。

良吉は、彼等の戀愛は、趣味や、人生觀の理解から生じたといふより、物質の缺乏から起つた同情であると思つた。

やがて、彼は暇を告げた。

歸り途を彼の學んだ學校の方に取つた。

學校の門を入ると、ちやうど暑中休暇で、何の教室の窓も閉つて建物の外觀は寂然としてゐた。獨り雀が啼きながら高い軒端を飛んで、其の友と戯れてゐる。既に、この時、低く傾いた赤銅色の西日が、校庭に植つてゐるポプラの樹をうす赤く彩つてゐた。詩を高唱して、青春を讃美した一群の人々があつたが、其の人も、其の日も、もう返つて來ない。

感慨に沈んだ足どりで、彼は、學校の門から二たび遠ざかつて、下宿屋の多い通りを、電車路の方へと歩いて行つた。

豆腐屋の喇叭の音や、巷から渦卷き起る喧騷の響きが、一日の黄昏を知らしてゐる。

「一日は誘惑に終る。而して、永久に人生には解決がない」と良吉は思つた。

明る日の午後、良吉は途中で用事を濟して、時計を見ると、まだ餘程汽車の立つ時刻には間があつたが、停車場に行つた。すると、入口の處に既に憲一は立つて、往來の方を向いて彼の來るのを待つてゐた。見ると、小さな包みを一つぶら下げてゐた。

「大へんに早かつたぢやないか」と、良吉は聲をかけた。

「別に、宿にゐたつて仕方がありませんから、早く此處へ來ました」と、憲一は淋しく笑ひながら答へた。

「まだ、一時間ばかりあるから、少し山の上でも散歩しやう」と、良吉は言つた。二人は、並んで停車場から出かけた。

「あの時分から、亂暴であつたがきちやうめんな性質であつた」と、良吉は歩きつゝ、徒弟の子供の時を思ひ出した。あの時から見ると、二人の境遇は變り過ぎたと考へたのである。

二人は、新しく話合つて、別に其れに興味を持つといふこともなかつた。見晴の好い處に出ると、眼下になつて停車場が見られた。立上る煤煙のために、この附近一帶に樹木は生色がなく、黒く窒息をして枯れてゐるのもあつた。

空を仰ぐと、日の光りが見えない程、煙のために曇つてゐた。

空の濁つてゐるのは、獨り此處ばかりでなかつた。眼を遮るものもない、この高い處に立つて、四方を見渡すと無限につゞく大都會の建物の上に林の如く亂立した煙突からは、黒蛇の蟠るやうに幾筋かの煙が縺れ合つて、恰かも微風だにない午後の空に動かなかつた。

この黒煙の下に幾百萬人の勞働者が汗を流して働きつゝあるのだ。

この世界の文明と活動の全權を握りつゝあるものは、少數の資產家ではなくて、眞に多數の產業勞働者である。而して、勞働者の生活問題は、一人の問題でなく、またこの都市だけの問題でなく、實に海洋と大陸に亘る全世界の生活問題であつた。

良吉は、斯く考へると、きつとなつて憲一を見た。

「女との約束を取消して來たか」と、聞いた。

「取り消して來ました」と、憲一は答へた。其の顏は青褪て見えた。

「女は、何と言つた」と、良吉は、冷酷と見えるばかりに、其のことを聞いた。

「突然に言ひ出した時には泣きました。けれど、しまひに潔よく承知しました」

彼は、頷きながら、從弟の言ふことを聞いてゐた。

「憲一、お前のお母さんのことは、私が引受けた。行き屆かないだらうが、出來るだけのお世話をするから、お前は、東京に止つて、これまでどほり信ずる主義のために戰つてもらひたい」と、突然にも良吉は、言つた。

これを聞いた、憲一は、驚きと喜びのために眼は輝いた。

「兄さん、其れは本當ですか？」と、自身の耳を疑つたのである。

「本當だ」と良吉は穩かに答へた。

「兄さん、あなたはやはり私の信じてゐたとほりの兄さんでした。あなただけは私を知つてゐて下さると思つてゐました。兄さんは決して、ニヒリストでありません」と、憲一は躍らんばかりに激昂して、しやべりつゞけたのである。

「ぢや、お前は直にこゝから別れて宿へ歸つたらいゝ」と、良吉の言つた調子は、既にいつもの如く冷かに聞えた。

「僕は停車場までお見送りをいたします」

二人は、公園の林の間を歩いた。而して、無言のまゝ停車場の方に向つた。

——一九一九、六作——

騷擾後

宮地嘉六



一

彼はK市をとう〳〵立つた。汽船は翌日の午前中に神戸に着いた。彼はどうで此所らでひと稼ぎして、更に旅費をこしらへなければならぬ身であつたのだが、大阪までの切符を持つてゐたので、先づ切符の許す所まで行かうと思つた。そしてあちらで都合よく稼ぎ口が見つかれば仕合せだが、若しいけなかつたら此所へまた引き返すまでのことだ。と彼はさう定めた。此所らは彼にとつては安全地帶であつた。K市のやうに唯一ケ所の鐵工場ではない。彼方此方に大きな煙筒がむらがり立つてゐるのである。それが氣強い思ひをさせた。それに此の地には多くの知つた仲間もゐるに違ひなかつた。一緒にストライキの爲めにH監獄にぶち込まれた連中の誰れ彼れも此の地に來てうまく仕事にありついてゐることは豫々聞いてゐた。それらの連中がゐないにしても心細くはない。少し名の知れた工場なら必らず知つた顏の一人位はゐさうであつた。大阪の安治川あたりの工場にだつてそれはゐるに定つてゐる。然しならうことなら一氣に此のまゝ東京へ行つてしまひたかつた。がそれは今の場合望まれなかつたのだ。

『此所らで半年も一年もぐず〳〵して引つかゝるやうではつまらない。』彼はそれを

思つた――それは本意でなかつたのだ。

K市を立つまではいろ〱考へた。冬空に向つて居馴れた土地を去るのはさすがに心細く思はれたのである。それに僅かの旅費をくめんするにも容易でなかつたのだ。その爲めに一日〱みぢめさを加へる無爲な自分の姿を、見せては ならぬ人達にまで見られるのを忍ばなければならなかた。仲間等は事件の勃發當時に官憲からすつかり脅やかされた爲めに、みす〱自分等の爲めに獄へ投ぜられた彼が出獄後職を失つて身一つのやり場に困りきつてゐるにもかゝはらず殆ど寄りつかうとはしなかつた。若し彼に對して僅かの醵金をでも贈る時は工廠は直ちにそれら職工を解雇すると云ふのであつた。以後のこらしめとして警察でもそれとなく妨害する風があつた。で身のふり方に困つた彼等六人は出獄後、夜中に仲間等の家々を斷別に訪ね巡つて十錢二十錢と云ふ小粒な餞別を集め始めた。それもあまり脊はしく行かなかつたので、集める片つぱしから飲みしろにした。彼もいや〱ながら思ひ切つて廻つて見たが、分りにくい露路や山の手に長家住ひをしてゐるそれらを一軒〱捜して巡るのはうんざりした。たま〱捜しあてれば留守をつかはれたり、ゐるにしてもおいそれと十錢の餞別をも快く出さうとしないのであつた。で彼は胸くそが惡くもあり、最初男らしい積りで皆の代表者になつて今更泣きごとめいた文句を云つて餞別を貰ひ歩くのは、いさぎよいことでもないと思つて、すつぱりと思ひ止まつたのである。

ストライキの起る前に、妻として貰ふ筈であつた女及び女の兩親に對しては一方ならぬ耻辱を感じてゐた彼は、いつまでもK市に愚圖〱してゐたくなかつたのは無論であつた。その實彼はその女の爲めにK市に未練があることを自分でも心に耻づかしく氣づいてゐた。女の親達は表面だけは彼に恨みを抱かれないやうに冬着など贈つてくれたり、いろ〱口では親切らしいことを云つたりした。旅費位は用達てるからとも云つてくれた。さうした心づかひを云はれるのを、彼は愚かしくも誤信して、或る時はまだ彼女の婿であり得るかのやうな一縷の望みを感じた――今になつて考へると自分の愚かしさがどんなに彼女の親達の冷笑に値したらうと氣がつくのであつた。

彼は機械の方では相當に腕のたつ職工であつた。それに普通の職工とは異つたところをも持つてゐた。で彼女や彼女

の兩親や、その他の者に對しても、K市へそのまゝ止まつて、一番そこで自分の職業以外の力量を見せて、あつと云はせたい考へもないではなかつた。實際その心持があつた爲めにK市でぐづ〱してゐたのだ。殆ど蟲の息の狀態で、潰れかけてゐるよぼ〱の土地の小新聞にも入社して論說めいたものを書いたり、また或る辯護士の出張事務所に、ストライキ事件當時からの關係上、出獄後も親しく出入して書きものを手傳つたりして、ごろ〱してゐたのだ。それを見た一部の人は、なるほど彼と云ふ男は何處にでも使ひ途のある人物だと云ひ始めた。その實さうではなかつた。法律上の知識などは皆無で、それに才人と云ふ柄でもなく、法律事務所にゐる間も債權讓渡證一通ろくに書きこなせなかつた。然し出張事務所の主人は、彼が案外愚直な點と少し風采がよいので、それも大した風采ではないが、口髭があつたり、しまりのある法律書生らしいこけおどしの容貌を持つてゐたので店の看板の積りで居候に置いてやつてゐた。然し、しばらくゐる間に彼の無能はすつかり主人に認められてしまつた。彼の頭腦の調子では代書人にもなれないことを主人は見て取つたのである。で彼を態よく追ひ出してその小新聞社に周旋した。これはK市にある三新聞の一つで、殆ど土地でも存在を認められてゐないほどの無力な新聞だつた。その實、名義は此の土地の新聞のどれよりも古株であつた。K市の開けたてに生れた××新聞の名義を繼いでゐた。社長は水兵あがりの大男で、片方の腕は日露戰役で砲彈の破片を喰つた爲めにもがれたと云ふ不具者であつた。社長は自己の後生涯を歷史ある此の古い××新聞の再興に盡すと云ふ熱誠の辭をその復活號に掲げて、今から二年程前に、或る政派の金主を後楯に他の二新聞に、對抗の意氣込み勇ましく發行し始めたのであつた。然し半年經たぬ間に初めの景氣を失つて、輪轉機は二重にも三重にも抵當物にし、社員も職工も姿を長い間休刊同樣の姿でやつてゐた。新聞社とは云つても都會で見る場末の寫眞屋に似たペンキ塗の小つぽけな二階家で、見せなくなり、入口の工合などは寢床のやうであつた。社長は方々からお情づくの廣告料を前取りしては辛うじて暮しをたててゐた。その爲めに時々申し譯ばかりの小形の二頁新聞を出さねばならなかつた。不具の社長は左の手で校正をしたり、原稿の切り貼りをしたりすることが巧みだつた。さうしてゐるうちに妻君に逃げられた。一時は暗い顔をして悄げてゐた。鉛板や活字の抵當品までも賣り喰ひするやうになつた。土地の活版屋は何處も取り合つてはくれぬので二頁

の新聞をたまに出すにも遙々H市まで汽車で行つて、その地の活版所の見にくい活字で刷らせてゐた。彼はさうしたみぢめな新聞社の記者として住み込んだのだ。無論月給などはくれさうもなかつた。喰はせて寢かして貰ふだけでも彼は充分だと思つた。社長はかうした男によく見る頑固者で、二人は時々意見の衝突で喧嘩をしたが、根は善良な人間であつた。妻君に逃げられた後はあやしい女中を引つぱり込んでゐた。此の女中は記者たる彼以上に社長の氣に入りで、社長は每日女中と炬燵に差し向ひで朱筆を持つては其の日〳〵の新聞記事に框を描くと、女中はそれを忠實に切り抜いてスクラツプブツクに貼りつけた。また原稿の字數を計算したり、校正をしたりする調法な女中であつた。彼は社長の留守にその女中の手を握つた。軈て社長はそれを感づくと彼に對して何處かへ下宿してくれと命令した。それが動機で彼はいつそのこと旅立を決心したのだ。彼がいよ〳〵K市を立つ決心を告げると社長は今更いろ〳〵なだめて彼を引き留めた。

『よう考へるが好い。此の新聞も遠からず新たに株式にすることに定つとるけえ、さうなりや君に社會部を受け持つて貰ふことにわしはきめとつたがなあ、一つようく考へなほして見てはどうぢやのう。』社長は云つた。

『ありがたう………。』

彼はもう止まる氣はなかつた。すると社長は今更に別れを惜む風で、何も餞別が出來ぬからと云つて、彼が立つ際に、『右××新聞記者たることを證明す』と書いて社の印を捺した證明書を作つてくれた。

『これがありさへすりや汽船は半額ぢやし、關西中の劇場ならロハで大威張で見られるけのう。』と勿體らしく云つた。

然しおかげで彼は大阪まで半額で乘船が出來たわけである――。

二

汽船は荷物の揚げおろしの爲め神戸で長い時間ひまどつた。

彼は今になつて急に思ひついたやうに手カバンの裡から女の手紙を取り出して、それをそつと讀んだりした。軈てそれを小さく引き裂いて窓から海へ投げ入れた。その手紙は女自身が彼に寄越した手紙ではなく、女の曾ての或る男から女に送つた手紙の中の一番重要なもので、それを女が彼に對して貞實の證を請ふ抵當のやうな意味で預けたものであつ

た。もうそれは三年前のことだ。こんなものはいざと云ふ場合になつても女を責めるに有力な役には立たぬと云ふことが彼には今になつて分つたのである。こんなものを證據に女を責めること、その事が既に男としての恥辱である以上、もうそれを保存する必要は彼になかつたのである。今日まで保存して來た自分の愚かな手堅さが寧ろ耻づかしい氣がした。もう彼女は他の男か、若しくは以前の男の所有になりすましてゐるに定つてゐた。K市を立つ前夜も一日延つておきたいと思つて、彼は女の家を訪ねた。母親はまことしやかな嘘を云つて、彼女がゐないことにして會はせなかつた。然し多分二階に隱れてゐるに違ひないと思つた。が彼はそれなりすごすご引きとつて歸つた。『彼女の心は變る筈はない。何もかも母親の指圖に違ひない。彼女は心から自分を振り棄てる氣になる筈はない。俺がいよいよ明日立つと聞いたら自分から一目逢ひに來るかも知れぬ。』彼はさう思つた。波止場から汽船に乘るまでさう思つた。然し彼女は來なかつた――。

K市のもう一つ次の船場から交代して彼にずつと附き添ふて來た老刑事は此の神戸でまた交代することになつた。

『ではまあ氣をつけておいでなさらうよ。わしがように申し送りをしといたで、大事がんせんわい……。』遙々附き添ふて同船して來た人の好さゝうな老刑事は云つた。全く此の老刑事は今まで出會つた中で、最も人らしい所があつた。それでも油斷のならぬ爺さんだつた。これまで彼に附き添ふた刑事の多くが何かと心易げに話しかけるのが癖だつた。そこには何か報告の種を得たい陰險な成心があるのは無論である。その證據は、いかにも打ち碎けた調子を見せながら此方の言葉に對しては一言半句も聞き失ふまいとするやうに小耳をすまして聞き入るのが彼等の癖だつた。その下品な耳朶を見てゐると、如何に會話の際に彼等が、力を聽覺に集めてゐるかゞ直ぐ分るのだ。その耳朶は言葉を吸ひ込むやうに、ひよこひよこと動いて呼吸をしてゐるかとさへ思はれるのだ。無論それが彼等の職務である。然し彼は思つた。彼等はそれで何の矛盾をも感じないであらうかと。人として何の疑惑も起らないであらうかと。それにしても此の老刑事は肝腎の職務を輕んじない程度で老人だけに人らしさを見せた。老刑事は自分にも丁度彼の年頃に似たせがれがあつて、それが東京へ行つて苦學をしてゐることなどを語つた。

『わしは一生老ひぼれ巡査で田舍に朽ち果てる代りに、せがれがどうにかなりさうでごわす。』と老刑事は云つた。此の

老人の話によると専務視察係ではなく、實は老巡査のことゆゑ署長の思召しで歸途金比羅參りでもして來るがよいと云ふので彼の尾行の役目を仰せつかつたのらしい。老巡査は途々も船中で彼に對して勞働問題などに關する自分の意見を語つたりした。

『何のかの云ふても時勢ぢやて、危險思想ちふたかて、つまりがその、時節が來らあ危險でも何でもがんせんわいの、その時節が來るまでの假の名ぢやてさ。わしはさう思ふがの。職務柄大きい聲ぢやあ云はれんが、今の大臣だつて、もとは危險人物と云はれたらうて、ははは、それがお前さん、時節が來らあ立派な大臣になるぢや。』老巡査は調子づいて笑ひ話した。彼は此の時、幾分答へに當惑したので唯微笑でごまかした。爺さんなか〳〵當て氣が多いぞと思つて用心したのだ。

『わしだつて若い時は田舍新聞の校正係もやつたもんでがす。勞働問題の本も少しは讀んだが、そこぢやて、あんたらのストライキは勞銀問題ぢやつたげなが、わしの考へでは勞銀問題はまだ初歩ぢや思ふがあんたどう思ひなさる。勞働問題は單に賃金問題では解決出來ますまいがの。つまりが資本家と勞働者の折り合ひは永久不可能ぢやと思はにやならんて。何ちふても階級戰ぢやで……そこまで考へて行くちふと、そら、矢張あんたらの思想になるぢやてな。へつへつへつ……。』爺さんはまたおかしな笑ひをした。彼は矢張微笑でごまかして聞いた。

『それが此の爺さんにほんとに解つてゐるのであらうか。』と彼は思つた。

『さうだ永久の問題である。俺はさうした永久の問題の爲めに大刀打は出來さうもない。自分は自分自からの境遇を改善するより仕方がない。屈從と酷使とに生命を損はれる非衞生的な工場から先づ自分自身を救ひ出さねばならぬ。』彼は今其考へに歸着してしまつてゐた。さうした個人的な考へが現在の彼にはひつたり心持にづいてゐた。『馬鹿々々しい犧牲になつた。賃銀の增加やそんなものを要求したとて人間としての眞實の要求が滿たされるわけではない。勞働問題はもつと根本的な解決を待たねばならぬのだ。然しさうした深い自覺は今の日本の勞働者自身にないのだ。そこに彼等の屈從の運命は續くであらう。』彼はさう思ふのであつた。此の考へは今度の事件での失敗の反動も多少手傳つてゐた。彼

は今度の事件によつて自分と云ふものゝ姿を正しく見ることが出來た。同時に他をも見た。彼は今度のストライキで勞働者の無自覺と無氣力とを知つた。彼等はまだ小なる個人主義者であつた。仲間の一人が警察へ拘引されて行つた其の夜の留守を覘つて、その女房を口說きに行き、不義をさへしたではないか。最初集めた醵金の半ばを自分勝手な享樂費にもした。警察に喚び出されて度膽をぬかれて極力自分のがれな申し立てをもした。出獄後の犧牲者のひどい窮狀を知つて知らぬふりをもしたではないか。然しさうは云へ、彼自身も自分を顧ると、さうした手合を責める資格はないのであつた。彼は自分が全く仲間の爲を思ふて、自から進んで犧牲になつたのだとは信ずるとは許されなかつた。もとより獄に投ぜられるのは覺悟だつた。そして自分では最初立派な犧牲者の積りだつた。然し今になつてその當時の自分の心理を解剖するとそこに不純なものを見出すのであつた。その當時彼の覺悟を餘儀なくせしめたものは必らずしも熱誠ではなかつた。彼はその犧牲を拂ふことによつて海外へ飛び出すだけの資金が得られることを窃かに豫想せぬでなかつた。海外へ行つて四五年も働いて相當の貯金が出來たら日本に歸つて勞働以外の後生涯に入ることが出來ると思つた。然しその目算はすつかりはずれたのだ。

『身を賣つてまでも俺は自分自身の生涯を計畫したのだ。あさましい考へではないか。恥づかしいことだ。自分が仲間から何の酬ゐも與へられなかつたのは當然かも知れぬ。』彼は今はさうも思つた。同じ代表者の中でも或る者は事件を惹き起す前にちやんとまとまつた醵金を受け取つて後日の安全を計つてゐた。彼もさうしなかつたのが手ぬかりと云へば云へる。然しそれほど手堅い、惡るかしこいやり口をせずとも萬々間違ひないと信じたのだ。自分が立派に彼等仲間の爲めになつてさへやれば出獄後は必らず相當の醵金が自分に集らずにはゐないと信じ切つてゐた。出獄するまでさう信じてゐた。それが抑々思ひ違ひである。

豫審廷でも醵金のことについては一番に訊問された。他の代表者と同じく彼も必らず前以て醵金を受取つてゐる筈の如く豫審判事は見た。然しその點だけは堂々と彼は否認することが出來たのだ。

『あゝよかつた。それでこそ俺は世間に面目が立つたではないか。金に目がくれてやつたことでないことだけは世間で

は見てくれたのだ。裁判官だつてそれは信じないわけには行かなかつた。』彼はさう思ふと多少誇りをも感じた。

『何もそのやうに欸しく考へることがあるものか。それはあまり自己解剖が過ぎるからだ。その爲めに自分は自分の立派な行爲をまでも自からケチをつけてゐるのだ。そして自分の人としての信念をまで破壞させてゐるのだ。それではいけないのだ。もつと自分を信じなければならぬのだ……』

彼はともすれば自己解剖が導く所の自己僻蹉に陥つて行く弊を自分で氣づいてもゐた——。

三

老刑事に代つて神戸からは新規な刑事が乘り込んで來た。四十近い體格のすぐれた男で、大きな平つたい顏に荒いブラシのやうな八字髯を生やし、和服の襟の下から、刺しこの稽古襦袢の襟を覗かせてゐるのを見ると、多分柔道何段とでも云ひさうな肩書つきらしかつた。

『俺を少し大げさに見積つて此の人はやつて來たのかも知れぬ。』彼は心にさう思つて苦笑した。彼は今はどのやうな屈辱にも、また迫害に對しても惡びれるだけの根氣はなかつた。いやないではなかつたが、或る意味で自分を羊の如く裝ふその一種皮肉な快さに今は馴れてゐた。大阪について、知り合ひの人間を尋ねあてゝ、今宵の宿を定めるまでが心配であつた。汽船から上つていきなり旅館へ行くだけの用意もなかつたのだ。

『どうか出來るだけ寛大にしてやつてくだんせ、賴みます。』老刑事は彼を傍に置いてその男に賴んだ。その癖二人は離て甲板の物蔭に行つて何かひそ〳〵話し合つてゐた。

大阪の埠頭に着したのは午後三時頃だつた、波止場には新たに此の地の刑事達が二三人彼を待ち受けてゐた。

『今夜は何處で泊るんですか。』新たに附き添ふた刑事は訊ねた。

『實は知り合ひの家を搜した上でなければ分りませんが……。』

『知り合ひの家は何町です。』

『さあそれが分らんのです。』

刑事は怪訝な目で此の時見た。

『多分此の安治川にゐる筈なんですが、所番地を思ひ出せないのです。然し安治川鐵工所に勤めてゐると云ふことですから、先づその工場へ行つて尋ねて見ようと思ひます。』

『安治川鐵工所？ぢや直ぐ此の先ですから一緒に行きませう。』刑事は云つた。

彼はその知り合ひの者に災ひをかけはせぬかと氣になつた。

『實は御相談ですが、その知り合ひの人に私の現在の有樣を悟られたくないのですが、つまりあなたが附き添ふて下さることが先方の迷惑になりさうです。何とか寛大に願へないでせうか。』彼はおとなしくさう云つた。

『それは何とかしませう。何日位其の家に滯在することになるか、それが分ればまた私の方でも寛大な方法を講じます。』

『さあ何日位と今はつきりは云へませんが、都合で此所に當分落ちつくやうになるかとも思ひます。』

『まあ、兎に角そんな都合なら出來るだけ君の便利を計るから、先づその知り合ひの人に逢つたが好いでせう。』刑事は多少彼の貧しく哀れな現在を察したらしかつた。

安治川鐵工所には遠藤と云ふ親方株の知り合ひがゐた。三年前まではK市の工廠で同じ工場に働いてゐた老職工で、もう五十を過ぎた古顔の腕きゝであつた。K市の工廠でも伍長代理をする程の地位にゐたのだが、好きな賭博が禍ひして、規則の嚴しい官立工場を解雇され、今は此の地へ來て小頭株になつてゐるとのことだつた。此の際遠藤親方をたよるのが最も得策だと彼は思つた。

鐵工所の門口で彼は名刺を守衛に出して遠藤親方に通して貰つた。小使はそれを工場の方へ屆けて間もなく鉛筆で返事を認めた紙片を持つて歸つて來た。紙片には次のやうに書いてあつた。

『よく訪ねて來てくれた。五時には歸るからわしの家へ行つてゆつくりしてゐて貰ひたい。』彼はそれを見て嬉しかつた。それには所番地も書いてあつた。やつと安堵を覺えた。

遠藤親方の家は工場から二丁ばかり隔つた町裏の平家だつた。刑事は彼がその家に入つて行くのを見とゞけた上で四

つ角の所に立つて居た。

遠藤親方のかみさんは五六年前K市で病死したが、今なほ後妻はなく、家には二十になる長女のお花と十二と九の男の子が二人ゐた。お花は丁度夕飯の仕度をしてゐる所だつたが、それと見て襷をはづかしなら出て來た。

『まあ、よう來やはつた。どうぞお上りやす。五時にはお父さんも歸りますしやらう――。いつこつちやへ來やはりました。』

『え、今着いたんです。工場の方へちよつと寄つて親方から番地を敎つてやつて來ました。五時に歸るからと云ふことでした。皆さんお丈夫で。』

『え……』とお花はそれには返辭をぬいて、

『まあ、あんたはんこそ……えらい騷動で迷惑しやはつたさうな、なあ。でもお丈夫で結構でしたな。お父はんもあんたはんのことを氣にしてゐやはつたんだつせ、でも皆の爲めになりやはつたさうな云ふて喜んで……。』

彼はさう云はれると少しきまりが惡いやうな風であつた。『皆の爲めになりやはつたさうな……』と云ふ一言が氣はづかしく聞えた。

時計を見ると午後四時少し過ぎて、親方が歸るまでは間があつたので彼はシヤボン函を借りて男の子の案內で近所の風呂屋へ行つた。先刻の刑事と四つ角であつたが子供に感づかれてはと思つて見ぬふりした。

夕暮の町は灯がとぼされてゐた。風呂屋の中に入ると、今し方着いたばかりの旅の空とも思へぬなつかしい風呂屋特有の情調が彼を包んだ。そこには土地の人達の內輪な話が交はされてゐる。それを聞いてゐると土地の人々の生活が髣髴とした。彼は疲れ冷えてゐる身體を靜かに氣長く溫めた。それから流し場の鏡に映る自分の顏をふと見つけた。旅の空を背景とした、憂はしげに沈んで見える漂泊者の自分を見た。

『此所は何處だ。大阪の風呂屋だ……。』

早くも此の土地に落ちついたやうな氣持から自分を呼びさます爲めにさう云つて呟やいた。

總てさつぱりした氣持で風呂屋を出て、町の店々を見ながら宿へ歸つた。彼は久しぶりに親方に會つた。

『手紙を出さんならん思ふてもおまはんの知る通り筆が云ふこと聞かんよつてなあ、えらい御無沙汰をして。』親方は云つて、

『かね〴〵話は聞いてたが、えらいこつちやつたさうな、まあ好えわ、そやけどまだ〱日本の勞働者は自覺が皆にないよつてあかんなあ。おまはん達も少々みそつけたんやさうなが、どないやつた。』

『え、ほんとに意氣地がなくつてみそつけましたよ。』

『まあ好えわ、若い時きや、はつは。そやけどおまはんも自分の身が大事やさかい、これからは考へるがよろしいぜ。今は大事な時きや、どないでもこれから心がけ一つで立身しようと思や出來る。今の間は不平や反抗をもらして身をあやまるのは損や。わいかて、こないな年しても反抗心はあるけど仕方ないよつて我慢してるがな。今にどえらい時節が來たら少しは勞働者もらくになるやらう。虐めるだけ虐めさしといて好えわ。無理な復讐せんかて、なり行きを見てれや復讐は出來るもんや、時勢のなり行きを信じて默つて見てるのがかしこい復讐や。そやないかいな。』

『お父さんそんな大きな聲せんかて……。』お花は心配さうに云つた。表に誰か立つてゐたからであらう。親方は少し聲をやはらげた。

『まあ、つまり立派な才力があつたら勞働者にならんこつちや。なあ、わい見たいにこない年になつたらぱた〱したかてあかんよつてあきらめてる。おまはん達はまだ〱これからや。』親方の言葉の調子は聞いてゐる彼には何となく善良な關西人らしい溫味を覺えさせた。親方は酒がだん〱まはつてゐた。

『實は私何處かの工場へはめて貰ひたいんですがどうか世話して下さるまいか。親方。』

『それや易いこつちや。そやけどおまはん此所に長いことをる氣はないやらう。』

『え、まあ當分稼いで少し旅費でも出來た上で東京へ行かうと思つてゐます。』

『そんなら、東京へ行くだけの旅費ぐらゐあげるわ、おまはんも仕事の荒いこないな土地で働かんかて東京へ行つたら

外の事がやれるやらう。ぐづ〳〵せんとすつと此のまゝ行くが好えやらう。わいにも一人の子せがれがあるよつて、またおまはんの厄介になることもあるやらうから。充分なことは出來へんけど、わいの云ふ通りにしたが好えやらう。』

『ありがたう、然しそれではあんまり……。』

『まあ好えわ。安心して二三日ゆつくりして行くが好えわ。』親方は云つた。夜は更けた。

四

翌日一日滯在して彼は親方に暇を乞ふことにした。

『そんなやつたらもう無理に止めんよつて、これから自分の身を大事にしてなあ、あつちやでひと勉强するがよろしいぜ。』親方はその朝工場に出しなにくれ〳〵もさう云つて、彼に旅費をくれた。彼は汽車の時間表を見て午前發の東京行きの列車に間に合ふやうに仕度した。

『これはなあ、わたいのほんの心ざしだすよつて、先でまたいることがおますやらうから……。』

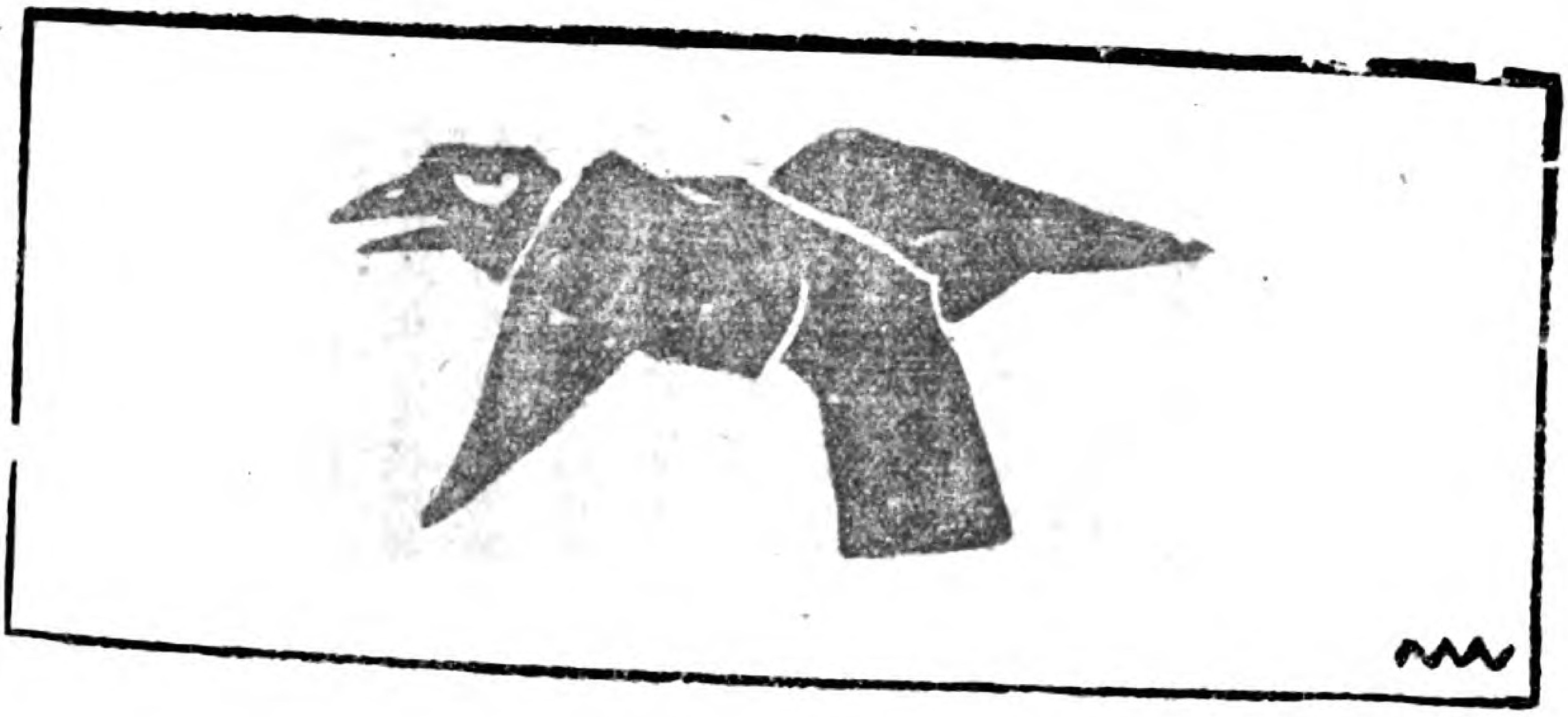
お花は父親が工場へ出て行つた後で、自分のやさしい心ざしを紙に包んで彼の前にもじ〳〵しながら出した。

『いえ〳〵、そんなにどうか心配しないで下さい。親方に貰つた上に、あなたにまで貰つてはすみません。あちらへ行けば大丈夫なんですから、どうかそれは……。』彼は當惑しながら辭退した。

『まあそない云はんと持つといでやす。さきでなあ、またいるやうなことがありますよつてそない云はんと……。』

お花は幾度も彼の手の上に押へつけるやうにした。二つの手は相觸れ合つた。彼はとう〳〵それを頂いて受けた。(完)

(八年六月十八日)



勞働會議（一幕）

岩野泡鳴

登場人物

第一の若い男（増田、温情派的）
第二の若い男
第三の若い男（木村）
第四の若い男（手塚、過激派的）
　　孰れも勞働者
第一の若い女（お蝶、第一の男を思ふ）
第二の若い女（お花、無節操）
第三の若い女（無節操）
　　孰れも勞働者
第一の四十男（病人）……………勞働者の果て
第二の四十男（尺八の名人）……………職人風
四十女……………………女工取締り
群衆（多勢）
巡査（一名）

（ちよッとした森林中の明き地。中央に長い腰かけが二つ置いてあり。その前面の左右には、腰かけとなる石がころがつてゐる。そして後方からは、『諸工場聯合寄附』とあり〳〵

と書いてある柱の上に百燭光の電氣が輝いてゐる。或郊外の工場地に於ける私設公園。）

（時代は現代。）

（時は夏の午後九時頃から。）

一、第一の若い男、第一の若い女

第一の若い男（勞働服を着て、腰かけに在つて少し不平さうにきッとなつて）　ぢやア、これほど相談するのに、あなたはいやだと云ふんだ、な？

第一の若い女（これも勞働服、悲しさうにして）　いやだと云ふんぢやアありませんけれど――。

第一の若い男　ぢやア、わたしの頼みを聽いて呉れたらいいだらう――？

第一の若い女　だツて――今、申し上げた通りですから。

第一の若い男　おツ母さんの病氣は病氣、さ。あなたが結婚したからツて、ながねんのわづらひがよくなるわけもなからうが、惡くなることもないでしよう。

第一の若い女　そりやアさうでしようが、わたしはまだ結婚と云ふことを初めてこないだからあなたに考へさせられたばかりで――

第一の若い男　わたしだツてさうです。あなたならと見込んで初めて結婚して見ようと云ふ氣になりました。あなたが親の腹からの勞働者でない通り、わたしも決して勞働者として生まれて來たものではありません。然し中途半端な學問なんかくその役にも立たぬことを發見して、思ひ切つて直接の勞働界へ這入つて見ると、わたし位の持つてゐる貧しい學力をでも應用させて呉れる餘地が澤山あります。早い話が今の社會主義をおも立つて唱へてるやつらです。大杉だツて、堺だツて、少しも直接に勞働なんかしてゐないくせに、それが勞働者ぶつて社會主義を唱へる。そんな主義がほんのただ西洋の危險な燒き直しに終はらないですみましようか？　資本家から出た勞働問題が當てにならぬやうに、ほんのただ書物の上から出た社會主義も詰りません。斯う云ふ問題は、もう、今日では工場内で云ひ合つてるこ

とですから、あなたも多少はお分りでしようが――わたしは飽くまで勞働者となつて、勞働階級の爲めに、然しまた資本家にも利益になるやうに、力を盡さうと思つてをります。

第一の若い女（感心した目つきで梁を見ながら）　結構なことです、わ。

第一の若い男　それにしても、わたしの結婚慾は別です。あなたが不治の病人をしよつてをられるやうに、わたしはまた病人も同様の今の社會を――わたしの考へから云へば――男としてしよつてると云つてもいいでしよう。お互ひのことぢやアないか？

第一の若い女　それにしても――わたしは――結婚する以上は、立派に立ち合ひ人があつて――さうですよ、みんなのやうに、お互ひに直ぐ勝手にくツついて直ぐ別れたりしたくないんですから。

第一の若い男　それがあなたの病人と何の關係があらう？　矢ツ張り、いやなんでしよう――よろしい！（立ち上つて獨り言のやうになり）ぢやア、何の爲めにおれの云ふ通りここまであひ引きしに來たのだ？　詰らねい！（しも手、前方へ離れて行きながら）あなたは矢ツ張り資本家とでも結婚したいのでしよう？　勞働者なんかいやなのだ！

第一の若い女（溜らなくなつたやうにして、これも腰かけを離れて行つて）わたしはお花さんやお脊さんのやうなんぢやアないんですから――ね、もう少し待つて頂戴。どうせおツ母さんは長くもないんですから――

（この少し以前から、第一の四十男は杖をついて、しも手から。第二の男と第三の男とは勞働服のまま酔つて、左右から第二の女の肩に手をかけて、かみ手後方から。いづれも無言で登場。）

二、第一の四十男、第二の若い女、第二第三の若い男、第一の若い男

第一の四十男（病人のやうによぼ〳〵して中央の方へ進みながら）　さうだ！人間は皆死ぬのを待たれてゐるんだ。

第二の若い女（男どもの手から早く離れて、腰かけの後ろまで進み）お花さんやお脊さんのやうぢやアないツて？　へん！　わたしはお花ですよ。あなたはさぞお人からでしよう、ね、どこかの落ちぶれお孃さまが男とあひ引きしてイて――

第二の若い男　さう、さ。あのお孃め、おれが口說いたツて相手にもしやアがらんでよ。

第三の若い男　おれにもだぜ――あいつア。

第二の若い女　なか〳〵お堅いお孃さまにも好きな男はあるのだとよ！

第一の若い女　……(默つてかみ手前方へ行つて、顏をそらせて泣いて居る。)

第一の若い男　下らねいことアよせ、お花！　手めへよりやアいくらましだか知れたもんか？

第二の若い女　さうでしようよ、わたしやアおたんちんですから、ね！　お蝶さんよりやア下司な女ですから、ね！

第一の若い男　さう、さ。さう自分が云つてりやア間違ひッこアねいや。(かみ手の石へ行つて、腰をかける。)おれだツて、働らくばかりぢやア溜るもんけい？　少しやア樂しみもして見てイや、な。けれども、おめへらのやうに、あれにもこれにもと云ふやうな女はきらひだ。

第二の若い男　なアに、この公園だツて共有だア、な。

第一の若い女　増田さんは自分ばかり色をとこか何ぞのやうに思つてるんだ、わ。さうして、お蝶さんばかりが色をんなのやうに。(腰かけをかみ手からまわつてそれへかける。)

第二の若い男　(かの女のあとに付いて腰かけの前へ行きながら)　さう、さ。さう自分が云つてりやア間違ひッこアねいや。

第三の若い男　何でい、人の眞似ばかりしやアがつて！　(かみ手の腰かけをしも手からまわつて前に出る。)

第二の若い男　眞似をするのア手めへの方ぢやアねいか？　おれがお花のあとをついて來りやアおめへもついて來たし、おれが腰かけにかけりやアおめへもまたかけやアがつて！　なア、お花(と云つて、かの女とふざけながら)毎日十二時間も十五時間も働らいて、酒のにほひとをんなのにほひでもかがないぢやア、この世の中に生き甲斐があるもんかい。こりやア皆おたげひだア。

第二の若い女　(こちらからも手を以つてふざけながら)　さう、さ、ね。お蝶さんのやうに氣取つてゐたツて、若いときやア二度とア來やアしない、さ。

第三の若い男　なアに、この公園だツて共有だア、な。

第二の若い女　そりやア、さうと、ね、あなたは知つてて——隣りの工場で、きのふか、おとゝひ、若いをんながひとり殺されたのを？

第二の若い男　そりア耳よりな話だが、な、殺す前におれなら一と晩でも二晩でも可愛がつてやるのに。

第二の若い女　自分で井戸へ身を投げて死んだのだけれど、わけを云つて見りやア、まア、殺されたも同前、さ、ね。

第三の若い男　自殺かい？女が自殺するくれゐなら、それこそおれがふところに入れて大切にしてやつたのに、な。

第一の若い男　そりやア、ほんたうかい、お花？

第二の若い女（第一の女の方を見ながら）誰れかぢやアあるまいし、うそなんか云ふもんか、ね？

第一の若い女（この時その方をふり向いて）わたしはうそを云つたおぼえなんかありません。

第二の若い女　入らないことをおしやべりするのア、うそも同様ぢやアないか、ね？

第一の若い男　そんな云ひ合ひどころぢやアねいんだ。早くわけを云つて見ろ。

第一の若い女　………（また顔をそらせてしまう。）

第二の若い女（第一の男に向き直つて）ひよツとすると、その女がほんたうに泥棒したので申しわけなさに死んでしまつたのかも知れやアしないが、ね——印刷のでき上つたおかねを盗んだと女工の取締りから云はれたのださうよ。さうしてはだかにされてしらべられたの、さ。

第二の若い男　そりやアおもしろい！

第三の若い男　もちろん、氣の利いた取り締りが、畜生！　いたづらッけを起したのだらうが——そんなことをしれいだツて、物をまたがせさへすりやア——

第二の若い女　それが、さ、金貨や銀貨なら、さうすりやア落ちるにきまつてるだらうが、紙幣と來ちやア、さうは行かなかつたらう、さ。

第二（第三）の若い男　わツはツは！

第一の若い男　下らねいことアよせ！　一體そのかねがその女から出たのか？

第二の若い女　それは知らない、わ――あの顏、增田さんはわたしでも取つたかと思つてるんだ　わ！

第一の若い男　おめへたちやア獨りのむく無罪の娘が死んだのだとア思はねいか？

第二の若い男　今どきの娘に、そんなことア分るもんかい？

第一の若い男　無謀にもそんな耻かしめを受けて――？

第三の若い男　夫婦喧嘩にだツて、然し、井戸へはまつて死んでしまうものアあるから、な。

第一の若い男　馬鹿野郎！

第一の四十男（この前からしも手の腰かけにかけてゐたのだが、苦しさうな息をしながら）　死なせりやアまだしも結構だ――死なせないで困るものがある。

第一の若い男　勞働者に對してのこんな虐待をこの會議が問題にしねいでどうするんだ？

第二の若い女　遠慮なく問題におしよ。その代り、その前にわたしたちやアもツとらくになりたい、ね――お前さんたちの氣取つて云ふ生活を、さ。

第二の若い男　それにやア、かねと女を共有するんだ。

第三の若い男　矢ツ張り、公園にかい？

第一の若い男　へたな洒落なんかよせ！　××××××××××××××、共有にしていいものもあらうが、惡いものも澤山あらア。

第二の若い男　でい一、增田にやアお蝶の共有はいやだらう。

第一の若い男　默れ！おれにやアまだ約束もできてゐねいんだ――病人がある爲めに。

第二の若い男　ぢやア、病人がなくなりやア、おれたちにも許すのかい？

第一の四十男　さうだ、人間は離れかの死ぬのを待つてるもんだ。

第三の若い男　縁喜でもねいことア云ふな、そこの病人！　けれど、おれたちが他人の死ぬのを待つてると云やアほかでもねい、資本家どもだらう。さうだ、おれたちやア過激派でもいいんだ。××××××××××××生活が今よりやア惡くなりツこアねいから、な。

第一の若い男　馬鹿云へ！　ぶち毀わしになつて　たまるもんかい？　資本家をぶッ倒せア勞働者も一緒にとも倒れだぞ。おれたちやアよくならうとしてゐるんだ。資本家を倒してしまうのぢやアねい、勞働者も段々資本家の仲間入りをしようと云ふんだ。

第二の若い男　ぢやア、どうしたら仲間入りができると云ふんだ？

第一の若い男　働らくの、さ。なまけないで働らくの、さ。

第三の若い男　少しおれの方へも來いよ（と云つて、第二の女をその右から引ッ張つて自分の方へ向かせる。）

第二の若い男　馬鹿々々しい！　これよりも働かせられて溜るもんかい？　さうしておれたちの取る賃金を考へて見ろ――一時間の六錢から拾錢が日に十時間で六十錢から壹圓、一ケ月で十八圓から三十圓。夜業を五時間づつ續けたツて、これに月々たツた九圓から十五圓しか附かないぢやアねいか？

第二の若い女　をんなぢやアそれがもツと少くツて、一時間に四錢から八錢、日に十時間で四十錢から八十錢、一ケ月で十二圓から二十四圓。夜業を五時間づつ續けたツて、たツた六圓から十二圓しか増さないぢやアないの？

第一の若い男　だから、働らくのだ。

第三の若い男　よせ、下だらねい！これ以上十八時間も二十時間も働らかせられちやア、眠る時間もなくならア。

第一の若い男　だから、働らくのだ――おめへらの考へとア反對に、十五時間が十二時間ですむやうに、十二時間が八時間ですむやうに！

第二の若い女　をかしいぢやアありませんか？

第二の若い男　それぢやア賃金がへるばかりぢやアねいか？

第一の若い男　分らねいやつだ、なア――一時間の働らきの中身と分量とがそれだけ多くなるんだから、時間はへつても、それだけ一時間の賃金が増して來るんだ。

第三の若い男　そんなことが今の强慾な資本家どもにできるもんか？

第二の若い男　自分らばかりが利益の配當を出たら目にしたたかしやアがつて、資本家と勞働者とア主從の關係だなんて！

第一の若い男　それでもいいぢやアないか、若し資本家がおだやかによく分つて來りやア？　今ぢやア勞働者もまだ勞働者として本氣に働らいてゐねんだ。だから、勞働者がもツ、本氣に働らき出して、而も資本家が分らなけりやア、そのときやアおれだツて蠻勇を振ふかも知れないんだ。

第二の若い男　そのつもりなら、おれも贊成だア。――まア、おれの方へ來てゐなよ（と云つて、第二の女をまた引き寄せる。）

第二の若い女　わたしも贊成だ、わ。

第三の若い男　おれも贊成だい！

第一の四十男　然し、働けなくなつては、どうして呉れます？

第一の若い男　おれは資本家ぢやアねいから、そんなことにやア答へることアできねいが――一體、おめへさんはどこから來たんだ？

第二の若い女　あの人はさツきから變なことばかり云つてるよ。

第一の四十男　まづ、どなたでも少し水を飲ませて下さい。息切れがして話ができません。（皆、きツとなつて、四十男の方へふり向く。）

第一の若い男　ぢやア、水を――お蝶さん。

第一の若い女　わたし、貰つて來ます、わ。（前面をかみ手からしも手へ少し急いで行く。）

第二の若い女（第一の女をじッと見遣りつつ）　あの人にばかり『さん』づけをして――お孃さまですから、ね。

第三の若い男　わたし貰つて來ます、わー（と、そのこわ色をつかつて、また第二の女を自分の方へ引き寄せる。）

第一の若い女　…………（默つてしも手へ退場。同時に、第三の若い女驅け出して登場。）

三、第三、第二の若い女、第二、第一、第三の若い男、第一の四十男

第三の若い女　わたしの人をどうしてんだ、この尼！（一直線に第二の女へ行つて、むしやぶり付く。）

第二の若い女（ふり切つて立ち上り）　木村さんが何もあなたの人とアきまつてゐやアしないよ。

第三の若い女　きまつてゐます！　慴りながら約束までしてきまつてます！

第二の若い女　わたしも、慴りながらだい！

第二の若い男　ぢやア、畜生！　おれもおめへを承知できねいぞ！（立ち上つて、いきなり、第二の女をこづきまわす。）

第二の若い女　もう、斯うなつちやア、野暮を云ふのアおよしよ――それこそお互ひのこツたから！（第二の男の手をふり切る。）

第二の若い男　よし、畜生！（第二の女を睨み付けてから、第三のに向ひ、）おめへはどの工場の女か知らねいが、今度アおれに來い。

第三の若い女　行きますとも！（第二の男に肩を引き寄せられながら、第三の男を見つめて）　あんな助平なんか惜しいもんか？

第一の若い男（横を向いて）　これも共有のお互ひッこかい？

第三の若い男（第二の女を引き寄せて矢ッ張り腰をかけてゐながら）　おりやアどいつだッて一匹、女のにほひがしてイるのを取ツつかまへてりやアいいんだ。

第一の四十男（半ば獨り言のやうに）　病氣になつてないだけでもまし、さ。

第一の若い女の聲（しも手から）　増田さん、増田さん、早く行つてあげて下さい、喧嘩のやうですから！

第一の若い男　喧嘩？（直ぐ立ち上る。）

第二の若い男｝
第三の若い男｝　待つてたー　待つてたー

（四十男を除いては、第一の男が驅け出したあとから、第二の男は第三の女と、第三の男は第二の女と手を取り、肩を押さへ合つて、しも手へ退場。四十男は見棄てられたてい。）

四、第二の四十男、第一の若い女、第一の四十男

（第一の若い女はしも手から、水を入れたコップを持つて。第二の四十男はかみ手から、職人の服がけ、絆纏すがた、尺八を手にして。いづれも同時に登場。）

第二の四十男　…………（物を云はないでかみ手腰かけのそのかみ手のはじに腰をおろすと直ぐ、人のゐる方とは反對に向いて『鶴の巣ごもり』を吹き初める。その調子、わざと高くなく、然し低いところに何か物を云つてるやうに。）

第一の若い女（水をこぼさないやうに歩いて行きながら、尺八が少し鳴り出してから）さア、水を持つて來てあげましたよ。

第一の四十男　ありがたう。（受け取つてぐッと飲みほしてから）つべたい水の勢ひで話をしようと思つたのに、みなどこかへ行つてしまつてー

第一の若い女　おツつけ、また集まつて來ましようよ。

第一の四十男　さうでしようか、な？（ふと尺八の方へ氣を取られて、暫らく聽きほれてゐる。それから、第二の四十男に向つて）おう、キ、君も子どもをどうかしたんぢやアありませんか？

第二の四十男（尺八をやめて、その方へ向ひ）僕は娘とふたりツ切りであつたが、その娘が井戸へ身投げして死んで、なアー。

第一の四十男　そりやア紙幣を泥棒したと云ふ無實の罪を着せられた子ぢやアねいか、ね？

第二の四十男　どうしてーそれを？

第一の四十男　なアに、今、ここで皆がそのうわさをしたのを聽いてたんだがー

第二の四十男　ちやア、もう、分つてゐようが、な、その爲めにおりやァやる瀬ねい思ひを訴らめて、この好きな尺八で死んだ娘の供養をしてやつてらア、な。

第一の四十男　成るほど！

第二の四十男　尺八ぢやア弟子も多く持つてゐて、この界隈で僕に及ぶものアねいんだが、うちで吹きやア思ひ出が多い爲めか、あんまり滅入つちまうんで、な、仕事の手があくとア、斯うしてそとを吹き歩いてるんだ――が、どうしてまた君がそれを云ひ當てたんだか？

第一の四十男　それは一體何と云ふ曲であつたのだか？

第二の四十男　『鶴の巣ごもり』と云つて、な、鶴が子どもを育てる心持ちを吹ッ込んであるんださうで――そのまだちよツと初めのところをやつてたんだが――。

第一の四十男　不思議と云やア不思議なもんだ、な。僕にやアそんなことは少しも分らなかつたけれど、何となく君が子どもを悲しんでるやうに聽えたので――と云ふのは、實は、僕も今自分の娘を可哀さうでたまらないんだ。

第二の四十男　へい！　そりやアまた？

第一の四十男　まア、聽いて貰ひたい。君のは死んだからまだしも結構だらうが、な、僕の娘は死に切れないで困つてるんだ。これも勞働の結果だ。人間が生きる爲めにする勞働ぢやアないか？　それが斯う人間を殺すやうぢやア――！　僕も勞働者だが、勞働の爲めにこの通り心臟病にかかると、もう役に立たないと云つて、やとひぬしは僕を棄ててしまつた。娘も同じやうなわけで、これは肺病でそのいのちが旦夕に迫つてる。斯うなると、たよりになるものア神ほとけのほかにやアない。まだ足の利く僕の方が初めのうちは可哀さうな娘だけは助けて貰ふやうに毎日神さまへ參詣して祈願を込めてゐた。が、どうしても直らぬ！（いつのまにかうるみ聲になつてゐる。）

第一の若い女　………（默つてたが、しも手腰かけのしも手のはじに手をかけて聽いてたのが、涙をふいてゐる。）

第二の四十男　それでも、死んでしまつちやアかた無しだから、な。

第一の四十男　いや、早く死んだ方が本人に取つてもどれだけましだか？　――娘はそれを知つて、却つて恨んだ。この苦しみから早くのがれさせて貰ひたい。神さまへも祈るなら、いつそのこと早く息を引き取るやうに祈つて呉れいツて！

第二の四十男　尤もだ！

第一の若い女　わたしのおツ母さんも病み付いてますので、同情します、わ。

第一の四十男　さうだ。お前さんもさツきそんなことを云つてた、な――僕はとう〳〵法度がないもんなら、娘を殺す方が人情だと思ひ出した。さうかと云つて、まさか、殺しもできねいんで、この頃ぢやア、僕は早くわが娘の息が絶えるやう――これはちよツと聽くと、不人情に見えようが――神さまにさう祈つてるんだ。

第二の四十男　實に、尤もだ。それに比べりやア、おれの方のアまだ思ひ切りがらくだ――突然のできごとで突然に死んだんだから。（また尺八のつゞきを吹き初める。）

第一の四十男　如何にもさうありていもんだが――その勞働の爲めに病氣になつたり、死んだりする家族のあはれさに就いて、少しそれをここの會議とかでみんなに聽いて貰ひたいんだ。

第一の若い女　ほんたうに詰りません、わ、ね――あなたがたも安い日給で働らいて、病氣になつたら直ぐ棄てられるばかりぢやア。

第一の四十男　一體、この勞働會議と云ふのアどう云ふ趣意だか？　一つの工場でまじめに働らいてたものがその爲めに病氣になつて働らけなくなつたら、養老金なり何なりを貰へると云ふやうな話にして貰ひていもんだが、な――これは自分ばかりの爲めぢやアねい、勞働者と云ふ勞働者すべての爲めだが――

第二の四十男（尺八をやめて）　なアに、そんなまじめなことを相談するんぢやアねいやうだぜ。巴里の講和問題中の萬國勞働會議になぞらへて、ただ遊び半分に寄り合ひをしてゐるんで――云はば、まじめのときやア喧嘩で、冗談のときやア若い男と女のあひ引きだア。

第一の若い女　…………（前方からしも手へ向いて、少しきまりの惡いやうすをする。）

第一の四十男　それぢやア馬鹿々々しいぢやアねいか？　僕はまたまじめな會議かと思つて、この苦しい息切れを辛抱してわざ〳〵遠方から出て來たんだが――

第二の四十男　どうせ今どきのやうな世の中ぢやア、かねのねいものが何と頑張つても駄目だア、な。諦らめるより仕かたがねい、さ。（また尺八をつゞける。）

第一の四十男　それもさうかも知れねいが――考へて見ると、娘を殺すのア如何にも殘念で、なア。（しも手より、ばた〳〵と、もとの人々が戻つて來る。その間に、第四の若い男勞働服を着て、これも勞働服の四十女を尺八で以つて追ひ立てて出る。そのあとからまた多くの男女の勞働的群衆が從ふ。第二の四十男は尺八をやめる。第一の若い女はかみ手の方へ逃げる。）

五、第一の若い女、第一、第二、第三の若い男、第二、第三の女、第四の男　四十女、第二、第一の四十男

第一の若い女（かみ手から）　どうしたんですの、増田さん？

第一の若い男（かの女の方へ進んで）　なアに、あいつが今の話の娘を殺した女だ。（それから　この二人は別組のやうになつてこなしだけでささやき合ひ、四十男の第一や第二を見まわす。その間に次ぎの會話が進む。）

第二の若い男（その相手と相變らずからんでゐながら）　乙なことをしやアがつた女工取り締りと云ふから、どんなに氣の利いたいろ男かと思つてたら、そんなで、而もこんな婆アさんだア。

第三の若い男（これもその相手とからみ合つて）　こんな婆々アなら、もツとこツぴどくやツ付けろ！　やツ付けろ！

第二の若い女（その相手の右の手を自分の肩から胸に取つて）　若しわたしたちもこいつの工場にゐたら、矢ツ張りひどい目に會はされたかも知れやアしないよ。

第二の若い男（第二の女に）　おめへなんかどこにゐたツてだア、な。

第二の若い女　何を云やアがるんだ、この助平！

第三の若い男（第二の男に）　ちやア、手めへの女だツておんなじだらう。

第三の若い女（その相手の肩に左りの手をかけて）　はばかりながら、わたしは井戸なんかへどんぶりツこはしませんから、ね。

第三の若い男　圖々しいから、さ。

第二の若い女　わたしだツて、腐つても鯛のお嬢さんぐらゐならいつでも眞似をしてやらア、ね。

第二の若い男　そのときやアおれが增田になつてまた可愛がつてやらア。

第二の若い女　おほきにお世話だ。

第四の若い男（まだ怒りが納まらぬやうすで四十女に）　もツと眞ン中へ出ろ！　眞ン中へ！

四十女　…………（勞働服の裾つけを取りみだしてゐながら、まだ息づかひを荒くして舞臺の中央へ出る。）

第二の四十男　おい、手塚、おめへはどうしたんだ？

第四の若い男　師匠、おめへの娘を殺したのアこの女だぞ！

第二の四十男　ほう！（立ち上つて、少し進み出で四十女と憎々しさうな顏を見合はせる。）

四十女（第二の四十男に向つて）　あなたがお常さんのお父さんでございましたか？　この度はまたお常さんが飛んでもないことをなさいましてまことにお氣の毒で——

第二の四十男　…………（それには返事もしないで殘念さうに横を向く。）

第四の若い男　おのれが殺して置いて氣の毒だもねいもんだ！

四十女　よして下さい、人ぎきの悪い！　わたしがいつ人を殺しなどしました？

第四の若い男　とぼけるねい！　おれは、な、おめへにそとで出ツくわしたが最後、この恨みは晴らさずにやア置かねいと思つてたんだぞ。いや、今夜はおめへの出て來るのを待ち伏せしてゐたんだ。もう、ただぢやア歸れねいと思へ！

四十女　いきなり、尺八でぶつたり、叩いたり人のお尻をまくつて砂を投げたりすりやア、もう、それで十分ぢ

やアありませんか？

第四の若い男　おめへはそれ以上のことをしていらアー　若いむくな娘はくそ婆々アとア違ふ。おめへならそんなことをされても洒々してゐられようが、な、若いものアそれが爲めに恥づかしがつて死んでしまつたんだ。

四十女　けれど、わたしが殺したんぢやアありません。

第四の若い男　なんだと！　でい一、盗みもしねいお常にその嫌疑をかけたのアどいつだ？

四十女　皆がさう云ひましたからです。

第四の若い男　馬鹿云へ！そんなことをぬかしたのアおめへの機嫌を取る馬鹿ものばかりだ。勞働者をうら切る馬鹿勞働者どもだ。やとひぬしと云やア、な、たとへ官吏でも資本家だぞ。その資本家の機嫌を取るおめへの機嫌をまた取るやつらがゐるんだ。そんなやつらは皆かたッぱしからぶッ倒すんだ

四十女　そりやアあなたの勝手でしようが、ね。

第四の若い男　それに、また、おめへはおれが砂をぶち込んだのをひどいと云つたが、それよりひどいことをおめへはなんでやつたんだ？

四十女　規則ですから。

第四の若い男　なま意氣云ふな！（尺八を以つてかの女の尻をなぐる。）

四十女　いたい！

第四の若い男　いてい位はまだ〱でい。おめへの爲めに死んだものがあるんだ。こん畜生！　（今度は足を以つて蹴飛ばす。）

四十女（その場に倒れて、）　誰れかほんたうに早く巡査を呼んで來て下さいと云ふのに！

第二、第三の若い男／第三の若い女）わッはッは！

第一の若い男　巡査もくそもあるもんか？そんなやつア早く會議にかけろ。會議に！

第四の若い男　そりやア、むろんだア。その前におりやアもツとやつ付けてやるんだ。——こら、婆々ア！　規則なんかは資本家の爲めになるやうにばかりできてるんだぞ。その規則をだッて、おめへのやうなむごいことをしねいでも應用できる。そんなにひどいことをしねいでもだ。おまけに盗まなかつたとが分つたぢやアねいか？　結果はどうだ、無實の娘をひとり殺してしまつて！

第二の四十男　矢ッ張り諦らめた樣子でもとのところへ腰かけに行きながら）ぢかに手をかけたのでもねいから、許してやれ。

第四の若い男　師匠はまたそんなことを云ふが、おりやア承知アできねいんだ——おれの好きな女を殺されたんだから、な。

第二／第三の若い女　…………（冷笑の目を見かはす。）

第二の四十男　そりやア、生きてゐさへすりやアおめへの女房になつたかも知れねいが、今ぢやア好きでも何でも、もう、死んでしまつちやア——（顫へるその低い聲を直ぐ尺八に移して吹き初める。）

第一の四十男（杖によつて立ち上つて）　わたくしも一つこの會議へわざ／＼問題を持つて來ましたのだが——

第一の若い男　お前さんの事件は今これ（と、第一の若い女をさして）から聽いておれが承知してゐるから。

第一の四十男　さうですか？　それぢやアおまかせ致します。（また腰をかける。）

第四の若い男　やい、貴さまは温情派のくせに、もう、今夜の議長ぶつてるんけい？

第一の若い男（かみ手から中央の方へ進んで行つて）　温情派がどうしたと？　おれが温情派なら、貴さまは過激派だぞ！

第四の若い男　過激派がどうした？　（これも少しその方へ近づいて行つて）貴さまアなまぬるいことを云ふ資本家のまわし者ぢやアねいか？

第一の若い男　馬鹿ぬかせ！　おれがまわし者なら、その婆アさんやあの男のことを問題にするかい？

第四の若い男　貴さまらにそんなことを問題にされたかアねいや！

第一の若い男　無學なくせに、なま意氣云ふな！　（ふたりはちよッと睨み合ひになる。）

第二の若い男 さう云やア、増田は働らけ、働らけツて、やとひぬしの云ふやうなことばかり云ふぜ。

第三の若い男 おれたちやア資本家などにならねいでもいいんだ――かねさへもツと儲けりやア。

第一の若い男 馬鹿野郎！ 資本家がなくツて勞働者があるか？ さうして勞働者もかねが儲かりやア、資本家の仲間入りをしねいで向上して行けるかい？

第四の若い男 そんな心配は入らねいや、社會の制度さへ××××××改革すりやア。

第一の若い男 そんなことア聽きかじりの空想だ。出直して來い！ おれたちやア、今の社會の實際問題として實際に行はれることを考へさへすりやアいいんだ。今の間違つた社會主義者のやうな、無政府黨や過激派の眞似をするばかりが勞働者でもねいぞ。共産主義や共有主義で社會の秩序が立つと思ふか？

第四の若い男 立たねいでどうするかい？

第一の若い男 それが空想の夢だ。社會はいろんな階級のあひ持ちだから、な。

第三の若い男 それも尤もだらうかい？ 男がなけりやア女もねいわけだから、なア。

第二の若い女 は、は、はア！ 女がゐねいぢやア、酒もうまくはねいか？

第二の若い女 増田さんのやうないろ男がなけりやア、お蝶さんも生きてゐられないでしよう。

第三の若い女 お蝶さんて誰れ、さ？

第二の若い女（第一の女をさして）あのお孃さん、さ。（ふたりの女はまた冷笑しけふ。）

第一の若い女 ……………（知らぬ顏をしてゐる。）

第四の若い男 兎に角、今夜はおりやアいのちがけで議長になつてやる――この婆々アを殺す決議をする爲めに。少しどけ、どけ！（と云つて、中央正面に當たる腰かけの部分へ進んで行く。第二の男と第三の女とはそのかみ手へ第三の男と第二の女とはそのしも手へ立ちよける。その前から起きることをもしないで尻をすつてゐた四十女はびく付き川す。）

第一の若い男 さうはさせないぞ！（これも進んで行つて、第四の男を引きもどし）おれが議長になるんだ。

第四の若い男　なにようしやアがるんだ、こん畜生！　資本家のまわし者！

第一の若い男　ぢやア、貴さまアロスケの犬か？

第四の若い男　なんだと？

第一の若い男　さア、來い！（ふたりは取ッ組み合ひを初める。第一の女がとめに來る前に第一の男は一度投げられる。）

第二の四十男（尺八をやめて）　よせ〳〵、また喧嘩なんか。

第一の若い女　あなた、あぶないからよして頂戴、ね。（と、第四の男に頼む。）

第一の若い男（起き上るが早いか、また飛びかからうとして）　畜生！

第一の若い女　あなたもおよしなさいよ。（かの女は第一第四の男の間に這入る。第二第三の女は默つて第一の女に對する惡感のやうすを示めしてゐる。このあひだに四十女は這ふやうにして起きあがつて、おづ〳〵と逃げて行からとする。）

群衆の一人　婆々アが逃げる、逃げる！

第四の若い男　この野郎！（ふり向いてかの女の方へ駈け行き、かの女を引きもどして）逃げようたツて、逃がすもんか？

第二の四十男　なアに、かまはねいから許してやれ、許してやれ。

第四の若い男　おりやアこいつを會議にかけて、なぶり殺しにしねいぢやア氣がすまねいんだ。

第二の四十男　馬鹿なことを云へ、手塚！　そんなことをすりやア、おめへもおかみの法律で殺されるばかりだぞ。

第四の若い男　かまうもんか！

第二の四十男（考へに沈んだ聲で）　おめへがさう熱心なら據んどころねいとしても、だ、おれはおめへがさう無駄な熱心をするのを見れば見るほど、死んだ者が可哀さうに思ひ出されて――（また、尺八に移る。）

第一の四十男　そりや尤もだ――おれの娘も早く死んで呉れりやア――。

群衆の一人　議長は選擧だ。選擧だ。

群　衆（まち〳〵に）　それがいい。それがいい。（群衆も進み來て他のものらと入り交じる。）

第四の若い男（四十女を中央正面の前方に引き倒して）観念してイやがれ！

四　十　女（おど／＼して）わたし、殺されるわけはございません。

第一の若い男（かみ手の石の上に立ち上つて）おれは、諸君、勞働者の實際的向上を目的とする增田と云ふものだ。穏和に着實におれたち勞働者をよくして行かうと云ふんだ。突飛なことを新らしがつて、足もとを忘れるやうなことはしないぞ。議長に選んで吳れ給へ。

群　衆（のうちより）よし／＼、おめへを選んでやる。

第四の若い男（中央、四十女のしも手に突ッ立つて）諸君、おれは過激派だ。名は手塚と云ふが、××××××××××××××××××××××××××××。着實だなんてなまぬるいことア嫌ひな男だ。議長はおれにさせて吳れよ。

群　衆（のうちより）よし來た。それもよからう。

第一の若い男　おれを選ぶものはみな手を擧げろ。

群　衆（のうちより）さア、擧げた。

同　じ　く　擧げたぞ、よく見ろ。

同　じ　く　先生、分りました。

同　じ　く　なんだ、小學校の生徒かい？

第四の若い男　そんなことをしたッて分るもんかい？　おれに投票するものアおれのところへ集れ。

群　衆（のうちより）それがいい。それがいい。

同　じ　く　さア、集まれ。集まれ。（群衆は第一の男と第四の男との兩方へ別れ初める。第一の女は勿論、第二、第三の男、第二、第三の女はすべて第一の男の方へ行く。第一の四十男は立たず。第二の四十男は見えないが、尺八をつづけてゐたのがやむ。）

群　衆（のうちより）巡査が來たぞ。

同　じ　く　そら、巡査が來た。

同　じ　く　おまわりさんだ。

同　じ　く　警察官だ。（みな、わッしよい、わッしよいと云ひながら、ばた／＼と逃げ初める。）

第二の若い男（四十女の左り手へ出て）この助平婆々ア！（と脊中を蹴る。）

第三の若い男（これは右手から）このあまツ！（かの女の胸を蹴る。）（この二名もそれから逃げて行く。）

第一の若い男（も亦四十女のそばへちよツと立ちどまつて）おめへのやうな女はおれが天下を取つたツて許して置かねいぞ。

第四の若い男（これは最もいまいましさうにかの女を睨み付けて）婆々ア！いのちびろひをしやアがつて――おぼえてゐやアがれ！

（尺八で今一度投ぐり付けてから、渠も第一の男と共に優々と退場。あとに殘つたのは第一の四十男と四十女。）

六、四十女、第一の四十男

四十女（起きあがりながら、半ば獨り言のやうに）殺しもしないのに人を殺したなんて――おそろしい人間どもだ！

第一の四十男　隨分亂暴は亂暴だが――お前さんも決していいとア云へねいや、な、苟しくも人の取り締まりをするものがさう無慈悲なことをしちやア。

四十女（立つて渠に向ひ）わたしはただうわ役から云ひ付かつた規則を守つて取り調べをしたのです。それをわたしのせいだと恨んで、わたしにつら當ての身投げなどされちやア、こツちこそおほ迷惑で――その爲めに踏んだり蹴たり、投ぐられたりは、いかにわたしだツて溜りません。賃金を貰つて働らいてる以上は、わたしも勞働者ぢやアございませんか？

第一の四十男　だから、これから少し氣を付けなよ――資本家の機嫌ばかり取らねいやうに、さうしてお前さんのうわ役にもさう無慈悲をさせねいやうに。

四十女　そんなことアわたしなんぞの力ぢやアとても――

第一の四十男　いいや、できねいことアねい――みんながその氣になつて團結すりやア、おしまひにやアうわ役だツて資本家だツて無理は云へなくなりまさア。無慈悲なことなんて、とどのつまりの據んどころねい時にばかり出す奥の手だ。

四十女（中央に立つたまま、また獨り言のやうになつて）そんなことを云つたツて――？

第一の四十男（これも獨り言のやうだが、僅かに悲みに堪へぬやうすで）おれは――娘の――死ぬのを――神さまに――祈つてらア、（この時、巡査かみ手から登場。）

七、四十女、巡査、第一の四十男

四十女　（巡査を見るが早いか、兩手で自分のからだを押さへて、わざとらしくぶッ倒れるまでに）あ、いた——た、た、た！

巡　査　（つか〳〵とかの女の倒れたそばへ行つて）どうした？

四十女　蹴られたり、ぶたれたりしたんです——今、からだ中を！

巡　査　（第一の四十男の方へ進んで）貴さまにか？

第一の四十男　どう致しまして！　わたくしは今夜ここの勞働會議とかへ問題を一つ持つて來たものですが——わざわざ來まして、みんなが逃げ出してしまつたので當惑してイるところです。

巡　査　ぢやア、貴さまも社會主義か？

第一の四十男　いえ、わたくしは勞働にはぐれてしまつた者ですが、別に社會主義でも何でもありません。

巡　査　うそを云へ！　社會主義でないものがどうしてこんな冗談らしい寄り合ひへやつて來たんだ？

第一の四十男　ですから、一つ問題を持つてまゐりました。

巡　査　それがいかん！　不都合な奴だ！　貴さまだけが逃げもしないで殘つて、いい加減な申しわけができると思つてるんか、圖々しい！

第一の四十男　わたくしは心臟の弱くなつてる病人です。

巡　査　病人のくせに、なほ更ら圖々しいやつだ——警察まで來い！

第一の四十男　そりやア、來いとおッしやればまゐります。別に訴へるところもないから、一生の思ひ出におまわりさんたちにでもこの苦しい事情を聽いて貰ひましよう。

巡　査　ぐつ〳〵云はないでも、行けば分ることだ。

第一の四十男　さうでしよう。分る人には多少でも同情して貰へばそれでいいんです。さうだ（と杖によつて立ち上り、半ば獨り言になつて）もう、自分も長いのちぢやアない。たッたひとりにでも、ふたりにでも同情の聲さへ聽けば、その聲が娘にもいい念佛だ。

巡　査　何を云ふのだい？（矢ッ張り、四十男に向つて）ゆふべは若い女のことで飛んでもないおほ喧嘩を起すし、今夜はまたどうしたと云ふんだ？——（四十女の方を見て）お前さんも兎に角一緒に來て貰はう。

四十女　（起き上りながら）まゐりますとも。二度とこんな目に會はせられては溜りませんから。（巡査に從つて、も

との二名もしも手へ退場。第一の若い女、またコップに水を持つてしも手から。第一の若い男、人を探すやうすでかみ手から。この二名登場。）

八、第一の若い女、第一の若い男

第一の若い女（第一の四十男のゐた席のところからその右左を見まわして、その目がかみ手へ向くと直ぐ） おう、増田さん、あの病氣の人も逃げて行つたのでしようか？ 苦しさうだと見えましたから、わたしは二度目の水を持つて來てあげたんですのに。

第一の若い男（かの女へ近づいて行つて） ちやア、わたしが頂戴致します。（コップを受け取つてぐツと飲みほしてから、コップを奥の方へ投げ飛ばす。）

第一の若い女 あら！ 借りて來たのです、わ。

第一の若い男（にが笑ひに情慾の寂しみを見せながら） かまうもんですか？ ――然し、あの男はどうせ長いことアありません。あのやうすぢやア、可哀さうに、その寢てゐると云ふ娘と前後して死んでしまうにきまつてます。

第一の若い女（も渠の動く方へついて行きながら） さうでしようか？ さうでしよう、ね。して見ると、氣の毒ぢやアありませんか？

第一の若い男 それも仕かたがない、さ。從前通りの少しも希望がなかつた勞働社會に對しちやア、恐らく最後の代表的な犧牲でしようよ。

第一の若い女 わたし、勞働がおつかなくなりました、わ――井戸へはまつたり、死ぬやうに祈つて呉れいと賴んだりする人のことを思ひ出しますと。

第一の若い男 わたしには然し勞働をよくしようと云ふ希望があります。

第一の若い女 でも、また、勞働の爲めにあの人のやうな病氣になつては――

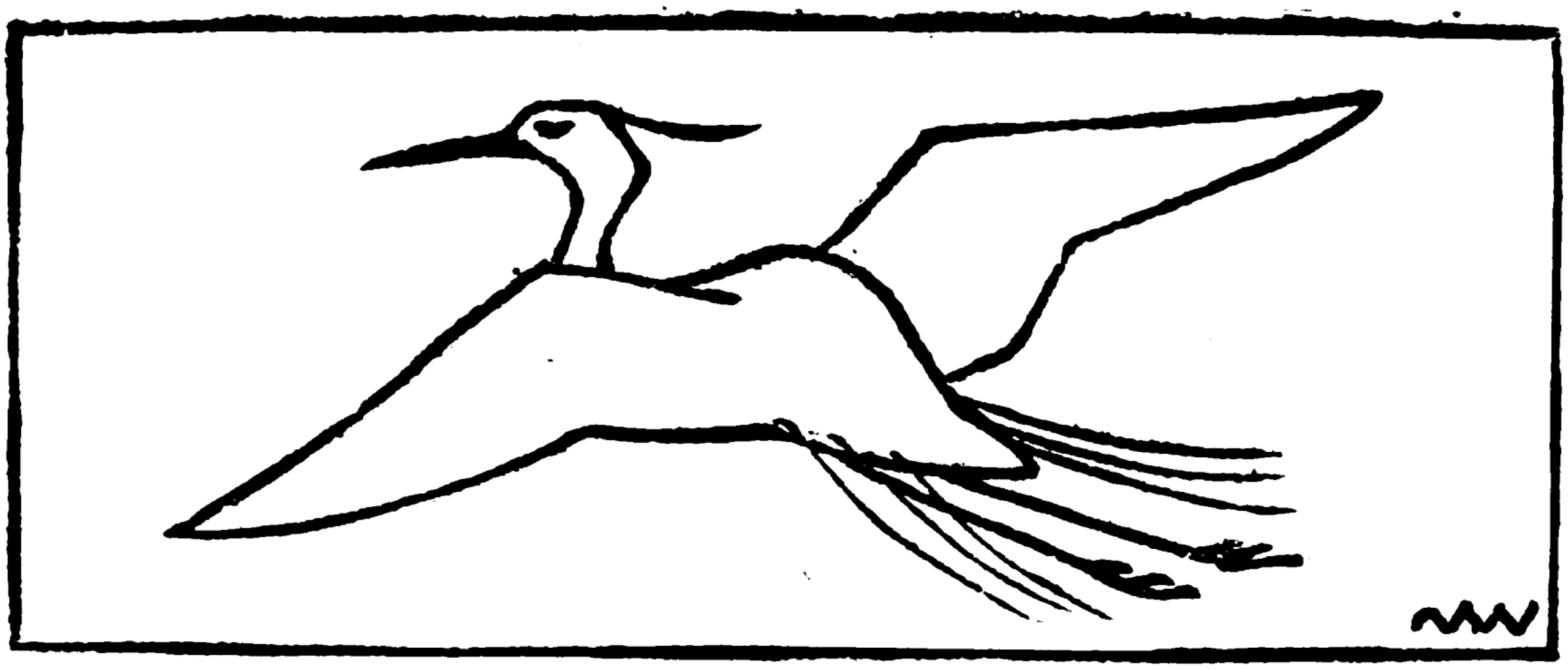
第一の若い男 恐らくなりますまい。その代り、わたしは勞働社會の新らしい希望に對するまた別な意味の犧牲にはなるかも知れません。

第一の若い女 ちやア、それが矢ツ張り社會主義と云ふのでしようか？

第一の若い男 さう云へる點もありましよう。また、云へない點もありましよう。

第一の若い女　それにしても、何だかおつかない、わ――うちには病氣が出たり、そとでは警察の手がまわつたり。
第一の若い男　そこがまた然し面白いぢやアありませんが、若い血の涌く男子が自分の好きな友人やをんなにも誇ることができて？
第一の若い女　でも――
第一の若い男　おつかなけりやア早くやめるだけのことです。
第一の若い女　でも、おツ母さんの病氣の爲めですから。
第一の若い男　それは分りました。――然し（と俄かに聲と共に右の手をふるはせて突き出し）結婚の話だけはきめて置きましよう。
第一の若い女　…………（耻かしさうにしてだが、默つて男の出した右の手をかの女は左りの手でそッと受ける。男は喜んで、またその左りの手で女の右の手を握る。やがて男は自分の肩へ女の兩方の手を持つて行き、自分の兩手で女の肩のあたりを抱く。女はされるまゝになつてるので、からまつた二名はおのづから腰かけの方へよろめいて行つて、そこに腰をおろす。そしてちよッと離れて手を引ッ張り合ひながら）
第一の若い男　いつから夫婦になりましよう？
第一の若い女　おツ母さんの病氣がかた付きましたら。
第一の若い男　まだそんなことを！　ねえ、そんなことを云はないで、さ。（男が女に抱き付かうとする時奥の方から例の尺八が突然のやうに聞え出す。兩人は思はずかみ手しも手へ立ち離れる。それから、人の姿は見えて來ないのを見すまして、先づ男がかみ手から腰かけに行き、しも手に立つてる女を來いと云ふこなし。その間にもあはれな尺八の音は續きつゝ幕。）

（編者申す）文中にある××××の印は當局の注意に依り削除したる箇所なり。作者及び讀者諸彥の御諒恕を乞ふ



老坑夫の死

加藤一夫

一

「親爺」の（坑内で彼はさう呼ばれて居た）謙造は、午前六時の交代番が來ると、じめ〳〵と汗と垢とによごれた仕事着を着、尖端のつぶれた二挺の鶴嘴を擔いで、重い足を仕事場へと運むだ。

彼の仕事場は、左二坑道の三卸切羽で、坑口から約十二度の傾斜をもつて、地表から三百二十尺ばかりの地下に在つた。

仕事場に着くと、彼は、ドッコイショと、持つて來た道具を坑の中程のところに置いて、痛い腰をのばしながら周邊を見まはした。が、これからまた、厭な辛い仕事をしなければならぬかと思ふと泣き出し度い様な氣になつた。彼はその道具の上に腰をおろした。そして懶さうな手つきで煙草をふかし始めた。

坑内はしんとして靜まりかへつて居た。人の話聲一つきこえるでなし、蟲の泣く聲一つするではなかつた。彼は、空虚な心を抱きながら、凝乎とこの靜かさに耳を傾けた。ポタリ〳〵と地下水の點滴が天井梁を傳つて落ちて居るのが、何時とはなしに彼の意識のうちに這入つて居た。薄明いカンテラの焔が、ドス黑い油

煙を吹き上げながら、僅かばかりの周圍を照らして居るのも見えた。その光のとゞかぬところは、薄氣味のわるい眞暗であつた。

さうした光景を、凝乎と眺めて居るうちに、謙造はふと、自分が今どんなところに居るかを意識した。彼は今地下何百尺の洞穴の中に在つた。そこには太陽の光もなければ星の光も見えなかつた。空を見ようとしても、厚い〱地殼でもつて蔽はれ、遮られて居た。澤山の人の往きから娑婆に出ようとしても、固い〱地層でもつて邪魔をされ、隔てられて居るのであつた。

彼は薄氣味がわるくなつて身慄ひした。

ふと又彼は、「ド、ド、ド……」と枠の腐つた舊坑廊の落盤する音を、奥の方できいた。同時にまた、「クワーン……クワーン……」と、鶴嘴を打ちおろす幽かな音が、直ぐ隣りの二卸切羽から響いて來るのにも氣がついた。

それを聽いて居ながら、謙造は、何とも云ひ様のない寂しさに襲はれるのだつた。

「バタツ〱」と、人の足音らしいものが不意に彼の鼓膜を打つた。彼はギヨツとして後ろを振向いて見た。二人の人影が暗の中にぼんやりと表はれて來るのが見えた。

それは、重役の一人が現場員をつれてやつて來たのだつた。そして謙造がまだ仕事にかゝつて居ないのを見ると、いきなり

「おいツ、親爺！　今頃まで何ぐづ〱して居るんだ。もう何時だと思ふ」

と突慳貪に現場員は云つた。

「いや何うも濟ません」と謙造は少しドキマギして、坑夫なんかには似合はぬ言葉でもつて答へた。「少し何うも氣分がわるかつたものですから……」

「すみませんぢやないよ。早く仕事をするんだ。また飲み過ぎたんだらう」

かう云つて現場員は、自分の探鑛鶴で彼の背中をつゝいた。

「はい」と謙造はやほら立ちかけたが、ふら〳〵と眼がくらみかけたので「今日はやすませてもらひ度いんですが……」と眼をつぶつたまゝ哀れみを乞ふやうにして云つた。

すると、その後ろの方に默つて立つて居た、丸々と肥つた赤ら顔の重役が、

「駄目だよ」と一聲、威嚇しつける様に聲を荒らげて、「そんなに怠けちや困るぢやないか。上半期の勘定では、お前には貸越になつて居るんだぞ」と抑へつける様な調子で云つた。

謙造は默つて起つて鶴嘴をもつた。そして年老つて力のない腕を振り上げて、坑脈を掘り始めた。

現場員は探坑鶴の柄尻でトン〳〵と天井を突いて見て居る様だつたが、やがて謙造の方を向いて横柄に、

「地盤が弱いやうだ。氣をつけろよ、親爺！」と注意した。

そして、重役と二人で、何か話しながら出て行つた。

「カチン……カチン……」

謙造の打ちおろす鶴嘴の音が、長い間隔を置いて力弱く響いた。二打ち三打しては直ぐ、謙造は腰をのばしたり、鶴嘴の柄に凭れかゝつたりして休むだ。腹立たしい様な、悲しい様な、或る會體の知れぬ感情が、ムカ〳〵と込みあげて來るので、何うしても彼は十分とは仕事をつゞける事が出來なかつた。

謙造は、探坑鶴で自分の背中をつゝいた現場員と、碌々自分の云ふ事を聽きもしないうちに「駄目だよ」と一聲毒々しげに自分を威脅して置いて、此の辛い仕事に追ひやつた重役との所爲に腹が立つてたまらなかつた。

「此の畜生等奴！人を何んだと思つて居やがるんだ」

思はず斯う、彼は聲をたてゝ呟いた。そしてまた、鶴嘴を投げ捨てゝその上に腰をおろした。

彼は、かうして、まるで囚人の様にコキ使はれて居る自分が哀れでならなかつた。食つて生きて行くために、――さうだ、たゞそれ丈けのために――病氣であらうが、氣分がわるからうが、そんな事には一向頓着なしに、こんな墓場見た様なところで、こんな苦しい勞働をしなければならぬと云ふ事が腹立たしくてたまらなかつた。

「何うかして此處を出なけりやいかん。こんな年齢をして何時までもこんなところで苦しむでたまるものか」

から思つて彼は、妖魔をでも振り拂ふ樣に、力強くその頭を振つた。

しかし、よく考へて見ると、當り前にして此處を出ようとするには、先づその借越しを償はねばならなかつた。それをしない限りは、此の坑夫の足らぬ今日、どんな事があつても放して吳れぬ事がわかりきつて居た。而も、ほんの二三年前までは決してこんな荒仕事をした事のない、もう六十を越した年寄りの彼には、その借越しを償ひ得るどころか、益々ふえる一方であるのも知れきつて居た。それだからと云つて、此の山を逃げ出すのには監視が餘りに嚴重であり過ぎた。

これを思ふと彼は、自分が今、まつたくの捕虜であり、そしてそれを何うにもする事の出來ない境遇に在る事を自覺しないわけには行かなかつた。

謙造は力なく首垂れて暗い闇の中をぼんやりと眺めた。そして、そうして居るうちに、又しても一つの暗い考へに襲はれた。

「さうだ、それに俺は」と彼はギヨツとした顏で自分に云つた。「俺は此處を出て一體何處へ行かうとして居るんだ。娑婆に出て何の目的があり、何の希望があるんだ。そして一體何うして食つて行けるんだ」

彼にはもう、どんな難關をでも突破して進んで行かうとする若い時の元氣も力もなかつた。そして彼はたゞ、自分をこんな境遇におとした（と彼は思つて居る）自分の養子婿の初造を恨むの情に燃えた。

「さうだ、初造さへ婿にもらはなかつたら、俺はこんなになるんでなかつたんだ。彼奴は、何度考へても憎い奴だ！」

さながら誰かと向ひ合つて楯をついて居る樣な調子で、彼は自分に云つた。過ぎ去つた日の幻が彼の眼の前に在つた。

彼は函館に於て可なり有名な資産家であつた。そして今から十年程前に、ある人々と一緒に函館から餘り遠くないと

ころに一つの炭坑を見つけて、それを採掘する可なり大きな會社を設立したのだつた。愈々會社が成立して事業を始めて見ると、坑山は思つたよりも良好で、採炭の量も思つたよりは澤山であつた。彼等はそれで、トン〳〵拍子に富を重ねて行く事が出來た。株主には四割五割の配當をする事が出來た上に、利益金が尚も澤山に浮いて居たので、彼等數人の重役が莫大の賞與金を懐にする事が出來た。で、重役達はみなホク〳〵もので、てんでに急に宏大な邸宅を新築したり、別莊を建てゝ妾を置いたり、別に事業を始めたりした。謙造も勿論これをした。中にも、彼は一番のコリ屋で、その新築の邸宅には遠く日本の內地から高い木材を運ばせたり、舶來の家具を新調したり、自分には何處がいゝかわからぬ高價な美術品を集めたりした。そしてその上にまだ、釧路の方に漁業會社を設立したりなぞした。

「あの時分は俺の全盛時代だつたんだ」と彼はその頃の豪奢な生活を回顧して、急にその眼を喜びに耀かしながら彼は思つた。「そして、彼奴を婿養子にもらつたのもその時だつた。そしてそいつが惡るかつたんだ」と忌々しさうに口の中で呟いた。

彼にはその時、三人の子があつた。一番上が女で十七、その次ぎが男で十歲、その次が矢張り男で八歲であつた。だから、普通なら勿論彼には養子をする必要がなかつたのである。だが、そこが凡夫で、たとひ一人や二人の男の子を貰つても、有り餘る財產をわけてやりさへすればいゝのだと思つたのと、事業が膨脹するにつれて、自分一人では立ちまはりかねる事情もあるので、代理人を頼むよりは親身なものに其の事業を分擔させた方が得策だと云ふ淺い量見から、新に創めた漁業會社の仲間の一人の家から、その男の素行や性質も碌に究めずして、二十八歲になる利造を貰ひうけたのである。ところが、その男の性質は餘りよいものではなかつた。彼は實業上の知識もなければ實際上の才能もない癖に、他人の意見には一向おかまひなしに自分の考へをやり通す男であつた。そのために、彼が入社してからの會社の經營方針は事毎に機宜を失したり、方法を過つたりしたのであつた。さうして起つた第一の故障は、仲間同士の暗鬪であつた、排斥であつた。而も謙造一家が仲間の凡てのものよりも以上の株をもつて居るので、仲間のものはそれを何うする事も出來ないのであつた。彼はまた、勞働者の生活狀態を考へてその利益を計る樣な事は毛頭もなかつた。それが爲めに

勞働者の不平もポツ〳〵と起きて、仕舞ひには遂に同盟罷工が初まり、暴動さへ起る樣になつたのであつた。その上まだ彼は、此の上ない放蕩者であつた。彼の足は會社から青樓に、青樓から會社にと云つた風で、彼の家庭に歸つて來る事は殆んどなかつた。さうなつて來ると、如何に金まはりのいゝ彼でも、さう何時までも何時までも樂な日をばかり見る事は出來なかつた。そこで彼はその埋め合せに株に手を出したが、それが抑も〳〵の會社の破綻の最大原因となつた。會社は到頭解散の悲運に陷つたのである。

謙造はその當時の光景を眼に浮べた。苦りきつた顏をした重役たちが、後整理のために算盤と帳面との首つ引きをする。會社が莫大な負債をした。債權者が詰めきりにやつて來て、債務償却の代りに坑山の引きつぎをする。坑夫達が賃銀を寄越せと怒鳴つて事務所の門前に蝟集する。九天の上にまで舉げられた謙造は九地の下にまで投げおろされた樣な思ひをしてその間に立ちまはつた。

やがて、その方が一段落着くと、今度は、初造が彼に家資分讓の請求をした。彼は初造に對する極度の憤懣を抱いては居たが、それは彼が初造を貰ひ受ける時の約束でもあつたし、一方ではまた、さうする事によつて彼との關係を一切斷つてしまはふとする心もあつたので、釧路の方の漁業會社の株を自分及び自分の子達のために殘して置いた外、一切を初造に讓つてしまつた。そして彼は、もう一度、生活をやり直すつもりで、妻と、病める次男との二人をつれて、釧路の方へと引越して行つた。長男は丁度、學校を卒業してある鑛山に勤める事になつた。

彼はもう放恣な生活には這入り込まなかつた。小さな組合の頭として、只管に事業の發展に熱中した。そのお陰で事業の方も段々とよくなつて行くし、彼の信用も增して行つた。彼の生活は再びまた望みに輝いて居る樣に見えた。しかし、その幸福も永くは續かなかつた。やがて間もなく、彼はその最後の打擊に打ちのめされてしまつた。

彼の眼の前には、更に、彼れの組合所有の大小の發動船や網や艪や櫂の一切と共に、折柄出漁中であつた數十名の漁夫達の流れ去つた、あの恐るべき暴風の襲來の時の光景があつた。

ある眞夏の日さかりであつた。時ならぬ風が颯と吹いて、黑い雲が海の彼方に現はれたかと思ふまに、雲は疾風に乘

つて矢の樣に飛んで來て、空は一時にかき曇り、雨さへぽつ〳〵と降り出して來た。スハ大事と、組合の漁夫達は必死の力を注いで、船の陸揚げや網の取込みなどに努力したが、それ等の努力も一切は無駄であつた。山なす海嘯は束の間に襲來して、海岸に置かれてあつた一切の物を粉微塵に碎き、かつさらつて行つてしまつた。女、子供達の泣き叫んで狂奔するのが、凄い風と雨との音をもれてきこえた。

「あの時俺の財產の一切がなくなつてしまつたんだ」謙造は怯びへて居る土龍のやうな眼をしばたゝきながら考へた。

「それから直きに、俺の妻までも子までも……」

彼及び彼の組合の漁夫達が、窮乏と飢とに泣いて居る時に、かねて病氣して居た子供が死んだ。彼の妻は、此の想像もつかぬ轉變や不幸のために鬱死してしまつた。炭坑に勤めて居た長男が——今は彼の唯一の頼みである——脚氣にかかつて歸つて來たかと思ふまに十分の手當てが行きとゞきかねたので衝心して死んでしまつた。

彼の肉體からも心靈からも、彼を生かして行く一切の力の拔け去つたのは此の時であつた。彼はもう一切の望みを人生から絕つたのであつた。そして彼は、氣拔けした狂人か何かの樣に、毎日〳〵、船と漁夫達の奪はれて行つた海岸に出て、たゞぼんやりと沖を眺めて立つたり、何か考へ込んではぶら〳〵と歩るきまはつてばかり居た。が、そのうち、彼の姿がその海岸に見えなくなつた。それは彼が、かつて彼の坑山に使つて居た技師長が、彼の今居る坑山に働いて居ると云ふ事を訊いて、それを頼つて、一人漂然と、何人にも別れをせず、夜のうちに此處を去つたからであつた。

だが、やつとの事で此處に來て見ると、自分の頼つて來た技術長は一月程前に、遠い九州の炭坑に轉任した後だつた。彼にはもう、九州に行く旅費もなく、勇氣もなかつた。彼は遂に此處の炭坑の飯場頭の乾兒と云ふ事になつて此處に働く樣になつたのである。

「憎い奴だ。彼奴が俺から、俺の一切の仕合せをとつて行つたんだ。俺の財產も、俺の妻も、可愛い子も。そして、彼奴と俺の娘との間に出來た哀れな孫も。俺の有りつたけのものを彼奴が奪つて行つたんだ。彼奴を八つ裂きにしてやつてもまだ腹が癒えない」

謙造は、自分の胸が憤怒の火に燃えて居るのを自覺した。この上はもう斯うして凝乎として居る事が出來ないと感じた。彼はツッと立ち上つて、齒を喰ひしばりながら、カサ〳〵と固い坑床の上で地團太を踏むだ。

が、やがてまた彼は、自分が今どんな馬鹿らしい空想をして、子供らしい事を演じて居るかを悟つて、棒の樣に固く衝つ立つた。そして、新しい考へが頭の中にきらめくと一緒に、素ばしつこく鶴嘴を取つて無暗矢鱈と坑脈を掘り出した。

「凡てみな歸らぬ事だ！　そんな事を考へたつて何になるものか。俺は俺の仕事をすればいゝんだ」

謙造はかう、自分を叱る樣に云つた。自分にも理解出來ぬ或る不思議な力が、彼の精神の中にも身體の中にも湧いて來た。

二

「カチン、カチン、カチン―」

石炭を掘る彼の鶴嘴の音が絶え間なくきこえた。黑いピカ〳〵した石炭の塊りがポカリ〳〵と缺けてころがつて來た。隣の坑内で夫婦づれの坑夫が何か鼻唄うたひながら掘つて居る幽かな音も漏れきこえた。時々はまた、ドドドと落盤する音があちらこちらに響いた。

可なり永い間、全身の力をこめて働いた後、謙造はまた休むだ。そして今度は、自分が今掘り出した石炭の上に腰をかけて、どれ位掘れただらうと見た。

「ちよつとの間に大分掘れた。大方何時もの半日分はある」謙造はかう、ホク〳〵しながら考へた。「もう少し掘れば何時も分位は今日も掘れる。で、まあ、やつと今日も生命がつなげる」

しかしながら彼は、自分がこんな風にして骨折つて働いても、結局自分の食つて行く丈けか、もしかすると、もつと少くしか掘れない事を思ふと、あまりいゝ氣持ちはしなかつた。殊に、以前豪奢な生活をした事のある身にとつてはどんなに諦めて居てもやつぱり何だか悲しくてたまらぬものがあつた。

「俺達はかうして、ほんの飯とおこうことばかり食つて行けるんだ。だが、あの顔の紅い重役達は？」

彼はかう思つて、再びまた憤怒の情にかられた。以前自身が、やはりこれと同じ位の炭坑をもつて居て、その重役や株主がどんなに儲けて居たかを知つて居た彼には、自分達勞働者が此麼にまでして骨折つて働いて居るのが餘りに馬鹿らしいやうな氣もした。

「彼奴等は俺を囚人にしてコキ使ふ。俺はこの年とつた身で、彼奴等を樂にし、贅澤させんが爲めに儲けてやる。こんな馬鹿らしい事があるものか………」

こんな風に彼は怒りつゞけ思ひつゞけた。けれど、彼はまた直きに、自分も嘗つては矢張り此處の重役たちと同じ様に、勞働者が働らいて呉れたものを處分して、儲けた金のほんの僅かばかりを彼等勞働者に與へ、而もさも慈善をでも働いて居るかの如き横柄な顏をして與へて、その大部分は僅かばかりの仲間の間でわけ、その金で家を建てたり酒を飲んだり藝者遊びをしたりした事を思ふと、そんなに今の重役をばかり責めるわけに行かない様にも思はれるのだつた。

「成る程、重役は不當だ。けれど、俺には彼奴等を責める權利はない。俺もやつぱり彼奴等の同類ぢやないか、初造がもし彼麼ことをして呉れなかつたなら、俺はやつぱり今も、同じ不當をやつて居たのに相違ない。俺は今、罰を被つて居るんだ」

かくて謙造は、今初めて、自分がかうして辛い勞働をし出し初めて、どんなに勞働者は不幸であるか、どんなに不公平な地位に立たされて居るかと云ふ事を明瞭と知る事が出來たと共に、資本家と稱するものがどんな不當な利を貪つて居るかと云ふ事、そして、彼等自らでは少しの良心の苛責もなしに、多く儲ければ儲ける程得意になつて居ると云ふ事がどんなに恥づべき不道徳であるかと云ふことを明確に悟る事が出來た。そして、何うして自分が今迄、こんなにまでも、その事に盲目であつたかと云ふ事が不思議でたまらなかつた。

「坑夫たちは皆何にも知らないで居るんだ。可愛想な奴等！」彼はかう心の中で思つた。「俺は彼奴等に本當の事を教え

てやらにやならん。そして何時まで待つて居てもボタ餅は棚から落ちぬ事を知らしてやらにやならん。何うしてもこれは、――彼奴等の生活をよくし、彼奴等を人間らしい人間にするには、彼奴等自身でやらにや駄目だ。それを俺は教えてやらにやならん。人間が馬か牛の様に朝から晩まで、手かせ足かせで使ひ放題に使はれて、何にも人間らしい考もたず・人間らしい生活もしないで死んで行くと云ふ話があつてたまつたものぢやない」

謙造はまた凝乎と暗い坑内を見まはした。ボタリ〳〵と、地下水の點滴がきこえた。カンテラの火はドス赤い焔をゆらがせた。冷たい空氣が彼の精神を引きしまらせた。

「さうだ」と彼は拳をかためて呟いた。「俺は望みのない人間だ。俺はもう何時死んでもいゝ。今迄の罪ほろぼしだ。俺は本當のことを彼奴等に教えてやらう。そのために俺は此處を追ひ出されるかも知れん。だがいゝ。追出されるなら反つて幸ひだ。勿怪の幸ひだ………此處を出されて食つて行けねば乞食をしたつていゝぢやないか」

謙造の胸の中には、曾つて今迄に起つた事のない或る精神的な喜びが躍つて居た。それは、今迄に決して經驗した事のない或る深い深い喜びであつた。彼はもう、みんなの居るところに歸る時が待ち遠ほしくつてたまらなかつた。

晝食に歸るのにはまだ少し早かつた。

謙造はまた、鶴嘴をとつて働き出した。カチン、カチン、と、彼の鶴嘴の打ち落される毎に、天井磐が少しづゝ背をたてゝ落ちるのに謙造は氣附いた。

「危いんぢやないかな」と彼は、さつき現場員が注意して行つた事を思ひ出して考へた。さう思ふと何だか彼は怖くてたまらなくなつた。で、鶴嘴の頭でもつて天井磐をトン〳〵と叩いて見た。ドドとかなり大きな磐が土に雜つて落ちて來た。

「こりや危いぞ」と彼は益々募る不安の念に襲はれながら、も一度しつかりと確める樣にも少し力をこめて押して見た。

ドドつと磐の落ちる音がしたかと思ふと、「危い」と瞼をつぶして逃げようとするひまもなく、ドドつと、その邊一面の大きな落磐があつた。

何か恐ろしい力で背のあたりがドシンと打たれた様に謙造は思つた。そして、それツきり何ももうわからなかつた。

三

「ザアザアザア」と水の流れる様な微かな音を謙造はきいた。そしてそれが、時を經るに從つて段々と判然となつて來た。

「到底駄目でせうか」

「駄目ですなあ、何しろ急所をやられて居ますから」

「この儘まいつてしまふんでせうか」

「そんな事はありますまい。もう直きに氣がつきます」

謙造の耳はこれ等の言葉をきく事が出來た。しかし彼は、それが何を意味して居るかと云ふ事を諒解しなかつた。又、しようとする氣も起つて來なかつた。そして、何等の疑惑もそれから起つても來なければ何等の感動も生れはしなかつた。

が、そのうち、誰かゞ「親爺がやられたつて？」と大きな聲でが鳴り込んで來たのに、ふと彼は自分に歸つた樣な氣になつた。そしてパッチリと目をあけた。

白い洋服を着た一人の若い醫者が自分の前に立つて居た。その側に一人の役員が控へて居た。數人の若い仲間と、飯場頭が、心配さうな顏をして自分の方を瞶めて居た。

「氣がついたゞな」

飯場頭は斯う云つて彼の眼の上の方にのしかゝつて來た。

「しつかりしろよ、親爺、大丈夫だからな、しつかりしろよ」

若い仲間の一人が云つた。

「何うだ、痛いかね、親爺？」

飯場頭は又斯う云つて彼の手をとつた。

「何うしたんだね、これは」と彼は訊かうとした。けれど口が乾ばりついて何も云へなかつた。そこで彼は、水を飲み度いと思つた。そして、默つて手を差出した。

「何だね、親爺、何欲しいだね」

今一人の若い者が愛情のこもつた眼で謙造を眺めながら云つた。

「水だ。水が欲しいんだ」

醫者は斯う註解した。

若者は急ぎ水をコップの中に汲んで來た。そして謙造の口の中に注いで呉れた。

「有りがたう」

水を飲み終つてから、謙造は初めて口をきく事が出來た。

「もういゝかね、親爺。口の渇きがとれたかね。ぢつとしてなよ。痛てえからな」

若者は答へて云つた。

「あゝ、さうだつた」と謙造は初めてその事の眞相がわかつた。そして、それがわかると直ぐ、さつき夢か幻のやうにきいて居た言葉――彼の運命を語つて居た――の記憶が甦つて來た。そしてその意味がわかつて來た。

謙造は、初めて判然と自分の今の地位を覺る事が出來た。そして、今に自分が死ぬんだと思ふと、急に何か、槌のやうなものででも打ちのめされた様に、胸の鼓動がドキンと止まるのを覺えた。その瞬間、彼は死の深淵を見た。そしてその、氣味のわるい暗黒に怯えた。

「あゝ、まだ死に度くない。まだ死ぬべき時ぢやない」

彼は斯う思つた。そして急に血が頭に上つて來て、苛々とした少しの落着きもない不安の念に襲されるのを覺えた。が、彼はまた、直きに、結局それは、何うにも仕樣のない事だと考へないわけには行かなかつた。そしてガツカリと弱り込んでしまつた。

「親爺、お前の鄕國は何處だね。家族があるかね」と、彼の側で、みんなと一緒に立つて居た醫者が訊ねた。

「ありません。……鄕國……は」

とは云つたもの丶、その鄕國の名がつかへて中々容易に口に出なかつた。

「函館のものです。家族はありません、一人ものです」飯場頭は傍から斯う代つて說明した。そして「後の事を私が引き受けてます」とつけ加へて云つた。

「後とりがあるだよ。養子とその子が」一人の若者が口を挿むで云つた。「昨夜親爺は、つひぞ一度も話した事のない身の上ばなしをしたつけ。今から考へると、それが何かの前兆だつたとなあ。何でもその時の話しぢや……」

「わかつてるだよ、俺はちやあんと知つてるだ」飯場頭はそれを遮つた。「親爺は俺んとこの家內だ。俺が一切を引き受けてるだ」

「それで安心だ。頭、たのみますぞえ」

謙造はかう云つて眼から淚を流した。謙造は口を緘んで何か思ひに沈むで居る樣であつた。が、やがてまたその鈍い眼を見開らいて周圍のものを見まはしながら、力のない、しかし眞實のこもつた聲で云つた。

「兄弟達、俺はもう死ぬ……で、たつた一つ云つて置く……それはかうだ……」謙造は息苦しさうに暫し言葉をとぎらしてからまた續けた「人間はこんな風な生活をしてはならないと云ふ事だ。……そして俺達も人間だと云ふ事だ。……それから……俺達をこんなにしたものは金で、その金を手綱の樣に使つて俺達をコキ使ふものは資本家だと云ふことだ。……兄弟、しつかりしろよ。お前達を人間にしろ……そしてお前達の子供のためによい道を拓いて置くんだ……」

これだけの事を云つて、謙造は胸がせい／＼するのを覺えた。それが周圍の勞働者にわかるかわかるまひが、そん

な事には少しも頓着しなかつた。自分自身にさへわかりかねる様なことを口走つたのだから。彼は呼吸がだん〳〵と苦しくなつて來るのを覺えた。そしてそれつきりもう何も云はずに眼を閉ぢた。だが、彼の耳はまだ確だつた。

「可哀相な親爺だなあ」

誰かゞこんな風に云つて居るのがきこえた。そのうちにまた、ドヤ〳〵と大勢の人の這入つて來る氣配がした。けれど彼はもう眼を開けなかつた。開ける丈けの力もなかつた。それ故に彼は、今、彼の周圍に立つて居る仲間の人々が、どんな顏をして居るかと云ふ事も、どんな風をして居るかと云ふことも、わからなかつた。彼はたゞ、彼の周圍を取り捲いて居る或る雜りけのない眞實な心を感じる事が出來た。

けれど、その感じも最早永くは續かなかつた。彼の意識からはもう、凡てのものが色褪せて消えて行くのであつた。そのうち、段々と息が苦しくなつて行つた。その苦しさに堪えかねて、彼は「ウム」つと一聲、牛のやうな苦しい唸り聲を發した。そしてそれと共に彼の呼吸が引きとられた。

—八・六・三〇—



分業の村

上司小劍

一

この村には、昔し五兵衞といふ智惠者があつて、いろ〳〵のことを村人に敎へた。其の五兵衞は今や五兵衞稻荷と神に祀られて、毎年二月の初午には、赤や黃や白や、さま〴〵の幟が其の祠の畔に立つ。

祠は小ひさいが、赤く塗つた鳥居の數は、殆んど數へ切れないほど、重なり合つて、長さが一丁にも及んでゐる。一番初めの親鳥居ともいふべきものは、傑れて大きく、二間以上の高さで、それから小ひさい鳥居が、ずうつと行儀よく、殺人國の兵隊さんの行列のやうに續いてゐる。

こんもりとした杉の森が、五兵衞稻荷のあるところで、死んでからまだそんなに、何百年とは經たぬだけに、杉の木にもさう高く天を衝くやうなのはない。

何んでも、自分の力に及ばぬことがあれば、五兵衞稻荷に願を掛けよと村人は、互ひに敎へ合つてゐる。

其の五兵衞は、何ういふことを村人に敎へたか。先づ第一は草鞋を造ることである。

勿論、この村の人とて、五兵衞に敎はるまで草鞋の造りやうを知らなかつたのではない。たゞ五兵衞は、一人の手が、藁を化して一足の立派な草鞋にさせるまで、か

かり切りになつてゐることを愚かだと教へたのである。

この何んでもないことに、感心するものや、感心するまでに納得の出來ないものや、村人の智惠はさま〴〵であつたが、其の智惠の誰れ一人、五兵衛に及ぶものがないだけは確かであつた。

『さア、貴さんは、藁を揃へるんぢや。』と、五兵衛は一人の男に言つた。言はれた男は默つて藁を揃へた。この男の運命は、一生藁を揃へてゐることにあつた。

『さア、貴さんは、藁を打つんぢや。』と、五兵衛はまた他の一人の男に言つた。其の男は頷いて、前の男の揃へた藁を受け取ると、すべ〳〵した臺石の上へ載せて、樫の横槌で、トン〳〵と藁を打つた。この男は一生藁を打つて暮らす爲めに生れて來たやうなものであつた。

『さア、貴さんは繩を綯うのぢや。』

『貴さんは草鞋の耳を拵へるんぢや。』

それ〳〵に言ひ付けられた男どもは、手に〳〵草鞋の一部分だけを拵へて、それが濟むとめい〳〵手をあけて、あツけらかんとしてゐた。總べての材料が揃ふと、後は五兵衛が發明の機械で、草鞋がひとりでに編み上つた。何んだか、馬鹿々々しいやうでもあれば、樂でよいやうでもあつた。

かうして草鞋を造つてみると、前には一人の手で、藁を揃へ、それを打ち柔げ、繩を綯ひ、耳を添へ、紐を附けて、一足の草鞋といふ形のあるものを見ることが出來るまでには、先づ半日足らずかゝつたのが、五人で手分けしてやつて、後は機械に任かせたのでは、半日に十五足の草鞋を容易に造ることが出來た。今までは、どんなに上手な草鞋つくりでも、半日に二足を造るのはむづかしいとしてゐたのに比べると、全く大層もないことぢや、流石に五兵衛さんは智惠者ぢや、えらいといふことになつた。

しかし、五人の手を十人に增して、五兵衛の智惠でやつてみると、一日に六十足の草鞋は何んでもなく造れた。から草鞋ばかりドッサリ出來ても困ると、五兵衛の次ぎぐらゐの智惠者は思つたが、五兵衛は平氣で、大胡座をかい

て酒を飲んでゐた。五兵衛はもうこの自分の智恵といふもので、多くの村人と機械とを働かせるやうになつてからは、自分に手を下して藥一すべ摘まないでもよいことになつてゐた。

『あの人は智恵で働くから、手足を動かすには及ばん。』と言つて、村人は皆感心してゐた。五兵衛の食膳には、そろ〳〵と他の村人の口には入らぬ美味が上るやうになつた。五兵衛の身に纒ふものは、他の村人の肌を包むものと違うのが、遠くから見ても一目に分るほど光つて來た。

五兵衛が外へ出ると、村人は皆お辭儀をした。五兵衛はもう自分の足で歩くといふことがなくなつて、村人は大抵五兵衛の姿を美しい車の上に仰いだ。

しかし、それはズツと後のことである。

二

草鞋から草履と、この村では先づ日常足に履くものから、こんな風に手分けして、大勢の手と機械とで拵へ上げることをば、五兵衛の智恵で工夫したので、村中の家々には、土間にも納屋にも、草鞋や草履がいッぱいになつた。これでは村中の人々が、兎ても五年や十年で履き切れない。其のうちには下積みの品物が腐つて役に立たなくなるであらうと危まれた。

『さア、貴さん、藁を揃へるんぢや。』

『貴さんは藁を打つのぢや。』

かういふ聲が聞えても、村人は『また草鞋か。……草履か。』といふ顏をするやうになりかゝつた。

第一、其の原料の藁が乏しくなつて來た。肥料溜めの屋根を葺いた藁まで、新らしいのは皆持つて來て、草鞋や草履にして了つた。

『五兵衛さん、こない草鞋や草履ばツかり、どえらいこと拵へて、どないするんぢやい。』と、たまり兼ねて、問ひに來るものもあつた。其の頃の五兵衛はまだ川添ひの藁屋で、唯一人ごろ寢をしてゐる身分であつた。親兄弟もなく、妻も子

もない四十男は、朝起きて自分に飯を炊かなければならなかつた。

村人に雨戸を叩かれて、五兵衛は不承不承に起きて來た。さうして雨戸を開くと、物も言はないで、先づ用便をした。彼れの家の軒先きには無造作な小便壺が設けてあつて、村人や往來のものがよく用を足した。

『五兵衛さん、あの草鞋や草履をどないする。……』と皆まで言はせずに、五兵衛は大きな欠伸を一つすると、

『喧しう言ふない、俺が呑み込んでゐる。』と、力を籠めて言つた。其の言葉に餘り力があり過ぎたので、村人は半ば安心もし、また半ば恐怖をも感じた。

ところが、それから半歳とは經たぬうちに、近郷近在から、この村へ草鞋や草履を買ひに來るものが、ぞろ／＼と續くやうであつた。それからそれへと聞き傳へて、隨分遠方の町からも買ひに來た。

家々の土間や納屋に積み上げてあつた草鞋や草履は、面白いほど減つて行つた。それが皆金に代へられて五兵衛の手にあつた。かういふことになるのも、皆五兵衛の智惠の賜物だと言つて、村人は草鞋や草履の賣り上げ金を一人で自由にする五兵衛に不平を唱へなかつた。五兵衛は十分に、自分の智惠に對して酬ゐらるゝだけのものを自分に取つて、其の餘りを僅かばかりづゝ、村人に分ち與へた。それを相當として、村人は皆滿足してゐた。

五兵衛は他の村々から、ドシ／＼原料の藁を買ひ入れて、村人に草鞋や草履を造らした。一日に百足の草鞋と百足の草履とが造り上げられても、まだ間に合はぬほどよく賣れた。女も子供も總がゝりで草鞋や草履を造る手傳ひをした。手傳ひと言つても、この仕事は總べての人が皆機械の手傳ひといふ位置にあつた。誰れ一人纏めて仕事をしてゐるものはなかつた。藁を揃へることの上手なもの、藁を打ち柔げることに絶妙の腕をもつもの、繩を綯ふのに巧みなもの、草鞋の耳を附けるのに得意なもの、草履の鼻緒に卷く紙を並べることの素早いものと、それ／＼に進歩發達はして來たけれど、一人の手で、初めから終りまで、一足の草鞋や草履を造り上げることの出來るものは、だん／＼に亡びて了つた。そんなことは忘れて了つてもよいことになつた。コツ／＼と一つの物に取り付いて、長いことかゝつて、完全な形を一人の手に造り上げるよりは、其の一部分づゝを手早く拵へる方が、どんなに利益か知れない。さうさへすれば人の力

が三倍にも五倍にも、時としては十倍にもなつて働くといふことを、この村の人は皆信じ切つて、さうしたことを案出した五兵衛の智惠をえらいと思つた、

さうやつて、いつの間にか五兵衛は、村人の總べてを腮で指揮するやうになつてゐた。五兵衛の腮が、人並み勝れて長いのを小癪にさへて、楯突いてみるものはあつても、其の時はもう、草鞋に耳を附けることしか知らないもの、草履の鼻緒に卷く紙を並べる能しかないものが、幾ら騷いだツて、五兵衛を離れて、單獨に何うするといふことは出來なかつた。泣きごとを言ひながらも、矢張り五兵衛に使はれてゐるより外はなかつた。

この村の人々は、全體皆一足の草鞋、一足の草履を、一人で完全に造り上げる力を持つてゐたのだ。それが五兵衛といふ智惠者の智惠に醉はされて、この村にはさう餘分に用もない草鞋や草履を、一人が一部分づゝ受け持つて、大勢の力と機械とでドツサリ拵へたが爲めに、全體の力は恐ろしく進んだが、一人の力は皆物の一部分を拵へることしか出來ない畸形のものになつて了つた。人間は一人前でも仕事には不具となつた。大勢集つて、始めて力があるので、一人では何も出來ない。

前には五兵衛の智惠を使つた多くの村人が、後には五兵衛の智惠に使はれるやうになつた。智惠に使はれるばかりでなくて、五兵衛といふ人間に使はれるやうになつた。さうしてまた機械といふ妙なものにも使はれるやうになつた。兎にも角にも五兵衛の世の中だといふことになつた。

三

さうなると、もう五兵衛は川沿ひの藁屋に起臥してはゐなかつた。同じ川沿ひながら、もツと上流の景色の勝れた高臺に、立派な家が建てられた。村人の多くは、自分たちの手先きで、最も素早く、且つ最も器用に造り上げた草鞋や草履が、うまくひツくりかへつて、かういふ立派な家になつたのぢやとは、滅多に氣付かないで、矢張り五兵衛の傑れた智惠がかうさせたのぢやと思つてゐた。

幾年かの後に、この村は全く他の仕事をしないで、草鞋と草履とばかりを造つてゐる村になつた。幾千の草鞋や草履

がての村から運び出された。一の瀬の草鞋村と言へば、可なり遠いところの人が知つてゐた。

五兵衛は下流の川沿ひの元の藁屋を開け放して、村人たちが自由に遊べる場所にした。この家にもいつの間にか疊が敷いてあつて、村人は其の上に坐るのを快しとした。それを楽みに夕景頃からこの家へぞろ〳〵と集つた。實際この村で疊の敷いてある家は、此處と五兵衛の本宅ぐらゐのものであつた。

遠い町の方から、五兵衛は假面(めん)芝居といふものを呼んで來て、この下流の川沿ひの家で村人たちに觀せた。一人の男が交々假面だけを取りかへて芝居をするのであるが、横に赤い幕を引いて、其の上へ假面を着けた顔だけが出てゐる。白髪頭の老婆が出たり、花簪の娘が出たり、毛蟲眉の武士が出たりして、舞臺に見立てた赤い幕の上にあるのは、いつも一個の首だけであるが、其の動きかたによつて、嬉笑怒罵がそれ〳〵に分る。分らないでも、初めてそれを見た村人は、たゞ何かなしに面白がつてゐた。さうして、かういふものを呼んで來て觀せて呉れる五兵衛を徳とするとゝもに、ます〳〵五兵衛をえらいと思つた。

假面芝居の役者は二人きりで、それが交代に舞臺へ出てゐる。夏のことで、犢鼻褌一つに假面だけを着けて、舞臺の方へ運び出して行く恰好を、五兵衛は楽屋から見て笑つてゐた。楽屋には女太夫が五人ばかり居て、それが順々に横の方の花毛氈を敷いた高座へ出て、浄瑠璃を語つた。浄瑠璃に従つて、舞臺の假面は動くのである。

小光といふ座頭から小花といふ口語りまで、女太夫は皆若かつた。小光が二十歳ぐらゐ、それから順々に地位とゝもに年も下がつて小花は十四五であつた。五兵衛はこの小花ばかりを側に引き付けて、假面芝居なんぞ碌に見てゐなかつた。早くまだ燈火の點かぬうちに語つて了ふ小花が、紅い裏の肩衣の色の褪めかゝつたのをへラ〳〵さして下りて來ると、五兵衛は抱き取らんばかりにして、それを待ち受けた。

年齢も地位も一番下な小花が、傑れて大柄なのは可笑しいほどであつた。色が淺黒く骨太で、眉毛は薄く、口は大きく、僅かに鼻の高いので、見てゐられるばかりの顔であつた。

肥えてはゐても、何處かに萎びたところの見える座頭を初め、いづれも誰れかに血を吸ひ取られたやうな女太夫の中

で、小花だけは發育盛りの薫りが高くて、まだ吸ひ取られない血の色が、皮膚から溢れさうであつた。兩肌を脫いで淺黑い色に安白粉を塗つてゐる時や、手早く肩衣をはねて、次ぎの出番の口上を言つてから、薄い眉毛を氣にして、頻りに小指の先ぎで撫でてゐる折に、五兵衞は眼を細くして、小花の影ばかり趁つてゐた。

假面芝居は、話の種と小花とを殘して、次ぎの興行地へ去つた。小花が其のまゝ五兵衞の持ち物になつたのは、申すまでもない。多くある假面の中から、五兵衞は一つの美しい假面を見立てゝ、一座の束ねをしてゐる小光の養父にそれを讓つて呉れと言つたが、其の男は首を左右に振つて應じなかつた。其の假面は八重垣姫にもなれば、初菊にもなり、お舟にもなれば、小浪にもなるといふ、一座の光であつた。

小花を手離すことを二言と言はずに承諾した男も、假面を讓ることには、何うしても應じなかつた。身の代金を小花の倍まではずんで來たけれど、矢張りいけなかつた。五兵衞の智慧にも及ばぬところがあると、側で聞いてゐた村人は思つた。

『仕樣がない、もう一遍其の假面を借して呉れ。』と言つて、五兵衞は若く美しい顏を自分の四十面に被せて、子供のやうに喜んでゐた。さうしてそれをまた小花の淺黑い顏にも被せて、別れを惜ませた。小花は、幾度か大功記の十段目を語つた時に、この假面を活躍させたことを思ひ出してゐた。

『初菊もろとも走り出で、……』と、優しく哀しく、柔かく、細く、糸のやうに語り出る聲の下から、この假面は其の美しい目鼻を、大年增の假面の後に引き添ふて舞臺に現はした。何處までも一人しかゐない假面つかひの男は、母操の假面を脫ぐと、直ぐこの初菊を被つて、母子が二人で走り出でた光景を描すのに、多くの苦心を費した。旅興行の貧しい葛籠の中にも、假面だけは天晴れの名作として、寶物のやうに扱はれてゐた。それを五兵衞の望みによつて讓り渡すことが、兎ても駄目であつたのは申すまでもない。

小花は一座に別れるのを哀しいとも思つてゐないやうに、また五兵衞と一所に暮らすのを嬉しいと思つてゐないのが當然であつた。側にゐない時は、五兵衞といふ人がどんな顏の人だか、つひ忘れて了つてゐることすらあつた。

村人は忙しく草鞋や草履を造つて、五兵衛といふブラ〳〵遊びの人間を贅澤に養つてゐる上に、また小花といふ厄介者をも養つて行かねばならないことになつた。しかしそんな底の方までを透かして見ることの出來る人間はゐなくて、四十と十五と、甚だしく年齡の不釣合ひな男女を、お雛樣のやうな夫婦だなぞと、心から羨めてゐるものが多かつた。

四

しかし、村人の中にもまた、分らぬながらに考へる人間がないのではなかつた。

『自分たちは、何んで、かうやつて生きてゐるか。』

かういふ胸の質問に對して、同じ胸は早速答へた。

『欲しいものを手に入れたいから、生きてゐる。』

『欲しいものが手に入るか。』

『なか〳〵手に入らんわい。……毎日〳〵欲しうもない草鞋ばツかり造つてゐる。何んぼドッサリ草鞋があつても、一時に二足は穿けんよつてなア。……それに俺等は毎日〳〵草鞋の一部分は造つてゐるが、出來上つた草鞋といふものゝ全體の形を滅多に見たことがない。……あゝアもう〳〵、俺等は草鞋の耳ばかり拵へるのに飽き果てた。何んぞ外のことをしたいもんぢやが。……』

胸と胸とは、こんな問答に日を暮らしてゐた。

『欲しいと思ふものが、數知れぬほどあるのに、それを拵へないで、草鞋や草履ばかり造つてゐるのか。これはまた何んのことぢやい。』

村人の胸の裡には、おひ〳〵にかういふ考へが蟠まつて來た。欲しいと思ふから拵へる。それが順序でないか。といふことに氣付いた時、毎日〳〵草鞋の耳ばかり拵へてゐるのや、明けてから暮れるまで、暑い時も寒い折も、トン〳〵と藁を打ち柔げてゐるのが、どんなに馬鹿らしくなつて來たであらうか。

何んでも人間は欲しいものを、易々と手に入れなければならぬ。出來るだけ少しく働いて、取れるだけ多くを得なけ

れぱならぬ。ちよッぴり働いて、どッさり取ること、それより外に道はない。總べての學問や智惠や發明も、皆それが目的ではないか。少しく働くといふことゝ、怠けることゝは違ふ。少しの時間を最も得用に働いて、欲しいものを澤山取ることは、怠けもの〻看板でなくて、經濟學の心棒でなければならぬ。それをば村に飼ひ殺しになつてゐる——といふよりは、五兵衞さんに養はれてゐる——學者先生が、講釋をば横道の方へ持つて廻はつて、五兵衞さんに都合のよいことばかり言ふ。

俺等は、年がら年中、面白うもない草鞋造りや草履編みの手傳ひばかりさせられてゐて、草鞋や草履の山を築き上げながら、自分には時々跣足で歩かなければならんことのあるのは何ういふものか。學者先生がえらさうな顏をして講釋して聽かせる價値とか交換とかいふ難かしい御規則も、根から間違うてゐて、村の今日の有樣をば、都合よく嘘ッぱちに說き示したもの。たとへば磁石盤の傍に鐵氣を置いて、違つた方角を俺等に見せてゐるやうなものである。俺等は其の磁石盤の爲めに、間違うた道を歩いて、働く目的を見失ふた。——

かういふことを、少しづゝ朧氣ながらにも考へてゐる村人はあつたが、しかしそれによつて、五兵衞の智惠を何うするといふことも出來なかつた。

五兵衞は、假面芝居を呼んで來て村の人々に觀せたことが、深く村人を喜ばせた上、自分には小花といふ快樂の種を得たので俺のすることは、何んでもこの通りぢやと威張つてゐた。さうして、それからは手品使ひを呼んで來る、浮かれ節を招いて來る、落語家、講釋師を呼んで來る。一年に四五度ぐらゐはさういふものを、自分の川沿ひの舊宅でやらして、村人に娛樂を與へた。

かうなつて來ると、誰れも彼れもまた五兵衞を讚めない譯には行かなかつた。さうして五兵衞は其の果てに、遠い國から學者先生を呼んで來て、自分のしたことのえらさを先生に講釋さして、村人たちに聽かせたのである。一々御尤ものことぢやと村人の多くは思つた。

移るが瀨の淸流を前に控へた高臺に、五兵衞の新宅は、いつまでも木の香が新らしかつた。村人の住居は皆非人の溜

鉢小屋を少し立派にしたくらゐのものであつたが、五兵衛の新宅は、幾年經つても新宅と呼ぶに差支へのないまでに新らしくて、新宅はいつしか新御殿とも呼ばれてゐた。

夏になると、この新御殿の軒先きに青い簾が懸け渡された。村人の中にはこの簾といふものをこれまでまだ見たことのないものが多かつた。簾が風に揺いて、其の影に白く涼しさうなものを纏ふた五兵衛や小花の姿のチラ〳〵するのを、對岸の熱い砂塵に足を埋めて歩きつゝ、村人は皆美しいと見てゐた。美しいと見るだけで、羨ましいと思ふものはないやうであつた。羨ましいと思ひかけても、それは飛んでもないことぢやと、胸が胸を打ち消して了つた。及びも付かぬことを考へるのは愚かなことぢやと、自分が自分の心を叱つた。それをば正しいことゝいふ手製の板へ釘付けにするやうにして、お抱への學者先生は『身のほどを知れ』と說いて廻はつた。

青簾の側に美しい絹張りの紵提灯が吊されて、夕景には火が入る。其の下に大きな食膳を持ち出して、五兵衛は小花と差し向ひに數々の肴を並べつゝ、保命酒でも酌んでゐる。それを横目に、或は眞向きに眺めながら、村の人々は、朝からかゝつてせツせと造り上げた澤山の草鞋や草履を擔いで、對岸の細道を通つた。熱く日に燒けた砂塵に埋まつてゐる其の足には、破れた草鞋や、破れかけた草履をば、言ひ合はしたやうに汚なく履いてゐた。中には跣足で、自分の力相應の草鞋の荷を擔いで行く子供も見えた。

履くものを肩に載せて、足には何も履いてゐない。

そんな可笑しなことには頓着なしに、例の學者先生は、分業の御利益や、剩餘價値のお話を頻りと說き立てゝゐた。

五

村を貫いて流るゝ清瀨川の水だけは、いつまで經つても失はれぬ天の惠みとして、村人たちの前にあつた。

少しも面白くない草鞋造りの仕事に、ぐツたり疲れて、この清い流れの前に立つと、毎日々々草鞋と草履とに惱まされてゐる頭の痛みや、腕の痺れが、自然に癒るやうであつた。この川の水で口を漱ぎ足を洗つて、ぼんやりと水の流れに見入つてゐる村人も多かつた。

『この川の水を逆に川上へ流すことは、いかな五兵衞さんでも出來まい。』と、村人の中には惡言をするものもあつた。『水の流と人の行末』といふやうなことを、考へてもみたりした。

五兵衞は小花とゝもに、高臺の新御殿から、この川の水をたゞ景色として眺めてゐるだけで、水で口を漱いだり、水に足を浸したりすることをしなかつた。其の點だけでは不幸の人のやうにも村人の眼には見えた。

下流の川沿ひの農家に、唯一人で起臥してゐた頃の五兵衞なら、川の水は眞下にあつて、毎朝岸の洗ひ場で、直かに手水を使つてゐた。醉ひ醒めの水は、岸に兩手を支へて、川から口へ、クウ〱と吸ひ上げて飲んだ。昔しまだ人間が兩手の使ひやうを十分に會得しなかつた頃は、掌で水を掬んで飲むことにも考へ付かずにゐたさうで、それを敎へたものは、大の智惠者として奉られたものださうな。しかし、水は掌で掬つて、指の間から溢れ落ちない間にと、慌てゝ飲むよりも、直かに口を浸して、川を吸ひ干す勢ひで飲む方がうまい。……と五兵衞はそんなことを考へたこともあつた。昔しはそれほど五兵衞もこの川に親しんでゐたのである。

口の力で、クウ〱とポンプのやうに水を吸ひ上げるのは、人間でなければ出來ないことぢや、靈魂があつて、天國や地獄極樂をもつてゐる人間でなければ出來ない藝當ぢやと、考へ付いた五兵衞は、犬や猫が舌の先きでペロ〱とまだるツこく水を飲んでゐるのや、鷄が嘴の先きに水をちよツぴり含ましては仰向いて、咽喉から腹へ流し込んでゐるのを、馬鹿な奴ぢやと思つて見てゐた。人間は口先きで水を吸ひ込む力がある上に、兩手で水を掬ぶことも出來る。この上考へたら、もツと外のえらいことが出來さうなものぢやと、頻りに腕組みをしてゐたのが、五兵衞の智惠の働き初めであつた。さうして間もなく五兵衞は、村の人々がめい〱に手分けして、草鞋の一部分づゝを拵へ、後は機械の力で大體を編み上げることを發明したのである。五兵衞とて、初めは何も、村人の總べてをば、草鞋や草履の一部分しか拵へることの出來ない不具にする積りでもなかつたのである。村人をば自分と機械との下に壓し附けて、身動きもならぬやうにした上、自分だけが有り餘る食物や快樂を一手に占めて、なほ其の餘りの力を金庫の堅い扉の中に納め込んで置かうなぞといふ、惡氣もなかつたのである。

清い川水は、五兵衛の眼の前を、昔しの通りに美しく流れてゐた。岩が多く、瀬もあつて、また淵をもなしてゐたこの川には、夏になると、村の子供たちが殆んど總べて水浴をした。正午頃から八つ時を過ぎても、子供はまだ瀬に浸り、淵に泳ぎ、熱く日に燒けた岩の上へ腹這ひとなつて、水に奪はれた體溫を回復しては、また水に躍り込んだ。

『五兵衛の馬鹿ア。……』

かう言つて、川の礫をば、高臺にある五兵衛の新御殿に投げ付けようとした子供もあつたが、礫はもとより新御殿の軒下にまでも屆かなかつた。ずツと下の石垣と石垣との間に咲いた紅白の芙蓉の間へ落ちて、黄色い蝶の夢を驚かすぐらゐのものであつた。

それでも、えらい智惠者の五兵衛に向つて、正面から馬鹿と呼び得るものは、子供だけであつた。

『子供……正直。……』

『正直……乞食』

いろ〳〵のことを言ふ村人もないではなかつた。

六

五兵衛が死んで、小花との間に生れた息子が、二代目を襲いだ。それが六兵衛であつた。六兵衛から七兵衛、七兵衛から八兵衛、八兵衛から九兵衛となつて行くのである。

其の草鞋の製造高はだん〳〵と殖えて、村人の働く時間はずん〳〵長くなつた。何んの爲めにかうドツサリ草鞋を造るのかと疑ふものも殖えて來たには違ひないが、中にはまた一生草鞋の耳を拵へるとにばかりかゝつて、俺はかういふやうに生れ付いたんだと、覺悟をきめてゐるものもあつた。草鞋の耳で心が捩れたのぢやなぞとは、滅多に考へなかつた。

五兵衛は五兵衛稻荷と祀られて、杉の森の奥に、赤い鳥居を聯ねて、今戸燒きの狐が、在りし世の小花のやうにして、侍べつてゐた。

初午の太鼓がドン〳〵と、まだ霜の解けやらぬ頃から鳴り響くと、村方の世話人は五兵衛稻荷の前へ集つて、赤や黄

や白の幟を樹てにかゝつた。『五兵衛稲荷大明神』と書いた赤い長提灯が二つ、祠の前に吊り下げられて、それがまだ淺い春風に搖々と動いてゐた。

午後からは、村人が皆家を空にして、稲荷の森へ集つた。草鞋や草履を造る機械も、今日は動かないで、村人はお揃ひに胝の出來た指先きを摺り合はせて、五兵衛稲荷を拜んだ。

『今日は嬉しい。朝から丟る一日遊べると思ふと、昨夜から寢られなんだ。身體がぞく〳〵して。』と、村人の或るものは言つた。

『それも、五兵衛稲荷さんのお蔭ぢや。』と、他のものは言つた。

『さうぢや〳〵。』と、多くの村人は合槌を打つた。

『ほんまにさうか知らん。』と、首を傾げるものは、極はめて尠なかつた。

『皆さん、五兵衛稲荷大明神のあらたかな功德を疑ふてはなりませんぞ。』と、叱るやうに言つて出て來たのは、お抱への學者先生で、稲荷の神主を兼ねた髯の長いお爺さんであつた。かういふ人は、五兵衛の盛りの時分から、代々村に居る。

『へえゝゝ。……』と言つて、村人は皆稲荷の前にお辭儀するやうにして、髯さんにお辭儀をした。

髯さんは、五兵衛稲荷の神前に、酒や米や餅や魚や野菜や昆布や水鳥や卷絹や、種々(いろ〳〵)のものを供へて、恭しく祝詞を上げてゐた。紅白の小餅を大きな三寶に堆く盛つて、八足の一番前の方に置いてあるのを、子供達は皆指を銜へて見てゐた。

『親の代からしてるんやよつて、厭やぢやとは言へんが、手に胝を拵へて、毎日〳〵草鞋にかゝつてるのも、つく〴〵厭やになつたなア。……』

杉の森の枯草が、自然に柔かい敷物になつてゐる上に寢轉びながら、溜息とゝもに言ふものがあつた

『勿體ないことを言ふな。罰が當るぞい。』と、其の隣りに寢轉んでゐた男は、欠伸とゝもに言つた。

『もうちいと、ほんのもう一息、仕事を面白うすることを考へても、罰は當るまいがな。』と、前の男はさも〳〵遠慮するやうに聲を潜めつゝ言つた。

『さうぢやなア、草鞋なら草鞋でもえゝ、何うで、俺等は一生草鞋を造つてるやうに、先祖から生み付けられて來たんぢや。それならそれでもえゝ。けども迫めて、一足の草鞋を初めから終ひまで、一人で造つてみたいなア。……さうするとまた仕事に面白味も附いて來るんぢや。』

横合ひから突然、ひそ／＼話の中へ割り込んで來たものがある。

『それがいかんのぢや。それでは草鞋が、ちよぼツとほか出けん。そいで、昔し五兵衛さんが、俺等の先祖に手分けして草鞋の耳や紐ばツかり拵へるやうに敎へてくだはつたんぢや。藁を揃へるもんは一生藁ばツかり揃へ、藁を打つもんは一生藁ばツかり打つてるやうになア。』

かう言つてまた横合ひから出て來た男の口先きには、だいぶ冷かな笑ひがあつた。

『シツ、シツ。……』と、誰れかゞ猫を叱るやうな聲をしたのは、今神主が歸りがけに其處を通るぞと、知らしたのであつた。

神主は氣取つた歩きかたをして、高臺の新御殿に入つて行つた。幾ら古くなつても、村人からは矢張り新御殿と呼ばれてゐる其の立派な家には、當主の八兵衛さんが、美しい妻とともに居て、五兵衛の殘した智惠を絞つて、村人を上手に働かせることばかり考へてゐた。

稲荷さんの前では、子供たちがわい／＼と聲を揚げて騷ぐ。神前に供へてある紅白の餅を前の廣場へ撒いて、一同に拾はせる時刻に近づいたのである。

太鼓はまたドン／＼と響いた。其の音が、『働け／＼』と鳴つてゐるやうに、村人どもの耳へは聞えた。

『働け、働け。』と、一同が口々に呼んだ。

胝の出來た手を合はして、また思ひ出したやうに、稲荷さんを拜むものもあつた。

分業の村は、いつまでも榮えて行く。

――一九一九年七月一日、世界平和祭の日――



最後の一點

沖野岩三郎

一

『さて、あなたよ。人といふものは見かけによらぬ物です。こんな女であるとは夢にも知らなんだでせう。今の沖野の財産は、叔父さんが惡いから、かういふ事になつたのであるが、此度は久枝さんも手傳うてくれたやうなものです。しかしそんな、じだらくをした爲め、天ばつが當つて六月の十日に日方の町で病氣にかゝり、遂に養生叶はず死んでしまひました。』

これは從弟の秀助が私に送つて來た長い長い手紙の一部分である。其の前後の文句から推察しても、秀助や其母のお虎が沖野家の沒落に就いて餘程憤慨して居るらしい。私は其の憤慨を強ち惡い事だとは思はない。しかし二十四年の間汗と涙とで沖野家の爲に、あれだけ盡して吳れた久枝さんに對して、じだらくだとか天罰だとかいふ言葉を放つのは、假令夫れが私に對する親展書であるにしろ、私は其の言行を快く思ふ事が出來ない。

私は今電燈の下で其の手紙を繰返し〳〵讀んだ。讀んで居るうちに、久枝さんの死に對して、私も其の責任の幾分を負はなければならないやうな心持がして來た。

私は手紙を捲いて夫れを机の抽出にしまつて置いた。そして頰杖をついて眼を閉

ちたまゝ靜かに二十五年以前の事を追憶してみた。

久枝さんが嫁入つて來た頃の沖野家には、まだ一村で五等の戸數割を納める程の財産があつた。東西南北どちら向いても皆な自分の家の所有地であり、山へ行かうと川へ行かうと、野原を過ぎようと畦路を走らうと、誰に遠慮の要らない一區域を占領して居た其頃の沖野家は村中で可なりの權威を有つて居たものである。だから久枝さんが沖野家の人となつた時、決して不幸な女だとは誰からも言はれなかつたに相違ない。

しかし沖野家の財産を漸とこゝまで維持して來たことに就いては、隨分種んな悲しい歴史があり、悼ましい犧牲が拂はれて居たのであつた。だから愈々久枝さんが、お嫁に來て呉れるといふ事に話が決つた時、祖父さんは斯んな事を言つた。

『うん、いよ〱久枝が來て呉れる事になつたか、夫りやア有難い。しかし俺は久枝に氣の毒で堪らん。兵々衛はあの通りの病身ぢやし、とても俺の跡を繼いで一生懸命に働ける身體ぢやア無い。久枝は彼のやうな男を亭主に有つたら一生苦勞が絶えんに決つてる。けれども彼の娘は小い時から母親に死なれて、四人の妹や弟の面倒を見て來た娘ぢや、夫れに彼の五十過ぎた文之助を助けて、山行きから畑仕事から、縫針まで皆な彼の娘一人の手で切廻して來たんぢやさか、此家へ來ても乾度辛抱しては呉るゝぢやらう。ぢやが俺は久枝に氣の毒で堪らん。俺も隨分苦勞をして來たもんぢや。十八の時には唯ッた一人の姉に狂人になられた揚句、可哀さうに罪も咎も無い男の子を負うたまゝ池へ入つて死なれる。十九の年に父親に死なれてから三十九の秋嬶に死なるゝまで、丁度九つの葬式を此の家から俺の手で出した。終には牛にまで死なれたので、こりやア此儘にして居ちやア此の身代が潰るゝと思つたさか、俺は嬶に死なれた年の冬から三年三月の間、ぴしやツと酒を廢めた。そして朝が晩やら晩が朝やら薩張りアヤメの判らん程、働いて働いて働き通して、先ア黒土の一摑みも賣らずにやつとの事で土俵際で踏止つたものゝ、夫から後は又た宜え加減辛ひ思ひをした。久枝が此家へ來て呉れるのは有難いが、又た俺と同なし難儀苦勞をさせるんかと思やア……俺ア何だか悲しなつて來るよ。』

祖父さんは斯う言つて、とう／＼泣いて了つたのであつた。夫れから祖父さんは一家内に帶て起つた悲慘な事柄を幾つも幾つも數へあげて家内中の者を皆な泣かした。

「久枝が來て呉れたら、此の家も一旦洗ひ替ぢや。惣五郎のやうな阿房でも貰うて呉れる所がありやア養子にやらうし、お虎も辻垣内へ引取つて貰はうし、岩三郎も役場の小使になるなり學校の手傳ひに行くなり、自分で食ふだけの事はせにやならん。そしたら、俺はまだ五年や六年は骨を粉に碎いても働く。そして病身でも男ぢや、兵々衛も久枝と一緒に出來るだけ働いて呉れ。吾々は此りやアもう、年が年中働いて食つて死ぬんぢや。夫れだけの運ぢや、これだけの山と田圃とを持つて居つて夫れで役場の税金だけ凌ぎ兼ぬるんぢやもの、俺ア何時ぢやツたか、お虎が一年も奉公をして儲けて來た三圓の金を取上げて、税金と店屋の拂ひ口にして了つたのを能う覺えて居る。お虎は定めし帶の一筋も買ひたかつたのぢやらうが……先ア氣張つて呉れ。」

祖父さんは斯う言つて又た泣いた。圍爐裏の側でちよろ／＼と燃ゆる焚火を見詰めて居た私も眼に涙を一杯溜めて俯向いて了つた。

夫れから間も無く久枝さんは沖野家へ嫁入つて來た。私は其夜の事を能く覺えて居る。それは陰暦九月の半頃であつた。私は椽側に腰をかけて待つとはなしに東の丘を眺めながら提灯の光を待つてゐると、最う十時頃でもあつたらう、丘の所にちら／＼と火の光りが一つ、樹の繁みから見えたと想ふと、俄かに騒々しい人の聲が聞えた。

「來たぞ！ 嫁さんが來たぞ！」

私は斯う叫んで庭へとび出して行つた。軈て提灯の光が三つ四つ五つと殖え、太鼓の音さへ聞えた。

お嫁さんの一行が東の門口から入つて來て奥の一室の押入の前にずらりと並んで座つた時、祝ひに來て呉れた若者達は『祝ひ目出度の若松さまは……』と言つて庭先で太皷を敲きながら歌つた。そして又助といふ青年が、碁盤目の半纒を頭からすつぽり被つて、座敷の中まで踊り込んで來た。けれども祖父さんは凛々しい唇を堅く結びながら又助の踊るのを默つて凝乎と見詰めてゐた。

祖父さんは何か考ふる所があつたと見え、其晩、太皷を打いて歌つて踊つて呉れた若い人達にお酒を出さなかつた。又助の踊の濟んだ時、靜かに緣側へ出て行つて、

『皆さん、今晩はどうも御苦勞樣でごさんした。何も御馳走の用意が出來てゐませんので、誠に濟みませんが、どうぞ其所いらの柿の木に生つてる柿を、御勝手に取つてお食り下さいませ。』と云つた。

若い人達は『弱つたなア、酒は出んのか。』と口々に言ひつゝ東の門口の方へ走つて行つたが、軈て仇でも討つやうに、『ワアーツ！』と鬨の聲をあげながら柿の樹畑へ突貫して行つた。

二

久枝さんは甲斐々々しく働いた。朝から晩まで裝風構はずに畑に行き田圃に行つた。其時私は師範學校の入學試驗を受けようと思つて其の準備に取かゝつて居たが、彼んなに一生懸命に働く久枝さんに對して、朝からぢつと机の前に坐つて居る事が心苦しかつた。で、東の小山へ行つて其所の檜の葉蔭で熱心に數學を考へたり地理を暗記したのであつた。

さうして居るうちに、私は隣村の小學校へ月給四圓の傭教師となつて赴任する事になつた。忘れもしないが、私は赴任の時、日本外史だとか文章軌範だとか新選地理小誌だとかいふ和綴の本を四五十册、久枝さんに借りた大風呂敷に包んで自分と背負つて行つたのであつた。

翌年の一月休みに家へ歸つてみると、既う叔母のお虎は子供を連れて辻垣内といふ家へ行つて了つた後であつた。叔父の惣五郎は私の顏を見るなり直ぐ斯ういふ事を言つた。

『おい、岩三郎、俺も他所から聟に貰はれてなイ、もう行く事に決めたんぢやよ、嬶になる女は俺より大分年寄ぢやぞ』

『さうですか、夫りやアお目出度う。』と言つて私は惣五郎の顏を凝乎と見た。惣五郎は禁じられない喜びを口もとに浮べてニヤ〳〵と笑つてゐた。

竈にかけた五升鍋の中へ洗ひたての白い田芋を一杯入れて、其の水加減を見て居た久枝さんは俯向いて私の顏を見な

から、

『惣五郎さんも聟入りをするのは目出度いが、惣五郎さんに出て行かれたら、働くものは私一人になつて了ふさかのう。』と云つた。私はさう云つた久枝さんの心が能く解つた。

何ぼ能く働いた所で祖父さんは既う七十近い人であり、此家の百姓を傭人無しで切廻して行くには低能であつても何でも構はない、唯頑丈で能く働く惣五郎は確かに久枝さんに取つて此上も無い味方であり力であつたのである。

翌る年の正月に惣五郎は山を二つ越えた隣村の五十近い後家さんの所へ聟入つたので、沖野の一家はいよ〳〵祖父さんと叔父さんと久枝さんとの三人暮しになつた。そして祖父さんは財産の悉皆を綺麗に叔父さんの兵々衛に讓り渡して朝から晩まで本當に骨を粉にして働いた。

私が三月の末に、師範學校へ入學出來た事を知らせに歸つた時、祖父さんは本當に心から喜んで呉れた。

『さうか、夫れは善かつた。先ア勉強して教師にでもなつて呉れ、久枝は感心に能う働いて呉れるし、兵々衛も此頃は一通りの事はして呉れるさかい、俺ア最ういつ何時死んでも極樂往生ぢや、岩三郎、お前も一人前の者になつたら、嫁の久枝の力になつてやつて呉れ、久枝が此家へ來て呉れたのは此家に取つては福の神ぢやぞ、久枝は此家の守本尊ぢや、先ア此の近所界隈で此の位能う骨を惜まんと働く女は無いよ。』

祖父さんは左も嬉しさうに斯う言つて、久枝さんの顏と私の顏とを見較べた。

『何の私のやうな者が……』久枝さんは耻かしさうに然う言つて、丁字の爲に薄暗くなつてゐたカンテラを一寸振つて見て、内庭へ降りて行つて夫れへ石油を注ぎ足した。夫れから私達四人は圍爐裏の四方に座つて久枝さんの釀つた濁酒を温めて飲んだ。

『では、兵々衛、彼の棕梠皮を賣つた金と、俺が『陷』で捕つた狸の賣上とを合せて、岩三郎に五六圓やつて呉れ、今年は狸の八文字は一疋三圓に賣れるさうな。又た五六疋は捕れるぢやらうよ。』

祖父さんは頼むようにして言つた。其時叔父さんは膳箱の抽出しから五圓紙幣一枚と五十錢銀貨二つを取出して私に

與れた。私は其の六圓が沖野家の爲には容易に得られない大金であるといふ事を能く知つて居た。

私は奥の一室で祖父さんと枕を並べて寢たが、寢る時其の六圓を紙に包んで叮嚀に敷蒲團の下へ入れて置いた。祖父さんは頭からすつぽり着物を被つて、小い聲でブツ〱と獨語を言つて居た。時々南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛……と言ふ聲も聞えた。苦勞の絶えなかつた長い過去を追憶したのであらう。

翌日私は和歌山市へ旅立つた。久枝さんは私の爲に私の好きな掻雜鮓飯を作つて與れた。彼の鼻を衝くやうな何とも言へない芳烈な柚酢の香が私の鼻に殘つて居る。

『左樣なら、先アしつかり勉強しておいで、祖父さんの事は心配せんように……』

井戸端の所まで見送つて與れた久枝さんは然う言つて凝乎と私の顏を眺めた。產の親を有たない私を幼い時から膝の上に抱いて育てて與れた懷かしい祖父さんに訣れて行く事をたまらなく淋しく思つてゐる私の心根を久枝さんは能く理解して與れたのであつた。

私は碌々返事も出來ないで、『左樣なら、』と一口言つた儘、S字形の坂を淚ぐみ乍ら夢中で駈け降りた。柊の葉陰から振仰いで見た時、久枝さんの白い額が大きな三平柿の幹の右側にはツきりと見えて居た。

其の夏休みに歸つて見ると、久枝さんの下腹は人目につく程にふつくらと膨らんで居た。でも、朝疾くから晩遲くまで、大根の虫を除つたり田の草を取つたり、晝寢もしないで一生懸命に働いてゐた。

祖父さんが久枝さんの勤勉に對する感謝は日一日と其の深さの度を加へて居た。私は每日川へ鮎を漁りに行つたり鰻を釣りに行つたりしてノソ〱と遊び暮す事が氣の毒で堪らなかつたから、休暇の終らない前に隣村の友達の所へ行つて、其所から學校へ歸つた。

其年の暮であつた。私は久枝さんが十二月の末か一月の初めにお產をするのだといふ通信を受けて居たから、年末の休暇を利用して日方の町の日切りの地藏へ詣つて久枝さんの安產を祈つて置いて、直ぐ其足で故鄕へ歸つた。其日は白馬山の麓へ泊つて翌日又た四つの山を越えて夕方人の顏の見分け難い頃に家へ着いた、雪がチラ〱と降つて居た。

私は内庭の障子を引開けた時、私を出迎へて呉れたのは久枝さんでは無かつた。
『先ア、能う歸つて來た、久枝さんはエライ難產で……最う危いかも知れん……』
斯う言つて私の顏を眺めたのは叔母さんのお虎であつた。
『然うか、夫れは大變ぢや、いつから苦み初めたのかい。』
私は草鞋の紐を解きながら言つた。
『もう陣痛が起り初めてから九日目ぢや。』
『九日目？　夫れにまだ產れんのかい？』
『今祖父さんが醫者に談判中ぢや。』
『お醫者さんは來て居るのかい？』
『うん、崎山の可道さんと、三木さんと二人來て呉れてるんぢや。』
『然うか、困つた事ぢやなア。』
私は井戸端へ行つて冷い水で足を洗つて、叔父さんが自分で作つた杉下駄を履いて裏口から臺所の所へ入つて行つた。其所にはお虎の聟である辻垣內の德兵衛といふ活潑な男と、從姉の聟である萬次といふ軍人上りの男とが坐つて居た。
祖父さんの大きな聲が奥の一室から洩れて來た。家内は皆な耳を欹てた。
『どうせ死ぬのなら、彼あ難儀をさせて死なせたくない。思ひ切つて痺れ藥を飲ませてやつてお呉れ……』
『そんな譯には行きません。もう中で子供は死んで居るんぢやから、夫れに親の身體が弱つて了うて、夫れを產み出す力が無いのです。どうも吾々の手では何とも出來ません。』
三木といふ村の醫者は、祖父さんを諭すやうに言つた。
『お醫者さんは何う言ふのです？』私は萬次さんの方を顧盻いて訊いた。

『祖父さんは痺れ薬を盛つて呉れて言ふし、お醫者さんは夫りやア出來んと云ふし、一寸議論になつて、崎山さんは最う歸ると言ひ出したんです。』

萬次さんはさも困つた事が起つたといふやうに、右の手で髮をゴシ〳〵と掻いた。其時祖父さんは、

『夫れぢやア三木さん、貴方がたの手に了へないと仰しやるなら仕方が無い、私は彼の儘久枝を見殺しにします。さるかはり、久枝が死んだら、私は鉈ででも斧ででも久枝の腹を斷ち割つて子供と親とを別々にして葬式をする。私は夫れが爲に罰金を取られようが、監獄へ行かうが構はん。彼のような正直な能う働く嫁を、身二つに能うしてやらんと、死なする事はどうしても出來ん。俺は切つて切つて切り割る！』と言ひ乍ら臺所へ出て來た。眼には一杯の涙を浮べて其聲には深い〳〵決心を示してゐた。

『先ア、善兵衛さん、然う言うたものぢや無い、一つ相談をしますから……』

三木さんは追縋るやうにして出て來た。叔父さんは恐怖に追竦められて臺所の隅で蒲團を引被つて寢て居た。

翌る朝であつた。川木さんは納戸から驚いたやうな聲で、

『德兵衛さん！　萬次さん！　早う來てお呉れ、どうやら見込がありさうぢやから……』と呼んだ。圍爐裏の側で焚火に煖まつて居た德兵衛さんも萬次さんも周章てゝ納戸の方へ走つて行つた。

『さア子を取つて貰ふんぢやぞ、久枝！』

祖父さんは宣告するやうに言つて久枝さんの枕もとに坐つた。崎山さんは黑い鞄から胎兒を引出す器械を取出した。薄暗い納戸の中でニツケル鍍金の色が恐ろしく光つた。

『さア、善兵衛さん、子供を取ると同時に久枝さんも此世の人で無いと思つて下さい。』

三木さんは斯う言つて、ホロリと涙を溢した。お醫者の三木さんと久枝さんの實家とは小川一つ隔てたばかりの隣同士であつたから、此の悼ましい最後を憐れと思つたのであらう。

崎山さんは器械の柄の所を手拭で固く縛つた。德兵衛さんは三尺帶を解いて更に其の上を堅く縛つた。萬次さんは久

枝さんの枕もとに行つて、兩手を後から久枝さんの脇の下に入れて羽交締にした。德兵衞さんは満身の力を籠めて器械を縛つた紐を引張つた。

『夫りやア、しつかりせえ、久枝！』

祖父さんは涙を振絞りながら叫んだ。二人の屈強な男は『夫りや！　最一つぢや！　夫りやア……』と懸聲をしながら兩方から力の限り引張つた。蒼白い顔した久枝さんは、死んだ者のやうに默つて、時々苦しさうに眉と眉との間に竪の皺を寄せるだけであつた。久枝さんの手頸を握つて其の脈を診て居た三木さんは幾度か小首を傾けた。崎山さんは凝乎と眸を据えて久枝さんの顔を見詰めて居た。

五分十分恐ろしい懸聲と呻吟が續いた後で『旨い！少し出て來るやうぢや！夫りや、もう一息ぢやぞ！』と德兵衞さんが叫んだ時、久枝さんの體は宙に浮いた。萬次さんも德兵衞さんも額から汗をタラ〳〵と流して居た。

『あ、大丈夫、身二つになれさうぢや！』

崎山さんは確信あるやうに言つた。其時祖父さんは横手の障子を二尺ばかり引開けて、東の方に手を合せて小聲で必死に何かを念じ初めた。

『しめた！　さア取れた！』崎山さんと德兵衞さんは一緒に叫んだ時、久枝さんの胴體が蓐の上に落着いたと思ふと、『はあーッ……』と遠い遠い所から響いて來た木魂の聲のやうに僅かに細い聲を出した久枝さんは、煠菜のやうにヘトヘトになつて、ぐつたりと首を蒲團の上に落した。

『久枝！　えらかつたなア。』

祖父さんは凹んだ老の眼から、涙をポロポロと流しながら、南無阿彌陀佛と言つた。崎山さんの手許には陽の目を見ないで闇から闇へ行つて了つた小い魂の抜殼が蒼白く不氣味に横はつてゐた。

祖父さんは久枝さんの鼻の所へ左の手の甲を靜かに近寄せて見て、『最う呼吸をせんらしい。さアお葬式の用意をせにゃア――』と獨語を言つた。室の隅で叔母さんのお虎はシク〳〵と泣いてゐた。

三

久枝さんは不思議にも一命を取止めた。のみならず二月三月の後には最う元々通りに働いた。

『有難い事ぢや、お前は二代の生りぢや、全く神佛の御利益ぢやつたんぢや。』

祖父さんは其後度々斯う言つた。二年三年と沖野家には極度の勤勞と努力とが續けられた。そして其の大半は久枝さん一人の腕に引受けられたのであつた。

私が結婚して和歌山市で一家を構ふるまでには私の一身上に種んな曲折波瀾があつた。しかし久枝さんは其間頗る平坦な淡い幸福の中に唯々働く一方で幾年かを過した。

『先ア久枝が能う働いて呉れるさか、彼れに身代を讓つたやうなものさ。俺も安心したさか、暫くお前の家で遊ばして貰はうよ。』

祖父さんは斯う言つて私の家へ來て呉れた。忘れもしない、私は和歌浦街道を通つて紀三井寺の向ふまで出迎へた時、祖父さんは聟の徳兵衛さんに荷物を擔はせて、杖をついて、あの大きな身體を太儀さうに運んで、ぽつり〳〵と歩いて來た。粗い竪縞の紀州ネルの襦袢と袷襦とが今も明瞭と私の眼に殘つてゐる。僅か十六圓の俸給で慈善事業だの社會事業だのといふ生意氣な事に手を出してゐた私は、祖父さんを迎へには行つたが、彼所から俥に乘せて伴れ歸つて上げるだけのお金が無かつたので、三人でぽつり〳〵と歩いて根上り松の所まで來て、其所の茶屋で五六錢の餅を食べて暫く休んだ。

祖父さんは其時始めて自轉車といふものを見た。一人の番頭風の男が茶店の前を自轉車に乘つて通るのを見て、

「彼樣なものが出來ちやア車曳さんが食へんやうになる。」と大きな聲で言つた。祖父さんに取つては夫れが大變な問題であつたのだ。

私は今でも想ひ出す度に涙ぐむ。あの祖父さんが十六の年には既う自由に牛を使つて田圃を鋤いたさうである。十九の年に父に別れて以來、五十年の間夜を日に繼いで汗と涙との中に骨を惜まず働いた。しかし村の大祭以外に賑やかな

所を見た事が無かつた。着物といつても祭や儀式へ着て行く縞の羽織一枚は、亡くなつた妻の父が死んだ時の記念分に貰つたもので、結んで居る小倉の帶は三代前の佐助といふ祖父さんが銀四朱で買つた物であつた。
働いて税金を納めて漸との事で食べて來たといふ事が祖父さんの生涯であつたのだ。其の祖父さんが涙の中に育てあげた私が、小いながら一家を構へ、曲りながら世帶を持つたといふのを此上も無く喜んで、五つの山を越えて二十四里の長途を歩いて來て呉れたのであつた。
所が祖父さんは其年の冬、急性肺炎で私の家で亡くなられた。よもやと思つてゐるうちに叔父さんにも久枝さんにも、同じ町内に住んで居たお種といふ伯母さんにも、通知しないうち、枯木の折れるやうに唯ッた三四日の患ひで亡くなられた。
『祖父さん、お醫者さんを頼んで來ませう。』と云つて私が其の枕もとに座つた時、祖父さんは苦しさうな息を吐きながら、
『お醫者は要らん、お醫者は要らん、俺は既う死ぬぢやらう。』と云つて掉頭を振つた。
私は驚いて祖父さんの顔を覗き込んだ。
『俺はなア、久枝が難産の時に、(どうぞ久枝の生命を助けてやつて下さい。其代りに私の生命を差上げるさか……)ちふ御立願をお多賀さんに懸けたんぢや。俺は去年の冬、倉の屋根を繕ひに行つて、あの高い所から轉げ落ちた時、既う死ぬ筈ぢやつたんぢや。夫れに今まで生きて居て、お前の所で死ぬのは本望ぢや。まア後々の事を頼むぞよ……』
斯う言つて祖父さんは私の顔を凝乎と見詰めた。祖父さんの眼には悲みの涙が無かつた。其の燃ゆるやうな瞳が私の瞳を射た時、私は思はず座樣を正して俯向いて了つた。盆の鉦がチーンと引締るやうに感じた。
『おい、祖父さんが少し變だぞ……』
私は妻の春子を次の室から呼んで來た。從妹の浪子も入つて來た。
『祖父さん!』と春子は言葉をかけた。けれども既う返事をしなかつた。うつとりとした優しい眼を開けて、聞とれな

い小聲でホシヤ〳〵と口の中で何事かを呟いてゐた。

『要さんに早く花岡さんまで行つて貰へ。』

私は周章てゝ春子に然う言つた。春子は二階の段梯子をトン〳〵と駈け登つた。二階には渡米の準備に村から出て來た寒川要之助といふ青年が宿つて居たのであつた。

要さんは直ぐ十四五町隔つた三木町の花岡病院まで駈付けて吳れた。しかし花岡さんが來て吳れた時は最う祖父さんは此世の人では無かつた。

私達は留守を要さんに賴んで置いて、祖父さんの屍骸を守つて村へ歸つた。

二日目の夕方、村の入口へ着いた時、一家親類は多勢辻堂の所まで出迎へに來て居た。頬を殺ぐやうな寒い風の吹く時であつた。其時私には久枝さんの白い顏が直ぐ目についた、久枝さんは兩袖を胸の所で掻合せて、吹きツ放しの岡の所に立つて居て、私の顏を見るなり、直ぐ涙をハラ〳〵と流しながら、

『祖父さんには大事にして貰うたんぢやが……可愛がつてお吳れたんぢやが……』と云つて泣いた。私は祖父さんが斷末魔に言つた言葉を想ひ出して、此所に姿を變へた祖父さんが居るのだと思つた。其時私は本當に久枝さんを尊い人だと思つた。何所の世界に男から「何卒嫁の生命を助けてやつて下さい、私の生命を差上げるから、』と云つて神佛にお立願をして吳れる程に愛せられる嫁があるだらう？　其點に於て久枝さんは本當に幸福な人であつた。

四

久枝さんには其後子供が出來なかつた。で、五六町離れた芝平の嘉吉といふ人の姪を養女に貰つた。娘は色の白い、眼のくる〳〵とした丈の高い子であつた。名を芳子と云つた。芳子の身の上には悲しい歷史が纏はつて居た。彼れの父親は私の親しい友達であつたが子供の顏を見ないで肺病の爲に血を咯いて死んで了つたのであつた。母は芳子を產み捨てて五里も六里も隔つた山奥の一軒屋へ嫁入つて了つた。

叔父さんも久枝さんも芳子の身の上を不憫がつて大事に〳〵育つて居たが、或日學校歸りの子供が顏色を變へて駈込

んで來て悲しい報告を齎した。

久枝さんは取るものも取敢ず、岡を越えて川を渡つて子供達の立騒いで居る所へ駈けつけて見ると、芳子は口から白い沫を吹きながら死人のやうに路傍へぶつ倒れて居た。

此の一事は沖野家の將來に對する種々の希望をも畫策をも總て水泡に歸せしめた。叔父さんの胸には、芳子を斯うして彼あして、誰の息子を養子に貰つて、財産をどうする斯うするといふやうな事を樣々に考へてゐたのであつた。其の前の年、叔父さんは和歌山の私の宅へ來て其の事に就いて種々と私に相談をしたのであつた。久枝さんも芳子の行末を樂みに毎日相變らずセツセと働いて居たのであらう。

叔父さんは癲癇の妙藥だと聞いて、態々田邊の町まで三晩泊りで柘榴の根を買ひに行つたのであつた。お灸も据えた。あらゆる賣藥も飮ました。神佛に種んな立願もした。しかし芳子の病氣は遠慮なく益々惡くなつた。

叔父さんは苗床の茄子苗の枯れる事よりも、稻に浮塵子の湧く事よりも、麥刈の遲くなる事よりも、芳子の病勢の募る事が大事件であつた。明けても暮れても可愛い芳子の事ばかり思ひあぐんで居る時、久枝さんには二重三重に心配が重なつた。

久枝さんは女の腕一つで百姓の事を切廻す覺悟を要した。仕事が碌々手につかないで戸惑うて居る叔父さんの身の上をも心配しなければならなかつた。何所の宮へ詣るとか、何々の藥を買ふとか言つて叔父さんが家を留守にした後で、彼の四方を山と川とで取圍まれた一軒屋の中で芳子を相手に唯だ二人で淋しく暮さねばならなかつた。

芳子の病氣は益々激しくなつた。發病した時には十時間十五時間の長い間正氣に復らなかつた。發病すると口から沫を吹きながら、あーん、うーんと呻きながら恐ろしい醜い顏をして眼を見張り口を歪め、背を曲げたり仰向に反くりかへつたり、足を宙に蹴上げたり、さながら魔物が芳子の身體中を縱横に拔け歩くやうであつた。久枝さんは斯んな恐ろしい病魔の持主と唯ツた二人つきりで十日も廿日も、長い時は一月も留守を守る事があつた。

其頃私は自分の思想に一大革命が起り、夫婦共上京して、私は芝の明治學院へ、春子は二本榎の聖書學院へ通ひつゝ

あつた。

卒業後は紀州の新宮教會へ傳道に行く事に決つたといふ事を叔父さんに通知した時、叔父さんは態々上京して、白金猿町の私の小い狹い借屋の戶を敲いたのは二月初旬の朝の六時頃であつた。

『私ぢや、開けてお呉れ……』といふ聲は私を非常に驚かした。

『叔父さんぢや無いか？』と言ひながら、蒲團の中から飛出した私は入口の方へ走つて行つた。どうした理由か知らないが、其の刹那に『叔父さんは發狂した！』と私は心の中で叫んだ。しかし雨戶を引開けた時、其所には頗る人間の善ささうな優しい叔父さんが悄然と立つて居た。叔父さんは決して狂つては居なかつた。

しかし叔父さんは既う餘程人生といふものに疲れて居た。久枝さんのやうに骨を粉に碎いても沖野家の身代を維持する爲に働かうといふやうな意氣込は毛頭無かつた。

私が何を言ひかけても『うん、然うか、然うか。』と云ふばかりで、別に反對の意見も吐かず、彼の亡くなつた祖父さんのやうな、思ひ込んだ事は止處の止處まで、やり切るといふ勇氣は些とも無かつた。

叔父さんは食事の度に、私共の歌ふ讃美歌に調子を合せて小い聲で歌つた。感謝の時もアーメンと言つた。南の椽側に足を投げ出して日向ぼつこをしながら新約聖書を讀んで居たのも見た。何所で聞覺えたのか『縞の財布がエンプチイになつた。』などゝ言つて私共を笑はした。

五

私は其夏新宮の町に行つて其所の教會を牧する事になつた。叔父さんは度々十津川の果無峠を越えて私の所へ尋ねて來た。來る度に叔父さんの心は故鄕から遠ざかつて居た。叔父さんは親の跡目を繼いだ、しかし其の意志は繼がなかつた。朝から晩まで眞黑くなつて働いて、役場の稅金を督られながら、漸と二度三度の粥を吸つて生きて行くといふ事を無意義だと思つたらしい。隨つて久枝さんが必死になつて働いて沖野家の潰滅を喰ひ止めようとする其の奮闘も努力も叔父さんには別に有難いものだとも思はれなくなつた。久枝さんは染々亡くなつた祖父さんの事を思ひ出したに相違な

い。

久枝さんは朝起きると直ぐ何を措いても先づ佛壇に手を合せて祖父さんの戒名を唱へた。盆にも彼岸にも裏の墓場へ行つて生きた人に物言ふやうに、『のう、祖父さん、久枝々々と言うて可愛がつてお呉れたんぢやが……』と言つて、ホロホロ泣いたのであつた。そして祖父さんの事を想ひ出すと、芳子の病氣の事も叔父さんの他所々々しい事も皆な打忘れて山に畑に田圃に根限りの力を出して働いたのであつた。けれども叔父さんの心と久枝さんの心とは段々／＼、距離れて行つて、叔父さんは如何しても支ふる事の出來ない此の中產階級の一家を、强いて／＼現狀のまゝ支へて行かうとする久枝さんの態度を愚な事のやうに思つた。はては其の無智識が憎くなつた。

翌年の春私は神戶で開かれた牧師會に臨んでの歸るさ、久し振で故鄕の地を踏んだ。山は昔ながらに聳えて居た。川は元のまゝに流れてゐた。棕梠畑も竹籔も柿の木畑も以前のまゝであつた。しかし家の樣子は全く變り果てゝ居た。東にあつた門口が北の方に變つてゐた。西側にあつた倉と牛小屋とは跡方もなく取除かれて、既う牛は飼つてゐなかつた。更に驚いたのは內庭の障子を開けると、內部の樣子が全で昔の面影を留めないまでに變つてゐる事であつた。

次の六疊と奧の六疊との堺にある眞中の襖へは、何所で買つて來たものか　復活のキリストがガリラヤの湖畔でペテロに『汝我を愛するか。』と問うてゐる所の大きな色摺の繪を貼つてあり、一枚の襖には楞葛刺で大きな十字架を畫いてあつた。私は障子を引開けて奧の一室を覗くと其所は床板が悉皆取外されて土間になつて居た。唐臼だの簑だの鍬だの、蓆席などが無雜作に置かれてあつた。私が十何年間祖父さんと枕を並べて寢た室は淺ましいまでに變り果てゝゐた。

『先ア……何といふ事をしたのだらう？』と云ひ乍ら佛壇の所を見ると、其所には最う黑く煤びた阿彌陀像も先祖代々の位牌も何も無かつた。

『どうして斯んな事をしたのです？』

私は草鞋の紐を解きながら言つた。叔父さんは默つてニヤ／＼笑つて居た。久枝さんは悲しさうに俯向いて默つてゐた。ひよろ／＼と淋しげに丈の伸びた芳子は、可愛い眼をくる／＼させながら、

『母アさんが爲んなちふのに、父うさんは斯樣な事をしたんぢやぜ、父うさん程可笑げな人は無いんぢやぜ、仕事も何にもせんと遊んでばつかり居つて……』と言つた。

『芳い！　默つとらんせ！』久枝さんは斯う言つて芳子を叱つた。

翌る朝私は裏の墓場へ行つて見た。墓には皆な一つ〳〵新しい塔婆が立つてゐた。近寄つて見ると夫れは叔父さん自身の筆であつた。私は苦笑しながら讀んで見ると『沖野家第一代開祖三六翁百二十回忌、五代之當主沖野兵々衞源重信建之』といふ風に書いてあつた。

祖父さんの新しい墓には線香の燃殘りがあり、青い香の木の枝が供へられてあつた。私は直ぐ其の手向の主の誰であるかを知つた。

二三日滯在して居るうちに、沖野家の財産は山が賣られ田が賣られ段々と其の所有區域を縮少せられつゝあるといふ事を知つた。

『叔父さん、今此の財産を悉皆賣つて了へば何程のものがあるでせう？』

私は大膽に斯う訊いてみた。叔父さんは輕く首を振り乍ら、

『さうぢやなア、まだ三千圓では能う手離さんのう。』と言つた。

『三千圓の身代ぢやア食つて行けないですか。』

『とても行けん。學校の費用が嵩むし、これで一年に四十圓の諸年貢を量らにやならん。米は籾で漸と三十五六俵、白米にすりやア七石足らずぢや、一石十五圓として八十五圓ぢやないか。漸と秋から秋へ食ひ繋ぎがあるだけで、税金と小使の出所が無い。棕梠皮ぢやつて千枚が二圓しない。楮も一荷が四圓位ぢやし、茶は鹽張引合はず、何をしたつて駄目ぢやよ。久枝らは算盤を持たんと、やれ山を賣なるとか畑を抵當に入れるなとか言ふが、俺は最うちやーんと算盤を立てゝ見て、此位ぢやア此家が持てんといふ事を能うく知つてるんぢや。あんまり心配せんと先ア氣楽に暮さうかい』

叔父さんは斯う言つて臺所の片隅をチラと眺めた。私の瞳も其後を追うた。そして其所に三味線箱の横つてゐるに氣

がついた。

翌る日は雨降りであつた。久枝さんは朝疾く起きて御飯の仕度をして置いて、編笠を被つて簑を着て外へ出て行つた。叔父さんも芳子もフイ〳〵と輕い鼾をしながら寐て居た。

八時頃に私は朝飯を食べた。九時前に叔父さんと芳子とは起きて來た。

十一時頃に外から入つて來た久枝さんは、『芳よ、お前は食べたお茶碗を洗はんと置いてあるぢやないか、道樂な子ぢやなア、お前は……』と言つて芳子を叱つた。

『なアに、私ら知らんよ、父さんが一番後で食べたんぢやさか……』

芳子は默つて居ずに抗言した。私は氣の毒で堪らないから久枝さんを慰めてあげようと思つて何か言ひ出さうとした時、

『彼の病氣になると人間が些とづゝ阿呆になるんぢや無からうか、どうでせう？』と云つて久枝さんは私の顔を眺めた。

『又た母アさんは腐つた事を見ふ、私ア病氣の話をすんのは大嫌ひぢやア。』

芳子はくる〳〵した圓い眼を瞬りながら言つた。

『あれぢやさか困るんぢや。父さんがあんまり甘やかすもんぢやさか……』

久枝さんは横向いてホロリと涙を零した。

『なアにも泣かいでも善えのに、私ら病氣になつたて、一寸も辛い事もなアにも無い。』

芳子は上り框の所に兩足をぶら下げて、踵の所で蹴込の板をトン〳〵と言はせて居た。

『芳、此所へ來い、腹三味を聞かせてやらう。此所へ來い。』

叔父さんは納戸の所から聲をかけた。

『腹三味？　どう、どがいな三味線なら。』

芳子は納戸の方へ行つた。久枝さんは涙を拭き〳〵私の方を見上げて、

『あれぢやさか困るんぢや、彼い病氣は本人が一寸も苦しい事を知らんのぢやさか、夜ツぴと、こつちは心配して寢もせんと看てやるのに、病氣が治ると、けろりとして、（母アさんら放つて置いて哭るりやァ善えのに、私ら何とも無いんぢやさか。）ツて言ふんぢやさかのう。』と言つて、竈の下の薪をさしくべた。

納戸では三味線が鳴り初めた。芳子はきやツ〳〵言つて笑つた。見れば叔父さんは仰向に寢たまゝで、腹の上に三味線を載せて夫れをデデン〳〵と鳴らしながら、『愛にあいもつ鮎の鮓飯……』と鮓飯屋のお里を語つて居た。

『可笑しい淨ろりぢやなア、鮎のスシぢやとう、可笑しいよう。』芳子は甲高い聲で笑ひながら言つた。久枝さんは『困つた人達だ。』といふやうな顏付をして裏口の所から外へ出て行つた。

私は不圖納戸の東側の薄暗い障子の所を見ると芳子は障子を二尺ばかり開けて庭の方を覗いて居た。私は『彼所で、祖父さんは久枝さんの身代りになる事を多賀神社へお立願をしたのだ』と想ふと同時に、彼の恐ろしかつた當時の光景が、走馬燈のやうに私の頭の中に果しなく現はれて來た。私は大黒柱の傍へどつかと坐つて、ぢいつと眼を閉ぢて其の恐ろしい幻想を追除けようと努めて居たが、俄かに三味の音がピタと止つたと思ふと、久枝さんの駭甚い聲が聞えた。

『芳が斯んな所へ倒れてるよう。兵々衞さん三味線どころか……』

叔父さんは周章てゝ納戸から飛出した。私も續いて庭へ駈け出した。

外にはしと〳〵と春雨が降つてゐた。芳子の白い脛が雨垂の所で蛇のやうに紆つてゐた。私は思はず眼を閉ぢた。

六

私は叔父さんが碌々仕事もしないで三味線を彈いて一時の感情を誤魔化して居る心理狀態を能く理解してゐた。しかし久枝さんの嘗めて居る苦痛に對しては、より深く同情と理解とを有つて居た。

私は久枝さんをどうかして今の境遇から救つてあげたいと思つて種々考へた結果、或日私は教會員の山路二郎といふ歯科醫の所へ行つて總ての事情を打明けて詳しく語つた。

丁度其時山路さんは三千圓で密柑畑を買つて、其の山番を傭はうとして居る所であつたから、早速叔父さんを月給十五圓で傭入れる事を承諾して呉れた。

私の手紙を受取つた叔父さんは半月ばかり經つて町へ出て來た。そして山路さんとの約束も出來、これからは氣を換えて一つ働いて見るといふ事を私に誓つた。

夫れから叔父さんは、一家を引纏めて私の宅へ落着いた。芳子にも久枝さんにもこれが最初の長い旅であつた。

叔父さんは田も畑も他人に預けて、家屋敷は親類の婆アさんに貸した。そして目星しい物は大抵賣拂つて金にして持つて來た。

久枝さんと芳子と叔父さんと親子三人は、田邊の町へ出て鬪鷄權現にも詣り、本宮山にも詣る心算で湯の峯の温泉まで來た時、宿の一室で芳子の持病が起つて、二三日滯在したのであつた。

『土地が變つたら、芳の病氣も癒るやらわからん。』

久枝さんは然う言つて果敢ない希望を慰めに、芳子を伴れて町から二里ばかり離れた山路さんの山小屋へ行つた。

『先ア叔母さん辛抱して働いて下さい。今までのやうに一生懸命に家で働いて居たつて、彼の調子では何時の間にか一文無しに成つて了ひます。しかし此所で働いて居て呉れりやア、家の方の小作米と貸地料だけ浮いて來るんだから…………』

私としては久枝さんに對して斯う言ふより外に奬勵の言葉が無かつたのである。

しかし叔父さんは最うコツ〳〵と土を掘つたり種を蒔いたりする勞働には堪へなくなつて居た。三日にあげず久枝さんと癲癇病みの芳子とを山小屋に殘して置いて汽車に乘つて町へ出て來た。

叔父さんと接近して生活をしてみると私には段々其の性格が判然と解つて來た。私は如何しても叔父さんの性質が、ぢつくりと山番などをして居られる人でないと知つたから、其秋山路さんの方を御斷りして、新宮の町で小い八百屋店を出す事にした。

私は種々と工面した結果、三百圓の金を資本に『山路屋』といふ店を張るやうにしてあげた。叔父さんは大阪から牛蒡や胡蘿蔔やバナナを取寄せて賣つた。林檎も賣つた。初めの月には百圓近い賣上げがあつた。叔父さんは喜んで註文取りに行つたり配達したりした。

しかし叔父さんの氣質は最う何をするにも二月三月の忍耐力が無くなつて居た。翌年の春頃から、そろ／＼商買に嫌氣がさして來て、又た朝から三味線を彈いて淨瑠璃を唸つてゐた。

久枝さんは氣が氣で無かつた。今此所で商買に失敗しては、何の面目があつて、おめ／＼と故郷へ歸られよう、どうしてでも此の店を續けて行かうと云ふ決心で、店の品物を擔いで裝も風も構はずに振賣に出た。出る度に一圓なり二圓なりを賣つて來た。しかし久枝さんの勤勞が發揮せられる所に叔父さんの影が段々薄くなつて行くので、叔父さんは間も無く『山路屋』の店を疊んで了つた。そして佐藤春夫さんのお父さんの有つてゐる果樹園の番人になつた。

叔父さんは畑の仕事を悉皆久枝さんに一任して、自分は或る製材會社へ働きに出た。しかし朝の六時に出て晩の六時に歸るといふ過激な勞働に堪へられる體格では無かつた。

其年の夏は、あの降雨の多い、熊野には珍らしい旱天の續く夏であつた。果樹園の仕事は悉皆久枝さんが引受けてした。叔父さんは間がな隙がな町へ出て來て、芝居を觀たり浪花節を聞いたりした。芳子は身體が大きくなるばかりで相變らず口答へばかりしてのそ／＼として居た。

或日私は教會の用事で信者の家庭を訪問しようと思つて本町通を歩いて居ると、尾崎銀行の曲り角の所に蝙蝠傘を杖にして熱心に何物かを見詰めて居る叔父さんの後姿が目についた。

近寄つて見ると、白い手術服のやうな着物を着た五十恰好の獨眼龍の男が、朱で塗つたやうに赤い木の實のやうな物を五六十、板の上に並べて頻りに饒舌つて居た。叔父さんは私の來たのも氣付かずに其の說明を聞惚れて居たが、其の二三日後に突然私の所へ來て、

『私も思ひ付いた事があるから、暫く遠方へ行つて來る事にした。』と言つた。

『叔父さん、赤い木の實を賣りに行くのぢや無いかい。』

私は浮かり斯う言つて了つた。圖星を指された叔父さんは薄氣味惡い顏で私を凝乎と見詰めて居たが、夫れからと云ふものは私に何事も相談しなくなつた。そして其年の十一月廿一日に久枝さんと芳子を伴れて、村へ歸るのだと言つて來た。

私は極力今更村へ歸る事の不利益を說いた。しかし叔父さんは最う既に佐藤さんの所へも斷つて終ひ、簞笥だとか鍋釜類まで古道具屋に賣拂つて了つた後であつた。

『では致方が無い、先ア二三日遊んでいらつしやい、二十三日には權現河原で坂本式の飛行機が飛ぶといふから……』

私は言ひ知れない哀愁に包まれながら斯う言つて引止めて見た。其うちに又た思ひ直す機會を得るかも知れないといふ果敢ない希望を懷いて居たのであつた。しかし叔父さん達は飛行機も見ないで、翌日村の方へ歸るべく旅立つた。私は妻と二人で停車場まで見送つて行つたが、芳子は流石に淚ぐみながら、

『左樣なら、長々有難うございました。』と言つたが、思ひ出したやうに妻の方を振向いて『春さん、あんたは身體が弱いんぢやさうなが大事にしてお吳れ。』と言つた。

久枝さんが汽車へ乘込んだ時、私は其の後姿を眺めて、『あゝ疲れたなア……』と思つた。

七

其後私の一家は新宮の町を引拂つて背水の陣を張つて上京した。叔父さんからも久枝さんからも絕えて音沙汰が無かつた。けれども三千圓の財產を片ッ端から賓食ひにしたつて五六年の食代はあるからと云ふやうな氣樂な考へで唯自分の事ばかりを思つて居たのであつた。

所が妻の春子が生死の境を走るやうな病氣に罹つたので、私は久し振にお虎の叔母さんの產んだ秀助といふ從弟に手紙をやつて、村の事情を詳しく知らせて吳れるやうに賴んだ。殊に沖野家の財產や、久枝さんや、芳子の事を詳細に知らせるやうに。

私は秀助が十一の年に村を出て其後彼とは一度も會はなかつたのであつた。秀助はもう兵役の義務を果した廿五歳の青年で、此の春同じ村のお倉といふ人の產んだ娘と結婚したといふ通知があつたのであつた。

秀助の手紙には斯んな事が書いてあつた。

私も度々手紙を出したいと思ふばかりで毎日生活に追はれて其の閑も無い次第です。東京での米の値は知りませんが、此の寒川村では玄米一石が四十五圓です。私は今川又の官營事業に傭はれて、食べた上に一圓廿錢の賃を貰つて居ますが、月に一日も休まず働いて漸く米八斗です。五六人の家内が粥を啜るだけです。私は鵜の鳥のやうに眞黑くなつて眼ばかり光つて居ます。

偖、沖野の叔父さんは新宮から歸つて、北海道へ行くのだと言つて居ましたが、海草郡日方町に善い宿屋の賣家があるから夫れを買つてはどうかと言つて世話をする男がありましたので、叔父さんは沖野の財產を皆な賣拂つて行く事にしました。夫れはきつと仲へ立つ男に欺されるにきまつて居るから、さういふ事は止めにしなさいと親類中から忠告しましたが叔父さんはなか／＼聞入れないのでした。とう／＼財產を皆な賣拂つて其宿屋を買受け、經驗が無いからといふので其の世話人を番頭のやうに傭入れたのです。

所が日の半年もたたないうちに久枝さんと其男との間に詰らない噂が立つたので、叔父さんは立腹して久枝さんを離緣するといふ事になつて居つたのです。其事に就いて叔父さんは寒川村へ歸つて十日ばかりたつて日方へ歸つて見ると、留守の間に久枝さんは宿屋の道具から錢になるものは皆な賣拂つて男と一緒に家を借りて、錢は有るし樂しく暮して居りました。

そこで叔父さんは久枝さんを離緣して、自分は和歌山へ行つて鈴木鎗次郎といふキリスト敎の先生に世話になつて郵便の集配人になつて芳子と二人で暮して居ましたが、芳子がテンカンで守が無くては一日一人置く事が出來ず、とうとう叔父さんも一たん振捨てた此の寒川村へ芳子をつれて又た歸つて來る事になりました。所が道中で芳子はテンカンの

上に脚氣病がヘイ發して困つて居るから迎ひに來て呉れといふ言傳があつたので、私は兄の千三郎と、芳子の從弟に當る芝の清太郎さんと三人で白馬の峯まで迎ひに行きました。

叔父さんと芳子とが坂を下から登つて來ましたが、私は芳子を見て本當に涙が流れました。二本の杖に縋り蟹のやうに横に這ひながら、ナメクヂリが這ふよりも、まだ一そう淺ましい歩みかたでありました。

あなたよ、悲しい事には、もう沖野の家屋敷は人手に渡つてゐます。叔父さんも芳子も歸つて來た所で行く家がありません。そこで萬次さんの所へつれて行きますと、お種の伯母が寢て居て、芳子が庭のシキヰを跨げるか跨がないうちに、『こゝへ芳子が入つて來る道は無い、出て行け。』と叱りつけました。芳子は足は立たず行く所は無し、誠に芝居のやうな哀れな話でした。けれども賴み賴んで萬次さんの所へ置いて貰ひました。

翌日叔父さんは味淋を二合買つて母の所へ持つて來て、『お虎、私はお前らの言ふ事を聞かずに、今こんな有様になつたが勘忍して呉れ。』と言つて詫びました。

偖芳子をどうしようかと心配して居るうちに助けの神がありました。それは木村繁吉といふ人が十ケ年八十圓で預かつてくれるといふ事です。財産を賣つた時の金が八十圓あつたので、芳子は木村さんに賴む事にしましたが、一月もたたぬうちに斷はれました。

偖、あなたよ。人といふものは見かけによらぬ物です…………

私は手紙を讀んで了つた。そして五回も六回も繰返して讀んだ。

あれだけ勤勉で忠實であつた久枝さんを、二十四年といふ長い年月の間、悲慘と苦痛と困憊とを背負はして虐めた揚句、『錢はあるし、樂しく暮して居りました。』といふ嘲笑と憎惡と嫉妬に充ちた言葉を墓として此世から其の總てを葬つて了ふべきものであらうか。

久枝さんの二十四年間の激烈な勞働と忍耐との功を、あゝした最後の一點で總て水泡に歸せしむる程世の中の道德と

いふものは冷酷なものであらうか。

私の頭は、ぼうツとして何が何やら判らなくなつた。氣付いて見ると時計の針は丁度五時の所を指してゐる。

電燈は消えた！　今私は眞闇い室の中に座つて居る。久枝さんの難産の時に呻いた聲が遠い遠い國から蘇つて來るやうに思ふ。

——千九百十九年六月二十日——



小説「灰色の檻」

菊池寛

啓吉が、東京の重だつた雜誌に、續け樣に創作を五六篇發表して、それが可なりの反響を喚んだ時であつた、彼は初てある人から、自分を先生扱にして居る手紙を受取つた。

その手紙には、その男が東京の近郊に住んで居る小學校の教師で啓吉の同縣人であり、長い間文藝に志して居たが、恰好の先輩がない爲、原稿を見て貰ふ事さへ出來なかつた事などを長々と述べた後、啓吉の作品を讀んで感激したから、今後末長く指導して呉れと、書いてあつた。

啓吉は、それを受け取つた時、くすぐつたいやうなそれかと云つて、嬉しい心持がした。元より、その手紙の書かれた動機が、啓吉の作品に感心したなど丶云ふ事よりも、同縣人であると云ふ、頗る何でもない原因からである事は、分り切つて居たが、然もその手紙に對して冷然たる態度は取れなかつた。そんな手紙を受けた事が、一かどの小説家になつた印として、彼の子供らしい名譽心に媚びた事も事實だつた。その上、彼は自分に向つて爲される無名作家の「援助を求める聲」に、聾な耳を差向ける事は出來なかつた。

彼は、自分が漸く文壇に出られた事を、當然の事として、濟し返つて居る譯には行

かなかつた。選ばれたる少數の一人であるやうな顏をして、高く止つて居る譯には行かなかつた。彼は、自分の素質なり天分なりに、餘り多くの自信を持ち得なかつた丈に、自分がよい機會や境遇の爲に、案外容易に文壇へ出られた事を―多くの無名作家――可なりの天分を持ちながら文壇へ出られないで踠いて居る人達に對して、何となく濟まないやうに、思はないでもなかつた。從つて、さうした人達の焦燥や努力に對して、冷然たる態度を取る事は出來なかつた。

啓吉は、此の手紙の差出人たる未知な人に對しても、割合丁寧な返事を書いた。そして何時、尋ねて呉れてもいゝと云ひ添へた。所が、その人は尋ねて來る代りに、原稿を書いて寄こした。

啓吉は、中學の先生が生徒の作文を讀むやうな、一種先生らしい氣持で、人の作品に接するのは之が初てゞあつた。從つて彼は、相當の好奇心と感興とを以て、此の原稿を讀んだ。が、その原稿は、少しも物になつて居なかつた。投書雜誌に載せられる作品の程度迄も行つて居なかつた。啓吉は、其原稿を讀み了つた時、その作品と自分の作品との可なり大きい隔から、ある優越感を感ぜずには居られなかつた。が、それと同時に、此の作品を讀んだ感想を、その作者に何う報告してよいかに當惑した。彼の思つた通を書いてやることは、此の男の文學志望の心持を、滅茶苦茶に蹂み躙る事だつた。それかと云つて、彼は僞は云へなかつた。當座繕ひの御座なりは云へなかつた。彼の本當の感じは、「貴君は二十五六にも成りながら、こんな作品を書くやうでは、トテも見込はありません。いや貴君が作家に成れる素質は、少しもありません」であるのに拘はらず、當座逃れの氣安めを、相手に云つてやる氣にはなれなかつた。

彼は、原稿を讀んだ返事が何うしても、書けなかつた。相手は一二度督促を寄こした。が、彼には何うしてもその返事が書けなかつた。

其事があつてから、暫くして、彼は又別な人から、同じやうな手紙を受取つた。かうした手紙に對して、最初程の感激はなかつたが、それでも彼はある程度の好意を示さずには居られなかつた。間もなく、その人は啓吉を尋ねて來た。啓吉と同じ位の年輩の人だつた。手土産に正宗の一升壜を呉れた。啓吉は酒を飲まなかつた。何時かも、國から出て來た人から日本酒を貰つて、長い間捨てゝ置いた爲に、腐らしてしまつた事があつた。が、啓吉は此の正宗の一升壜を快

く受取つた。その品物…啓吉に取つて何物にも價しなかつたが、兎に角先方がある律義さを示して居る事が、啓吉には嬉しかつた。その人は啓吉に半分書きさしの原稿を讀んで呉れと云つて渡した。啓吉は、作者を前にしながら、その十二三枚ばかりの原稿を、急いで讀んで見た。何處にもいゝ所はなかつた。先方は、啓吉の讀後感を聞かうとして、熱心に啓吉が讀み了るのを待つて居た。啓吉は何と挨拶していゝか分らなかつた。先方が、自分で自分の文學的才能に就いて、全く盲目なのが可愛相でもあれば、腹立しくもあつた。啓吉は本當の事を云ふより仕方がないと思つた。彼は、その作品の缺陷と思はれる所を、一々指摘した。一旦云ひ出すと、調子に乘つて、云はないでもよい事迄、云つてしまつた。必要以上にその作品の缺陷を攻擊した。その人は、それぎり來なかつた。

今年の二月頃だつた。ある朝啓吉は毎朝、定まつて二三通は、受取る手紙やハガキの中に、未知の人から來た一通の手紙を見付けた。もう、かうした手紙に對して全く平氣になれて居た啓吉も、裏を返して其處に、一劃一劃も忽にしないやうな楷書で「高田市外陸軍合同官舍乙の四號中尉杉村繁三」と、書かれて居るのを見た時には、彼は、一寸好奇心を唆られずには居られなかつた。彼は、最初中學時代に分れた友人からの手紙ではないかと思つて、卒業當時陸軍に志願した友人の名を頭の中で、繰返して見た。が、さう云つた名前は、何うしても思ひ出せなかつた。「やつぱり愛讀者から來たのかな」と、思ひながら急いで封を破つて見た。文面は次ぎのやうに讀まれた——。

富井啓吉樣

面識も無く又何の緣故もない、かけ離れた私が唐突に、此書面を差し上げる非禮を許して下さい。私は幾度か躊躇し獨りで顏の赤らむ思を强いて抑へて是を差上げるのです。

私は田舍の聯隊に奉職する一青年士官です。此一青年士官に過ぎない私が何の爲に、貴下に此手紙を書きますのか、賢明なる貴下は既に私の心を洞察せられたことゝ思ひます。以下私の申上げることを寬容なる心持で、お聞取り下さい、

私は幼年學校以來約十年間、陸軍將校として堅い殼の中に敎育され又生活して來ました。然し、其の間私は他の人々

のやうに、私は軍人としての外面的生活丈には滿足して來られませんでした。私は文學に對し常に強い憧憬を持つて來たのです。血氣に逸り易い十七八才から廿四五才の間は、幾度か自分の進路を轉換し作家にならうと思つたか知れませんでした。そして周圍からの「軟文學に淫するやうな奴」と言ふ無理解な冷笑嘲罵に對しては、常に戰つては來ましたが、私自身、自分の素質と學力とに充分の自信を持ち得なかつたのと、文學と自分の現在の位置が餘りに遠すぎるのが、判つて居た爲に、唯吐息を洩す許りで知らぬ間に今日に及びました。尤も、その間には熱心に文學をやらうかと計畫を立てゝ見たり、或はもう絶對に文學的讀み物から遠ざかつて、自分の職業上の學問に身を入れて見やうと思つたりしました。

然し、内部から燃えて來る欲求の力は、遂に爆發しなければ止みませんでした。幾ら外部から仰壓されても、却つて益々反抗的に強くなるばかりでありました。

私は遂に決心し、計畫しました。そして私は文壇に於ける大家と云はれる多くの人々や新進作家として華々しく働いて居る人々の中から貴下を見出しました。私は貴下の凡てに對し、尊敬し思慕して居ります。私は躊躇なく貴下を選びました。

富井啓吉樣。

私をして貴下に師事する事を許して下さい。文壇に對して何等の緣故も持たず。知人を有しない私は、強いてゞも自分の師と仰ぐ人を見出し、それに縋つて導いて貰はねばならないのです。私のかうした志望は、一見、新進作家――流行作家――乃至は文學者と云つたやうな名目に憧れて、空想的な計畫に走る少年の行爲のやうに思はれるかも知れませんが、私にはもう少し深い根底がある積であります。

私は軍人としての全く外形的な生活には、何うしても慊らないのです。私は少しでも内面的に生きて行きたいです。そして自分の周圍を靜觀し、自分の觀た人生の一角に就いて考へ、且つ之を表現したい思ふのです。が、現在の私に取つて、夫は自身の力を顧みない不相應な望に近いものです。従つて私は貴下に師事する事に依つて、教へられ導かれ

尋常科の一生徒として勉强して行かうと思ひ立つたのです。私の素質なり天分に於て缺けて居る所を、自分の勉强に依つて補つて行かうと思つて居るのです。私は、常に露西亞の文豪たるクープリンを思ひ出して自分を鞭ちたいと思ひます。クープリンも幼年學校を出てから、士官としての生活を長くやつたやうです。私も何うかしてクープリンのやうな作家になりたいと思ひます。

富井啓吉樣。

私をして貴下に師事することを許して下さい。そして私の天分を補ふ磨きをかけて下さい。私は日常貴下に接近する事の出來ない境遇に置かれてあります。が、せめて私の書いたものを、貴下の寛容な溫情に富むお心で、讀んで批判し教示して頂きたいのです。

富井啓吉樣。

厚ケ間敷も、此手紙を差上げないでは居られない私の心を御推察下さい。

然し最後に私は一言申添へて置きます。私が敎ふるに堪へざるものであつたならば忌憚なくさう云つて下さい。

私は貴下が私の乞ひを許して下されば、奮勵して出來る丈いゝものを書いてお送したいと思ひます。

私は、今後も矢張り今迄の通、軍人としての生活を續けて行かねばなりませんが、現在の私は何うやら軍人としての生活と物を書いたり發表したりする事とを餘り牴觸させないで行けさうでありますから、その點は何うか御安心下さい。軍人としての私と作家たらんとする私とは、二重生活を營む譯ですが、然しそれは鷗外氏と森閣下とが並行して行つたやうに、誰に對しても邪しくしないやうに思ひます。

誠に意餘つて筆の及ばない手紙になりまして、羞ぢ入る次第でありますが、此の辿々しい文句を我慢してお讀み下さることを祈り、且つ無禮な仕打もお許し下さる事を信じます。

杉村藤三

富井啓吉樣。

追伸　尚甚だ失禮ではありますが、貴下の許諾をまだ得ないにも拘はらず、私は私の處女作とも云ふべき「灰色の檻」と題する一篇の拙稿を小包でお送りいたしました。どうぞ此一篇丈でもお讀み下さい。たど〳〵しい習作ですが、貴下に觀て頂くのを望外の光榮として居ります。

此の手紙を讀んだ時、啓吉は可なり深い感銘を受けずには居られなかつた。彼は軍人の生活に就ては時々考へて居た。道で軍隊に逢ふ時その先頭に何等の苦悶もないやうに胸を反らしながら活歩して居る若い將校などの姿を見ると、彼等の心の裡もその外貌と同じやうに、傲然と反り返つて居られるのだらうかと、疑つて見ずには居られなかつた。無論、軍人の多くは健全な忠君愛國の思想から、その職責の價値を信じ、その位置に充分滿足して居るのだらうとは思つたが、然し感受性の豐かな何ちらかと云へば内面的な、精神的な仕事に適當して居る青年が誤つて陸軍士官になつた場合は何うだらうと思つた。少しも内面的な精神的な生活の伴はない、機械的な生活が彼に對して何れ程苦痛であるか分らないだらうと思つた。人間から出來る丈個人的の意志を、取り去つて機械的に訓練して行く仕事、それを來る日も、來る日も來る月も來る月も、來る年も來る年も、繰り返して行くのは、可なり堪らない事だらうと思つた。それでも中學を出た後に、士官學校に入つたものは、自分が充分意識して生活の選擇をやつたのだから、自分の素質に對する誤算も割合に少いだらうと思はれるが、少年時代に自分以外の意志に依つて、幼年學校に入れられた者が、成長するに從つて、自分の性質なり氣分なりが、軍隊生活とは、到底妥協し難いことを見出すのは、可なり重大な事柄に違ひないと思つて居た。彼は多くの將校の中には、さうした人も可なり數多く居るに違ないと思つた。文學者や藝術家のやうな感受性を持つた者が、誤つて軍隊生活に入つて居ることは、可なり堪らないことに違ないと思つて居た。所が、此の手紙を差出した將校は、彼が抽象的に蔭ながら同情して居た丁度その典型の人だつたのだ。指揮刀を採りながら、號令をかけながら、自分の生活の内面的な寂寞さを感ずる丁度その人だつたのだ。そして、その空虚を充たすために創作をしたいと志して居るのだ。何等精神的な分子のない生活に對する補充として、創作をやらうと云ふのである。二十歳前後の青年が、ふとした文學

熱に刺激せられて創作をやらうなどゝ云ふのとは、丸切り事柄が違つて居ると思つた。啓吉は直ぐ返事を書かずには居られなかつた。

「貴下のやうな方が軍隊には必ず居るだらうと思つて居た」と、啓吉は自分が書いた返事の手紙の中の文句通に實際考へて居たのである。手紙の文句も割合に條理が立つて居る、いやに新しがる所もなければ、堅くるしい所もない、それで軍人として特異な題材を持つて居る。或は、いゝ物を寄越すかも知れないぞと、啓吉は別封で出したと云ふ原稿の着くのが心待に待たれた。

原稿は間もなく屆いた。いかにも軍人らしい整然たる小包にしてあつた。差出人の所に、杉村中尉と書いてあるのが、啓吉には少し變に思はれた。が、軍人として官名を書く癖が付いて居るのだと思つた。彼は直ぐ小包を開いて見た。夫はインキの滲じむやうな薄い粗末な原稿紙に、ペンを使つて丹念に書いてある可なりの長篇であつた。彼は最初に枚數を見た。それは百二十枚を優に越えて居た。忙しい軍隊生活の暇を盜んで、根氣よく書き上げたものに違なかつた。彼は、枚數に對して最初の敬意を拂はずには居られなかつた。彼は作家として、二年近く書續けて居たが、彼の一番長い作品も、やつと六十枚を越えて居るに過ぎなかつた。彼は自分自身に引き比べて、何等發表の當もないのに拘はらず根氣よく書き上げた努力を、感心せずには居られなかつた。「灰色の檻」と云ふのが、その小說の題であつた。そして「ある中尉の手記」と、註が施してあつた。最初から日記體に書かれて居た。最初の一句は「春は近づいた」。と云ふのであつた。啓吉は一寸苦笑した。彼が歐洲戰爭に題材を取つたある小說も矢張り「春は近づいた。」と云ふ書き出しであつた。それから、日記體に事件を運んで行く手法が、彼の處女作の「ある作家の手記」と、全く同じであつた。啓吉は「おや〳〵」と思つた。そして露骨に露はれて居る自分の作品に對する模倣を、苦笑せずには居られなかつた。が、讀んで行くに從つて、さうした形式の模倣などは、眼中から消え去つたほど、可なり素破らしい題材と實感とが、彼の眼下に展開されて

行くのだつた。

啓吉は、自分が今迄經驗して來た生活とは、全く違つた生活の特異な事象に引きづられて、その讀みづらい原稿を貪るやうに讀み進んだ。

それは、文學好きな青年士官の僞らざる告白であつた。最初に、軍隊生活に對する不滿が、强い實感で以つて、語られて居た。毎日小隊の先登に立つて、練兵場を馳驅せねばならぬ烈しい勞働――それは名目こそ違へ、形式こそ違へ何處から何處迄他の勞働者と全く同じやうに、肉體上の勞働であることが、烈しい言葉で語られて居た。さうした烈しい全く肉體的な勞働の爲に人間の精神的分子が、段々萎びて來て、烈しい酒と肉慾と丈が、唯一の刺激になつて居る青年士官達の生活が、拙いけれども而も力强い描寫でマザ〳〵と浮び出されて居た。それでも、陸軍大學へでも入學して將校としての進路を、グン〳〵切り開いて行く者はまだよかつた。隊附將校として、小鬢に白髮の生える迄、練兵場の土に塗みれて居なければならぬ彼等の大部分の運命や、それに對する不滿や呪咀も可なり力强く書かれてあつた。陸軍大學に入學する人を見送りに行つた主人公の氣持が、嫉妬から自棄的な絶望に墮ちて行く所なども、可なり深い感銘を啓吉に與へずには居なかつた。特命檢閲に來た陸軍大將の靴を命令的に脫がさゝれる時の主人公の火のやうな反抗の心持や、軟文學を愛好すると云ふ理由から、他の將校達から不當に侮辱される光景や、機動演習が濟んだ日の祝宴會場から、一週間も肉慾に飢えて居た多くの士官達が、田舍のガタ馬車に分乘して歡聲を揚げながら、遊廓のある海岸町を指して、馬を急がせる光景などは、今の文壇の作品には見馴れない面白い光景だつた。無論、全體としての出來榮は、文壇の水準迄は達して居なかつた。が、局外者から窺はれない軍隊生活の諸相や、その諸相を裏付けて居る作者の實感は可なり得がたいものだつた。それは啓吉のやうな小說家が、逆さになつても手に入らないやうな題材を、實際その境地を踏んで來なければ得られないやうな實感で一杯だつた。

啓吉が、可なり感激した手紙を出したのは無論だつた。彼は、その作品を賞め上げることを少しも邪しいとは思はなかつた。そして、最後に、若し發表が望みならば、自分の手で雜誌に紹介する事などは、自分の現在の位置から云つて

トテも不可能であるから、Bと云ふ關西の新聞で、小説の募集をして居るのを幸ひ、應募して見ては何うかと云ひ添へてやつた。そして、應募をするに就ての大體の規約などを知らしてやつた。

間もなく、杉村中尉の返事は來た。それは可なり感謝に充ちたものであつた。そして、何時の間にか啓吉を先生扱ひにしてあつた。「之からは大に勉强して、先生の弟子として先生の名を耻しめぬやうないゝ物を書きたい」と、書いてあつた。啓吉は、杉村中尉が、自分の弟子として、いゝ傑作を書かうが書くまいが、それが自分に取つて何になるだらうかと思つて、少しくすぐつたい感じがしたが、それでもそんなに惡い氣持はしなかつた。手紙のおしまひに、B新聞の懸賞小説に應募する爲、規約に添ふやうに書き直すから。原稿を送り返して與れと云つてあつた。啓吉は、一篇の中で改削すべき所などに、自分の意見を可なり丁寧に書いて、返送した。

すると、一週間ばかり經つて、又杉村中尉から一封の小包が屆いた。啓吉は書き直した原稿にしては、餘り早いなと思ひながら、開けて見た。所がそれは全く別な原稿だつた。前と同じやうに薄つぺらな粗末な紙に小さい字でゴテ〳〵と丹念に書き綴られて居た。題は「衞戍病院の一夜」と云ふのであつた。啓吉は、その時ある雜誌から頼まれた原稿がうまく書けないので、焦々して居た。もとより、その以外の事は何も手に付かなかつた。彼は、杉村中尉の二度目の原稿を見た時、最初の原稿に對するやうな感激は少しも殘つて居なかつた。自分の焦々して居る時に、他人の原稿を讀むと云ふやうな、可なり神經を使ふ仕事を、課さうとする相手の呑氣さが、少し不愉快に思はれずに居なかつた。ペンで書いた百枚の原稿を讀むことは、可なり精神的な勞力を要する仕事だつた。もう少し此方の生活をも考へて與れてもいいと思つた。さうむやみに、此方の好意に、倚りかゝられては堪らないと思つた。彼は、杉村中尉の第二番目の原稿を讀まうと云ふ氣は、仲々起つて來なかつた。

それから、又々二週間ばかり經つた頃だらう。彼は、杉村中尉から、第三番目の小包を受取つた。それは、最初の原稿「灰色の檻」を、新聞の懸賞小説の規約に添ふやうに、小さく三十回にも別けたものであつた。前よりは三十枚も增加して、殆ど百五十枚に近かつた。二十日足らずの中に、而も烈しい軍隊生活の合間合間に、百五十枚の長篇を書き直

したその男の軍人らしい根氣よさに、感心せずには居られなかつた。が、彼はその原稿を讀む氣には何うしてもならなかつた、活字になつて居るのならば兎も角、判り難いペン字でゴテ〳〵と書かれて居る原稿を讀む氣には、何うしてもならなかつた。が、杉村中尉の添へ狀には、もう一度先生に訂して頂いた上、浄書すると書いてあつた。啓吉は、その熱心と根氣とに感心しながらも、何うしても讀む氣にはなれなかつた。啓吉は、その頃も自分自身、原稿の書けない日が尙續いて居た。自分の原稿さへ書けないで、苦しんで居るのだ、他人の原稿などに、介意つて居られるものか、と啓吉は自分自身で、辯解しながら、杉村中尉の二つの原稿を机の上に、放り離したまゝ、何時が來ても讀まうとはしなかつた。

一月ばかりの間、中尉からは何とも云つて來なかつた。その中にB新聞の懸賞應募のメ切が段々近づいて來て居た。啓吉は、中尉がもう一度浄書するのに、間に合ふやうに送り返してやらなければいけないと、心の内では時々責められながら、題材の知れ切つて居る小說を、たゞ以前よりは、よく描けて居るか何うかと云ふ問題のために、讀んで見る程の興味は何うしても起らなかつた。その中に、月が代つて三月になつたある日だつた。啓吉は、杉村中尉から何番目かの手紙を受取つた。彼は、原稿を見て居ない自分の怠慢を責められるのやうに思はれて、その手紙を見るのが、何となく氣が咎めた。が、手紙には思ひがけなく、中尉が近々上京すると云ふ事が書いてあつた。何でも、三月の二十日頃に一週間ばかりの休暇を得て上京する。その節は參上して、色々文學上の御高見を承りたいと書いてあつた。意外にも、原稿に就ては何とも書いてなかつた。が、三月の三十日が、應募のメ切期日である以上、上京する前に、是非とも浄書しなければならないのだから、啓吉が至急一讀した上で、何とか意見を附して返送してやる事が當然必要であるに違なかつた。が、その手紙を受取つた後も、何うしても中尉の原稿を、讀む氣にはなれなかつた。自分の原稿を書いて居る中には、その苦しさに取紛れて他人の原稿の事などは、丸切り忘れてしまつて居た。それかと云つて、原稿を書いてしまつたゞは、急に悒々としてしまつて、友人の家を訪問したり活動寫眞を見に行つたり、呑氣に遊び歩く癖が付いて居た。從つて、他人の百五十枚に近い原稿を見るなどゝ云ふ時間は、彼の生活の中には、仲々見出せなかつた。その裡に、段

段三月の二十日が、近づいて來た。それでも、中尉の原稿を見る氣がしなかつた。彼は仕様事なしに、自分の怠慢を辯護する口實を考へ出した。中尉が愈々上京したら、かう云はう「何うせ之から書き直しても、文章などと云ふものは、急によくなるものでもないのだから、此儘お出しになつたら如何です」さう云つて、いゝ加減に誤間化してしまへと思つて居た。段々、中尉の來る日が近づいて來た。彼は未知な人と逢ふことは、如何なる場合にも氣が、進まなかつた。交際の下手な風采の揚らない啓吉は、未知の人と逢つてよい感銘を與へる事に就いては、少しも自信がなかつた。が、文學好きな青年士官と、話をすると云ふことに就て、彼は多少の興味を感ぜずには居られなかつた。軍隊生活を「灰色の檻」と呼んで、その眞相を描いて居るからには、烈しい反抗兒であるに違いない。軍人らしく背の高い、色の淺黒い快活な、その上文藝的な氣品（レファインメント）を持つた感じのいゝ青年士官に違ないと思つた。彼は、さうした青年士官と交誼を結ぶ快さをも、思はぬでもなかつた。が、兎に角逢ふ前に書き直された「灰色の檻」も、後から送つて來た「衛戍病院の一夜」の方も一通りは目を透して置かねばならない。それでないと、逢つた時に話の緒も、付かなくなると思つた。がさうは思つたものの、讀む興味は、少しも湧かなかつた。何うせ、愈々東京へ來たならば、尋ねて來る前に何とか通知を寄こすに違ない。その通知を見てから、讀み始めても遲くはないと、啓吉は其處迄高を括つてしまつて居た。約束の二十日が到頭來た。が。中尉からは、何とも云つて來なかつた。二十一日にも、二十二日にも中尉は來なかつた。が、何だか毎日やつて來たさうな氣がして仕様がなかつた。二つの原稿を少しも讀んで居ないのに、中尉と逢ふ事は可なり氣が引けた。が、中尉が東京に來たと云ふ報知か、或はそれに類似した刺激でもなければ、何うしても讀む氣はしなかつた。彼は、窮策として、若し中尉が訪ねて來たならば、最初の一回は居留守を使つて、二回目に尋ねて來る迄に、原稿を讀まうかと思つて居た。尤も、最初自分の居ない留守に、一度訪問して呉れゝば一番好都合だと思つた。さうすれば是が非でも原稿を讀む氣に、なるだらうと考へたりした。兎に角、その二三日は、中尉の訪問と云ふ事が啓吉の頭の一隅に、いちりかゆいやうな小さい不安を湛へさせた。こんな事に拘泥して居るのは馬鹿らしいとは思つたが。

それは、三月の二十三日の午後であつた。啓吉は、玄關の次ぎの間で、遊びに來て居た近所の女の兒をからかひながら、たわいもない冗談を云つて居た。中尉が、訪問して來ると云ふ事などは、全く念頭から離れて居た。ふと、玄關で案内を乞ふ人の聲がした。いつもは、取次には妻か、でなければ、女中が出る事に定つて居るのだが、その日に限つて啓吉は、氣輕に立上つた。襖を開けると直ぐ、玄關に立つて居る男と顔を見合はさなければならなかつた。その見知らぬ男は、色の黒い背の低い小男だつた。最初啓吉はその男が、一體何んな種類の人間か、丸切り見當が付かなかつた。啓吉を見ると。その男は最敬禮に近いやうな丁寧なお辭儀をした。

「私が杉村です」と、その男は濁つたやうな聲で切口上を述べた。

「之が杉村中尉か」と、啓吉はその男の風體を見直した。その時に、啓吉の胸に抑へ切れない侮蔑の感情が、ムク／＼と湧いて來るのを感じた。何と云ふ貧弱な男だらうと思つた。彼が、心の裡に描いて居たあの「長身赭面な、何となく洗煉(レファイン)された反抗的な、快活な杉村中尉」とは、似ても似つかない男だつた。如何にも、田舍の軍人でもが、着さうな茶色がゝつた銘仙の飛白の揃を着て居た。而かも、その飛白の柄の年齢に相應しくない大きさが、此の男に一段と田舍くさい無様(オークワードネス)を與へて居た。然かも、その威嚴と云ふ分子が、少しもない先の尖(とが)つた黒い顔の裡に、鈍い尖を放つて居る土鼠のやうな二つの眼が、此の男から最後の軍人らしさを奪つて居た。啓吉は、自分自身、自分の風采の醜くさを知つて居たから、他人のさうした缺點を侮蔑する氣には仲々ならなかつたが、此の杉村中尉丈は啓吉に取つても例外だつた。侮蔑を感ずると共に、啓吉は可なり深い失望を感じた。が、それと同時にその男から少しも人格的の威壓を感じなかつた事は、却つて啓吉の心を氣安くした。かうした人に對してなら、原稿を讀まなかつた云ひ譯などは幾何でも云へると思つた。啓吉は可なりの幻滅とそれから得た、ある安易さを以て、杉村中尉を二階の書齋に案内した。

中尉は、啓吉の勸めた蒲團をさへ、仲々敷かなかつた。そして、啓吉に對して、上官に對するやうな敬意を示して、二

三度續けて様にお辭儀をした。「初てお目にかゝります。此度は、先生に大變な御迷惑をかけてまして、何とも御禮の申様もありません。杉村のやうな少しも天分のないものを。快く御指導下さるさうで、感謝の言葉もありません。又つまらない杉村の作品を、色々御批評下さつて、お忙しい中を何うも有難うムいました」と、煮え切らないやう含み聲で、喋べり續けた。自分の事を、杉村々々と三人稱のやうに呼ぶのが、啓吉には異様に耳に付いた。啓吉が、豫期して居たやうな軍人らしい男らしさの代りに、猫のやうな柔順さがあり。啓吉の豫期して居たやうな、男らしい反抗的な、態度の代りに、いかにも「灰色の檻」の中で育つた動物か、何かに見るやうな、いぢけた慇懃さがあつた。啓吉は、さうした意味に於て、此の男に幻滅を感じたと共に、話して行く裡に、段々此男に人間的な弱さを認めずには居られなかつた。又啓吉に對して、軍隊で云へば、聯隊長か旅團長にでも、逢つて居るやうに、丁寧な敬語を使つて居る事に依つて――それが、表面の形式ばかりでは、なさそうに思はれる事に依つて、何時の間にか此の男に、ある程度の好意を持たずには居られなくなつた。啓吉は、餘程前から考へて居たことを、尤もらしい口調で云つた。

「灰色の檻」の書き直された方を、讀んで見ましたが、あれを今更淨書して見た所で、急に表現の點が、よく直ると云ふ譯でもないでしよう。貴君の感覺や、物の見方が、變らない以上、いくら書き直しても、いゝ文章が出來ると云ふ譯ではありますまい。それに、〆切は此の三十日ですから、今から淨書する暇なんて、とてもないでしよう。あの儘でお出しになつても貴君の作品の價値は、むしろ題材の方にあるのだから、可なり當選の見込はあるだらうと思ふのです」と、啓吉は云つた。啓吉は、その時も尚「灰色の檻」の作品としての價値丈は。認めずには居られなかつた。實際淨書するとしないに拘はらず、當選の見込は、相當にある事を信じて居たのであつた。が、杉村中尉は啓吉の勸誘に、何となく氣が進まないやうな顏をした。啓吉は、一寸不快だつた。彼は、受取つた時以來、手にした事のない原稿を、机の上の雜誌の堆高い塊の中から漸く探し當てゝ、一度も讀んだ事のない頁を、めくりながら、

「おや、やつぱり一度淨書をしたいお考ですか。それにしても、時日があるでしようか」と、云つて見た。

「いや、さう云ふ譯でもないのですが」と、中尉は一寸口籠りながら「實は、先生の御盡力で何か雜誌の方へ廻して項

きたいのですが」と、杉村中尉は、その細い眼をショボ〳〵させながら云つた。

「雜誌の方!」と云つたが、啓吉は當惑もすれば、相手の文壇に對する無識さを、はがゆくも思つた。創作を載せる雜誌が、激増した結果、雜誌の創作欄では、編輯者が常に烈しい爭ひをして居た。何の雜誌も、何の雜誌も、大家、流行作家、新進作家と、さうした一人でも讀者を惹き付けさうな、名前ばかりを尊重して居た。無名作家のものであれば何んないゝ物に對しても、一指も觸れなかつた。而も、短篇なら兎も角百五十枚の長篇を、冗談にでも載せて見やうと云ふ雜誌はあるまいと思はれた。或は、啓吉自身が、懸命の力を振つて推薦狀を書くと同時に、編輯者に哀願し強請したならば、或は萬一にも掲載せられぬ事もないかも知れなかつた。が、杉村中尉の「灰色の檻」は題材こそ、目新しく珍奇で、實感こそ豐富であるが、作品としては、さう傑作を以て、推すべきものではないと思はれた。啓吉が、必死になつて推薦する程の傑作でないばかりでなく、文壇的の水準から云つては、佳作の部類にも、は入らなかつた。無論、題材の點から云つて、他の作品に比して異色のあるものだとは思つたが。

啓吉は、言葉を次いだ。

「雜誌の方と、仰つしやつても、文壇の事情から云つて、無名作家の物を、オイソレと載せるやうな雜誌は、決してありませんよ。尤も、貴君の作品が、非常な傑作で、又それを推薦する人が、死んだ夏目漱石とか、現在でも逍遙花袋藤村と云つたやうな大家なれば、或は相手にする雜誌もあるでしようが、僕は御存知の通り、文壇に出たばかりですし、貴君の作品だつて題材の點は、兎も角、表現の點ぢや、まだ文壇の水準迄行つて居るか何うか、分らない位ですからね」と、云つた。

すると、杉村中尉は、恐縮してシホ〳〵となつてしまつた。啓吉は、少し氣の毒に思つた。

「他人の推薦で、雜誌に載せるなどよりも、此際懸賞に應募して、自分の實力を試めして見る方が、いゝぢやありませんか。貴方だつて、さう焦せるには當らないぢやないですか」

さう云ふと、中尉は益々恐縮してしまつて、顏を赤くして差し俯きながら、

「先生のお言葉はよく分つて居ます。表現の點で「杉村はまだ少しも完成して居ないのに拘はらず、雜誌に載せやうと云ふのは、甚だ僭越な事でありますが、………」と、云ひ澱んだ。

「雜誌と云ふ事は、絕對にお考へになつては駄目です。まづ絕對に不可能ですね」と、啓吉は、相手の分らなさが、少し癪に觸つて斷然と云ひ切つた。

「いや、それは分つて居ます。杉村の名などでは、絕對に不可能な事は判り切つたことであります。が、先生のお名前で、何うにか出來ないでしようか………」

「と、云ふと僕と合作と云ふやうな名義で出すのですか、そんな事は此頃全く流行りませんからなア………」と、啓吉は相手の無理解さ加減が、癪にも觸れば可笑しくも思はれた。それにしても、此男の目的は一體何だらう。啓吉は、善意に解釋した、非常た文學狂で、自分の書いたものが、何んな形式にしろ活字になれば、それで滿足するのかも知れないと思つた。

「兎に角、活字になれば、それでいゝと云ふのですか。」

「ハア、さうです。全く先生のお名前で、何うにでもしていたゞきたいのです」

「それならば、僕の名前で出して、此の題材は、杉村中尉から貰つたと云ふ斷り書をして置けばそれでもいゝのですか」

「さうお願が、出來ればそれで結構なのです」と、杉村中尉は如何にも滿足したやうな顏をした。他人から題材を得ること、それは創作家生活をするものに取つて、珍らしい事ではなかつた。つい、その十日間ばかり前にも、啓吉が、二三年來綿々として可なり佳作を續けて書いて居る文壇のある大家に會つて「何うしてそんなに材料がつゞくのです」と訊くとその人は事も無げに「やつぱり、氣を付けて人から材料を貰つて歩くのさ」と、云つた事を思ひ出した。またAと云ふ一躍して大家になつた新進作家が、ある作品のおしまひに、材料を友人から貰つたことを斷つてあつた。單なる題材と云ふ事は、創作の僅かなる骨子である。それを如何に觀じ如何に表現するかゞ、作家の大切な仕事だつた。その意味で、杉村中尉の「灰色の檻」を、啓吉が書き直して、その中の物の見方や感じ方を、全く自分のものにする以上、

それを自分の作品として發表する事は、少しも邪しい事ではないと思つた。殊に、その材料の出處を堂々と斷つてある以上は。「灰色の檻」を、單なる材料として見る時、それは可なりい丶材料に違なかつた。それを、啓吉が力を入れて、書き直せば、可なりの佳作に書き直す自信は、充分あつたのだ。啓吉の心はさうした計畫の方へ、可なり活々と動かされて居た。

「貴君が、さう云ふお考へなら、僕が書直せば買手は幾何でもあります。が、貴君はそれで滿足して居られますか」

「い丶え結構であります。杉村が充分腕を磨いた後に、杉村の名で發表出來れば、滿足です。その時には、此の材料なども書き直す事が出來ますから」と、杉村中尉は如何にも、尤らしい事を云つた。

「さうです、全くさうです。Aと云ふ有名な小説家も、それと同じ事を云つた事があります。貴君が、それでよければさう云ふ事にして僕は差支へありません。が、今差し迫つては、約束した雜誌がありません。實は、六月に百枚ばかりの長篇を、二つばかり頼まれて居ますから、その中の一に此の材料を使ひませう。それでい丶でしような」と、啓吉は杉村中尉の快諾を豫期しながら、此の話に結びを付ける積で、さう云つた。すると、意外にも、杉村中尉は當惑したやうに返事をしなかつた。啓吉は、一寸意外に思つた。

「七月ぢやいけないと云ふのですか」

「いや、さう云ふ譯ではありませんが、實は――」と、杉村中尉は手を突かんばかりに畏まりながら「初て、お目にかかつた先生にこんな事を、申し上げては、賤しい奴と、お考へになるかも知れませんが、實はその、あの原稿で――」さう云ひながら、堪らないやうに顏を俯けてしまつた。軍人らしい威厳などは、少しもなかつた。たゞ、其處に、みじめな金に困つて居さうな小男が蹲つて居るのであつた。啓吉は皆まで聞かぬでもよかつた。

「それでは、失禮ですが、少しでも原稿料が欲しいと仰つしやるのですか――」

中尉は、默つたまゝ何とも答へなかつた。が、啓吉の問を肯定して居ることは、その表情が明かに語つて居た。

それは、啓吉に取つて可なり烈しい幻滅であつた。此の男の風采に就て感じた以上の幻滅であつた。無論、原稿を見て與れと云ふ依頼の中に、良ければ雜誌に世話をして與れと云ふ要求、少しでも金錢上の價値をも、附與して與れと云ふ要求があることは、普通の事である。啓吉は、それを賤しい事だとも、下品な事だとも、思つた事はない。當然な堂堂たる要求だと思つて居る。が、それは、普通の文學靑年の場合だ。單なる文學志願者の場合だ。あゝ云ふ堂々たる宣言に似た手紙を寄越し、歴とした定職のある軍人が、多くの人達の云ひ方に從へば、名譽ある帝國の軍人が、全くの無名作家に過ぎない自分の原稿に依つて、それほど性急に、金を欲して居やうとは思はなかつた。軍人生活の空虛を充たす爲の創作」「少しでも內面的生活を造りたい爲の創作」さう云ふ立派な、啓吉の同感と敬意とを充分に貪つた立派な標榜は、皆僞だつたのかと啓吉は思つた。無論、啓吉も他人の材料を借用した以上、それに對する謝禮をする積であつた。が、杉村中尉が、その原稿を、經濟上の交換價値があるものと、それほど必然に適確に信じて居やうとは思はなかつた。

啓吉は、自分の顏の色が、不快な表情を示すのを何うとも防ぎかねた。すると、杉村中尉は、あはれみを乞ふやうなみじめな表情をしながら、

「お恥しい事ですが、今度父が入院しましたので、思ひがけない費用が入りましたのと、實は昨年結婚しました妻を、ズーツと東京に置いてありましたのを、今度高田へ連れて行つて、家庭を持ちますに就いて、色々費用が入りますので、初てお目にかゝつた先生にかうした事を申上けるのは、眞に心苦しい次第ですが――」と、噛ぶやくやうに云つた。

其處には陸軍中尉もなかつた。「內面的生活を送る爲に創作」せんとする文學靑年もなかつた。たゞ、無性に金を欲しがつて居る、いかにも人間らしい、一人の男が居る丈である。軍人の威嚴も、男子の意地も投げ出して、弱い然しながら正直な、貧乏に苦しんで居る一人の人間が居る丈であつた。啓吉は、中尉の凡てをうち開けた哀請に、動かされずには居なかつた。

「いや、さう云ふ事情ならば、發表は六月にしても、原稿料は前借に出來ないことはありません。が、一體幾何位お入用なのです。」

無論、材料として使はれる「灰色の檻」が幾何位の價があるものか、啓吉にも分らなかつた。新聞に應募する爲に書き延してはあるものゝ、眞論文を掛けば百枚にも、ならないかも知れない。然も書き直すとしても、作家としての啓吉の勢力は、自分の題材を使ふ場合と、餘り違ふとも思はれなかつた。その上書き直して見て、いゝものが出來るか、何うか、それさへ見當が付かなかつた。

「三拾圓位では如何です」と、相手が默つて居るので、啓吉は自分で問ふて見た。それは、啓吉が自分の材料を使ひさへすれば、當然自分の收入に、は入るべきものであつた。中尉は、俯いたまゝ默つて居た。が、明かにその金額に對して、不滿を示して居た。啓吉は、相手のある圖々しさを、感ぜずには居られなかつた。百枚二百枚の力作を書いて、それが一文にもならないで、踠いて居る無名作家は幾人でもあるのに、それを單に材料に使ふと云ふ丈で、三拾圓と云ふ金を、作つてやらうと云ふことは、相手に對する充分な、好意でなければならなかつた。さうした好意を、基礎とした金額に、不滿を示すとは可なりさもしい事であるやうに、啓吉には思はれた。すると、中尉はおづ〳〵顏を上げながら

「實は五拾圓是非必要なのでムいますが、…………」と、自分で切り出して來た。「かう云ふ事は、申上げられた義理ではないのですが、…………」と、中尉は心の中の羞恥と苦惱とを、顏に表しながら、低い聲で云つた。

さうした中尉の態度にあるずるさ──それは、嚴格な階級制度に順應して居る中に、何時の間にか、癖になつたやうなずるさ──を感ぜずには居られなかつたが、然し困つて居る事に僞りはないやうに思はれた。たゞ貧乏なのだ。中尉としての定まつた收入で、生活して居る以上、親が入院して金が入つた上に、妻君を連れて行つて新しい家庭を作るのには、金に窮するのは、當然だつた。縱令兩方の口實が全く僞にしても、金が入ること丈は飽く迄も、本當であるに違ないのだ。

八拾枚書く所を、百枚かけば貳拾圓位の增額は、啓吉から云へば大した事ではなかつた。

「さう云ふ事なら。五拾圓と云ふ事にして置きませう。一つ編輯者と掛合つて見ませう。確に、うまく行くか何うかは分りませんが、大抵大丈夫だらうと思ひます」と、啓吉は到頭相手の要求を入れ、

てしまつた。

相手の本當の要求が、分つてしまふと、文藝上の話などは、馬鹿らしくてする氣にはなれなかつた。中尉は、やつと金策の當が付いた事に、安心したのだらう。

「あの「衞戍病院の一夜」の方は、讀んで下さつたでせうか。あの方は、如何がムいませう。」

「あれも相當なものですな」と、啓吉は讀んで居るやうに誤間化したまゝ默つてしまつた。うか〳〵その作品の話をして居ると、又材料として賣込まれさうな氣がせぬでもなかつた。

座が白けてしまつた。もう夕方に近かつた。中尉は何か、クド〳〵辭儀をしながら歸りかけた。啓吉は、中尉に對して、好意と云ふやうなものは、最初の會見で全く無くしてしまつて居たが、併し二三通も感激のある文通をしたものが初て顏を會しながら、荒んだ話をしたばかりで、別れるのは何となく嫌だつた。相手が、自分を先生〳〵と持ち上げる事に對しても、晩飯位は一緒に喰つてもいゝと思つた。

「何うです。夕飯を一緒に喰べませう」と、啓吉は中尉と一緒に自分の家を出た。本郷の通へ出る坂道を上りながら、啓吉はふとある疑惑に囚れた。何んなに貧乏して居ても軍人なら、こんなに卑賤しい態度に出るだらうかと思つた。彼は「武士は喰はねど高楊子」などゝ云ふ格言や、清廉な多くの名將達の事を考へた。そして、本當に軍人なら、かう迄卑しい態度に出るだらうかと考へた。尤もらしい文學者の同情を惹くやうな態度を標榜しながら、逢ふと直ぐ金の事を云ひ出す、然も自分の原稿などは、何うなつてもいゝのだ。たゞ金だけが大切なのだ。而も、その金に對しても焦せり拔いて居る今迄、啓吉が考へて居た軍人とは、似ても似つかない人間だつた。彼は、軍人の名を騙る詐欺師とまで、相手を心の内では、疑つて見た。が、正銘の軍人に違ないことは、陸軍合同官舍宛で、二三度文通した事が、確な證據だつた。

中尉は、坂を上りながら、軍人の生活難を話して居た。宛も自分の態度の、辯解をするやうに。

「中尉や大尉などの生活は、それは〳〵、みぢめなものです。かうした連中の妻君の衣物などは一枚だつて、自分の家にはありやしません。皆質屋に行つて居るのです。今度の西部利亞出兵だつて、大抵は貧乏で困つて居る士官達をやつ

たのです。出征となると、仕度料が百圓以上下りる上に、給料が二倍になるのです。中尉なら百四十圓です。今度は、一師團ばかりでなく、各師團から一大隊位宛取つて困つ居る連中をやつたものだから、田中閣下の評判は素破らしいものです」と、云つた。啓吉は、困つて居るのは普通の中產階級ばかりぢやないんだと思つた。實際、內職とか副業とかゞ絕對に出來ない軍人、然かも經濟觀念に乏しい軍人が、一番困るのは當り前の事だと思つた。彼は、ある程度迄杉村中尉の先刻の態度を、是認せずには居られなかつた。原稿を書いて、それを幾何かでも、金にしやうと云ふことは、杉村中尉が彼の貧乏から、やつと思ひ付いた唯一の內職の方法かも、知れないと思つた。

啓吉は、やがて中尉を、本鄉のある牛肉店へ案內した。一緒に向ひ合つて坐つてからは、啓吉も可なり打ち解けた。中尉は頻りに幼年學校時代の話だとか、朝鮮守備の話などをした。酒は餘り飮まなかつた。話して居ると、段々中尉の正直で單純ないゝ性質が感ぜられた。彼の圖々しさや、卑しさなどは、皆貧乏がさせて居るのだと、思はずには居られなかつた。

やがて、勘定の段になると、中尉は自分で勘定することを主張した。啓吉は、此場合中尉から、少しでも義理を感ずるのは嫌だつた。それに、五拾圓の金に困つて居るものが、五圓の勘定を拂ひたがることに、啓吉は變な矛盾を感ぜずには居られなつた、それにも、拘はらず中尉は勘定書を取りに行かうとする女中を追ひかけながら五圓札を手渡さうとした。啓吉も、仕方なしに中尉を追ひかけて、彼の手を摑へた。その手は堅いいかにも骨々しい手だつた。

中尉に五拾圓と云ふ金を調達しようと、約束した啓吉も、一旦中尉と別れて見ると、もう一度、中尉に約束した事を落着いて考へ直して見なければならなかつた。彼は、その頃漸く貧乏な生活から、脫却しかけたばかりであつたが、金錢の點に就いては、可なり几帳面な態度を取つて居た。彼は、何時も自分の收入以下で、健全に暮して行くやうに心掛けて居た。從つて、人から金を借りるやうな事は、絕對に避けやうと思つて居た。雜誌社から、受け取る原稿料などでさ

へ、一度だつて前借をした事はなかつた。原稿と引替に請求することさへしなかつた。成る可くさうした事で、雑誌社に對して義理を感ずる事を避けたいと思つて居たのだ。それだのに、自分自身の爲ならば、兎も角、初て會つたばかりの他人の爲に、原稿料の前借をする、而かも三四ケ月も後の、原稿料の前借をすることなどは、自分の平生の生活態度を餘りに傷けるやうに思はれて來た。さう云ふ金錢の點に於ては、作家としての威嚴を、編輯者に面して、今迄傷けたことのない自分が、他人のため頭を低げて、前借を賴みに行くと云ふことは、如何にも心苦しいやうに思はれて來た。が、自分の現在の僅かな貯へから、五拾圓と云ふ大金を——それは、啓吉のやうな全く無資産な者に取つては、大金に相違なかつた——立替へると云ふことは、到底忍びがたいことであつた。その上、よく考へて見ると、自分自身、少しもさうした事件の實感を持つて居ないに拘はらず、他人の題材を取り扱ふと云ふことは、可なり至難な、危かしい仕事に相違なかつた。その上、他人の題材を使ふとすれば、純な創作的感興は、全く殺がれるのに定まつて居る。さう思つて來ると、啓吉は中尉のみぢめな哀請にうか／＼と引つ懸つて、五拾圓の調達を約束した事が、いゝ加減後悔せられ始めた。彼は色々考へて見た揚句、漸く一つの善後策を考へ出した。兎も角、中尉の題材を使ふか使はないかは、別問題として、自分の貯へから、二拾圓位中尉に渡さう。そして愈々あの題材を使つた場合に、後の參拾圓を贈ることにする。もし、使はない場合は、中尉の窮狀に對する同情金として惠んだものと、諦めやうと、思ひ定めた。が、貳拾圓と云ふ纒つた金を、漠然と出すことは、可なり惜しいやうに思はれた。他人の題材を使ふ事に、嫌氣がさすに從つて、多分は使ひさうにもない材料に對して、貳拾圓と云ふ前金を、拂ふと云ふことが、可なり苦痛になつて來た。

約束の二十六日が來た。朝の裡、啓吉は近所の郵便局迄、用達しに行つて歸ると、妻は待ち構へて居たやうに、
「先刻、此の間の中尉が來ましたよ。居ないと云ふと、家へ上つて待ちたさうでしたが、此方で默つて居ると、ぢや三十分ばかり散歩して來ると云つ歸てりました」と云つた。

啓吉は、中尉が朝早くから押しかけて來る熱心さに少し辟易したが、何うせ一度は會はなければならぬから、早く會

つて片を付けたいと思つた。間もなく中尉はやつて來た。前の日と寸分違はない服裝をして居た。二階の書齋へ通すと其日も又上官に對するやうな慇懃さで、厄介をかける斷りを長々と述べ立てた。が、啓吉は前に會つた時程、中尉の誠實さを信ずる譯には行かなかつた。

「實は――」と、啓吉は直ぐ要談に移つた。「此間は、雜誌社の方から五拾圓丈、融通して上げるやうに云つて置きましたが、僕は今迄雜誌社からなどは、決して前借しない方針でやつて來て居るので、それを自分に事變でもが、起つた場合ならば兎も角、かうした場合に、その方針を變へると云ふことは、一寸心苦しいのです、それも來月の分とか云ふのなら兎も角、四ケ月も後の分をですからね――」と、言葉を斷つた。

「御尤もです」と、杉村中尉は赤面して顏を上げなかつた。

「それに、よく考へて見ると、あの題材がうまく使へるか何うかも分らないのです。また使へるにしても、他人の題材を使ふと云ふ事は、餘り愉快な事ぢやないですからな、」

「重々御尤もです」と、云つた中尉の顏は、前よりも一層生氣を失つたやうに蒼かつた。

「それで、實は色々考へたのですが、此際私が自分の金を、二十圓丈貴君にお立替しませう。それで、將來あなたの題材を使ふやうな場合があれば、五十圓の中の殘りを差し上げる事にしませう」啓吉は、さう云ひながらも、二十圓が心の裡では可なり惜しく思はれた。

啓吉は、相手が啓吉の好意ある申出を欣びさうなものだと思つて居た。所が、意外にも中尉は、二十圓の聲を聞いてからも、その暗い顏の色を、少しも明るくはしなかつた。ぢつと、疊を見詰めたまゝ默つて居る。啓吉は、少しくいらいらして來た。

「二十圓では、不足だとお考へになるのですか」

啓吉に、さう云はれると、中尉は愈々肩を閉めて、恐縮の樣を現しながら、それでも顏には、明に二十圓と云ふ金額に對する不滿を現して居た。啓吉は、自分自身不快になつて、默つてしまつた。相手の品物を値切つて居るのぢやある

まいし、此方が與ふべき恩惠の金額を申渡して居るのだ、それに不服を云はれて堪るものかと、啓吉は思つた。

暫くすると、中尉はモジ〳〵身體を動したかと思ふと、兩手を正しく、疊の上に突きながら、

「こんな事を、初めてお目にかゝつた先生に申し上げられる義理ではないのでありますが、杉村は今三十圓の金が是非必要なので御座います。明後日妻を連れて、彼方へ出立します旅費が少し足らないやうな仕末でありまして。先生から立替へて戴くと云ふことは、如何にも心苦しいことで御座いますが、如何で御座いませう、只今二十圓戴いて殘りの三十圓は題材を使つて下さつた時に、戴くと云ふ代りに、只今下さる二十圓を三十圓にして下さる譯には行きませんでしようか、その代り殘りの二十圓は、戴かなくつても宜しう御座いますから」と云つた。

心苦しいとか、義理ではないかと云ひながら、何と云ふ厚顏な卑しい言葉だらうと啓吉は思つた。丸切り賣買の時の懸引だ。後は何うでもいゝ、少しでも現金の高を增さうと云ふ、卑しい心根が啓吉には、もう辛抱が出來なかつた。充分に價値がある品物を、啓吉が安く踏み倒して買つてでも居るやうに、中尉が思つてでも居るらしいのが、啓吉には一番不愉快だつた。軍人と云ふ名前から、當然連想される淸廉とか、品位と云ふものは、此中尉には破片さへないやうに、啓吉には思はれた。啓吉は、此の男に對する、最後の好意も、最後の憐憫も、凡てそれに類したものを悉く失つてしまつた。二十圓は愚か、一文だつて出して堪るものかと思つた。若し、中尉が自分の原稿を少しでも、金錢上の價値があるとでも、自惚れて居るなら、自分で賣口を探して見るがいゝ。啓吉が、二十圓と云ふ申出――それは一種の惠與だと啓吉は思つて居る――が不足ならば、自分で金錢に替へて見るがいゝと思つた。啓吉の心は、相手に對する、火の付きさうな嫌惡で一杯であつた。或は此の人には、三十圓と云ふ金が、必死的に必要なるのかも知れなかつた。が、軍人としての否人間としての最後の品位をまで捨てゝ、圖々しくさもしく是が非でも物にしようと云ふ態度を、啓吉は惡まずには居られなかつた。二十圓の金額を、三十圓に增す能力位、啓吉にない事もなかつた。が、かうなると啓吉は、一文だつてかうした人間にやるのは惜しいと思つた。從つて、啓吉は、相手が啓吉の顏色を見て。

「それでは、二十圓でも宜しう御座います」と、折れて出るのを恐れた。啓吉は咄嗟に一策を考へ付いた。

「貴君が、二十圓で足らないとすると、僕にはそれ以上立替へて上げる餘力はありません。それでは、如何でしよう、一つ雜誌社の方へ御自身で、行らつしたら、如何です。貴君の材料を僕が書くと云ふ事なども、餘り面白い事ではありませんし、僕が紹介狀を書きますから、一つ御自身で交渉に行かれたら如何です」

啓吉は、自分の紹介狀一つで、無名作家の小說を、オイソレと載せる雜誌がない事を知つて居たし又紹介するとなれば、初て會つた此中尉の作品などよりも、ずつと以前から頼まれて居る友人のNやKの作品を、紹介する方が、啓吉の身に取つて、當然でもあれば、意義もあると思つたが、今の場合此中尉と絕緣するのには、之より外に良藥はないと思つた。そして、文壇的に幾何でも先輩であるものが、無名作家を紹介することは、少しも邪しい事ではないし、中尉の人格に就ては、悉く幻滅を感じて居た啓吉にも、彼の作品に對する評價は變つて居る譯はなかつた。啓吉は成るべく尤もらしい口調で云つた。

「私として、貴君に金錢上のお世話をすることは、出來ませんが、然し作品を紹介すると云ふことは、私の義務だと思ひますから、その義務丈は欣んで果しますから」さう云ひながら、啓吉は心の裡で、自分の紹介狀を、效驗の適確な護符か何かのやうに思ひながら、雜誌社を馳け廻る中尉の姿を考へると、一寸氣の毒だと思ひながらも、皮肉な苦笑が浮み出さうとするのを禁じかねた。

中尉は、啓吉が紹介狀を書くと云ふのを聞くと、ホタ〳〵欣びながら、

「さうして下されば、一つ雜誌社へ行つて見ませう」と、前とは見違へるやうに元氣になり出した。啓吉はそれでも可なり丁寧な、力を入れた紹介狀を書いた。若し自分の紹介狀の效德で、この原稿が少しでも金に換へられることは、啓吉に取つても不愉快な事ではなかつた。此男に對して、そのさもしさを憫みこそすれ、その困つて居る事が、自分の力で救はれるのを見る事は、決して不愉快な事ではないと思つた。啓吉は、成る可く成功の可能性の多いと思はれる、雜誌社を心の中で選んだ。それは、YとSと云ふ雜誌社であつた。Yの方では、餘程前から啓吉の原稿を、欲しがつて居た。啓吉は、その事情を利用した。そして、作品の價値を推賞した後に、若し之を載せて與れゝば、次號には必ず自

分が書くと迄書き添へた。Sの雜誌社は、その社長が、親分肌で可なり義侠心のある人だと云ふことを、啓吉は友人から度々聞いて居た。兩方への紹介狀とも、啓吉は可なり力を入れた。中尉の作品文を賞めることは、少しも邪しくはなかつた。彼は、二つの手紙を、中尉に讀ませた上、別々の封筒に入れた。啓吉は、此の紹介狀を書くと云ふことを、中尉との交渉の結末にしたいと思つた。之に依つて、全く荒み切つてしまつた中尉との關係を、打切りにしたいと思つた彼は厄介拂ひをするやうな、氣持になつて、その紹介狀を中尉の手に渡した。中尉は平身低頭と云つたやうな樣子をして、それを受取ると、元氣よく出て行つた。

戸外は、烈しい風が吹いて、砂塵が渦を卷いて街を走つて居た。啓吉は、此のヒドい砂塵を浴びながら、啓吉の紹介狀を唯一の賴みの綱として、雜誌社から、雜誌社と馳け廻つて居る中尉の姿を考へると、可なり氣の毒にも思はれた。

●

啓吉は、中尉に彼自身自分の原稿が實際の場合に、一文の値も有して居ない事を、思ひ知らしてやりたいと思つて居たから、中尉の原稿が、情なく挑ねつけられる事を一寸望んで居た。が、さうした場合には、必ず啓吉の處へ再び何とか云つて來るに違ないと思ふと、やつぱり原稿が運よく幾何かの金に換へられることを、望まずには居られなかつた。兎に角、中尉との交渉があの紹介狀に依つて、サッパリと無くなつてしまへば、此の上はないと思つて居た。が、それは啓吉の單なる希望であつて、無名作家の百五十枚の長篇を、Y社でもSでも對手にしやうとは、何うしても思はれなかつた何だか、再び中尉がうるさくやつて來さうな氣がして、その晩啓吉は友人の家に遊びに行つて、夜遲く迄自分の家へ歸る氣がしなかつた。が、十二時近く歸つて來ると、幸ひ中尉は來て居なかつた。見事に挑ね付けられたので、自分で諦めたのかも知れないと思ひながらも、中尉の事が何となく氣にかゝつた。

翌日も啓吉は、意識的ではなかつたが、何となく中尉を避けるやうな心持で、「中川の所へ行くから」と、妻に云ひ捨てたまゝ家をブラリと出た。そして。本郷に居る友人の中川を誘つて、淺草へ活動を見に行つたのを手初に夜の十一時頃迄、所々をぶらついて廻つた。歸つて見ると、果して留守に中尉が來て居た。

「まあ! 貴君が出ると直ぐ中尉が來ましたよ。そして、私が中川さんの所へ行つたと云ふと、中川さんのお宅の番地を教へて呉れと云つて、直ぐ本郷へ行きましたが、又直ぐ歸つて來て「中川さんの所には見えません」と、私に當てつけるやうに云ふのですよ。それから來るわ〳〵三十分間隔位に來るのですよ。何でも、明日四時の汽車で歸るので、急いでお目にかゝりたいと云ふのですよ。つい先刻迄内の戸外をウロ〳〵して居たのですが、十時頃になつて漸う諦めて歸りましたよ。あんなうるさい人、初てだわ」と、妻は可なり輕蔑したやうに、眉をひそめた。啓吉も、それを聞くと中尉に對する不快が、又ムラ〳〵と心の中に湧いた。何と云ふ執拗な人たちらうと思つた。何の權利があつて、自分をこんなに迄惱ますのだらうかと思つた。妻は思ひ出したやうに、

「あの、さう〳〵歸る時に、明朝早く伺ふから、是非お目にかゝれるやうに、頼んで行きましたよ。又來るのかと思ふと、ほんとうにうるさくなる」と云つた。

「仕方がない。明日會つて、キツパリ片を付けやう」と啓吉は云つた。彼は、焦々したやうな不快さを感じた。二つの雜誌が失敗したから、もう二つ三つ紹介狀を書いて呉れと云ふに違ない、よし! 断然と拒絶してやるぞと啓吉は思つた。

翌くる朝、まだ啓吉が、寢て居る中に、中尉がやつて來た。啓吉は、不精無精に起きねばならなかつた。

「昨日は留守で失禮しました」と、云つたが、啓吉は心の裡ではそれと全く反對の事を考へて居た。中尉は、雜誌社から撥ね付けられたにしては、元氣であつた。何時ものやうに、ペコ〳〵頭を下げてから、

「實は、一昨日紹介狀を戴きましてから、直ぐY社へ伺ひましたが、Y社では今貰つた原稿が澤山あるので、トテもお望に添ふ事は出來ないと云つて、断られましたが、それから直ぐ、S社へ行きまして、社長の山岡さんにお目にかゝりました。山岡さんが仰つしやるのには、富井さんはSへも書いて下さつた事もあり、あの方の御紹介なら、載せて上げてもいゝのですが、百五十枚の長さでは、何うにも仕方がない。それで、原稿は載せられないが、折角富井さんの紹介でもあり、貴君も困つて居られるやうだから、御入用の三十圓丈は私が立替やうと云つて下さるのです」

「それで、貴君はそれでもいゝと云つたのですか」と啓吉は聞いて見た。

「はあ、左樣で御座います」と、中尉は平伏するやうに云つた。啓吉は、心の裡で思つた。原稿と引替に金を貰ふのはそれは少しも恥しくない堂々たる事だ。が、原稿は入らない、金丈をやると云へば、それは明かな施與だ。施しだ。その施しを、少しの精神上の苦悶なくして受くるのは、それは明にもらひである。當り前の廉恥心を持つて居る人間が、おいそれと手を出すべきものでない。それだのに――それだのにと、思ふと啓吉は、又苦々しく思つたが、然し幾何云つたつて、仕方のない事だと思つた。

「それでお金を貰つたのですか」

「所がです」と、中尉は少し聲を低めながら、待つて居たと云ふやうに「山岡さんが、云はれるのには、之は決して貴君を疑ふと云ふ譯ではないが。隨分私の社へなども文壇の大家の紹介狀などを以て、作品を賣りに來る人があり、それをウツカリ買つた後で、紹介狀の筆者に聞き合はして見ると、夢にも知らないと云はれて駭いたことなども、二三度あるので、貴君を疑ふと云ふ譯ではないが、念のために富井さんから電話で、一言さう云つて下さつたら、直ぐお金を速達で富井さんに宛お送りすると、かう仰つしやるのです。色々お世話をかけた上に、まだこんな事をお願するのは誠に心苦しい次第ですが、杉村の窮狀をお察し下さつて、何うか電話で一言……」と、云ひながら、中尉は低頭した。もう嫌惡も侮蔑もなかつた。むしろ、さうした態度があはれに思はれた。啓吉が詐欺師ではないかと、ふと疑つたやうに、S社の山岡さんも疑つたのだ、さうした人間として（軍人としてなどは問題でない）忍び難い疑を受けながら、たつた三十圓の金に狂奔して居る。さう思ふと、啓吉は苦々しいやうな情ないやうなあはれみを、此の男に一杯投げかけずには居られなかつた。それにしても、まだ面識もない山岡氏に、電話で一言――と云つてもそれは啓吉に、いくらか屈辱を感ずる哀請――をやらなければならぬかと思ふと、啓吉はつくづく嫌になつてしまつた。もう、何等の好意を持つて居ない此男のため、片足を擧げるのさへ氣が進まなかつた。暫く考へてから、

「それでは、かうしませう。山岡さんに宛もう一度手紙を書きませう。それを貴君が持つて行つて下さい。貴君が向ふへ行つた頃を見計つて電話をかけませう」

さう云つて、啓吉はS社の社長宛に二度目の手紙を書いた。啓吉に對する好意――それは可なり大きな好意に違なかつた――を感謝した後に、若し此男に金を渡すのが不安なれば、社員の幸田さんに持つて來させて呉れと頼んだ。そして自分の手紙だと云ふ事を示す爲に捺印迄した。幸田と云ふS社の社員は、啓吉の家へも二三度遊びに來たことのある文學青年だつた。かうして書けば、多分先方の信用を得るだらうと思つた。

啓吉は、中尉が又第二番目の手紙を以て、青山の端にあるS社へと、出掛けて行くのを見送つた後に、一時間位經つてから、いや／＼ながら、自動電話を掛けに行つた。何邊S社の番號を呼んでも、お話中なので、おしまひにはむしやくしやして、受話器を荒々しく掛けたまゝ外へ出た。啓吉は電話をかけてやらないことから、少しも心を咎められはしなかつた。

その日、彼は正午頃から外出して、夜九時頃に歸つて來た。すると、彼を出迎へた妻は、

「また來ましたよ。大變悄氣て居たやうでした。今日歸るのを延ばして、明日にする。是非歸る前に、お目にかゝりたいと云つて居ましたよ。明日九時頃に來るつて」と云つた。

啓吉はそれを聞くと、「やれ／＼」と思つた。「S社も到頭駄目だつたのだな」と思つた。それなれば、明日彼の所へ來るのが、明に金策の爲めであると分つた。啓吉は執念深い怨靈にでも憑かれたやうな氣がした。よし！ 明日來て見ろ！ 今迄辛抱して居た事を、すつかり云つてやる。頭から、一分の容捨もなしに云つてやる。さう思ひながら、自分一人で可なり興奮した。

あくる日、中尉は初て來た時以來、寸分違はぬ服裝であつた。昨日から見ると、明に悄氣て居た。

「山岡さんと、お會ひになりましたか」と、啓吉が口を切つた。

「それがです。」と、中尉は、眼をシヨボ／＼させながら「あれから參りました所が、山岡さんはお留守なのです。奥さんのお話に依れば、御病氣で御親類の宅へ行かれたとの事で、已むを得ませんから手紙は奥さんにお預けして來まし

た。私も今日午後四時是非とも立たなければならないのに、山岡さんの方が、うまく行かないので當惑して居るので御座います」と、云つた。困り抜いて居る事は、啓吉にも分つた。が、啓吉は、相手に對する同情などは、微塵もなかつた。彼は詰問するやうな口調で云つた。

「それで一體、何うすると云ふのです」

「實は、今になつてこんな事を、申された譯ではありませんが、先生が初、二十圓お出し下さると云つたのを、三十圓にして下さるやうに申したのは、私の全くの心得違であります。それで、甚だ相濟みませんが——」と、云ひ澱んだ中尉の云ふことは、餘り分り過ぎて居たが、啓吉はその卑しい哀請の言葉を、中尉に云はせて見たかつた。

「それで、何うしようと仰つしやるのです」

「實は、その——最初——最初先生が仰つた通に——二十圓丈お立替下さる事に——」

道に終迄は、云ひ切らなかつた。相手の困り抜いて居ることは、段々明らさまになつて來た。が、その困り抜いて居ると云ふ事から釀される相手の卑しさに、對する啓吉の反感は、炎のやうに燃え狂つた。啓吉の好意ある申出を、拒絶して少しでもよい金を取らうとして狂奔した後、それが徒勞に歸すると、又のめのめと自分が拒否した相手の好意に縋らうとする。何と云ふに圖々しさ卑しさであらうと、啓吉は思つた。

「それは、斷然お斷りします。私の最初の申出は、貴君の拒絶で當然消滅して居ます。それに、今では貴君の題材を使ふと云ふ氣は、全くなくなりました」今迄表面丈は好意を繕つて居た啓吉も、かうなつては冷然と云ひ切らずには居られなかつた。

啓吉の、冷めたい拒絶を聞くと、中尉はサッと色を變へながら、俯つむいた。頬の邊の筋肉を、變な風にひきつらせながら、ベソを搔きさうな顏をした。啓吉は、もう何んな悲しさうな顏をしようと相手になるものかと思つた。

中尉は、俯むいたまゝ默つて居た。啓吉も、冷然として默つて居た。が、默つて居ては、限がないと思つた。啓吉は、より一層冷めたい口調で云つた。

「もう、貴君も今度は、思切つてお歸りになつては如何です。山岡さんが病氣でありながら、親類の家へ行つたと云ふのも、嫌ぢやありませんか。貴君に面會を避けて居るのではないでしようか。それに向ふで原稿を載せるから、原稿料を出すと云ふのなら、それは正堂々の事です、原稿は入らない、たゞ金を呉れるとならば、それはたゞ他人から金を貰ふことになりますよ。無論、困つて居る文學青年、文學の爲に全力を盡くしても原稿が賣れないで、困つて居る文學青年ならば、そんな金を貰つても一向差支へないと思ひますが、貴君のやうな一定の職業を持つて居る方が、而も軍人と云つたやうな職業にある方が、そんな金を貰つて、それで恥でないでしようか」啓吉は自分の云つて居ることは、誰が聞いても、寸分も間違ひのない正論だと信じた。彼は喋べつて居る中に益々雄辯になつた。

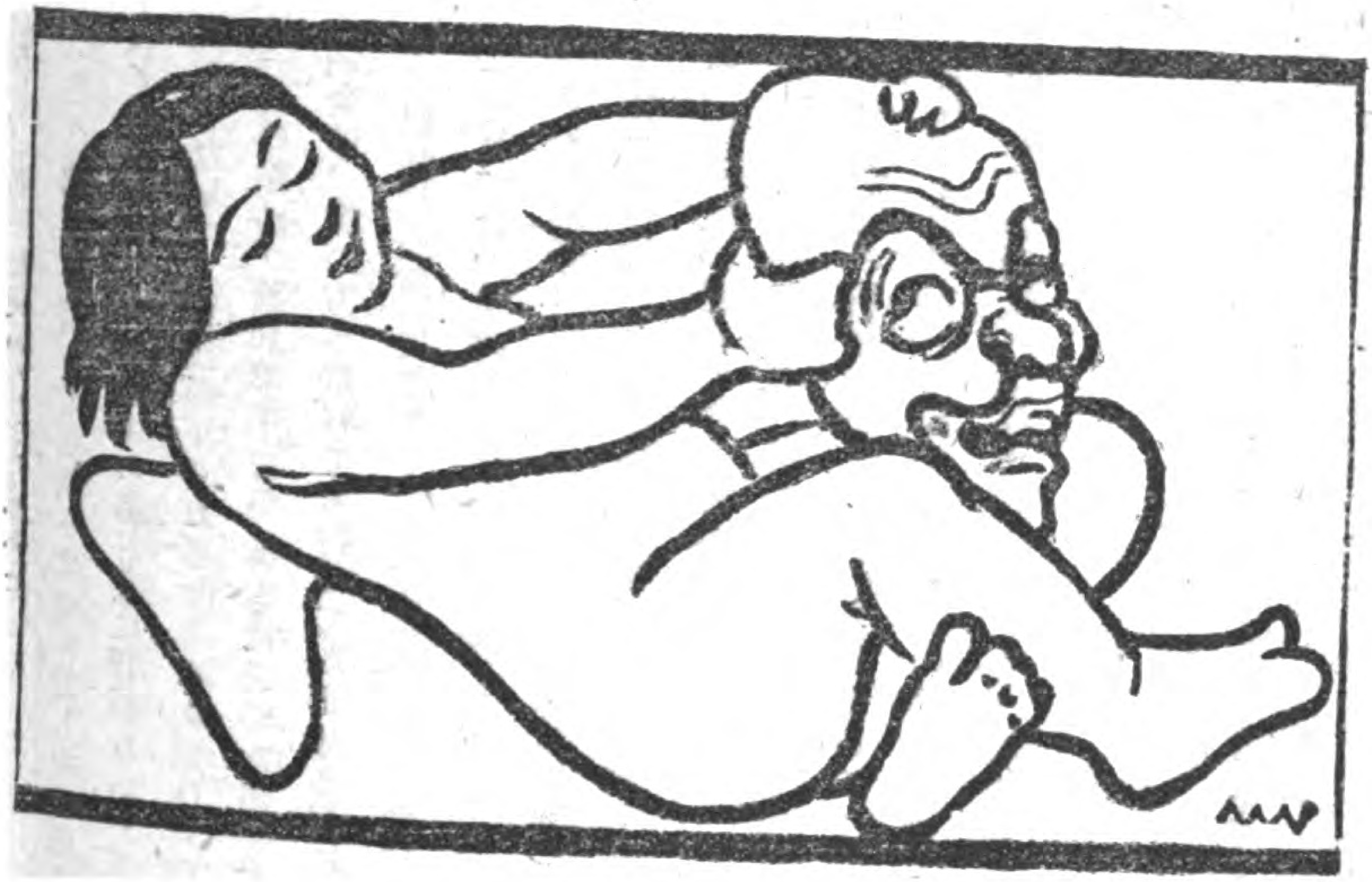
「それに、最初から私は、貴君に對して創作上の御指導をするとは云ひました。貴君が、ワザ／＼僕に頼んで來られた以上、僕の當然の義務だと思つて居るのです。が、かうした金錢上のお世話をする資格は、僕には少しくないのです。僕は、貧乏な小說家で、自分の生活丈が、やつとのです。それに、僕は貴君に對して、金錢上のお世話をすると云ふやうな義務は、少しもないと思ふのです。貴君が、お困りになつて居ることは、僕も認めます。が、幾何お困りになつても、貴君の書いた物で金を得やうと云ふのは、貴君のお考違ぢやないでしようか。それに、彼地へ歸る旅費だと、仰つしやいますが、さう云ふ費用は、最初からちやんと用意をして置かるべきものぢやないのでしようか。それにお金にお困りになつた所で、奥さんの御親類もある事だし、見ず知らずの山岡さんなどから、貰はれる前に、さうした方面で、算談なされるのが、當然ぢやないかと思ひますが」

啓吉は、思ふて居る事を、スツカリ云つたので、氣が晴々した。彼は、自分の云つたことに、少しでも間違があらうとは信じなかつた。中尉は、本當に泣き出すのではないかと思ふ程、みじめな顏をした。啓吉は涙ぐんで居はしないかと思ひながら、時々相手の細い眼を注意して見た。

啓吉は、中尉の今迄の行動から押して、斷末魔にはもつとお芝居的な、大仰な哀願的な態度に出るのではないかと怖れた。そんな事になつちや、堪らないと思つた。一分！二分！五分！十分、中尉は默つて居た。が、到頭諦めた

やうに、両手を突いたかと思ふと、
「色々御面倒をかけて相濟みませんでした。何うか、今回の事で杉村をお見捨てないやうに、杉村も今後は一層創作の方を勉强しまして、先生の御好意に背かないやうなものになりたいと思ひますから、創作の點では何うか、之でお懲りにならないで、御指導下されるやうにお願ひいたします」
「その點は、承知です」と、啓吉は云つたが、今になつて創作の話所の騒ぎではないと思つた。
「金は、隊の方へ電報でも打つて取寄せる事にします」さう云ひながら、中尉はスゴ〳〵と立ち上つた。道に引込み丈は、悪びれた所はなかつた。啓吉は、餘り云ひ過ぎた後の寥しさを感じながら、中尉を玄關に送り出した。
「それでは、失禮します」と、悄然と歩み去る中尉の背後の格子を、閉めた時、啓吉は本當に厄拂ひをしたやうな、暢々とした氣持と、ある淋びしさとを同時に味つた。
貧窮！ 皆、それの爲す罪だ。さうも思つて見た。が、あの人がやつた凡ての行動に對して、貧窮！ たゞそれ丈で云ひ譯が立つだらうかと思ひ返した。
中尉が、啓吉の家を出て二時間ばかりして、S社の山岡さんからの速達が來た。それには、杉村中尉にやつて呉れと云ふ、十圓の爲替券が三枚、封入してあつた。直ぐ新宿停車場へ行けば、手渡す事が出來たかも知れなかつた。が、啓吉は――杉村中尉に對して、最後の好意を無くして居た啓吉は、さう云ふ氣は起らなかつた。啓吉は、その爲替券を封入して山岡氏へ速達で送り返した。啓吉はさうした方を正しいと、今でも思つてゐる。(完)

――大正八年七月六日――



三浦製絲場主（社會劇四幕）

久米正雄

人物

三浦淳吉。製絲場主。三十歳。
同　淳藏。その父。五十七歳。
同　ふさ。その母。五十一歳。
同　とし。その從妹。二十歳。
關口ひで。女工、後に淳吉妻。二十一歳。
國分寅治。職工長。三十三歳。
太田俊三。醫師。三十一歳。
町田源吾
中村五郎
三瓶清治
岩田勇作　｝職工。三十歳前後。
安藤權平。老職工。權爺と呼ばる。七十歳位。
同　つな。その娘。寡婦。二十七歳。
田村さだ。看護婦。二十三四歳。

給仕。女中。及び職工女工貧民等の群。

時代

現代。事件の經過は約半ヶ年に亘る。

場所

東北地方の一小都會。

第一幕

職工長國分寅治の家。

街外れの暗く小さい長屋の内部。左手には街道に面する入り口があつて、そこを入ると三尺ばかりの土間、その土間から更に一段高い疊敷へ上るやうになつてゐる。正面及び右手は、煤けたる壁又は障子にて適宜に限られ、貧しき家具、厨具の類が室の隅々に置いてある。而してそれらの不整頓によつて、此處が男の獨身居たる事が歴然と示されてゐる。

右手の隅に床を敷いて、女工關口ひでが病臥してゐる。彼女は製絲工場の機械に觸れ、過つて片腕を傷けたが、不完全な療治と身體の衰弱のため、餘病を併發して苦しんでゐたのを、一時、寅治が引取つて介抱してゐるのである。

幕があいた時、寅治は遲い晝食を濟まして、片づけかけた食臺の上に肘をつき乍ら、呆然と物を考へてゐる。一と所にぢつと見据へられた彼の眼は、それ自身「反抗」であるかのやうな輝きを見せてゐるが、蒼く削げた兩頰は、ストライキの首領として闘して來た、此の數日間の心勞を物語つて餘りある。彼は身動きもしない。

暫くして近くを汽車の響が此沈默の中に傳はる。……………

ひで。（ふと顔を上げて四邊を見廻す。亂してゐる病髮の間から、彼女の黙つた顔の輪廓と、頼りなげなる眼が見える。さうして明瞭な聲音で呼びかける。）國分さん。

國分。（默想から我に歸つて）何だい。

ひで。一體わたしはどうなるんでせうねえ。

國分。又初めたね。いゝから心配はよしなよ。おまへの身の上に就てなら、ちつとも案じる事はありやしない。

ひで。だつて、いつ迄もかうして御厄介になつちやゐられませんわ。

國分。それあ俺だつて行末永くおまへの世話をする譯にも行くまいけれど、決して此儘おつぽり出すやうな事はしやしないよ。ちやんと會社の方から、おまへの怪我に對する正當な療治金と、たとひその片腕が無くなつても、末々一人で暮して行けるだけの、賠償金は充分取つてやるから、それまで安心してゐるがいゝよ。

ひで。でももうあの時三十圓出して貰つたんですもの、社長さんの方ではもう出して呉れないでせう。

國分。おまへもよつぽど馬鹿だなあ。その三十圓ばかりの金が何になつたと云ふんだい。もう疾うの昔費ひ盡してゐるぢやないか。そしてその三十圓の療治金で、おまへの傷がもう癒つたとでも云ふのなら兎も角、まださうして益々悪くなる一方ぢやないか。一體全體三十圓ばかりの端た金で、折れた片腕がもとへ戻るものかどうか、烏渡でも考へて見るがいゝんだ。

ひで。でも私の不注意で、器械に引かゝつたのですから。……………………

國分。さうおまへ一人であきらめて、默つて死んで了ひたいと云ふのなら、それもかまひはしないけれども、かう云ふ事はおまへ一人の問題ぢやないんだぜ。吾々職工全體、勞働者一般の問題なんだ。もし此儘おまへが泣寢入りにでもなつて見るがいゝ、それこそ會社側に取つちや、此上もなく都合のいゝ先例を殘す事になるんだ。さうして之から其先例を楯に、どんな事を云ひ出すか解つたものぢやないんだ。片腕は愚か片足をもぎ取られても、三十や四十の端た金で、どん／＼突つ離される事にでもなつたら、どうして俺たちが安心して、何千ボルトとかの電力で調べ革が行つ

たり來たりする中を、平氣で歩るいてゐられるものか。——それあおまへの怪我だつておまへの不注意には違いないが、三十圓ばかりの包み金で其儘放つて置くなんて、どこの國のどんな工場にもありやしないよ。

ひで。でも私のために皆さんが、仕事を休んでまで懸合つて下さるなんて、あんまり皆さんに濟みませんわ。

國分。おまへも解らない女だなあ。先刻から俺が云つてゐる通り、このストライキは決しておまへ一人の爲ぢやないんだよ。みんな職工自身のためにやつてゐるんだ。それあ成程此の直接の原因は、おまへのその怪我に在る。併し俺たちのストライキの目的は、何もおまへ一人のために會社から金を取つたり、又萬一俺たちが負傷した時の先例を造つて置くばかりぢやないんだ。實はこれを機會にして戰爭以來一度も上げた事の無い工賃を、三割増にしやうと企てゝゐるんだよ。

ひで。ではようございますが、わたしの爲ばかりだとすると、ほんとうに心苦しくて、…………

國分。實は俺たちはもう疾うから機會を狙つてゐたんだ。長い年月の間に少しつゝ溜めて來た不平が、俺たちの體の中でうづ／＼し切つてゐたんだ。さうして其捌け口を求めに求めてゐた所へ、丁度うまくおまへの事件が持ち上つたんだ。おまへは俺たちに只機會を與へて呉れただけなんだよ。

ひで。（少し身を起して傾聽してゐる。）

國分。（興奮した調子で）職工と工場主との間柄は、底を割つて云つて見れば、恰度睨み合つてる猛獸のやうなものだ。双方が互に飛びかゝる隙はないか、乘ずる機會は無いかと狙つてゐるんだ。さうして鳥渡でも隙が見えたり、機會が出來たりすると、猛然と飛ひかゝるものなんだ。だから俺たちは一刻だつて油斷しちやゐられないんだ。さうして常に彼等に對する反抗心を鋭くして置いて、何か鳥渡でも觸れるものがあつたら、容赦なく吾々の權利を主張しなければならないんだ。

ひで。（了解したと云ふよりは、國分の興奮に對して、何とか調子を合はせねばならぬと云つたやうに點頭く。）

（一人の老いたる職工權藏、此の談話の中途頃より戸口の外に立つて、ちつと中の樣子を伺つてゐたが、此時靜に障子を開

いて入來り、かすかな會釋をして上り框に腰をかけ、國分の話を默つて聞いてゐる)。

國分。(老職工を顧み同意を求むるやうに) なあ權爺さん。俺たちは何も事を好んで、他人の爲にストライキをしてゐるんぢやないんだなあ。――かうして幾日もの賃金を犧牲にして、妻や子供に苦しい思ひをさせてゐるのも、みんな俺たち自身が可愛いゝからだ。俺だちだつてみんな人間なんだ。資本家たちと同じやうに、みんな幸福を望んでゐる人間なんだ。しかも吾々だけが工場の塵と埃を吸つて、毎日骨と身を削り乍ら、ただ得る處は額の皺を增したり、深くしたりするだけなんだから堪らないよ。――俺だちだつて彼等と同じ人間なんだ。たつたそれだけの事が、誰れにでも解り切つてゐる事が、彼等にはほんとに解つてゐないんだ。俺たちはせめてそれだけでも、彼等に思ひ知らしてやりたいんだ。

ひで。(少し起き直つて) ほんとにさうですわねえ。

權爺。(答へず。ぢつと貢治を見るのみ。)

國分。なあ權爺さん。おまへさんの其齢になつたら、俺たちのやるこんなストライキなぞは、下らねえ騷ぎに見えるかも知れねえ。併し俺たちは決して、一時の血氣にばかり驅られて、こんな事をしてゐるんぢやねえんだぜ。それやあの社長が憎いと云ふ、小さな感情問題もあるには違ひねえ。が併し少くとも俺だけは、根本的にもつと大きな事を考へてゐるんだ。俺はこれを將來の人間のため、未來の勞働者のために犧牲になつてやつてる積りなんだ。どうせ此の資本家と勞働者の階級戰は、もう百年や二百年はどうしても續くだらう。俺たちの生きてゐる今日までに、もう何百年と云ふ鬪ひを續けて來て、此の先まだ何年かゝるか解りはしないんだ。だから假令、俺たちが今力がなくて敗れたにした所で、今からうやつて置いた事は決して無駄にはならない。將來きつと俺たちの死屍を乘り越え、俺たちの大切に養ひ育てゝ置かうとする、此の尊い職工の團結心と反抗心を以て、きつと資本主と對抗する人が出て來るに相違ないんだ。さうしたら世界は平等に利益を配分するやうになる。世間は口先ばかりでなく、心から勞働の神聖を認めて、勞働者をほんとうに尊敬するやうになる。俺はさう云ふ世界を夢に見てゐるのだ。吾々が大手を振つて街道を歩ける

やうな時代を心に描いてゐるのだ。あゝ、さうなつたらどうだらう。もう町裏の汚ない溝地に、煤けた長屋も見當らなくなるし、夕方場末を歩いても、母の貧しい乳を求めて泣く赤子の聲も聞えなくなるんだ。あゝさうなつたら…………ほんとにさうなつたら、どんなに俺たちは嬉しいだらう。なあ權爺さん。

權爺。（低く）あゝさうなつたら………ほんとにさうなつたらなあ！（立上つてそろ〳〵と出て行く。そして戶口の處でちつと振り返り）だが、さうなるまで俺は生きちやゐられねえだらう。（出て行く。）

國分。（默つて見送つてゐたが、）一體何をしに來たんだらう。

ひで。（感動して身を起さうとして、傷める片腕に觸れ、痛さに思はず聲を立てる。）あいたたた………。

國分。おや、どうしたんだ。………

ひで。いゝえ、今起きやうとしてつい………あいたたた。

國分。（傍に寄つて）起き上らうとなんぞするからいけないんだ。さあ、ぢつとして寢ておいで。（と抱くやうにして横にする。）

ひで。ほんとうにいろ〳〵済みません。お話を伺つてゐる中に氣が立つて、思はず起き上らうとなんぞしたものですから。………

國分。さあ、かうして靜かにしてゐなくちやあ、――もうこれでいゝかい。（と床につける。）

ひで。えゝ、難有うございます。

國分。（抱へてゐた手を離さうとして、再びぢつとひでの顔を見る。突然激しい情熱に驅られて、急に熱い接吻を與へやうとする。）

ひで。あら、いけません。（男の顔を拂ひのけやうとする。此努力が又た腕の傷の痛みを引起す。叫ぶ）あいたた………。

國分。（手を離しておど〳〵し乍ら。）どうした。どうしたんだ。

ひで。いえ、何でもないんです。けれども、いけません。さうお寄んなすつちやいけません。（と咽び泣く。）ほんとにけないぢやありませんか。

國分。俺が惡かつた。勘忍してお呉れ。許してお呉れ。ほんとに俺は恥知らずだ。一時の感情に驅られて、又こんな事をするなんて、………あゝ。………

ひで。そんな事をなすつちやあ、わたし此處に居られなくなりますわ。お世話になつてゐる譯には參りませんわ。昨晩だつてあなたは、あんな事をなさるのですもの。………

國分。あゝもう昨晩の事を云ふのはよしてお呉れ。俺はどうしてあんな氣になつたか解らないんだ。――ほんとに俺は心から悔いてる。どうかおまへも惡い夢だと思つて、すつかり忘れて了つてお呉れ。

ひで。それは私も忘れたいと存じますけれど、二度とあんな事をして下すつては、御恩になつてゐる事が出來ませんわ。あなたはあんな事をなさる爲に、私を此處へ引取つて下すつたのぢやないでせう。

國分。さう云はれると俺は耻しくて、ほんとに穴へでも入りたい位だ。俺は自分の高潔な主義を實行する必要上、おまへを此處へ連れて來てゐながら、あんな汚ない事をして了ふなんて。――ほんとに許してお呉れ。おまへが許して呉れるゝ云はない中は、心苦しくて堪らないんだ。さうして俺はもう決してあんな事はしないから、安心して此處にゐてお呉れ。

ひで。わたしが許すの許さないのつて、そんな事をいつまで怒つてやしませんし、かへつて嬉しく思ふ位ですけれど。どうぞあなたも清いお心で、私を此處に置いて下さるやうにお願しますわ。私はもう別に行き處つて無いんですもの。

國分。そんなら此處にゐて呉れるのだね。

ひで。えゝ、それは私の方からお願するのですわ。

國分。それで俺も安心した。

ひで。ほんとに御世話になつてゐながら、我儘ばかり云つて濟みません。

國分。いや。そんな事は決してないよ。――けれどもねえひでちやん。おまへがかうして俺の家にゐるのも、或ひはも

う僅かな時日かも知れないよ。おまへにはまだ話さなかつたが、實は遲くも今夜中には、どつちともすべての解決がつく筈なんだ。町會議員の田中さんの口きゝで、今日の五時には此方の委員が、向うの人と會見する事になつてゐるんだが、何でも田中さんの話によると、今日東京へ行つてゐた息子が歸つて來て、内外の事情を調べて見て、此方の要求を聞きたいと云ふんだ。けれども、どうせ横松社長の息子だから、一筋繩ぢや行かないだらう。だからうまく行つたにした所で、もう一二度の折合はつけなくちやなるまいが、それにしてもおまへの事は、近い中にどうにかなるだらう。居辛くてもそれまでの辛棒だよ。

ひで。あら、又そんな事を仰有つて。――けれども私の事が早く定れば、あなたにも此上御迷惑をかけずに濟むし、私も安心致しますわ。ほんとにその息子さんとやらが、物の解つた方だとようございますねえ。

國分。さうさ。それなら少しも文句なしに、吾々の事も早速定つて了ふんだ。此方の要求には一つだつて無理はないんだからな。

ひで。矢つ張り今の社長さんのやうに、情知らずだつたらどうしませう。

國分。なあに此方からは一歩も引かないばかりさ。どんな事があつたつて、此方の要求が徹らない上は、此のストライキはやめやしない。

ひで。（暫らく沈默してゐたが決然と）ねえ國分さん。

國分。何だい。

ひで。あの、私の事なんぞはもうようございますし、皆さんも大變困つておいでのやうですから、もう會社ともいゝ加減な所で折合つて、仕事をお初めになつて下さる譯には行きませんか。

國分。又かい。馬鹿！いくら云つて聞かせても解らないのだね。いゝからおまへは默つておいでよ。

ひで。はい。

（二人暫らく沈し默て了ふ。そこへ權爺の娘のおつなが入つてくる。おつなはもう二十七八の寡婦で、見窄らしい服裝の醜

りに元氣な顔色と聲とを持つてゐる。）

つな。（外から）御免なさい。

國分。誰だい。

つな。（戸を開けて。）わたしよ。

國分。おつなさんか。まあお入んなさい。

つな。（入つて來て）今日は。――おひでちやんの今日の御加減はどう？

ひで。難有う。大へんいゝんですの。

國分。まあ腫れだけはどうやらかうやら引いたやうですが、どうせ元通りには癒りますまいよ。

つな。どうしても切らなきやいけないんでせうかねえ。

國分。さうでもないんでせうが、少し手遲れになつてるんで、實は少々心配してゐるんですよ。

つな。ほんとに萬一(ひよつと)片手が不自由にでもなつたらお困りですわねえ。

ひで。大丈夫ですわ、おつなさん。

國分。私も大丈夫とは思つてるんですが、何しろ傷が傷ですからねえ。

つな。ほんとに大切にしなくちや不可ませんわ。こちとらの命は手一本にあるんですからねえ。

國分。だから私共はかうして、ひでちやんの一生の保障になるやうな金を要求してゐるんですよ。

つな。ほんとにねえ。全くさうなくちやなりませんわ。

（間）

あの、先刻うちのお爺さんが參りませんでしたか。

國分。えゝ、來ましたよ。何か用だつたんですか。

つな。いゝえ、別に何でも御座いませんが、何かこちら樣へ參つて失禮でもしやしなかつたかと、それで私も心配して

參つたんですが。

國分。いゝえ、別に何でもありませすでしたよ。たゞ何にも云はずにふら〳〵と入つて來て、私が丁度このおひでちやんに話をしてゐたのを聞くと、何かぶつ〳〵口の中で云ひ乍ら、又ふら〳〵と出て行つて了ひました。出て行つてからもう十分位は經ちますよ。

つな。まあ、さうでしたか。——實は今日空きつ腹に御酒を頂いたんで、すつかり醉つて此方へ參つたのです。何でもストライキを止めさせるやうに云つて來るつて、大變な勢で家を出たんでしたが、ぢやあ此處でお話を伺つてゐる中に、醉が醒めて何とも云へずに歸つたのでせう。ふだんはあの通りおとなしいのですが、酒を呑むと年に似合はず氣が立つて困るんですの。

國分。あゝそれで來たんですか。それぢや何とか云へばいゝのに、ただ默つて入つて來て、又默つて行つちまつたのでどうしたのかと思つてゐましたよ。

つな。私はほんとに又何か失禮を申上げやしなかつたかと、早速お詫びに參つたんですが、それでやつと安心しました。

國分。(輕い吐息をして)ほんとにあなた方のお苦みもお察しするんですけれど、…………

つな。いゝえ。私共でも決してこちらに對して、そんな不平を申してゐるのぢやないんですけれど、親爺も酒を少々頂き過ぎましたので、ついそんな氣を起したのでございますよ。

國分。お互ひにいろ〳〵云ひ分はあるでせうが、これも他人の爲ぢやないんですから、——それにもう少しの辛棒です。明日と云はず今夜の中に、向うと協定をする筈になつてゐますから、いづれにもせよ近日中には解決がつくんです。ですからもう少しの間辛棒して下さい。もう少しこらへてゐさへすれば此方の勝利になるんです。もう少しの間です。こゝで弱身を見せちやあ、今迄の苦心が水の泡になります。だからどうかお爺さんにも、苦しいでせうがもう少し辛棒するやうに云つて下さい。お願ひします。

つな。はい。よくさう云つて宥めます。そして私共はいつ迄でも辛棒致しますが、親爺はあの通りな舊弊者ですから、

又何かと失禮な事を申しに參るかも知れませんが、どうぞ惡くお思ひにならないで下さいまし。

國分。惡く思ひなんぞ致しませんが、あんな御老人にまで心配をかけるかと思ふと、何だか濟まないやうな氣が致します。――（低く呟くやうに）併し吾々の將來を思ふと、まだ〳〵これ以上の犧牲と忍耐とが要るんです。まだ〳〵强く吾々仲間の弱音を、壓服しなければなりません。――何しろもう少しの間です。もう少しです。

（三人思ひ〳〵の無言に陷る。突然戶を開けて工場の給仕入り來る。）

給仕。（少し息を切らして）國分さん。おうちですか。

國分。うむ、ゐるよ。――何の用だ。

給仕。社長さんの言傳を云ひに來たんです。

國分。何だつて云ふんだ。

給仕。あのね。社長さんはね、今夜九時に皆さんと會ふ約束だけれど、急に思ふ仔細があつて、今すぐ此處へおいでになるから、あなたに其積りで待つてゐて下さいつて。

國分。今すぐ來るんだつて？あの社長が自分でかい？

給仕。えゝ、あの若い方の社長さんが。――

國分。社長つたらあの胡麻鹽頭一人ぢやないか。若いも古いもあるもんか。

給仕。ぢやあの今日東京から來た、息子さんの方の社長さんです。

國分。さうか。息子が向うから來るつて云ふのか。それから？

給仕。それから、なるたけ職工の重だつた人を集めて置いて呉れつて。

國分。うむ、よし〳〵。それで？

給仕。それつきりです。ぢやようございますね。（歸らうと身構へる。）

國分。鳥渡待て。向うの用向はそれで解つたが、おまへに此方の用を賴みたいんだ。歸る序でに濟まないが大町裏の町

田の所へ寄つて、すぐ來るやうに云つて異れないか。急用が出來たから直ぐ來るやうにつて。
給仕。え〻、承知しました。ぢや左樣なら。(と行きか〻る。)
國分。おい、鳥渡待つて異れ。もう一つ賴みたい事があるんだ。どうせ序でだから北町端れの中村の所へも寄つて、皆を誘ひ合して來るやうに云つて異れないか。
給仕。だつてあつちは廻り道だから厭だよ。
國分。廻り道だつて一町とないぢやないか。
給仕。(行きかけつ〻)厭だよ、厭だよ。(と急いで去る。)
國分。おい賴むよ。…………線香花火の畜生!とう〳〵行つちまひやがつた。
つな。(立上つて)國分さん。あの私でよければ中村さん所へ行つて上げませう。どうせもう御暇しやうと思つてゐたんですから、これからすぐ向うへ廻つて、皆さんに來るやうに言傳して上げますわ。(土間に下りる。)
國分。さうですか。そいつは濟みませんな。では御厄介ですがさうして下さい。お願ひしますよ。
つな。え〻お安い御用ですとも。では左樣なら。おひでちやん御大事になさいよ。
ひで。難有うございます。左樣なら。
國分。どうか異々もお爺さんに宜しく。
つな。え〻、歸つたらよく申しますわ。ぢや御免なさい。
(おつな退場する。寅治戸を閉めて戻つて來る。)
國分。さあいよ〳〵おまへの事も俺たちの事も、もう二三十分の中に決まるんだぞ。
ひで。よく行つて異れるとようでございますわねえ。わたしさつき權爺さんの事を聞いて、心で泣いてゐましたわ。
國分。甘く行きやあ何もかももう一時間と經たねえ中に解決がつくんだ。何だかさう思ふと俺は心細くなつて來た。
ひで。あら、どうしてですの。

國分。なあにさう思ふだけだよ。
ひで。向うで又何か六ケ敷い事なんぞ云ひ出しやしないでせうねえ。
國分。それあどうだか解らないが、かうなつてみると俺の今の心持は何だか氣持がいゝやうな惡いやうな、かう大きいものを待つてゐるやうな、一種妙な心持がするよ。何だか神さまがあつたら、禱りたいやうな氣がするよ。
ひで。五六日の間でしたけれど、御心配は容易ぢやありませんでしたからねえ。
國分。（妙に感傷的になつて）ひよつとするとおまへと俺とが、かうして一つ屋根の下にゐるのも、もうあと一時間とは無いかも知れないぜ。妙な緣だつたが、こんな事も忘れられない思ひ出の種となるだらう。ひでちやん。何だか少し殘り惜しいやうな氣がするぢやないか。
ひで。ほんとにねえ。私もさう思ひますわ。
國分。おや、おまへ泣いてゐるね。
ひで。（淋しく笑つて）いゝえ。
國分。さうか。ぢや明りの加減で目が光つたんだらう。まだ三時だつて云ふのに、厭に暗くなつて來やがつたからな。
（と二人は顏をそむけて、暫らく沈默に陷る。間。戸を開けて職工町田入り來る。）
町田。やあ今日は。
國分。庄八さんか。さあどうかお上んなさい。急に招んで濟まなかつたな。
町田。なあにね、丁度此方へ様子を聞きに來ようとしてゐた所だつたから、早速やつて來た譯さ。——おひでさんの工合はどうだい。
國分。うむ、今日は幾らかいゝようだ。
町田。さうかい。それあいゝね。——それはさうと社長の息子が急に此方へやつて來るつて話だつたが、——
國分。うむ、さうだ。今夜まで待ち切れないと見えるんだ。

町田。一體あやまりに來るのか、小言を云ひに來るのか。

國分。さあ、それはまるつきり解らねえんだ。が、いづれ一と談判しなくちやなるまいから、その前に此方の胆を充分に決めてかゝらうと思つて、急いで君たちを招んだのさ。

町田。うむ、それは此方の出やう一つで、今日の話はどつちにでも決まるんだから、打合せて置かなくちやなるまいが、一體他の連中はどうしたんだい。

國分。中村の所へ云つてやつたから、いづれ三瓶と岩田とを連れて來るだらう。それだけ揃へば頭株はすつかりだから、今日こそ胡麻化されねえやうにしつかりやらう。

町田。一體向うは何人來るだらう。

國分。さうさな。親爺と息子と會計と、此の三人はきつと來るだらう。

町田。息子つて奴に物が解つてゐるといゝが、會計と來ちやあ海千山千だからなあ。

國分。なあに、今度こそ瓢簞鯰は許さねえ。

（職工中村と三瓶入り來る。）

中村。やあ今日は。

三瓶。どうしたんだい、急に又、――

國分。うむ。向うからもう直ぐに此處へ來るつて云つて來たんだ。

中村。さうかい。向うから來るつて云ふのは、もう既に七分の弱味が見えてるね。ぢやあ一つうんと強く出てやらうぢやねえか。

町田。それで今どんな態度を取つたものか、皆の胆を決めときたいと思つてるんだ。岩田はどうしたい。

三瓶。すぐあとから來る筈だ。

中村。態度つて今更決める迄もないぢやねえか。此處まで來た以上一歩だつて引かれやしねえ。

三瓶。でも君、そこは向うの樣子次第で、臨機應變に少しは讓歩しなくちやあ。泣き言を云ふ譯ぢやないけれど、職工連中ももう大抵心の底では折合がつくやうに望んでゐるんだからな。

中村。だつて君、此處で鳥渡でも弱味を見せちやあ、何時迄たつたつて俺たちの要求は通らないぜ。

三瓶。併し、向うも充分折合をつけたいと云ふ氣合を見せてゐるんだから、此方で穩に出てやれあ、此際何とか收まりがつくと思ふんだ。此方で強く出れあ向うも意地だ。きつと頑固に出るに違ひないよ。どうせこんな爭ひなんてものは、もとを質せば感情づくなんだから、そこを出來るだけ忍ばなくちやあ、…………

町田。なあに向うぢや算盤づくなんだ。

中村。たとひ感情づくでも算盤づくでも、此處まで曳いて來た車は後へは曳けねえ。今更弱音を吹くのは意氣地なしだ。

三瓶。と云つて無暗に頑張るのは猶馬鹿だ。

町田。おい〳〵、二人とも下らねい云ひ合はよせよ。見つともない。

國分。（默つて此樣を見てゐるのみ。）

（職工岩田急に入り來る。）

岩田。遲くなつて濟まなかつたな。——何だかそれらしい人が向うからやつて來るやうだぜ。

町田。（戶の處へ出て見る。）うむ。さうらしいな。——所で今の問題は。

國分。（決然と）それは俺に任して異れ。

町田。それあ任せるが、どう云ふ態度を取るのだい。

國分。（力強く）勿論强硬に出るばかりさ。それでいゝだらう。

町田。（鸚鵡返しに）うむ、いゝだらう。

中村。（大きく點頭いて。）いゝとも。

岩田。（次いで點頭く。）よからう。

三瓶。（力に壓されて仕方なく點頭く。）…………。

（暫らく緊張した期待の沈默に陷る。）

町田。いよ〳〵來たやうだぜ。

（三浦淳吉、一人の子供に導れて入口に現はる。）

三浦。（導かれて來た子供に）こゝだね。どうも難有う。（と入口の戸を開け、叮嚀に帽子を脫いで）御免下さい。國分寅治さんのお宅は此處ですか。

國分。左樣でございますが、あたたは？

三浦。私は三浦です。

國分。あゝ左樣でございますか、お待ちしてゐた所でした。さあどうぞこちらへ。御覽の通り穢苦しい所ですが。――

三浦。では少々御免下さい。（と上つて適當の座につく。）

（職工らも各々適宜な位置に密接して座を占める。しばらくは不安なる動搖が見える。）

町田。あの、あなたお一人きりですか。外には誰もおいでにならないのですか。

三浦。えゝ、わだし一人きりで上りました。却つて其方がいゝと思ひましたので。（と一度ずつと職工を見渡して後、最後に寅治に向ひ、）失禮ですが、あなたが國分さんでございますか。

國分。はあ、私が國分です。以後どうぞ宜しく。（兩人强ゐて叮嚀なる禮を交す。）それからこれが町田で、（と一人々々指し紹介する）中村、三瓶、岩田と云ふ仲間です。集めて置いて與れといふお話でしたから、重だつた者だけ招んで置きました。

三浦。それはどうも御苦勞樣でした。（皆々に禮をする。）

國分。これからこれが關口ひでで。――

ひで。（半ば身を起して禮をしやうとする。）

三浦。はあ。(點頭いて) あゝ、どうか其儘にしてゐて下さい。どうか。——

ひで。ではどうぞ御免下さい。(ト打臥して了ふ。)

三浦。(少し改まって。) 私は御承知でもございませうが、淳吉と申す淳藏の長男で、今まで一寸と東京に居つたものですから、つい皆さんにお近付を願ふ機會がありませんでしたが、これからはどうぞ宜敷お願申上げます。確かどなたとも初對面だと存じますが。——

三瓶。(少し進み出て) あの、わたしは三瓶ですが。——

三浦、三瓶さんと仰有ると、あの中町にあつた陶器店の息子さんの、…………(とぢつと顔を見乍ら) あの三瓶満治君ぢやありませんか。

三瓶。えゝ、さうです。昔あなたと御一所に遊んだ。…… ……

三浦。さうですか。(思ひ出すやうに) 確か高等二年まで貴方と一所でしたつけねえ。——あなたも随分變りましたねえ。

三瓶。何しろあれからすぐ親爺が亡くなつて了ひましたので、…………

三浦。さうでしたか。それは又、…………で只今は、…………何だか大變顔色がお惡いやうですが、どこか御病氣ぢやないんですか。

三瓶。いゝえ、別に、…………

町田。(皮肉に) なあに飯をたんと食はないからですよ。唯それだけの事なんです。それが病氣だと云やあ、わし共はみんな病氣なんですよ。

中村。これこそほんとの慢性病なんです。

三浦。…………(ぢつと下を向いて黙って了ふ。)

(しばらく沈默。此時一人の職工らしき男、入口から黙って覗きゐたりしが、以後對話の進むにつれて、一人二人づゝ附近の貧しき男女、子供など入口に集り來り、だん／＼其數を増し來つて、劇の終る頃には、十間入口に貧しき群集によつて

塞がる。此等の人物は互に私語き又は唸くのみにして、對話の中には交渉し來ることなし。）

國分。（膝を進めて）で、今日急にこちらへおいでになつた御用向は？

三浦。えゝ、それは只今申し上げます。――先づ何よりも前に皆さんにお話申上げて置きたいのは、私は何も一時的な仲裁に此方へ參つたのでなくて、云はゞ永久にあなた方と、行動を共にしようと云ふ決心で參つた事でございます。

國分。（少し呆氣に取られて）はあ、………

三浦。私は大學を出て兩三年と云ふもの、東京の方に就職して居りましたので、此方の會社に就ては殆んど知る所がなかつたのです。すると突然此度の同盟罷工が起つたので、初めてそんなに惡い事情があつたのかと、大へん驚いたやうな次第なんですが、何分向うには仕殘した用事があつて、それを片づけぬ中は來る事もならず、一人でやきもきしてゐたのですが、やうやく昨日それも片付いたので、急いで歸つて參りまして、實は今日一と先づ事情を調べて見たのです。

町田。尤も會社の帳簿だけでは、此の事情はよくお解りにならないと思ひますが。――

國分。まあ餘計な事は云はないで、默つてお話だけは聞いて了へよ。

三浦。いや、お說の通り、確かに帳簿だけでは解りません。のみならず、あなた方の事情に就ては、私は精神的にも物質的にも、殆んど何も知らないと云つていゝ位です。けれども會社側の方は、果して不當の利得を貪つてゐたかどうか、ようく調べた積りです。而して其結果は、不幸にして諸君の云つて居られる通りなのを發見しました。私はそれを玆で具體的に申し上げる勇氣はありません。たゞ私は今迄父の取つて來た態度を、情けなく感じたと諸君に申し上げれば足ると思ひます。私は實際皆さんに對して恥づかしいのです。

（皆々顏を見合せる）

三浦。これは又あの舊弊な父に云はせれば、父らしい申譯があります。けれども公平に見て私さへ、會社の施設は惡過ぎると思ひます。殊に關口………ひでさんとやらの場合でも、決して正しい待遇をしてゐるとは云へません。です

からそれを根據にして、職工の待遇を改善せよと迫られても、それは全く正當な要求なのです。それで私は今日から断然、父に向つて今迄の態度を改め、それと同時に責を引いて、父に社長の職を引退するやうに勧めたのです。もう年齢も年齢ですし、場合も場合だしますから、世間への手前、又あなた方との折合の上から云つても、父が直接工場の管理にあたる事は遠慮して貰ふやうに勧めたのです。

國分。けれども、社長さんはそれを聞入れましたか。

三浦。父も意地でやめたくなかつたやうでしたが、とう〳〵説服して了ひました。

國分。では其後任にはどなたがなりますので？

三浦。それは私が引繼ぎます。甚だ氣を負ふてゐるやうな形ですが、あの工場を父から受け繼ぐのは、子たる私の責任だと思ひます。私は御覧の通り年が若くて、實地の經驗とてはありませんが、理想と信念だけは持つて居ります。全力を盡してあの工場をよくして見せます。斷じて私利私慾を營んだり、人道に悖るやうな事は致しません。而して昨日まで埃と血にまみれてゐたあの製絲場を、輝くやうな「理想の工場」にして見せます。それが私の抱負なのです。

國分。それではもう今日から、あなたが社長さんなのでございますな。

三浦。さうです。此處へも社長の責任を以てやつて來たのです。

國分。では改めて社長さんの口から、はつきり承りたいのですが、御抱負などは兎も角として、第一手近な私共の問題はどうなるのでございますか。それを何より眞つ先にお伺ひしたいので。——

三浦。それは、私も只今申上げやうと思つてゐた所でした。では改めてはつきり申します。——賃金三割增と云ふあなた方の要求は喜んで私の方から應じます。猶其上によく私共の方の利潤を調査して見て上げられるものならもつと引上げやうと思つて居ります。（群衆私語し交す。）ですからどうでせう。あなた方も明日からすぐに工場へ出て働らいて頂けないでせうか。

國分。皆々も元通りの職務についてですか。

三浦。勿論さうです。元通りに一人も洩れなく。――

國分。するとあなたは吾々に對して、少しも含む所がなく、此儘使つて下さると云ふんですな。吾々のやうな所謂危險分子をも。――

三浦。吾々は寧ろあなた方を尊敬したく思つて居ります。さうして先程も申上げた通り、あなた方のやうな自覺した勞働者諸君と共に、相携へて「理想の工場」を作り上げようと思つてゐるのです。

國分。さうですか。あなたの御心はよく解りました。――おいみんな！此の新らしい社長さんが仰有るには、明日から賃金は三割上げて下さるし、これ迄通り一人も洩れなく使つて下さると云ふんだ。別に異議はあるまいな。

（皆々點頭き又は「無い、無い」などゝ叫んで同意を表す。）

町田。それはいゝが、おひでさんの事はどうなるんだい。

（皆々ひでを顧みる。）

三浦。關口さんの事も悪いやうにはしない積りです。さうして差當り先づ其傷が全癒するまで、私の手で太田病院へ入院して貰はうと思つてゐたのです。あそこなら私の友人の經營でもあり、設備も割合に整つてゐますから。あそこで充分療養させた上、猶其上の御相談に致したいと思ひますが、どうでせう皆さんの御意見は。尤も本人がお厭だと仰有れば又何とか別な方法も御座いますが。――

國分。さうですな。私共はこの人の幸福を願つてゐるばかりなんですから、それに勿論不服のある筈はございません。――尤も療治さへ行屆けば、入院する程のこともありますまいけれど。――おひでちやん、どうだいおまへの考へは。

ひで。（目を瞑つてゐるのみにて答へず。）

三浦。どうです、一と先づ太田病院へ入院して見れませんか。（近よつて）まだ餘程痛むんですか。

ひで。それほどでもありませんけれど。――

三浦。（靜にひでの顏を見乍ら）ひどく衰弱してゐるやうですが、毎日熱でもあるんですか。

ひで。(涙ぐましく) いゝえ。
三浦。(何となく可憐さに引込まれて) 痛い方の手と云ふのはこちらですか。
ひで。あら。(低く) よごれて居りますから、お觸りになつちやいけませんわ。
三浦。(ぢつと見て) どうです、私の云ふ通りにして下さいますか。
國分。どうだね。それとも此處で療治するかい。
ひで。あのわたし……そんなに迄して頂いていゝんでせうか。
三浦。いゝえ、なあに、私の方からお願するんですよ。
ひで。ではどうぞ宜しく。………
三浦。さうですか。早速御承知下すつて難有う。ではすぐ入院するやうに取計らひませう。(國分らに) それで宜しうございますね。
國分。(強ゐて冷淡に) えゝ異存はありません。
町田。あゝ、これで一と先づ決まりはついたな。
三浦。さうです。これから初めて、吾々は建設の時代に入るのです。及ばず乍ら私も獻身的に努力しますから、一つお互に信頼し合つて、共同して模範的な工場にしようぢやありませんか。物質的に工場の規模は小さくとも、精神的には立派な大工場にしようぢやありませんか。私は一生懸命模範的な工場主たることに努力します。諸君もどうぞ模範的な職工となつて下さい。さうしてお互ひに燦然たる模範工場を樹立しようぢやありませんか。
(群集の中で誰かゞ「アーメン」と叫ぶ。抑へ切れぬ哄笑。)
國分。(群集に向ひ) 何を云ひやがるんだ。社長さんは折角模範工場を立てゝ、縣廳からでも表彰されてえと仰有るんぢやねえか。それを茶化してどうするんだ。馬鹿め!
三浦。(此の暗諷に思はず眉をひそめたが、強ゐて不快な心持を抑制して默つてゐる。)

（此時、國分の叱咤にやうやく靜まりかけた群衆を掻き分けて、先刻のおつなが顏色をかへて入り來る。）

つな。國分さん、大變です。うちの親爺が死にました。

町田。何だつて？

つな。親爺が裏の路次で首をくゝたんです。大變です早く來て下さい。

（群集動搖する。）

國分。（寧ろ平然と）さうか。とう〳〵やつたか。

三浦。一體どうしたんです。誰が死んだんです。

國分。權爺と云ふ老人ですよ。此の結果が待ち切れないで、とう〳〵死んで了つたんです。此のストライキの唯一の犧牲です。

三浦。（獨り言のやうに。）さうか。矢つ張り俺の來ようが遲かつたか。

（皆々無言で、折から赤くさし込む路次口の夕日を氣味惡さうに眺める。）

（幕）

第二幕

太田病院の一室。

質素であるが居心地よげなる洋風の病室で、正面には廊下に通ずる戸（ドア）、右手壁には稍々大きな窓がある。室の中央に白い立があつて、部屋は二つに仕切られてゐる、

其右手の方には、窓の下に病床を備へて、蹈口ひでが横はつてゐる。窓からは明るい日光がさし入つて、病床の白いシーツに注いでゐる。

左手の方には一脚の卓子があつて、其周りに倚子が二三脚、病室用の器具などが置いてある。

暫くと看護婦の田村が、病床の傍の椅子につ坐て、雜誌か何かを讀んでゐる。ひで子は病床から默つて雲を見てゐる。

ひで。（靜な物倦げな聲で）田村さん、もういゝでせう。まだ不可なくつて。

田村。（雜誌を伏せて時計を見る。）さうですね。もう七分過ぎましたからいゝでせう。

（看護婦は立上つて病床に寄り添ひ、ひでの懐から驗温器を取り出して、明りにすかして度數を讀む。）

ひで。熱があつて。

田村。いゝえ、六度五分きり、（體温表に記入して）全く平温ですわ。

ひで。いつになつたら退院できるのでせう。

田村。もうすぐですわ。だからそんなに御心配なさらなくてもよくつてよ。

ひで。別に心配は致しませんけれど、……

田村。もうお體の衰弱の方も、切開した痕も大概癒つたんですから、安心して退院を待つてゐらつしやいよ。

ひで。お藤さまでほんとうに難有うございました。

田村。いゝえ。ほんとにお世話が行き屆きませんで。――

ひで。ほんとうにあなたのやうな御親切な方が、此處にゐて下さらなかつたら、わたしどんなに心細かつたでせう。社長さんは毎日御見舞に來ては下さいますけれど、長くて一時間とは居て下さらないんですものね。

田村。あら私の親切なんて、これが職業ですから何でもありませんけれど、社長さんの御親切なのには私共でさへ感心して居りますのよ。あゝして毎日お見舞ひに來て下さるなんて、外の方には迚も出來やしませんわ。

ひで。あなたはさう思つてゐて下すつて。

田村。えゝ。何故。

ひで。でも外の方は、さうばかり取つて下さらないんですつてねえ。

田村。ではどんな風に思つてゐるんでせう。

ひで。外の人々はね。社長さんが私の所へいらつしやるのは、何か下心があつての事で、只の親切ばかりではないと云ふんですつて。社長さんと私とがおかしいと云ふんですつて。

田村。まあ、ほんとう。

ひで。ほんとに私位不幸な女はありませんわ。一生日陰者になつて了つて、人の御親切を受けるのさへ氣兼ねしなくちやならないんですもの。

田村。隨分ひどい事を云ふ人たちねえ。――でもそんな事をどなたからお聞きになつて。

ひで。社長さんからお聞きしたのよ。昨日おいでになつた時に、さう云つてゐらつしやつたわ。――あの、自分は今迄毎日のやうに、此處へ訪ねて來たけれども、此頃世間の噂を聞くと、何だか妙に誤解されてゐるやうだから、これから少し來るのを遠慮するが、決して惡く思つて呉れるなつて。呉々もさう仰有つたわ。それあどうせそんな事を云ふのは、ごく僅かな馬鹿者ばかりだらうから、別に氣にしてゐる譯ではないが、そんな所から自分の親切が却つて無になつては、お互ひにつまらないからつて、目に涙を溜めて仰有るのよ。わたしも泣いたわ。だつてあんまりなんですもの。そんな事を、………ねえ。あんまりひどい事を世間の人が云ふんですもの。

田村。ほんとにねえ。お察し申しますわ。では今日から社長さんは、御見舞に來ては下さらないのですか。

ひで。えゝ、ですから今日はもうおいでになるまいと思ひますの。わたし、だから先刻から悲しくて悲しくて、心で泣いてゐたんですわ。

田村。ぢや淋しうございますわね。――でも職工長の國分さんて方は、今日あたりおいでになる時分ぢやなくつて。

ひで。あの人は忙しい身體ですから、來ても一週間に一度位ですわ。それに見舞ひに來て下すつても、何だかあの人怖いやうな氣がするんですもの。

田村。さうねえ。男らしい方ですけれどねえ。

ひで。あなたは社長さんお好き？

田村。えゝ。――あなたは。

ひで。わたし…わたし何とも思つてやしないことよ。

田村。あらさう。だつてそれぢや社長さんに濟まなくはないの。あんなに御親切に面倒を見て下さるんですもの、あなたはほんとに幸福よ。わたしだつてあなたのやうに幸福になれるものなら、いつでもあなたと同じく片腕位切つてもかまはないと思ふわ。

ひで。あら、何故。

田村。だつてあなたが苦んでゐらつしやれば、皆さんがすつかり同情して下さるし、今度は又あゝ云ふ親切な社長さんが、かうして病院に入れて、始終見舞ひに來て下さるんですもの。

ひで。それあかうしてゐる中はようございますけれど、もうこんな片輪になつちまつちやあ人さまが相手にもして呉れないでせうから、此の先どうして暮らして行けるか、わたしその事を考へると、いつそ此儘死んで了ひたうございますわ。

田村。だつてそれあ社長さんの方で、又どうにかして下さるんでせう。いくら世間の人は殘酷でも、あなたのやうな素直な氣立と、いゝ御器量とをもつてゐらつしやれば、きつと捨てゝは置きませんわ。

ひで。いくらさう仰有つて下すつても、私考へると心細くて心細くて、………(と涙を溜める)

田村。まあさう御心配なさらない方がよくつてよ。ね。(傍へ寄つて) もうこんな話はよしませう。――あなたのお髪はほんとにいゝのねえ。御病氣上りの人とは見えませんわ。もうお身體の方は大丈夫なんですから、明日お髪をお上げなすちつやあどう? きつと氣分がせい〳〵しますわ。束髮ならわたしにも出來ますけれど、あなた髮は何がお好き。

ひで。(少し晴々と) わたし矢つ張り銀杏返しよ。

田村。さう。きつと似合ふわね?

ひで。さうでせうか。いつか社長さんも銀杏返しが一番似合ふだらうつて仰有つてよ。男の癖に妙な事を仰有るのね。

田村。きつと丸髷もよく似合ふつて、仰有りたかつたのかも知れませんわ。
ひで。まあ厭な田村さん。あなたまでそんな事を仰有るの。
田村。あら御免なさい。怒つちや厭よ。——でもほんとに銀杏返しに結つて御覧なさいな。きつと似合つてよ。
ひで。けれどももう今日は遲いから駄目だわね。今日は之から何をしませう。
田村。ぢやあ又聖書でも讀みませうか。
ひで。あの本はわたしにはよく解らないんですけれど。
田村。でも折角社長さんが讀むやうにつて、置いて行つて下すつたんですから。
ひで。さうねえ。ぢやあ少し讀んで下さいな。
（看護婦卓子の上から革表皮の聖書を持ち來り、椅子を病床に近く引寄せてペエジを繰る。）
田村。どこまで讀んだのでしたつけねえ。
ひで。わたしも覺へてゐませんわ。
田村。（頁を繰り乍ら）路加傳第六章と、あゝ此處からだわ。
（形を直して讀み初めやうとする。途端に戸を輕く叩く音がする。看護婦は本を伏せて立上る。）
田村。あら誰方かしら。（立つてゆき乍ら振返つて）きつと社長さんよ。（急いで戸を開ける。）
（三浦淳吉の從妹とし子入り來る。手に水菓子の籠を携ふ。現代的な美貌。美しき外出着。）
田村。（少しどぎまぎして）あの、どなた樣でゐらつしやいますか。
とし。わたしは三浦俊子でございます。今日は兄がこちらへ參れなくなつたものですから、かはりに私が御見舞に上つたのでございますが、………
田村。あゝ左樣でございますか。ではどうぞこちらへ。（椅子を薦める。）
ひで。私が關口ひででございます。わざわざどうも難有うございます。

とし。兄から始終お噂は承つて居りました。どうぞ以後はよろしく。（と叮嚀に挨拶し合つて後、川村に水菓子の籠を差出しながら）あの、これは誠に有りきたりの品ですけれど、御病人には何がお宜しいか解らなかつたものですから、………どうぞそちらへお納めなすつて下さいまし。

川村。左樣でございますか。まあこんなお見舞まで頂戴しては、ほんとうに恐れ入りますわ。（ひでに）あなた、こんな結構な御品を頂いたんですよ。

ひで。まあ、ほんとに濟みませんわ、そんなにまでして頂いては。

とし。いゝえ、決してお禮を仰有るほどの物ぢやないんでございますよ。――今日は何か兄に用事があつて行かれないから、是非代りに行つて來いつて云ふものですから、急に參ることになりましたので、………却つて御邪魔ぢやありませんでしたかしら。

ひで。いゝえ、どう致しまして。

川村。今も二人で退屈し切つてゐたんでございますよ。（椅子を薦めて）まあどうぞお掛け遊ばして。

とし。難有うございます。では失禮いたします。（腰をかける）あの、御氣分はいかゞでございますの。

ひで。お蔭さまで大變宜しうございます。もう少ししたら退院が出來るかと存じますが、ほんとに何から何までお宅の御世話になりつゞけで、………

とし。いゝえ、そんな御心配は要りませんが、御不自由な御體におなりなすつては、嘸お心細くいらつしやいませうねえ。

ひで。でもみんな運とあきらめて居りますの。

とし。ほんとに御不運でしたわねえ。

（しばらく沈默。）

ひで。あの、誠に妙な事をお伺ひするやうですが。お宅の皆さま方は私の事を、憎い女だとお思ひになつてゐらつしや

いませうねえ。
とし。まあ、どうしてこんな事をお聞きなさいますの。そんな事がある位なら、かうして兄や私なぞがわざ〳〵參る譯がないぢやございませんか。
ひで。でも私のためばかりに、いろ〳〵な事が起つて、御迷惑を掛けたのですもの。先の社長さんなどはさぞお怒りだらうと存じますわ。
とし、先の社長つて叔父さんの事ですか。叔父さんならあんな人ですから、何と思つてゐるか解りませんが、わたし共はみんなあなたに同情してゐるんですよ。
ひで。叔父さんつて、先の社長さんはあなたのお父さまぢやないんですか。
とし。えゝ、叔父さんですわ。なぜですの?
ひで。だつて、あなたは今の社長さんと御兄妹でゐらつしやるんでせう。
とし。あら、淳吉さんとはね。ほんとは從兄妹(いとこ)なんですけれど、兄さんと呼んでるんですわ、小さい時からさう云つてるんですもの。
ひで。まあさうですか。わたしはほんとの御兄妹とばかり思つて居りました。――ではあの、小さい時からのお許婚(いひなづけ)でゐらつしやるんでございませう。
とし。(紅くなつて)あら、そんな事知らなくつてよ。決してそんな事はありませんわ。
ひで。まあ、わたし飛んだ失禮な事を申し上げて。どうぞ御勘忍なすつて下さいまし。
とし。いゝえ。何とも思ひはしませんわ。
(しばらく沈默。此の間に看護婦は水菓子二三個を剝いて皿にのせて持ち來る。)
田村。(皿を枕許のサイド・テエブルの上へのせて、先づとし子に向ひ。)早速頂いた林檎を剝きました。どうぞ一つ召し上りなすつて。

とし。難有うございます。勝手に頂きますから。
田村。ではどうぞ。（ひで子に）あなたも召し上れ。
ひで。えゝ。
とし。（歸るそぶりを見せて。）ではわたしこれで失禮しますわ。あの何かの序に言傳でも御座いましたら、私からさう申しますが。………
ひで。あら、まだお歸りなさらなくても宜しいぢやございませんか。まだお話もよく承らないんですもの。もう少しゐらしつて下さいましな。
田村。ほんにもつと御ゆつくりなすつたつて宜しいぢやございませんか。關口さんも退屈し切つてゐるんですから。
とし。でも之からはちよく／＼お邪魔に上りますから、今日はこれで失禮致しますわ。これから琴の御師匠さんの方へ鳥渡お廻りする事になつて居りますので、………
ひで。まあ左樣でございますか。ぢやあ又御ゆつくり。………
とし。では御免下さいまし。（田村に）左樣なら、お大事になさいまし。
田村。さようなら。どうぞ社長さんに宜しく。
（とし子會釋して去る。看護婦見送つて戸口まで行き戸を閉めて歸つてくる。）
田村。まだほんの御孃さんねえ。
ひで。さうねえ。――あの方の締めてゐた帶は何て云ふんでせう。あなた知つてゝ。
田村。厚板織とか云ふんぢやなくつて。
ひで。さう。いゝわねえ。
田村。わたし共には、呉服屋の店に並べてあるのしか見られないものよ。
ひで。いゝ御器量だわねえ。

田村。さうねえ。でも髪が少し赤うございますわ。
ひで。社長さんはどうして又あの方をお見舞によこしたのでせう。
田村。あなたが淋しがつてると思つてゞせう。
ひで。社長さんは今迄に一度も、あの方の事はお話なさらなかつたわ。そして今日不意にお寄越しになるなんて、どう云ふお積りか解らないわ。
田村。從兄妹同志だつて云ふのに、お顔はさう似ちやゐませんわねえ。
ひで。(獨りで)さうだわ。きつとさうだわ。――
田村。あら、何がさうですつて。
ひで。いえ、何でもないのよ。只ね、……きつとあの方は社長さんの奥さんにおなりになるのだわ。きつとさうだわ。
田村。さうでせうか。さうならお似合だわね。お二人とも御立派でゐらつしやるから、………ねえ。――でもさつきはさうぢやないつて云つていらしつたわね。だからほんとに從兄妹同志だけなのかも知れませんわ。
ひで。さうねえ。(氣をかへて)もうこんな話はよしませう。他人の事を心配して見たつて詰らないわ。それよりかさつき讀みかけた御本を又讀んで下さらない。
田村。ぢや少し讀みませうか。
ひで、解らないけれどそれを聞いてるといゝ氣持よ。
田村。(前のやうに座を占めて) ぢや讀みますよ。
(看護婦澄んだ聲で聖書を讀み初める。ひでは靜に聞いてゐる。しばらく讀む。)
田村。聞き取りにくゝはなくつて。
ひで。(ものうげに) いゝえ。
(續いて可なり長い間――實演の際は五分間位――讀みつゞけてゐる。ひでは初めから眼を瞑つてゐたが、やがて寢入つて

てふこ静かな寝息の音がする。看護婦は餘りに患者が静なのに氣付き、讀みやめて静かに「關口さん」と呼んでみる返事がないので近寄つて顔を覗き乍ら「まあ」と云つて微笑む。そこで彼女は本を伏せてしばらくぢつと寝顔を見てゐる。それから枕許の薬罎を取り、行きがけに音のせぬように窓掛を引いて、そつと室から出て行く。長い間。外で戸を軽く叩く音がする。しばらく經つても返事がないので、そつと戸を開いで三浦が首を出す。さうしてひでの寝てゐる外、誰もゐないのを見て入つて來る。先づ病床に近寄つてひでの顔を覗き込み、しばらくぢつと見詰めてゐたが、悩ましげな吐息を一つして枕許を去り、障立で仕切られた方の卓子の所へ來て、静に椅子に腰を下して懐中より煙草を出して點火する。しばらくして太田醫師が戸口から首を出す。)

太田。（覗き込み乍ら）三浦君。こゝかい。

三浦、しつ、！　静かに！　御覧の通り寝てゐるんだ。まあ入つたらどうだい。

太田。うむ。（入り來る。而して唇を低めて）よく寝てゐるな。君何なら僕の室へ來ないかい。病室で雑談も出來ないぢやないか。

三浦。さうさな。でも何だか此處が一番居心地がよくつてね。まあ眠りの邪魔にならぬ程度で、静に話をしようぢやないか。僕は其方が話しいゝんだ。

太田。一體君の話つて云ふのは何なんだい。

三浦。まあゆつくり話すから、（ひでの方を覗き見て）此方の隅の方へ來ないか。

（二人は左手の隅の卓子の傍へ腰を下ろす。）

太田。何か込み入つた相談かい。

三浦。まあさう急ぎ給ふな。さう改まつて訊かれると恐縮するんだ。まあ煙草でも一つ取らないか。

太田。難有う。（一本煙草を取る。）

三浦。時に――君の方の仕事は否氣でいゝね。

太田。どうして〳〵、存氣どころか。今やつと廻診を濟まして、鳥渡一と骨抜いた所さ。これから又一時間も經つと大忙しだよ。

三浦。まあそれは何より結構だね。

太田。それよりか君の會社の方はどうだい。うまく行つてはゐるらしいが。……

三浦。まあ着々歩を進めてゐる。まだ〳〵改良したり、新設しなくちやならぬ事も澤山あるが、初めから迚も完全は望まれないからねえ。何しろ、今迄が謂はゞ惡德の巢窟とも云ふべき程だつたのだから、僕の理想の實行も容易ぢやないが、それだけ又張り合があると云ふものだ。而してまだいろ〳〵内部に反對はあつても、いつか必ず僕の精神のある所が認められて、僕の思ふやうになる時代が來るに違ひないから、根氣よく少しつゞ改革して行つてるのさ。

太田。僕らから見ると君のやり口は、少し淸教徒過ぎるとは思ふが、まあ一つ思ひ通りにやつて見るのもいゝさ。

三浦、いゝさなんて云ふ了簡い事ぢやなくて、實際せずにゐられないのだ。——まあ親爺のやり口などを見ると、こんなのは無論一例に過ぎないが、少なからず心を寒くするものがあるからねえ。からだ、まあ聞いて呉れ給へ。此處に一人の美しい女工がゐるとするね。さうすると親爺なんぞのやり口では、そいつを數ある女工の中から拔擢して、男工の所へ糸取り枠を運ばせる役に使ふのだ。すると自然男工の間には、一つでも多く自分の所へ枠を運ばせたい希望から、猛烈な勵精の競爭が初まるんだ。——とまあか う云つたやうな事ばかり、工場の能率を增進させやうと計るんだからねえ。

太田。ふうむ、中々うまい事を考へるものだねえ。

三浦。ところがそれは何も親爺の妙案ぢやなくて、どこでも普通にやつてゐる手段なんだから驚くねえ。

太田。けれどもそれ丈の事ならば、別に大した罪惡でもないだらうがね。

三浦。それはさうかも知れない。併し其弊の及ぶ先を考へると、由々しい人道問題にもなると思ふんだ。——まあいつまでも枠の數位で競爭してゐれば無事だが、やがてもつと猛烈な裏面の競爭が行はれる。仲間同志が反目する、嫉妬す

る。時とすると黨に分れて爭ひ合ふ。而して其結果は多くの場合、渦中に立つた可憐なる女工を悲慘な運命に陷れて了ふんだ。

太田。ふうむ成程、それはさうだらうね。

三浦。此處にゐる（とひでの方を見やつて）關口ひでなぞも、危ふく其一人になる所だつたのだ。今でこそ此處にあゝして白い毛布に包まれて安らかに寢てゐるが、曾てはあの女の周圍に誘惑が渦を卷いてゐたのだ。怖ろしい惡魔が爪を磨いで待つてゐたのだ。僕は幸にして彼女をさう云ふ狀態から救ひ出すことが出來たのを、今尙一つの誇りにしてゐる。さうして假令會社の方の改革が、どんな反對に遇つて挫折しても、あの女を救ひ得たと云ふ事實は、僕には實に最後の慰めになるのだ。あの女を救ふことが、僕の理想を實現する第一の階段だつたのだ。あの女は謂はゞ僕の理想主義の象徵なんだ。だあの女が再びもとの境遇に落ちて、身を亡ぼすやうな事があつたら、其時こそ僕の理想は悉く破產したのだ。だから僕は何處までもあの女を守り立てゝ、決して又もとの悲慘な狀態に歸らせたくないと思つてるんだ。

太田。ふむ、それで。——

三浦。そこで僕が先刻から、君に話さうと思つてゐた問題になるのだが、實は僕この關口と結婚しようかと思つてゐるのだ。結婚して永久にあれを救ひたいと思つてゐるのだ。——君のお蔭で幸に切開の痕も癒り、身體も見違へるやうによくなつて來たから、もう近日退院してもいゝ事になるだらうが、退院してもさしあたり何處へ行つたらいゝか、どうして暮して行つたらいゝか、それは彼女の重大な問題なんだ。それは金で片が付くなら、あの女の一生の保障になるやうな額を與へてもいゝが、それとて限りのある金錢では、忽ち行きつく先きが見えてゐる。其上たつた一人の女の身では、此の誘惑の多い世界で、どうして身を誤らずに居られるものか。墮落は目に見えてゐる。それだのに僕はみす／＼あの女を棄てゝ他人に汚させるのに忍びないんだ。だから僕は結婚して、彼女を完全に救はうと思つてるのだ。

太田。うむ。それは理窟としては僕にも異論はない。が、併し君、君にはその理窟以上に、關口さんに對する愛を感じ

てゐるかい。それが何よりも第一の問題だと思ふが。——

三浦。それは勿論感じてゐる。今僕は心からあの人を愛してゐるのだ。尤も昨日まではそれをはつきりとは感じなかつた。が、偶然ある所である噂を聞いてから、我れと我心に反省してみて、初めてそれに氣が付いたのだ。僕は君も知つてゐる通り、殆んど毎日のやうに此處へ來てゐる。それも初めは幾らか義務的に足を運んだ傾きもあつたが、其中にだん／＼來ることが樂しくなつて來て、とう／＼今では來ないではゐられなくなつて了つた。無論昨日まではそれほど自覺してはゐなかつたが、昨日偶然あそこの扣所を通り合せた時、君の助手や看護婦たちが、僕の噂をしてゐたのを聞いて以來、改めて自分の身を振り返つて見て、少し恥かしい所があつたから、昨日も當人に理由を話して、世間の口が五月蠅いから來るのは遠慮すると云つて置いたのに、今日になつてみると此處へ來たいと云ふ心が、可なりな强さで湧いて來るのを感じたのだ。而してやつとそれを堪へて、わざと他の用をしたり、とし子を代理に來させたりして見たが、考へれば考へる程、僕にはあれと會ふことが必要になつて來たのだ。僕は今迄無意識にではあつたが、可なり激しい愛を彼女に對して持つてゐたのだ。さう覺つたらもう一刻もぢつとして居られなくなつた。それで急いで此處へやつて來て了つたのだ。

太田。成程、それで一と通り君の心持は解つた。理性的にも感情的にも、此結婚は君に取つて合法なんだね。併し君は、……あのとし子さんと結婚する約束になつてゐたのではないのかい。さうだとすると此問題も、鳥渡考へ直さなくちやならないが。——

三浦。家ではどう思つてたか知らぬが、僕にはそんな約束は斷じて無かつた。

太田。ふうむ。さうかい。僕は今迄とし子さんと君とは、將來一所になるものだとばかり思つてゐたが、——で君は今の關口さんの事を、一應家の人たちに相談してみたのかい。

三浦。いや、それはまだだ。するのは君が初めてだよ。

太田。君は家族の反對を豫期しないかい。

三浦。それはきつと在るだらうと思ふ。併し僕はそれを排して、決行するだけの勇氣もあると信じてゐるよ。今の決心はどんな反對に會つても枉げないつもりだ。

太田。うむ。君にそれだけの決心があるなら、僕も不肖ながら君の味方となつて努力しよう。

三浦。君が贊成して呉れたのは、僕に取つて何よりも心丈夫だ。ぢやあどうか宜しく盡力を頼むよ。

太田。それはさうと君はもう、關口さんの意向は確かめて見たのかい。

三浦。いや、それもまだだ。實は之から確めようと思つてゐるのだ。

太田。(更に聲を低めて) たゞ僕は凡ての前に、醫師として一應君に警告を與へて置くが、あゝ云ふ階級に屬する女は、あの年までには大概もう處女ではないと云ふ事だけ、はつきり考への中に入れて置き給へよ。

三浦。難有う。併し僕の愛はそんな事位、許すだけの力を持つてゐるつもりだから。——

太田。それはさうだらうが、得てそんな所から結婚後の破綻が起り易いからね。

三浦。もしそんな事が起るやうだつたら、僕の志は全然無になる譯だから、誓つてそんな結果には陷らせないよ。

太田。宜しい。それなら先づ何よりも當人の意志を確め給へ。事はすべてそれからだ。(時計を出して見て) ぢや僕は失敬するよ。(立上る。)

三浦。あゝ、ぢや何分宜しく頼む。

(醫師は通りがゝりに一度ひで子を見、戸を開けて去つて了ふ。三浦あとの戸を閉めかけて見送つてゐる。突然ヒステリカルな涕泣が、ひで子の病床から起る。三浦驚いて振り向き、急いで病床に近寄る。)

三浦。どうした。どうしたんだ。夢にでもうなされたのかい。

ひで。(切れ／＼に) いゝえ、いゝえ。わたし、…………あの、…………今のお話を聞いてゐましたの。

三浦。えつ。ぢや今の話をすつかり聞いたのかい。

ひで。えゝ、少し、…………

三浦。さうかい。それは猶よかつた。僕も實は聞いて貰ひたかつたのだ。（興奮を抑へて）では改めて僕から云ふが、僕はおまへに結婚を申し込むよ。おまへそれを承知して呉れるかい。それとも何か異存があるかい。

ひで。（かすかに）いゝえ、異存なんぞございませんが、わたしのやうなものが、…………

三浦。ひでちやん。今はそんな事を云つてる時ぢやないんだよ。僕はおまへを心から愛してゐる。おまへの方でも僕を愛して呉れる事ができないかい。

ひで。いゝえ。わたしとうからお慕ひ申しては居りましたわ。けれども、…………けれども、…………結婚なんて事は、…………一度も考へやしませんでしたの。…………ですからあんまり急で、…………わたし何と申上げていゝか解りませんわ。

三浦。ぢや愛して呉れると云ふのだね。それをはつきり云つてお呉れ。

ひで。えゝ、それは、…………愛しますわ。

三浦。それならいゝぢやないか。二人はもう一つの心になつてゐるのだもの。もう結婚するより外に道はないぢやないか。それともおまへは他に約束した人でもあるのかい。

ひで。あら、そんな人はひとりもありやしませんわ。

三浦。ぢや他に君を思つてゐる人でもあるかい。

ひで。（鳥渡躊躇して後）いゝえありやしませんわ。

三浦。そんなら承知して呉れるね。承知して呉れるだらう。ね、ね。（と一方の手を取つて打振る。）

ひで。（かすかに嬉しさを包んで）えゝ。

三浦。難有う。——これでやつと僕は安心したよ。おまへを全く救ふことが出來たのだからね。

ひで。（默つて男の手に縋つた儘、喜びに泣き入つてゐる。）

（二人はしばらく同じ狀態で、歡喜に醉ふてゐるやうに見えたが、やがて女は涙にぬれた顏を上げて、ぢつと男を見上げる。）

男もちつと上から目と目を見合つた。この態のポーズは暫らくつゞく。)

三浦。（やうやく我に返つて） 大へん顔が涙でぬれてゐるよ。拭いちやあどうだい。

ひで。（微かに笑つて） さう。汚ないでせう。（拭ふ。） まだですか。

三浦。あゝ綺麗になつた。それでいゝ、それでいゝ。――ぢや又來るからね。静にしてお寝みよ。

ひで。（おとなしく） えゝ。

三浦。いろ／＼な邪魔は入るだらうが、どこまでも二人は一所なのだからね。いゝかい。

ひで。えゝ。

三浦。ぢや左様なら。

ひで。左様なら。

（三浦戸を開けやうとする時、急に戸は外から開かれて、職工長國分貞治と行き會ふ。）

國分。（少し驚いて） あゝ社長さんでオか。只今お歸りでございますか。

三浦。えゝ。――君もお見舞ですか。

國分。えゝ、さうです。

三浦。さうですか。それは御苦勞ですね。ぢや失禮。（去る。）

（國分禮を返し、戸を閉ぢて入つてくる。）

國分。社長は毎日來るのかい。

ひで。（默つてゐる。）…………

國分。社長が毎日來るんなら。俺も毎日來なくちやならないからな。

（と反抗的に三浦の去つた戸の方を睨める。）

（幕）

第三幕

三浦淳吉の家。

稍々廣き日本間。正面には右に床の間があつて、違ひ棚など宜しく、左に襖を立てた出入口が奥へ通じてゐる。右手は張り出し窓、障子等にて椽側と限られ、左手は襖が立て切つてあつて、それから玄關口へ通ずるやうになつてゐる。座敷の中央には紫檀の机と、陶器の火鉢とが置いてある。

幕あくと從姉のとし子が、床の間の前で活花を直してゐる。そこへ母のおふさが奥から出て來る。

ふさ。おや、おまへ一人かい。おひでは。

とし。髮結が來ましたので、お部屋で髮を結つてるんでせう。何か御用ですか。

ふさ。いえ、用といふ程でもないんだけれど、お父さんの羽織を疊んで貰ひ度いと思つてね。

とし。そんな事ならわたし致しますわ。こゝは今すぐ濟みますから、鳥渡待つてゝ頂けないこと。

ふさ。あゝ、いつでもいゝのだから、お急きでないよ。――よく活かつたねえ。

とし。(活け乍ら)五日も活け放しにして置いて、餘りみつともないんですもの。

ふさ。さうだねえ。

とし。此頃はすつかり怠け癖がついちまつて、何をするのも氣が進まなくて困りますわ。

ふさ。(默つてゐる。)

とし。ねえ叔母さん。

ふさ。なんだね。

とし。わたしあの、叔母さんに御相談しようと思つてた所なんですけれど、今丁度いゝ折ですから、聞いて下さらない。

ふさ。あゝ、聞きますともさ。

とし。あのね。此間兄さんからあつた太田さんへの縁談ね。あれを私お斷りしよかと思つてゐますのよ。——私もう暫らく獨身でゐたいんですもの。

ふさ。もう暫らくもう暫らくつて、いつ迄さうしても居られまいがね。

とし。わたしならう事なら、一生獨身でゐたうございますわ。

ふさ。さう云ふおまへの心持は、私にもよく解つてゐるんだけれどねえ。おまへにさう云はれると、私はほんとに氣の毒でならないのだよ。わたしの考へでは、おまへも知つての通り、どこまでも淳吉と一所になつて貰ふつもりだつたのだけれど、あれがあんな我儘を云つて、どうしてもおひでを貰ふてきかないものだから、とう〳〵こんな事になつて了つたんだけれど、私はほんとにおまへには濟まなくて濟まなくて、………

とし。あら叔母さん。濟むの濟まないのつて、そんな事を仰つちや困りますわ。

ふさ。いゝえ。ほんとに濟まないのだもの。——だから私もあの時一生懸命云ひ張つたのだけれど、………

とし。ですから叔母さんの難有いお志は、わたし一生忘れやしませんわ。けれどももうそんな昔の事、云つたつて仕方がありませんし、又兄さんにしました所が、ほんとにお愛しなさる方を奥さんになさるのが當り前ですもの。それを今度のわたしの結婚をお斷りする理由のやうにお取りなすつては、わたし却つて心苦しうございますわ。

ふさ。それはさうだらうけれど、私としては心に濟まなくてね。

とし。それは私にしましたつて、此儘こちらに置いて頂ければ此上もない幸福とは存じますし、おひでさん位のお世話は出來ると思ふんですけれど、………

ふさ。ほんとにこれがおまへだつたら、みんな水入らずで暮して行けたゞらうし、いろんな世話ももつと行屆いただらうがねえ。あゝして片手が無い上に、何にも家の事を知らないんだもの、私は人さまにこれが伜の嫁ですつて、ちやんと引合せる事も出來ないんだよ。

とし。でももう仕方がありませんわ。あゝして正式に御結婚なすつて、兄さんが可愛がつておいでなんですもの。

ふさ。私も今ではさうあきらめて、何にも云はないでゐるけれど、あゝ云ふ素性の賤しい女だから、何か家名に障りでもするやうな悪い事 もなければいゝと思つて、ほんとに心配でならないのだよ。

とし。ほんとうよ。叔母さん。それだけはよく氣をお付けなさらないと、飛んだ事になりますわ。(急に聲をひそめて)ほんとはね。わたし少しあの人の事で訝しいと思ふ事があるのよ。あの人前に何かあつたんぢやないでせうか。

ふさ。何かつて。

とし。男の人か何かよ。

ふさ。それはわたし淳吉にも念を押したのだけれど、……………おまへ何かそんな證據でも見たのかい。

とし。いえ、證據つて程の事ぢやありませんけれど、少し變ですわ。

ふさ。何が變なのだね。

とし。あの、おひでさんは妊娠してますわね。

ふさ。あゝそれは私も氣がついてゐたがね。

とし。兄さんと結婚なすつてからまだ三月ですわね。

ふさ。あゝさうだね。

とし。三月にしちやあ少しお腹が大きいとはお思ひなさらなくつて。

ふさ。さうさねえ。さうかしら。

とし。ぢや氣を付けて御覧になるといゝわ。わたしにはどうもさう思はれるのよ。

ふさ。家へ來る早々から、しよつちう身體が悪い／＼つて云つてゐたから、ひよつとすると身持ぢやないかとは思つてゐたが、ぢやあ矢つ張りさうだつたのかねえ。さうとすれあ此儘ぢや置かれない事だね。

とし。わたしもさう思ひますわ。兄さまの爲にも、お家の爲にも。

ふさ。ぢや私もよく〳〵氣を付けて見るからね。

とし。わたしの氣のせいばかりぢやないと思ひますわ。わたしのお友達にもお嫁に行つて、もう姙娠した人がありますけれど三ヶ月位であゝ目立つものぢやありませんわ。

ふさ。さうだねえ。併し肝心の私がうつかりしてゐて、年齒のゆかぬおまへに教へられるなんて、私も年を取つたねえ。

とし。いゝえ。わたしだつて此間おひでさんと、御一所にお風呂に入らなかつたら、氣が付かなかつたかも知れませんわ。でも、よく〳〵調べた上でないと解らない事よ。だから私も今迄幾度か申上げよう〳〵と思つてたんですけれど、證據もないのにそんな事を云つては、わざとおひでさんを陥れるやうに思はれますから、今迄默つてゐたんですわ。叔母さんも之からよく氣をお付けになつて、御覽になると宜しうございますわ。

ふさ。その外に何か氣付いた事はないかえ。

とし。えゝ、たゞそれだけですの。

ふさ。此後ともよく氣を付けて御呉れよ。――こんな事があるから私は反對だつたのさ。

とし。わたしだつて何も探偵のやうに、あの人の事を彼是目をつけたりしたくないんですけれど。もしそんな事だつたりすると、あんなに愛してゐらつしやる兄さんが可哀さうでございますからね。

ふさ。もしさうだつたら、淳吉がいくら許すと云つても、わたしが承知しないからいゝ。

（玄關の戸の鈴の音がする。）

とし。おや、どなたかいらしつたやうよ。――ぢや今の事は、よく調べた上でないと解りませんから、叔母さんもまだ默つてゐらつしやる方がいゝと思ひますわ。

ふさ。あゝさうともさ。

（女中左手の襖をあけて登場。）

女中。あの、國分さんつて方がいらつしやいました。

ふさ。まだ淳吉は歸らないつてさう云つたのかい。
女中。はい。さうしたら奥さまでも宜しうございますから、お目にかゝりたいと仰有いますので。
とし。國分つて、職工長の國分寅治かい。
女中。左樣でございませう、きつと。――何でも奥樣をよく御存じのやうな口振りございましたから。
とし。さうかいそれぢやあ（と意味ありげに）ねえ叔母さん。私たちは向うへ參りませうよ。（女中に）そして其方を此處へお通しして、おひでさんにさうお云ひな。
女中。はい。（去る。）
（つゞいて女二人も急いで奥へ去る。やがて國分寅治、女中に案内せられて左手より登場。）
女中。只今奥樣に申上げますから、どうぞ暫らく。
國分。はあ、御無理を願つて濟みません。
（女中去る。國分あたりを見廻してゐる。女中再び入り來り茶を薦めて去る。しばらくして、初々しい丸髷に結つたひでが奥の襖をあけて靜に出てくる。さうして二人は顏を見合せる。）
ひで。（少し胸を轟ろかした樣子で、座り乍ら）あなたでしたか。
國分。えゝ、私です。
ひで。（强ゐて冷淡に）何か主人に御用がおありになるとかでございますけれど、わたしが代りに承りましても、よくは解らないだらうと存じますが、…………
國分。いえ。その用も用ですけれど、實はそれはどうでもいゝんです。（聲を低めて）ただ私は鳥渡あなたにお目にかゝつて、色々お話を申上げたり、お聞きしたりしたいと思つたものだから、思ひ切つて圖々しく上り込んだのです。
社長のゐないのを勿化（もつけ）の幸と思ひましてね。
ひで。まあ、では初めつからそんなお積りだつたのですか。

國分。えゝ、少し冒險過ぎましたかね。

ひで。では甚だ失禮ですけれど、どうぞ直ぐお歸りなすつて下さいまし。私はあなたとかうして用もないのにお話をしてゐる譯には參りませんわ。

國分。まあ、さうまで仰有らなくたつていゝぢやございませんか。——そんなに御迷惑なんですか。

ひで。でも家の人も聞いて居りますから。——

國分。いゝぢやありませんか。別に悪い話をするんぢやなし、昔の友達が偶に訪ねて來て、世間話の一つもして歸らうと云ふだけなんですからね。——それも外の人なら兎も角、あなたと私とは一つ釜の飯を食つて、一つ屋根の下に十日近くも居た間柄なんですからねえ。

ひで。どうかもうそんな前の事は仰有らないで下さいまし。そんな事を仰有つて、私を苦めないで下さいまし。

國分。(皮肉に)はゝあ、するとあなたのやうな女でも矢張り、見捨てた前の仲間の事を考へると、心が苦しくなると見えますね。——資本家の奴隷に身を賣つた罰です。身分不相應な結婚をした酬ゐです。

ひで。わたしもうあなたの仰有ることをお聞きする事は出來ません。どうぞお歸りなすつて下さい。お歸りなすつて下さい。(涙を湛めて)あんまりですわ。あんまりな事を仰有いますわ。

國分。さうまで仰有るなら歸ります。(と立ちかけて)、が、どうかそれならもう一言だけ云はして下さい。——今、私はついこんな悪口を申し上げましたが、併し、これで何もあなたを苦しめに來た譯ではなかつたのですよ。それどころか私はいつも、あなたの幸福を願つてゐるのです。而してあなたが一刻も早く、かう云ふ奴隷同樣な境遇を脱して、再び故郷の吾々の所へ歸つて來るのを待つてゐるんです。——では左樣なら。(去らうとする。)

ひで。國分さん、鳥渡お待ち下さい。

國分。何ですか。

ひで。わたし其中にぜひ一つ、あなたにお話しなければならぬ事がございます。いづれ其時が參りましたら、聞いて頂

きたいのでございますが、――
國分。何ですか知りませんが、私に關係のある事ですか。
ひで。えゝ、さうです。
國分。ではいつでもお聞き申します。
ひで。では左樣なら。（氣を取り直して）おせきさん、おせきさん。
（女中登場）
ひで。あのお客樣がお歸りだから。
國分。ではどうか社長さんに宜しく。
（國分女中に導かれて退場。ひでは暫らく後を見送つて、ぢつと物思ひに沈んでゐる。としが奥から出て來る。）
とし。あらもうお客樣はお歸り？
ひで。えゝ、あの、何ですか、矢つ張りわたしでは解らない事だつたものですから、又お留守でない時に來て下さるやうに、さう云つて返して了ひましたの。
とし。さう。――あの方は職工長の國分でせう。
ひで。えゝ、さうでございますわ。
とし。あなた前にあの方の家にお居でなすつたのぢやなくつて。
ひで。えゝ。あのストライキの時分少しばかり、……
とし。あの人お幾つ位？
ひで。わたしよく存じませんわ。
とし。まだお獨りなんでせう。
ひで。さうらしうございますわ。――でも、どうしてそんなにあの人の事をお聞きなさいますの。

とし。だつて、………あの人はストライキの首領だつたのですもの。わたしどんな人かと思つてゐましたの。そんなに怖くもない人ねえ。

ひで。さうでせうか。

とし。さうぢやなくつて。わたしもつと怖の澤山な人かと思つてゝよ。だけど眼だけは少し怖いわねえ。

ひで。（興味なげに）さうですねえ。

とし。あの人あなたの恩人ですわね。

ひで。………と云ふ程でもないでせうけれど、………

とし。だつてあの人がさきだちになつて、あなたの爲に色々して下すつたのでせう。（ひでの顔を讀むやうに）あなたあの人に感謝してゐなくつて。

ひで。それあ難有いと思つて居りますわ。

とし。たゞそれだけ？

ひで。あら、どうして？

とし。いえ、何でもないんですけれど。——

（しばらく不安なる沈默。玄關の方で戸の鈴の鳴る音がする。）

ひで。あら、お歸りのやうですわ。（急いで立上る。）

とし。さうね。

（二人は急いで玄關の方へ出て行く。「お歸んなさいまし」と口々に挨拶する聲が聞える。やがて淳吉を先にして、ひで、とし、女中ら出て來る。）

三浦。（ひでに外套を渡し乍ら）今日は歸りに太田の所へ寄つて來た。おまへが毎日工合が惡いやうだから、來て診て貰れるやうに云つて來た。だからもう直ぐ來るだらう。來たら早速一つ診て貰ふがいゝ。

ひで。（少し狼狽して）あら、だつてわたし何でもないんですのに。あれほど何でもないつて申上げてるのに、そんな御心配には及びませんでしたわ。

三浦。何だか毎日顔色がよくないやうだから、まあ見て貰つて置くがいゝよ。

ひで。だつて何でもないんですもの。ほんとにいゝんですもの。（外套を女中に渡す。女中それを持つて退場。）

とし。（つゞいて奥へ行かうとする。）

三浦。あゝとしさん。おまへに鳥渡話があるんだがね。

とし。さうですか。

三浦。矢つ張り太田の事だがね。今着物を着換へて來るから、此處に待つてゐて呉れないかい。

とし。その事なら私も申上げたいと思つてた所ですから、お待ちして居りますわ。では御ゆつくりお着換へなすつていらつしやい。

三浦。ぢやそれから寛いで話さう。（ひでに）今日は之から又鳥渡、町長さんの處へ行かなくちやならないから、いゝ方のを出して呉れ。

ひで。はい。（行きかけて）あの、わたしどうしても太田さんに診て頂かなくちやなりませんの。

三浦。さうして僕に安心させて呉れるのだよ。（とし子に）ぢやすぐ來るからね。

（二人は奥の間に入る。とし子獨り殘つて呆然と物を考へてゐる。しばらくして玄關の方に俥の來た音がして、つゞいてベルが鳴る。とし子立つて出て行く。「まあよくいらしやつて下さいました」と云ふやうな挨拶が聞える。やがてとし子、太田醫師を伴ふて登場。）

とし。さあ、どうぞこちらへ。

太田。（少しはにかんで）さつき三浦君からお話がありましたので、今恰度手隙だつたものですから、早速こちらへさし上りました。

とし。ほんとにお早々と、難有うございました。兄も只今歸つた所で、奥で着換へをして居りますから、どうぞ暫らくお待ち遊ばして。

太田。はあ。――何だかひで子さんがお悪いやうな話でしたが。――

とし。えゝ、少し悪いのかも知れません。

（しばらく沈黙。二人は顔を上げて、偶然視線を合せ、あはてゝそれを外らして了ふ。）

太田。（思ひ切つて）あの僕の事はもう三浦君からお話があつたと思ひますが、……………

とし。（悪びれずに）えゝ、承つて居りました。

太田。それで……………？

とし。それで、……………私のやうな不束者でも、それまでに仰有つて下さるのにつけ上つて、我儘を申すやうな譯ではございませんが、わたしも、……………わたし相應にいろ／＼考へたい事がございまして、今迄のび／＼に御返事も致しませんでしたが、どうぞお心に背くやうな事を申上げても、お許しなすつて下さいまし。

太田。いゝえ。それはあなたの一生の大事なんですから、どうぞよく／＼お考への上、どちらとも御返事下されば、私も彼是思ひ殘しは致しません。それに又實際僕にして見ますと、あなたの良人になる資格があるかどうか怪しいもので、……………只もし資格が少しでもあるとすれば、それはあなたを愛する點に於て、どこの誰にも劣らないと云ふだけの事なんですから。――

とし。あら、そんな事を仰つては、私なんぞ何と申していゝか解りませんわ。私なんぞにはほんとに分に過ぎて／＼ゐるのは解り切つてゐるのですけれど、――あら、御免下いまし。こゝでこんな事を申し上げるのでございませんでしたわ。

太田。僕もこんな話をする積りぢやなかつたのですが、厚顔しい事ばかり申上げて失禮しました。

とし。いゝえ、私こそ。――どうぞ御免遊ばして。

太田。ではあの私にはおかまひなく。

とし。いえ、あの、…………兄も直ぐですから。…………それにわたし別な話ですけれど少々あなたにお願がございますので。…………

太田。改つてお願と云ふのは何ですか。私で出來る事なら何でも致しますが。…………

とし。あの妙なお願ですけれど、今日あなたはおひでさんを御診察下さるのでせう。

太田。えゝ。そのつもりで上つたのです。

とし。あの。おひでさんは確に御病氣ぢやないと思ひますのよ。わたし確に姙娠だと思ふんですけれど、…………

太田。はあ、僕もそんな事だらうと思ひました。それで？

とし。それであの妙なお願ですけれど、御診察なすつた上で、何ケ月位におなりだか、敎へて頂く譯には參りますまいか。

太田。そしてどうなさるんです。

とし。わたし叔母さんに賴まれしたの。

太田。あゝさうですか。そんな事ならお易い御用です。尤も診察したばかりでは、確とした所は解りませんから、御本人にお聞きなさるが一番ですよ。

とし。えゝ、それもさうですけれど、あなたの方からもお伺ひしたいのですから。どうかほんとの所をお聞かせなすつて下さい。

太田。えゝ、畏りました。

（三浦淳吉奥より出で來る。）

三浦。やあ、もう來て呉れたのかい。知らずに茶を一ぱい飲んでたものだから、待たしてどうも濟まなかつたね。

太田。うむ。丁度手があいてゐたんで、取るものも取り敢へず來た譯さ。…………どうだね、御病人は。今とし子さんに伺ふと、さう大した事ではなささうだが、…………

三浦。うむ。別に悪いと云ふぢやなからうが、どうも樣子が尋常ぢやないと思ふから、まあ一つ診てやつて呉れ給へ。さうすれば僕も安心するから。
太田。ぢや早速拜見するとしやう。お部屋においでないのかい。
三浦。うむ。今女中に案内させるから待ち給へ。
とし。あのわたし御案内しますわ。
太田。それは恐縮ですな。
三浦。だがとしさん。おまへは僕と、…………
とし。いゝえ、あの事なら今も太田さんとお話したんですけれど、もう少し考へさして頂きたいのよ。いづれ猶お歸りになつてからね。
三浦。さうかい。(太田に)それぢや君どうぞ宜しく。
とし。(太田に)ではどうぞこちらへ。
太田。どうも恐れ入ります。
(二人奧へ入る。三浦一人殘つて二人を見送り、少し笑を含んでゐる。そこへ奧から父の淳藏登場。)
淳藏。淳吉。おまへ一人か。
三浦。えゝ、さうです。
淳藏。どうだな、近頃會社の方は。相變らず職工に耶蘇敎の說敎をしてゐるかい。
三浦。(苦笑して答へず。)
淳藏。昨日もある處で、倉庫會社の前島さんに會つたが、あの人もから云つて嗤つてゐたぜ。おまへの遣り口はまるで、飼犬を座敷に上げて置くやうなものだつて。犬つて奴は幾ら食つても、滿腹するつて事を知らないから、飼主が呉れれば呉れるだけ食つて了つて、別に難有かつたと云ふ顏もしないんだ。そして終ひにはそれにつけ上つて、ちつとや

そつとの事をしたんでは、却つて手を嚙むやうになるだらうつてな。

三浦。嗤ふ奴には嗤はして置くがいゝです。どうせそんな頑固な人たちには、僕の考へなんぞ解るもんぢやないんですから。

淳藏。そこだて。わしもさう思つてるんだ。まつたくおまへの考は高遠過ぎて、俺たちには解らないんだよ。俺たちどころか誰にも、肝心の職工にも解らないんだ。

三浦。それあ今迄職工と工場主の間には、色々な牆壁があつた爲に、僕の赤心から盡してゐる事も、一時は諒解されなかつたでせうけれど、幸に此頃は職工も私に信賴を持ち初めた樣子です。これから私の理想も、着々實現の緒につくに相違ありません。もう大抵今までの施設で惡い所は除いたし、新らしい設備はそろ〳〵効果を擧げて來るし、私は此頃心から嬉しく思つてゐるんです。

淳藏。それあ大變結構だが、どうも收入は餘り思はしくないやうだね。どうせその理想とか何とか云ふやつは、金には緣の遠いものなんだらうだ。…………

三浦。まあ今に御覽なさい。私の心がすつかり職工に解つて、すべての職工が私と一つになつて、ほんとに精神的に働いて呉れる時が來れば、生產高はきつと今の倍位に上りますから。

淳藏。さうなつて呉れゝば俺も文句はないが、それが駄々つ子の夢でなければいゝがね。

三浦。何でも宜しうございます。私の手に社長の權利がある間は。私の好きにさせて頂きます。而して、どうしても私の考が行はれず、又その爲に惡い結果にでもなつたら、その時改めてお父さんのお指圖を仰ぎます。今そんなケチをつけて頂かなくともようございます。

淳藏。それあ好んで俺も云ひたくはないが、おまへのやり方が餘り子供じみてゐて、先が見えてるから心配してゐるのだ。

三浦。子供じみてゐても何でも、私はやるだけやり通して見せます。御心配をして下さるにしても、まだ早過ぎるかと

存じます。

淳藏。それあやれるだけやるのはいゝさ。たとへそれが駄目だつたにしても、おまへ一人の修業にはなるんだから。――兎に角おまへももう少し經てば、仁慈一點張りで行かない事が解るよ。

三浦。でもお父さんのやうに暴虐一點張りでは猶更行きますまい。

淳藏。まあさうは云はぬものだて。今にわかるからなあ。(と立上る)

三浦。さうですとも。きつと今に解ります。

(父嘲笑を浮べつゝ退場。入れちがひに太田醫師登場。)

三浦。あゝ濟んだかい。どうも御苦勞だつたね。それで樣子は。

太田。(妙な笑を含んで)なに心配することはない。ありや病氣ぢやないよ。却つてお芽出度だぜ。

三浦。それお僕も感づいてはゐたが、…………

太田。幸に外には何處も惡くないから、まあ精々大切にし給へ。猶少し君に話したい事があるから、暇だつたら今夜にも來て與れないか。

三浦。それにとし子の事もあるから、今夜町長の處の歸りに寄らう。あれの返事を齎らして行くよ。

太田。どうも色々濟まないね。ぢや是非來給へよ。今日はゆつくりしてゐられないから、僕はこれで失敬する。

三浦。さうかい忙しい所を御苦勞だつたね。

太田。ぢや大切にし給へ。あとで健胃劑か何かよこすから、まあそんなものでも服用させときやあ、顏色なんさあ直く癒るよ。ぢや失敬。

(太田醫師玄關の方へ退場。三浦見送つて出る。とし子奧から登場。)

とし。(見送つて戻つて來た三浦に)太田さんはもうお歸りになつて。

三浦。あゝ、今歸つたよ。ぢや約束によつて話を聞かうかね。

とし。あの、わたしその前に一つ兄さんに是非伺ひたい事があるんですけれど、聞いて下すつて。
三浦。改まつて又何だい。
とし。兄さんは嘸お厭でせうけれど、おひでさんの事に就て、是非お耳に入れとかなくちやならない事があるのよ。
三浦。どうしておまへはさうひでの事ばかり氣にするんだい。
とし。わたし何も氣にする譯ぢやないんですけれど、――みんなあなたの事を思ふからばかりですわ。あなたのお身に、惡い事がないやうにと思ふからばかりですわ。
三浦。それなら難有く聽くよ。一體何だい、その話つていふのは。
とし。(改まつて) 兄さん。あなたは心からおひでさんを愛してゐらつしやるわねえ。?
三浦。それは云ふまでもない事だ。
とし。ではあの方は兄さんを、それだけ深く愛してゐらつしやるでせうか。
三浦。勿論愛して呉れてると思ふ。
とし。ほんとにさうお信じになつて?
三浦 うむ。さう僕は信じてゐる。
とし。どこまでもおひでさんの愛を純潔だと?
三浦。さうだ。
とし。もしこゝに兄さんのその考を、裏切るやうな事實が在つたらどうします。
三浦。そんな事實は絶對に在り得ないよ。
とし。でもあつたらどうします。あなた以外に愛を注いだ證據があつたらどうします。
三浦。そんなものはあり得ないと云つてるぢやないか。
とし。ぢやあ申しますがね。これは勿論證據と云ふ程のことでないかも知れませんが、私どもにはどうも不思議でなら

ない事がありません。聞いたら兄さんもきつとお驚きなさるに違ひありませんわ。

三浦。何だ。云つて御覧。

とし。兄さんがあの方と結婚したのは、やつと三月ばかり前ですわね。

三浦。さうだ。が、それがどうしたのだ。

とし。あのおひでさんは只今妊娠してゐらつしやるわね。

三浦。それは薄々僕も知つてゐた。

とし。太田さんによくお聞きなすつて?

三浦。別に精しくは聞かない。只妊娠だとは云つて行つた。それで?

とし。あのおひでさんの妊娠は、どう見てももう五ツ月位なお腹ですよ。

三浦。五ツ月だつて?

とし。そら御覧なさい。その通りお驚きなすつたでせう。やつと三月前に結婚なすつた方が、五ツ月位なお腹をしてゐらつしやれば、誰が見たつて不思議ですわ。

三浦。でも確にさうとは解らないぢやないか。

とし。太田さんも其位だつて仰有つてよ。——五ツ月前つて云へば、丁度あのストライキの時分か、遲くてもあの方が病院にゐらした時分ですよ。

（しばらくの間。とし子靜待つたやうに見守る。）

三浦。（少し悲痛な聲で）ぢや別に不思議はないぢやないか。

とし。どうして不思議ぢやないんですの。

三浦。その頃から僕はあれを愛してゐた。

とし。ではあなたに覺へがあるんですか。

三浦。（低く、併しはつきりと）恥しい話だが、ある。

とし。（意外な答に驚いて）まあ、さうですか。

三浦。（蒼白な顔を上げて）話はそれだけかい。

とし。えゝ。では、もう申し上げる事はありません。

（二人ともしばらく沈默。各々ぢつと考へ込む。）

とし。（突然ヒステリカルに）兄さん。疑つて濟みませんでした。どうぞお許し下さい。そして存分に叱つて下さい。わたしほんとに心まで醜い女なんです。手柄顔におひでさんの欠點を探し立てゝ、それであなたの愛を動かさうなぞと思つたのは、ほんとに何と云ふ淺ましい心根だつたのでせう。わたしには今やつと兄さんのおひでさんに對する深い愛が解りました。そして私なんぞは到底、兄さんの愛を受ける資格のないのを知りました。私が今まで太田さんの縁談を延び〳〵にして承知しなかつた心の底には、いつかあなたの愛を受ける機會があるのを、ひそかに信じてゐたからでした。併しもうそんな事は思つても恥しうございます。あなたのおひでさんに對する愛は、ずつと〳〵深いんですもの。

三浦。さうおまへが打あけて吳れると、却つて僕が恥しい位だ。

とし。わたしもう決心しました。そして兄さんのお勸め通り、太田さんの所へ嫁きます。あの人はあれほど迄に仰有つて下さるのですから、私も出來るだけの愛をあの方に献げます。ですからどうぞ今迄の事はお許し下さい。

三浦。それぢやさう決心して吳れたかい。それで僕もやつと重荷を下したやうな氣がするよ。

とし。兄さん！お許し下すつて。

三浦。あゝ、僕の方こそ！

（二人は感激の眼を見合せる。しばらく間。奥で母のとし子を呼ぶ聲がする。）

とし。はい。（立上る。）

三浦。ぢや今夜太田へさう云つていゝね。太田もきつと喜ぶよ。

とし。（微笑して）どうぞよろしくね。（退場）

（三浦一人になると氣が弛んで、思はず悩しげな吐息をなし面を伏せて思ひに沈む。やがて氣を取り直して、微かに一まう
だ。矢っ張り許さなくちやならない」と獨語する。しばらくして手を叩いて女中を呼ぶ。）

女中。（登場）何でございますか。

三浦。あの奥さんにね。これからすぐ出掛けるから、羽織と袴を持つて來るやうに云つてお呉れ。

女中。はい。畏りました。（退場。）

（しばらくしてひで子。羽織と袴を持つて靜に登場。

ひで。もうお出掛けでございますか。

三浦。あゝ、鳥渡行つて來る。

（二人は默つて着せたり着たりする。）

ひで。（着せ終ると共に、決心した語調で）あのお出掛けになる前にわたし是非お話しなくちやならない事があるんですが、
…………

三浦。（ある豫期の心持を匿して）何か大切な事でゞもあるのかい。

ひで。えゝ。是非申し上げなくちやなりませんの。あの、…………私の身に就ての事なんですけれど。——

三浦。そんな事なら歸つてからゆつくり話しちやどうだい。

ひで。いゝえ、只今是非申上げなくちやなりませんわ。もう此儘一刻でも默つてゐる事は出來ませんわ。——あの、
わたしあなたに對してほんとに濟まない事を致しました。（泣き乍ら）申し譯のない事になつて了ひました。

三浦。（悲痛な面持で）濟まないつて云ふのは、ひで子、おまへの腹の子の事を云つてゐるのかい。

ひで。あの、…………それをもう…………？

三浦。おまへが身持だと云ふ事は、さつきある人から聞いて知つた。
ひで。では今日太田さんから、すつかりお聞きなすつて。
三浦。いや、太田からではない。が、とに角おまへの妊娠が、五ツ月位だと云ふ事は聞いて知つた。おまへそれはほんとうかい。
ひで。はい。（泣崩れる。）どうも済みませんでした。わたしもとからあなたの妻になれる身體ぢやなかつたのです。
三浦。ぢやあそれが初めから解つてゐたのかい。妊娠してゐるのが解つてゐながら、僕の所へ來たのかい。
ひで。いゝえ、いゝえ、いくら耻知らずの私でも、まさかそんな事は出來やしませんわ。あの、見えるものは見えませんでしたが、ほんの一時の障りだと思ひまして。そんな事よりもわたし、あなたのお傍へ參れると思ふと、胸が一ぱいだつたものですから。――それだけは眞實でございますわ。
三浦。さうかい。――だがその相手は誰だい。併しこれは何もおまへを咎めるために聞くんぢやないんだよ。たゞ念のために聞いとくだけなんだ。
ひで。國分さんです。
三浦。そしていつ頃。
ひで。あの人の家にゐた時分ですの。ある晩夜中にふと眼をさまして見ますと、いつの間にかあの人の身體が私の傍にゐたんで、わたしはほんとに吃驚しましたの。わたしそれつきり何も覺へちやゐません。
三浦。さうかい。僕はおまへがさう打あけて呉れたのを感謝するよ。
ひで。いゝえいゝえ。どうぞそんな事は仰有らずに下さいまし。かう何もかも申し上げたからは、わたしもう御家にはゐられないものと決心して居ります。ですからどうぞ御存分にお責めになつて、どこへでも突き出して下さいまし。どうぞお心の癒えるまで、打つとも蹴るともなすつて下さいまし。それがわたしのお願でございます。せめてあなたに叱つて叱つて、責めさいなんで頂ければ、この心が幾分でも霽れます。而してどうぞ早速御離緣なすつて下さいまし。

三浦。（決然と）おひで！おまへは何を云つてゐるのだい。おまへは俺の愛を信じないのか。俺の心がおまへにはまだ解らないのか。

ひで。（男の威厳に打たれて顔を上げる。）

三浦。おひで。おまへは僕が先刻ある人から、おまへの姙娠五ケ月にも係らず、知らずに捨てゝ置くのかと云はれた時、僕が何と答へたと思ふ。僕は其時即座に、おまへが病院にゐた頃から、おまへを愛した覺へがあると答へた位だ。たとひおまへの身の過去に暗い所があつても、僕のおまへを愛する心に變りはないんだ。僕はもとよりおまへの過失をすつかり許してゐるのだ。

ひで。（肩をふるはして泣きつゝ）濟みません。濟みません。

三浦。おひで。考へて見ると僕たちも、初めから幸福な一對ではなかつたねえ。世間の人からは嗤はれ、家の者からは反對されて、やうやく此處まで切り拔けて來ると、又こんな試錬が待つてゐたんだ。が、僕はこんな事に敗けはしないよ。もつと／＼苦しい事でも耐へ忍ぶよ。僕らは既に萬難を排して結婚したのぢやないか。この後とても萬難を排して一所にゐなければならないんだ。いゝかい。解つたかい。

ひで。はい。――ですけれどもわたし、………

三浦。僕のやうに遠く理想を目ざして、絕へず進まうと云ふ人の道は、どうせ酬ゐられない淋しい道なんだ。僕はもとからそれを覺悟してゐた。併し僕はおまへを得た時、天が僕に僕の覺悟を嘉して、おまへといふ道伴れを投げて下すつたのだと思つた。そしておまへを理想實現の象徴のやうに思つて、どんなに辛い時でも慰められて來たのだ。何に破れ、何に失敗しても、僕にはおまへがある。おまへがある中は、僕の理想も破產しないと思つてゐたのだ。――おひで。おまへがさうして僕に離婚を要求するいぢらしい心根は、僕も泣きたいやうな思ひで察してゐる。併しこんな態で二人は離婚なんぞ出來やしないぞ。そんな風に考へたらおまへは僕の愛を見違へてるのだ。

ひで。それは解つて居りますけれど、………

三浦。おひで。おまへからそんな事を云ひ出さないで、どうか僕と一所にゐてお呉れ。今おまへに去られたら僕はどうなる。僕の生活は、僕の事業はどうなる。僕の献身の事業が、僕に最も近い、足許の家庭の破綻から初まつて、すべてが根本から覆されたらどうなる。おまへは僕の理想の柱石なんだ。中心なんだ。だからどうか居て呉れ。僕にはまだ／＼こんな事を忍ぶ力があるんだ。まだ／＼大きな苦しみに堪へる力があるんだ。おまへの心は解つてゐる。だからどうかゐて呉れ。ね。ね。解つたかい。

ひで。（微かに）わかりました。

三浦。ぢや心して捨鉢な心を起しちやいけないよ。いゝかい。その腹の子は飽くまで僕の子なんだからね。

ひで。ほんとに、ほんとに済みません。

三浦。ぢや僕は行つて來るからね。涙を拭いて、安心してゐるんだよ。いゝかい。（時計を見て）あゝ遅くなつた。ぢや行つて來るよ。

ひで。では行つていらつしやいまし。

（二人は玄關の方へ出て行く。やがてひで子は獨り涙を拭き乍ら歸つて來る。脱ぎすてた衣物を畳みかけて、思ひ出したやうに嗚咽する。夕闇が室内に忍び入つて、隅々はもう物色し難いほど暗い。）

ひで。（泣き乍らかすれ／＼に口走る。）あゝは云つて下さるけれど、…………此儘居ちやあどうしても済まない。…………どうしても済まない。（と泣き崩れる。やがて決心したやうに顔を上げて）さうだ。…………矢つ張りさうしよう。…………此儘居ちやあどうしても済まない。…………

（幕）

第四幕

職工長小分寅治の家。

舞臺は第一幕に同じ。時は前幕より數時間後の夜。――
幕あくと寅治微醉を帶びて、例の如く凝視の姿勢を續けてゐる。其眼は相變らず「反抗」に耀いてはゐるが、其蔭にはうすら淋しげな影がある。おつながそこへ訪れる。

つな。(戸を開ける)今晩は。

國分。あゝ、おつなさんか。丁度淋しがつてた所だ。まあ入つて話して行かないかい。

つな。(入り來る)まあ、今夜は珍らしくお酒を飲んでるのね。一體どうしたの。

國分。(二合入の銚子を示して)なあに僅かそれだけよ。鳥渡人眞似をして飲んでみたが、ちつとも面白くなりやしない。

つな。何かお酒でも飲まなくちやならない譯があつたの。――又おひでちやんの事でも思ひ出したのぢやなくつて。

國分。馬鹿あ云ふない。おひでの事なんざあ、何とも思つちやあゐないよ。あいつあもう今ぢやあ、立派な社長の奥さんぢやないか。こちとらとは人種が異うんだ。御立派な玉の輿にお乘んなすつたんだからな。

つな。何とも思つちやゐないつて云ひ乍ら、あんな厭味を云つてるよ。そんな廻りくどい事を云はないで、いつそ未練があるならあると、はつきり白狀してお了ひよ。其方がよつぽど胸が霽れるわ。

國分。何を云つてやがるんだ。未練なんぞあつて堪るものか。もう顏を見るのも厭だよ。

つな。顏を見るのも厭だつて、おまへさん此後あの人に會つたの。

國分。うむ。實はな。今日あいつの家へ行つたんだよ。而して鳥渡會つて來たんだよ。

つな。まあ、おまへさんが出かけて行つたの。

國分。なあに社長の所へ用が在つてね。出かけて行つてみると、これが留守なんだ。そこでふゝと思ひついてね。留守を幸ひと、奥さんにお目にかゝり度いと申入れたのさ。

つな。で、おひでさんは出て來て。

國分。うむ。出て來たには出て來たが、いやはや、剣もほろゝの御挨拶さ。さすがに社長の奥さんになつて了ふと、見識が違つたものだと思つてねえ。

つな。まあ、そんなに高ぶつてゐるの。

國分。當人高ぶつてゐる積りぢやあるまいけれど、餘りそつけなく歸れ／＼と吐しやがるんで、俺も少々腹が立つたから、二三言惡口を叩きつけてやつた。

つな。そしたらどうして。

國分。なあにそれだけの事だがね。――さうして歸れ／＼つ追ひ歸し乍ら、いづれ話さなくちやならぬ事があるから、其中に行くつて御挨拶なんだ。

つな。隨分威張つたものねえ。話つて何があるんでせう。

國分。大方一生俺に來ないで呉れとでも云ふんだらう。でなきやあ昔の事を口止めでもするんだらうよ。――此の俺の口が一つ辷れやあ、大きな面をして社長の奥さんでございと云へなくなるかも知れないんだからな。思へばあいつ社長つて奴も馬鹿な奴よ。他人のお古を頂いて、難有がつてゐるんだからな。

つな。大さう家では强いのね。さう面と向つて云つておやりになればいゝのに。

國分。ほんとに今考へると云つてやりたいやうな氣もするが、まさか俺だつてさうは云へないからな。

つな。矢つ張り弱味があるからでせう、

國分。何の弱味が？

つな。惚れた弱味さあね。

國分。馬鹿あ云ふない。誰が。――

つな。いゝえ、きつとさうよ。さうに違ひないわ。

國分。何を云つてやがるんだ。

つな。さうだわ。さうだわ。きつとさうだわ。

國分。うるさいなあ。餘り餘計な事を云ふと追出すぞ。

つな。ちやわたし歸るわ。だけどおまへさん嘘をついても駄目よ。ちやんと未練が顔に出てるんだから。（立上る）

國分。まだべら〲云つてやがるのかい。

つな。もう何にも云はずに歸つてよ。左樣なら。（戸口の處で）だけど國分さん。おまへさん自暴酒だけはおよしよ。見つともないし、體にさわるからね。左樣なら。（戸を急に閉めて去る。）

國分。餘計なお世話だ。馬鹿め！

（彼は又おつなの言葉に胸中の悶えを大きくして、殘つてゐた酒を續けざまに煽る。さうして又も中例の凝視の姿勢に陷る。

長い間。戸の外で女の聲がする。）

ひで。（外から）御免下さい。

國分。誰れです。お入んなさい。

ひで。（戸を開けて入り來る。蒼白な顔をしてゐる。）わたくしでございます。

國分。おやあなたは、………あなたでしたか。（強いて驚きを隱して冷淡に）何か此處に御用があるんですか。

ひで。はい。今日先刻もお話し申上げた通り、少々あなたに聞いて頂かなくちやならぬ事がございまして、それでわざわざ參つたのです。いよ〱お話しなくちやならぬ時が來たのです。

國分。はゝあ、さうですか。それは又餘りに早く來たものですね。先刻はあんなにまでして追ひ歸した位だから、まだなか〱御光來にはなるまいと思つてゐましたよ。

ひで。私もこんなに早く上らうとは思ひませんでした。けれど、是非がない事だから仕方がありません。

國分。是非がないと仰有るからは、餘程重大な御用だとは思ひますけれど、社長の奥さんともあらう者が、今時分一人でこんな所へおいでになつては、お家に濟まなくはございませんか。幸ひ誰も見てゐるものがございませんから、今の

中に、默つてお歸りなすつたら如何です。誰かに見られて知られでもすると、お家の方が不首尾になりやしませんか。

ひで。わたしもう家の事なぞは考へては居りません。たゞ是非一言あなたに聞いて頂きに參つたのですから。

國分。一體あなたが私に用のある筈はないんですがね。

ひで。申し上げる前にお斷りして置きますが、わたしはそれをあなたにお話したからつて、別段その償ひをして貰はうとか、後仕末をして下さいとか云ふのぢやございませんから、そこは御心配下さらなくても宜しうございます。たゞわたしはそれを申し上げないと、どうしても自分の心に濟みませんし、思ひ殘りになるからでございます。

國分。妙に改まつた前置なんぞして、一體それは何だと云ふのです。

ひで。（低く、併し明瞭に）わたし姙娠して了ひました。お腹にゐるのはあなたの子です。

國分。何だつて。（急に荒々しい言葉になる。）俺の、………俺の子を孕んだつて。馬鹿あ云つちやいけない。そんな話があるものか。いくらお天道樣が惡戯好きだつて、そんな筈があるものか。

ひで。でも事實ですから仕方がありません。私のお腹は五ツ月です。あれから丁度五ケ月になります。

國分。併しそれが確かかどうか解らんぢやないか。

ひで。いゝえ私が第一さう思ひますし、お醫師樣もさう仰有つたさうです。其上家の人までさう氣付いてゐます。

國分。ふうむ。眞實かい。（と考んでゐたが、突然奇妙な笑聲を擧げて）はゝゝゝ、皮肉な天だなあ！　俺の子を持つて、社長の所へ嫁に行くなんて。勞働階級から資本家に持つて行くにしては、まるで結構過ぎる位結構な持參金だ。はゝゝゝ。

ひで。（顔をそむけて聞いてゐたが。）まあ、よくあなたはそんな事を云つて居られますのね。――それは成程あなたのお言葉の眞似をすれば、持つて行く時には結構な持參金でせうけれど、持つて歸る時には猶更結構な手切金でせうからね。

國分。何？　それぢやあおまへは離縁されて來たのだな。

ひで。（冷然と）いゝえ。

國分。ちやあどうしたんだ。家の人は何と云ふんだ。

ひで。あの人は立派に許して下さいました。私が何もかも打明けたのに對して、一言も咎め立なんぞせずに許して下さいました。

國分。ちやあもう俺の事も云つたのだな。

ひで。えゝ。眞つ先きに云はなくちやならぬ事ですもの。

國分。それでも許すと云ふのか。おまへを元のまゝに妻として置くし、俺の子を自分の子として育てると云ふのか。

ひで。えゝ、さう確かに仰有いました。

國分。それぢやあおまへは此處へ何しに來たのだ。

ひで。ですから先程も申し上げた通り、只それだけの事を聞いて頂くためにです。

國分。おまへが此處へ來る事は、家へ云つて來たのか。それとも家では知らないのか。

ひで。家では知りません。默つて出て來ました。

國分。ぢやあ家へ知れたらどうするのだ。そのため折角許されたものを許されなくなつたらどうするのだ。おまへが今時分此處へ來たと知つたら、いくらお人好しの社長でも、二度は許さないかも知れないぢやないか。

ひで。ですからそれも先刻申し上げた通り、仕方がないと覺悟して居ります。さうなつたら家へ歸らないばかりです。

國分。而して此處にゐようと云ふのか。それで俺の所へ來たのだな。

ひで。いゝえ、それも先刻申し上げた通り、…………

國分。（皆まで聞かすに興奮して）併し俺の所へ尻を持ち込んだつて、今更俺の知つた事ぢやあ無いよ。先刻はおまへの家を出る時、いつでもおまへが歸つて來れあ、喜んで迎へるやうな事を云つたが、あれあ當座の御座なりだよ。誰が一旦他人の妻になつた女を、難有がつて頂戴するものか。俺はあの甘い社長とは違つて、おまへに惚れちやあ居ないんだからな。今更身持ちのお世話なんざあ、眞つ平御免を蒙るよ。

ひで。だからあなたのお世話なんぞお願しません。

國分。ぢやあ何處へ行くんだ。

ひで。どこへでも參ります。

國分。どこへでもつて？

ひで。どこだかわかりません。たゞ行く所までは行くでせう。

國分。おまへどうかしてるね。

ひで。どうもしてやしません。

國分。おまへまさか死ぬ氣ぢやあるまいね。

ひで。（淋しく笑つて）わたしに死ねますかしら。

國分。そんなら何故家を默つて出たりするのだ。許して呉れたのを何故又壞さうとするのだ。おまへは第一此處へ來るのが間違つてゐる。だから早く家へ歸るがいゝ。許して呉れたものならば、平氣で許されてるがいゝぢやないか。

ひで。あの人が幾ら許して下すつても、わたしの心が許して頂けません。あの人の博い愛の心につけ入つて、わたしはこの汚れた身體を許して頂くに忍びないのです。あの人はそれでなくとも、色々な苦勞が多過ぎるのですもの。わたしは其上に忍ぶことの出來ない苦しみを、持ち込む事は出來ませんわ。

國分。併し、それは當然あゝいふ種類の人間の、背負（しよ）はなくちやならない重荷なんだ。いゝから苦むだけ苦ませてやるがいゝ。さう云ふ事でゞも苦まなければ、贅澤すぎる輩（ともがら）なんだ。いゝから歸れ歸れ。さうして幾らでも苦ませてやれ。俺には今、あれがおまへを許すと云つた苦しい心持がよく解るぞ。苦しがれ、苦しがれ。これがおまへたちの天刑だ。資本家階級に居るものゝ天罰だ、さあおまへは歸れ。眞つ直に三浦の家へ歸れ。

ひで。あなたの只今のお言葉で、あなたのお心はよく解りましたわ。あなたは御自分の主義のためには、どんな酷い事でも平氣でなさるお方なのね。私は勿論歸ります。到底あなたの所になんぞ居られませんわ。そしてお言葉通りに歸

りますわ。けれどもあなたのお望み通り、あの人に苦しみを與へるために、歸るかどうかは解りません。（立上つて）では左樣なら。

國分。あゝ左樣なら。——もう之つきり會はないから、おまへもたつしやでゐるがいゝ。

ひで。難有う。あなたこそ御機嫌よう。

（ひで影のやうに出て行く。國分しばらく呆然として、閉めて去つたあとの戸口を眺めてゐる。）

國分。（一つほつと吐息をして）あゝあ、又酒が醒めちまひやがつた。（と殘つてゐた酒を煽る。）

（何となく不安な間。職工中村入り來る。）

中村。國分さん。お家かい。

國分。やあおまへさんか。まあ入らないか。

中村。（入つて來て）今あなたの所から出て行つた女の人は誰ですい？

國分。おまへ會つたのか。どつちへ行つたんだい。

中村。そこの處で會つたが、向うの踏切の方へ行きましたよ。

國分。ふうむ。少し訝しいな。

中村。どうしたんですい、一體。

國分。なに、あれあ通りがかりの女なんだがね、今道を聞いたから教へてやつたのだが、…………（獨語するやうに）それぢや暗いんで間違へたんだな。

中村。さうですかい。

國分。（凡てを拂ひのけんとする如く盃の滴を切つて）どうだ。一盃やらないか。

中村。やあ、今夜は珍らしい御馳走ですな。ぢやあ一ぺえ頂きませうかな。（盃を取る。）

國分。（注ぐ。酒位かしか無し。いやあこいつは濟まなかつたな——ねえおい中村。濟まないが、濟まない序にもう一つ濟ま

ないで呉れないか。

中村。どうするんですい。何を云つてるんですい。

國分。（徳利を振つて見せて）どうかこいつを一と走り頼みたいんだ。少し遠いけれど端れの三河屋まで行つて、俺からだとさう云やあ、通ひで寄越して呉れるんだ。一升ばかり頼む。俺はもう一二合で澤山だから、あとはみんなおまへさんに御馳走するらあ。祝ひ酒だか自棄酒だか、弔ひ酒だか知らないが、兎に角一ぱいやらなくちやならない譯があるんだ。

中村。へゝえ。さうですかい。そんなら一つ行て來て上げやせう。

（中村徳利を下げて出て行く。やゝ久しき間。夜のやうやく更け行く氣配がする。暫らくして三浦淳吉、蒼ざめたる顔と血走れる眼にて、戸口の所へ急ぎ現はれる。）

三浦。失敬。（入つて來て見巡し乍ら）早速だが、此處へ僕の妻が來はしなかつたかね。

國分。あゝ、誰方かと思つたら社長さんですか。まがどうぞお上りなすつて。

三浦。いえ。さうしちや居られません。――あの、ほんとに妻が此方へは來はしませんでしたかね。

國分。（云つたものかどうかと思ひ煩ひ乍ら）奥さんがですか。さうですね。

三浦。（強く）來ませんでしたかね。

國分。いえ、えゝと、もう少し先刻、鳥渡おいでになりました。

三浦。（急き込んで）そしてどうしました。

國分。（もうすつかり決心して）何だか私の子を孕んで、あなたに濟まぬとか何とか云つてゐましたが、私は諭して歸しました。おとなしく歸つて行きましたから、もう彼是お宅へ着いた時分と思ひます。

三浦。いえ併し、確かに宅へは戻つて來ません。眞つ直歸つたならぶつつかる筈ですが、中途でも會ひませんでした。あれはきつと何處か外にゐるのです。

國分。ではひよつとすると、——（と顏を見合せる）

三浦。さうです。多分。さうだらうと思ひます。私もそれを恐れてゐるんです。——ではかうしちやあ居られません。私は一と通り探してみます。失禮します。（慌しく去らうとする。）

國分。（鳥渡考へてゐたが、）三浦さん。鳥渡お待ち下さい。

三浦。（振り返つて）何ですか。

國分。私あなたに一言云ひたい事があります。かう云ふ機會を利用するのは、少しく殘酷な態度のやうに見えますが、丁度好い折だから一應お聞き取り下さい。

三浦。何ですか。早く云つて呉れ給へ。

國分。三浦さん。よくお聞き下さい。若しこゝであの關口ひでが、悲慘な結果に陷るやうな事があつたら、それは全くあなたの責任ですよ。あなたのやくざな仁慈と、わざとらしい寬大との罪ですよ。あなたはなまな彼か女を救はうとして、却つて彼女を苦しめたのです。强いて彼女を許さうとして、實は却つて彼女を責めてるのです。あなたはまだそれに氣が付かないのですか。こゝでもあなたの仁慈主義は、——溫情主義は破綻を起してるのです。

三浦。何ですつて。——

國分。まあお聞きなさい。ひとり此の關口ひでの場合ばかりではありません。あなたはもうとうに、吾々に對するあなたの仁惠的態度から、溫情主義から目醒めてゐなければならなかつたのです。あなたは吾々に取つて、ほんとにお情け深い工場主でした。常に吾々に對して、溫情を以て臨んで呉れました。併しあなたのその態度には、丁度慈善を施す人のやうな、恩惠を與ふる人のやうな、喜びと誇りとが含まれてゐます。工場主の仁慈を只管難有がるのは、封建時代からの遺物です。今日では恥づべき奴隸根性です。吾々覺醒した勞働者は、それを却つて侮辱に感じます。吾々は工場主と自分らとの間を、常に正當な對等關係に置きたいのです。正當に要求するものを、正當に與へて呉れゝばそれでいゝのです。餘計な「お情」や「御恩」は要らないのです。關口ひでの場合を一例に取つて見れば、彼女の治療

代と扶助料とを正當に出して下されればそれでよかつたのです。小說的な結婚なんぞに依つて「救つて」なんぞ頂かなくてもよかつたんです。どうです。お解りになりましたか。

三浦。（默つてゐる。）………。

國分。かう云ふ匆卒の場合ですから、よくお解りにならなかつたら、いづれお宅へお歸りになつてゆつくりお考へなすつて下さい。而してあなたの非をお覺りになつたら、これは甚だ差出がましい忠告ですが、僅かな態度なんぞを改めて下さるよりは、一刻も早く社長をおやめになつて、もとの東京へお歸りなさる事をお勸め致します。あなたが此儘仁慈を施せば施すだけ、職工らは益々反感を持つだらうと思ひます。もうたゞでさへあなたは甘く見られて居ります。ですから此上凌辱を受けない中に、その「理想」とやらの旗を捲いてお歸んなさい。それが何よりもあなたのお爲です。

三浦。（猶も默つてゐる。）………。

（此時突然家を掠する汽車の響がして、汽笛がけたゝましく鳴り響く、）

三浦。（あゝ疑惑に戰るへて）おや、………。（と耳を欹てる。）

國分。（同じく）何だらう、急に汽笛なんぞ鳴らしやがつて！

（不安なる沈默の中に、兩人眼と眼を見はす。外を駆けてゆく人の足音がする。）

行人の聲。轢死だ！　轢死だ！

近所の人。（戸口から）國分さん。又誰か鐵道往生をしたやうだぜ。（馳せ去る）

三浦。なに、轢死？（急いで出て行く。）

國分。（呟く）ぢややつぱり、………やつぱり、………やつて了つたのかな。（行かうか行くまいかと躊躇する體。）

（中村息せき切つて現れる。）

中村。國分さん。大變だ。あすこで社長の奥さんが死んだぜ。あのおひでさんが轢死したぜ。今踏切の傍で鐵道の人が。

大騒いでゐるから行つて見たら、おめえ、轢かれてるのはおひでちやんぢやねえか。俺あびつくりしちまつて、いきなり此處まで驅けて來たが、——おい國分さん行つて見よう。おまへに急いで知らせに來たんだ。さ、早く行かう。——あ、酒は此處へ置くよ。おめえ行つて見ねえのか。（國分が默つてゐるので）ぢや俺あ一人で行くぜ。（中村不思議な面持で、併し足早に退場。）

國分。（酒を二三杯續けざまに煽つて）俺のせいぢやないぞ。…………ほんとに俺のせいぢやないぞ。…………みんなあいつ等が惡いんだ。…………あいつ等が苛め殺したんだ。…………（と切れ〴〵に呟く。）

（三浦淳吉再び登場。彼の眼は黒くうるみを帶び、額は蒼ざめるまでに蒼白である。）

三浦。（靜な聲音で）國分君。おひではとう〳〵死んだよ。君の言葉の通り悲慘なる最後を遂げた。而してこれは成程、僕の「やくざな温情主義」の結果かも知れない。併し、それと同時に君の「反抗のための反抗」も、多分に責任を頒たなければならぬ事を、お互に考へようぢやないか。——兎に角僕は葬式の濟み次第、君の忠告に従つて東京へ歸る。だから最後の敗け惜しみかは知らぬが、一言君にも反省を促して置くよ。では左様なら。僕はこれから、僕らの犧牲に供したあの可哀さうな女の、引ちぎられた死體を運ばなくちやならないから。（靜に退場。）

（國分答ふる所なし。三浦の足音とぼ〳〵と遠ざかり行く。）靜かに、幕

（作者附記）此の戯曲は曾つて其未定稿を、大正四年四月號の帝國文學に發表した事がある。が、當時殆んど無名だつた私の作は、四五の友人と二三の具眼者の眼に觸れたのみで、殆んど顧みらるゝ事なくて過ぎた。今、再び時運は廻り來つて、茲に發表の機會を得たのは、作者に取つて衷心よりの喜びを禁じ得ないものがある。五年間不遇を喞じて居つた此作も、これでやうやく日の目を見られるであらう。しかも私は今度の此發表に當つて、殆んど稿を新にする以上の努力を拂つて、舊稿の全面目を改訂した。だから舊稿を一度讀んで呉れた事のある讀者も、もう一度讀んで下さる好意を作者は要求する。而して近來頻出する幾多の舊稿再揭と、何卒同一視せられざらん事を希望して止まない。（大正八年七月）

面白倶楽部

堂々たる八月號の陣立

□奇縁奇遇 **毒饅頭**（長篇小說）……渡邊霞亭

■靈に目覺めよ（時評）
■儘ならぬ浮世（漫畫）
■金太郎泥の妾（情話）

□いろは歌留多（落語）作樂變人

□魁樓小紫華魁（情話）松葉黒助

□危機一髪 **百穴の怪**（歴史小說）……中内蝶二

■藤井浩祐（結婚情話）
■自惚の罰（活動寫眞）
■新北州（遊廓情調）
■相合傘（戀愛十種）
■丑滿の鏡（花柳奇談）
■王妃の唄（少年お伽）

□新講談 **職人の仇討**……洞殿司

□新小說 **罠**（運命の女）……中村孤月

□お伽噺 **梟の悲しみ**……人見潮明

□生死流轉 **因果小町**（探偵小說）……吉田楚囚

■イカ物八木節（評判）
■圓右と小圓朝（評話）
■新富の夜明前（劇評）

□合邦辻の研究（劇話）二木文雄

□勸進帳の研究（劇話）森ほのほ

□德川情史 **桂昌院**（歴史小說）……本田美禪

定價金參拾錢 郵稅一錢五厘 ◇ 東京本鄉 講談社 振替東京六六二九

第貳拾五回決算報告（自大正七年六月一日 至大正八年五月三十一日）

一資本金 五百萬圓
一諸積立金 五百參拾九萬圓

貸借對照表

資産

未拂込株金	三、七五〇、〇〇〇・〇〇
銀行預金、振替貯金及現金	一、七〇〇、四九〇・六八
貸付金	五九、九一〇・〇〇
有價證券	三、三五六、七六二・〇〇
不動産及什器	四四三、八三二・八五
他物内拂金	五、一〇〇・二〇
未收保險料	三三一、八四三・八五
未收再保險金	八六九、三二四・八一
未收海上償金	一一、七七七・三三
代理店貸	七四四、八八七・五五
他店貸	一、〇三九、七九三・四四
供託金	一九、七〇一・九六
未決濟勘定	一〇七、六六六・三九
假拂金	一三三、五七七・七二
合計	二、九〇三、一三三・四三

負債

株金	五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
法定準備金	五〇〇、〇〇〇・〇〇
有價證券價格準備金	七七、五一七・八四
責任準備金	四、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
支拂備金	三三三、〇〇〇・〇〇
未拂再保險料	一、一七七、〇三〇・一五
借用人恩給基金	九九、八五二・七一
未拂配當金	五、六九七・〇六
身元保證金	一、一〇〇・〇〇
他店借	四、三九〇・一五
假受金	一八、四八一・二六
利益金	七五七、三九六・一八
合計	二、九〇三、一三三・四三

利益金七拾五萬七千參百九拾六圓拾八錢也之ヲ處分スルコト左ノ如シ

一金六萬圓也 法定準備金
一金拾貳萬五千圓也 株主配當金（年一割）
一金拾貳萬五千圓也 株主特別配當金（年一割）
一金五萬六千圓也 役員賞與金
一金六萬圓也 使用人恩給基金
一金參拾參萬壹千參百九拾六圓拾八錢也 次年度へ繰越金

右之通候也

大正八年六月

横濱市本町五丁目七拾番地

横濱火災海上運送信用保險株式會社

取締役社長 小野光景
專務取締役 井坂孝
取締役 大濱忠三郎
取締役 若尾幾造
取締役 原富太郎
取締役 澁澤義一
取締役 茂木惣兵衛
取締役 [illegible]
監査役 石川德右衛門
監査役 渡邊文七

東京市日本橋區通四丁目

横濱火災保險株式會社東京支店

日印會話捷徑

大谷光瑞師序　廣瀨了乘著

東京神田（振替東京二七〇）東京堂發賣

印度と我國との過去の文明の交渉を思ひ、又將來に於ける政治的並に經濟的關係を考ふる時は、印度語を習得するの必要は敢て多言を須ゐるの要なし。

本書の著者は多年彼地にあつて佛典を研究するの傍、我國一般人士の爲めに此簡潔にして要を得たる印度語學習の好指針を與へたり。

苟も印度に志あるの士、速かに一本を購うて、其雄志の實行を急げ！

定價金卅錢　郵稅四錢

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本鄕區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

◉本號に限り特、定價金八拾錢　郵稅金三錢五厘

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年七月十四日印刷納本
大正八年七月十五日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　中央公論社
電話（長小石川一四四四・小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.
明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可